

刀劍乱舞 S S 集 (B L ・ N L ・ 友情主従ごった煮)

駒由李

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

※pixivからの転載、非公式且つ独自解釈 大体同じ世界観を有しているとうらぶの話のシリーズです。色々な審神者がいたり刀と主が恋愛してたり刀同士で衆道してたり刀と男の審神者でくっついていたり、単に主従だったり、存在自体が創作の刀剣男士もいたりブラック本丸ネタもあったり現代パラレルだったり。全体的に躁鬱が激しいです。審神者同士につながりがあったりします。

話が増えていくごとにタグや警告要素が増えていきます悪しからず

目次

あるじ切り【女審神者＋同田貫】	1
心の中から消えてくれない人【創作刀剣男士＋山姥切国広】	11
刀剣の苦勞、主知らず【シヨタ審神者＋三日月＆山姥切】	16
蛍とホオズキ【人外女審神者＋蛍丸】	25
「堀川国広を審神者から守る会」【DM審神者＋堀川】	36
【実録】昨日、姉が備前国の審神者に着任しました。	45
御手杵は刀剣男士である【ブラック本丸（引継済）】	51
【とうらぶホラー】くりちゃんと僕【現代パラレル】	55
【とうらぶホラー?】くりちゃんと僕『水』【現代パラレル】	79
付喪神は鋼鉄羊の夢を見るか【女審神者＋大俱利伽羅】	95
「彼」の理由【伊達組】	111
【腐向け】誰が彼らを見ていたか【たぬいち】	117
【腐向け】天竺牡丹【おてみか＋男審神者】	125
【とうらぶホラー】くりちゃんと僕『聞こえた』【現代パラレル】	132
【とうらぶホラー】くりちゃんと僕 四【現代パラレル】	145
【歴史修正主義者化】「赤いヒーロー」【※特殊設定】	161
【とうらぶホラー】石段【現代パラレル】	172
【とうらぶ現代パラレル】どろ【大俱利伽羅＋CCP】	178
【とうらぶホラー】くりちゃんと僕 子【現代パラレル】	185
【とうらぶオカルト】くりちゃんと僕 録【現代パラレル】	197
リビジョニスト	206
【へしやすきに】●●部隊所属へし切長谷部撫で切り事件【＋複数審神者】	215

【とうらぶホラー】六番目の蔵【コラボ前提】 225

【とうら腐】手書きの文字【にほみか】 237

「正史」【女審神者＋陸奥守】 246

【腐向け】ハチがいなくなる4年後に【おてあか】 251

花底蛇【審神者＋長谷部（モブ視点）】 259

【とうら腐転生パラレル】秋津ヶ原【んばみか】 267

【へしさに♂】赤信号【転生義親子パラレル】 270

【堀さに♀】酒の肴に過ぎない話 273

夏を求む 279

【へしさに♀】「主が厨で身悶えてたけど何かあったのかい」 283

【山姥切＋男審神者】※誤記ではありません 286

それでも、手を差し伸べてくれて、ありがとう 291

【とうらぶホラー】くりちゃんと僕 死地【現代パラレル】 302

死んだ養父が10年前に死んだ実父が好きだったらいいんだが

310

【男審神者×によたんばRー18】霊力を安定供給するために政府に出された指示とは（エロ小説導入） 317

【水磨Rー18】花火 323

【磨水Rー18】37度5分の恋 326

【磨水前提さに磨Rー18】つきがきれいですね 334

【水磨Rー18】まだ姫始めちゃいけません！ 340

【さにちよもRー18】刺青にキス 345

【水磨♀Rー18】搾乳機（刀剣男士） 349

【ちよもさに♂Rー18】※どっちもイかないといけません 356

【桑蜻】それ以上脱いではいけません！ 361

【山鳥毛＋男審神者】第三夜

【鬼さに♀】もう、何も聞こえない

【さに磨前提水磨】罪深いのは僕だけだというのに

【歴史修正主義者×女審神者R—18】墮ちた先に

【モブごこR—18】絶えた望み

【男審神者×包丁R—18】ラインを超えて、

【男審神者×包丁R—18】誉のご褒美ツクス♡

【とうらぶホラー】くりちゃん和僕 鉢【現代パラレル】

【さに乱R—18】男審神者と乱の新婚旅行温泉浴衣セツクス♡

409

【笹さに♀】「なんで？」ってなった

【とうらぶホラー？】御役様と生き稚児

【とうらぶホラー】くりちゃんと僕 苦【現代パラレル】

【とうらぶファンタジーパロ】エルフ大俱利伽羅と不死鳥（機能不全）
燭台切、ユグドラシル薬師生活。

【さに水R—18】翌朝、障子を開けると笑顔で刀を抜く清磨の姿が！

【江さに♀】白雪姫コンプレックス

【とうらぶ×ツバサ＋α】掬い取った、その手は幼かった

【くりかしゃR—18】刻み込まれた竜に嫉妬するなど、

【くりかしゃ×オメガバースR—18】本能と理性の間

【くりかしゃR—18】それはそれとして仕事はしました

【くりかしゃR—18】忘れがちだが、打刀も夜目が利く

【くりかしゃR—15】お前が見ているのは、

【くりかしゃR—18】潤んだ目が美しかった

365

377

380

383

387

392

398

403

413

416

420

425

433

438

442

447

451

458

463

466

468

- 【くりかしゃR—18】「軽装をデザインした奴に金を払いたい」「もう
審神者が小判で払っちゃったんで……」
- 【くりかしゃ】それは砂の器のように
- 【くりかしゃ】温かくて、甘い
- 【くりかしゃ】大俱利伽羅の 琴線に 触れたようだ！
- 【くりかしゃ♀R—18】「経血ドリンクバーとか引くわ」BY 審神
者
- 【火車さに♀】恋の空回り
- 489 485

あるじ切り【女審神者＋同田貫】

あるじ切りの妖刀。そんないわれだから、ずっとこのままだと思っていた。

本丸の、どこにもいなかった。だから、最後にここに来た。

「主、いるか。入るぞ」

断りの声も待たず、障子を開く。果たして、そこには誰もいなかった。同田貫は溜息を吐く。片手には巻物。慣れぬ部隊長としての仕事の為に主を捜し求めた。しかしその姿は、最後の砦だった「審神者の私室」にもなかった。溜息を吐いて、同田貫は辺りを見渡した。

人気はない。空は青く、綿を千切ったような雲が薄く棚引いている。曆の上では冬の筈だ。しかし、この敷地に季節は関係ない。「本丸」と呼ばれる、自分達の本拠地は時空間の特異点にあるという。詳しい事は、ただ戦いに明け暮れていた彼にはわからない。ただ、常に、金属で出来た刀に相応しい環境が敷かれていると、いつか審神者がいつていた気がする。適度な気温、適度な湿度だ。

(外出でもしているのか)

そういえば、加州を見なかった気がする。彼は、この審神者が最初に鍛えた刀だ。普段の軽々しい態度に反し忠誠心の篤い加州は、何かと彼女の傍に待っている。2200年代から離れたこの時代。外出する時も、審神者の護衛は大抵彼の役割だ。ひとまずここで待たせて貰おうか——そんな事を思いながら、壁に寄りかかる。縁側に足を投げ出しかけた、その目が捉えたのは開いたままの障子の向こうだった。

この審神者は、時代を遡航して日が浅いという。太刀に分類される自身が来た時は、「戦力が増えた」と短刀ばかりの部隊に囲まれ、大層喜ばれたものだ。その為か、女の部屋にしてはまだ質素だった。畳敷きの部屋。布のかかった鏡台と、タンス。それに書架ぐらいしかものが見当たらない。こことは別に執務室として宛がわれている部屋も似たようなものだ。そちらと異なるのは、まだ開けていないらしい

段ボール箱だ。20世紀以降から荷物の運搬に使われるようになってたというそれらは、2200年代に至っても引つ越しの主役だという。しかし、その数も妙に少ないように思えた。物欲が乏しいのか。否、それよりも目を惹かれた。押し入れだ。半開きになった押し入れの襖が、同田貫の目を惹きつけてやまない。正確には、その中におさまっている何か。下は布団だろう。だが、その上の方が、奇妙に空間が空いているように見えた。

それが、妙に気に掛かった。だから、腰を上げる。

異性の部屋だ。それは頭に残っていた。しかし、それ以上の好奇心が、同田貫に審神者の私室への無断侵入を駆り立てる。

あるいはそれは、引力だったのかも知れない。

同田貫の無骨な手が、押し入れの襖を引つ掛けた。

そういえば、ここは美濃だった。つまり、現在の岐阜県にあたる。そして今は冬だ。

「……すつごい、雪降ってたね」

「めっちゃ寒かったね……」

門を開いて、息を吐く。外とは文字通りの別世界。適した温度、適した湿度が、本丸の敷地内を占めていた。門の外までは先も見えない程の吹雪だったが、中に入れば、途端に穏やかな天候が彼らを包む。2人で抱えてきた土産を携えながら、審神者と加州は内門へと足を向けた。2人の顔はどちらも赤い。まだ、先程までの外気温が彼らの肌を冷やしたままだった。しかし本拠地に戻ってきた事で人心地がついたらしい。人懐こく笑った加州は、主から荷物を取り上げながらいう。

「本丸から外に出るのって、戦の時以外は滅多にないから気候の事を忘れてたよな。俺が自分の部屋に帰るついでに寮の皆に土産を渡しに来るからさ、主も着替えてきなよ」

「あー、悪いねきよみっちゃん」

「その呼び方やめてよねー、もう」

いいながら、審神者の分の荷物も抱えた彼は、足早に寮の方へと向

かう。彼なりの気遣いだろう。それに感謝しながら、彼女は自身の手に息を吐きかけた。気管支まで冷えて、吐息もまだ冷たかった。

ちよつとした思いつきだった。まだ、この時代に来て浅い。この環境に慣れない刀達への無聊の慰めにでもなれば——と、審神者として政府に買い取られた際、貰ったこの時代の金で街に買い出しに出た。当初はひとりで行くつもりだったが、「男の俺と一緒にいた方が好みもわかるでしょ」という彼の意見を採用しての2人での遠出だった。

だが、忘れていた。ここは本丸。殲滅対象である歴史修正主義者に見つからぬよう、そして方が一に守りを固められるよう、隠れて奥まった場所にある。だから、豪雪地帯の美濃では雪がよく降るのだ。一口に現在の岐阜、といつても地方によつて気候差が激しい事を、彼女も彼も失念していた。

慌てて引き返して防寒具を身に纏ったものの、寒いものは寒い。その本質は刀といえど、ヒトの形をとっている以上、その五感ヒトのそれだ。何とか無事に行つて戻つてこられたものの、予定よりも時間をとられてしまった。そろそろ、遠征に出した第2部隊が帰つてきている筈だ。その対応もしに加州は行つたのだろう。よく出来た、あるいはそう振る舞おうとしている姿がいつそ痛々しい程に健気だ。

(一緒にいられるうちに、そういうところは少しでも何とかしてやりたいもんだが)

異性として、というよりは親心だ。最初に呼び起こした刀剣の付喪神には、特別愛着はある。多少は運に恵まれたらしく、短い期間で戦力の充実をはかれたと思う。それでもやはり、共に時代を遡航してきた刀は特別だ。

それに、向こうにとつても同じだろう。それは、自身とは決して違う意味で。

「――」

本丸の奥の奥。そこで、立ち止まる。傘や蓑を片手に歩いていった先、そこはこの責任者である自身の私室だ。その縁側に、巻物が置いてあった。随分と無造作だったが、それは遠征の報告書だろうというのは直ぐに見て取れた。

問題は、顔を上げた先。開かれた障子の向こう。そこに見える人物の背中だ。どうしたらいいのか、困っているらしい。思わず苦笑をこぼす。気配を消すそぶりもしなかった自身に気付かないのだから、余程に衝撃だったに違いない。冬下駄を脱いで、揃える。そして、巻物を拾い上げると、障子から自室に顔を突っ込んだ。

「ただいま、たぬきちちゃん。私の『正体』知って、そんなに驚いちゃったの」

「……………主」

慌てて振り返る。そして取られた長い間は、勝手にヒトの部屋へ入った事への罪悪感。そして、自身の正体を知ってしまった事への動揺だろう。それに、彼女は最早、申し訳なきすうしか浮かばない。そんな話は、加州と既に散々やりあったのだ。最初から、政府に彼女の正体を知らされ、更に密命を帯びさせられた彼と。蓑と笠を降ろした審神者は、開き放しの押し入れの前。「それ」を握る同田貫に笑いかける。苦笑しか浮かばなかった。

「御免ね。貴男は直情的で熱いけど、冷静なところもあると思ってたからそこまで吃驚すると思わなかったよ」

「主、あんたは」

「きよみっちゃん……加州も知ってる事だよ。今で貴男が二振り目だね」

そういつて、指で示した。まだ僅かにかじかんだ指。それはヒトの形をしていた。ただ、その指の先——同田貫が握りしめる、一振りの太刀。貫禄と歴史を感じさせながらも、奇妙に真新しく見えるその刀身が、銘が見えるまで抜かれていた。

そこに記されている銘を、彼女は知っている。もう、1000年近くの付き合いになるのだ。

「私の『本体』を知ったのは」

「あんたも、付喪神だったのか。それも相当古い刀……いや、ただの刀じゃない。妖刀だろ」

そう、示す刀。その刀身には、見るからに禍々しい紋様のような銘が刻まれている。彼女には慣れ親しんだものだが、それは1000年

近くもその銘と付き合ってきたからだ。短刀達には、とてもではないが見せられない程のそれを見て、同田貫が睨む。すごみのある顔だ。しかし、彼女は動揺しなかった。

伊達に、1000年近くも妖刀をやっていないなかった。

「なんで、同じ付喪神が、俺達付喪神を呼び出せるんだ。しかも、女の付喪神だなんて」

「そう。だから私は『刀剣』としてはこの時代に送られてこなかったの」

壁に凭れ、畳に座る。先程までの悪天候がウソのような、穏やかな空だった。巻物を片手に、立ちつくしたままの同田貫に彼女はいう。巻物を握る、自らの手を見詰めた。

こうして、四肢を。血の通ったヒトの身体で歩き回るのは、1000年ぶりの事だ。そも、妖刀となる前はヒトであった事を思い出させたのは、皮肉にも、彼女が生きていた頃に産み落とした子の子孫だった。1000年後の末裔は、あまりに強すぎる審神者の才覚を持っていた。

傾いた店を立て直せる程の高額で、政府に買い取られる自身。それを惜しんだ幼子は、追従してきたベテランの審神者の技を模倣した。

「妖刀」と呼ばれた自身から産み落とされたのは、政府が使役する形として指定した「人間の男性」ではなく、生前そのままの女性の姿。歴史修正主義者のような怨念の姿でもない。処遇に困った政府は、しかし、顕現したその付喪神自身が「妖刀」であるがゆえに、異類を呼び寄せる事が出来る事を発見した。結果として、政府は2つの利益を獲得したのだ。危険は大きい、しかし利益も大きいそれらを。

「……顕現して、審神者に相当する力も持っているかわかったなら、今の政府は放っておかない。ついでに、何の修行もせず私を呼び起こす程の力を持った審神者も手に入れた。政府が教えてくれたよ。店はまた繁盛してるってさ。私と子供を売った金でね」

「……」

「まあそれは割とどうでもいいんだけど」

「おい、よくねえよ」

「私はいいの。うっかり私を呼び出しちゃった子孫も、相性良さそうな刀を顕現させてたから心配してないし。あの刀なら、あの子を守ってくれるだろうし。ただ、刀の『想念』を、あるがまま、そのまま呼び出してしまう力は問題だったけど」

同田貫は怪訝そうだ。刀身を抜いたまま、こちらを見ている。日光に、妖しい程に鈍く光る姿は、自分自身といえどぞつとしない。

それこそ、今に「化けて」きそうだ。審神者は肩を竦めた。

「私を見ればわかるでしょ。本来、政府が派遣する審神者は、決まった形……本来、刀剣を主に扱っていた『人間の男性』として付喪神を顕現させる事が出来る者。その決まった形以外は、どこまでが自分達の味方で、どこまでが憎しみやかなしみに囚われた『歴史修正主義者』になるか、線引きがわからない。……人間だったところまではよかったけど、女だったからね。女つていえば、怪談の化けものの定番じゃない。だから、政府はいつでも私を『破壊』出来るようにしてるよ。審神者が最初に顕現させる刀に密命してね」

「——じゃあ、加州が知っている、というのは」

「あの子には、私からも言い含めてるよ」

目を閉じる。瞼の奥、今でも焼き付いている光景がある。

元より、妖刀として作られた。ただ、それは名ばかりの、ただ「自我を保つ刀」だった。歴代の当主は、それらと会話する術を保つ、今でいう審神者に近い力を持った子孫達だった。

あれは、大坂での事だ。刀身がやけに熱を帯びていたから、夏だったのは覚えている。当時の自身の持ち主は、小さいながら豊かな鉾山を持つ領地を周囲から舌先三寸で丸め込んで守っていた。ともすれば、その頭のきれは、その戦が終われば間違いなく日ノ本に君臨するだろう徳川に睨まれる危険があった。

それを危険視したのは、家臣だった。戦のどさくさ。「自分」が、当主の手から奪われた。打たれた時期に主流だった太刀は、長く、重い。振り上げられた自身は、声なき声で悲鳴を上げた。

主は、目を瞑って微笑んでいた。彼は暗殺計画を知っていた。知った上で、「それが正しい」と受け入れていた。

そして、妖刀「あるじ切り」は生まれた。刀や審神者にしか聞こえぬ泣き声を上げて。

「私が、戦国時代に行った時に、自分の当時の持ち主を助けようとしたら『破壊』するように、とね」

「……あんたが『歴史修正主義者』になる可能性がある事も、政府は折込済みなのか」

ほとんど唸るような低い声。それに、彼女は苦笑しか返せない。それが事実だったからだ。

「今の現状じゃ、利用できるもんは出来るだけ利用しなくちゃ。そもそも彼らに『歴史修正主義者』なんて200年も前に出来た名称を与えてる時点で情報操作の悪意も見えるし。今もいわば戦国時代だ。敵には隠密を送り込み、ウソの情報を流して敵を分断させる。敵が隠密を送り込んできたら、そいつにウソの情報を流して敵を惑乱させる。これぐらいのスタンスじゃないとね」

「それは毛利元就公のやり口だろう……」

すっかり疲れた様子で、刀身を鞘におさめる。そんな彼に、彼女は笑って締め括ろうとした。まだ「あるじ切り」が生まれた時代までは攻略できていないが、いずれはそこまで行くだろう。ヒトとして生きていた頃よりも、刀として、武器として生きていた時間の方が遙かに長い。そんな身としては、最も印象の強い持ち主を殺めさせられた時代に赴いた時、果たして自分がどうなるかわからないのだ。今でさえ、刀剣達の中には歴史修正主義者の気持ちもわかるといったような旨の発言をする者もいるというのに。彼らより化けものに近い審神者は、その時、果たして冷静でいられるか自信がなかった。だから、戯けて諸手を挙げた。巻物を持ったまま。

「まあそういう訳だ。正直良かったよ、きよみっちゃんはああ見えて意外に忠誠心が強いから。私を破壊させたら可哀想な事になりそうだもの。隠すつもりもなかったし、たぬきちゃんも知っちゃったなら同じつもりで頼むね」

「ああ、わかった。でもその前に、ひとつやりたい事がある」

やけにあっさりと肯いて見せた。それに満足げに肯いた審神者だ

が——片手に彼女自身、片手に押し入れから出した刀掛けを見て、彼女は慌てる。しかし久しぶりに着た振り袖は、彼女の動きを阻んだ。その間に、同田貫はさつきと床の間に刀掛けを置く。そして、やけに丁寧な仕種で、その太刀——今は「あるじ切り」と呼ばれる、本来の名を失った刀を置いた。

掛け軸も花瓶も、何も置かれていなかったそこ。障子から差し込んだ日光で、鞘におさまったそれは、やはり今し方詭えたばかりの刀に見えた。そして、博物館に飾られているそれにも見える。立ち上がり損ねた彼女は、呆けた様子で同田貫を見上げた。彼は、その太刀を見下ろしながら、腕を組んでひとり肯いていた。

「やっぱりな」

「何が」

「押し入れにこそそそしまいこんでいるより、こうして堂々と飾っておけ。恥じる事は何もないだろう」

目を瞠る。彼女に、日頃は厳しい眼差しばかり見せる彼は、僅かに、ほんの僅かに笑んだ。

「刀剣は美術品ではなく、武器だ。俺には美しさなどわからん。その点、少なくとも、あなたの本体は立派な太刀だ。重さといい長さといい、あなたが使っていた大名は、名こそ残さなかったのだろうが、良い太刀を使ってたんだな」

それは武功を褒め称えるそれだった。

「あなたを『あるじ殺し』にしてしまった主は、あなたに殺された時、苦しんで死んだか」

「……ううん」

彼女は、言葉のままに首を振った。覚えている。すぐさま取り押さえられた、家臣の手の者の暗殺者。地面にたたき付けられた自分。その中で、聞こえてきたのは当時の当主の名を呼ぶ悲鳴。

そこで、やけにはつきりと、聞こえた声。

『良い腕前だったし、良い刀を持ったよ、俺は。恨まないよ。有り難う』

何を、誰を、ともいわなかった。ただ、それがかなしかった。その

気配が、直ぐに息絶えるのがわかったから。

あれから、500年以上。自分は、徳川家に没収される事もなく、大事に大事に手入れされ、受け継がれてきた。本家が没落し、商家として栄えていた分家に借金に借金に取られた先でも、やはりちゃんと手入れされた。それは、当時の当主の、生前からの言葉だった。

『道具が悪いんじゃない。誰かが悪いんじゃない。時機を見て、正しく使いこなすのが大事なんだよ』

そして、今。自分は時を超え、意想外な事に再びヒトの身体を得た。色んな刀達と出会い、思いを共有し合っている。それは傷の舐めあいかも知れないけれど。

殺風景な床の間。ヒトとして仮初めに蘇った今は、飾り付ける欲求もわかなくなかった。ただ、そこに飾られた、本来の自分自身。そこに飾られている姿が、やけに嬉しかった。

救われた。

「……ううん。有り難う」

「何もしてねーよ。ただ、刀は刀掛けに置くもんだろーが。ところでどこに行ってたんだよ」

「あ、うん、外に皆にお菓子を買いに……寮できよみっちゃんが配ってる筈だから」

「そーか。それと報告書、読んでおけよ。あと、部屋に勝手に入って悪かった」

とつてつけたように謝罪を残す。そして彼は、足音荒く部屋を出て行った。寮へと向かったのだろう。やがて、足音が聞こえなくなる。

静かな本丸。雪をまだ僅かに帯びていたらしい蓑と笠は、畳を少し湿らせていた。慌ててそれを卓袱台の上に避けながら、ふと、再び床の間を見た。

まるで、自分の写真を自分の部屋に飾っている気分だ。だが、それも悪くないかも知れない。そんな事を、思う。

結局、今の自身は、最早刀なのだ。「あるじ殺し」の時点で、その運命は定まった。この戦が終われば、再び刀に戻るのだろう。だが、これからは、もっと誇らしく輝ける気がした。

日光に鞘が照る。相変わらず妖しい光だったが、今はおぞましく思わなかった。

「おい俺の分残ってねーぞ?!」

End.

心の中から消えてくれない人【創作刀剣男士十山姥切 国広】

それなりに、共に戦う事は多い。しかし、会う度に名前を忘れる。その意味について深く考えた事はなかった。これまでは。

「おーい、山姥切。やまくに君やい。飲まないの」

「……放っておけ、俺の事など」

その宴席で、山姥切はひとり、手酌していた。縁側の席、この本丸では常に天候はよい。刀剣の中でも最も美しいとされる太刀の名と同じ月だった。醸造技術の未熟なこの時代で手に入る、アルコール度数の低い酒でも頬はほてった。それに縁側の夜風は心地よかった。いつも通り布を被つたままそうしていれば、ひよっこりとやってくる影がある。布の為に顔は見えないが、低音の声には聞き覚えがある。だから誰何をせず、杯を呷った。遠征部隊が土産に買ってきた酒は、それなりに美味だ。そんな事を、アルコールで霞んだ頭で考えていれば、ぽすり。勝手に隣にその男が座る。咎めなかったのは、絶妙にパーソナルスペースを侵してこなかったからだ。間に自身の分のつまみらしいものを並べている彼は、「さつきから何本飲んでるの」と苦笑していた。そこで、はじめて視線をやる。

但し、視線の方向は彼の方にはない。間に置かれたつまみ達だ。正確には巻き寿司や唐揚げ、それにアルコール度数の低い洋酒の缶が置かれていた。確か、21世紀頃から日本に流通したものではなかったろうか。「酒は好きだけど、そんなに飲めないんだよね。主が取り寄せてくれたんだ」といいながら、山姥切の視線の先。彼の手には洋酒の缶と巻き寿司があった。恐らく酒よりつまみがうまい類なのだろう。つまり下戸だ。なるほど、宴席から逃げてきたようだ——部屋からは「もつと飲め」「俺の酒が飲めないのか」「もう勘弁してください」などという、アルコール・ハラスメントという概念は置いてきぼりにされたやり取りが轟いてくる。彼の方ではない、もう片側に目をやれば、同様に逃げてきたらしい他の刀達の姿もちらほらと伺えた。

何やら絡まれたらしい審神者の悲鳴も聞こえた気がしたが、山姥切は無視を決め込む。明日にでもアルハラという概念を周知徹底すべきだ、と思いつつも、隣でつまみを食べる同僚に目をやった。

顔はよく見えない。そもそも、あまり覚えていない。戦う時は目の前の敵に一直線だ。内番や遠征で組んだ覚えもほとんどない。確か、刀種は太刀だと思ったが、あまり戦闘は得意だという印象はない。少なくとも同田貫のような猛烈果敢、猪突猛進という印象はない。近いのは三日月などだろうか。戦いに縁のない、祭祀対象の刀だ。だが、確かこんな異名を持っていた筈だと、山姥切は思い出す。

『あるじ切り』

その昔、戦国時代。大坂夏の陣で、奥州の小さな戦国大名で下克上に近い内乱があったという。頭の切れすぎた当時の当主を、これから訪れるだろう徳川の世に据え置くのは相応しくない——そういった理由で、一部の家臣が結託。戦のどさくさに紛れ、当主を襲った。彼の携えていた太刀を奪い——ほとんど即死だった。その威力と、忌まわしい逸話。元より歴史の古く、そして徳川の治世になってからは威力の強い太刀は厳しく規制された。その為に、以降は本家の家宝として仕舞われ、建立された神社の祭祀対象となったと聞く。2200年代の時点で1000年近くの歴史を持っていた筈だ。妖刀とすら呼ばれる彼は、存在こそひどくマイナーだが、もっと目立って当然だろうに。

(俺とは違う)

「さつきから酒ばっか飲んでるじゃん。つまみも食べないと胃に悪いよ」

「刀に臓腑に悪いも何もあるか」

手酌して杯を空けていく。それを見咎めながら、隣の青年はトンカツの巻き寿司を口に放っていた。そして口にするのは世話女房めいた台詞だ。同じ東の国の出身の為か、燭台切と似たところがある——そんな事を考えていたせいだろう。山姥切は、酒で軽くなった口を滑らせた。

「お前こそ、異名に反して全然飲まないんだな。『あるじ切り』」

かえってきたのは、一瞬の無言。思わず顔を向けた。

はじめてまともな顔を見ようとした。しかし、今日の三日月はやけに眩しかった。ただ、口元に、さみしげな苦笑が浮かんでいる事だけはわかった。

「……それは、僕の名前ではないよ。今はね」

「……は」

「君と同じだよ。僕も写しだ。但し、ちよっと前までは本物として扱われてたけどね。まあつまり、僕は世間一般には贋作扱いだね、今は」
言葉を失ったのは、今度は山姥切の方だ。缶の酒を呷る、隣の彼の顔は、やはりよく見えなかった。ただ、自嘲めいた笑みが浮かんでいるのだけは、見えた。

「本家の『あるじ切り』は、明治維新で没落した大名の家から、早々に江戸に出て商家として栄えた分家に借金形の形に取られたんだ。けど、その時点で神社はもうあった。だから、僕は家の体面もあつて写しとして作られた。……但し、記録には残されなかったけどね。元大名にとっては、金で栄えた分家に家宝を取られたのが余程恥だったらしい。当時の彼らにとっては『写し』でも、記録に残されなければ後世には本物、そして分家にとっては贋作という事になった。皮肉にも、戦力の充実をはかる為に僕の家に行って来た審神者のお陰で、その事実の全てが露見したけどね。だから、僕が生まれたのは明治維新以降。この中じゃ年若いんだよ、実は」

さて、いつもこんなに喋る男だっただろうか。下戸ゆえに、口がよく滑ってしまっているのだろうか。思わず青い眼を瞬く。それに、彼は笑った。今度は苦笑だった。

「……ここでも知ってる刀は知ってるよ。主も承知の上だ。政府が探し当てた本来の『あるじ切り』は本物の妖刀で規格外過ぎて、刀剣男士にはなれなかった。その上、妖刀だから審神者の力も持ってたって話だ。今は美濃で審神者をやってるらしいよ。でも、僕は審神者に顕現されて、丁度良く使役できる程度の威力におさまった。刀としての実戦経験はゼロに等しいから、山姥切。君みたいには戦えないから、君が出るような強い相手の戦には、中々出られないんだよ。太刀の

癖に」

それ以上、言葉は続かなかった。静かな騒ぎが、部屋から届く。低く、しかし普段より饒舌に語られた言葉は、彼らの間にしか届かなかったようだ。杯に手酌する。それを一口呷ると、山姥切は漸く我を取り戻した。

「酔ってるな、お前」

「酔ってるよ。だから、普段はいえない事もいえたんだけ。……そろそろ俺は抜け出させて貰おうかな。明日も早いし」

ふらり、立ち上がる。気付けば、自分達の間置かれていたつまみは残らず消えていた。下戸の代わりに大食漢らしい。そんな彼は、眩しい三日月の前で、あの月と同じように笑んでいた。その口元だけが、見えていた。

「ねえ。それで、僕の名前を君は知ってる。山姥切国広くん」

「……お前は」

「僕の名前はね、ないんだ。今は。奪われっぱなしだよ」

そういう彼は、やはり笑っていた。

「僕の正体を看破した審神者に、僕を打った刀工の名前を貰ったけど……全然馴染まないんだ。だから、名乗る名前がない。僕はどう言いつくろおうと、結局は贋作だから。君が羨ましいよ、山姥切。偽物なんかじゃない。『写し』っていう立派な形だなんだから。」

……ああ、御免ね。喋りすぎたね。本当に、今夜は飲み過ぎたよ。下戸が飲み過ぎるのはよくないね。それじゃ」

翌日、早朝。その日は山姥切は非番だった。しかし自室にいても、

「●●が破壊された」という声は聞こえてきてしまった。

それは、あのあと確かめた、彼の名。家の体面では自己満足として「写し」、実態は贋作として打たれた太刀の名だった。

結局、山姥切国広は、彼の顔を知る事はなかった。

(どう足掻いても、自分はオリジナルにはなれない。「本物」がいる限りは)

E
n
d.

刀剣の苦勞、主知らず【シヨタ審神者十三日月&山姥切】

違和感は、覚えた。

「……なんだ、その目は」

幼い目だった。どう見積もっても、神の内は過ぎていても、10にも見たぬ子供だ。狩衣と草履に烏帽子。それらが、奇妙に浮いて見えた。まるで着こなせていない。しかし、それよりも気になったのは、その目だった。

確かに、こちらを見上げている。見ているのだ。焦点も合っている。しかし、奇妙に光がないように見えた。まるで、何かを失ったかのように。

「写しだというのが気になるけども」

「うつし……そういうのはよくわかんないや。俺は、君がいいなって思ったから」

答える声は、それなりに明瞭だ。しかし、どこか霞がかっている印象もあった。それがなぜか、この時の山姥切にはわからなかった。だから、黙って布で身体を覆う。そして、子供の——自身の主だという少年の向こう。そこに立つ、老爺を見た。狐の面を被った、狩衣に烏帽子の老爺だ。それを、睨め付けた。

面の奥。その目が嗤っているように見えた。それは自身だけでなく、この少年にも向けられているようにも思えたのだ。

狐が走る。そこは本丸と呼ばれる場所の一角だった。狐、なのだろう。しかしそれは、一見すれば奇妙な生き物だった。狐が、狐の面を被っていた。確かに四つ足で駆けるそれは獣のそれだ。しかし、人をつける面が、それがただの動物でない事を示していた。

「審神者殿、審神者殿」

更に、その面の下からは人の声が漏れる。それは、この本丸の主。10歳にも見たぬ少年を捜し求める声だった。尤も、人語を解し、喋

る狐は、ここでは珍しい話ではない。新たな刀を鍛える際にアシスタントの役目を負う狐、刀の修復を手伝う狐、中には刀とワンセットで共にいる狐——最後のそれは面を被っていないが、とにかくここでは珍しい話ではなかった。ただ、一点。この審神者を、「審神者」と呼ぶのはこの狐だけだった。

本丸を仕切る、審神者のアシスタントである。「こんのすけ」と名乗る狐だった。尤も、このところは最初に彼が呼び出した山姥切にその仕事を持って行かれてしまい、その存在感は薄れていた。だが、今は違った。だから、彼、あるいは彼女は走っていた。偶には審神者に接さないと、この幼い審神者は自身を忘れてしまうだろう。その焦りによるものだった。焦りの由来は、今のところ、彼しか知らない事になっっているが。

知られてはならないのだ。

「おや、これはこんのすけ殿、だったかな」

不意に、声がかげられる。そこで急ブレーキ。声の方を向いた。そして、目的の人物を見出す——但し、自身を呼び止めたのは審神者ではなかった。だから、面の奥で顔を顰める。

うららかな本丸の日差し。青い狩衣の青年が、縁側に腰掛けてこちらを見ていた。彼の膝の上では、幼い子供が横たわっていた。小さな烏帽子が青年の傍らに置かれており、青年が、その片手を子供の頭に乘せていた。狐の鋭敏な聴覚には、その子供の寝息が聞こえてきた。だから、ひとまず息を吐く。そして、ゆっくりと歩み寄った。

「これはこれは、三日月宗近殿。審神者殿はお昼寝ですか」

「子供は寝るのが仕事だからね。ましてや、主は今朝は早かった。子供に寝不足は良くないからな。それで、何の用かな。今の近侍は俺だから、俺が用件を聞いておくよ」

「……それはそれは」

こんのすけは、内心で舌打ちをする。歩み寄ったものの、半径1m以内には入れて貰えなさそうだった。本来の姿は太刀である青年——三日月には、奇妙な気迫がある。天下の五剣の中でも最も美しいとされる彼は、刀であった時は実戦に出た事はないともいわれている。

しかし、実際はどうだ。こうして付喪神となって姿を現せば、膝の主
に何者をも近付かせまいという気迫を見せる。しかし、それでもこん
のすけは引き下がる訳にはいかなかった。腰は落ち着けず、四つ足で
立ったまま、こんのすけは顔を上げる。作り笑いでも見せたかったと
ころだったが、生憎、面では見えなかった。

「単純な話、私も審神者殿にお会いしたかったのですよ。ここのとこ
ろ、近侍の山姥切国広殿には遠ざけられていましたね。ここ審神者
殿は、動物好きらしく、私の事もかわいがってくださいますから。そ
れに、審神者殿には今日の任務を終わらせて貰わないと」

「最後が本音かな」

声の調子だけ訊けば、穏やかなものだ。しかし、言い切ったそれは
否定を許さない。言葉のでないこんのすけの前で、三日月は審神者の
頭を撫でた。子供らしく、まだ小さな頭だ。孫を見る祖父のような顔
つきだが、しかし、こんのすけに向ける声は冷たい。

「山姥切が帰ってきてからでもこなせるだろう。長くかかる遠征では
ないからな。俺は彼から留守を預かっている身だ。今日の主は眠そ
うだから、遠征中は昼寝でもさせておくようにとね。さつきもいつた
が、子供は寝るのも仕事だよ」

「審神者殿は、ここの審神者です。普通の子供と違いますよ」

「子供だよ。普通のな。審神者としての才能に溢れているだけの、ま
だ10にも満たない幼子だ。……ああ、普通でなくしたのは『お前達』
だったか」

とぼけた様子だ。飄々としたそれは、まるで今日の天気について世
間話混じりに喋っているようだ。しかし、内容は唐突に、核心を突く。
思わず見上げる。三日月は、変わらずその手で審神者の丸い頭を撫で
ていた。表情も、いつも通りにごく穏やかなものだ。しかし、こんの
すけは知っている。付喪神、自分達が俗に刀剣男子と呼ぶ彼ら。彼ら
が「神」であるという事を、こんのすけはいやという程知っていた。

23世紀。ここの審神者が最初に鍛えた山姥切と共に、政府からつ
いてきたのだから。

獣の身体に汗腺は乏しい。内心でのみ冷や汗をかく。こんのすけ

は知っている。彼らは反転すれば、歴史修正主義者になってしまう。神とは2つの側面を持つものだ。殊に、長い歴史を持つ彼がそちらに転ずれば——こちらに刃を向ければ、どんな強敵になるや。想像するだに恐ろしい。こうして、ぼんやりとした冷気を浴びせられているだけでも恐ろしいのに。それに気付かないのか、審神者は目を覚ます様子は無い。ただ、健やかな寝息を立て続けていた。三日月は、淡々と言葉を連ねる。

「山姥切が、決して主から目を離すなどといった理由が、よくわかったよ。隙を見つければ、そうして、こんのすけ殿。お前が近付いてくるから、なんだな」

「……私は、審神者殿と親しくしたいだけですよ」

「主は動物好きだからな。五虎退の虎達や、鳴狐のお供ともよく戯れておる。子供らしく、誠に微笑ましい姿だ。短刀達と遊んでいるのも、賑々しい。こんのすけ殿と共にいる様も、まあ、見るだけならば微笑ましいな」

「なら」

「その面さえなければ、純粹にな」

それに、こんのすけは答えない。こんのすけの頭に浮かぶのは、鳴狐のお供の狐だ。首巻き程の体長しかない狐だ。しかし、少なくとも面はつけていない。五虎退の虎達も同様だ。こんのすけは、アシスタントの狐達にも言及しなかった。しかし、この男ならば既に気付いているだろう。彼らは基本的に口を利かないのだ。

空は、青い。よく見れば、薄く、月が浮かんでいた。下弦の月だった。三日月の声が、静かに響く。

「俺はな、こんのすけ殿。出来れば、『お前達』とも仲良くしておきたいんだよ。主の今後の為にも、これからの歴史修正主義者達との戦いの為にも。でもな」

息を吸った。面越しに見る、その顔には背筋を凍らせるものがあった。いつも穏やかに微笑んでいる、その顔には「無表情」そのものが貼り付けられていた。

「主がお前と戯れる度に、思い出しかけていた様子の『記憶』を忘れて

しまい続けるようだったら。こちらにも考えがあるぞ」

面越しの——「使い魔」越しの、23世紀。2205年、政府の片隅で、とあるベテランの審神者の老爺が息を飲んだ。

最初に山姥切がその違和感に気付いたのは、短刀「藤四郎」が揃いはじめた頃の事だ。

「へえ、兄弟なんだ」

「ええ。主様にもいらつしやいますか」

五虎退に尋ねられ、はた、と審神者は首を傾げた。その腕には、このすけが乗っていた。その目は、審神者を見詰めている。

「……さあ」

返ってきた言葉は、ひどくとんちんかんだった。その場を、山姥切は目撃した。

「ふーん。じゃあ、その『山姥切』って刀がまんばのお父さんにあたるの」

「……少し、違う。あんたの時代の常識でいえば、クローンに近い」

休憩時間だった。近侍の山姥切は、馬の世話をしながら答えた。その時、共に馬当番に当たっていた薬研は飼い葉を取りに席を外していた。暇を持て余していたらしい審神者は、馬小屋の柵に腰掛けながら尋ねてきた。初期刀は、幼い審神者の分も含めて、23世紀までの常識がインプットされている。そのままに答えれば、「ああなるほど」と彼は肯いて見せた。しかし、はた——と、審神者は目線を落とす。

「……お父さん、かあ」

その声が随分と寂しげだったから、思わず、尋ねた。

「……あんたは、両親のどっち似なんだ」

「…………えーっと」

「審神者殿、こちらにおられましたか」

「あ、こんのすけ」

駆けつけてきた狐が、審神者の肩に飛び乗る。俊敏な動作だった。

途端、その目が曇った。それを、山姥切は確かに見た。

そして、肩に懐くこんのすけの尻尾を掴みながら、不思議そうに首

を傾げた。薬研の声が近付いてくる。

「えーっと、それで何の話をしてたっけ」

なぜ、審神者になったのか。山姥切がそれを尋ねた時、部屋に居合わせたのは、やって来たばかりの三日月だった。それにはやけに明瞭に答える。

「ああ、えっとね。俺の家にあった妖刀の付喪神を呼び起こしちゃったの、俺が」

「……はあ？」

「二応、先祖は戦国大名だったらしくてね。ウチは分家筋だけど、明治維新で没落した本家からウチに買い取られてきて。政府が歴史ある刀をとつても高く買い取ってくれるっていうから、ウチのお店が傾いてたのもあつて買い取られる事になって。でもね、その妖刀とは友達だったから、寂しくつてね。その時に君達みたいな付喪神を連れていた人の真似をしてみたらね、付喪神が出てきたの。ただ、男の人にはならなかったけど。ヒトの形はしてたから、審神者の資格があるって。俺の事も雇ってくれるって。そしたらお店は立て直せるどころか、もっと繁盛できるぐらいのお金をくれるって」

「……売られたようなものじゃないか」

「俺は嬉しいよ、家族の為だもん。それに、ここには皆がいるから寂しくないし」

その言葉自体には、山姥切は思わず嬉しさがこみ上げる。しかし、尋常でない事情がそこにあると知り、眉を顰めてしまう。加え、今はじめて訊いた事情だ。そして、はたと気付く。

10歳にも満たない子供。それが、今まで家族の話をまともにした事があつただろうか。

「審神者殿、お仕事は進んでいますか」

その時、「折良く」。こんのすけが部屋を尋ねてきた。思わず振り向く。

こんのすけは、狐の面を被ってそこに佇んでいた。

「わからない事があつたら、また私に訊いてくださいね」

「うん、わかった。有り難う、こんのすけ」

にこりと笑う。しかし、その目に再び霞がかかり——そして元に戻ったのを、今度は確かに見た。

「選んだのが貴男でよかったですよ」

いつの日だったか。こんのすけはいつた。半ば開き直った答えだった。

「この審神者殿の力は、子供だから柔軟で、そして規模が桁違いすぎる。だから、たとえば人の魂を封じた妖刀だったら、生前そのままの姿を現してしまおう。もし、万が一怨念の籠もった刀を、そのままの形で顕現させてしまったら……どんな恐ろしい事になるか。貴男にわかりますか」

「だから、なぜ俺がいいと」

「貴男が『写し』だからですよ」

コンプレックスを穿つ答えを、こんのすけは返した。

『写し』として、貴男は付喪神となった。貴男は『元の形を正しく模倣した刀』の上、『政府の審神者が使役すべき基準の形の付喪神』となった。刀を主に扱っていた、人間の男性として。彼は学ぶ必要があるんですよ。ホームシックや、自身の置かれた悲惨な環境への感傷に囚われないように、早急に、力を形に嵌めなければ危ない。……貴男の主は、いわば爆弾なのですよ。子供の姿をした爆弾だ。山姥切国広殿。貴男も、主に爆発などして欲しくありませんよ」

審神者の頭を撫でる。こんのすけの姿は既がない。息を吐き、三日月はいった。振り向きもせず。

「さて、一脅しは済んだ。遠征も済んだようだな、山姥切」

「……あんたも、あんな風な事が出来るんだな」

返答の代わりに、姿を現す。三日月達のいる部屋の、襖を隔てた向こう側。そこから、布を被った青年が現れた。相変わらず端はほころびていたが、頻繁にそれを掴む幼い審神者の為に、今日も比較的白く清潔だった。遠征帰りの為にまた薄汚れていたが、彼の主が起きぬう

ちに、これから換えの布を取ってくるのだろう。そういった行動パターンを既に把握していた三日月は、金髪の青年——山姥切に笑って振り向く。

「なあに、ちょっとしたはったりだ。はったりは大きければ大きい程いい。それだけの話だよ」

「大したもんだな、天下五剣が」

「それもかわいい主の為だ。子供は健やかに育つのが1番。変に頭をいじられ続けるのは、決して健全ではないだろう」

そういつて、撫でていた手を止める。その下には、成人男性の頭で包めてしまいそうな程の小さな頭がある。その中に、今、どれだけの思い出が封じられているのか。山姥切には見通す事が出来ない。布の陰で、小さく歯噛みした。

——今、こんのすけが「操作」しているのは、微調整に過ぎない。山姥切が目覚めさせられた時点で、既に大元の洗脳は完成していた。いたかも知れない兄弟姉妹の事を、両親の事を、事実上売られたという自身の境遇を、ごく自然に忘れ、それを受け入れていた。ただ、審神者になった切欠だけは覚えていた。それは恐らく、放っておけばひよんな拍子に解けてしまうのだろう。だから、こんのすけは頻繁に審神者に接する。小さな綻びも見逃さず、記憶を封じ続ける。付喪神を具現化させる技術が確立している時代だ。洗脳など、容易い事なのかも知れない。胸の悪くなる事実には、山姥切は日頃のコンプレックスも忘れてしまう程に歯噛みした。

才覚に溢れすぎた幼き審神者。彼を、政府に都合の良い司令官として据え置き続ける為に。戦が終わったのち、彼がどんな処遇を受けるか。そして、洗脳は解けるのか——恐らく、その頃にはまた元の刀に戻るだろう自身には、それを確かめる術は恐らく、ない。俯きながら、膝を突く。小さな烏帽子を手に取り、三日月の膝を見た。不穏なやり取りが頭上で交わされ続けたにもかかわらず、幼い審神者は、硬い膝で眠り続けていた。それに、半ば呆れの溜息も漏れてしまう。

「……全く、この子供は」

「何だかんだで、俺らの心配は杞憂かも知れんな。まあ、大人として姿

を現してしまった以上、この主を放っておくのはちと夢見が悪いな。こんな、小さい子供を」

「……ん」

そこではじめて身じろぐ。それに目を瞬いた。刹那、足音が近付いてくるのが聞こえた。茶器のこすれ合う音も伴って。

「おーい、三日月さん、山姥切、それに主。こつちにいるって訊いたけど、おやつだぞー」

「おやつー」

縁側の角を曲がってくる薬研。その手には盆が乗せられていた。途端、跳ね起きる審神者。未練もなく薬研の方へと駆けていった。思わず見送る2人の前で薬研に今日のおやつの内容を問う。屈んでそれに答える薬研。その光景に、2人は苦笑するしかなかった。

「大人の苦勞を、子供は知らんな」

「全くだ」

「三日月、山姥切、今日のおやつは葎大福だつてー」

「おやおや、それは楽しみだ」

顔中に喜色溢れさせる、幼い審神者の顔は子供らしくあどけなかった。答えて笑う三日月。山姥切はその陰で、その笑顔がこれから出来るだけ曇る事のないよう、尽力を誓った。

End.

蛍とホオズキ【人外女審神者十蛍丸】

こんのすけの声は、重い。顔色なく横たわる蛍丸の前、使い魔を通した女性の声が、室内で静かに響く。

「恐らく、『核』が、破壊されたと思いこんでしまったのでしょうか。間一髪、でしたが」

ともすれば、折れる寸前だったと訊いている。装備は丸裸、短刀達を庇つての事だった。丁度、門の前。暇を持って余し、遠征から帰ってくる筈の彼らを待っていた時。駆け込んできたのは、気を失った厚を担いだ五虎退だった。涙ながらも、はつきりとした声で緊急を告げた。

『主様、奇襲を受けました！ 敵は2部隊編成で、見ただけでも大太刀揃いでした！ 今、蛍丸さんが動けなくなつた兄さん達を庇ってひとりで応戦してます！ ここから亥の方角、至急応援を』

『第1部隊、第2部隊と共に第3部隊の応援に向かえ！ 手入れ班は至急稼働！ 五虎退、御苦労。早く厚を連れて行ってやって』

『あ、主様!? どこに——』

「幸い、審神者殿の判断の速さもあり、すんでのところ刀自体は無事でした。手入れも、こうして間に合いました。が……このままでは、エーテル体の溶解は避けられないでしょう」

「……そこまで『いつてしまった』か」

こんのすけの下す診断に、眉根を寄せる。目の前の、一見稚き少年は、この部隊の中でも随一の実力者だ。だが、大太刀特有の重さゆえ、機動が遅い。生存値の高さゆえ、応援が間に合ったようなもの。彼のお陰で、彼に随伴した短刀達はそれぞれ中傷以上を負つたものの、欠けた者は一振りもない。重傷者の2名を除き、彼に守られた短刀達は、先程までこの部屋の周りを落ち着かなく彷徨っていた。今も、時折気配が見える。日頃は飄々としている蛍丸だが、実力に伴う練度の高さゆえに、このところはまだ経験の浅い短刀達の先導を任せる事もあつた。その矢先にこれだ。今後は対策を考えないといけない——だがその前に。

枕元には、蛍丸の身の丈もあるような太刀が飾られている。それ自体は既に無傷に等しい。しかし、その付喪神として顕現している蛍丸の意識は戻らない。布団を挟んだ向こう、時折、子供の陰が蠢く障子の前で、こんのすけは医師のように告げた。

「審神者殿。今夜が峠です」

「……わかった。それまでに、何とかする」

こんのすけは肯いた。それが何に対する肯定か、この場に解する意識ある者は、互いしかいなかった。

こんのすけが、器用に障子を鼻先で開いて出て行く。五虎退の虎の影が見えた。閉められる障子。2人きりの、夕暮れの本丸の一室。相も変わらず、身動きもしない蛍丸の、布団からはみ出した手を取った。

冷たい。だが、まだこれは「生きたヒト」の冷たさだ。僅かに脈の通う手に、死体の硬さは、伴っていない。あれは、何度触れても、よろしくないものだ。それが人であれ動物であれ、人を模した姿の別物であれ。顔色は上質紙のように白いが、まだ唇は内巻きに捲れていない。抱えて、明るい方へ寄せれば、無理矢理開いた目の瞳孔は、動きは緩いが収縮した。それに僅かに安堵しながら、体を戻してやる。子供の姿をしているとはいえ、大太刀を振り回す膂力の体はそれなりに重かった。ましてや、今は「死んだように」眠っている。全身の力が抜けていた。何とか布団へ戻してやる。掛け布団を首までかけてやると、その片手だけを出した。再び、握る。

間に合わなければ、明日の朝日を、蛍丸が拝む事はない。

「賭けかな」

呟き、手を離す。そして立ち上がると、布団を回って障子へと手を掛けた。一見すると、誰もいない。しかし、察しはついていた。夕暮れの本丸、もうすぐ日が暮れる。縁側に膝を突くと、縁を掴んだ。勢い込んで縁の下を見下ろす。

そこでは、既に手当てを終えていた厚と五虎退が、不安そうに座っていた。恐らく、自分達を庇った蛍丸の事が心配だったのだろう。子虎達を纏った彼らに一瞬だけ相好を崩し、そしてそのまま微笑みかけた。

「丁度良かった、2人とも。ちよつと、日が暮れる前に摘んできて欲しいものがあるんだ」

「な、何を……?」

「薬研に訊けばすぐわかる筈だよ。あれも漢方薬に使われるから」

弟を庇うように尋ねる厚に、審神者はいった。

「薬研の薬草園に生えてるだろうから。それを一輪だけ、この部屋に持ってきて。あとは、今夜はこの部屋に誰も近づけない事。後者は清光に伝えて。今夜の残りの業務は任せたって」

暗い夜道を歩いていった。どうやら、河原らしい。外套を翻しながら、蛍丸はぼんやり、空を見上げる。夜空は曇天、不可思議なのはその水面だ。河原には、煌々と、満ち足りた月が漂っている。川の流れるは、蛍丸の左手から右手へと向かっていた。さらさらと、水の流れる音がする。さわさわと、草の囁く声がする。向こうに見える、木々の葉擦れの音もこちらに届いた。歩くは玉砂利。水面の月影だけが、光源だ。

背中に背負うのは、自身の本体。3尺を越える丈の自身は、今はとも重く感じる。投げ出してしまいたいが、そうもいかまい。そんな事を茫洋とした意識で、考える。足は、進んでいた。

自身は、どこへ向かっているのだろう。そして、どこから歩いてきたのだろう。化かしの満月が水面で自身を追ってくる。空は相変わらず墨を流したように黒い。それでも尚、堂々と自身を満月の月影と言いつ張る水面の化かしに、いつそ笑みがこぼれそうだった。

笑う。さて、自身も笑っていた筈だ。いつもの遠征帰り。付喪神としては身の丈の変わらぬ短刀達と共に、本丸に帰投していた。さて、それからどうしたか。

(そうだ、喉が渴いてたんだ)

不意に、思い出す。遠征帰り。その時には竹の水筒は底を突いていた。短刀達から分けて貰うのも忍ばれ、あと少して本丸だ。そこで一気に飲もうと思っていた。ただの刀剣だった頃は、なかった欲求だ。

そして、やつとそこでまともにも川の方を向く。ゆらり、満月が揺れた。笑ったように見えたのは気のせいか。

——そうだ。ここに川があるじゃないか。ここの水を一口だけ飲んで、帰ろう。

本丸に帰れば、井戸から汲まれた、澄んで美味しい水がある。それをわかっていた。だが、どうにも先程から、川から呼ばれている気がした。あの、満月に。

ここはどこだろう。見た事もない場所だ。本丸からは、屹度、遠い。ならば、その前に。しゃがみ込んだ。

振り向く。名を呼ばれた気がした。

だが、そこには誰もいない。暗然とした藪の道が、続くだけだ。

しかし、ふと、気付く。

肩に、小さな灯火が乗っていた。正確には、それは、ホタルだった。

『ほ ほ ほたるこい』

そのホタルは、歌を歌っていた。

目を剥く。刹那、ホタルは飛んだ。

「あ」

『ほ ほ ほたるこい』

「待って」

ホタルは、空中で小さく旋回する。だが、蛍丸が立ち上がり、河原に背を向けると、藪の方へと飛んでいった。それを追いかけて、蛍丸も藪へと飛び込んでいく。

『あっちのみずはにがいぞ』

誰もいなくなった河原。水面の満月が、ふ、と消えた。

あとは、ただ、暗闇。

『ごつちのみずはあまいぞ』

『ほ ほ ほたるこい』

『やまみちこい』

蛍丸は走る。藪は越えれば越える程厚くなっていくようだ。時に、自身の太刀を振った。手入れが必要になるだろうが、構うもの

か。坂道の藪を、蛍丸は駆け上った。

『ひるまは くさばの つゆのかけ

よるは ぼんぼん たかじょうちん』

気がつけば、曇天に切れ間が生じていたようだ。藪を掻き分ける、蛍丸の上空には三日月が照っていた。妙に明るい三日月だ。

『天竺あがり したれば つんばくろに さらわれべ』

この山道には、梟でもいたのか。時折、鳥のような生き物が襲いかかってくる。しかしそれも切り伏せ、蛍丸は走った。

なぜ、こんなにも必死なのか。あのホタルを追いかけるのか。理由などわからない。

(屹度、これは夢だ)

いつかの主が、ホタルの夢を見たという。それが自身の名の由来だ。だから、自分もそんな夢を見ているに違いない。

いつ、自分は眠ったのだろう。遠征のあと、まだ、水を飲んだ覚えはない。

『ほ ほ ほたるこい』

あつちのみずはにがいぞ』

ホタルがそう歌うから、自身はあの河原に背中を向けたのだ。刹那、川のせせらぎが聞こえた気がする。

『ほ ほ ほたるこい』

こつちのみずはあまいぞ』

だが、直ぐにその音は聞こえなくなった。

『ほ ほ ほたるこい』

ほ ほ やまみちこい』

いつの間にか、山の頂を越えていたらしい。下り坂を、今度は滑り降りるように追っていた。ホタルに体力はないのか。ホタルはいつまでも、同じ間隔を保って蛍丸に追いかけている。藪が時に皮膚を掠ったが、こんなものは戦の傷に比べようがない。

『あんどのひかりをちよとみてこい』

坂を下りた先、転がるように地面に降り立つ。そこで顔を上げた。そして、目を瞬く。

そこは本丸だった。夜の本丸だ。慌てて振り向く。しかし、そこにそそり立つのは塀だった。下ってきた筈の、あの藪深い山は、どこに。

『ほ ほ ほたるこい』

ほ ほ やまみちこい』

狼狽える蛍丸。そんな彼の前で、構わずホタルは歌っていた。だから、振り向く。

本丸の一室。暗く、あちこちの部屋の灯りは消えている。だが、その一室の行灯だけ、点っていた。

その部屋の前。池があった。池の畔に佇む、ひとりの女性がいる。今は優しく照る三日月の下、池の水面に映る月影を眺めているらしい。女性とわかったのは、その小柄な体躯もそうだが、何より背中に抱える太刀が、細い体躯にあまりに不釣り合いだったからだ。乱などに背負わせても、あそこまで不釣り合いにはならないだろう。紐で鞆を体に縛り付けた彼女は、長い黒髪を高く括っていた。穿いている袴は男物のようだったが、それでもやはり、女性だった。

この本丸で目覚めさせられて以来、見てきた姿だ。

『ほ ほ ほ ほ ほ ほ ほ』

「……たたいま」

振り向く。がちやり、太刀が背中中で鳴った。刃が傷まないといいが。そんな事を考えながら、視線をやる。

顔よりも先に、目が向かう。その手に握られていたのは、1本のホオズキだった。ホオズキは、ホタルを閉じこめたように、小さく黄色く、光っている。

彼女が、笑んだのだけが、目に入った。

「お帰りなさい。もう、向こうの水を飲もうなんて思っちゃ駄目だよ」

ごつり。鈍い衝撃で目を覚ました。

「ったた」

「いでっ、……あ、蛍丸、起きたか。よかった」

目を瞬く、刹那。ごく間近に審神者の顔があり、少しだけ驚く。だがそれも、直ぐに審神者が体を起こしたので余韻は消えた。スズメの

声が聞こえる。障子から、光が漏れていた。蛍丸は布団の中、まだ身動きがあまり出来ない体で、首だけで左右を見渡す。どうやら、船を漕いでいたらしい審神者の額がぶつかっていたらしい。少し、自身の額も傷んだ。

確か、遠征の帰り。奇襲を受けた。短刀達を庇って応援要請を出させ、迎えが来て——さて、そこからどうしたか。こうして体が動かさない程となると、相当の重傷を受けたのだろう。右手の、体を左右に揺らす程に眠そうな審神者の顔に隈、枕元に自身の本体、左手の障子には、短刀達らしき影がそわそわと蠢いている。どうやら自身は相当危なかったらしい。そして、ふと、右手の感触に気付く。

右手が、冷たいものを握っていた。審神者の手だ。それに、その左手には——

「……主が、呼び戻してくれたんだ」

「今夜が峠、といわれてね。文字通り峠を越えた先にいたからびびったよ」

何でもない様子で、右手を握り返してくる。しかし、その手は冷たく、そして硬かった。よく見ると、朝日の中で、審神者の顔は隈だけでなく色もなかった。何より、審神者が左手に握っているものが気になる。それを見詰めていると、審神者は笑って、漸く手を離れた。そして戯けたように諸手を挙げて肩を竦める。

「ああ、これは大丈夫。ちゃんとあとで何とかしとくから。それより、今日は1日寝てなさいね。しっかし無茶したね、しかも格好付けて。普段はあんな奔放な癖に、怪我した短刀達庇って『足手まといだから逃げて、本丸に応援要請して』なんて単騎で戦ったって？ あんたがそんな気障な事すると思わなかったよ」

「だって、実際、俺ひとりで戦った方が早かったし」

「私達が駆けつけた時点で破壊寸前だった癖に。本気で危なかったんだよ、全く。ま、今度からは大太刀の他に太刀か打刀も随伴させるよ。新しい道も開拓しないとね」

照れくささも混じって唇を尖らせる。左手にそれを持ったままの審神者は、立ち上がると、布団を回って障子へと向かう。そして右手

を振りながら、「あとで短刀達に食事を持ってこさせるから」とだけ言い残し、去った。

その後、直ぐに短刀達が乱入してきたので、蛍丸は指摘し損ねた。「私達」という言葉の意味を。

一晩中点いていたらしい。行灯のあかりが、まだ点っている。

本丸の裏手、片隅。そこで、縁の狩衣に烏帽子を被った青年がいる。薪を積み終えた彼は、足音に気付いて振り返った。

「ああ、待っていたよ主。……大丈夫じゃないようだが」

「おい大将、本当にこれが終わったらあんたも今日は休んでろよ。加州がやってくれるつつつてるし」

「うん、さすがに私もこれ以上は無理だ……」

振り返った石切丸。彼が見たのは、私服の薬研に肩を貸されながら歩く、審神者の姿だ。ここが裏手の為に日当たりが悪いのもあるだろうが、顔色は死人のそれだ。そして、ぶら下がった左手に握られるそれを、強く射貫く。

黄色く染まった、ホオズキだ。

既に火種は入れてある。あとは薪が燃え上がるのを待つだけだ。今日は風がよく乾燥している。炎が上がるのは早かった。そこに、審神者の手からホオズキが放たれた。

刹那、上がるのは短い断末魔。

……そしてまた、静かに爆ぜながら燃えていくそれを、石切丸は祈禱する。無事に、「それ」が天へと登る事を心から願いながら。

背後で、審神者が縁側に座らせられたらしい物音がする。短刀達と比べても小柄な彼女に、薬研が気遣わしげながらも、怪訝そうにいった。

「今のホオズキ、ありやなんだ。あれ、俺が昨日、あんたにいわれたつていって、厚達が持ってたやつだろ。『緑色でも構わないから』つて。何で一晩で黄色に染まってんだ」

「赤くなつてたらちよつとやばかったかなー……それより薬研、あとで石切丸に部屋まで連れてって貰うから、あんたは清光に私が今日休

む事を伝えといて」

「……よくわかんねーけど、わかった。あんたも休めよ、本当に。全く、大将自ら出陣したって訊いてはらはらしたぜ。弟達を助けて貰った恩があんたにもかかるとは」

そういつて、薬研は立ち去る。その足音が聞こえなくなった頃、祈祷は済んだのか。石切丸が不意にいう。

「全く、無茶をするな。貴女は。昨日、1番隊と2番隊にひつついて貴女も太刀を担いで馳せ参じたと聞いた時は度肝を抜かされましたよ」
「だってあの蛍丸が苦戦する相手だよ。しかも倍の戦力がいたみたいだし。ひとりでも太刀が多い方がよかったですよ。あんたはまだ前線には出せないし」

返す言葉に詰まる。つい先日、ここに来たばかりの石切丸は、現在は絶賛練度の上昇に努めている。昨日の蛍丸達遠征部隊への応援に駆けつけられなかったのもその為だ。手合わせでも、彼女の最初の近侍である清光に今のところは敵っていない。この本丸で最高練度を誇るのだから当たり前だが。それにしても、思い出させるのは昨日の事だ。驚いていたのは彼だけでなく、彼女の出陣、そして他の刀剣男士に劣らず太刀をふるう彼女の戦力にあっただろう。

訊けば、あの太刀は、彼女の私室の床の間に飾ってある品物だという。まるで今し方詠えたばかりのような輝きの鞘と刀身だが、実際は嘗ては戦国時代より前に遡る代物だとも訊いている。蛍丸もそうだが、あの矮躯でどうやって太刀をふるったのか。想像もつかなかった。

尤も、こうして「見抜く」事をすれば、その答えは容易に見つかったのだが。溜息混じりに、石切丸はいった。焚き火はまだ燃えている。

「……貴女が歴史修正主義者側でなくてよかったですよ。刀剣男士として顕現していれば、さぞ強力な戦力だっただろうに」

「残念ながら、私を呼び起こした審神者が優秀すぎたの。生前そのままの姿だなんて、私だって想像もしなかったし。それに、こんな、いっつ本当に化けものになるかわからない妖刀を戦力にするよりは、審神

者としての能力を使わせた方がいい。そう考えるのは当然つちや当然だろうね。まあ、昨日みたいな事態は別だけど」

見抜かれた彼女——現在の本来の姿は一振りの太刀、それも妖刀と呼ばれる類の一品である審神者は、こだわりもなく答えた。隠し立てをしているつもりもないらしい。同田貫や清光は特に動揺していなかったとも訊いている。前者は猪突猛進かと思えば客観視の得意な部分もあるし、後者は最初の近侍だ。知っていてもおかしくない。特に後者は、万が一の事態に何かしらの密命を政府から帯びさせられている可能性もあった。出来れば、その「万が一」が起きない事を切に願っているが。まだ、炎は燃えている。そんな彼女に、重ねて問うた。「しかし、なぜ貴女しか蛍丸を連れ戻せないと思ったんだ」

「うん？」

「確かに、他に方法は思いつかないが……魂を呼び戻す、という事ならば、政府に指示をあおぐという事も」

「そっちより、こっちの方が簡単だったからね」

事もなげに、彼女はいった。縁側で寝転ぶ。彼女はいう。

「あのさ。蛍丸の名前の逸話は知ってるでしょ」

「ああ、傷付いた愛刀が、ホタルがそれを直してくれる夢を見たと思ったら本当に直っていた、というものだろう」

「じゃあ、ホタルって、死者の魂ともいわれてるって知ってた」

「――」

途端、怪訝に眉を顰める。そして、彼女の言葉を反芻した。

『生前そのままの姿だなんて』

「唐の時代の詩人、李賀が書いた詩にも出て来るよ。『漆炬迎新人 幽壙螢擾擾』。李賀は、墓の周りを飛び回るホタルの灯りを鬼火に見立てた。鬼火……鬼は死者の事。つまり、死人の魂だ」

「……主」

「あんた達は、飽くまで付喪神。生き死には関係ない。ただ、確実に一度は『人としての死』を迎えている、私なら迎えに行けるだろうと思っ
てね。ホオズキにちよつと力を借りたし、ギリギリのところだったけど、まあ何とかなつたよ」

何とかなった。その台詞の代償のように、彼女の顔色は死人のそれだ。恐らく、一応は付喪神として顕現しているからこそ出来た芸当だろう。妖刀の彼女にお祓いはかえって逆効果だろうか——そんな事を考えていると、「それにしても、誰だったんだろうね」と、審神者が呟いた。

「誰とは」

「嘗ての蛍丸を直してくれた『ホタル』」

いわれて、想像した。嘗ての蛍丸の主の夢。夢の中で、蛍丸がホタルの群れに包まれて直されていく。それ自体はとても、美しい光景だっただろう。しかし、鬼火。死人の魂といわれると——

「……」

「あーあ、まだ煩い。折角閉じこめたんだから、早く成仏してくれないかな」

嘗ては人でありながら、今は妖刀の付喪神となった彼女の耳には、霊刀の石切丸には聞こえない何かが届いているらしい。ものぐさそうに、焚き火を見ていた。黄色かったホオズキが炭になりながら、尚、もがくように火の中で蠢いていた。「そういえば200年前、その李賀の詩が使われてた小説があったなあ。肉食ホタルが日本の東京を襲うっていう」と不謹慎極まりない雑談が、石切丸の渋面を深くさせた。

「それにしても、河原であの子を引き込もうとした『ホタルみたいに黄色い満月の光』は、誰だったのかな」

End.

「堀川国広を審神者から守る会」【ドM審神者＋堀川】

ひと目ぼれでした。審神者は、正座させられた上でそう宣った。最初の近侍の山姥切が、長めの前髪と被ったぼろ布越しにきつく睨んでいる。今にも斬りかかりそうだ。実際、他の刀剣男士やこんのすけに留められなければそうしていただろう。偽物だといわれようと、一応は兄弟のくくりだ。山伏に対して同様、堀川にも情はあるらしい。こんのすけは、絶賛現実逃避をしていた。審神者のサポート兼監視役として、23世紀の政府から審神者や山姥切と共に追従して来て1ヶ月も経たない。しかし、こんのすけ越しの政府の審神者は、猛烈にこの現場から離れたかった。自分が現場にいた時だって、こんな事はなかったのに。

ここの審神者は、特に問題はない。なかったのだ。2000年程前に生まれたブラック企業という言葉。それをもじったブラック本丸というやり方の部隊の運営もしていない。遡れば2000年前、人類が制海権を巡って戦っていた時にもブラック鎮守府という言葉が密かに流行ったという。地獄には超過労働を強いた事への罪に対する部署もあるというから、こればかりは人類が存続している限りなくならない問題なのかも知れない――が、それに類する事もしていない。毎日のように鍛刀でやってくる山姥切に悲鳴を上げる以外では、ごくごく普通の、良心的な審神者だったのだ。これまでは。

「おい、あんた。なら、説明して貰おうか」

「や、山姥切。落ち着いて」

「堀川、被害者のお前が怒るところだろうが！」

「だって……」

今にも切れ味鋭い本体を抜かんばかりの弟分を、堀川が宥める。こんのすけには、この場合の反応は山姥切の方が正しいように思えた。堀川自身は、着任したばかりで現状の把握が出来ていないのだろう。あどけなく整った顔に困惑の色ばかり滲ませながら、それでも打刀の彼を必死におさえている。その中で、審神者はぼつり。性別・年齢をシャツトアウトする特殊な面越しに、呟いた。

「堀川国広くん、だっけ」

「はい、そうですけど」

肯く彼に、審神者はほう、と溜息を吐いた。それは恍惚の吐息だったと、こんのすけは看破してしまった。自身の眼力を、今程呪った事はない。そんなこんのすけの煩悶に構わず、審神者は宣った。

「彼の新撰組副長、土方歳三の脇差し……さすがだなあ」

「おい」

「繰り返すようだけど、ひと目ぼれです。どうか！　どうか私をそのおみ足で踏んでください!!」

「首を差し出せ！」

「ちよ、え、待ってとりあえず山姥切、落ち着いてー!!」

「ま、待て山姥切、それは僕の台詞だ！　あと思いとどまれ!!　何があつた!?!」

土下座する審神者、とうとう抜刀した山姥切、それを羽交い締めにするも膂力の差により負けそうな堀川、堀川に加勢する歌仙——現場は混沌としていた。

こんのすけは、大事な事なでもう1度思った。帰りたい。

その貼り紙を見た時、和泉守は目を瞬いた。着任初日の事である。

「何だこれ」

「あんたには特に組んで貰いたい特殊内番」

横から出てきた者の声に、振り向く。自身と同様に黒髪を伸ばしているが、きちんと括っている。口元のホクロと赤い眼が特徴の青年だ。「あんたとは接触らしい接触はなかったけど、加州清光だよ。池田屋事変までは沖田君の打刀だった」と自ら名乗ってきたので納得した。つまり同じ新撰組の刀剣男士という訳だ。それに領きながら、自身がやってきた本丸の、廊下に作られた掲示板。その1枚を眺める。

内番というものがあるのは、既に把握している。刀剣男士として、政府から分霊として送られてきて、そういった本丸で過ごす為の基礎知識はインプットされていた。だが、自身が知る内番は3種類。馬当番、畑当番、それに手合わせだ。自身が楽しみにしているのは3番目

のものだが、この「堀川国広を守る会」とやらは知らない。というか、恐らく、他の本丸にはない。戸惑いながらそれを示す。堀川国広といえば、自身の相棒だ。何だかんだと、同じ主の元で過ごした大事な仲間だ。そんな彼に、ここだと危険があるらしい。しかも、審神者からここは所謂ブラック本丸なのだろうか、そういった不安が顔に出ていたらしい。加州は頭を振った。

「ああ、うん、大丈夫。あんたは好みじゃないだろうから。というか、多分堀川以外は好みじゃないと思うよ」

「好みって……おい、まさか、この主に国広の奴、ケツ狙われてんのか」

青ざめる。自身の主人が大の女好き、反面、新撰組の中で流行った衆道を好んでいなかった事は知っている。特に土方と付き合いの長かった堀川が、昔彼の元で過ごしていた頃に呆れて笑いながら教えてくれた事だ。その堀川の貞操が危ないのか。直ぐに血の気が上がりそうになるが、かえってきたのは、深い深い溜息だった。肩を竦めて、加州は頭を振る。

「そっちの方がまだマシだったかもね……」

「は」

「おいゴルア主！ 隙見せりやまた何してやがる!!」

途端、右方から聞こえてきたのは怒鳴り声だ。こちらは聞き覚えがある気もする。確か大和守安定、沖田の愛刀の一振りではなかったか。驚いて駆け寄ろうとした自身より速く、加州がそちらへと走り出した。それについていきながら、加州がぼやく。

「あーあ、何で血の気の多いあいつの時に怒らせるかなあ」

「お、おい、何が起きてるんだよ」

戦闘時の自身の事は棚に放り投げて呟く、加州に困惑して問う。括った髪を棚引かせて前方を駆ける彼は、「見ればわかるよ」と、その一室の前で立ち止まった。慌てて自分も踏鞴を踏む。そして見た。障子の開かれたままのその一室、この本丸の主の執務室を。

一期一振に羽交い締めになれながら、刀を振り回そうとしている、同じ新撰組の羽織を羽織った青年。どこか、沖田の面影を感じさせる

彼が大和守なのだろう。先程届いてきた怒鳴り声と同じ声で「ほらほら、これが嬉しいんだろ？ これで満足しろよ！」と、足下に審神者の面隠しした顔の頭を踏みつけている。……面隠しの隙間から見えた頬が赤くほてっていたように見えたのは、和泉守の幻だと思いたかった。だが、彼の幻想は審神者の声で打ち砕かれる。

「悪くない、悪くないけど！ 私が欲しいのは堀川君のおみ足！ 堀川君みたいな上品そうで知的で可愛い子に踏まれたいの!! 堀川君のおみ足に踏まれたいの!! 堀川君、ほら、怖くないからこつち来て私を踏んで!!」

「そ、そつち行ったら安定が余計に怒りますよ……」

「その通りだよ国広、こつち来るな！ 今僕がこの変態被虐趣味審神者の首を落として殺してやるから!!」

「待て、落ち着いてくれ大和守！ ——あ、丁度良かった2人とも！ 審神者を捕縛してくれ!!」

「はいはい」

いいながら、どこから取り出したのか。加州が縄を手に行っている。そして足早に室内に入り込むと、大和守に踏まれていた審神者の両脚を掴んで引つ張る。大根のようだ。目の前の光景の情報処理を、エーテル体で形成された脳が拒否する。慣れた手つきで審神者の体を体育座りさせて縛る彼の縄裁きは捕り物を見ているようだ。その間も「堀川君に縛られたい」と言い続ける審神者を呆然と眺めていた。すると審神者は、漸く和泉守に気付いたらしい。ころりと声を変えた。

「あ、あんたが例の『兼さん』？ よかったね堀川君、相棒が来たよ！」

「か、兼さん！ よかった、やつと来てくれたんだね!!」

「兼さんって、和泉守の方の兼定!? 遅いんだよ！」

まだ興奮しながらも、しつかりと縛られた審神者に安堵したのか。刀を降ろす大和守は、障子の前で呆然と立ちつくしていた和泉守に怒鳴る。一期一振も「ああ、君が例の」と心から安堵した様子だ。駆け寄ってくる相棒は、喜色の他に彼らと同じ安堵を浮かべている。……堀川が目尻に涙が溜まっているのは、こればかりは目の錯覚ではないだろう。自身の袖を掴んで喜ぶ堀川は「よかった、やつと会えた」と

声を震わせていた。

そんな彼らの前で、和泉守は口にする。

「なんだここ。地獄か」

「地獄の方がマシじゃないかな」

「特に主にとつては地獄の方がいいんじゃない、性癖的に」

「地獄の鬼が堀川君みたいな獄卒ばかりだったら天国だね！」

「主……」

縛られ転がされて、尚、畳の上で元気な声を張り上げる。そんな審神者に、一期一振が目頭を押さえた。「以前はこんな方ではなかったのに」とぼやくのが聞こえる。ひとまず、無意識に堀川を自身の背中へとやりながら、和泉守は察した。

とんでもねえところに配属されちゃった。

「マゾヒスト、という言葉をお聞きですか。こここの審神者殿はそういったフェティシズムのようで」

訊きたくなかった言葉。本人、否、本狐も嫌なのだろう。大和守と交代する形で「堀川国広を守る会」の内番を請け負う事になった際、このすけから「ここに着任する刀剣男士には最初に説明する」という前置きをされ、そんな言葉を吐かれた。まぞひすと、ふえち。石切丸が沈痛な面持ちで黙っている。そういえばなぜ彼が共に配属しているのか。目をやれば、「君が太刀だからね」と答えられる。そういえば石切丸は大太刀だ。しかしそれに何の関係があるのか。石切丸と同様の雰囲気、このすけはいつた。

「以前はそういった傾向は……今にして思うとありました、それもあそこまでひどくありませんでした。ですが、堀川殿が着任された瞬間に」

「爆発した、と」

「ご明察。……以来、普段はいいのですが、堀川殿と顔を合わせる度にこれです。最初の時は、こここの審神者殿の最初の近侍であられる山姥切殿が大層怒りまして」

「ああ、あのぼろ布をかぶった……」

いわれて思い出す。自身がやってきた時、「やつと来たか」と山伏と共に呟いていた金髪の男だろう。自身が写しであるという事にひどくコンプレックスを抱いているというが、偽物といわれている堀川に対しても兄弟の情はあるらしい。根暗そうだが実は良い奴なんだな、そんな好印象を抱いたところでふと思い出す。最初の近侍、つまり大抵はその本丸で最も練度が高い刀だ。しかも打刀は実用性が高い。よくあの審神者は今でも健在なものだ。それを問えば「堀川殿と、丁度通り過ぎた歌仙殿が一緒に止めて下さいまして」と答える。なるほど、打刀と脇差しで何とか止めたらしい。そしてふと、そういえば「堀川（略）会」の内番。先程は大和守と一期一振だったという。前者はわかる、同じ新撰組の刀剣男士だ。しかし、後者は全く関係のない、時代も異なる刀だ。そしてふと、共通項に気付く。

今、自身が組んでいる石切丸は大太刀だ。自身より膂力が強い。大和守と一期一振も、打刀と太刀だ。そして、どちらも堀川と直接関係がない。こんのすけは吐息混じりにいった。

「この特殊内番は山姥切殿が提案されたものでして。片方は自分達国広兄弟か、新撰組の刀剣男士。片方は自分達より強い且つ冷静な刀剣男士で組もう、と。さすがに審神者殿を斬り殺す訳にいかないという事で」

「国広にあんな風に迫る審神者にか」

「普段は本当に良心的な方なんですよ……本当に」

こんのすけが前足で顔を覆う。石切丸も同様の仕種だ。……どうやら、日頃との落差がひどいらしい。確かに、あの自身への毒気のない呼びかけを思うと、普段は「良い奴」なのだろう。堀川に対しての執着以外では。和泉守も額を押さえる。

確かに、あの審神者の妄言通り、見目がよいのは認める。和泉守と比べると大人しそうだ。見ようによっては品もあるように見えるし、血の気の多い和泉守や、他の新撰組の刀剣男士に比べれば温厚な方だろう。但し、戦闘時以外は——既に共に出陣を終えた上での感想である。審神者に対しても強く出られないだろう。頭が痛い。人の身体を得る事が苦痛も伴うとは。そんな事を思いながら、ふと顔を上げ

る。毛繕いをしていたこんのすけに、和泉守はふと問うた。

「でも、何で国広……堀川なんだ。もつとやってくれ、つていえば積極的に踏んでくれる奴だっているだろうに。みんな見てくれもいいだろ、俺みたいに」

「最後のひと言は余計でしたね」

「うーん、私も大概色んなものを祓ってきたけど……主の場合は、抑圧されたものを無意識に発散しようとしてあんな行動に出ているんだと思うよ」

顎に手を添える、石切丸がいう。怪訝そうな和泉守に、「主殿の生まれる200年ぐらい前からその傾向があったらしいけどね」と彼は説明する。

「たとえば、今の日本人男性は『さらりーまん』と呼ばれる仕事に就いているものがほとんどだ。雇われ人だね。これにも色々あるんだが……特に家庭持ちの場合、上からも下からも突き上げられ、身も心もがちがちだ。こうなると、ただのお祓いじゃ効かない。いきなり不意を突いて上から叩き潰すぐらいじゃないと、この固まったものというのは崩れないんだよ」

「……つまり、ここの主にとっては国広がそうだと」

「ここの審神者殿は、本当に普段は良心的で頑張りすぎるところがありますから。出来るだけ私も政府に交渉しているんですが……」

暗に、上から圧力がかかっている事を仄めかす。それに、和泉守は顔を顰めた。

腐るのは、末端からではない。いつも中枢からだ。ブラック本丸と呼ばれるところが存在するのは、それを看過している「上」がいるからだ。ここで短刀達の笑い声が響いているのも、偏に審神者が「それ」を耐えているから。事実上、下の者となる自分達にとっては良き主だ。しかし、どこかで息を抜かないと、崩れてしまう——その矢先に、現れたのが堀川だった。

「端的に言えば、本当にひたすら『好み』だったんでしようね」

とは、こんのすけの談だ。よく訊くと女性らしいその声は、溜息を溢した。

「好みの『上司』、自分にとって理想の主。自分を抑圧するものを全部突き崩してくれそうで、何もかもを放り投げて身を任せたくなる。そういう『好み』だったんでしょね。その表現方法が実にアレな訳ですが」

「国広、とばっちりじゃねーか……」

「堀川も、それをわかっていて強く出られない、というのもあるんだろ
うね。何せ『お手伝いなら任せて』が口癖だ。主の事をよく理解して
しまっただろうねえ……」

しみじみと溜息をつきあう、その様は何度も繰り返されたものなの
だろう。和泉守が心中で思いつくのは、堀川と、そして嘗ての主の事
だ。彼の人も「新撰組副長」という立場の重圧があっただろう。堀川
は、今でこそヒトの形を得ているが、それでも彼を助けてやる事は出
来なかった。その悔しさもあるだろう。中間管理職というのはいつ
の世も胃を痛めるものらしい。和泉守はどちらに同情の天秤を傾け
させたものか判断に迷いかけた。

「か、兼さーん!!」

だがしかし、相棒の悲鳴を聞いて天秤はあっさり堀川へ傾いた。す
ぐさま立ち上がる。

「国広?! どうしたー!!」

「ま、待て和泉守!」

部屋を飛び出し、縁側を駆け出す。その和泉守を追いかける石切
丸。あっさりと2人に置いていかれたこんのすけは、埃が立つ中、ぽ
つりと呟いた。

「ぶっちゃけ、堀川殿が『サディスト』になってくれれば、1番なん
ですかね」

こんのすけの目に浮かぶようだ。あんなに悲痛な悲鳴を上げる時
は、大抵はたったひとり審神者に迫られている時だ。そして今頃、
恐らくは興奮した審神者に足にしがみつかれてすり寄られているに
違いない。谷崎潤一郎氏の小説の作風の特徴に、女性への脚への執着
が見られる事は有名だ。恐らく、ここの審神者の性癖はあれに近いの
だろう。「ウチの国広に舐めた真似してくれたなあ!!」とちんぴら裸

足の怒鳴り声が聞こえてきたので、その予測は正しかったらしい。こののすけは泣きつく堀川と、刀を振り回しているだろう和泉守を必死で止めているだろう石切丸の様子を想像しながら、大事な事なので再び思った。

帰りたい。23世紀に帰りたい。だが今のこのすけには、あまりにあえかだった。

「ちなみにこの内番で上がるのは」

「目に見えない結束……かなあ」

End.

【実録】 昨日、姉が備前国の審神者に着任しました。

■姉が新しいゲームをやりたいと言い出した

それまでダウンロードゲーム（やりこみ型）派だった光忠が、ある朝唐突に言い出した。

「今までやってたゲームもいい加減飽きてきてさ」

（俺の記憶だと数年単位でやりこんでたと思っただからそれも当然だと思うが）

台所で冷蔵庫を開きながら、傍らでジュースをグラスに注いでいる光忠に大俱利伽羅はそんな事を思う。光忠がそれまで嵌っていたゲームは所謂牧場ゲームに近いフリーゲームで、終わりというものはない上にカンストらしいカンストもとつくにしていた。ゲーム中の暦は、365日を1年に概算すれば既に10年は経過していた筈だ。それを少し前にリセットして再び一からやり直していたらしいが、それを何回も繰り返していたのだから飽きるのは当然だろう。そんな事をぼんやりした頭で考えていると、光忠は言い出した。

「それで、今話題のとうらぶとか艦これとかやってみようと思ってるんだよね」

「艦これがお勧めだぞ」

審神者仲間はいても、提督仲間は身近に少ない。友人以外では父方の従兄の御手杵ぐらいしかいないのだ。即座に勧めたのはそちらだ。だが光忠は、きよとりと首を傾げる。

「簡単な方はどっち？」

「……とうらぶの方が。いやでも、登録できる機会の多さは今のところ艦これの方が……とうらぶは1ヶ月に1回のペースだぞ。艦これは今日は丁度サーバーの開放日だったし」

「とうらぶは？」

「この間開放していたから、次はいつかわからんぞ。それに艦これの方はだな、——」

「ふーん」

「……」

艦これプレイヤー仲間を増やすべく、キャンペーンを勧める。だが光忠の関心はどうやら明らかにとらぶの方に向いていた。聴かれるままにとらぶの特徴も述べるが、終いには私の眠気の限界も来たので自室に引き取った。

「くりちゃん！ 備前国に登録出来たよ！」

起床後、明るい笑顔で光忠は言い放った。とらぶも丁度サーバーの開放中だったらしい。刀剣乱舞最初のサーバー、「備前国」に光忠は着任した。

大俱利伽羅提督、艦これプレイヤー仲間の増産失敗

「提督仲間増やしたかったのに……」

「艦これも気が向いたらやるよ」

■姉、チュートリアルをこなす

「で、初期刀は誰にしたんだ」

母の仏壇に線香を上げながら問えば、「まんば君にしたよ。くりちゃんは」と明快な答えと質問が返ってくる。友人にも山姥切を初期刀に選んでいる者が多かった気がする。初見ホイホイなのだろうか。「俺は加州にした。取っつきやすそうだったし」と答えながらも思っている、新しいゲームをはじめて楽しいらしい。機嫌の良い光忠が鍛刀で薬研と乱を出したいという話をしてくる。学校から帰ってきた子供の話を聞く気分になりながらも、大俱利伽羅はふと、つぶやいた。「……で、いきなり単騎で出陣させてくるこんのすけは鬼畜だったろう」

「ああ、うん、あれは驚いたよ。でも、こんちゃんってあれ以降あんまり出て来ないね」

「意外と出ないぞ。検非違使が来る時ぐらいだな。ああ、検非違使には気を付けろよ。周回していると来るからな」

「まあ初日だし出ないでしょ」

そんな話を和気藹々とする。何だかんだと同じゲームをプレイす

るのはそういうえば久しぶりだ。そんな事を思いながら食事の支度をはじめた。

お互いジャンルがかぶるようでかぶらないので、こういうのは珍しいです

「藤四郎兄弟が一期君と平野君と厚君以外揃ったよ」

「早いな！」

■姉、刀剣男士を鍛える

今夜はオムライスだ。付け合わせは取り合わせを考えるのが面倒だから、野菜室に入っていた菜っ葉を塩ゆでにしよう。そんな事を考えながら夕食の支度をしていた時、自室から降りてきた光忠が深刻そうな顔をしていった。

「太刀や脇差が出ないよ、くりちゃん」

「脇差は三面ぐらいに行けばぼろぼろ落ちてくるから拾え」

米を研ぎながら答える。話を聞けば、今のところ維新の記憶にいらしい。初日では妥当だろう。だが、光忠は憤懣やるかたないという様子で話を続けた。

「それに歌仙君！ 彼、文系ゴリラなんていわれてるのに今のところただの文系なんだけど！ 全然ゴリラじゃないよ?!」

「それは風評被害だからな。歌仙も鍛えれば強くなるぞ」

どうやら「文系ゴリラ」という評判に何かを期待していたらしい。大俱利伽羅の本丸の歌仙は練度がそこそこの為、それなりに活躍してくれている。その旨を伝えると、「わかっているよ」と光忠はふくれる。「今のところ元禄まではクリアしたんだけどさ、歌仙君がまだ練度が低いから鍛えまくってるよ」

「おいもう二面まで行ってるんじゃないか。何でまだ一面にいる」

「だって全部のマスを踏まないとかか気持ち悪いじゃないか！ どうせなら全部のマスを踏んでから次の戦域に行きたいんだよ！ それに出来るだけ練度を揃えて鍛えたいし！」

研ぎ終えた米を引き揚げながら、光忠の変な方面に発揮された完璧

主義に呆れる。しかし、ふと、自らを振り返った。

……そういえば、俺もレベルの低い順から鍛えていつているな。艦これでもとうらぶでも。特に艦これだと、たとえ改二があっても特別育成する事も少ない。

「……とりあえず、周回のしすぎに気を付けろよ。検非違使が出る」「わかってるよ!」

妙なところで血の繋がりを覚えながら、冷蔵庫から卵を取り出した。先日、うっかり賞味期限を10日程過ぎた卵をチ●ンラーメンに放り込み、艦これの春イベントの数日を空費した苦い思い出があったので、しつかり賞味期限は確認した。

風評被害その1。個人的に歌仙さんが文系ゴリラっていわれちゃうのは「首を差し出せ」とか「攻め口を教えてください」とかいつちやうところだと思ってます。

兄弟姉妹って変なところで似ますね。ウチの鎮守府では時雨は改二ですが夕立はまだ改のままです。あと内科の先生には「味で気付かなかったのか」といわれました。チキ●ラーメンって味が濃いですよね（目を逸らしつつ）

「chapter：■姉、先達の教えを受ける?」

「いいか。錬結は大事だ。だが、いかせん刀剣男士は数が少ない。錬結は上限がある上に、うっかりするとデイリー任務がこなせなくなる。だから錬結のしすぎには気を付けろ」

「ふんふん」

「それに進軍の仕方には気を付けろ。うっかり重傷のまま進軍してしまった場合は、次のマスの前にブラウザを消せ。艦これでも同じだ」「ふんふん」

「それに万が一検非違使と対峙する危険性がある時には、練度30未満で揃えろ。刀装がないだけ随分楽だ。30を超えると刀装がくつついてくる」

「よくわかったよ」

「依頼札と手伝い札もマメに集めておけよ。気がつくともなくなっているからな」

「少なくとも手伝い札は使わないようにしてるけど、わかった」

「ちなみに、今のは俺の体験談だ。気を付けろ」

「よくわかったよ！」

1 番目は今現在我が本丸と我が鎮守府で発生している事態です（・ω・） 近代化改修と錬結の限界がそろそろ…… あと進軍は艦これで1回やらかしそうになりブラウザを消したらなんとかなりましたが、とうらぶの方にも通じるかはわかりませんのでくれぐれもご注意を。KBCレベル30未満の刀装なしは定着したようですね？ うちにはもう今のところ30未満が5振りしかいないので残りの未実装刀剣男士が来てくれないと出来ないんですよねー

■姉、はじめての脇差を拾う

自室の扉が叩かれる。自分の部隊の遠征ボタンをクリックしながら返事をする、興奮気味の光忠が飼い猫を片手にいった。

「あ、青江君が来たよ！」

「よかったな。はじめての脇差だろ」

「吃驚したよ、くりちゃんが三面で脇差が来るっていつていたから」

猫が大俱利伽羅の部屋に入らないように宥めながら語る光忠に、第2艦隊を遠征に向かわせながら相槌を打つ。そんな適当な返事でも構わず、光忠はいった。

「いきなり青江君が来たから、本気で幽霊かと思ったよ！」

「青江は霊刀だぞ」

その後、もう一振り青江が来て「呪いか何かかな」と呟いていた。ひどいいわれようである。

風評被害その2。

青江は物言いはちよつとアレだけど良い子だから……

■姉、フラグを回収する

夜の10時。常は早寝早起きの光忠の部屋の灯りがまだ点っている。刀剣乱舞をはじめたばかりだ。面白くて仕方ないのだろう。そう思いながらまだまだ夜更かしする気の大俱利伽羅が階段を下りた時、それを追うように扉が開く音がした。振り返らずに降り続ければ、光忠は深刻そうな声でつぶやいた。

「どうしよう、くりちゃん。検非違使が出た」

「周回してたからだろ」

「しかも2回連続」

「よくあるぞ」

いわんこっちなやない。周回しているからだ。初日で出すとは器用な奴だ。階段を下りてスリッパを履けば、光忠は真面目な顔で宣った。

「青江君の呪いかな……肩が痛いのも含めて」

「お前は青江を何だと思っている。有難い霊刀だぞ。あと肩が痛いのはゲームのやり過ぎだ、今日は寝ろ」

まあやらかす気はしてました。

初日でKBCを出しよった(ちなみに1-4) 新人審神者・姉のこれからにご期待ください！

御手杵は刀劍勇士である【ブラック本丸（引継済）】

え、ああ、うん。そうだよ。俺が前のここの主を殺したんだ。この槍で、首を刺したよ。検屍報告は政府にも行っただよ。

……そんなに怖がらなくてもいいって。あんたは普通にこの部隊を運営してくれる気なんだろ。他の奴らはまだあんたら政府関係者を警戒してんだろうけど、俺は期待してるからな。困った事があつたらいいよ。何なら助けてやるし。

え、何で主を殺した俺がここにいいのかって。そりゃ、あんたらが決めた事だろ。俺ら刀劍勇士は神だ。人権がない。権利もなければ刑法も適用されないって。こんのすげがいつてたぞ。——ああ、でも大概、主を殺しまう奴は精神的に駄目になつている場合が多いんだっけ。んー、俺は自分でいうのもなんだけど、多分刀劍勇士として運用するには十分な精神状態なんじゃないか。飯は食えるし、あんたが手入れしてくれたお陰で全快だ。今すぐ出陣だつて出来るぞ。ああ、でもまだ他の連中が回復してないな。最低6振り揃わなきゃまともな戦闘も出来やしない。ま、それぐらいは待つてるよ。

……何でつて。何が。ああ、殺した理由。そりゃ、決まってるだろ。前の主が、まともな運営をしなかつたからだよ。見ただろ、この部隊の惨状。俺一振りじゃ出来ない真似を出来る筈の刀劍勇士までロボ口だ。俺は装備を無視して相手を貫けるけど、岩融や大太刀みたいに攻撃範囲は広くない。夜戦には滅法弱いのに、短刀のちびどもは残ってる奴の方が少ないと来た。打刀の連中もひどいもんだ。1部の偏った連中ばかり愛でていた。

全く、まともな戦闘つてもんを知らない主だつたよ。だから殺したんだ。

……余所の俺は、あー、なんだっけ。所謂「ブラック本丸」か。そういうのに割と順応するみたいだな。まあ、俺も最初はその口だったよ。だつて、そうだよ。主がどんな人間だろうと、俺達は「物」だ。どいう扱いを受けようと、そんなの主次第だろ。「物」つてのは存在かからしてあんたらと違って受動的なものなんだ。本来はな。はじめの

頃は、そう思いながら過ごしてた。平気だったよ。他の刀剣達の悲鳴や泣き声が聞こえてくる事もあったし、俺も殴られた事がある。凶体が気に入らないってな。けど、俺は気にならなかった。そんなもんだと思ってるな。

でも、それも俺がただの「物」だった頃の話だ。今は、ほら。こんな体があるだろう。あんたらと同じ形、「ヒト」の形だ。嘗て俺達刀剣を扱っていた、人間と同じ形をしている。

この形ってさ、疲れるんだよな。疲れるって、苦しいし、つらいんだな。ただの槍だった頃は知らなかったけど、ヒトって消耗するし、不慣れた体してるな。終いには自分自身の、この長い槍すらふるう事もままならないって事もあった。そこではじめて、俺は今の事態に気付いた。疲れたら、俺達は休んで手入れをして貰わなきゃ、いけない。だって、動けなくなったらおしまいだ。

だってそうだろう。俺達は戦う為にここにいるんだ。その動きが鈍るような事があっちゃいけない。歴史修正主義者だろうが検非違使だろうが、とにかく戦う為にいるんだから。

繰り返すけど、俺は主はどんなだってよかったんだ。戦う事を妨げる事さえしなけりゃな。だから、俺の体にいい加減限界が来た時、手入れを申し出たんだよ。だって、そうだろう。その時の俺はあちこちぼろぼろで、何ていうんだっけ。「痛い」「疲れた」「眠い」ってひどい状態で、戦に出ても全然まともに武功を上げられなかったんだ。だから、前の主に申し出たんだ。

3回。そう、3回だ。仏の顔、っていう言葉があるだろう。3回いつでも、前の主は手入れをさせてくれなかったんだ。その間、俺は敗北続きだったよ。

だから殺したんだ。こう、ぶつすり刺してな。暫く手入れしてなかったから、なまくら気味でな。腕力で無理矢理射し込んだよ。俺は突く事しかできないのになあ。

……わかるだろ。戦がわからない主だった。だから殺したんだ。だって、そうだろう。ここにいて以上、俺達もあんたらも、戦う為にいる。それなのに、前の主は、俺達を「道具」としてすら使えなかった

んだ。忘れてないか。俺達「付喪神」は、まともに使われなかった道具が化けて出るのが本来だ。

武器として戦えない自分に意味はない。でもここにいる以上、刀剣男士っていうのは戦う為の道具だろ。その為の手入れを怠る主は、果たして主に相応しいのか。その答えが「否」だった。だから、殺したんだ。

……ああ、長谷部は怒鳴り散らしていたな。俺はそれまでは最も従順な刀剣の一振りって思われていたから。まさか、目の前の主を殺すと思わなかったんだろうな。でも、これをいつて聴かせたら納得してくれたみたいだ。今の主のあんたにも良くしてくれてるみたいだし。あいつは良い刀だ。味方につけておいて損はないぞ。

? どうしたんだよ、顔色が悪いな。飯は食ったか。あんたと燭台切達を作ってくれた飯、旨かったぞ。あんた自身もちやんと喰って貰わないと困るぞ。ちゃんと喰って、それで、ちゃんと戦の采配してくれ。俺達を十全に扱ってくれよ。俺達は戦う為にここにいるんだから。そうそう、手入れは怠るなよ。ちよつとの傷なら錆のうちに入らないが、それでも定期的にはしてくれないと戦えないからな。

ああ、それにしても残念だったよ。前の主も、「主」には相応しくなかった。戦には向かない奴だった。……あんたは、違うよな。——あーよかった。政府も、俺がちやんと「戦える」から現場に置いておいてくれたし、あんたもそういつてくれると思っていたよ。……さて。

今度こそは、出番かな。

御手杵は刀剣男士である

「あの槍に無闇に近付いてはなりません、新しき主」

「あの槍は、感情というものに今なお無縁なのです」

「……本音をいえば、俺もまだ、貴方を信じている訳ではありません。しかし、同じ事を繰り返してはならない。そう思っています。だから、敢えていいいます。あの槍に、簡単に心を許してはなりません」

「武器として論理的に考えて、論理的に主を■す。ここの御手杵とは、

そういう付喪神なのです」

End.

【どうらぶホラー】くりちやんと僕【現代パラレル】

序論

くりちちゃんこと大俱利伽羅は僕の弟だ。とはいっても、ちゃんとした「兄弟」になれたのは、僕が小学校に上がってからの話だ。それまでは、僕は水戸の祖父母の元で暮らしていた。

くりちちゃんが1才の頃までは一緒に暮らしていたし、彼を乗せたベビーカーが強風で吹っ飛んだのを慌てて走って捕まえに行つた幼い記憶もある。僕が4才の頃、水戸の祖父母が引越しの手伝いにやって来た際、「兄の方の世話を見る」と僕を引き取り、そのまま娘夫婦の元に返さなかつたそうだ。比較的近所に住んでいた両親は、何度も僕を迎えに来ては追い返され、その度に母と祖母が怒鳴り合っていたらしい。らしい、というのは、そういう時は決まって祖父に奥の部屋にいるように言いつけられていたからだ。くりちちゃんが今の性格になつたのも、この時の母と祖母の怒鳴り合いを見せつけられた為だと、僕は推察している。関心は自分ではなく兄の光忠にあり、他者に口を挟ませぬ怒鳴り合いは大俱利伽羅の口を閉ざさせたのだろう。それに触れる度に、第一子であつたがゆえの優越感と、それを大きく凌駕する罪悪感が起きる。祖父母は比較的聞き分けの良い、上の子の僕の方がかわいく、当時は大人しくなかつた上にまだ1才のくりちちゃんは手間がかかるから、と僕を連れて行ったのだった。「初孫が生まれるまではまともな人達だった」と、両親が寂しそうに呟いていたのを聞いた事がある。

結局、僕が今の家に帰つてこられたのは、僕自身が帰りたと言いつ出したからだ。幼さゆえに順応していた環境も、成長すれば違和感を覚える。偶にやって来る、同じ色の目をした浅黒い肌の男の子は弟だという事。なぜ両親がいるのに、自身は祖父母の元にいるのか。それらに疑問を覚えられるようになって、祖父母に訴えた結果、僕はあっさりこの家に帰つてこられた。当時の住まいは公務員官舎だった。父が公務員だからだ。その官舎は二階建てのアパートのような造りで、そして全体的に古びていた。風呂と母屋が離れていたし、隣には

保健所があった。毎週木曜日には殺されていく犬猫の声が聞こえる
と、母がいつていた。僕もくりちゃんも、それは1度も聞こえた事が
ないのだけれど。母は、くりちゃんを生んだだけはある、少々人と異
なるものの聞こえ方がしているようだった。

元より田舎である。自然の一部に溶け込んでいたその官舎は、あま
り入居者がいなかった。その為に僕が帰ってきたそれなりにすぐあ
とにその官舎は保健所の駐車場として取り壊される事になる。僕の
記憶では、僕と隣に住む同じ公務員の夫妻しか人がなかった。だか
ら親元に帰ってきて、新しく家を建てて引っ越すまでの間、弟のくり
ちゃんと庭で遊んでいた。庭とはいっても、官舎の敷地のほとんどが
それで、少しだけ坂を下りると、水の綺麗な川まであった。大きな栗
の木もあり、秋になれば隣の夫妻と共に栗を取っていた。「毎年取っ
ていた」とは、僕がはじめてそれに参加した時、母が栗を塩水につけ
る横で大俱利伽羅が吠いた事だった。ドクダミが生い茂りその匂い
が強烈で、野バラが咲き乱れているのを眺めた事もあった。夏に大き
な蜂の巣が出来て、父がその駆除の為に自分達子供に家に入ってい
るように言いつけられた時は、2人で家の中で遊んでいた。リビング
から庭に降りると、母が洗濯物を干していた。狭い官舎といえど、ほ
とんど入居者がいないそこは塀が低く、吹きさらしだった。駐車ス
ペースとして確保された区域は草木が生い茂り、ライラックやあじさ
いなどの色鮮やかな花を咲かせ、スモモが実を付けた。くりちゃんが
枝を片手に「蜜が吸える花」を教えてくれたのもこの時だった。

そして事実上子供の天下だったその庭で、幼いながらもふと、くり
ちゃんはその王様だったのだと気付いた。近所に子供は住んでい
ない。幼稚園から中学までエスカレーター式の同じ学校に通ってい
た僕ら。校区がとても広く、電車やバスで学校に通う児童や生徒は数
多かった。だからこの辺りの子供といえば、僕がいない間はくりちゃ
んひとりだったのだ。くりちゃんにとって、長い事「ひとり」は当た
り前の話だった。何せ、時に顔を合わせられた僕の事を、長い事「従
兄のひとり」だと思っていたぐらいだった。兄がいる事も、彼の記憶
に薄かったのだ。事実上のひとりっ子として、くりちゃんはひとり遊

びに長けてしまっていた。近くの寂れた稲荷神社や、フェンスの向こうは病院の敷地だという川のせせらぎ。夏場はひんやりとして涼しいわき水の名所、少し脚を伸ばせば五重塔を構えた神仏習合の名残が強い神社も見える。城下町で、主家は関ヶ原にて直ぐに東軍に下りながら幕末には真つ先に新政府に下った地元は、その為なのか城跡などが根強く残っていた。官舎を出て真つ直ぐ行けば、くりちゃんのかかりつけだという、無愛想だが腕の確かな歯医者さんと、歯医者さんとは全く会話しないのに治療には全く支障を来さない歯科衛生士さんが働いていた。漆喰の土蔵や、1度火事が起きた事があるという消防署があった。ちなみに火元は寝たばこだったという。そういった些細な話も、くりちゃんはほつりほつりと、僕に話して聴かせてくれた。子供同士の話し相手に飢えていたのだろう。気がつけば庭で草木と戯れていたくりちゃんは、幼稚園でもあまり友達がいなかったらしい。幼稚園の広い校庭でよくひとり遊びをしていたそう。変なところに入り込むくりちゃんを、同じように猫のように変なところに潜り込みたがる子供が偶々話すという事はよくあつたらしいが、それも年を追う毎に減っていった。それをくりちゃんは特別寂しいとは思っていないかったという。

「それが当たり前だしな」

寂しそうでもかなしそうでも、ましてや拗ねた様子すらない。それがごく当然というように、くりちゃんはいった。

成人したあとに、くりちゃんはいった。「あの頃の自分は、母親と祖母の怒鳴り合いや遊び相手のいない環境を当たり前だと思ひこむ事でやり過ごしていた」と。その自覚も、大人になってからやつとだったという。

しかし、僕の見解は少々異なつた。あの頃のくりちゃんにとって、周りの全ては当然のものであり、特別に変化を与える事も与えられる事もないものだった。彼自身もまた、周りの現象の一部となつていった。

だから、引越してからくりちゃんは、大きく環境が変わつた事で、その変化を体現しているようだった。「まるで引越しについて

きて家に慣れない猫だ」と母が評していたのも覚えている。

もし妖精がいたら、くりちゃんはあの境界の曖昧な庭の片隅で、フェアリーサークルを潜っていたかも知れない。

くりちゃんは、人とは違うものを感じ取っているようだった。

屋根裏つてあるの？

そもそも、家を建てたのは水戸の祖母からの命令に近かつたらしい。古い官舎は入居者が少なく、上層部から引越すように以前からいわれていた事が祖母に漏れた。近所にマンションもあつたのだが、当時はまだ「マイホーム主義」の名残があつた頃だ。ろくに近所の事情も調べずに、スーパーやバス停、何より子供達の学校が近い住宅地の一角を買い取つた。当初は家を建てる事を渋つていた両親だったが、自分達兄弟を浮き足立たせた。自分達の家、というのは有名なアニメ映画を彷彿とさせたのだ。たとえ近所の子供に「お前んち、お化け屋敷！」と罵られようと、豪雪地帯に住んでかまくらを作つていた僕達にとって、自分達だけの住処というのは心躍るものだった。両親にとつても、子供達の嬉しそうな様子が決め手だつたらしい。有名な建築会社に頼み、「出来るならいい家を」と35年ローンを組んで立てた。それが現在の、3LDKの実家だ。

引越してきた当初はひとつの部屋が両親の部屋、ひとつの部屋が自分達兄弟の部屋。そして残りの一部屋が書斎兼勉強部屋として宛がわれていた。祖母がプレゼントしてくれる形で、僕はベッド。くりちゃんは官舎時代から持つてきた布団で、同じ部屋で寝ていた。それまでは両親と4人並んで寝ていたのだけれど、古い考えだつた祖母は「子供といつまでも一緒に寝ているものではない」といつたらしい。どこかそれを寂しがりながらも、隣の布団に潜り込むくりちゃんを、僕は宥めるようにベッドから見下ろしていた。当時はまだ真つ暗にして眠れなかつたくりちゃんの為に、常夜灯を点けながらも「おやすみ」といった。くりちゃんは昼間は気がつくことやひとり遊び回っていた為か、寝付きが良く、布団に入ると直ぐに寝入つてしまつ

た。だから、この頃は気付かなかった。

異変に気付いたのは、僕とくりちゃんの部屋が離されてからの事だ。

引越後、もうひとつのベッドを買う余裕が出来た。だからそれまで僕が使っていたベッドがくりちゃんに譲渡され、僕は書斎兼勉強部屋だった部屋を自室として宛がわれた。まだ7才か8才だったくりちゃんをひとりで部屋に寝かせるのは不憫と感じた覚えもある。しかし、母は負けん気が強くとも、どこか祖母、自分の母親に弱い一面を持っていた。扉は開け放したままにしておく事だけは厳命して、僕達兄弟はめでたくひとり部屋を宛がわれる事になった。僕はといえば、祖父母の元にいた時はベッドを買い与えられており、祖母と一緒に寝る事には慣れていた。しかし本当のひとり寝はこの時がはじめてで、当時は寝付きが悪かった覚えがある。一方、昼間にひとりでも遊び回り、近所を探検する無表情でアグレッシブなくりちゃんは、寂しがりはしても寝付き自体は良かったらしい。毎朝、熟睡した様子で起きてきていた。

けれど、僕はある事が気になっていた。

それは学校帰り。当時は同じ小学校に通っていたといえど、下校時間が異なる事が多かった。なので、家に帰った時に「くりちゃんなら2階だよ」といわれたりする事は多かった。偶に逆の事もあったが、これはランドセルを放り出してひとりで近所の探検に出ていた時の事である。引越してきた当初は居心地が悪そうだった事にも加え、「大俱利伽羅は猫のようだ」というのも納得のいくマイペースだった。けれどその日も、自室に引き取ると、「それ」はくりちゃんの部屋から聞こえてきた。耐えかねて、僕はくりちゃんの部屋に入った。くりちゃんは、部屋にひとりだった。くりちゃんは不思議そうに、僕を見上げている。宿題をやっているようだった。

「どうしたんだ、光忠」

離れていた頃の暮らしの名残だ。中々自身を兄と呼ぶ事のないくりちゃんは、小首を傾げながら僕を見上げていた。僕は直ぐに答えず、周りを見渡す。あまり整理整頓の上手でなくくりちゃんは、それ

でも見栄っ張りのところが有り、人が来れば急いで片付けをする。しかし、この時もくりちゃんの周りは雑然としていた。ベッドすら整頓した様子がない。何より、お菓子やジュースの類もなかった。この頃は母に食べ物の持ち込みを禁じられていたのだからそれは当たり前といえは当たり前前だったが――僕は思いきつて、くりちゃんに尋ねた。

「くりちゃん。今、誰か友達が来てたのかな。もしくは独り言、喋ってた」

「俺しかいないぞ。それに、俺の自覚してる限りじゃそんな事はしてない」

何を当然。そういわんばかりの態度に、僕は台所の母の元へ取って返したのだった。

ならば、あの話し声はなんだったというのだ。昼夜を問わずに、漏れ聞こえていたあの囁き声は。確かに、あれらは子供の声だったのだ。

それを母に訴えると、母は深刻そうな顔で肩を竦めたのだった。

「今にはじまった話じゃないんだよね」

そういいながら、母は白い皿と杯を棚から取り出していった。

その後、母はくりちゃんの部屋の棚に、杯と皿を置くようにした。僕の部屋にも同じものを用意した。動かさないように、といわれたそのれの中身は、どうやら塩と酒らしかった。

それからぱたりと、くりちゃんの部屋から漏れ聞こえる声はなくなった。

但し、くりちゃんは後日、無表情で無邪気な様子で、こんな事を尋ねてきた。

「なあ、天井裏に小人がいるよな。毎晩、足音が聞こえるぞ。小さい小さい、足音がたくさんだ」

はて、この家に天井裏があっただろうか。父に問うと、困った様子で答えた。

「活用できる程のスペースはないし、精々点検口があるぐらいだ。それに新築だから、鼠が入るには少し早いな」

尚、押し入れを隔てた隣の部屋の僕には、その足音は聞こえない。長じてからは「そういえば昔は聞こえていたな」と答えられた。正体はなんだったのか、いまだ不明だ。

祖父母の元にいた頃、そして官舎に住んでいた頃は無縁だった話は、こうしてくりちゃんを通して聞かされる事になっていく。

スーツのおじさん

先述の通り、父は公務員である。常にスーツであり、クールビズやウォームビズという概念のなかった頃だった為、父は年がら年中スーツだった。夏場は半袖のワイシャツだったが、ネクタイは必ず締めていた。「公務員として当然だ」と言う父はまさしく社畜の鑑だった。実際、丸首のTシャツが全く似合わない人であったし、最低限カラーのついたものでないとかく似合わない人だった。制服しか似合わない人間というものはいるものである。そんな父だったが、休日はそれでも私服だった。専業主婦だった母が父のワイシャツを洗ってやり、アイロンをかける。それが在りし日の日常だった。

忙しい父の為に、玄関先のコートかけは充実していた。鏡とハンガーかけが一体化した家具が常に置かれていた。自分達兄弟も時にそれを見ていた。この頃から身形を気にしていた僕は、くりちゃんよりも長い時間よく見ては、母に「遅刻するよ」と黒いランドセルを背負わされたものだった。当時はまだカラーリングの表だった自由化がされていなかった頃だった。衣服が並ぶそれは当時の自分達よりも頭ひとつ以上高かった。

そんなある日の事だった。自室で宿題をしていた僕が見たのは、溜息混じりに歩いていく母の姿だった。くりちゃんと同様に扉を開け放していたから見えたので、僕が声を掛けると、母は苦笑して腕を振り回していた。

「ちよつとね。くりちゃん曰く、『知らないおじさん』が入り込んだらしくて」

「えっ」

それは侵入者では。驚く僕に構わず、母は夫婦の部屋に入っていたかと思うと、直ぐに降りていった。そういえば、くりちゃんは先程帰ってきたばかりだった。「ただいま」という静かな声が、吹き抜けの階段を超えて届いていたので、部屋から挨拶を返した。それから少し経つての事だったので、思わず慌てて部屋を出た。階下に降りて玄関を尻目に、リビングへ飛び込む。くりちゃんはお菓子を食べていた。暢気な様子に僕が問い質すと、くりちゃんは事もなげにいった。

「ああ、いたぞ。その玄関先だ。スーツを着た知らない男が、そこに立っていた」

父を知らない男とはいわないだろう。ましてや若い頃から顔の変わらぬ父だ、下手をすれば自身よりも付き合いの長いくりちゃんが父を見間違える筈がない。思わず振り返って玄関を凝視する僕の前で、台所から出てきた母は、やはり塩と神酒を持っていた。

のちに詳しく聞くと、真っ黒いスーツを着た黒い髪の男で、顔は「間近で見たのによくわからなかった」という。少なくとも、茶髪で真ん中分けの父とは違う髪型だったらしい。父がその話を聞いたかはわからないが、後日、母がくりちゃんに「あの知らないおじさんは遠くに追い払ったからね」といって聴かせるのを目撃した。

あの玄関には、よく何かがいるらしい。後年、母がいつていた事だ。

子供はよく好まれる

あれは母方と父方、どちらの法事だったのだろう。家族と親戚で墓参りに行った。目指したのは墓地公園だった。雨上がり、くりちゃんをよく走り回っていた。

少子高齢化の昨今、地元のとこの数はそう多くない。父方に3人、母方には当時はひとりもいなかった。くりちゃんが10才の頃に、母方の伯母が従弟を生んだのだが、当時はまだおらず、そして父方も3人のうち2人は東京に住む兄妹だ。よって、事実上、父方の従兄とは、当時は3人兄弟のようなものだった。特に、自身が母方の祖父母の元に拘束されていた頃は、くりちゃんはこの従兄によく懐いて

いたという。この日も、くりちゃんは従兄とじゃれ合いながらよく遊んでいた。父方はさっぱりとした気質の人が多く、特に父方の祖母から「竹を割ったような」性格だといわれていた。それでどうしてあの父が……と思わなくもないが、例外はどこにでもあるものだという。母は実母よりも姑のこの祖母の方が仲が良かった覚えがあった。だからだろうか、子供達が3人でじゃれ合っている、道路に飛び出したりしないように気を配るだけで特に見咎められなかった。大人達も喋り合いたい時があるものだ。

墓地公園は広く、自衛隊の基地が間近にある。子供の転落防止に柵の張り巡らされた沼を見たり、足下の草花を観察したりなど、従兄とくりちゃんが子犬のように遊び回っているのを、僕のはのんびり歩きながら眺めていた。

「うわっ」

そんな時だった。唐突に、くりちゃんが転んだのは。

声を上げて前のめりに転んだくりちゃんに、従兄と僕が駆け寄る。舗装された地面に座り込んだまま膝を見ていた。膝はそれ程ひどくはないがすりむけている。従兄がきよとんとした顔で、傷とくりちゃん顔の顔を交互に眺めた。

「お前、今どうして、というかどうやって転んだんだ」

「わからない」

「道路が濡れてるからかなあ……」

従兄がくりちゃんを連れて水場へと向かう。傷口を洗う為だ。ひとりっ子の従兄はくりちゃんを実弟のように扱っていた。実兄としては、従兄に素直についていくくりちゃんに焼き餅を焼きつつも、足下を見遣った。確かに道路は濡れている。しかし、簡単に転ぶような素材でもなかった。

そうしていると、大人達の声が近付いてきた。傷口を洗ってポケットティッシュで軽く拭いたくりちゃんと従兄が率先して駆け寄る。僕が遅れていくと、母がくりちゃんを見咎めた。母は、よくその辺りで遊んでは転ぶくりちゃんの怪我には特に目敏い。膝を赤くしたくりちゃんを見、素直に「転んだ」と答えるくりちゃん。僕や従兄が状

況を説明すると、母はくりちゃんの手を握った。

「あまり走り回らないようにね。濡れてて転びやすいみたいだから」
僕が首を傾げた結論に、母は飛びついたのか。先祖の墓の前までついでいきながら、僕は首を傾げていた。

一通り墓の手入れを終え、花を供え、食べ物を備える。酒が多かったのは父方の酒飲みの家系のせいか。それぞれが線香を上げると、これでもう引き揚げるつもりだったらしい。親戚一同は、解散の気配を見せはじめた。どうやら帰るつもりらしい、僕が従兄に挨拶をしようと振り返ると、ふと、くりちゃんの姿が見えないのに気付いた。さて、また迷子になったのだろうか。ひとりで彷徨き、気がつく自分達家族の元に戻っている事の多いくりちゃんは、それでもごく稀に迷子になった。捜し出すのが大概僕の役目だったので、今回もいわれる前に捜し出そうか——その時だった。

「う、わっ」

小さな声だ。しかし確りと、それは聞こえた。

「大俱利伽羅！」

母の声だ。呼応して僕もあだ名で呼ぶ。一瞬、くりちゃんの姿は確認できなかつた。しかし、母はさすがに早い。視界の下。立ち並ぶ墓の後方の、草の生い茂った墓。露に塗れたそこに、くりちゃんは落ちていた。

どうやって落ちたんだ。母が手を繋いでいた筈では。疑問を覚えながらも、従兄と僕が率先してくりちゃんを一旦下の道路に降ろし、正規の坂道から戻ってくる。駆け寄ってくる母は何だか必死で、くりちゃんは問われるがままに答えた。

「なんか、あの辺りを歩いてたら、滑った」

そう示す場所は、草の生えていた場所ではなく、舗装された通路の部分だった。

幸い、半ズボンだった為に滑った際に草で多少脚を切っただけで済んだ。「帰ったら消毒と手当てだな」という父に、くりちゃんは肯く。軽く捻ったのか、少しばかり歩きづらそうにしていたので父が負ぶった。それを眺めながら、ふと、母を見遣る。母は深刻そうな顔で、夫

と下の息子を見ていた。

翌日の事だ。母が熱を出した。

子供だけでは面倒を見られない。父は仕事を休み、看護をしていた。学校から帰ってきた僕達も、時折母の様子を見に行つた。「昨日の疲れが出たのかな」と首を傾げながらスポーツドリンクを持ってきた僕に、母は微笑をしていた。そんな中、脚に絆創膏を貼ったくりちゃんは、頻繁に母の元を訪ねていた。病勝ちの母の元で育ったくりちゃんだ。母の体の具合には敏感なのだろう。そう思いつつも普段より元氣のない弟を気にしてそつと部屋を覗くと、母がくりちゃんに語りかけていた。

「3回転んでたら、代わってあげられなかったよ。今度から必ず手を繋いで歩こうね」

その夜、看護に忙しい父に代わり、弟のくりちゃんをお風呂に入れた。その時に見た。くりちゃんの足に、強く掴まれたような痣が薄らと残っていたのを。それは気がつけば消えていたが、足に負った傷は暫く消えず、母の熱も暫く引かなかった。発熱の原因を、僕ははまだ知り得る事はなかったが、病院に行く事はなかった。

かがみあわせ？

全てを当たり前の事として受け止める。それを不自然と思わない。現状に疑問を持つ事がない。そういつた悪癖を持っていたくりちゃんも、年を追うにつれて「奇妙な事」は奇妙だと気付く事が出来るようになったらしい。中学に上がり、まだ小学生だったくりちゃんと下校時間が異なるようになった頃。ポテチをほおぼっていたくりちゃん、その日の昼間に母と共に遭遇したという出来事を話して聴かせてきた。

その時、母とくりちゃんはリビングにいたという。ドラマを観ていたのか映画を観ていたのかは知らない。どんな難しいドラマや映画だろうと、直感で犯人を言い当てる事に定評のある母と息子なので、さぞこの時も「犯人はこいつだな」などと言いつつ聞いていたのだろう。

その様子を想像していると、しかし、先に異変に気付いたのは母の方だったと、くりちゃんはいった。

「お隣さんの、窓」

「窓？」

くりちゃんはつられて見上げたという。古い家並みのこの住宅街では、三方を囲む家々は古い建築基準法で立てられていた。つまり、隣り合わせの家同士の距離が近いのだ。だから、窓も近い。それでも、南東の窓から見えるお隣さんの家の窓は磨りガラスで、プライバシーはそれなりに保たれていた。くりちゃんは最初にそちらを見て、母がやや強張った様子を見せたのがわからなかった。母に問い返そうとして——ふと、何かに引つ張られるように、そちらを見たという。斜め上。リビングのレースのカーテンの隙間から見える、お隣さんの2階の窓。そこに、明らかな「異変」が生じていたという。

「何か映ってたの」

「……形容がし難い。言葉にして説明しづらい。だが、明らかにいったのは、『異形』だった」

言葉少ないくりちゃんにしては、その時は珍しく言葉が多かった。端的に言い表す事の多いくりちゃんが言葉を多くしなければならぬいほど、「それ」はよくわからないものだったらしい。果たして自分と母が見ていたものが共通していたかはわからないとも、くりちゃんはいった。ただ、とくりちゃんは言い切った。

「隣の家の窓ガラスが、『鏡』になっていた。何かが映り込んで、極彩色の『それ』がにやにや笑いながら歩いて、あるいは蠢いていたんだ」
あえていうならピエロのようだった、とくりちゃんは締め括った。それがぼやけ、また普通の窓ガラスに戻ったのち。母とくりちゃんは「珍しいものを見たね」と顔を合わせたという。

それから、僕も時折、リビングから見えるお隣の2階の窓を見る。しかし、事故による火傷で片目を失った僕の隻眼にも、ただの窓ガラスにしか見えなかった。そして、あの時、あえていかなかった事がある。くりちゃんは気付いているかいないかわからないが、偶に部屋を訪ねると、大抵はドレープカーテンを閉め切っている。大抵夜だからかも

知れないが、夕方になると直ぐに閉めるようだった。

その2階の窓ガラスは、丁度くりちゃんの部屋の窓にも面していたのだ。

しみ

くりちゃんの部屋のベッドで本を読んでいた時だ。枕元、白い壁紙に赤いシミがついていた。

「くりちゃん。これ、洗剤で落とした方がよくない」

「あ？ ……ああ、それか」

数学の宿題に頭を抱えていたくりちゃんは、さも面倒そうにそれを見て肯いた。部屋を片付けるのも無精するくりちゃんだ。ましてや壁紙の掃除など面倒な事この上ないだろう。何せ、昔、何を思っただか霧吹きに墨汁を入れ、壁紙に吹き付けて母にしこたま叱られたものの結局壁紙をそのままにしたくりちゃんだ。それを放置させた母も母である。几帳面なところは父に似たらしい僕は、薄赤いそれが、1度気になる引つ掛かって仕方ない。だから僕は本を置いて、ベッドから降りようとした。机に向かう大きくなった背中に声を掛ける。

「何なら僕が拭くよ。洗剤の場所も覚えてるし。くりちゃん、どうせ面倒なんですよ」

「いや、やめろ」

「あれ、洗剤のにおいが気になる質だっけ」

いやに強い拒絶の声に、僕は首を傾げた。そういえばくりちゃんが小学校1年の冬、ひどいインフルエンザに罹った。その時の切欠、というより体調不良を自覚したのは、スキーの授業の為に教室の片隅でスキー板の手入れをしていた担任教師の固形ワックスの独特のにおいだったという。それ以降の記憶がないらしい。高熱を発し早退したくりちゃんは、けれど粉薬を飲むのをとにかく嫌がった——という事を穿り返すと拗ねるので黙って答えを待っていると、椅子の背もたれから振り返る事なく、宣った。

「においも気になるがな。多分、消しても大きくなるだけだ」

もしくは、増える。手垢がつくとも思えない不自然な位置についた赤いシミを振り返りもせず、くりちゃんは宣った。

10年程のち、壊れたベッドを廃棄し布団に切り替えたくりちゃんは部屋の模様替えをした。頻繁に模様替えを行う僕と異なり、とにかく無精するくりちゃんにとっては引越後の模様替え以来だった。というより、くりちゃん自身が模様替えをするのがはじめてだった。あとから新しいベッドを買い与えられたものの、早々に壊してしまった僕の布団生活に少し憧れていたという。家具の位置が変わったくりちゃんの部屋を新鮮に眺めながら、ふと、壁紙を見た。それに気付く。

「くりちゃん、壁紙、掃除したの」

「する訳がないだろう。面倒臭い」

新しく買った布団を敷くくりちゃん。嘗てベッドのあった辺りから、あの小さな赤いシミは消え失せていた。ベッドを片付ける際に手伝った際は、変わらずに鎮座していたシミだった。

そういえばあのベッドは、水戸の祖母から買い与えられた僕のものだったな。そんな事を、なぜか思い出した。

心霊番組と電波

幼い頃、オカルトが流行っていた覚えがある。夏になれば、昨今では減少一方の心霊番組が必ずといって良い程放送された。

それを冷やかして見る、という悪い趣味があったのが我が家だった。何せその頃には、零感だがSFなどは好む父と、どの程度はわからないが明らかに自分達以上に何かを見ている母。それに動物的に「何か」を見ているくりちゃん。そして感化されたのか、その頃には何度か心霊現象らしきものに遭遇するようになった僕、という構成だった。「この心霊写真は写りが可笑しい」「位置的に違うだろ」などと冷やかして夕食を食べるのが夏の日常だった。実に趣味のいい一家である。

ただ、そんな僕らが1度観て以来、映ると途端にチャンネルを変え

るようになった心霊スポットがある。訪ねる機会はなさそうだが、知る人ぞ知る観光名所にして自殺の名所だ。地元民の方には申し訳ないが、どうやらウチとは相性が悪い土地のようだった。断崖絶壁の壮麗な観光名所、当時のその番組はそこに幽霊が出る、という事で定点カメラを設置する、という方針で特集を組んでいた。

結論からいうと、出た。らしい。同じ番組を観ていた僕には見えなかったものが、母とくりちゃんには見えてしまったそうさ。

「電話ボックスに、女がいる」

特にテレビからは、それに関する情報は流れない。寧ろ、電話ボックスの中に誰もいない事を強調している。だが、母とくりちゃんは同じものを観ていたらしい。顔を引き攣らせていた。この2人がこういう顔をするのは珍しい。テレビと2人を交互に見遣っていると、口元に手を添えた母が声を漏らす。

「……肩胛骨の辺りまでかな。セミロングの黒髪……かな？　の女の人だね」

「そうだ。それでスリーピースの淡い黄色の服を着ている。スカートは膝上だな」

「電話に向かって俯いて立ってる……あ、見えなくなった」

カメラがやや遠ざかった時。くりちゃんには「チャンネルを切り替えたように」その人が見えなくなったという。結局、テレビではその女の人について触れる事は1度もなかった。

同じテレビ番組を観ていると、母が段々と顔色を悪くしていくのがわかった。顔を顰め、最終的には母は番組を切り替えてしまったのを覚えている。断崖絶壁の方を観ていた母は、「手がわらわらと拱いている」ように見えたらしい。ただ、それはくりちゃんには見えなかったらしい。しかし、それ以外の番組でも、同じその土地が映ると直ぐに切り替えてしまうのが習慣になってしまった。

曰く、所謂「波長が合いやすい」ところらしい。冷やかすにしても、安全なものの方がいいようだ。

しかし、この件に関して、母とくりちゃん、僕も疑問に思っている事がある。

「心霊写真や心霊動画は、靈感を持っている人じゃないと撮れない」

これは母の言である。ならば、あの番組は何だったのだろうか。僕だけが見えず、くりちゃんや母だけが見え、そして母だけが見えた部分があった。僕と母はともかく、くりちゃんと母。2人が観たものは、一体何だったのだろうか。そして今でも、あの電話ボックスに女の人は立っているのだろうか。否、携帯電話の普及した昨今、電話ボックスは撤去された可能性がある。

さて、ならばその女性はどこへ行くのだろうか。僕が思い出したのは、「八尺様」の顛末だった。

「考えられるとしたら、向こうから訴えかけてきていた、という事なのかもな」

この件に関して、くりちゃんが締め括ったのはそういう言葉だった。

ちなみに、心霊番組を冷やかす趣味は母亡き今も変わっていないかったりする。今は中々心霊番組はやらないので、専らUFOの実在について父と共に冷やかしているところだ。

僕らが生まれる前に起きた話

こんな風に「好かれやすい」くりちゃんと、色々と経験してきたらしい母にとって怪談とは日常だ。ただ、それが昼ドラ風の話と相俟って洒落にならない事もある。例を挙げると、これは親戚の話だ。

母方の遠い親戚の話だ。とある夫婦がいた。この夫婦、妻は所謂貞淑な女性で、料理掃除裁縫何でも御座れの良妻。夫は絵に描いたようならくでなしだった。飲む打つ買う、当時は母とくりちゃんが通っていた大学近辺のコンビニや居酒屋となっている土地を持っていたものの、これら全てを売り払って——当時は土地がまだ売れる時代だったのだ——、行きつけの飲み屋の女性とのちに逃げるような男だった。尤も、蓄財に興味がなく散財にばかり走るのは母方の家系の傾向だったらしい。昔は分限と呼ばれる程だった地主だったのが、僕とくりちゃんの代では家数件分ほどの土地しか残っていない。その上こ

のご時世、売れそうにない土地などただの税のかかる厄介者である。「もつと金になるものを残して欲しかった」というのが子孫としての嘆きだが、それはひとまず置いておこう。

どういふ縁で婚姻したのか僕達は知らないが、とにかく妻には冷淡だった。終いには妻は病に倒れたのだが、この際に救急車への通報が遅れたのもあり妻は亡くなった。のちにこの妻の実家が「態と通報を遅らせて、厄介な妻を死なせたのでは」と嫌疑をかけた。それを肯定するかのように、土地などを売り払い金を纏めると、夫は愛人の女性と行方を眩ませた。結局のところ証拠がないので、妻の実家は泣き寝入りかと思われた。

ところが数年後。公的機関を経由して、妻の実家に連絡が届いた。嘗ての夫が、たったひとり入院しているという。駆けつけてみると、伴っていた筈の愛人の女性は、金の切れ目が縁の切れ目といわんばかりにやはり行方を眩ませていた。すっかりやせ細り衰弱していた夫に、怒りも失せた妻の実家は、しかし医者から夫の病名を聴いて震撼した。

癌だとは聴いていた。妻もまた、末期の癌で倒れた。癌での死亡は珍しい話ではない。特に飲酒や喫煙率の高いこの雪国では。そして酒を飲む夫が肝臓癌になるならまだわかる。しかし、なぜ膀胱癌なのか——妻と、全く同じ。

夫もさして老けていなかったもので、それなりに進行は早く、間もなく夫は死んだ。籍を抜いていなかったもので、妻と同じ墓に入れられたという。

「着物も縫えるし、私にとっては良い叔母さんだったんだけどね」
そう嘆息する着道楽の母の傍で、くりちゃんは黙って茶を飲んでいった。

僕はといえば、父のような執着の強い人と母が結婚できた理由に何となく納得したエピソードだと、小さく息を飲んだ。

父方は竹を割ったようで、引っ繰り返せば情に薄い。その中で生まれた父はやや異端だっただろう。それにどろどろとした愛憎で寿命さえ縛る母の家系は丁度良かったのかも知れない。無言のくりちや

んは、空を眺めていた。彼が中学に上がった頃から飼いだめた猫の視線とそっくりだった。

お間違えですよ

先だつての話とは反対側の家での不幸だった。20年寝たきりだったその家のお年寄りが亡くなったという。しかし田舎といえど、昨今はさほど付き合いが濃厚という訳ではない。精々「この度は……」という挨拶程度で済ませた。大きい造りの家相応に、それなりに大きな葬式が行われていた記憶がある。そうはいつても、向こうの騒ぎ。対岸の火事だ。この当時はまだ理解できない事だったが、長年の介護から解放された隣家の中年の夫人は、喪服に身を包みながらもどこか晴れやかだった印象があった。それも、他人事だった。母が自身の両親の事を考え、他人事ではないという顔をしていたが、それもまだこの頃は他人事だった。

一時的に他人事でなくなつたのは、その通夜が執り行われた日。外からかけられた声の為だ。

「おーい」

その声を聴いたのは、偶々台所でひとり、紅茶を淹れていた僕だ。リビングには父母がおり、くりちゃんは自室にいた。

その呼び声、玄関から聞こえた気がした。家の外からだ。聞き覚えのあるようなないような、男性である事と、恐らく年を取っている事だけはわかる声。それが、続けている。

「ただいまー」

「あ、うん。お帰りなさい」

反射で答えたのは、幼少期に祖父母に育てられたゆえだ。僕の大声に、父母が驚いた声を上げる。父が顔を覗き込んできた。

「どうした、光忠」

「え、今おじいちゃんが……」

「おじいちゃん？ どっちのおじいちゃんも、こんな時間に連絡もなしに来る訳ないよ」

次いで、母が覗き込んでくる。そしてついで、「……おじいちゃんっていった？」と、やや青ざめた声でいった。それにふと、首を傾げる。はて、なぜ今自分は「おじいちゃん」と思ったのだろうか。誰かもわからなかったのに。

眩いたのはやはり母だった。

「……隣で亡くなったお年寄りには、おじいさんだったね」

僕がうっかりと招き入れてしまった隣家の老爺は、どうやら肉体から解き放たれてテンションが上がっていたらしい。特に、呼応してしまつた僕を孫と見なしたらしい。脱衣所で服を脱ごうとしていたらドアノブを引つ掻いて押し入ろうとした(背中を流してくれるつもりだったのだろうか)。死して尚ボケが入っていたのだろうか。印象的だったのは、こういった事態では真つ先に被害を食らうくりちゃんが、全くといっていい程何も感じなかったらしい事だ。

「年寄り受けが悪いのかもな。光忠の年寄り受けは水戸のばあさんとじいさんが保証しているし」

心霊現象を好んでいる訳ではないが、これはこれで複雑だったらしい。少々怯えてしまった僕だったが、気がつくとポルターガイストは止んでいた。どうやらやつと自宅ではないとわかつてくれたらしい。慣れない心霊現象から解放され、母とくりちゃんはよく平気でいられるものだと思つたものだ。実のところ平気なのではなく、慣れてしまっているからこそ対処が冷静のようだが。

さて、こういう電話番号を掛け違えるような事は、実のところよくある。本来、この家で掛け違われる対象はくりちゃんや母だ。

高校受験の終わった頃。くりちゃんはある朝、げつそりとした様子で起きてきた。センター試験でインフルエンザを貰い、前期日程で落ち、後期日程で滑り込みしたのちにベッドに倒れた僕が漸く起きられかけた頃のことだと思ふ。頑丈なくりちゃんは風邪のひとつもひかなかつたようだが、その日の朝は顔色も悪く、母と話していたかと思うと、朝食を摂っていた僕の胸倉を掴んできた。

「ど、どうしたんだい。くりちゃん」

「光忠。……何でお前が見なかつたんだ」

「はい？」

「みつちゃん。ほら、貴男の小学校時代の担任の先生が亡くなったって話は聞いたでしょ」

「ああ……」

事情は障りがあるので割くが、確かにそれは事実だった。この頃、小学校時代に一時期担任教師を勤めてくれた女性教師の訃報が、僕の元にも届いていた。しかし、それがどうしたというのだろう。怒り混じりに朝食の席に着くりちゃんの代わりに、母が微笑した。「悪夢を見たんですって。全然知らない人が出てきたって」

「悪夢なら受験のストレスじゃないかな」

「それも考えたらしいけど、夢の中のその知らない人の特徴を聴いたら、どうにも貴男の担任の先生だった人みたいなんだよね。……1度も担任された事ないのにね、くりちゃん」

「何で俺の元に来るんだ」

苛立たしげに、手ずから盛った飯を食べる。目を瞬く僕に、母は掻い摘んで教えてくれた。

曰く、大俱利伽羅は夢を見た。途中まではごく普通の夢だったらしいが、途中からおどろおどろしいものになり、なぜか見知らぬ女性が何かを訴えかけてきたという。その女性の顔を、なぜかよく覚えていた――

「夢枕に立つなら、全く縁のなかった児童の俺ではなく、自分の担任した光忠の元に立つべきだろう」

「インフルエンザで弱ってたし、何よりみつちゃんは零感だからじゃない」

どうやら「かけ間違え」が生じたらしい。「私も小さい頃はよくこういう事があったよ」と、母はくりちゃんを宥めていた。それを眺めながら、僕は内心で嘗ての担任の教師に謝った。零感過ぎてすいません、と。

尚、「かけ間違え」は父からも経由したらしい。母の死から三回忌が過ぎた頃、ある日、くりちゃんは夢を見た。リング畑でリングをもらっている、若い父と従兄の姿だ。正確には、違う人物だとくりちゃんは

理解していた。理解しつつも声をかけると、笑顔で手を振ってきた。何よりもこの時に、特に父が別人だと理解したという。何せ、父は「滅多に本気で笑わない」事に定評があるのだ。

特に悪夢とも思わなかったらしい。父方の実家はリンゴ農家だ。そんな話を僕にしたのち、帰ってきた父は「親戚が死んだ」という事を知らせてきた。聴けば、その人は父の叔父に当たる人だった。話を聞けば誰かはわかったが、交流する時といえば法事の時ぐらいしかなかった。そして何より、父の顔は、母と同じ年に亡くなった父方の祖父に似ていた。祖父と父の叔父、彼らははとこであり、祖母の弟だった。近親婚である。親戚づきあいの多い農家で、彼らも姉婿としてはとことして親しかったという。

この時もくりちゃん、渋い顔をしていった。

「夢枕に立つなら、父の方にだろう。俺はほとんど会話した覚えもないぞ。甥っ子のあんたの夢枕に立つべきじゃないか」

父は苦笑し、「お前は本当に母親似だな」と呟いた。

ところでよくある話だが、母方のどこかに神職の関係者がいるらしい。遺伝か……と、ネクタイを緩めている父に文句を垂れるくりちゃんに、そんな事を思った。

今頃、祖父と大叔父は根の国でリンゴをもいでいるのだろう。

白い人

こんな危なっかしいくりちゃんだが、一番危なかったのは思春期に入った頃だった。反抗期ではない。自我の確立——つまり、自分の見ているものがおかしいのだと、くりちゃんが漸く気付きだした頃だった。

それまでのくりちゃんは、「神のうち」という言葉がびったりな振る舞いだった。ラップ音がしようと、変な影を見ようと、唐突にお守りの紐が切れた数日後のスキー教室で事故に遭おうと、「そういうもので済ませていた。しかし、自我が確立してくると、これに齟齬が出る。「ここから危ない」と、母はまるで見てきたかのように、くりちゃんにそれを渡した。

30cm程もない、小さな仏像だ。それをくりちゃんの部屋の棚の隅に置いた。

「特にお祈りをする必要もないよ。置いておけばいい。まあ、気休めだね」

そういつて、きよとんとする息子達に母はいった。

それだけの事だ。それからのくりちゃんの様子は、少しだけ落ち着いた気がした。マメなくりちゃんは、時々仏像を磨いて置き直していた。時になぜか勝手に棚から落ちたりしていたらしいが、特に割れる事もなかったという。尚、同時期に職場のトラブルでストレスを溜めていた父が寝不足で自損事故を起こした時、偶々法事で鞆に入れっぱなしだった観音像の飾りが彫られた数珠がなぜかはじけ飛ぶように切れていた。父は怪我ひとつなかった上に、このあとも何度か自損事故を起こしたものの、1度も怪我をする事がなかった。母曰く、「昔から偶に事故を起こしてたけど、その度に怪我もなかったし色々と運良く免れていまだに免許を取り上げられていない」らしい。父の零感は、ひよつとして感じなくても充分な守護でもある為だろうか。敏感な弟を不憫に思いつつも、くりちゃんはなんとか日々を過ごしていた。高校に上がると、その後今でも付き合いが続く程の友人が出来、大学に入った頃にはすっかり安定していた。

そしてその頃、ふと聴いた。

「最近、白い女性を見ないな」

「白い女の人」

「家でも稀に見たんだがな」

大学から帰ってきたくりちゃんは、ゆつくりと語ってくれた。

思春期に入り、自分の見ているものがおかしいのだと気づきはじめて頃。くりちゃんは小学校から部活に入っており中学でも入っていたが、この頃から部室で、教室で、家路で。偶に家でも「白い影」を見かけたという。それは視界の片隅、錯覚ともとれるものだったという。ただ、それをあまりに頻繁に見るものだから、くりちゃんは最初は怖いものかと思った。

しかし、その白い女性は何もしてこなかった。服装ははつきりとわ

からなかったが、白いワンピースを着ているのかと思った。ホラーでは定番だな、と、くりちゃん自身も思っていたらしい。しかし、その女性は、ただくりちゃんの視界に偶に入る程度で、一定の距離を保ったまま近付いても遠ざかりもしなかったという。だから、くりちゃんは特に怖がらなくなった。高校を卒業する頃、後期日程に滑り込んだくりちゃんは、ひとりの教室で時にその背後に存在を感じながらも、穏やかに無視する事が出来た。

だが、大学に入った頃から、その女性を見かけなくなった。

母の母校でもあるくりちゃんの大学のキャンパスはそれなりに歴史はあるが、「高校までと違って全然怖さがない」とくりちゃんは語っていた。中学は進学校でどこどこに淀みのような陰があり、人死にもあった。高校は平凡だったものの、歴史の古さの為か、あまりひとりでいたくないと思わせる雰囲気はどこかにあったという。しかし、大学のキャンパスはそれがなかったらしい。それに気付いた頃に、ふと、その女性を見かけなくなった事にも気付いた。

「いなくなったらなつたで、寂しいものだな」

そう呟くりちゃんの部屋の机の上の棚。そこには仏像がまだ鎮座していた。30cmもない、磁器製と思しきそれ。白い観音像が、優しげに微笑んでいた。

そして僕は思う。

(くりちゃん、観音菩薩様は性別がないっていうのが主流の説だよ……)

見るものの受け取り方によって性別は異なるらしい。のちに調べて知った事である。

「くりちゃん、まだ変なものは見えるのかな」

問うと、くりちゃんはふん、と鼻を鳴らした。フライパンが音を立てる。

「変な人間の方が多くて訳がわからん」

「世知辛いねえ」

そんな事をいいながら、くりちゃんはご飯を作る。たたみ終えたタオル運びながら、僕は父の帰りを待っていた。

この話を思いついた「あもくん」のパロも入れようかと思いましたが、実録の数が思ったより多かったのでそれオンリーにしました。ちなみに母方の大叔母が縫ってくれた着物は私の成人式と大学の卒業式で活躍。きれいな着物でした。多分祖母んちにあります。

また思いついたらくりちゃん僕みたいな感じで日常ホラー系のものをうPりたいです。

【どうらぶホラー?】くりちちゃんと僕 『水』【現代パラレル】

夏が来たね。夏といえば怪談……というのは我が家では日常だ。特に僕達の住んでいる地域ではこれからやつと梅雨が来る。梅雨といえは雨、雨といえは水だ。そういう訳で、今回は水に纏わる話を綴ろうと思う。今回はホラーよりもオカルト、といった方が近いかもね。それじゃ、はじめよ。

泳げない／泳がない

くりちゃんは泳げない。あんなに水着とサングラスとアロハシャツが似合う見た目なのにだ。かくいう僕もあまり泳ぎは得意じゃない。両親は何かと僕達に習い事をさせたが、水泳教室だけは通えなかった。小児性の耳の病気だったからだ。家系にない病気だったが、母は病勝ちで「病気のデパート」と医者に称された程だったので、2人の息子が揃って同じ病を患っても不思議には思わなかったらしい。ただ、あとで調べたところによると、最近ではこの病気を患ったのは僕達ぐらいのようだった。

長じるにつれ、授業の水泳や遊泳ぐらいならば問題なくなった。なので小学校に上がった頃には、問題なく水泳の授業を受けていた。僕もある程度は泳げるようになったし、1年に1度は家族で海水浴やプールに行った。海水浴は母方の祖母の実家がある海岸地域だった。ただ、実家がある地域といっても、どこかの家に立ち寄るという事はなかった。1度だけ、その海辺の長屋のような家の一室に入った事がある。そこは母方の祖母が嘗て生まれ育った家であり、その頃亡くなった曾祖父の家でもあった。曾祖母はくりちちゃんと入れ替わるようにして亡くなっていた。

恐らく遺品整理などの為に行ったのだろう。漁師だった曾祖父だ

が、漁師になる以前は書くのも憚られる程の事をしでかしていたらしい。自分と血の繋がった身内には甘かったが、代わりに血の繋がらない妻には冷たく、曾祖母が亡くなったのもこの為といわれていた。それでも子供は沢山いたという。

つまり祖母には兄弟姉妹がたくさんいた。にも関わらず大おばや大おじの話は聞かない。聴けば、幼い頃にほとんどが亡くなっているという。祖父母の世代では子供の夭折は珍しい話ではない。だが、悉くが水死を辿っているという。あの、海水浴を楽しんでいる海で、溺れて死んでいるのだ。

何とか生き残ったのは祖母とその妹だったらしく、曾祖父はその2人をなめるように可愛がったらしい。くりちゃんは、実はその祖母に容姿がとても似ているのだが、共通点がもうひとつある。彼女もまた、泳げないのだ。

のちに夫に冷遇され癌で死ぬ事になる大叔母が、泳げたかどうかは知らない。だが、水遊びは好んでも、潜るといふ事が2人とも出来ないという。無表情のまま自然に突っ込んでいく野生児のくりちゃんも、水辺では浮き輪などに捕まって水面を泳ぐだけだ。決して潜る事はなく、ただ浮いている。

祖母に囲われて溺愛された僕だが、くりちゃんの事もかわいくなかった訳ではないらしい。時にのちに生まれた伯母の息子と共に水泳に誘われる事もあった。尤も、元氣なくりちゃんの方が幼い孫息子を相手にするのに丁度良かったからだろうが。ただ、くりちゃん曰く、祖母は水に入る事はなかった。

「年寄りだからじゃないか」とはくりちゃんの言だが、何となく、こんな話を思い出した。大学の教養課程で、英語の教授が話していた事だ。欧米でも自然豊かな地域で、川辺でバーベキューをしている時、酒はつきものだ。真っ先に潰れるのが日本人だ。しかし、この際の死亡率は地元民の方が高い。

それはなまじ潰れない為に、ふぎけて川で泳ぐからだという。てつきり酒が入った状態で水に入るからでは、と思ったが、死因は「川にいるワニに喰われるから」だそうだ。動かなくなる日本人は、川に入

らずに済む訳である。

「そういえば、酒に弱い人は肝臓癌になりにくいっていうな」

さてはて、僕やくりちゃんの耳の病気や、人一倍「敏感」なくりちゃんが泳げないのはなぜか。曾祖父の因業も合わせて考えると、果たしてこれが加護か呪いか。区別がつかないところである。

肩が濡れてる

祭りの季節だ。この頃になると、朝の6時に放たれる花火の音で起きる事が多い。雪国のここでは、7月に入るとやつと梅雨の季節の到来だが、同時に、夜になれば宵宮が催される時期でもある。この頃になると、くりちゃんがよく肩を濡らして帰ってくる。綿飴を片手に。

くりちゃんは意外にも、祭りが好きだ。というよりも、屋台が好きなのだろう。地元では小学校の運動会で屋台が出されていたが、それ無表情のまま嬉々として駆け寄ろうとしては父や母に捕まり、弁当の場に向かったのが、僕と一緒に小学校に通っていた頃の定番だった。3才違いなのである。特に青く小さなリヤカーの屋台で売っているリングのアイスが好きらしい。小銭を握ってまずそのアイスを買うのがくりちゃんの屋台フルコースの前菜だ。その後、綿飴、リンゴ飴、かき氷、イチゴ飴、落書き煎餅……宵闇の中の屋台の光を眺めながら、神社にお参りをして帰ってくる。それがくりちゃんの夏だ。

金魚すくいやヨーヨーすくい、籤引きなども好む。要はとても大人びた容姿で、中身は童心でいっぱいだ。親戚の鶴丸に可愛がられているのも、こういった側面かも知れなかった。僕はといえば、あまり人混みは好まない方なので、浴衣を着るのは嫌いではないがそんなくりちゃんが理解不能だったりする。

と、ここまでではほのぼのとしたくりちゃんの側面として語れるだろう。しかし、少々変わっているのはここからだ。くりちゃんは「なれ合いはしない」という人柄なので、大抵ひとりで宵宮に寄る。帰りが遅いと思えば、綿飴を土産に買ってくる事も屡々だ。綿飴の袋を彩るキャラクターグッズは似合わない子だと思う。この辺りは幼少から変わらず、ひとりで遊んでひとりで帰ってくるという癖が抜けていな

いのだ。父方の親戚の家の最寄りの神社の宵宮には、従兄弟の御手杵とその友人達と共に行くものの、それ以外だと、僕と一緒に行った時は、ベンチに座って待っていると一通り屋台で食べ物を買ってきて戻ってくるのを待つ方が楽だ。

そして決まって、「ひとりで」宵宮に寄ってきたくりちゃんは、肩を濡らして帰ってくる。毛先の赤みがかかった髪も服も、薄らと湿って帰ってくる。自転車を使った時は、出迎えた僕が見遣ると、乾いている道路に濡れた細い轍が残っているのが屡々だった。

くりちゃんは雨男だ。

とはいっても、従兄弟の御手杵ほどひどくない。彼は何せ、降水確率が0%でも出先で降るのは序の口。ちよつと近所のドラッグストアに自転車を走らせれば、にわか雨。それも丁度店に着く頃に止むなどという、ある種神憑りなレベルではない。否、くりちゃんのそれもある意味神が関わっている。

本人達にいわせれば「梅雨だからな」「いつものろのろしてるからなあ、雨が降る前に事を済ませられないんだ」という事だが、くりちゃんに関しては気に掛かる事があるのだ。というのも、以前。大学の教授の雑談だっただろうか。

「神社を訪れた時、天気が変わるのはその神に歓迎されている」

大学時代などは県外からやって来た同期の友人を連れて行ったりしてやっていたらしい。母方の従弟を連れて行く事もままあった。しかし、神社仏閣の多く、また田舎の為か神仏習合の名残の強いこの地域では宵宮がとても多い。どこかへ出掛けるくりちゃんが、どこかの宵宮に寄って遅くなるのは常だ。そのくりちゃんは雨男なのだ。というより、僕が晴れ男なのだろう。出先で雨が降った試しは0に近い。遠足は毎回晴れ、運動会も6年間晴れだった。ところが僕が卒業後、くりちゃんの残り運動会は毎年雨になったという。何を考えているのか、ウチの小学校は梅雨時に運動会をするから当然かも知れないが、6月の序盤は寧ろ晴れる事が多いのがこの地域の特徴だった。僕と一緒に出掛ければ降水確率が高い時でもまず雨に降られる事のないし、幼い頃は一緒に宵宮に行っても雨が降る事はまずなかった。変

わらず、ずっと晴れの夜だった。僕にとって天候が晴れというのは当たり前前で、1度遠足の目的地の公園から一気に雲が引いていったのをバスから見た事もあった。

そんな僕の弟のくりちゃんは、僕と一緒に行動すれば雨に降られない事は知っている。長年の経験だ。それでも単独行動が好きなので、天候は区々だ。御手杵ほどにはひどくないものの、くりちゃんが折り畳み傘を持ち歩いているのを僕は知っている。良くも悪くも自分で何とかしてしまおう子だ。そんなくりちゃんだが、夏はフードの服が増える。理由は単純。「宵宮に行くから」だ。

条件は決まっている。くりちゃんが宵宮にひとりで行った日、天気が崩れる。予報では晴れの筈の日でも、その宵宮の日、くりちゃんが単独で行けば必ず雨が降る。小雨程度、且つ小規模に集中的に降るものらしく、フードで事足りるぐらいらしい。律儀なくりちゃんは、宵宮に行けば必ず神社にお参りをする。特に願い事がない時でも参るらしい。そうすると、晴れる。

お祭りの日には特異日、というものがあるらしい。大抵晴れたり、雨が降ったり。その祭りの日には必ずこういう天気になる、という事があるという。くりちゃんは「そういうものだろう、梅雨だし」という。ただ、くりちゃんの場合は、普段は行かない神社に立ち寄っても雨を降らせるのだが。

特に父方の実家にある神社は、御手杵達と一緒にいくと降るそう。僕がついていくとまず降らないが、くりちゃんと御手杵達だけだと降る。そしてお参りをすると雨が止む。恐らく、父方がそういう家系なのだろう、と僕は思っている。ただの農家の筈なので、どこから来た血筋かは不明である。

この「神社に行く」と雨が降る」法則が当てはまるのは、戦国時代やそれ以前からあったような神社が対象だ。地元根付いている神社の宵宮で、くりちゃんは雨を降らせる。ただ、例外もある。僕がお正月、おみくじを引く為に寄るお寺だ。寺でおみくじがあるのは、先述の神仏習合の名残だ。しかも結構なぼったくりである。お供えの蠟燭、線香1本に500円、という事もざらなので、お参りはせずにお

みくじだけ引くのだが、僕の話聞いたくりちゃんは、つい先年、はじめて寄ってみたという。これは僕には意外だった。何せ、くりちゃんが小学1年生の頃に引つ越す前の方が近所にあるところだったからだ。

「あそこにある塔は遠くから見ると、あの近くまで散歩する事はあったがあそこへの入り方がわからなかった」

とはくりちゃんの談だが、方向音痴の僕でも場所がわかるのだ。あんな堂々と聳え立つお堂のある場所を間違える筈がない。野生児同然だったくりちゃんがわからなかったのも不思議だ。もつと不思議なのは、帰ってきたくりちゃんの顰め面だった。

尋ねれば、本人にその顰め面の自覚はなかったらしい。ぼつたくりだという事には同意見という事と、おみくじを引いてきたという事だけ報告してきたが、翌年、くりちゃんがその神社兼お寺に寄る事はなかった。最近になって母が亡くなり、地元の寺が集められた街に寄った時も似た反応をしていた。

くりちゃんに尋ねてみれば、「多分、人工的に集められたものが嫌いなんだ」という事だ。その地名は、検索すればちよつとした観光地になっている事がわかる寺の街。それに金銭獲得が明らかかな目的の寺兼神社。前者は特に、戦国時代ぐらい、北条攻めの折にうまく秀吉公に取り入り、自らの主君の土地を半分奪い取ったような初代藩主が、「わかりやすいように」と各職業ごとに住ませる場所を振り分けた名残だ。寺というのは徳川家の以降で有事には城塞に用いられる用途で大きく作られたらしいから、要は本丸とはまた別の城塞をたくさん築き上げたようなものである。まあ、ここは本州の最果ての上に海に面しているので、城塞を築いても精々が籠城程度しか用を為さないから許されたのだろう。

閑話休題、歓迎のされ方が「雨」という少々ヒトには傍迷惑なもの、神様に気に入られやすいらしいくりちゃんには敏感に「何か」がわかるのだろう。幼い頃からあちこちの神社——幼い頃はまだ宵宮をやっていたが、今では廃社寸前のところも今でも寄っているという——に立ち寄るくりちゃんには、気持ち悪いものなのかも知れない。

尚、くりちゃんの体質はかなり極めつけで、広島の水に立つ鳥居が有名な島に滞在中は干潮で小雨が降り続け、京都の神社仏閣を立ち寄った時は、帰りの寝台列車に乗る頃には晴れたものの、時折小雨がぱらついたという。野生児だから気に入られやすいのか。思わずそんな言葉が浮かんだ。

ただ、ひとつ。今でも心配している事がある。僕の大学時代の話に戻るが、調べ物をしていた時に、こんな言葉を知った。

「遣らずの雨」

広辞苑によれば、「人を帰さないように降ってくる雨」を指すという。

それを知ってから、宵宮に行くくりちゃんが小雨のうちに帰ってくるのを祈るばかりだ。昨今は宵宮も衰退しているが、いつ「名残惜しむ」雨が小雨から大降りになるか、わかったものではないからだ。何せ、宵宮というのは神社のお祭りだ。単純に屋台が好きなくりちゃんが、屋台がなくなれば神社に行かなくなるのは必定。近くに寄れば気紛れにお参りはするらしい。だが、その程度だ。

「あんまり気を持たせるような事をするんじゃないよ」

「何の話だ」

くりちゃんは首を傾げた。

火の気

さて、以前から散々恨み言ばかりぶつけている「水戸の祖母」について触れようかと思う。というのも、最近、母によく似た女性が夢枕に立ったからだ。嘗て住んでいた公務員官舎の裏手にあった川で、その女性が手招きしている。「●●の川において」と、呼んでいるのだ。それで朝早くに目が醒めてしまった。ついでだからそのまま起きて、最近拾った子猫に薬をやるのを手伝って貰う為に、くりちゃんを起こした。そしてその夢について勢いで告げると、くりちゃんは寝癖頭で怪訝そうにした。

「三回忌も過ぎたから、母が夢枕に立つのは考えにくい。禍々しい印象の夢だが、恨み節ならもつと早くに立つだろう。それは祖母じやな

いのか。祖母と母と俺はよく似ているだろう。特に女同士なら、声も似るだろう」

祖母はお前に執心しているからな。冷蔵庫から、獣医から与えられた薬を取り出すくりちゃんは、冷めた様子でそう答えたのだった。いわれてみればそれに納得できない事もない。祖母を嫌っていた母は特に厭っていたが、祖母と母はよく似ていた。祖母の若い頃など、母と瓜二つだ。そしてくりちゃんもまた似ているのだが、くりちゃんは似ている・似ていない論争に関しては「論議する事自体が下らない」と断じている。元気の良い女の子の子猫をしつかりと捕まえた僕は、くりちゃんが目薬を差すのを手伝った。その後のくりちゃんによれば、「せいぜい梅雨時だから水に気を付けろという事じゃないか」という話に落ち着いていた。しかし、間違っても好奇心を出して夢の場所に行くなどともいわれた。くりちゃんもまた、いわれて気になっていたのだろう。口をへの字に曲げていた。

そして渦中の祖母についてだ。祖母は現在、介護施設に入っている。祖父も同様だ。祖父は比較的まだ矍鑠としていたらしいが、伯母曰く祖母はすっかり痴呆が進んでしまったという。何せ、うちの母が亡くなった時も、目の前の遺体が誰かもわからない様子だった。今も、施設で他のお年寄り達と話す時は私の強い気質は残っているらしいものの、くりちゃんの事を覚えているかどうかは保証できない。祖母とは母が亡くなって以来1度も顔を合わせていないのは僕も一緒だが、祖母は僕の事は覚えていただろうと断言できる。何せ、僕の顔は、若い頃の祖父に似ているらしいのだ。

平たくいうと、祖母が祖父に惚れたのは、「顔」に集約される。つまり、僕のような顔が好きなのだ。

祖母の顔に似たくりちゃんとはどうしても愛情に差が出るのは、祖母本人としては当然なのだろう。僕としては噴飯ものだし、くりちゃんはその点において冷めた顔しかしない。無愛想どころではない。無感情だ。祖母には最早何も期待していないというのがよくわかる顔だった。憎悪とは、関心である。それがあただけましな事もあるという好例だった。

さて、戦後間もなくだろうか。比較的結婚の遅かった祖母が見初めたのは、地元の地主の息子だった。運動が出来て女性に親切、大概の女性が黄色い声を上げるような事はしてのける。典型的な女たらしだったそうだ。祖母もそれなりの家の娘で、家付き娘として地主の息子と見合いした。そして、祖母の側が強引に婚姻を進めたそうだ。何せ、面食いだったので。逃すまいと結婚まで持ち込んだのだ。プロポーズも祖母の側からだったというから惚れ込んだものだと思う。一方、祖父としてはとんでもない事だっただろう。まだ女遊びをしていたかっただろうに、自分の家は地主であり、長男長女とは20才は離れていた。跡継ぎにはまず縁がなく、末っ子として可愛がられていた矢先に、「こいつは末息子、跡継ぎは余ってるからいらん」と婿に放り出されたのだ。

勿論、そんな婚姻生活がうまくいく筈もない。夫は女性に優しい。妻以外の女性には。祭りでは女性に声をかけ、侍らせる事枚挙にいとまがない。妻は当時健在だった妻の父、つまり僕達にとっては亡き曾祖父に泣きついては婿はきつく絞られ、その反動で更に女遊びをする――まともな仕事をやっとはじめたのも、舅の伝手だ。中学時代、演劇部の友人が駅を舞台にした劇をやるという事で祖父の駅員時代の制服を借りて貸したのだが、その時に「それは駅長の制服だよ」と母に教えられた時は感心したものだ。「あの典型的なろくでなしが、そこまで出世を頑張ったのか」と。孫息子にまでそう認識されているのだから、若い頃のひどさは推して知るべし。

それでも何だかんだと娘を2人もうけたものの、その仲の悪さは寧ろ仲が良いのではと思える程にひどかった。どれぐらいかといわれれば、戦後間もなく結婚し、幼い僕を困っていた頃も散々物を投げ合う喧嘩をしていた程だ。母に聴けば、「子供の聞こえる範囲で夫婦喧嘩はするものじゃないね」と遠い目をされた。つまり、何十年もそれを続けていた。よく喧嘩の種を見つけられるものである。怒鳴り合いを見せつけられて萎縮する、というのは、考えてみれば兄弟の共通点だ。嫌な共有点だ。それはともかく、この夫婦共通の自慢の種が、長女。僕達にとっては伯母にあたる女性だ。大学を卒業後、旧西ドイ

ツの芸術大学でピアノノ留学までした、幼い頃から優等生の自慢の長女だ。この為に、子供のいない親戚の夫婦に「次女ならあんたらに懐いてるし、養子にやってもいいよ」と母の目の前で祖母はいつてのけたというから、偏愛の程甚だしい。祖母と母の確執はこの時が決定打になったようだ。

その祖母が、なぜこと決定的に家庭を破綻させなかったのか。理由はこれまた単純だ。

祖母は金を持っていたのだ。

それも、ただ持っていたのではない。祖母の元には、金が次々と転がり込んでくるのである。

「ふと思いい出したんだが、祖母の実家の土地はどうしたんだ」

ある日、僕の部屋で漫画を読んでいたりちやんが尋ねてきた。母の亡きあと、父の出張中、暇を持って余していたらしい。古い漫画の復刻版は所謂オカルトもので、その中に海辺の土地が出て来る事が多いのを思い出した。祖母の実家も、海辺にあったのだ。その実家の近辺には海があり、気がつけば大きなホテルが建っていた。いつの間になんなものが……と兄弟で話題にしたものだ。以前にも述べたが、幼い頃はこの辺りの海に遊びに行くのが1年に1度の家族のイベントだったのだ。それを思い出しながら、僕は記憶の糸を手繰り寄せた。まだあの頃はくりちゃんは本当に幼く、本人の口から祖母の実家の建物の構造が出てきた時は驚いたものだ。僕が覚えている限りでは、曾祖父の持っていた土地は祖母に相続された。生き残っていた妹夫婦も亡くなっており、受け継ぐ係累が祖母ひとりだった。しかし田舎である。ただただつひろい上に、海辺の土地ゆえに潮気が強く農地にも転用しにくい。その土地は漁業が盛んだったのだ。持っていては仕方ないので売り払った筈だ、と僕が口にする、絨毯の上に転がっていたくりちゃんは、首を傾げた。

「じゃあ、あのただっ広い草原もか」

「だろうね」

いわれて、思い出す。海辺にあった、納屋がぽつんとひとつだけ立っていた土地があった。やたらと見晴らしが良いだけの広い土地

だった。それに、重ねてくりちゃんがいう。

「じゃあひよつとして、あのホテルが建つてたのつて、あの土地か」

「……あつ」

指摘されて気付いた。そういえば、丁度脳内の地図に合致するではないか。いつの間そんな大金を手に入れていたのか。くりちゃんも気になった様子で「その金はどこに行ったんだ、そんな豪遊していた覚えはないんだが」とあぐらを掻いて首を傾げる。そうして指摘されてしみじみと感じるのは、祖母の金運の良さだ。

とにかく、金に困らない。喰うに困らないというのは最低ラインで、それなりにお洒落したり趣味に金をかけても生活できる、というラインだ。真面目に貯めてそれなりの資産運用をすればもつと金持ちになれただろうが、祖母の場合、趣味に金がかかるタイプだった。それも「普請道楽」という、とても困った趣味である。

簡単にいうと、家を建築したり改修したりする事を趣味としている事だ。手ずからではなく、専門家に頼むものだ。某劇的なビフォーアフターな番組を思い出して貰えれば嬉しい。高尚な趣味という人もいるだろう。勿論、それにお金をかけて芸術の域にまで高めれば僕もくりちゃんも諸手を打つただろう。但し、ただ無計画に増改築を繰り返した結果、見目がつきはぎのようになってしまった家を見たあとでは、そんな気も起きない。なぜ外壁に煉瓦造りと白塗りが組み合わさっているのか、今の僕には理解できない。1級建築士に頼んでいたというが、トラックが通る度に地震が起きる家だとそれも怪しかった。海外だと亡霊が出る、という妄想に取り憑かれた女性が家の増改築を繰り返させて迷路になったというが、いつそあそこまで行けば面白かったが。

そしてくりちゃんが、本を片手に首を傾げる。

「……そういえば、あの頃、美容院を新たに改修して作ってたな。家の離れを」

「あー、あそこかあ……」

ここで僕達が知っているのは、今まで話題にしていた家ではない。祖母名義の持ち家は2つあり、今まで話題にしていたのは駅前にある

方。「離れがある」のは住宅街にある方だ。どちらが本当の実家なのかは、実のところわかっていない。共通しているのはどちらも増改築を繰り返しているが、まだ品がある風情の家なのは住宅街の方だ。伯母が従弟を生んだ頃、そのお祝いにと庭に2階建ての離れを造ったのだ。しかし通学の都合上、こちらの家に居着かなかったもので、その離れの1階を潰し、完全予約制の美容院にしたのだ。尚、祖母はその時点で高齢で、くりちゃんが成人式や大学の卒業式などで顔を出した時は「客が来た様子はほとんどなかった」らしい。伯母も母も、怒るを通り越して溜息と苦笑ばかりだった。要は、祖母は普請道楽の趣味を発散させたかっただけである。それでも耐えられる財産はあるし、金は若い頃から転がり込み続けていたというのだから恐れ入る。

若い頃は美容師として働きまくっていた。当時は駅前には風俗店が多く、そこに向かう「飲食店の女性」がよく客として来たらしい。駅前に店を構えられたのも祖母の運だ。時に客の女性が逃げ込んできたかと思えば男が刃物を持って殴り込みに来た……などという物騒な騒ぎもあつたらしい。とにかく、それだけ騒々しくもよく金を稼いでいた。一時期は客が来すぎて入院したという事もあつたそうだ。他にも、兄弟の中で生き残った祖母には折良く金が転がり込み、それを伯母の留学費用や、母が当時かかった保険のきかない病気の治療に当てたり——この為に、母は祖母に強く出られないところもあつた——、とにかく金が入っては出ていく、という事を繰り返していた。(祖父ちゃんが結局ずっと離婚しなかったのは、生まれた娘がかわいかったのと、あと世間体以上に多分祖母ちゃんを「金づる」だと思つてたからだろうなあ。祖母ちゃんの方が稼いでただろうし) パソコンに向かっていた僕は、疑問が解決した様子で再び読書に戻ったくりちゃんの気配を感じながら、ふと先日見た夢の事を思い出した。

『●●の川において』

訃報が来ないから、恐らく祖母はまだ死んでいない。くりちゃんの言葉を考えるなら、あれは祖母の生き霊だろうか。祖母も母もくりちゃんも、よく似ているから。霊になると年がわからなくなるとい

う。

そういえば、ふと思い出す。以前、祖母が入院した時。ベッドから落ちて人工関節が外れてしまった切欠は、その前に見た夢だという。家の裏口から、幼いくりちゃんを訪ねてきた夢を見たそうだ。あまりにリアルで、思わず立ち上がり、そして転んでしまったという——思い出した刹那、背筋に氷が走る。

「どうした、光忠」

「……くりちゃんは母さんによく似てるなあつて」

「何を今更」

根が優しいくりちゃんは、機微に敏感だ。そんな彼をいなして、僕は思い出す。

母方の家系には、くりちゃんによく似た人が多いという。そして、大体は男運がない。それに絡んでまるで昔話の怪談のような話もある。

そんな怨念が、今はすっかり晴れているといえるだろうか。

(だって、あそこに川があるなんて、母さんも祖母ちゃんも知らなかっただろうに。あれはくりちゃんが発見した場所だった)

口元に手を添えながら、密かに誓う。水辺には気を付けよう。そして、あの川には決して近付かないようにしよう。

「くりちゃんによく似た姿」をした誰かが、そこで手招きしているかも知れないから。「この家の女を食い物にした祖父」によく似た、僕を待って。

梅雨が来る。祖母の恋愛運も家庭運も何もかもを犠牲にして燃やし尽くした金運を雨が鎮火してくれるよう、祈るばかりだ。

香水

くりちゃんは、中学に上がってモテるようになった。本人としてはその頃から自分の「おかしき」に気づきはじめてた頃でそれどころじゃなかっただろうけど、くりちゃんは見た目が派手なのとつんけんした性格が1部に受けたようで、女の子に人気が出たようだった。元々女の子が嫌いではない僕は、その事態こそウエルカム！ といえたけれ

ど、単独行動を好むくりちゃんとしては、何かと寄ってくる女の子が苦手だったようだ。まるでネコのように、学校の人気のない場所を見つけては、よくそこに隠れたりサボったりしていたらしい。褒められた事ではないが、弟に弱い僕としては、卒業生として良い隠れ場所を教えるばかりだった。

そんなある日の事だっただろうか。くりちゃんが颯めつ面で帰ってきたのは。

部活に入っていたくりちゃんは、僕よりも帰りが遅かった。出迎えたくりちゃんはいつともよりも眉間の皺が多い。弁当箱を受け取り、理由を尋ねると、あとからやってきた母と僕の前でいった。

「なんか、この間から臭いがする。どこにいてもとれない」

いわれ、気付く。確かに、においがした。甘い、女の子のにおいだ。妙に甘ったるいそれは、まるでその場に、女の子が立っているかのような錯覚を与えてくる。クラスに、こんな甘いにおいをさせている女の子はひとりはいた気がした。彼女が出来たにしては、その表情と雰囲気は妙だ。それに首を傾げていると、隣にいた母がくりちゃんに顔を近づけた。においを嗅いでいるようだ。そして暫く腕を組んでいたかと思うと、靴を脱いで家が上がったくりちゃんに、洗面所から「それ」を持ってきた。母がものぐさに置きっぱなしにしていたものだ。

母の香水である。母の持ち物の中でも、最もにおいがきつい事で有名なブランドの香水だ。母はまるでお菓子でも渡すかのように、咄嗟に手を差し出したくりちゃんの手には香水の瓶を渡す。鮮やかな色柄の瓶だった。母は僕が受け取っていた弁当箱を片手に気軽にいう。

「はい。これ、部屋に噴いて。一吹きでいいから」

「……香水は、趣味じゃない。それにこれ、女物だろう」

「消臭剤だと思って。一吹きでいいよ、それで十分な筈だから」

「……わかった」

反抗期だったくりちゃん。しかし、このやり取りでわかってしまった。これは、くりちゃんがまだ及ばず、そして母が口を出すべき事。つまり、まあ、彼らの「日常」絡みだった。

その後、素直に香水を噴いたらしい。母にそれを渡していたくり

ちゃんは、数日後、気がつけば顰めっ面をやめていた。

ただ、この前久しぶりに母校を訪れたら、女の人が校門の前に立っていた。顔はよく見えない、しかし悔しそうな表情をしている気がした。そしてだいたい距離が離れていたのに、あの甘いにおいが漂ってきた。

くりちゃんには、「帰宅する時は大通りを通ってきてね」といつておいた。全くもって、もてる男は罪作りである。仮に相手が生きていても死んでいても。

おまけ

「そういえば、ウチの近所に元刑場があったらしいね」

「ああ、あれは地名がそれっぽいだけで違うそうさ」

「えっそうなの。怪談とかよく聴くけど」

「大学の教授がいつていたんだがな。そう思って、俺も調べてみたんだが。やはり刑場もあつたらしい。ただ、地名とは関連性はないそうさ。ただ、単にそれらしいだけだ。刑場は地名がついたあとから設置されたんだそうさ」

「へえ」

「火罪による刑罰は執行されたらしいがな。記録がある」

「……江戸時代の火罪って、火あぶりじゃなかったっけ。この藩も同じだったかはわかんないけど」

「……そういえば、この地域はやけに治水がしっかりしているな」

「都市化より治水が最優先だったらしいよ。雪国だから水が多いし。お陰で洪水とかはないけど」

「……あの辺りの幽霊には遭遇したくないものだな。さぞ、喉が渴いているだろうから」

「でもくりちゃん、あの辺の医院が掛かり付けたよね。アレルギーの」
「いな。俺も今気付いた」

付喪神は鋼鉄羊の夢を見るか【女審神者十大俱利伽羅】

昔の事だ。もう20年も前になる。複数の部隊の本丸が襲撃を受け、何人もの審神者が殺された。この際に刀剣が破壊されたと同時に、大量の歴史修正主義者・検非違使を生み出している。

簡単な事だ。彼らは殺された主を求めた。みすみす殺させた自分を恨んだ。だから、選択を変えたかった。運良く生き延びた刀剣男士もいたが、ほとんどが主を助けられなかった事を悔いていたという。これは所謂「ホワイト本丸」を運営していた審神者を狙ったものであり、彼らは同じ審神者を師匠とし、彼らも師に倣い刀剣男士に心尽くして接していた。師匠と門弟は、悉くが殺された。この事件の裏側にあつた陰謀は、20年経った現在も明らかにされていない。この門弟の師弟達を疎んだ政府の1部の手引きともいわれている。しかし、歴史修正主義者が自分達の数を増やしたかったという名目は明白。中に検非違使が出たのは彼らにとつて意外だったろうが、どちらにしろ敵勢力の増産は明らかかな事だった。

襲撃を返り討ちにし生き延びた門弟の審神者のうち、彼の指揮下でとある部隊の本丸が向かった。そこには彼の同輩であり、師匠の娘でもある審神者がいる筈だった。この時、不可思議な事があつたという。本丸は荒れており、襲撃を受けた事は明らか。だがその門の前にいた大太刀は、黒い煙を纏い、赤い閃光を放ちながらも彼らが来る——1枚の紙片を指しだし、そして姿を消したのだ。

受け取った当時の部隊長である大俱利伽羅が呆然としているのを、他の男士が悲鳴混じりの声で報告を上げる。審神者の遺体を発見、刀剣及びこんのすけも諸共「破壊」されていた——と。

しかし、大俱利伽羅はその中で冷静だった。他の男士に抱えられた、桜の着物を袈裟懸けに斬られた若い女の遺体。その死に顔を見たのち、彼は迷わず茶室に向かった。本丸の内部の構造は違えど、茶室の位置はどこも変わらない。彼はその紙片を片手に、自身の本体を傍

にいた男士に渡すと、迷わず茶室に潜り込む。

遅れて入って来た短刀男士が見たのは、息を飲む光景。

傷だらけの室内。恐らく自身のような短刀などが入り込んで振り回し、命あるものや刀剣達を捜し回ったのだろう。だが、結局、その子供の命は絶てなかったようだ。

「……この審神者が、生んだ娘だそうだ」

そういつて大俱利伽羅が、やや不器用そうに抱える幼い少女。5つにも満たないような、大凡子供らしくない模様の着物に身を包んだ少女が、彼の腕の中でむずがっていた。

その顔は、先程見届けたこの審神者の女性と、あまりによく似ていた。

しかし、その報告を受けて、自分達の審神者は驚いた。

「子供を産んでいたなんて、そんな話は誰も知らないぞ。戸籍もあるかどうか」

それから、再び審神者の育成が待たれた。

執務室の扉が開かれる。そこには、膝を突きながらこちらを睨む大俱利伽羅がいた。静かな昼下がり、不機嫌そうに、机に向かう女性を見る。

男物のダークスーツを室内でもジャケットまで着込んだ、長い黒髪を括り上げた女性だ。これまた黒い革手袋を嵌めた彼女が筆を動かしていた。そんな彼女に、本日の近侍の彼はいう。

「おい、誰か来ているぞ」

「ああ、朝にもいつてたお客だよ。私の師父の部隊の大俱利伽羅」

そういつて、左手で書き付けていた筆を硯に置く。卓袱台に手を突くと、彼女は首の骨を鳴らしながら彼に続ける。

「師匠の話によると、焦げ茶っぽい表に派手な赤い裏地の着流しで刀を引っ提げてくるって聴いたけど。その通りの格好だったか」

「ああ」

「なら通していいよ。師匠と向こうの大俱利伽羅を使いにして情報の

交換をする事になってたんだ。ちよつと準備してくるから、誰かに応対させておいて」

「……わかった」

そういつて、ジャケットを脱ぐ。シャツも黒い。まるで塗り潰すような黒だ。若い女の柔肌に、その黒さは痛々しい程沁みていた。大俱利伽羅は、障子を閉めた。

茶は、厨にいた鶯丸が淹れたものだ。湯飲みを手にする、向かいの大俱利伽羅はいう。小脇にはやや大きめの風呂敷包みを置いていた。ここの自身よりも、やや老成した雰囲気を帯びていた。着ている黒鳶色の表地と猩々緋の裏地、それを締めるくすんだ赤の帯。それを何て事のないように着こなしている目の前の自身とは、確実にこの世界に顕現した年数の差を感じる。いつも通りの学生服を極端に崩したような服で卓袱台の向かいに胡座を搔くこちらの大俱利伽羅に、今日の客——審神者の師父の部隊の大俱利伽羅が、僅かに苦笑めいた表情を見せた。審神者は何かに手間取っているのか、まだ来ない。

「こちらの光忠でも呼んでくればよかつただろう」

「……こちらのあいつは遠征中だ」

どうやら、こちらが明らかに疎んでいるのを看取しているようだ。それも気に喰わず、眉を顰める。そも、鏡に直面させられ続けているようなものだ。人間でいえばドツペルゲンガーに等しい。彼は間違はなく自分であり、しかし分霊であるから——ある審神者は「コピーペースト」と表したそうだ。「改変されて然るべき存在」だと——、現世で過ごしているうちにそれぞれに差異が生じる。それぞれの審神者の元で少しずつ異なる人格を育み、人間関係を築いていく。まず審神者が千差万別なのだから、それと接する刀剣男士の性格が変わっていくのも当然だろう。ヒトの姿を模せられているのだ、他人とは自分を写す鏡である。実際、目の前の大俱利伽羅は、ここの審神者の師父の元に顕現して20年経つ。中々に個性溢れる師父らしく、目の前の分身はより落ち着いた性格をしているようだった。一方、自身は彼に比べれば顕現されて日も浅い。加え、ここの審神者は実年齢よりもぱつと見の年頃よりも落ち着いている。「反抗期の少年のような気

質」といわれる自身である。落ち着いた態度で接せられるとかえって落ち着かないのが本音だ。傍から見れば、一卵性双生児の落ち着いていいる方と落ち着かない方、と見えただろう。「主の師父のところの大俱利伽羅が来た」という事で、客間の前を短刀の影がちらついていた。ついでにいうと、あのポニーテールは恐らく青江だろう。あとで殴ろう。笑いを堪えている様子の目の前の自身に、ばつが悪そうに話しかけた。

「……ウチの主が手間取っているようだ。余程の大荷物らしいな」

「この様子だとどこかで虫でも発見したのかもな。この主は大の虫嫌いだぞ。悲鳴も上げられずにひとり対峙しているところなのかもな」

「……そうなのか」

思わずきよとり、目を瞬く。目の前の大俱利伽羅からもたらされた情報ははじめて聴いた話だ。障子の向こうで顔を見合わせている者達がいる。「確かに主は超虫嫌いだよ、最初の頃は俺がよく駆除してあげてたし。ちよつと俺様子見てくる」と小声で囁く初期刀の声が聞こえてくる。その前にお前が接待しろ、と聞いたかったが打刀の機動は速かった。舌打ちすると、何を思ったのか。目の前の大俱利伽羅は肩を竦めた。

「いっておくが、俺はこの審神者とは昔からの付き合いだ。この審神者の師父……養父は俺の主でもあるからな。専ら本丸で過ごしていた主がこの審神者をウチの本丸で育てていたんだ。ウチの部隊では周知の事実なだけだ」

「そうか」

いわれてみればそうか、と思いつく。先程から待っている審神者の師匠を師父、と表現しているのは単純な話だ。この大俱利伽羅の主は、この部隊の審神者の師匠兼養父なのだ。元はといえば、その師父は同じ師匠筋の門弟であり、そしてその師匠の娘が、この審神者の実母だったという。実父は不明。そもそも子供がいたという事実すら、こんのすけぐるみで隠蔽していたというから、これをこのこんのすけから聞かされた時は不可解に思ったものだ。尤も、その後

かされた、20年近く前に起きた「本丸同時多発襲撃事件」の方に気を取られてしまったが。

現在、検非違使の出現もあり一時勢力を弱めていた歴史修正主義者が勢力を再び強めたのは、偏に20年程前に起きた、審神者の殺害事件の為だ。殺害された審神者は50名を下らず、本丸の座標が特定された原因も、彼らが同じ師匠筋——この審神者の師父と同じ門弟達が軒並み被害に遭った原因もわかっていない。ただ、「自分達の主を死なせてしまった」という事実は、破壊された、あるいは破壊され損ねた刀剣男士の有り様を歪めるのに充分だった。結果として、大量の戦力を敵方に提供してしまったのである。

そして、その師匠の娘。彼女もまた審神者をしていた。だが彼女も殺された。偶々救出に向かったのちの師父の部隊は生存者は絶望的、と思っていたところ、見つけたという。茶室の棚から、小さな小さな少女を。

それが現在、ここで審神者業を営んでいる主だという。戸籍のなかった彼女は、城の中がほとんどぼろぼろになりながらも1部の資料から生年月日を推定、それで戸籍と名を与えられ、保護者となったのが現在の師父だ。ほとんどが死んだ同じ門下生の中で、そのひとりの面影を強く残す少女は、師父に感傷を抱かせるのに充分だった。そしてそんな主に同情の念を寄せ、ほとんど本丸で過ごす少女をその刀剣男士達もかわいがり、時には叱り、育てた。

かくして本丸生まれと思いき彼女は、そのまま本丸で育ち、義務教育を終えた現在。学校と本丸を行き来する生活を送っている。

『最初から、政府には、この子が長じたら審神者にさせるので自分に育てさせてください』っていつていたんだそうだ』

なぜ実年齢の意外な若さにも関わらず、審神者をしているのか。それに対しての問いかけに、審神者はどこか他人事のようについていた。それに、なぜか大俱利伽羅は無性に腹が立った。

どうでもいいはずなのに。

「それで、この審神者は元気にしているか」

「……俺としてはどうでもいいが。まあまあじゃないのか」

問われ、回想の海から脱する。足音が近付いてきた。「主、あんな虫に臆してどうすんの!」「怖いものは怖いんだ!!」というやり取りが聞こえてくる。どうやらこの大俱利伽羅の予想通りだったらしい。「ほら、あの通りだ」と顎を示せば、目の前の自身はひどく安堵した様子で微笑した。そう、笑んだのだ。鏡の中の自分が笑ったようでも、気持ちが悪い。そうはつきり顔に出すと、再び彼は肩を竦めた。

「まあ、『こここの』俺はそれで丁度良いな。俺としては、妹のようなものだから」

「御免御免、お待たせ。あれ、大俱利伽羅。結局お前が廣光兄ちゃんの接待してくれたの」

先程と変わらぬダークスーツ、しかしやや髪を振り乱した様子なのは虫と格闘していたかららしい。「とりあえずあんたは部屋に虫除けを置いておけ」と、大俱利伽羅は立ち上がりながら客間を辞した。

それが、「廣光兄ちゃん」とこの日会った最後。背を向けた大俱利伽羅は気付かない。もうひとりの自身が、彼の腕まくりした左腕と、入って来ながら「内緒話するから離れてて」と刀剣達を散らす審神者の左腕を見た事に。

拒否してもいいんだぞ。師父がいう。しかし、それが彼の立場をとっても悪くする事だと、わかっていた。だから、笑って頭を振った。あまり表情筋の動かない方だが、それでも笑顔は特別母親似だといわれた。

父親について、言及された事はない。それが、証左。

「大丈夫だよ。人手が足りないんだろ。それなら買い手市場じゃないか。一生拘束されるといっても、就職すれば似たようなものだもん」

「……本当に、悪いな」

「だから謝らないでって。寧ろ感謝してよ。政府からの報酬で学費だって払えるんだから」

「ああ、それは確かに」

「熱い掌返し!」

笑っていえば、「何じゃ、楽しそうじゃのう」と師父の初期刀が盆を

片手に顔を出す。進路相談、それもこの本丸で行われていた事だ。

「見習い期間も、そういえば免除されていたな」

「引き取られた当時から、師父の本丸で生活してたからな。今更だ。それで、この荷物は」

話を終えて、廣光が卓袱台に載せてきた風呂敷を見遣る。それはこの大俱利伽羅ならば、彼が最初から携えていたものだと指摘できただろう。今は人払いしており、障子の前にも誰もいない。その中で、差し出された風呂敷を見遣る。ごくありきたりな、緑の唐草模様の風呂敷包みという、ある種のステレオタイプともいうべき風呂敷だ。恐らくこれは師父のユーモアだろう。苦笑しながら、広げる事に許可を求める。廣光は、少しだけ笑って許した。

「お前の師父から、審神者になった祝いに、と。忘れていたそうだ、渡すのを」

「祝いについて……これ、子供用の着物じゃん」

そういつて、審神者は広げる。黒い革手袋越しにも、中々上等な反物だとわかる。しかし、それは女性にしては大柄な方の審神者にしては小さなものだと言った。直ぐにわかった。

白地に青と赤の模様。帯もついている。帯も上等な仕立てだとわかるが、それよりも審神者が気になったのは、子供向けにしては少々大人っぽすぎるその意匠だ。矯めつ眇めつ、それを見る。

「それに、何でこの着物、竜のデザインなの。子供向けならもつとこう、かわいいものとかさ」

「それは、俺がお前を見つけた時に着ていた着物だ」

「……」

声を低める。目を瞠った。金色の目が、こちらを静かに見ていた。まだ顕現したばかりのこちらの大俱利伽羅と異なり、20年の歳月を感じさせる。年功が、そこにあった。

刹那、脳裏を掠める。審神者の頭に浮かぶのは、とてもとても臆気な記憶。夢だと思いこんでしまえばそれまでの、手から零れてしまうもの。

『隠れん坊だ。ここで誰かに見つかるまで、息も声も潜めている。』

……
が見つけたら、お前の勝ちだ。好きなようにしていいぞ」
その台詞を喋ったのが、「誰」だったのか。今ならわかる。そして、自分は永久に勝てないし、既に勝っている。そんな矛盾の籠もった隠れん坊を仕掛けられたのだと思い知る。廣光は嘆息する。

「恐らく手縫いか、職人に誂えさせたか……ウチの主曰く、お前の実母は相当な着道楽だったらしいからな。それは手はじめだ。成人式までに、形見分けでウチの主がしまっておいたお前の母親の着物を贈って寄越すつもりだそうさ。着付けは……この次郎太刀にでも聴いてみる」

「……廣光兄ちゃん」

「次は誰が使いになるかはわからん。だが、ちよくちよく顔は出させて貰うぞ。特に、この『俺』は少し、危うい」

「……今のところ、普通に戦ってくれているけど」

審神者は、自身が兄貴分のひとりとして慕っている彼の言葉の意味がわからず、怪訝そうに首を傾げる。

確かに、今まで自分が親しんできた刀剣達と、新規に顕現させた刀剣達は違う。けれどそれは既にわかつている事だ。本来は大俱利伽羅は、ここまで人と話す刀剣男士ではない。今日は偶々近侍にさせていたが、それも嫌々そうだった。そういえば昔の廣光も、自分が懐きに行つてもろくに話しかけてこず、ただ好きに遊ばせていただけだった事を思い出す。そういう気質なのだと理解しているつもりだ。その上で指示に従ってくれているし、今のところ強い衝突もない。特に問題はない——そう、感じていた。

だが、廣光は頭を振る。

「そういう問題ではないんだ。お前はわからなくていい、……いや、わからない方がいい事だ。ややこしい事になる」

「ややこしい」

「俺達が猫かわいがりしたせいもあるだろうが、お前は色恋が得意ではないだろう」

「——へ」

口を半開きにする。それを見て、廣光は苦笑を広げざるを得ない。

この少女は、まだ成人すらしていない。23世紀でいえば「女子高生」に当たる身分だ。見た目こそ20代程に見える長谷部のような類だが、実年齢と精神年齢はそれなりに相応していた。男所帯で暮らしていた弊害だろう。極端にそういった事に鈍い一面がある。

そう、たとえ、自分が兄として慕っていた廣光と「同一の」分霊である大俱利伽羅に、少なくとも関心を示されている事に気付かない程度には。

想像もした事がない、という様子で、彼女は頭を振る。

「だって、大俱利伽羅は……」

「その先はいわなくていい。……だが、こちらの『俺』は与り知らぬ事だ。分霊は既に別人。俺も知識でしか知らぬ事だ。加えて。お前は、ここで誰にも肌を見せていないだろう」

「……もう、癖になっちゃってるし。こここのこんのすけは、飽くまで中立だから。師匠のところのこんのすけみたいに抱き込みとか、そういうのはできそうにないし」

そういつて笑う、彼女は常にならない弱気そうな表情だった。それは廣光達ならばそれなりによく知っている顔だ。だが、大人びた顔立ちの彼女は硬質な表情ばかりしかこの刀剣達は知らないだろう。その理解を深めていく事が重要だと、廣光は考える。

但し、「大俱利伽羅」だけは駄目なのだ。彼とは、主従関係や友人・仲間などのそれ以上の関係になってはいけない。なぜなら――

「――あれ、これは」

「ああ」

広げていた着物から、1枚の紙片が落ちる。それに、見覚えがあった。自身の方へと落ちてきたそれを、廣光は片手で拾い上げる。

墨筆で書かれたメモ。墨は1000年の永きに耐えるという。ほんの20年もない期間では、掠りもしていない。ただ、乱れた筆致が、この時に「彼」が書いた時の心身共に生じていた動揺を示していた。それを、彼女に渡す。これは、嘗て自分があの、本丸の前を陣取っていた大太刀から受け取った紙片だった。左手で受け取る彼女に、廣光はいう。

「ただの手紙だ。お前の実母のところから出た、歴史修正主義者からのな」

「——これって」

「これぐらいしか、お前の親の形見といえるものはないんだ」

言外に、謝る。子供用の着物と、反故にされたような紙片に書き散らされた墨筆。しかし、彼女はしっかりと、それを見詰め、着物を握った。

これらが今の自分を形作っているのだ。彼女はそう思うと、涙を浮かべたくなった。そして同時に申し訳なくなる。

手袋の下のそれを、弱点と思っている自分に。

気のない様子で、大和守が背中合わせの加州にいう。

「へーえ。エーテル体で不妊手術成功、だって」

23世紀。様々な情報媒体やデバイスが出回っている。いまだに紙媒体を溺愛する者もいるらしいが、少なくともこの本丸は電子媒体に偏重していた。審神者がまだ10代であるのも手伝っているだろう。陸奥守も支援して、積極的に新しい情報媒体が取り入れられている。その中で流れたニュースのひとつに、大広間の隅にいた大俱利伽羅はふと耳を傾ける。客間の「廣光兄ちゃん」と審神者の面談はまだ終わっていないようだった。先程帰ってきた燭台切が新しく茶を出しに行つたのを見送つたのが最後だ。その中で、「沖田組」と称される二口は、片方の言葉に「なにそれ」と顔を向ける。

彼らの体を構成する物質の名は、嘗ての科学の基礎となった錬金術からとり、「エーテル体」と仮称されていた。仮称は仮称のまま定着しようとしている。それが医療や科学、それ以外に様々な分野で大きく進出している事は、この本丸でも知られている事だ。審神者の中には、歴史修正主義者に襲われて失つた片足をエーテル体で、まるで元と同じ足を構成した者もいるという。それは21世紀、細胞に関する技術が開発された時のような躍進ともいわれていた。

その技術の粋が自分達刀剣男士なのだ。あまり自覚はないし、大俱利伽羅は加州の気のない様子にも納得がいく。自分達は戦えれば

それでいいのだ。刀を抱えて壁により掛かっていた大俱利伽羅の耳に、大和守が続ける。手にはデバイスがあった。それを示して彼はいう。

「何でもさ、病気で赤ちゃんを作るところを丸ごと摘出しちゃった女の人に、丸ごと再構成して移植して、そのまま出産まで至ったって。因みにこの時生んだのは双子だったさ」

「何それ凄すぎない」

「ね。でもこれで凄いのはさ、卵子を作るところも再構成出来る事なんだってさ。クローン細胞ともまた違うんだって」

「どういう事」

「僕達付喪神と同じく、その人の体の記憶、っていうか遺伝子を読み取って、その人が新しく子供を作る為の臓器を作り上げるんだって。仕組みはよくわかんないけど、つまりその人の中でまた新しく何かが作れるものを、失う前と同じように作れるって事だよ。生まれてくる子供は紛れもなくその人の子供なんだってさ」

「……俺達が眠っている間に、随分人間って科学を進歩させてんだねー」

どうやら加州にはびんと来なかったようだ。無難な結論に落ち着いている相方に不満があるらしい、もつと真面目に聞けよと猫の喧嘩に発展しそうな二口を余所に、大俱利伽羅は考え込む。

——本来、子供を作る事が出来ない者に、子供を作る部分を与える。それは、神の所業に等しいのではないか。自分達も「神」と呼ばれる存在だが、それは畏れ多い事に思えた。そして同時に思う。

自分達刀剣男士にも、人間と同じ「生殖機能」がある。少なくとも、恐らく限りなく近いものだろう。政府もこんのすけも何の説明もしていなかった。だが、もし異性と性交渉を持った場合、果たして子供は出来るのだろうか。時に行われる「花街」遠征だと、相手をする女性達は全て避妊をしていると聞いた事がある。それはつまり。

「——あーっ！」

大俱利伽羅が考え込んでいる間に、喧嘩に発展していたらしい。何かが弧を描いて飛んでいった。デバイスだ。それは天井を掠める事

もなく、見事に飛んでいった——池の方へと。

ぽちゃん。

沖田組が縁側へと駆けつけ、慌てて靴と下駄を履こうとする。

「ちよつ……あれ防水だったっけ!？」

「わかんない、けど池にも落ちとすなつて前に主に」

「そうだよ、全く。何をやっているんだお前は」

「わ、主！」

「——」

悠々と、池の方へと歩いていく。女性としてはやや低めの声は、池の方へと向かっていた。大俱利伽羅も思わず顔を覗かせる。見ると、そこには既にあの廣光の姿はなく、スーツのジャケットを脱いでいる審神者の姿があった。何を考えているのか躊躇いもなく駆け寄っていく審神者は、ジャケットを加州達の方へと放る。

そして池を覗き込みながら、左手の革手袋を外した。そして袖を捲る。思わず目を瞠ったのはいうまでもない。審神者が顔以外の肌を見せるのは、それがはじめてだった。

そこにあつたのは、日に焼けた様子のない白い女の腕だった。やや遅しかったのは、審神者が剣道を嗜んでいるせいかも知れない。彼女は袖を大胆に捲った腕を池に突っ込むと、躊躇いもなく引き揚げる。そこには水浸しになったデバイスがあつた。「あーもー、藻まみれ」と顔を渋くさせる。そこに、燭台切がどこからかタオルを持って駆け寄ってきた。先に審神者の左腕を拭いてやるが、「先にこっち拭いて」とデバイスを差し出してくる。水浸しのそれは、何の変事もなかったようにニユース画面を示し続けていた。どうやら23世紀の科学技術は防水に関しても他の追随を許さぬようだ。デバイスを沖田組に渡すと、「喧嘩するのは構わないが、こういうのはやめろ」と腰に手を当てて叱る。しかし、2人とも、そして大俱利伽羅も、どちらかというとその左腕の方に注目していた。

はじめてだ。手袋を外したのは。

常に手袋を嵌めている刀剣男士は珍しくない。しかし、審神者は一般人の筈だ。彼女が常にダークスーツと革手袋という服装に身を包

んでいる理由がわからなかった。初期刀の加州ですらそうだったらしく、「主、はじめて腕まくりしたね。それに手袋も」と呆然とつぶやく。それに、審神者は苦笑しながら腕を拭いた。腕の匂いを嗅いで顔を顰める。踵を返して私室に向かう彼女は浴室に入るつもりだろう。そのまま、彼女は答える。白い顔を示しながら。

「ほら、私はこの通り色が白いだらう。とても日光に負けやすいんだよ。だから、出来るだけ露出はしたくないんだ」

「でも別に、黒革手袋である必要はあったの」

「白い革手袋よりは入手しやすいし。それに革手袋の方が日常の動作がしやすいね。それに合う服装ってなると、無難なところでスーツぐらいしかないんだよね。学校は幸い女子もネクタイのブレザーだから組み合わせとしてはマシな方だけど」

どうやらファッションにはそれなりに拘る質らしい。誰の影響だろうか。大俱利伽羅は他人事のように思う。その中で燭台切が預かったデバイス片手に彼女の背中を押す。スーツといい手袋といい、そういえばファッションが彼と似ている気が大俱利伽羅にした。年の近い父娘といったところか。そんな事を大俱利伽羅が考えている中で、「ほら、池の臭いが取れなくなっちゃうよ」と審神者の背中を押す。彼は優しく笑っていた。

「向こうのくりちゃん湯飲みとかなら僕が片付けておくから。それにしても結構長話していたようだね」

「何せ兄貴分のひとりみたいなものだからな。お前達は私にとって新たな仲間だな」

そういつて「デバイスは拭いておくように」と沖田組にいう、彼女の笑みは、確かに審神者になるべき人材に思えた。

そして、彼女にとても似ていたという母親を主としていた刀剣達の苦しみを想う。もつと柔らかな雰囲気だったらしいと、話に聴いていた。だがもし同じような、人を、神を惹きつけるやり方を門弟達が持っていたとしたら——20年前の打撃は相当だっただろう。大俱利伽羅は、背筋を伸ばして歩み去る彼女を眺めていた。それを、周囲がにやついた目で見遣っている。

大俱利伽羅が審神者を特別視している事は、周知だった。

肌が弱いのは本当だ。ただ、本当はプールで塩素負けをする程でもない。体育の授業では、必ず上だけは長袖を用いた。師父は常に先手を打って、学校側には「事情がある」と説明した。それだけ、肌を露出する事は避けたかった。

20年近く前のあの日、審神者になる事が決定づけられ、そして刀剣男士達と接触する事が避けられない事態だとわかっていても。

「証拠を掴んだら、容赦なく実験台にしてきそうだったしな。特にあの頃はまだ技術が確立しきってなかったし」

ひとりごちる、審神者は私室の浴室。そこでスーツを脱いでいる。池の藻のにおいがつきそうさ。ついでに風呂に入ってしまった。そう思いながら洗濯籠に服を脱いでいく。浴室の扉を開いた。右手で開いた方が簡単な構造の扉だが、つい左手で引いてしまう。左利きというのはいった時に不便だ。剣道の時も、右手で持つように直されたものだ。尤も、稀に自身も剣を振るう時は、隣の刀剣男士に刀がぶつからないように気を遣うので結果としてはよかったが。そんな事を思う審神者は、既に全裸だ。髪も解いている。脱衣所の鏡に、浴室に入っていく彼女の背中が見えた。

彼女の右腕を縛るような、俱利伽羅竜。肩の裏には、その堂々たる髭の顔が刻まれていた。

最初は痣だと、師父は思っていた。しかし、自身の大俱利伽羅が、彼女の丸の前で待ちかまえていた「黒い煙を纏った大太刀のようなもの」から渡された手紙。そして、着ていた着物の柄、母親にあまりによく似た容姿、大俱利伽羅は磨り上げ前は大太刀であった事——それらが、彼女が紛れもなく人間とエーテル体の合いの子であることを示していた。あの刺青は、遺伝情報に刻まれていたらしい。年を追う毎に、容姿は全く似ていないにもかかわらず、「父」の印が右腕に浮かんでいく。大俱利伽羅は右手で太刀を振るう。利き手の反対側に刻ま

れた刺青——それと相對するように、左利きだった少女の右腕に、それは現れていった。

水遊びは本丸に設置したビニールプールで。水着はウエットスーツのみが選択肢だった。痣というにはあまりに鮮やかで細やかなそれは刺青にしか見えず、そしてそれを万が一にも政府に知られた日には根掘り葉掘り聞かれるだろう。そして、誰が父であるかも。

『全身がエーテル体の者との子供は作れるのか』

それが、このところの政府の思案だった。要は、「神」である刀剣男士から種を貰えないかと考えていた。幸い、刀剣男士は軒並み容姿が優れている。女性の審神者と恋に落ちる事など珍しくなく、偶に同性同士でもあり得る。ならば積極的に「それ」の奨励を行い、そして出来れば生まれた子供は政府に引き取らせて欲しかった。これからの「医学の進歩」の為に。——21世紀程の深刻な少子高齢化は逃れられたものの、やはり人は減っていたのだ。

『すまん。問題を先延ばしにただけだった。あの時、お前を政府に引き渡したくなかった』

審神者になってくれ。そういった時、師父は土下座した。それが、彼女には申し訳なかった。あまりにも、申し訳なかった。……今は先程、ダンスの中に仕舞ってきた風呂敷包み。その中に鎮座している子供用の着物と、書き付けられた手紙。それらを思い出しながら、彼女は思う。

こんのすけを抱き込んでまで、自分を生んだ母。本丸が襲われ、恐らく真つ先に殺された母。そんな中、歴史修正主義者、もしくは検非違使へと身を落としながらも、自分の「娘」を隠す事だけは頭に残っていた。

あの時にいわれた言葉を、もう1度思い出す。

『隠れん坊だ。ここで誰かに見つかるまで、息も声も潜めている。……父さんが見つけたら、お前の勝ちだ。好きなようにしていいぞ』
黒い煙と骨を纏い、声は金属音が混じりはじめていた。それでも、父は——あの大俱利伽羅は、茶室にそっと自身をしまった。何もわかっていなかった自身は、そのまま眠ってしまった。

あの隠れん坊は、本当はいまだに終わっていないのだ。あの時自分を見つけたのは「廣光兄ちゃん」であり、屹度、父はいまだ彷徨っているだろう。ノズルを回して、彼女は思う。

もし、「大太刀」の敵に会ったら。——父がいまだ、嘗ての意志を有していたら。

それと、今の自身の仲間となった大俱利伽羅が接触する事は、避けなかった。「廣光兄ちゃん」にも。

出来れば自分の手で葬りたかった。再び付喪神になる事もなく、人間にも刀に戻る事もなく。ただ静かに眠って貰って欲しかった。自身の出自を知ってから、自分が人間かそうでないのかわからない自分が望むのは、ただそれだけだった。

「……池の清掃、こんのすけに頼むかな」

ひとりごちる、審神者は左腕のにおいを嗅ぐ。両腕共に白ければ、こんな風に悩む事もなかったのに。審神者は嘆息した。

その姿は、ヒトそのものだった。

あの日、密やかながらも自分達は誕生を祝った。

刀剣男士総出での出産。生まれた子は、僅かに右腕に痣が見える以外には、母親にとっても似ていた。

駆けつけてきた大俱利伽羅。彼は無言で彼女と子を見詰めていた。

そして、微笑んだ。

End.

「彼」の理由【伊達組】

え、と彼女は顔を上げる。実家が中華料理店らしく、彼女の作った炒飯は旨い。畑内番のあとに小腹が空いたと主張した彼らに与えられたそれは殊更旨く感じた。それを頬張る2振りの「打刀」から聞かされた話に、審神者は面隠しの下の目を瞠った。

「たぬき、和泉守。あんたらって太刀男士だったんだ」

「おう」

「強くて格好いい流行の太刀だったぜ」

前者の回答は簡潔、後者は長い。しかし答えはどちらも是だ。どちらも飯粒を頬につけているのが間抜けである。特に和泉守はなまじ華やかに整っている為、その落差がひどい。食い散らかす様は同田貫の方が堂に入っている。堀川が存在、大事。常に彼の身だしなみを整えている堀川は和泉守兼定フェチだと審神者は認識していた。ひよつとしたらフィギュアの類を与えたら案外趣味にしてみようかも知れない。それぐらい、和泉守の頭の天辺から爪先まで整えているのは堀川だ。こんのすけに頼めば気軽に出された、20年前の資料。当時の記録を辿れば、確かに今は打刀に磨り上げられている何口かが、この頃は太刀に分類されている。それに、審神者は目を瞬く。

本来は神職の家系ではあれど、20年前の「本丸同時襲撃事件」にて兄以外の家族・親族を失い、ひとまず義務教育を受ける為に養子に出された。その先が下町の中華料理店だった。養父母は良くしてくれたものの、審神者になる話が浮かぶまでは歴史に関しては学校の授業程度しか知らなかったのが実情だ。襲撃を振り返りにし、難を逃れた兄としては、幼い妹に出来るだけ審神者にさせないようにしたかったのが本音だったとは、中学時代の見習いを経、5年のブランクを置いてから正式に審神者に着任してから聞いた話だ。そんな兄が、弟子として同じ門弟の審神者が密かに産み落としていた子供を、審神者にするべく育てていた——というのはまた別の話である。閑話休題、デバイスの資料を眺めていると、皿を半分程空けた同田貫が続ける。

『本尊』から受け取った記録だとな。昔は歴史修正主義者が拠点とし

ていたのは厚樫山までだったんだそうだ。しかも当時は向こうが優勢でな」

「へえ」

「ただ、検非違使が出てきてからは話がかわつちまったんだ。あんたにとつちや検非違使はもう当たり前の存在かも知れないが、当時は中々に衝撃的だったぞ。今まで相手にしていた奴を横合いから斬りつけて、『時代遡航自体がけしからん!』ってこつちにすげえ物量攻めで来るんだぜ。政府がバツクについてて、補給も『形』もしつかりしている俺らはともかく、それで歴史修正主義者が数を減らした……で、向こうもやり方を変えてきたんだよ」

そういう、和泉守はレンゲを片手にいう。青い目が真摯だった。口の端についている飯粒は相変わらず間抜けだったが。和泉守の言葉を受け取り、デバイスをめくる。そこには、当時の戦況の記録があった。

——刀剣男士と検非違使の物量攻めに遭った歴史修正主義者。彼らは戦略的に不利になり、ゲリラ戦へとやり方を変えた。ピンポイントで歴史を変えようとしてきた。その多くが「夜襲」という形で。

審神者はそこで肯く。「太刀男士」だった頃と同田貫と和泉守。彼らは夜戦では非常に不利だ。ましてや夜戦では重要視される遠戦が出来ない上に機動が遅い。池田屋の記憶以降では打刀以下の長さの刀剣が重要視されるのはこの為だ。審神者はいう。

『闇討ち、暗殺お手の物』。最長打刀、最短短刀の方が懐に飛び込んで一撃必殺出来る。でも少々、これからの戦いを考えると打刀以下の数が心許ない。それで、『本尊』から許可を下ろして貰って、あんたら3人が打刀に磨り上げられた、と」

「池田屋つつつたら俺達新撰組の縄張りだぜ。俺だけ仲間はずれの形になつちまつたからな。打刀でも充分戦えるし、格好いいのは変わらないだろ」

「あーうんそうだねー」

「おい棒読みやめろ。……同田貫は何でだっけか。戦える場所が欲しかったんだっけ」

「おう。打刀に磨り上げられたぐらいじゃ、俺の刃の威力は落ちねえよ」

飯粒はそのまま、レンゲで胸を張る和泉守は、確かに見てくれや面
倒見はほれぼれする程男前だと審神者は感じている。ただ、それゆえ
の時たまやらかす慢心は勘弁して欲しいものだ。そう思いながら同
田貫に目をやれば、彼は皿を口に当てて掻き込んでいる最中だった。
真っ直ぐな言葉は、彼を顕現させた時の直刃を思い出させる。量産品
とは思えぬ程の真っ直ぐな刃紋は、彼女には美しく思えた。顕現した
時の驚く程無骨な青年に当初は驚いたものだ。尤も、今は納得してい
る。御手杵と同様、「無用の長物」扱いだっただ彼らが最も戦を求めてい
るのを。御手杵も、その威力と数の少なさゆえに今のところ槍男士の
ままだが、ひよつとしたら脇差に磨り上げられても構わない、ぐらい
は思っているかも知れない。今度、怖いもの見たさにでも聴いてみよ
うか。そんな事を思いながらデバイスを捲る。この記録は、20年前
から審神者をやっている実兄の部隊のものだ。だからこそこんのす
けも気軽に情報を渡してきたのだ。その中で、不意に目を引くものが
あった。

太刀から打刀への磨り上げ。ともすれば歴史修正主義者や検非違
使のように根本的な改造という「荒御魂」に陥りかねない、危険な行
為。それを受け入れた刀は、池田屋の記憶の改変阻止に固執した和泉
守。戦の為に柔軟に受け入れた同田貫。そして、もう一口いる。それ
が、あまりにも意外で、唐突に思えた。なので「おい余したんなら炒
飯寄越せ」てめえが喰うの早いんだよ」と子供の喧嘩をはじめている
二口に、審神者は尋ねた。それを指差しながら。

「ねえ。あんたら二口はまだわかるんだけどさ。何で、大俱利伽羅ま
で打刀に磨り上げられてるの」

「ああ、気になるか。やつぱ」

「当時の俺達の間でも、ちよつとぎわついたもんだな。そういう訳で
大俱利伽羅、主に馬当番の褒美に炒飯作って貰う代わりに教えてやつ
たらどうだ」

「……どうでもいい」

いわれ、顔を上げる。和泉守が皿を庇いつつ、目敏く縁側を見ていた。そこには、丁度内番を終えたらしい。大俱利伽羅が首から手拭いを下げて歩いてきていたところだった。エーテル体の体でも汗腺はあるらしい。汗を拭う仕種をしていた彼は、庭に顔を背けた。「打刀男士」の一口、大俱利伽羅が嘗ては太刀だった事を、審神者はこの時にはじめて知った。

「教えてやらないのかい。大俱利伽羅」

「そこを退け、鶴丸」

真っ白い太刀男士が、縁側に寝転がっている。大俱利伽羅の私室の真ん前を陣取って。審神者に作らせたと見える月餅が、鶴丸の口元を汚している。どうにも今日は口を汚している刀剣に会う日だ。そんな事を思う。先程、香ばしいかおりに誘われて覗いた部屋では、懐かしい話をしていた。時代を遡り、前線に出るようになった「大俱利伽羅」が、太刀から打刀へと磨り上げられ、もう20年経つのだ。「本尊」の自身が、政府からの要請を受けて承諾した時の気持ちを、鶴丸の言葉で蘇らせられる。沼に石を放り込んだように、それが舞い上がる。肩に提げた手拭いを握りしめた。

……どこかの自分。恐らく、20年前の襲撃事件で記憶が本尊へ「還元」された分霊だろう。その中で、自身はこことは別の部隊で囲まれていた。鶴丸に、燭台切だ。彼らは一様に、今回の決定を突然知らされた。特に驚いたのは鶴丸の方だった、というのが印象に残っている。燭台切は燭台切で、自身の肩を掴んできていた。ただでさえ体格差があるのに、揺さぶられて酔いそうさ。その感覚も蘇り口を押さえる。音は聞こえない。しかし、唇の動きで何をいつているかはわかる。

なぜ、打刀になるのか。そんな気を起こしたのか。政府が決めた事なのか、それとも自分自身で決めたのか、……

これは恐らく、当時のどこの部隊でも行われたようなやり取りだろう。当時の和泉守や同田貫もそうだった。特に堀川の反応は部隊によって喜んでいたりかなしんでいたり、区々だった。その差はどこで決まったのか、当時も今も大俱利伽羅にはわからない。ただ、今の「堀

川国広」は「兼さんは兼さん」と、打刀に磨り上げされた現在も慕っているのはどこも変わらないらしい。どこまでも堀川は堀川だ。一種の呆れも覚えながら、自身が答えたひとつを思い出す。

『俺とゆかりのある長谷部も嘗ては大太刀、今は打刀なんだ。俺も昔は大太刀だった、磨り上げされても可笑しくないだろう』

『それは理由になってないよ！』

全くだ、と同意したのは通りすがりの長谷部だ。長谷部は腕を組んで嘆息する。しかし、その眼差しは真剣だ。

『敵が刀種を問わず銃兵や弓兵を装備できるのは、〝歴史改変〟を受け入れているからともいわれている。大俱利伽羅、政府に何をいわれたかは知らないが、理由なき磨り上げは聞けんぞ』

『……俺達が阻止するのは〝これまで〟の歴史の改変だ。所詮は分霊の俺が〝これから〟磨り上げされようと、歴史に影響はない』

「全く、昔からお前は素直じゃなかったなあ」

同じ記憶を共有しているのか、それとも磨り上げが余程に驚かされた事だったのか。鶴丸が胡座を搔く。縁側が飽いたので靴を脱いで上がれば、月餅を加えていた鶴丸が、湯飲みを片手に笑って見上げる。見た目は清楚な少女、中身は好々爺。この太刀との付き合いも随分になる。そんな彼を見下ろしていると、鶴丸は口で弧を描いた。

「お前は、ただ池田屋の記憶に行きたかった。それだけで打刀に磨り上げされるのを了承したんだろう。——どこかの本丸で、光忠に問い詰められて白状していた。何せ、池田屋方面は『太平洋戦争阻止布石部隊』なんてのがいる。実際、池田屋事件が起きなければ、日本は戦争に参加する事はなかったといわれている。大俱利伽羅。お前は、それで虚心ではいられなかったんだろう」

弓のような笑みだった。しかし、目元はどこか、かなしげだ。

「光忠自身が焼けたのは地震のせいだ。だが、戦争で行方不明になった。見つかったのは21世紀に至ってからだ。絶妙な匙加減で、光忠は見つかったんだ。……それが、お前が打刀への磨り上げを了承した、たったひとつだけの理由だろう」

「……どうでもいいな」

障子を開く。この本丸には、まだ燭台切はいない。ここの審神者は、見習いから5年のブランクを経て、最近漸く審神者になった。まだまだこの部隊に刀剣男士は少ない。太刀も打刀も。それでも審神者はよくやっているし、初期刀の加州がフットワークの軽すぎる審神者の居場所を捜して走り回っているのは最早日常だ。高卒後も審神者にならず、実家を手伝い、抗争で銃弾が飛び交う中をチタン合金製の岡持ち片手にリペアムゲルの自転車で出前をしていたらしいから、足も速くなる訳だ。……というより、明らかに養子縁組先を間違えていると大俱利伽羅は主張したい。打刀に磨り上げされたにもかかわらず、その機動力で偶に背後を取ってくる審神者に23世紀の治安への不安と彼女の未恐ろしさを感じながら、彼は差し出された月餅を受け取った。手拭いを放る。

決めたのは、もう20年も前だ。まだ池田屋の記憶にまでは辿り着けていない。けれどそこに至る瞬間を、「太平洋戦争阻止布石部隊」と対峙する日を、ここの分霊としてやって来た自身は近い将来として夢想する。

奴らを屠れば――。それを、どの「打刀」大俱利伽羅も繰り返し、繰り返し経験している。部屋の中央、鶴丸に背を向けて胡座をかく。月餅をかじった。

背中合わせの鶴丸が、空を見上げていた。

End.

【腐向け】誰が彼らを見ていたか【たぬいち】

彼女からの視点

切欠は磨り上げだつたと思う。同田貫を含む一部の太刀男士が、打刀へと刀種を変更された。その頃の事だ。

「特に、変化はないのですな」

「まあ、こんなもんだろ」

それを見かけたのは、偶々。夏の庭、風鈴の下で団扇をあおぎながら涼んでいた時だ。近侍の長谷部がいなかった。あの時は冷たいものを持つてくるといつて席を外していた。だから、少し離れた縁側に腰掛け、喋っている彼らを見かけたのは己だけだつた。

同田貫と一期一振。珍しい組み合わせだ。彼らはそれぞれ内番着だったが、手には刀がある。特に目を引いたのは、一期が同田貫の本体を持つていたからだ。しげしげと、刃を抜いて眺めている。膝に頬杖を突いていた同田貫は、それを厭う様子もない。ただ、少しばかり擦ったそうに見えた。自身も、一期が構えている「同田貫正国」を見る遣る。

真つ直ぐな刀。刃が美しかった。量産品というのが信じられない、と褒めた事がある。大袈裟だ、斬ればいいんだよと乱暴にいったのは照れ隠しだったのだろう。同じ刀剣の付喪神の身である自身にとっては、微笑ましいと思えたものだ。彼にも、以前は忌まわしく思っていた自身を褒めて貰った事があつたから。しかし、そんな彼が自分自身をあれ程素直に明け渡している様は、はじめて見たように思える。審神者である自身ならばともかくだ。これは刀剣の付喪神の本能のようなものだ。ひとつ扱いを間違えれば傷付ける。多少の傷ならば、同田貫は厭わないといつても。

一期は、琥珀色の目を陽光の下、同田貫の刀を見詰めていた。このほど、打刀へ磨り上げと相成つた彼の刀身は、実のところ見てくれはほとんど変化がない。元より今回刀種変更となつた彼らは、打刀と評しても良いものであつたという。刀剣としては箱入りの為に詳しく

は知らないが、少なくとも動きに支障はないようだった。それを他の刀剣男士も不思議に思っていたらしい。一期は刀をおさめると、隣の同田貫に返す。それを小脇に置く彼に、一期は微笑んでいる。

「しかし、見事な作りですな。兜割りの逸話に相応しい。打刀、といわれてもにわかには信じがたい」

「そりゃそーだ。太刀として打たれたんだからな。ま、安心したか。二刀開眼、とやらじゃしっかりお前の弟達とも連携するっての」

彼の褒め言葉に、同田貫は笑っている。ややヒトが悪そうに見えたのは、自身の気のせいかな。否、最初にやって来た太刀男士——今は「打刀」だが——だから、彼の性格は知っている。中々どうして食えない男だ。それをやんわり避けたいらしい。一期は目を瞬くと、直ぐに相好を崩す。

「ははっ、お見通しでしたか」

「あなたの兄バカっぷりはよく知ってるよ。骨喰と鯰尾、だったな。あいつらならしっかり敵を仕留めてくれるだろうよ。だから俺の方を心配するのは当然だな。で、俺は『合格』か？ 元『天下一振』さんよ」

「貴男もお人が悪い」

嘗ての名を呼ばれ、一期が笑う。しかし、その笑みは種類が異なるものだ。暑いのか、髪を耳にかける。その仕種が、奇妙に似合う。思わず眺めていると、一期が口を開いた。

「主、冷たいものをお持ちしました」

「あ、長谷部有難う」

甘い香りが、唐突に微かに鼻を掠めた。振り向けば、自身よりずっと背の高い男が、穏やかに微笑んで盆を持っている。すぐさましゃがみ込んだ彼の手にあったのは、本当に「冷たい」ものだ。アイスクリームである。目を輝かせる自身に匙を手渡ししながら、長谷部は「燭台切が作ったそうです。毒味は済ませておきました」と悪戯っぽく笑った。それに笑みを返して器と匙を持ち、そして振り返る。

同田貫と一期は、会話を続けていた。しかし、先程の妖しい雰囲気は、霧散していた。アイスは、バニラとココアとイチゴのフレーバー

だった。

彼からの視点

最近、あいつらはよく一緒にいるな。

同じ写し同士という事で、以前から交流はあった。自身が大俱利伽羅達と共に打刀に磨り上げられてからは、投石兵の扱いは山姥切に教わっていた。そんな折りだったと思う。ふと、彼がそんな事を言い出したのは。緑玉の目が、自身の頭上を通過してそちらを見遣る。釣られて見れば、そこには同田貫と一期一振がいた。目を瞬く。どうやら投石兵の扱いに、太刀の一期が興味を示したようだ。漏れ聞こえる会話の内容からそれはわかる。しかし、意外な組み合わせだ。揺れ動く的を目指して石を投げつける。当たった。「ないすびちんぐ！」とどこからか鶴丸の声がした。大方屋根の上だろう、長谷部の怒鳴り声が目指していた。新たに石を手に取りながら、自身は首を傾げる。

「前はそんなでもなかったよね」

「太刀同士の頃より、寧ろ交流が増えてるように見えるな。……体幹は俺達に備わっているから、あとは命中率に磨きをかければいい。あの的は単調に揺れているだけだ。本番の遠戦では今のよううまく当たるとは限らないからな」

「はーい」

打刀としての先達の言葉に素直に返事をする。山姥切の背後では彼の兄弟達が微笑ましそうな目でこちらを見ていたが、山姥切自身が気付いていないようなので敢えて見なかった事にした。右足を軸にし、左足を振り上げる。踏み出した左足から、石を放った。

かーん。

「同田貫殿、内番ですぞ。■■■殿がお困りです」

「……おう、忘れてた。悪いな」

それを見た——というより聞かされたのは、別の日の事だ。庭の片隅、厨の裏手で、自身は箒を片手に口を開ける。フライパン片手の一

期が、そこで昼寝をしていた同田貫に向かってお玉で打ち鳴らして起こしたのだ。

その時、自身は主に馬当番を命じられていた。同田貫との組み合わせだ。元々は最初に来た太刀として、太刀男士としてはへっぽこだった自身が何かと組み合わせられるのはいつもの事だった。今でこそ練度が上がったので接点は薄くなったものの、組み合わせられるのは最早習慣だ——そして、見つからない同田貫を捜すのも。同室の御手杵、九州勢、主、様々な者達に同田貫の居場所を尋ね歩くのも最早習慣だ。

しかし、この日はそれが意外に早く終わった。厨を訪ねた時だ。そこにいたのは、長谷部と一期だった。今日の畑当番は彼らだった。そんな事を思い出しながら事情を述べると、意外にも先に身を乗り出してきたのは一期の方だった。長谷部が「主命を怠るとは」と怒るよりも先に、黙ってフライパンと玉杓子を手にしたのだ。それを見て退きながらも、さっさと歩いていく一期についていく。彼が行く先は厨の裏手だった。

そこで、同田貫は内番着で昼寝していた。高いびきである。

自身が怒鳴るより先に、高らかにフライパンが打ち鳴らされた。

思わず見上げる。刀剣男士は長い刀身を扱う為に背の高い者が多いが、一期もその一口だ。立ち上がる同田貫の前で、フライパンとお玉を降ろした一期がぽこぽこ怒る。

「もう、駄目でしょう。同田貫殿。内番を怠っては長じては戦に響くのですぞ」

「わーかったって。おう、やっぱお前か相手は。馬当番だったっけか」
「あ、うん。これ箒……」

すっかり毒気を抜かれ、立ち上がった彼らを交互に見遣る。背丈の変わらない彼ら。同田貫の方が、頭を掻きながら欠伸混じりにいう。
「悪いな、お前も内番中だったんだろその様子だと」

「反省するなら今後に生かしていただきたいものですな。それに謝るなら彼に」

「ま、まあいつもこんなもんだし」

「■■殿、甘やかしてはなりませんぞ」

至極真面目にいわれる。まるで弟扱いだ。尤も大概の刀剣男士は自身より年上、1番年の近いのは和泉守だが。それに領きながらも、同田貫に促されて厩へ向かう。一期は自分達を見送ると、そのまま厩へ戻っていった。

「はーあ、めんどくせ」

ぼやきながらも、厩へ歩いていく足は止まらない。身長差の分歩幅の差が出る。それに一所懸命ついていきながら、ふと、以前山姥切がいつていた事を思い出す。

『最近、あいつらはよく一緒にいるな』

「女房みたいだね」

「は」

眩げば、敏感に聞き取つたらしい。足を止めた同田貫に踏鞴をふむ。それでも自身は、思ったままを口にした。金色の三白眼がこちらを見下ろしていた。

「二期さんがさ。たぬきさんの嫁さんみたい。姐さん女房つてところかな。実際一期さんはすっごい年上だし」

「……」

「つていうか最近よく一緒にいるよね。まんばさんもいつてたよ。……たぬきさん、どうしたの」

見下ろしてくる目が、逸らされる。そして、不意に分厚い手が眼前に迫った。

額を弾かれた。

「つたあ!!」

「バカいってねーで、とつと厩行くぞ」

「つていうかそもそも昼寝してたのたぬきさんっ……つてちよつとこれ軽く割れてる！ 割れてる!!」

兜割りの力、恐るべし。その後、厩は先に同田貫に行つて貰い、自身は1番近くにいた薬研に額の手当てをして貰った。笑つてガーンゼを当ててくれた彼は、本当に短刀かとしみじみ思う。その際の経緯について述べたのちの、「悪いな、旦那。ちつと同田貫の旦那を借りる

わ。馬当番は藤四郎の誰かから代わりにやる」と陽炎のように立ち上がった彼の気迫も、見てくれの儚さからは想像もつかないものだった。

さて、その日の晩、就寝前に「なあ、あんた今日同じ馬当番だったんだろ。たぬきの奴を知らないか。戻ってこねえんだけど」と御手杵に尋ねられたが、自身には何とも応えようがなかった。

使い魔からの視点

さて、「こんのすけ」を勤めている自身は世にいう腐女子といわれる類の人間だ。日頃は政府と審神者と刀剣男士達に忠実な使い魔の中の人を勤めているが、日々、主に男士達の絡みを見て内心で萌えを叫んでいる。政府内女性こんのすけ腐女子の飲み会は毎度盛り上がる。時に逆CP、時に男審神者が受か攻かで戦争にもなるが、最終的には「萌えるわあ」のひと言で一致団結するのが自分達である。歴史的に絡みのなかった刀剣達を絡めて妄想するのも楽しく、自身が現在仕えている本丸の審神者は所謂「刀剣女士」の為か色々と看破してきている。「楽しそうでいいね」と見透かすようにいわれたが、受け入れられているのならそれでいいのだ。

そんな自身だが、今日、珍しい組み合わせを見た。同田貫正国と一期一振である。この2人が一緒に茶を飲んでるのを、自身は目撃した。ただの獣のふりをして寝転がり、聞き耳を敬てる。これは飽くまで監督責任を果たす為であって、と言いつくすつもりもない。全ては萌えの為だ。尚、中身が腐っているこんのすけのところの本丸はブラック率が異様に低かったりするの余談だ。

意外、と思ったのは当然だろう。彼らは歴史的に重要な絡みがな

い。片や嘗ての天下五剣ともいわれた皇室御物、片や有能な量産品ともいわれる元太刀だ。歴史に名を残した時期も異なる。一期は元は毛利家所蔵の品だったので出身地は意外に近い、という程度か。だが、こうしてみると中々に見た目としては良い組み合わせではないか——使い魔のキツネの目を通し、無遠慮に眺める。片や王子といったも通りそうな繊細な容姿の青年。片や無骨な男前の青年。ホワイトカラーとブルーカラーという印象の違いさえある。同田貫はこの審神者と仲が良い為、てつきり審神者とくつつくかと思えば。そういえば最近の審神者はずつと長谷部と一緒にいるな、という事を思い出しつつも、会話を聞く。一期は苦笑を浮かべていた。

「申し分かりません、同田貫殿。ウチの弟達は心配性です」

「おう。お前が弟達を心配していたようにな。つーかどっから漏れたんだか……」

いわれてみると、同田貫の様子がやや疲れているようにも見えた。これはいけない、いつ何があったのか。あとで審神者に聴かなければ。萌え、否仕事の為に。デスクにメモ書きを走らせる。その間にも、一期は撥り笑った。

「しかし、姐さん女房などといわれるとは。鶴丸殿ではありませんが、これは驚きですな」

「……どっから漏れたかはわかったが、俺はあんたをそういう目で見た覚えはねえぞ」

それは嘘だな、と声で感じる。同田貫は真っ直ぐだ。真っ直ぐな刀だ。だから曲がると直ぐわかる。目線が明後日だ。それに思わず白っぽい目になっていると、一期は更に笑みを深めた。

その笑みは、いつかの刀種変更の頃に見せたものと似ていたとは、こんのすけは知らない。

「おや、それは残念」

「あ」

「どうせなら、貴男を尻に敷きたいものだと思っていましたよ」

「どうせなら、亭主関白だろ」

(……おや)

ここからは、同田貫の目は見えない。しかし、声は戦の時のそれとよく似ていた。楽しそうだ、愉しそうなのだ。それに、「こんのすけ」の目も瞬く。

これは、意外に。——お互いに、背負う矜持というものがあるのだ。彼らには。

「簡単には、譲りませんよ」

「でもあんたは、女房というのは否定しないんだな」

「カカア天下というのも、中々良いモノでしょう」

(イニシアチブを互いに全く譲つてない……)

成る程、こういう切欠かはわからないが、まだ発展途上。その上、まるで鏝迫り合いのような。

微笑む一期に、撓めた背中を揺らす同田貫。他の刀剣男士が入って来たのを切欠に部屋を抜け出る。

今度の薄い本はこれだな。審神者の執務室をめがけて、自身は縁側を駆けだした。

繊細な面差し、そつがない態度。成る程、これは藤四郎の傑作だ。当初はその程度の感想だった。

名と評判に相応しい、無骨な若武者。ひたすら戦を追いかける様はいつそ清々しい。そう思っていた。

何が切欠かはわからないものだ。そんな事を思いながら2人は互いの目的地へと歩み去った。

End.

【腐向け】天竺牡丹【おてみか十男審神者】

主の趣味は園芸だ。庭の草木の手入れは、畑の方もそうだが、主が行っているといっている。特に彼が丹誠を込めて育てているのが、本丸の一角にあるアトリウムの花畑だ。その大半を占めるのは、真っ青な薔薇だ。聴けば、23世紀には自然界には存在しない「青い薔薇」の開発が進んでいるという。その中でも、藍より出でたように青さが濃いのが主の薔薇だった。主の執務室には通年で朝摘みの薔薇が飾られて、正式な場に出る際は胸元をその薔薇が彩った。そうでなくとも、立ち居振る舞いにどこか気品の漂う人なので、止ん事無き身の上ではないかと噂されているものの確認が取れていないのが現在の実情だ。そんな彼は、本丸に着任した際に持ち込んだ青い薔薇の苗の他に、最近は歌仙の為の牡丹や、次郎太刀の為の花を育てている。特に牡丹はそれなりに手間のかかる花の為、主は楽しそうだった。手間のかかる植物程、咲き誇らせた時に甲斐がある。ぶつちやけ刀より花をいじってる方が俺らしいよね、と審神者としてギリギリアウトな発言をしてこんのすけに肉球パンチを食らったのは、刀剣男士は誰も知らない事だ。閑話休題、そんな主が「新しい花を植えたい」とこぼした時、同席していた三日月が、ふと、口にした。

「天竺牡丹」

「へ」

「ダリア、といったか。俺としては、あれが咲き誇るところが見たいな」

「ああ、いいね。それでは万屋に行こうか。御手杵、丁度良かったからお菓子食べ終わったら一緒にいこう。力仕事にも強いだろう」
「おう」

茶をすする三日月の前で、柔らかい食感の菓子を頬張る。「貴婦人の指」という名がついている細長いスポンジケーキのようなものだ。もう少しまでもな名前の菓子はなかったのか、とも思うが、イタリア菓子を好む主の為に頑張ったよ！、といい汗を拭う仕種をする燭台切と歌仙の前では何もいえなかった。実際旨いからいいか、と御手杵

は思いながら菓子を食べ、肯く。すると三日月は新たに貴婦人の指を手に取りながら顔を上げた。

「ああ、なら俺も連れて行ってくれ。3人で、否、ひとりと2口か。そういう買物も悪くないだろう。力仕事もそうだが、人手があつた方が助かるだろう」

「まあそうだね。それでは、おやつタイムが終わったら3人で行くか」

「おお」

もしやもしやと、だが優雅に貴婦人の指を食べる主。彼を尻目に頷きながらも、自身は卓袱台を挟んで隣の青年を見遣る。瞳に三日月を宿した彼は、無遠慮に視線を投げつける御手杵に、ただ微笑みを返しただけだった。薔薇と三日月の組み合わせは、何とも耽美だった。

三日月がこのように、さり気なく御手杵との接触を増やしてくるようになったのはいつからだだったか。

ふと、三日月は書架を見上げて呟いた。

「主の本棚は、探偵小説ばかりだな」

「随分古めかしい言い方をするね。推理モノは好きだよ。審神者になる前は、仕事の参考にもしてたから」

そんな会話を、審神者の私室で主と三日月がしていた。その横で、御手杵は間食をしていた。長身の彼が入り浸っても邪魔にならない程度には、主の部屋は広いのだ。

この時のおやつはジャムを塗った食パンだ。但し絶妙に食欲をそそらない、青さは食欲を削ぐ、とは200年は前からいわれているという。主が育てた青薔薇を砂糖で煮詰めたもの、つまり青いジャム。それを平然と食パンに塗りたくる御手杵は、あまり普通の神経をしているとはいえないだろう。歌仙が試しに作ってみて、「失敗作」と処遇に困っていたものを引き受けたのだ。厨房を任されている一口である歌仙の作だ、味はうまい。見てくれは気にしない質の御手杵にとつてはただの華やかな香りのする甘いジャムだ。ちなみにそのジャムを、この部屋でロシアンティーにして飲んでいるのは主と三日月である。日本式の「直接ジャムを紅茶の中に入れる」飲み方をしている2

人は、本棚を見上げていた。三日月は、畳の上に置かれた本棚のうち、目についたものの題を読み上げていく。

『そして誰もいなくなつた』『瓶詰の地獄』『女王蜂』……『神曲』は違うが、大体の推理の古典は揃えているのだな。東西不問か」

「正確には逆かな。新しいものから手を付けていったら段々古典に遡っていつという形かも。洋の東西に関しても自然とそうなつたつて方が近いかも」

主がなぜそういつた趣味を持ったかは、三日月は問わない。ただ、物珍しそうに書架を眺めるだけだ。御手杵も食パンとジャムを消費する作業を続けていた。ただでさえ長身の体は燃費が悪いのだ。ライ麦パンの僅かな苦さと甘さ、相殺する青い薔薇のジャム。そういえば雰囲気でいえば、主は三日月に近いものがある。どこか浮世離れしている。ただ、前者の方はといえば、厭世的といった方が近いかも知れない。薔薇を主とした花畑を育て、推理小説を繙き、そして自分達の出陣を指示する。彼がこんのすけ以外の「23世紀」と接点を持つのを、御手杵は見た事がなかった。何せこの本丸には、テレビがなければ新聞も来ない。主が使っているデバイスは、主に23世紀の政府との連絡手段ばかり。新しいものの好きの陸奥守なども、彼の時代にはテレビなどはなかったので、現状に不満を抱いている様子もなかった。偶に主と共に万屋に赴き、紙の新聞を買う。その程度だ。意図して世俗からこの本丸を隔離している、そして政府はそれを容認している。そういう部隊だった。

緩やかな空気、停滞した雰囲気。訳ありの主なのはわかつていた。だが、今の自分達はこの主に仕えている。だから、この主に合わせて動く。そんな主の元だったから、自分達も目が合ったのかも知れない。

「……おや、この辺りは21世紀かな」

「ああ、その辺もお勧めだよ。同じ著者の作品も面白いよ。何なら貸そうか」

「ふむ、そうだな。偶には読書も良いかも知れん。——御手杵や。お前は本には興味はないのか」

「へ、俺。うーん、戦に関わる本なら読みたいかな」

「相変わらずの戦バカだな。ほっぺにジャムがついているぞ」

不意に話を振られて、ジャムを口の端につけたまま答える。主が笑って指摘した。青いそれは自身には不釣り合いだとわかっていたので、指で拭う。それを舐めとりながら、三日月がシリーズを通して渡された本のうち、ひとつの本のタイトルの視線が向かった。

それからだ。三日月が本を返した頃、御手杵の名を口にするようになったのは。

箸の先で鯖を解した。今日の夕食は鯖の味噌煮がメインだ。その横で、いつの間にか隣席を陣取っていた三日月が、会話の途中でそんな事を言い出した。

『存在の形が似ている』。そう思わないか」

「俺とあんたが」

賑わう大広間、自分達の会話に気を止めるものはいない。そもそも、この頃は自分達はよく一緒に行動していたので、最早それに疑問を持つ者もいなかった。三条派の者は、彼以外は主の傍にいた。刀剣達に悪くはしないものの、どこか陰に籠もりがちの主に、年の功を背負う三条達は沈むような優しさを向ける。今日の薔薇の調子、刀剣男士達の訓練の結果、今度万屋で買って欲しいもの。そんな日常の会話を交わしている。そんなざわめきの中で、三日月は続ける。内番着の作務衣でも全く曇らない美貌に、笑みを湛えた。

「先日、主に借りた探偵小説にそんな言葉があつてな。主人公……と呼んでいいものか。とにかく作中の主要人物が記憶喪失になった事故に遭った際、遭遇して彼を保護した青年がいった言葉だ。中々に、的を射た言葉だと思つてな」

「つつつても、俺とあんたが、その『存在の形が似てる』とは思えないんだけど」

「俺も以前はそう思っていなかったがな。以前、主がアトリウムで薔薇の手入れをしていた時に、ふと聞いていたんだ。丁度その時は、御手杵。お前はためきと歩いてきたそうだな」

「いつもの事だけだな」

揚げ足を取りつつも、御手杵は食事を進める。最近はず常に傍に三日月がいたから、このところ出陣や内番以外で同田貫の顔を見ていない気もする。その事実気付いたのに気付いたのか、三日月は笑みを深めるばかりだ。上品に飯に鯖を乗せる。

「はは、そうだな。……それで、その時に主がいつていたんだ。『お前達は、似ているな』と」

「どこがだよ」

「正味な話、俺もそう思った。何せ俺は太刀男士、お前は槍男士。刀種が違う上に役目も異なる。そういつたら、主は笑ってこういったんだ。『共通点という意味だよ』、と」

声を低める。曰く、御手杵と三日月は似ている。宝として重く扱われ、本来の武器としての役目は果たす事がろくに出来ず、名前だけが世に響くとどちらもいう。

……御手杵は味噌汁を啜った。表情を隠す為だ。僅かに眉を顰める。

「……俺はあんたと違って、本尊は焼けてるけどな」

「そこがお前と俺の違いだとも、いつていた。……ここには、同じように重宝されていようと、切れ味の保証がされている者が多い。戦場育ちを誇りとする者もいる。だが、俺達は違うだろう」

「……違わないな」

戦場の空よりも、自分が眺めていたのは屋内の天井だった。1度迎えた最期に見たのは焼け出された時。21世紀に再び依り代となったレプリカは、以前の姿を忠実に再現しているから、やはり同様の扱いだ。

三日月はその打ち避けの美しさに、御手杵はその偉容を讃えられ、血を知る事はろくなかった。全くない、という訳ではない。ただ、他の刀剣より少ない事は知っていた。刀剣男士として顕現した今は敵の血を浴びる日々で、とても充実している。三日月は、その鷹揚な気質でわかりづらいものの、決して戦を厭いはしない。ここで好戦的な者は大体が戦を経験しきれていない者だ。

自分達は自分達の環境に甘んじる。だが、戦を拒否せず、寧ろ好む。

そういったところが似ている、といたいのだろう。そろそろ完食に
迫り着きつつある夕食の皿を見遣り、しかし、御手杵は答えた。

「まあ、だからといって、あんたと特別にどうこうする気はないけど
な。あんたみたいな青は、俺には合わないしな」

「ほう」

「あれから2ヶ月か。そろそろアトリウムのダリアが咲く頃じゃない
か」

その台詞は、一見前後のつながりがないように思えた。しかし、三
日月は目を細める。口元に笑みを刷いて。

戦の関わる本ならば、読みたい。しかし、書物に興味がない訳では
ない。ましてや、あれ程に露骨に示されれば、調べもする。ダリアの
花言葉は。

「俺も大概気が長いからな。暇なのはわかるが、俺は『移り気』な奴に
構うよりは戦に専念してたいんだよ。そうだな、主に『神の祝福』を
贈ってやる方がまだ建設的だぞ」

「俺達が祝福を贈らずとも、主はいずれ『不可能な事を成し遂げる』よ
うに立ち直ると思うがな。主は、まだ若い」

そうして、三日月が箸を置く。その視線の先には、鶴丸の言葉に微
笑み、そして投げ渡されたオモチヤの蛙を掌に包んだのちに数羽の鳥
を放して見せる主がいた。海猫だ。それが大広間を抜け、開かれたま
まの障子から飛び立っていくのを歓声と共に男士達が見送った。「主
は凄いな、いつも驚きを数倍にして返してくれる」と笑う鶴丸は興奮
していて、それに主は遠慮がちにだが、どこか誇らしげに笑った。そ
して、その若さに驚かされる。そう、主は若いのだ。自分達と異なり、
生きた人間だ。彼の好む推理小説の登場人物のように、惨たらしく命
を奪われた訳ではない。停滞した雰囲気纏おうと、本当は社会的に
死んだ人間だろうと、彼は命を持った人間だった。

自分達とは違う。

不意に、ジャージの裾を引っ張られる。丁度箸を置いたところで転
びそうになり、畳に手を突く。その隙に、漂うのは花の香り。口早に、
小さく囁かれる。

「それに、俺の気が移る前に、どうせ俺達は元の刀に戻るだろう。否、そうでなくてはならない。主は現世に戻らねば。それぐらいなら、お前も俺に付き合ってくれるだろう」

「……考えておく」

「華麗」「優雅」、そして「不安定」。姿勢を正した御手杵が見た、三日月の目。それが揺れていた。

——月は、女性の象徴だという。日ごとに満ち欠けする月の様相。そのただひとつの姿を瞳に盗んだ三日月は、成る程。「奇跡」のような存在だ。御手杵は湯飲みで茶を啜る。

どうやらこの城の屋根に留まったらしい。海猫の声が、聞こえた。主は鶴丸と笑っていた。今日の主は特に機嫌が良かった。やはり屹度、もうすぐダリアが咲くのだろう。

それまでに自身が三日月とどう接したいか、御手杵は自省する必要がある。少なくとも、一緒にいて不快だと思ふ事は、この2ヶ月で1度もなかったのだ。

End.

【とうらぶホラー】くりちゃんと僕 『聞こえた』【現代
パラレル】

冷凍庫のアイス

僕とくりちゃんは雪国に住んでいる。しかし、昨今の温暖化現象はこの辺りも煮込む。年を追う毎に暑さに弱くなっていった僕らは、夏場の記憶が曖昧だ。そして甘いものが嫌いではないので、自然、冷凍庫はアイスが主役となる。とはいっても、台所ではなく玄関の、だ。

我が家には普通の冷蔵庫と冷凍庫が一体化したものが一台、そして玄関に冷凍庫が一台置いてある。これは10代の頃、男兄弟が2人もいた弊害だ。僕らはよく食べたし、その為の食料を買い込んでおくのに母が冷凍庫をもう一台買ったのだ。今は往時程には食べないが、それでも冷凍庫は使われている。台所の冷凍庫は製氷や普段よく使う食料を入れておく。玄関の冷凍庫には買い置き食料がしまわっている。そしてアイスもそうだ。タンスの抽斗のような形の冷凍庫の1番下、夏場はアイスが陣取るのだ。兄弟では僕の方がアイスクリームを好むので、よく抽斗を引くのは兄の僕の方だ。おやつに、エアコンを消している時に、風呂上がりに。アイスクリーム頭痛を起こすけれど、それでもやめられない。くりちゃんが「気がつくときアイスがなくなっている」と文句を付けてくる。くりちゃんが好むチョコアイスも、僕が食べてしまうからだ。その度に謝るけれど、結局食べてしまう。

しかし、この間から少しばかり食べるのを気付けている。いつも通り、風呂上がりに半分寝ぼけていた僕が冷凍庫からアイスを引っ張り出した。そして唾えているのを見て、エアコンで涼んでいたくりちゃんはふと、首を傾げたのだ。

「光忠。アイスはもう、切れている筈だが」

最後の一口を食べ終え、慌てて冷凍庫を見る。ぼんやりと癖のように扉を開いて、1番下の抽斗を引く。確かにそこには——空いた抽斗が僕を見上げてきているだけだった。

僕は確かに、手元を見ずにとはいえ、アイスを取った。今食べたのも、アイスだ。木の棒がその証拠だ。けれど、じゃあ、これはくりちゃん曰く、以前から「アイスが切れている筈なのに、時々食べていた」という。もつと早くにいつて欲しかった。アイスが食べたいのを堪えて、僕は冷凍庫に背を向ける。

静かだったから

夏場、僕達兄弟の主な居場所はリビングだ。答えは明白。エアコンはリビングにしかないからだ。幸い、熱帯夜というものがほとんどない雪国なので夜になるとそれぞれ引き揚げていく。しかし、その日の夜、僕が洗い忘れていた食器を片付けていた時だった。窓を開けて網戸で風通しを良くしたりリビングは心地よく涼しい。虫の声が斉唱している。そんな中で、くりちゃんは自室に引き取った筈だ。けれど、数分としないうちに降りてきた。片手にはスマホ、片手には文庫本。さて、どうしたのやら。尋ねると、「静かだったから」と答えた。

くりちゃんの部屋は南東に面し、夏は燦々と日差しが降り注ぐ。しかし風通しも良いので、涼しくなるのも早い。だからくりちゃんは夜更かしさえしなければ快適な夜を早くから過ごせるのだ。しかし、リビングにまだ居座る気らしいくりちゃんは、座布団を枕に寝転がった。本を開いている。

「俺の部屋は星も見えるし冬になれば屋根雪も落ちるし庭に面しているから植物が生い茂っているのが見える。発情期になると猫がなきわめくのもな。ただ、さつき部屋に入ったら、静かだったんだ」

「ここは田舎だから静かなのは当たり前でしょ」
「こうして聞こえてる虫の音が、全くしなかった」

雨上がりだろうと風が吹こうと、ものもしない庭の虫達。くりちゃん曰く、部屋に入って布団を敷いていた時、「それ」に気付いたという。

遠くの珍走族も近所の子供達の夜泣きも、そして虫の鳴き声ひとつもない。全くの、無音。

くりちゃんは敷き終わった布団をあとに、スマホと本を掴んだ。くりちゃんの部屋は何なのだろう。ぬいぐるみの目が動いたり植物が異様に育つたり。偶に誰もいないのに足音も響く。部屋の主のくりちゃんが脱出を図るのだから余程だろうと、思った。

「盆が近いからな」

とりあえず僕は、「リビングで寝ないでね。夏風邪ひくよ」という言葉を渡しておいた。

風鈴

雪国の夏は、夜に窓を開けられる程度にはまだ涼しい。熱帯夜は滅多にない事だ。なのでその日の夜も、涼しげな音は届いていた。

ちりんちりん、ちりんちりん。

風鈴だ。

道路を挟んで向かいの家。そのお宅の裏庭と面している。そこは大きな家に相応しい広い庭。家庭菜園を営んでおり、引越してきてから年々、植える植物の種類が増えていっている。今年はトウモロコシを植えたらしい。地元では生でも食べられる程の甘いトウモロコシが名産だが、庭で採れたトウモロコシもさぞ甘い事だろう。幼い子供を3人抱えた三世帯家族らしい。老夫婦が、路傍の花を愛でる孫を温かい眼差しで見守っている姿を見かけた事もある。向かいの我が家に引越しの挨拶に来た当時はまだ母も存命で、その時に貰ったお高い洗濯用洗剤は我が家で地味に好評だった。この町には長らくいなかった元気な子供達の声はよく響いていた。夏場は暗くなると火花をしており、冬になると庭に積もる雪で子供達が遊んでいた。昔は自分達もこういう風に見守られていたのだろう。くりちゃんが7歳、僕が10歳の頃に越してきた通りだ。僕は布団を敷きながらそんな

事を思い出す。

そんな彼らだが、挨拶の時には詳しく聞かなかつたものの、彼らは少なくとも地元の出身ではないように思えた。というのも、くりちゃんの詳細な指摘によるものだ。くりちゃんは周りがよく見える。見えるゆえに妙なものにも気付いてしまう訳だが。詳しい事は省くが、少なくともこの辺りの習慣にはまだ疎いようだった。とはいっても、特に問題がある訳ではない。そういわれれば違うね、という程度のものだ。ひよつとしたら都会から田舎へ引越してきた口なのかも知れない。挨拶を交わす程度の付き合いなので、これまでは特に意に介していなかった。

それが今年の事だ。ある日、まだエアコンをつける程ではなかつた頃。涼しげな鐘の音が、窓から響いた。

「あれ、アイス屋さんかな」

「あれはもう廃業した筈だろう」

リビングに降りてきていたくりちゃんが否定する。くりちゃんが中学生ぐらいの頃までは、青塗りの小さな屋台を引いたアイス屋がこの辺りを練り歩いていた。特にくりちゃんは小学生の頃、学校のプールから帰ってきたあとに、父や母から100円を貰って鐘を鳴らすアイス屋に「1本くれ」と駆けつけるのが習慣のようなものだった。僕とはといえば大抵タイミングを逃していたが。そのアイス屋も、今は子供がいなくなってしまったので、既に店を畳んでいる。子供がやって来たから再開したのだろうか、そんな事を思っていた日、くりちゃんが食料を買い出しに行つて帰ってきた時。それからずっと鳴り続けていた鐘の正体について教えてくれた。

「向かいの家の庭に、風鈴が飾ってあった。あれの音だ」

「風鈴かあ。風流だね」

「飾る場所がなかつたようだな。物干しに飾ってあった」
「ふうん」

それだけで、僕達兄弟の会話は終わった。アイス屋の鐘に似たあの音はお向かいの家の風鈴だ。正体がわかれば、ただの涼しげな風鈴の音だ。そういえばうちは風鈴を飾った事がないな、という事も思い出

した。沖縄の修学旅行で風鈴らしきものを作って土産にしたけれど、結局家の中にそれは飾ってある。母がそうしたのか、その辺りのところは実をいうと覚えていない。我が家で飾ってあるのは風鈴よりもモビールの方が多い。母の趣味だっただろうか。今も窓辺に飾っているものはある。元風鈴だ。銀色の三日月に、3本の細長い鐘がぶら下がっていた。揺れるとぶつかり合い、涼やかな音を立てるという寸法だ。しかし歴代の飼い猫にそれは恰好の獲物とされ、今のその鐘は1本しか残っていない。つまり音の鳴らないただの飾りである。そのうち残りの1本の鐘も、新入りの元気な子猫に千切られ、供を持たぬただの三日月となるだろう。遠くなさそうな運命を思う夏である。活きの良い野良猫がじゃれなければ、向かいの家の庭の風鈴は無事に過ごせるだろう。風の強いその頃、風鈴はよく鳴っていた。

ちりんちりん、ちりんちりん。

本格的に暑くなりはじめ、窓を開けられるのは夕方頃からになった。そうすると、風鈴の音が滑り込んでくる。ちりんちりん、ちりんちりん。向かいの家も昼間は窓を閉め切っているようだったから、音を聞けるのはやはり夕方からだろう。ちりんちりん、ちりんちりん。雨が降り込もうと構わずに部屋の窓を網戸にして寝る。涼しさを優先する野生児である。神経質な方の僕はといえば、雨が降れば暑くても窓が開けられないじゃないか……と、窓を閉めて寝る。

ただ、その夜は暑かった。珍しい熱帯夜だった。おまけに豪雨で湿度100%。本当に天気予報でいっていたから堪らない。くりちゃんとはタンクトップにハーフパンツ、就寝ギリギリまでリビングで粘っていた。それでもリビングの窓は閉めていた。嚴重に鍵をかけるのはくりちゃんの癖だ。なぜか幼い頃からそんな癖があった。水戸の祖父母の家に偶に泊まりに行くと、あちこちの戸締まりを確認してからはないと寝ようとしなない程だった。

暑い。蒸し暑い。その日の夜は本当に暑かった。電灯の熱でさえ煩わしく、直ぐに消し、この暑さの中でも早く眠れるように目を閉じた。しかし、扇風機でも、この蒸し暑さは飛ばない。

少しだけ、少しだけ開けよう。暗闇の中、僕は窓をそっと開いた。くりちゃんはどうせ全開にして寝ているんだろうな、そう思いながら。

ちりんちりんちりん、ちりんちりんちりんちりん。

僕の部屋から見える、向かいの庭。外灯の影。風鈴が雨粒に叩き付けられていた。

昔は木の棒のような電柱と外灯だったそこは、今は新しくなっている。外灯は、きちんと道路を自身の仕事分照らしていた。その中で、物干し竿の風鈴は、忙しく鳴り続けていた。

ちりんちりんちりんちりん、ちりんちりんちりんちりんちりんちりん。

しまい忘れだろうか。明日の朝には悲惨な事になっていそうだ。そんな事を思いながら、何とはなしに眺め続ける。

ちりんちりんちりんちりんちりんちりん、ちりんちりんちりんちりんちりんちりん。

……そういえば昔、漫画で「風鈴は霊を追い払うが、招く事もある」という旨の話があった気がする。別の話では、扉から入ってこようとする霊はまだマシで、窓から入ってくるようなものはとてもではないがろくでもないものでしかないとも聴いている。

さて、なぜ今そんな話を思い出したのか。悲惨な風鈴の音に耳を傾けて夢現。暗闇の中、降ろした前髪を寝ぼけながら掻き上げた。

ちりん。

目が醒めた。

なぜ目が醒めたのかはわからない。しかし、再び前髪を下ろし、辺りを見渡す程度には、目を覚ました。部屋の外からは父の鼾が聞こえてくる。くりちゃんは静かに眠っているようだ。そして、僕は今の音に聞き覚えがあった。

あれは、リビングの窓の風鈴。嘗て3本揃っていた頃の音だ。けれど、それは可笑しいのだ。だって、窓を閉めている。それはくりちゃんが執拗な程に閉めていたから覚えている。

それに、あれはもう1本しかない。たとえば猫がじゃれついても、音

が鳴る筈はないのだ。

ちりんちりんちりんちりんちりんちりんちりんちりんちりんちりんちりん。

風鈴は鳴り続ける。僕は、息を飲んだ。

結局、朝になつても何もなかった。ただ、暑さで寝苦しかった事だけは覚えてる。くりちゃんはといえば熟睡していたようで、その日の朝も寝ぼけ頭で新入りの子猫の結膜炎を治す為の目薬を施す際、目をしよぼくれさせながら抱えていた。子猫に餌をやる際も、野良上がりの子猫ががつかないようになら抱えていた。缶詰を開ける僕は、笑話のふりをして昨夜の向かいの家の風鈴の話をした。くりちゃんにも聞こえていたらしい。「雨に叩き付けられていたようだな」と、皿を置いた子猫を放してやった。餌にがつつく子猫を前にして、くりちゃんは膝で頬杖を突く。ぼんやりとした金色の目はどこを見ていたのだろうか。

「この辺じゃ、風鈴を飾る家はどこにもないのにな」

「え」

「聴いた事があるか。この辺で」

いわれて、気付く。

はじめてだった。外に出ている、近所の家から風鈴の音を聞くのは。たとえ涼しい日でも、それを聴く事は今まで一度もなかった。

そういえば最近になつて風鈴の音が聞こえなくなった。壊れたか、取り外したのか、はたまた。

あの日の後にも先にも、鳴るはずのない風鈴が鳴った音はあれ以来聞いている。それでも元気に、子供達の声は響いている。

響くのは、それだけでいいのだ。

父は旅行鞆を片手に、「それじゃ、行ってくる」と三和土に降りた。この時に見送ったのは、偶々先に起きていたくりちゃんである。父が出張で3日程家を空ける事になった。

公務員の父は異常に若く見えるが、それなりの年齢で、それなりの立場だ。若い頃は転勤であちこちを引っ越していたし、公務員であるがゆえに、それこそ若い時分は災害で応援要員として派遣され、母が2度と夫が帰ってこないのではないかと危惧した事もあるという。しかし、父は妙に運が良い人で、結局今のところ、仕事で危険な目に遭った事はない。父が去ったあとの土地で何かしら物騒な事件が起きる、という実に嫌なジンクスもあるのだが。トラブルがあるところには起こさないが、トラブルがなければ起こしてしまう。恐らく現地の人間の運を吸い上げているのでは、と割と真面目にくりちゃんと話していた事さえある。これで本人が至って真面目に仕事をしているだけなのだから手に負えない。

そんな父だが、真面目な気質ゆえに精神的に胃をやられる事もある。今回の出張は、その「胃を壊させてくれた」部下の代わりとしての、久しぶりの出張だという。研修の類という事で、出張先の空いている官舎に泊まる事にしたらしい。その部下はといえば上からの指示で異動になったという事で、いつになく良い笑顔で出張の話をしていった。父も人の子だ、と思い出させてくれたものだ。息子の身としては、とりあえず父が元気になったならそれでいいとだけいっておく。

そんな父、自宅に携帯電話を忘れていった。職場の環境改善に浮かれすぎたのか。今時分、アドレス帳など持ち歩く習慣は消え失せている。公衆電話から唯一覚えていた自宅の電話番号にかけてきて、息子達にそれを伝えてきた。携帯電話を発見したのはくりちゃん、父がおびなりに片付けた布団の隙間に落ちていた。くりちゃん曰く、「見送った時、旅行鞆のチャックが開いていた」。男たるもの、チャックの開閉には気を付けて欲しいものだ、などと軽口を叩くと、くりちゃんは凄く冷たい目をした。まあいつもの事だ。

そして今。夜になっていざ寝ようという時。くりちゃんはいつも

よりも戸締まりをしつかりしていた。この癖は昔からだ。

小学生の時、水戸の祖父母に連れられた東京旅行、戸締まり確認をしていたのはくりちゃんだった。東京に旅行する際の定宿だったという古いホテルは自分達のような地方からの旅行者が多かった。平和な雰囲気だったが、くりちゃんは鍵を確かめていた。

母が健在の頃も、父が出張となると必ずチェーンロックまでかけ、1階の窓の鍵もしつかりとかけていた。

そして現在、成人した今でもその癖は治まらないらしい。またチェーンロックをかけているくりちゃんを見て、寝間着の僕は思わず苦笑したものだ。

「くりちゃん、ここ田舎だよ。それに住宅街だし、外灯も明るい。誰かが家に入ろうとしたら直ぐわかるよ。確かに最近では田舎も物騒だけどさ」

「そういう問題ではない」

くりちゃんは至極真面目に、チェーンロックを降ろした。そして漸く、自室へと引き取った。

その夜の事だった。僕の背筋を寒くさせた。

足音がした。下の階からだ。男のものだろうか。重い足音が、無遠慮に響く。1階を居間から玄関、洗面所や台所をぐるぐると練り歩いているような足音だ。

泥棒か。あんなにくりちゃんが戸締まりをしたのに。

——しかし、ふと思い出す。我が家には2匹の飼い猫がいるのだ。うち1匹は、中々に体重が重い。そして猫は夜に活発化する。追いかけてこや、高いところから飛び降りたりすると、丁度今のような音がする。それに気付いて、僕は怯えている自分を安堵させた。そして、内心で、隣室で眠っているだろうくりちゃんに当てこする。くりちゃんがあんなに神経質になるから、僕にも心配がうつつたじやないか。

なー。にゃー。

2匹の飼い猫の声が、部屋の直ぐ外から聞こえたのはその時だ。

そして同時に思い出す。馴染みの宅配便のおじさんや、親戚にすら

怯えて逃げる飼い猫たちだ。不審者が押し入ってきたのならば、あんな暢気な声は出していない。

じゃあ、今も鳴っているあの足音は。

背中に嫌な汗をかいた。布団を被る。眠ってしまおう、そう思った。

父が無事に出張から帰り——その後出張先で事件は起きなかった。あのジnkクスはおさまったらしい——、数週間。再び短いながら出張する事になった時には。リビングに居を移していた僕達は、父を見送ったのちにリビングに佇む。足音荒く歩いていくくりちゃん。それに飼い猫達。それを眺めながらふと、顔を上げる。

今は昼間だ。しかし、音が聞こえた。あの時と同じ足音だ。父は出張中で、飼い猫はこうしてじやれあつていているというのに。

明るい為に今ひとつ恐怖感がわずかに顔を上げていると、くりちゃんはなにげなさそうにいった。

「ああ、お前にも今は聞こえるんだな」

「へ」

「多分、生きている人間の数に影響されるんだな」

喉笛に噛みつこうとした猫を抱えて引き離れた。くりちゃんは平然としたものだった。

そのまま台所へ向かうくりちゃんに、思わず問いかける。

「くりちゃん。くりちゃんがあんなに戸締まりに嚴重なのって」

「それは、人間かどうか、区別する為だ。戸締まりをしていけば、少なくとも泥棒ではないとわかるだろう」

ボガートもどきはもうたくさんだ。そういつて、抱えた猫を片手に台所へと入っていく。くりちゃんの言葉の意味を知るのは、後日暇だったので彼の持っていたベストセラーのファンタジー児童書を読んだからの事だ。そして、その意味に気付く。

ボガート、海外の真似妖怪。しかし、くりちゃんはもどきといった。

そして、あの夜の足音。実はあの時、複数の足音が聞こえていた。男の足音は、わかる。

けれどあの中に、女のものと思しき小さな足音も混じっていた。母は、亡くなっているのに。

それ以来、僕も戸締まりにとっても気を遣うようになった。

くりちゃんの大難

さて、音に敏感なくりちゃん。昔からこうだったので、旅先でもそれなりに「経験」したらしい。

高校の修学旅行の時だ。高校までは僕と同じ進路を辿っていたくりちゃんは、僕と同じ温かい地域に旅立った。障りがあるのでその日中に経験した話は省くけれど、まあぶっちゃけ心霊体験をした。

それがついてきた、らしい。

その土地に着いて2日目に泊まったホテルは所謂リゾートホテルで、1階の丸い吹き抜けのフロアでバイオリンストが生演奏をし、自由に使って良いネット環境の整っているパソコンやプライベートビーチに広いプール、バイキングも備えている、そんな豪華なホテルだったという。のちに赴いた京都は、そちらで金を使いすぎたのかとても狭苦しいホテルだったという。閑話休題、そちらに赴いて2日目に泊まったホテルはとても豪華で、しかもくりちゃんはくじ運が良かったらしい。2人部屋を引き当てたそうだ。

割り当てられた部屋は広く、バルコニーから見える海は青く美しい。そんな部屋と、のちに10年来の付き合いとなる友人の太郎君と同室。夕食後、翌日の準備と風呂を互いに済ませ、教師の点呼を済ませると早々に寝る事にしたそうだ。どちらも旅疲れ及び昼間の体験に、少々神経を磨り減らしていた。高校の修学旅行といえれば夜間に抜け出す生徒もいるだろうが、くりちゃん達にだけはあり得なかった。彼らは三大欲求のうち睡眠欲が強いタイプだった。それを承知していた担任の先生も「じゃあお休みなさい」と2人の部屋から離れていった。

「……じゃ、寝るか」

「そうですね」

11時を過ぎる前にはベッドに入っていた、とくりちゃんは語った。電灯を消し、玄関の辺りにだけ常夜灯が点る。仕切りの低い壁越しに清潔な浴室があった。

ばしん。

軽い音が、そこから響いてきた。

「……………」

くりちゃんは目を覚ました。2つのベッドのうち奥の方に寝たくりちゃんは、太郎君の方にある大きな鏡台越しに浴室の方を見遣った。

何もいない、誰もいない。その筈だ。先程鍵を閉めたのだから。では、あの音はなんだ。

ぴし、ばしん、ばし。

「……………」

この時に思い出したのは、勿論昼間に経験した事だ。直感で思ったのは「憑いてきた」事で、疲れ果てた体でその音を聞き続けた。生木が割れるような音、というのはいえこの時にはじめてまともに聴いた、とくりちゃんは語った。これまで聴いてきた「音」と明らかに質が違う。これはまずい。くりちゃんは疲れていたらしい。常になく弱気になっていたくりちゃんは、思わず隣のベッドで同じ音を聞いているだろう友人の方を見た。小声で囁く。

「おい、太郎」

「……」

「太郎、……太郎?」

「……………す——」

眠っていた。それは健やかに眠っていた。健康な体に相応しい健やかな寝息だった。くりちゃんは脳内で「起きろ!!!」と叫んだ。残念ながら、友情テレパシーが伝わる事はなかった、と!という。

気がつけば、朝。いつの間にか眠っていたくりちゃんは、ベッドから起きた。朝日に照らされた海が美しい。そんな事をぼんやりと思

いながら、背後から「おはようございませす……」と寝ぼけた声をかけてくる友人に、やや憎々しげに挨拶を返した。

「おはよう、よく寝ていたようだな」

「ええ、昨日は疲れましたからねえ」

「ああ、憑かれてたな」

就職後、転職を経て東京に出た彼と会う度に、時折この話を蒸し返すという。あのくりちゃんでも余程に怖かったらしい。友人の話をするくりちゃん自体は微笑ましいが、事態を想像すると笑えなかった。

帰郷後、ネットで調べてもそのホテルに曰くというものはなかった。つまりくりちゃん達が引っ付けて来たのだろう。どんなに綺麗な宿だろうと、災難には見舞われるものようだ。特に、こういうものは。

End.

「どうらぶホラー」 くりちゃん和僕 四 「現代パラレル」

墓穴

墓とは相性が悪いらしい。以前に墓地公園でくりちゃんが「引つ張られた」話をしたが、実はもつと古い話がある。

父方の親戚の家。その古い先祖の墓は、小高い丘の上にある。丘というよりも、鬱蒼と杉や松の木が茂り、急勾配の坂は一応舗装されているとはいっても山といった方が近いだろう。実際、父の実家は山にある。山に登ってリングの手入れをしたり、田んぼの様子を見たりするのが仕事の農業だ。来年で米作りはやめてしまいうらしいから、毎月米を貰っていた我が家は「米の値段って相場でいくらなんだろうな」とくりちゃんと話し合っている。閑話休題、昔はそんな実家の古い方の墓参りもしていた。

古い方、というのは、比較的最近の先祖の墓は、もつと新しくて近いところに墓を作っている。一方、いつ頃からは知らないが先祖代々の古い墓は山の上にあった。僕や従兄弟の御手杵くん、それにくりちゃんが小学校に上がるか上がらないかの頃、それは起きた。

「山の上はちつと高いが、そこにブランコが作つてあるぞ。大俱利伽羅もお前らも、そこで遊びたいだろう」

伯父の鶴丸さんは、そういつて子供達を煽つた。子供達の元気な声で、山の上にある墓場へ向かう親達のモチベーションを上げる試みもあつただろう。幼い頃から質の悪い悪戯しては祖母、つまり彼らの母に土蔵に一晚閉じこめられる、という仕置きを食らつていた鶴丸さんだが、第1子のだけあつてこういう事がうまかつた。尚、弟で末っ子の父は「兄のふりみて我がふり直せ」とうまく立ち回つたらしいが、何だかんだと野山を駆け回り悪戯の限りを尽くしていたというから、兄弟だなと実に思う。だが父は、幼い頃に兄に山に置き去りにされたという事もあつたらしく、兄に似ているといわれる度に仏頂面で「似ていない」と否定するのだった。そんなはずらつ子且つ野生児の血は

確実にくりちゃんに受け継がれていた。この墓参りの為の登山も、率先して急勾配の坂を駆け上がっていったのはくりちゃんだった。外遊びを好んでいたくりちゃんは、その夏も元々浅黒い肌を更に日焼けさせていた。恐らくその当時、最も元気が良かったのは彼だろう。僕と御手杵くんといえば、4.5。とまではいかずとも中々の勾配に、両親や親戚に手を引かれながら歩いていった。時に蛇が出て、蛇を苦手とする祖母が凍り付いた場面もあったが、道中は特に問題がなかった。「ほら、ここだ」

伯父の言葉に、くりちゃんが飛び出した。そこは確かに墓地だった。古い墓や卒塔婆の群れが立ち並んでいた。そして入って右方には崖があり、そこへ伸びる頑丈な樹の枝に、布のブランコがわたしてある。いつもはひとり息子の御手杵くんが使っているというそれは、くりちゃんの目を輝かせたが、僕らは盆の頃、暑気真つ盛りの中での山登りですっかりばてていた。御手杵くんも登ると言うが、それは夏以外の話だった。

そして僕の目を引いたのは、舗装された道から外れた、その墓の群れだ。石造りなのはそうだが、踏んでみると土は柔らかい。その頃はわからなかったが、今だと崖崩れが心配な柔らかさだった。

「お前ら、ブランコやろう」

大人達が墓参りの準備をしている。その脇で、伯父が自分達を手招きした。その前では既にくりちゃんがブランコを漕いでいた。下は切り崩された崖、幼い自分達に恐怖心というものはなく、軽い体重の為に枝が折れる心配はない。くりちゃんは伯父に背中を押されて、無言だが喜んでるのが伝わってきた。ブランコは当時のくりちゃんが好きで遊具のひとつで、児童公園に行くと立ち漕ぎや座り漕ぎ、どれだけ高く角度を上げられるか、というのに執心していた。今は撤去されているというが、当時はまだあった、ベンチを向かい合わせにしてくつつけたようなブランコの背もたれに乗って漕ぐ、という本来の用途に反した遊びもしていた。ただ最低限の危機管理意識はあったらしい、漕いでいる最中のブランコから飛び降りると言う真似だけはしなかった。一方、僕はといえば高いところから飛び降りるのが好き

で、よく滑り台の梯子の方から地面に飛び降りるといふ真似をしてはくりちゃんに窘められた事もあった。要は僕も立派に父方の血を引いていた。

そうして僕や御手杵くん、それにくりちゃんと順繰りにブランコで遊んでいると、子供達が呼ばれた。見ると花やお供えが墓の前にある。来た時よりも綺麗になっていたのは、大人達が掃除した為だし、自分達が遊ぶ時間があったのはそのせいだろう。伯父は端から「子供遊び相手」とカウントされていたようだ。降りる事を渋っていたくりちゃんも連れて、墓の前に行った。

奇妙な事に、僕はそれなりの年だった筈だが、この時に見た墓の名前を覚えていない。ウチの家と同じ名字の筈だが、それがどう書かれていたか、はつきりと思いつけないのだ。

線香を供えて手を合わせる。それをその場にいた全員がすると、くりちゃんは墓場の奥の方に興味を示していた。ブランコに夢中になっていて、野生児の血が今になって活発化してきたらしい。これはいけない、と、親戚達の後方、僕はくりちゃんを呼んだ。くりちゃん、山を下りるよ。山を下りたらお祖母ちゃんがスイカを切ってくれるよ。そういうと、くりちゃんはこちらを向いて走り出した。

ぼこん。

くりちゃんの姿が見えなくなった。

「くりちゃん!？」

僕の悲鳴に、大人達が駆けつけてくる。特に父は速かった。僕は柔らかな土に膝をつき、くりちゃんの名をほとんど叫んだ。くりちゃんは、ただでさえ日焼けしていたので、その大きな土の縦穴の中で何か手を動かしているのが見えたぐらいだった。

そのあとの事はよく覚えていない。ただただ、駆けつけようとしたくりちゃんがいきなり消えた事が、驚愕で僕の記憶を塗り潰している。あとで聴いたところによると、くりちゃんは、走ってきたところで、突然空いた穴に落ちてしまったのだそう。それこそ落とし穴のようだった、と、父に脇の下に手を射し込まれて引っ張り出されたくりちゃんは語っていた。意外に汚れていなかったくりちゃんは、他の

大人達に土を払われるだけで大体汚れは落ちてしまった。そしてその後は僕や御手杵くん、大人達に囲まれながら山を下りていったらしい。ただ、その穴の事は、僕は詳細は知らなかった。

曰く、穴は子供ひとりですっぽりと落ち込んでしまう程の深さだった。

曰く、走り出したら本当に唐突に開いた。

誰かが落とし穴でも仕掛けたのでは、と思ったが、そこは山間部。ただでさえ少子高齢化が叫ばれはじめていた頃だったのに、御手杵くんの友達は何所に住んでおらず、学校にばかりいた。そして御手杵くんはそういう質の悪い悪戯をする程、色々やる気のある子ではない。思えば、1番父方の血が薄いのが御手杵くんかも知れなかった。ただ、その後、親戚の家に戻ってきて土を洗い落とされたくりちゃんも黙ってスイカを食べていたし、その時の事を特に何も話さなかった。最近の事だ。その時の事を、ふと思いついたようにいったのは、「シンクホール、というものがあるだろう。多分、あの類だと思うんだが」

シンクホール。文字通り、突然地面に穴が陥没する現象だ。あの墓場の土は軟らかかった為、子供の体重でもそうなくても可笑しくなかっただろう。そのシンクホールの話を聞いてその事を語り出したくりちゃんは、しかし、こうも続けた。

「穴に落ちて、直ぐだったな。いきなり周りが真っ暗になるし、身動きが取れなかった。だから周りをきよろきよろと見渡したんだがな」

くりちゃんの両手が、それぞれ指で丸を作る。そしていった。

「こんな風に、ぎよろりとした目玉が2つ、俺を見ていたんだ。まだ暗順応していなかった暗闇の中だな」

そういえばあれ以来、1度もあの山には登っていない。ただ、あの古い先祖の墓を新しい墓に移すつもりもないらしく、いまだあの山にあるという。

父の実家はどうか昔は所謂郷土だったらしいが、詳しい事は何も伝わっていない。ただ、あの古い墓場に、くりちゃんだけは2度と連れて行きたくなかった。

死体を見る

当時、床に伏せていた母の異状に気付いたのはくりちゃんだった。桜前線は雪国には遠い3月。時既に遅く、救急車を呼び母は搬送された。家で親戚と共に待っていた僕に知らされたのは、母の訃報だった。父とくりちゃんが、その死を見届けた。

その頃のくりちゃんは、母の看病や通院の付き添いをよくしていた。なので、夜の8時。薬を飲んだか確認する為に階下に降りてきたくりちゃんは、瞳孔が開いた母の第1発見者となった。その時点で辛うじて息はあったものの、救急隊員の手当ても間に合わず。母は病院で死亡が確認された。

その間の事を、僕と、それに父もぼんやりとしていた気がする。末息子の妻の葬儀に父方の親戚が立ち回ってくれたし、母方は祖母は既に痴呆が回っており、彼らを連れてきた伯母は、ただひとりの妹を亡くしたのもあり疲労して憔悴しきっていた。そちらの従弟はまだ幼く、我が家で主に陣頭指揮を執っていたのはくりちゃんだった。「こういう時に1番しっかりしている」とくりちゃんがいわれる程には、僕達は相当ぼんやりとしていたと思う。あとにも先にも、泣いた父を見たのはあの時だけだった。

だから、あとから聞かされた。火葬場へ向かう時、親戚で車に分乗した。くりちゃんは母方の伯母が運転する車に乗った。その時に伯母にいわれたという。

「あの子は自殺したんじゃないの」
「そういう事をいうな」

幼い頃から病弱で、何度も死にそうになり、そして結局、平均寿命には遠い若さで死んだ。病を倦んでいた母が、薬を飲むのをやめて遠

回しの自殺をしていたとしてもわからない。ただ、それをいわれる事自体がひどく不快で否定すると、硬い表情のくりちゃんに「ごめんね」と伯母はいったという。後部座席に乗っていた父方の祖母と母方の従弟は、伯母と甥の重い沈黙に飲まれていたそうだ。

そして今年、三回忌を迎えた。同時に、くりちゃんが「死」に対して慣れてしまったと感じる。最後に飼い猫が死んだ時、重い表情をしたくりちゃんは直ぐに世話になっていた動物病院へと電話をしていた。僕は、泣いていた。今年は暮れに、父方の祖父の三回忌も迎える。

元々我が家の主な家事を請け負っていたくりちゃんは、母の死後、看病が亡くなっただけで、さして変わらない日常を送っていたと思う。しかし、その年の暮れに、再び喪服に身を包む事となった。父方の祖父の死である。

くりちゃんが物心つく前に事故に遭った祖父は、元より入退院を繰り返していた。黒々とした髪が特徴的な若々しい人だったが、喋っている事のほとんどはわからなかった。くりちゃんはといえば、それこそ気がつけば祖父はそういう喋り方をしていたので、「何となく」で意思疎通を凶っていた節がある。実際はどうだったのかはわからないが、くりちゃんは座椅子に座りっぱなしの祖父と同じ部屋にいる事を、特に厭わなかった。

そんな祖父の遺体は、冷える頃の葬儀だった為、まず布団に寝かされていた。布の下の顔は、元より室温の低い仏間では生前と変わらぬように見えた。母の遺体の方がもっと傷むのが早かった気もする。駆けつけた僕達の中で、「最後の挨拶」の為に布団の傍らにくりちゃんは座った。無表情だった。

その後の葬儀は、密葬だった我が家と異なり、それなりに盛況だった。若い者、として従弟の御手杵さんと受付をやらされたのは記憶に新しい。その時に写真好きの父方の大叔父にカメラで撮られた覚えもあった。くりちゃんは、喪服に身を包んだ無表情のまま、受付の作業をこなしていた。

それも落ち着いた頃。今度は飼い猫が病気を患った。当時は3匹飼っていた我が家だったが、そのうちの1匹が腎臓を患った。こちら

は処置が早かった為に回復したものの、年の明けた時期。くりちゃんが見つけた。

「誰か、鼻血でもこぼしたか」

そういうくりちゃんの見詰める先に、薄い血のような痕が残っていた。それは、のちに「いまだ原因不明」の胃ガンを患った別の飼い猫が吐いた血だった。

3ヶ月の闘病生活空しく、その飼い猫も死んだ。普段は入りたがらなかつた猫ちぐらに入り、大人しく眠っていたという。くりちゃんが少し目を離していた隙に、激しく噎せたらしい。痰のようなものをフロリングに吐いて、飼い猫はちぐらを飛び出して死んでいた。くりちゃんは、電話ののち、僕に「こいつのサイズに見合った段ボール箱とバスタオルを用意してくれ」といった。平板な声だった。

1番年を取っていた飼い猫が死んだのは、そのあとの事だ。こちらは老衰だったのだろう。雪の降りしきる季節。猫のベッドの中で、その猫は息絶えていた。15歳を超えていたと思う。火葬場のペット用の部門へと足を運んだ時、くりちゃんは父と僕の後方を歩いていた。疲れたように見えたのは、多分、気のせいではなかつただろう。「俺も、行かなければいけないのか」

父方の大叔父の訃報を聞かされた時、くりちゃんの口から出たのはそんな言葉だった。あの、写真好きの大叔父が死んだと知らされた日だった。帰ってきた父が僕達にそれを知らせた時、確かに見たのは、くりちゃんの疲れ切った顔だった。僕は、そんなくりちゃんを見下ろす。

母の死からの三回忌までのこの日、「第1発見者」となるのは必ずくりちゃんだった。遺体を見つけて、準備をして、そして送る。それを指揮していたのは、くりちゃんだった。

そんなくりちゃんを、父は見下ろして頭を振った。

「いや、お前にとっては遠い親戚だからな。光忠もいいぞ、俺だけで行く」

「わかった。じゃあ、喪服は用意しておく。数珠は持っているな」
「ああ」

父から空の弁当箱を受け取ったくりちゃんは、そのまま静かに台所へと歩み去った。そんなくりちゃんを見送る僕に、父はいった。

「変わったな」

小さな声。だが、意図するところはわかった。

この3年で、くりちゃんは慣れてしまった。

死を見ても、くりちゃんが動揺する事はなくなってしまうていた。

今年の暮れに、祖父の三回忌がある。それで、漸く近親者の法事は終わる。くりちゃんの荷が少しでも下りればいい。

ただ、気に掛かっている事がある。最近になって、親とはぐれた野良の子猫を引き取った。その子猫は大層やんちゃで、走り回ったあとに、「死んだように」眠る。それを見る度に、くりちゃんは小さく目を睜ってしゃがみ込み、息をしているのを見ては安堵していた。

「何だ、生きてるか」

そう呟くりちゃんの言葉は、まるで死んでいた方がよかったというようにも聞こえてしまうのだ。

煤

仏壇の天板の端が、煤けている。それを見つけたのはくりちゃんだった。

今時の仏壇は、本当に小さい。さすがに仏壇の事はわからなかったくりちゃんに代わり、僕と父で決めたのは、家庭用冷蔵庫よりも小さく細い仏壇だった。母のものである。三回忌を過ぎた今も、母の遺骨を墓地にやりたがらぬ父。再三墓に入れるように催促してくる親戚達に曖昧な返事をする父の横で、僕達は母の仏壇のお供えを整えている。主に花やお菓子を買ってくるのは僕で、時折細かい部分を直すのがくりちゃんだ。細かい部分、というのは遺灰や写真の位置を直した

り、お供えの位置を整えたり。全体的に見た時にきれいに見えるようにする。……という事に気付いたのは、割とつい最近の事だ。くりちゃんは猫のようなどころがあり、人にそういうところを見せたがらない。偶々見かけたのは、いつものように仏壇の整理をしていたくりちゃんが、仏壇の天井を見上げている姿だった。

「くりちゃん、どうしたの」

「……仏壇」

「仏壇だね」

「ここが、煤けている」

「ああ、本当だ」

浅黒い肌の指が示した先。らくだ色の木製の仏壇の中で、そこだけが焦げ茶色をしている。近付いて触れてみると、そこは他と同じようにつややかな塗装だったが、しかし確かに煤がついていた。けれど原因は既にわかっている。僕達は揃って目線を落とした——煤の真下。そこには線香立てがある。右手には鉢がある。

線香に燻された仏壇の天井。触れた手から、僅かに香の匂いが漂ってきた。小さな仏壇にありがちの事だ。それを物珍しそうに眺めているくりちゃんに、「これは落とせないねえ、焦げちゃってるから」と笑う。そして、この仏壇が置かれてからの年季を思い出した。三回忌を過ぎたのだ。しんみりとした僕に、くりちゃんは何でもないように問うてくる。

「この煤けを見て思い出したんだがな。両親の部屋だった天井。あそこもこんな風に煤けて骨組みが浮いているな。前から思っていたんだが、あれはなんだ」

「……僕もよく知らないんだよね」

些か唐突に思えた。しかし、自身も気になっていた事だ。僕は階段の方を見遣る。階段からカーペットになっていく。2階は全て絨毯だ。そして、両親の部屋——今は父専用の部屋となっている——の天井を思い出した。くりちゃんがいった通りの惨状となっているそれを。

以前、自身も父に尋ねた事がある。気がつけばそうになっていた天井

について聴けば、父は頭を振った。

『煙草を吸っていな』

それは奇妙な話だった。父は酒も煙草もやらないし、母は酒好きだが煙草はやらない人だった。だが、ふと床を見下ろす。確かに、絨毯の1部が焦げていた。だが、そんなぼや騒ぎがあつた事など、自身も知らない。

『それで煤けたんだ』

腕を組んで淡々と語った。

結局、いまだにあの煤けはとれていないし、真相も知らない。ただ、少なくともこちらの煤けの方がきれいだった。

バスの隣

くりちゃんが出掛けた時だったという。休日、混んでいたバス。雪国だろうと容赦なく照らしてくる日光。冷房の効いたそこで、くりちゃんは1番後ろの席に座った。

「……」

市内の1部を循環する1000円バス。どこで乗ってどこで降りても1000円のそれは、電車の普及していない地元市民の貴重な足のひとつだ。鞆を膝に乗せると、くりちゃんは運賃を手に握り、そのまま背もたれに凭れた。左側には中年の女性、右側には10代ほどの少年が座っていたという。くりちゃんの意識を引いたのは後者だった。その日は猛暑日。軽い脱水症状に陥っていたくりちゃんは、睡眠不足もあり船を漕いでいた。その中で、少年の様子を窺った。

黒い薄手のスラックスに、白い半袖のシャツ。この季節、全国どこでも見られる男子学生の服装だ。くりちゃんも僕も嘗ては身を包んでいた服装だ。くりちゃんは着崩し気味だったが。うつらうつら、と

眠気に襲われていたくりちゃんは、何となくその少年を見遣る。年の頃は中学生だろうか。線の細いだけで高校生かも知れない。日に焼けない質なのか、色黒のくりちゃんと比べても、えんじ色のシートに白い皮膚が浮いていたという。

くりちゃんはぼんやりと思う。降車ボタンは少年の方のを押したかった。最後方の椅子は長椅子に似ており、天井のボタンを押そうとすればバランスを崩して通路に倒れ込みそうだし、左側の乗客は、母親のような世代とはいえ異性だ。自身の見た目のガラの悪さを知っているくりちゃんはトラブルを避けるべく、せめて同性の右手の少年の方のボタンを押したかった。そして、ふと、気付く。

学生服の少年。彼は随分と涼しげに見えた。その筈だ。荷物らしい荷物を、何も持っていなかった。

(何かのさぼりか)

季節は、学生が夏休みに入る8月。中学か高校ならば7月下旬から既に入っている。男性は荷物を持ちたがらない傾向にあるが、それにして少年は身軽すぎた。両手も膝も空いており、携帯電話や財布が入っている様子も見えなかった。ひよつとしたらくりちゃんの見えない位置にあつたのかも知れないが、少なくとも、少年は「着の身着のまま」という印象だったという。少年は、非常時には開かれる扉の壁の前。後部座席の右側の隅に、ちょこんと座り続けていた。まるで身動きしない。カーブを曲がっても、ブレーキをかけても、それに合わせてくりちゃんがゆらゆらと体を動かしていても、少年はそのままだったという。

やがて、くりちゃんの目的地が近付いた。そろそろ降車ボタンを押そう。小銭を片手に、右手を向いた。そして目を瞠る。

『次は大学病院前、大学病院前』

アナウンスが流れる中、誰かが降車ボタンを押した。自身でも、少年でもあり得なかった。少年の姿はかき消えていた。

やがてバスが停まり、運転手に挨拶をしながら100円玉を落とす。そして病院を見上げた。そういえば、母もここに担ぎ込まれたのだった。少年も、嘗てその口だったのか。はたまた別の何かか。くり

ちゃんは予約時間を大幅に過ぎた科へ入るべく、急ぎ足で病院に入った。

廊下の影

引越してきたばかりの頃。くりちゃんがひとり部屋を与えられたのは早かったのは、以前に記したと思う。そのくりちゃんの部屋を、両親が模様替えしたあとの事だった。

僕達兄弟がそれぞれひとり部屋を与えられたのは、水戸の祖母からの命令に等しかったが、それでも教育方針というのはあったらしい。ある一定の年齢まで、扉は開け放っておく事が厳命された。恐らく親としての監督責任という事だったのだろうが、くりちゃんにとってはそれがよかったのか悪かったのかはわからない。

ある日の事だ。あの頃にはよくあった事だが、くりちゃんは、夕食を作っていた母に向かっていった。

「昨日の夜、廊下の壁と壁を横切っていた影があった。あれは何だろう」

くりちゃんとの部屋は、くりちゃんの部屋の押し入れで区切られている。

この日から、僕はとても部屋の扉を閉めたくて仕方なくなった。

こつくりさん

意外に思われるだろうが、くりちゃんは中学時代、演劇部だった。学生時代は一貫として部やサークルに所属する事のなかった僕に對して、くりちゃんは意外と部活動というものを好んだ。小学生時代は合唱団だったし、高校と大学は文芸部だった。

ただ、くりちゃんが演劇部に入った動機は「裏方がやりたいから」であり、くりちゃんが舞台上がる事は3年間結局1度もなかったという。くりちゃんの見た目ならばさぞ舞台映えすると思うが、くりちゃんが大声を張り上げる事が想像できなかった。だが美術スタッフとして舞台装置を作る様だけは何とか想像できた。演劇の裏方には衣裳の調達や音響など様々な仕事があるが、舞台の脚本を頭に叩き込んでおく事は役者も裏方も一環としている。その為に、くりちゃんも、文化祭の前になると学校に遅くまで残っていた。

その演劇部の慣習のようなもので、学校の近所で営んでいる店からおにぎりが差し入れられる事があった。ウチの中学の演劇部は県内では優勝経験があったものの、学校内では弱小と軽んじられており、部室に割り当てられていた教室も頻繁に別の目的に使われていた。最終的に居着くのは図書室だったと、くりちゃんはいつていた。

その日は、本番に向けてのリハーサルや台詞合わせ、打ち合わせが図書室で行われた。しかし半ば休み休みのもので、中には囲碁をしながら打ち合わせをしている上級生もいたという。残念ながらこの中学の図書室の文献はあまり充実しておらず、本好きのくりちゃんもあまり普段は足を向けていなかった。なので、その図書室の隅。おにぎりを食べ終えたのち、戯れに触れた本棚から、くりちゃんはそれを見つけた。

「……」

「何見てんのー」

横から覗いてきたのは、のちに別の進路を辿り会う事もなくなってしまう同級生だったという。彼はくりちゃんの手にしたものをまじまじと見て——小さく悲鳴を上げた。

「何それ、きもっ、っていうか捨てなよ」

「……本に挟まっていた」

「誰だよこんな悪戯くゝ質の悪い」

「悪戯……」

そういう、くりちゃんの手には、一篇のルーズリーフが握られていた。有り触れた、罫線の引かれたルーズリーフだ。違うのは、そこに平仮名とアルファベット、数字。それに真ん中上方に鳥居が書かれている事——所謂「こっくりさん」の紙だった。

「え、何々。どうしたの」

「ちよつとこれ見てよ安定、大俱利伽羅の見てるのちようきもい」

「は。……うわっ」

くりちゃんが示したそれを見て、彼もまた声を上げた。そしてすぐさまそれを取り上げると、「先生、これちよつと」と顧問へと話しかけにいった。

ちよつとした騒ぎになったそれを、くりちゃんはぼんやりと眺めていた。隠すようにして本に挟まれていたそれ。使用前か使用後はわからなかった。こっくりさんは使用後は破いて捨てる、という約束事がある。

問題なのは、その「こっくりさん」の為の紙の文字が、全て赤茶色。十中八九血文字だった事だ。

その年も問題なく舞台は上演されたという。特に事故もなかった。ただ、その「血文字のこっくりさん」のシートの行方は知れない。

「誰かに使って貰いたかったのかもな」

その事を話した時、くりちゃんはそう締め括った。

見上げる

「うへっ」

「うわ」

母とくりちゃんの声が重なった。父は横目に、僕は振り返って2人を見る。

丁度、盆の親戚の家からの帰り道。父方の実家に遊びに行ったあとの事だ。すっかり暗くなつた夜道を、車を走らせて家に帰るところだった。うとうとと船を漕いでいたくりちゃんは、それでも酔いやすい質の為に助手席に乗っている。僕は母と後部座席に乗っていた。その時は信号機は赤。のちに右手にはコンビニエンスストアが出来るが、まだなかつた為に本当に暗い道だった。何せ田舎である。自他共に認めるど田舎だ。寧ろ田舎過ぎてそれが観光資源だ。

田舎だから、家も古い。くりちゃんと母が見上げていたのは、左手とある一軒家だった。僕からするとただの一軒家だったが、2人の目には何かがあつたらしい。首を傾げる僕に、2人は頭を振る。

「いや、見なくていい」

「みっちゃんはあっち向いてなさい、ね」

母とくりちゃんに同時にいわれ、かえつて小さな反発を思う。父が、首を傾げながらも青信号になつたので車を走らせた隙に、僕は後ろの窓からその家を見た。

古い一軒家だった。昭和の頃によく建てられた雰囲気の家だった。天井の屋根近くに窓がある。誰もいないらしく、電灯は点いていない。外灯もそこには当たっていない。

けれど、白い人影が、くつきりとそこに佇んでいた。

「――」

「ほら、行くよ」

普段は見えない僕にすら訴えかけてくるのか。母に促され、今度こそ前を向く。2人の目にはどんな風に映つたのだろう。結局、帰つたあともそれは話題にされなかった。父にとつては妻の霊感は若い頃からの日常だったし、くりちゃんと母にとつても普通だったのだから。ただ、ヒトの形をしていながら、白い影しか見せぬそれに、奇妙な不安を与えられた。

その道は、父方の実家への近道だ。今もその家は建っている。あれ

から何度も窓を見上げたけれど、誰もいない。くりちゃんは見もしていない。あの時だけだったのか、それともまだいるのか。くりちゃんが何も話さないので、僕にはわからなかった。

おまけ

あなたのせい

「……」

「くりちゃん、どうしたの。パソコンをじつと見て」

「光忠、俺のパソコンをいじったか」

「え、いじってないよ。強いていえば、さつき子猫が駆け抜けていったぐらい。でもキーボードの上は渡っていなかったよ」

「そうか」

「壊れたの」

「壊れたのか、別の要因か」

「というと」

「メモ帳機能があるだろう。あれが開かれていな」

「ふむ」

「そこに、『あなたのせい』と書いてあったんだ」

「……」

「俺のせい、となると、どれの話か。心当たりが多すぎてな」

「気にするところはそこかな」

End.

【歴史修正主義者化】「赤いヒーロー」【※特殊設定】

22×年、■国〇〇部隊に所属していた四十口以上の刀剣男士が歴史修正主義者へと転化する。

この際、審神者の●●●●（10代女性）も失踪。政府は彼女は元刀剣男士により誘拐されたものとみて捜査している。本丸に放置されていた監視役のこんのすけは監督不行届で処分。

以下は、聴取にてこんのすけが供述した事を記録する。

●月×日

本当に、審神者殿も刀剣男士の方々も、全員ですか。全く気付きませんでした……ええ、看破できなかった私の責任は大きいです。答えられる事に全てお答えしましょう。

まず、最初に審神者殿について確認しておきましょうか。彼女はヒーロー、でしたね。ええ、文字通りの。怪人と戦うヒーローの家系の出だそう。治安の悪化した23世紀でも度々活躍している方々の話を聞きますね。審神者殿は女性でありながら、所謂「戦隊」の「赤」のヒーローであった、と。戦隊は審神者になる前に役目を終えて解散されていたそう。ええ、覚えています。ヒーロー協会、とかでしたか。身の空いた彼女に審神者の適性があるという事で、あちらを経由してスカウトしたんですね。それで審神者殿は、私にも同じ事をいつてくださいました。

『今度はここで必要とされている。私は赤のヒーローとして生まれました。この宿命は大きい。私は私の心の赴くままに、審神者として御役目を果たそう』

ええ、ご立派でした。あの年若さで……赤いヒーロー、というのは特別なんですよね。戦隊を組めばリーダー、単体であってもとかく目立つ存在。そういう宿業にある。たとえば戦隊がぶれようと、「赤」だけは決してぶれず、周りを導く。将に審神者に相応しい方だった。……今でもご存命であると信じています。彼女はヒーローの家系というだけあり、心身共に頑健な方でした。刀剣男士達も、そういう彼女に

心惹かれるものがあつたようですね。あれが赤のカリスマなのでしよう。それでいて、決して刀剣男士達に無理をさせない方でした。……ええ、本当に。言い訳がましいでしょう。ですが、誓つて。審神者殿は刀剣男士達に無体を強いてはいませんでした。ですから、此度の事件はなぜ発生したのかわからないのです。

ひよつとしたら、刀剣達の心を掴んでいたからこそ、彼女も審神者として連れて行かれたのかも知れませんが。……今日のところはこれで終わりですか。ええ、またこの次。

◆月●日

お早う御座います。……どうされたのですか。少し、不思議そうな顔をしていますよ。……審神者殿の事を調べていてそうだった、と。そうですか。それで、今日はこういった事を。

ははあ、審神者殿が刀剣男士とどういった事を話していたか、とはて……そういえば、噸と真面目に聞いた事はありませぬな。私とは世間話程度しか交わしませんでしたから。少々お時間を……え、そうですか。わかりました。

出て行つた刀剣男士達の中で、特に転化が激しかった者……一期一振、蜻蛉切、秋田藤四郎、ですか。何というか、一途な刀剣男士ばかりだったのでね。ええ、私の印象でもそうでした。一途な刀剣男士は多いでしょう。でも、その中でも特に純粹培養といった印象が強い三振りですね。——え、これは私の言葉か、と。

いいえ、これは審神者殿が仰有つていた事です。仰有つてました。「少し、心配になるぐらい忠誠心が強い」と。……しかし、一期一振と秋田についてはまだわかりません。歴史修正主義者になつたのは。しかし、蜻蛉切には、あまりそういった動機は見当たらないそうですね。ええ、なぜ彼まで歴史修正主義者に。……村正の事でしょうかね、変えたいのは。ともかくにも、純粹な刀剣達です。

……審神者殿はどういう風に接していたか。さて、やはり以前と同じ答えをしましょう。とてもお優しく接していましたよ。手入れも

欠かさず、采配もリーダーらしく。笑みを絶やさな、穏やかな方でした。ああ、そういえば刀剣達にお声を掛ける事も欠かしていませんでしたね。ええ、今にして思えば。何かと挨拶をしていましたし、そのまま世間話に移行していたようにも思えます。

ええ、話を、です。あの方は、戦隊のリーダーを務めていただけあり、とてもお話し上手です。思わず聞き入ってしまうのでしようね。時に刀剣男士達を鼓舞するのも、非常にうまかった。血を滾らせるのがうまい方でしたよ。

……今日はこれでおしまいですか。あの、無理をなさらないように。老婆心ですが。

△月■日

おや、こんにちは。……捜査で無理をなさっていませんか。顔色が……ええ、そうですね。休む為にもさっさと終わらせましょう。それで、今日は何をお知りになりたいのですか。

——え、そうだったのですか。審神者殿は、ご両親を亡くされたのですか。ええ、そういえば書類にそんな事も……すみません、これも監督不行届の所以でしょうかね。あまりに審神者殿がそういう事を口にされないのが、疑問にも思いませんでした。そういえば、まだ10代の女性でしたね。家を恋しがっても可笑しくないのに、1度もそういう事を訊いた事がない気がします。聴いているとしたら、刀剣男士達でしょうか。今ではもう、確かめる術はありませんが。それで、お亡くなりになった理由は。

……はあ、ご両親もヒーローだったのですか。それで、人を助けている時に……。……え？ 何でそう思わないのか？ いえ、確かに「こういう事情を持っているなら、審神者の方が余程歴史修正主義者になってもおかしくない」と考えるのが普通でしょうね。ただ、ウチの審神者殿には、あまりそういう「普通」の理由は当てはまらないような気がしまして。ええ、何となくですが。それに、まるで本丸を我が家のように過ごされていましたから。

ええ、そういえば聴いた気がします。「今はお前らが私の家族だ」

と。それに、刀剣達もまんざらではない様子だった気がします。

家族に道連れにされてしまった今の彼女は、どうされているのでしょうか。……どういってはなんです、出来れば前者であって欲しいと願っていますよ。そんな事情を聴かされたあとでは。

だって、ご両親は審神者殿を置いて逝ってしまったのでしょ。今度は連れて行って貰えたのですから。……あ、この話はオフレコでお願いします。ええ。

※月▼日

……来られる度に顔色を悪くされていますね。嫌な汗も浮かんでいますよ。ああ、ヒーロー協会から謝罪が。こちらの不手際でしょう……貴重な人材を失わせてしまったこちらこそ陳謝したいですよ。飽くまでヒーロー協会からの出向という形であり、うちの審神者殿は主要任務を終えたら帰投する予定だったのですから。

……え？ 嘗ての彼女が指揮していた戦隊の人々が、ですか。同級生、成る程。わかりやすい。お友達だったのですね。尚更申し訳ない。何か手掛かりがないかと。残念ながら、今のところ消息を絶った刀剣も審神者も、まだ消息不明だそうです。

そういえば、お友達というのなら、彼女の家庭の事情も御存知だったのでしょうか。あ、今日はそこですか。……へえ、幼馴染みの方もいらしたと。戦隊の設定としてはお約束を踏襲していますね……ええ、その方から。……男性ですよ。え、ピンク？ ……ジエンドーが自由になりましたね。

それで、確か審神者殿のご両親はヒーローで。救助活動を行った際に命を落としたそうで。……え？ なら、なぜ亡くなられたんです。……誰も助けに行けない……ヒーローですら、ですか。ああ、でしょうね。ヒーローにしか行けないところもあるけれど、同じ志を抱いていても能力まで同じという訳ではないから。……それで、審神者殿は協会で育てられたんですか。成る程。人懐こい方でしたから、何とな

くその理由はわかりました。でもなぜ、そんな事を。

……審神者殿が「何か」をいつていなかったか、ですか。再三申し上げていますが、私は監督不行届の身の上です。審神者殿の発言の全てを把握していた訳ではないのです。

私が把握しているのは、審神者殿が「赤のヒーロー」であり、話し上手のカリスマ性のある方だった事。これに尽きます。

………なんですって？

……ああ、盲点でした。

私は、それぐらい「しか」知らされていないんですね、そういえば。

……今日は休ませてください。色々考えたい事があるので。

#月&日

日を置いてしまい申し訳ありません。そちらでも、審神者殿達の足取りを少しでもだけ掴めたそうで。ええ、嬉しいです。……どうされたのですか。

休んでいた間に思い出した事、ですか。はい、そうですね……以前には、私は審神者殿についてあまりに多くを知らない事を知りました。ただ、正直な話、私は「それでよい」と思っていたのです。

世の中には刀剣達をいたずらに痛めつける審神者もいる。それに比べれば、ウチの審神者殿は刀剣男士達に優しく接し、何かと声を掛ける。戦略も、無理のない程度にしていた。メンタルケアも欠かさなかった。

……審神者の「理想的な規格」通りの方でしたね。それもあり、ヒーロー協会から召喚されたのでしょう。私は、自分の責任は「審神者として刀剣達付喪神にいたずらに悪事を働かないか」というチェックが優先事項であり、あの部隊での仕事はその点において退屈に思えていました。まさか、あれ程刀剣男士達を気遣われていた部隊で歴史修正主義者が出るとは……それも全員。前例のない事でしょう。

気付かないのか。はて、気付かない、とは。どの事を指しているのでしょうか。

……別の部隊で起きた事件、ですか。はい、是非お聞かせ願います。

「ある部隊の審神者が、本丸の一角にて違法薬物の生成及び23世紀での売買を行い逮捕された。但し、刀剣男士達には何も知らされておらず、また適切な接し方をしていた為に、引継の際に大変苦労した」……そういった事件もありましたね。大抵、表向きはごく普通に過ごしている審神者ばかりですから。本丸という広い土地を利用して犯罪を起こすという危険性は事前に話し合われていた事ですが……ええ、そちらの監視も怠っていませんでしたよ。実際、そういったものはなかったでしょう。中には、あの元は大阪城だった場所を犯罪の巣窟と化させていた審神者もいたし、その痕を一掃する為の以前の「大阪城の作戦」でしたでしょう。

困った事に、刀剣男士達は自分達の審神者をインプリンティングのように盲目に慕う傾向にあります。ゆえに引継が苦労するのは当たり前といえれば当たり前ですね。審神者を再教育できればこれ以上ないのですが、まずそれはありえませんか。

……ここまでいって気付かないのか、ですか。……元来鈍い性分です。……なぜ苦笑されているのです。

え？

……だから私は無事に済んだ、とは。どういう事ですか。あの、話を（この日の記録はここで途絶えている）

\$月@日

全く、勿体振らないでください。あれから貴方の発言が気になって仕方ないんですよ。夜もたつぷり8時間しか眠れていません。……冗談ですよ。6時間です。ちよつと、パイプ椅子を振りかぶらないでください。

ええ、考えてみたのですが。全く鈍い話です。貴方がいいたかったのは、つまりこういう事でしょう。

此度の事件は刀剣男士ではなく、審神者に原因がある、と。

……盲点でしたよ。一見しても、采配を見ても、ごく普通の審神者でした。審神者としてカリスマ性のある、将に赤のヒーローの審神者でした。話し上手で……ええ、ですから。審神者殿に原因があると気付いても、それが果たしてどこが問題だったのか、検討がつかないのです。精々、私が見たのは、出陣や遠征帰りの刀剣達に、全員にまめに声をかけていたという事ぐらいで。

ええ、全員です。50人もいませんからね。それに、事件が起きる前には、自主的に執務室へやって来る刀剣男士達がほとんどでしたから。私がいればおいそれと何か出来る訳がない、そう高をくくって居眠りもしていましたね。席を外していた事もありません。

……納得した、ですか。

ええ、確かに話の巧みな、ヒトとして大層魅力的な方でした。言葉巧み、と言い換えても適切でしょうね。

戦隊のリーダーを務めていた頃からその傾向があったと。

自分がわかっている、という節も、今にして思えばあったかも知れませんね。「赤のヒーロー」は、世俗に慣れた刀剣男士達にも「絶対的な正義」。主人公です。まずぶれる事はない。

過度に信頼を置き……その言葉ひとつに左右されるという事態は、十分に想定されるでしょうね。ましてや、審神者殿が「家族」と言い切っていましたから。

警報が鳴っていますね。今日はここまでにしておきましょう。

?月*日

先日は驚きましたね。ええ、歴史修正主義者が政府を襲ってきた、と。それも最初は刀剣男士かと思えば、首から上に鬼の面を被っていた幽鬼だった、と。……新種でしょうか。私はここにいたので見ていませんが……。

それで、先日は話の途中でしたね。ええ、私からお聞きしたい事もあったのです。

以前、審神者殿が「何か」をいっていないなかったか、でしたね。何を、

審神者殿は仰有つていたと思つたのですか。

……ああ……そういう事ですか。確かに、彼女なら言いかねない。そして、歴史修正主義者に荷担しても、少しもおかしくない。いえ、でも、やはり違和感は付きまといますがね。彼女は、「そういった事」を企むにしては、明るすぎるんです。

「ヒーローがヒトを助けるなら、ヒーローは誰が助けてくれるのか。同じ志を抱くヒーローですら、両親を助けられなかった」

——過去に帰って両親を助ける。審神者殿がそういった、「普通」の事を考えているようには微塵も思えないんです。今でも、いえ、今だからこそ、です。

だって、審神者殿はあまりに前向きで、明るくて、そしてヒトとして魅力的でした。そういった重い過去をストレスに感じているようにはちつとも思えなかつたんです。

……—あ、いえ。何でも。……ああ、はい、いいましたね。教えられる事は全て教えると。いえ、今のはただ、少し思いついただけです。

今、自分が口にした審神者殿の特徴。明るくて社交的で頭もよく、魅力的。いつてしまえば、これは「サイコパス」に似ている、と。勿論、全てのこういつたヒトがそれに当てはまる訳ではありません。サイコパスの前提として、それらの特徴が上げられるだけで。

ただ、日本のサイコパスは、他人を利用する事が多いと聞きます。つまり、ヒトを唆するのが非常にうまい。……ヒーロー、戦隊のリーダーを務めていた頃からその傾向があつたから、謝罪があつた、と。それで、戦隊のメンバーは。

……成る程。彼らとは良好な関係が築けていたのですね。というよりも、彼らは自分達のリーダーやメンバーとだけではなく、他の人達とも交流していた。だからこそ、審神者殿の話術に捕まりきらなかつたのかも知れません。

お気遣い有り難う御座います。……ええ、今にして思えば、そうですね。それしかあり得ません。可能性を排除していき、最後に残つたのがたとえどんなものであれ真相だと。

まず、刀剣男士は審神者殿に叛乱をしたかったのか。それは否といえるでしょう。彼女は審神者としてまともで、そして魅力的なりーダーでした。

次に、審神者殿は刀剣男士を陥れたかったのか。これも、私からすれば「否」。なぜなら、彼女は刀剣達を「家族」といつていました。

日本の「家族」は、海外に比べて関係が癒着しがちです。一体化する傾向にあります。この辺りは従来のサイコパスと特徴が異なりますが、誤差の範囲でしょう。それに、愛情を抱かないのがサイコパスですが、愛情と依存は異なるものですから。

ならば、審神者殿は何をしたのか。ひとりひとりと話しをし、関係を濃密にし、そして皆に慕われるリーダーとなった。

それこそ、指先一本で自らについていく程に。

——今度は随分大きな警報ですね。大きな襲撃のようです。

……ああ、懐かしい声が聞こえてきますね。あれはウチの審神者殿の声ではありませんか。外、どうなっていますか。

……刀剣男士の姿をほとんど残したままの歴史修正主義者が前線。後方に他の歴史修正主義者。そして審神者殿がスピーカーを持っている、と。

成る程。審神者殿はこれがしたかったんでしょうね。

審神者殿は、ただ楽しく生きたいだけなんです。同じヒーローだった親御さんがヒーローに助けて貰えなかった事はただの思いつきの切欠に過ぎない。

ヒーローはヒーローにもヒトにも助けて貰えない。なら、自分で自分を助けるしかない。ヒーローは悪を屠るものだし、それならば逆もあるのではないか。どちらが面白いかといわれれば、赤のヒーローに生まれついて20年近く。これからの人生は、所謂「悪」になって滅ぼす側に回りたい。そして魅力的で衆目を集める「敵」は、「刀剣男士」としての側面を強く残した歴史修正主義者——審神者殿は苦心されたのでしょうね。

ひとりずつ、ひとりずつ、こんのすけである私の目を盗んで、話術で洗脳していった。特に転化が激しかったという方々は、純粹さゆえ

にそうなってしまったのでしょね。

あの人は間違いなく「赤のヒーロー」なんです。主人公であり、リーダーである。しかし、本来のそれとは一線を画している。彼女は、愛情を抱かないのです。ただ、楽しい事をしたいだけ。自分の「絶対的正義」を自覚して、刀剣達を洗脳していったのでしょね。

ああ、気の毒ですね。私からは見えませんが、彼女に心からついていっているだろう刀剣男士の彼らが。

昔のゲームに、こんなものがあつたそうです。「御標」。神が示す、人生で全うすべき指標。完遂すれば幸せが約束されている。しかし、審神者殿は、刀剣男士達のそれを歪めた。

普通なら気付くそれも、審神者殿は目を覆って見えなくした。歪められている事に、屹度彼らは気付かなかつたのでしょね。

『こんにちは、政府の皆さん。今日は先日し損なつた挨拶に来ました。以前までこちらで審神者をしていた●●●●です』

『私は本日、ここに歴史修正主義者側につく事を宣言します』

『ウチの刀剣男士達も、快く歴史修正主義者となる事を全員賛同してくれました。これからは正々堂々と、たくさん戦いましょう。私もめでたくこちらの大將として認められたので、これからじゃんじゃん戦力を送り出しますから』

『なぜって？　こちらの方が「楽しい」からですよ』

同日、行方不明だつた審神者の●●●●を失踪した刀剣男士40余名と共に発見。「敵」方に回る事を宣言し、苛烈な攻撃を加えてから去る。この際の観測により、驚くべき事に審神者はヒトの身体を保つたまま、彼女の元の刀剣男士も元とほとんど変わらぬ性能を誇つていたという。

以降、検非違使の出現により一時弱体化していた歴史修正主義者の猛攻が再開される。

「絶対的正義」

(それが歪んでいるかどうかは、定規を入れないとわからない)
(その定規すら撓んでいれば、一卷の終わり)

気付けなかった事。ただそれだけが私は悔しいのですよ。

「してやられた」と。

〇〇部隊「こんのすけ」の聴取は終了。以降、彼の処分を待つ事となる。事態を重く見た政府は、「こちら側にいた時の審神者や刀剣男士の状況」を知っていた者として、彼の処分を保留とする可能性が高いといわれている。

End.

【どうらぶホラー】石段【現代パラレル】

鬱蒼とした松の林。見上げても、登頂の見えぬ石段。濡れた地面。風にざわめく草。背中の向こうの街灯が点滅している。山の入り口。人気のないそこで、大俱利伽羅はひとり、そこに佇んでいた。金色の双眸が、宵闇に光る。浅黒い肌に伴う容貌は、しなやかな肉食獣を思わせた。草木に紛れば、この辺りにも出るといふ熊も狩れそうだ。実際のところ、大俱利伽羅にそのような強さはなかったが。

そして、今。喰われるのは自身だ。大俱利伽羅は、何とはなしにそう思う。こんなところに、ひとり。こうして立っている事自体、大俱利伽羅には理由がわからない。

いつも通りに、過ごしていた筈だ。夕食を作り、風呂に入り、床についた。母の三回忌を過ぎた今は、家族3人で過ごす事に慣れていた。この日も父や兄に挨拶をして、眠りについた筈だった。

(懐かしいな)

苔生した石段。それに足を踏み出す。そこで、自身がいつものスニーカーを履いている事に気付いた。見れば、服も普段と変わらぬものだ。寝間着に着替えて眠った筈なのだが……そう思いながらも、思いつく。い出す。

松林に囲まれた、長い石段。周りのこの光景にも、見覚えがあった。幼少の頃より時折訪ねた、地元のお寺だ。自宅より少し遠いそこは恰好のピクニックに適したところで、遍路の中にも、自分達親子や祖父母と孫のように、この寺の周りの小さな公園で弁当を食べている姿が見られた。それだけ地元民にはなじみ深く、また、地域信仰のメッカとしても知られているらしいと、ごく最近知った。この長い石段を登った先には、大きな池がある。底の泥の中の蛙の卵が見える程に水は澄んでおり、違う時に訪ねた時はオタマジャクシが戯れていた。

しかし、夜に訪ねた事はない。

大俱利伽羅は、石段を登った。子供の頃は気付かなかったが、この石段は急勾配だ。それでも大俱利伽羅は、歩を進める。思いつくのは、中学の遠足だ。

大俱利伽羅が通っていた学校の行事で、この寺まで文字通り「遠足」に訪ねた事がある。常に車でやって来ていた大俱利伽羅が、意外にこの寺が自宅から離れている事を知ったのはこの時だ。歩き通し、途中で「熊出没注意」の標識を見て首を竦め、そして次の日に筋肉痛になったのも、今では良い思い出だ。雨男の自身にしては珍しく晴れ渡った空。母の弁当を食しながら、尚もはしやぎ回る同級生達の体力に呆れたものだった。

——熊は、100mを6秒で走るといふ。運動能力が高い方であるという自負はあっても、野生のそれに勝てる気はしない。

「今出て来られたら、間違いなく喰われるな」

ひとりごちる。その声は、自分でも意想外に小さい。階段を見上げる。足音は、苔に吸い込まれる。石段は湿っていたが、スニーカーの為か。蹠踏めく事もなく、大俱利伽羅は順調に歩を進めていた。ゆっくり、ゆっくりと。何かを惜しむように。

想い出に浸っていた間に、気付けばそれなりに登っていたらしい。辺りは更に暗く、大俱利伽羅を囲んでいた。ただでさえ明るい色の服を好まない自身だ。闇に解けている事は自覚していた。

……思い出せば、幼い頃は違った。母は派手好みで、子供を着飾らせる事を好んだ。別段、悪い母親だった訳ではない。ただ、伊達好みの兄と異なり、自身はさして身形に頓着する質でなかったのが些細な差異だった。幼い頃にこの寺に遠出に来た時も、自身は母好みの服を着ていた。そういえば、中学の遠足の時は学校指定のジャージだった。だが、今は、反抗期や思春期を経た結果の自分好みの服を纏っていた。自分のワードロープの中でも特に気に入っている服である事に、ふと気付く。

登る石段、雪国の秋の夜は雨上がりも相俟ってよく冷える。手や顔が冷えて火照るのを感じたが、しかし動きが鈍る事はなかった。寧ろ体を温めようとして、足を速めた。襟足を垂らした髪が、その速度に合わせて背中へ流れていく。そろそろ、石段の登頂が見えようとしていた。果たして、自分は何段と歩いてきたのだろう。この石段が長い事は地元では有名だが、幼い頃に兄と数えようとして途中で飽きてし

まいグリコ遊びに転じてしまった記憶しかない。その時は祖父母と共に登頂を目指していた。池に集るオタマジャクシを見たのも、その時だ。あれは夏か、それに近い季節だった。よく晴れた日で、木漏れ日が石段の苔を照らしていた。

それにしても、これは夢だろうか。今更のように、大俱利伽羅は考える。進める歩。ただ石段を登る事に費やしていた頭を、漸くその可能性に使う。

寒いのは、寝相悪く布団を蹴飛ばしてしまっているせいかもしれない。北国の秋の夜は冷えるのだ。少しばかり足が疲れ息が上がっているのも、夢と同時に体を動かしているかも知れない。時折、水音が聞こえるのも、窓の外で夜露が屋根から滴り落ちているのかも知れない。過去にその経験があるからこそ、大俱利伽羅はそちらの自分も予想する。

ただ、解せないのがひとつ。夜のこの寺を、自身はこのところ思い出しすらしていなかった事だ。

今は秋だ。夜風を感じる肌も、それを伝えてくる。この寺が盛んになる晩春から初夏の季節は疾うに過ぎていた。廃仏毀釈などどこ吹く風、神仏習合の名残を残すこの地域はこの寺も例外ではなく、土着の神の信仰の講社もこの寺は兼ねていた。また、幽霊画が保管されている事も有名であり、雨乞いに効果があると知ったのもずいぶん前の事だ。

(そういうえば、ここに来る度にいつも晴れていたからな)

雨男で知られる自身が、晴れ男の兄を伴わなくても快晴だった遠足の日は、少なからず驚いたものだった。聴けば、その幽霊画が公開される日は必ず雨が降るといふ。それぐらい、ここは晴れている事が多いのだろう。

そして不意に、気付く。濡れた石段、時折風に舞って頬に触れる水。雨上がり。それは、先程までその珍しい雨が降っていた事を意味する。それは、つまり。

「……着いたか」

ひとりごちる。漸く、登り切った先。石造りの外灯。それのお陰

で、その広場は見渡せた。木造の古ぼけた小屋。今は鍵がかかっているが、中には恐らく地蔵が並んでいる。そして、その右手に広がる大きな池——昔から変わらない光景だった。そして、辺りを見渡す。

人気はなかった。風にざわめく木々。暗闇の中、虫の音や、獣の気配すらない。ここは山の中なのに。不思議に思いながら、広場へと足を進める。この寺に最後に来たのは中学生の時だ。その時はここに登らず、麓の公園で弁当を食べた。だから、ここに来るのは小学生以来だ。懐かしい思いを胸に抱いて見渡し——ふと、池に気付いた。

木々が揺れ、月のない夜空では雲が常より速く棚引いている。その中で、池にはさざ波ひとつ立っていなかった。黒々とした水面には、外灯の光すら映らない。

奇妙に思い、畔に進む。池の縁で膝を突いた。そして、街灯の下。それを、覗き込む。

目が合った。

「くりちゃんが本当にあんまり起きないから、救急車を呼ぼうかとも思ったよ」

27時間。自身が眠っていたのはそれ程の時間だったという。眠りすぎて痛む頭。心配そうな兄は、当番を代わって作ってくれたという食事を出しながらいう。小さな仏壇を背に卓袱台に向かっていた父も、「徹夜でもしていたのか」と問うてくる程だ。寝癖のついた頭。辛うじて顔は洗ってきたものの、いまだ意識が現実に定まっていなかった。テレビが、丸1日分自身が逃した情報を伝えてくる。昨日の新聞を捲りながら、自身は家族2人の話を聞く。

曰く、自身が長く眠るのはいつもの事だったからと最初は放っておいた。しかしいつまで経っても起きてこず、兄が部屋を訪ねても、締め切ったドレープカーテンの中、薄暗い部屋で自身は寝息を立て続けていた。そしていくら揺さぶっても、飼い猫を喚けても、自身は起きなかったという。

「正直その寝息も中々聞こえなかったから、わざわざ枕元まで行かないと聞こえなくて。一瞬死んでいるのかと思ったよ」

そう話す兄の言葉に、申し訳なさが掠める。長い事ほとんど寝たきりだった母が起きないと思えば、既に手遅れだった。その事態を発見したのは誰よりも大俱利伽羅自身だった。今は背後の仏壇、骨壺の中の人となった母の事を思い出しながら、空腹を訴えてくる腹に忠実になり箸を手取る。日頃は自身が食事を作っているが、兄も作れるのだ。白い飯に野菜炒めを載せる。咀嚼して飲み込むと、同じように卓袱台に着いた兄に話した。

「夢を見ていた」

「随分寝相が悪かったけど、夢も見えていたんだね」

「……どういふ風に悪かった」

「布団を蹴飛ばして、まるで走ってるみたいなた体勢だったよ」

「やっぱりか」

肯いて、味噌汁を啜る。実は父の実家の農家から貰った馬鈴薯だ。首を傾げる兄と、食事をしながら聞き耳を立てている父の前で大俱利伽羅は思い出す。

目が合った。だから、その場で立ち上がり、転げ落ちる勢いで石段を下りたのだ。無限にも思える石段は、しかし下りは速い。風が吹き荒び木々が軋む音を聞き、水滴を浴びながらも、必死で降りた。そして外灯が差す地面へと足を着いた時、自身は俯せで布団に横たわっていた。無論、寝間着である。

あれは悪夢というべきか。涼やかな夜の山の野歩きは、それなりに心地よかったといえる。風の吹く石段も、不快ではなかった。懐かしい光景を、ただ夜の空の下で回想した夢とも思えた。幼少に見た光景を脳が合成したのかも知れない。

但し、あんなのは覚えがない。

「●●寺の登頂に夜中に登った夢を見ていたんだがな。あそこに、大きな池があつただろう」

「あー、うん。そういえばあつたね」

「あそこを覗き込んだらな、目が合ったんだ」

「オタマジャクシとかな。あそこいっぱいいたし」

「ああ」

想い出を共有する兄に、自身は重ねていった。

「但し、池にいたのは池からはみ出すぐらいの大きさのオタマジャクシ1匹だったかな」

のちに聴けば、あの寺の石段は227段あるという。登って下って454段。さて、自分はどれだけの時間をかけて階段を上り、あの広場にいたのだろうか。

オタマジャクシの名が本来は縁起物、と聴いてもあの不気味さは拭えなかった。あの、夜よりも黒い、ぬらりとした体表面のオタマジャクシの目は容易く忘れられそうになかった。あのまま夢を見続けて、喰われなくてよかった。心底思う。

そしてなぜこんな夢を見たのか。食事をしながらも首を傾げる自身に、兄は呆れながらも思い出した様子で尋ねた。

「くりちゃん、最近ホラゲーばかりやってるでしょ」

「流行ってるゲームがホラーばかりなだけだ」

「今度発売するホラゲーも予約してるってね」

「面白そうだからな」

「確か小さい女の子が、探しものをして不気味な夜道を歩き回るゲームだっけ。変なものに好かれやすい癖に、そういうのをまた漁るか」

溜息を吐く兄は、様子を窺っていた父の横で答えた。

「あそこ、うちから1番近い心霊スポットだよ。知らなかったの」

夜に行った事のない理由を、この時にはじめて知った。

End.

【どうらぶ現代パラレル】どろ 【大俱利伽羅＋CCP】

水戸の祖父母は、実の娘も忘れる程に痴呆症を患っている。だから施設に入っている筈だった。

「光忠、行くぞ」

「うん」

自身はいくつぐらいなのだろう。それは判然としなかったが、自身の兄は小学生の子供に戻っていた。兄は、水色のランドセルを背負い、自身の跡を追ってくる。身長差があるから、歩幅も違うのだ。だから人混みの中、出来るだけゆっくりと歩く事にする。

見覚えのある場所だった。地元の大形スーパーとデパートが緋い交ぜになったようなところ。何かのセールでもしているのだろうか。混雑しており、時折、傍にいる筈の兄を見失ってしまう。だから時折、振り向いては、兄がいるかどうかを確認した。兄は何を考えているのかはよくわからなかった。ただにこにここと、いつものように機嫌良く笑いながら、自身の跡を追っていた。いかんせん、まだ距離が開いていたが自身はエスカレーターに乗ってしまった。戻る事は出来ない。

少し前にプレイしたゲームのようだ。何とか攻略したそれは、主人公が最初に助けるキャラクターが足を負傷しており、足早の主人公に對してあつという間に画面からロストしてしまう。しかし次のマップに移動すれば直ぐ後ろにいる。ゲームの仕様とってしまえばそれまでだが、そのマップ移動がない状態のようだった。

早く追いついてくれ。あのサイキラーは現実には存在しない。しかし誘拐犯は実際にいるのだ。そう思いながら、何度目かに振り返った。

「あら、みっちゃんじゃない」

悪寒。その声に即座に覚えたのはそれだ。エスカレーターの踊り場に出て、人に構わず即座に見下ろす。

下の踊り場。そこで幼い兄が困っている。彼を捕まえる老人の手。彼に顔を綻ばせる老婆。それらは傍から見れば変質者でも不審者で

もない。実の祖父母だった。

「こんなところで奇遇だね」

「大きくなったね」

そんな会話が、人混みの中でも聞こえてくる。自身は直ぐにでも兄の元に駆け下りたかったが、目の前にあるのは登りのエレベーター。反対側に回らねば下る事が出来なかった。しかしかといって、目の前の光景から目を離してはいけないように思えた。

「また」、兄が攫われる。目の前で、なすすべもなく。自身の手はあまりに幼く、短い。届かない。

「くりちゃん！」

——しかし、兄は手を振り払った。

金縛りから解けた自身は、小柄さを利用してエレベーターの人混みをすり抜けていく兄を出迎える。そしてそれを慌てて追いかけてくる祖父母を——足腰が弱っていたのにそれなりに俊敏だ——前にした時には、兄を背後に隠して祖父母を睨め付けていた。彼らは明らかに動揺している。自身はランドセルを鳴らして背後から前を窺う兄を庇いながら、防火扉の前で唸る。

「また、光忠を連れて行くつもりだったな」

「違うよ、偶々ここに来たらみっちゃんかひとりだったから」

「そうそう、迷子かと思って」

「そうやって恩着せがましい事をいって、子供を、孫を連れて行く手管は変わらないんだな、芸のない」

怒鳴らない自身が不思議だった。目の前にいるのは、今の家が「こくなった」遠因だ。かわいがられた覚えもある。時に世話を受けた恩義もある。しかし、それと今は話が別だった。自身は手を払った。

「とつとと失せる。光忠は連れて行かせない」

——しかし、不意に違和感が裡に出る。

この子供は、果たして兄だったのだろうか。この憎悪は、果たして自分のものだったのだろうか。

腰回りの裾を掴んでくる子供の手が、小さい。

この家もすっかり廃れていた。普請道楽の名残も、そろそろがたがききているだろう。

「くりちゃん、もう用事は済んだの」

「ああ。帰るぞ」

自身は自転車を引き起こす。荷台には幼い兄が乗り、自身はサドルに跨った。もうここに用はない。母と伯母の実家であり、今は施設に入っている祖父母が留守にしている一軒家。誰も手入れをしてない為、秋も深まってきたせいか、「廃屋」という単語が過ぎる。それを尻目に、自身は兄を連れて帰宅する。

ここにあつた用事は済んだ。ペダルを漕ぎ、坂道を登る。舗装されていない道路は時折砂利で石を砕いた。近場には、これは偶然だが父方の親戚の家もある。そちらに挨拶する予定もなかったが、視線をやった。

ぼたり。

自身の真横を、何かが落ちていった。見下ろす。

それを何と表現すればよかつただろう。コールタールのようなそれが、道路でだらしなく円を描いている。思わず目を瞬いていると、

「くりちゃん、上」と背後から声がした。

喉を引き攣らせた。道路には、藤棚のようなものが渡されている。秋だから今は何のツルも絡んでいない筈だった。代わりに、コールタールのような泥で出来た葡萄とそのツルや葉が形を成している。生理的に覚えたのは嫌悪。こちらの方が正規の通り道だが、引き返して近道を取る事にする。しかし、振り返った道路にも、同じ藤棚が出来ていた。

コールタールのような泥。それがぼちやり、ぼちやり。時折、グロテスクな葡萄の粒を落としていく。粒は砂利の道路にぶつかると、そのまま固まって動かない。

「くりちゃん、横道があるよ」

背後から高い声がする。自身もそれを思い出し、ハンドルを切った。人の家の畑の畦道に入ってしまうが、謝罪はあとでする事にした。このコールタールの葡萄から逃れるには、それしかなかった。

狭い道を通り、兄がどこかにぶつからないように意識しながらペダルを漕ぐ。すると途中で、声をかけられた。

「あらあら、大俱利伽羅ちゃんじゃない。どうしたの、こんなところで。おじいさんとおばあさんに会いに来たの」

顔を上げれば、見覚えはあった。この近所にはやたらと知り合いが多い。この中年の女性は小学校の同級生の母親だ。幼い男の子を連れて必死で自転車を漕ぐ自身を不審に思ったようだ。それもそうだろう。肩で息をしながらも挨拶すると、その女性はコールタールの葡萄酒を見遣った。そして顔を顰める。

「ああ、あれを避けてきたのね。それじゃあ仕方ないね」

「あれは、一体」

「さあね、いつの間にか出来ていて。一応、あの泥がついても洗えば取れるの。でも何せ臭いがひどくてね」

「泥……」

「コールタールみたいだけど、どうやら泥らしいのよね。さ、汚れないうちに帰った方がいいよ」

促され、自転車を走らせる。舗装されていないのは同じにせよ、今度はずっと広い道路だ。しかし、直前で振り返る。荷台では兄が不思議そうにしていた。そしていつの間にか兄の肩にも泥がついているのを見て顔を顰める。

あの泥は、見覚えがあった。コールタールのような泥。否、泥と違っていいものか。汚泥だ。それには変わらない。ただ、あの泥がどこから来て、どこから生み出されたものか、自身は知っている。

祖父母の家では、葡萄が半ば野生化していたのを覚えていた。母の生家でもある、あの家から、泥の葡萄は伸びていた。

血と泥の葡萄は、憎悪で出来ていた。ふと見下ろす。自分の黒い服。

この服が黒く染まったのは、あの家で「用事」を済ませた時、一身に泥を浴びたからではなかったか。

刹那、聞こえた気がした。「肉親」という盾で身内に横暴に振る舞い続けた祖父母。権柄尽の自らの両親に叫んだ母の言葉を。

『光忠を返せ』

「くりちゃん。僕は自力で帰ってきたんだよ」

息を吸う。そして、深く吐いた。

暗い自室。時計を見れば、既に夕方の6時を回っていた。ドレープカーテン越しにも夕暮れの日差しは疾うに遠い。体を起こすと、寝間着越しの汗ばんだ体が気になった。額に貼ったままの冷却シートを剥がす。寝ている間に熱が上がって、そして下がったようだ。この日の朝、あまりのひどい頭痛と微熱で掛かり付けの医者に貰った点滴と薬が効いたらしい。呆けた頭で、癬毛気味の頭を搔いた。

胸が悪い。それは数年ぶりにひいた本格的な風邪のせいだけではなかった。体温計を口にする。

(風邪で、弱っていたんだな)

頭を抱える。寝ていても起きていても殴りつけられたように痛む頭痛は止んでいた。しかし、別の頭痛の種が舞い込んできていた。

自身は、母親似だといわれる。そして自身は、母が自分の両親へ――水戸の祖父母への憎悪を、どうやら知らぬうちに受け継いでしまっていたようだった。その事実には、暗い部屋から廊下に出た。隣の部屋は、元は両親の部屋だった、今は父の部屋となっている場所だ。

「お帰り」

「ああ、ただいま。具合は大丈夫か」

父は膝にすり寄ってくる飼猫を抱えながら、のそりと出てきた次男の体調を窺う。恐らく病人食を買い込んでくれた兄から話は聞いたのだろう。「頭痛はやんだ」と端的に答えながら、人心地をつく。

この人は知っているのだろうか。自身の亡き妻が胸の裡に飼っていた泥のような憎悪を。子供を奪われる事の、母親の救いがたい程の、心の血肉を食い破り培われる汚泥の感情を。

自身もまた、そこまでひどくないにせよ、似た感情を兄に持っている事に自覚した。してしまった。

覚えているのだ。1才になるかどうか。引越しの作業中、手伝いに来たとき口実をつけて、本来ならより手間のかかる弟の自身ではなく、大人しい兄の光忠を連れて行く祖父母を。幼きゆえに視界は低い。しかし、少しだけ若かった祖父母に連れて行かれる、兄の後ろ姿に手を伸ばした。その光景が、本当の最初の記憶として、脳裏に焼き付いていた。

それから数年。兄は自力で帰ってきた。「自分の家はここではない」「両親の元に帰りたい」と訴えて。水戸の祖父母は泣く泣く兄を手放した。そうして漸く、この家は「4人家族」になった。

従兄と思いきや、こんでいた人が実の兄だと知ったのはその時だったと思っていた。しかし、本当は知っていたのだ。自身も知らぬうちに、祖母を罵る母の怒号と共に、兄を連れて行かれたかなしみを心の裡に飼っていた。

「あれ、くりちゃん。起きたの。おかゆ食べられる」
「ああ」

ひよっこりと顔を出す。低い声だ。当たり前だ。成人男性なのだ。兄が開きっぱなしの父の部屋の扉から顔を出す。自身より丁度、口に啜っていた体温計が音を鳴らした。とりあえずは平熱に戻った事を、それは知らせてきた。

昼に帰ってきてから、夕方まで風邪と闘っていた6時間。その間に、風邪には勝った。しかし自らが知らずにいた患部を切り開かれた。そこからは血と泥が溢れかえり、まだうまく飲み込む事も吐き出す事も出来そうにない。

兄弟愛、ブラザーコンプレックス。そんな生やさしいものではない。この泥は「家族愛」という執着の名をしていた。奪われれば、そのまま限界まで引張られる感情だ。決して人に見せてはいけない、汚泥だった。

(かえせ)

願わくば、このまま互いに適切な人生の針路を取って離れたいものだ。そう思いながらも、自身の胸に不安が過ぎる。

もし自分の子供が奪われるような事があれば、自身はあの汚泥を吐き出すのではないだろうか。母親から受け継いでしまった泥を。

End.

「とうらぶホラー」くりちゃんと僕 子【現代パラレル】

祭り囃子

しゃん、しゃん、しゃん。たわわな鈴の音が、3つ。最近、そんな音で夢が覚めるといふ。

「クリスマスソングかい」

「どちらかというと、祭り囃子だな」

白菜を切る手は止めず、くりちゃんはいふ。今夜の夕食は豚汁だ。野菜室に余る野菜をふんだんに切るくりちゃんは、母の代から使い古しの包丁を片手に語る。その目はいつもの鋭い光はなく、茫洋としている。先週、ひどい風邪をひいて1週間程寝込んでいた名残だろうか。一応、色だけは同じ虹彩の僕が見ていると、くりちゃんは切った野菜を盥に移しながら続ける。

「ただ、この辺りのものではない。あそこまで単調ではないな」

「この辺のは独特だからねえ」

風呂上がり、首からタオルを下げた僕は肯く。観光地として、国際的にも有名な地元だ。特に夏の祭りは伝統があり、独特の太鼓と横笛の音が夜遅くまで響く。1部からは騒音だと苦情が来るらしいが、少なくとも自分達兄弟にとっては子守歌のように馴染んだものだ。それはいい。

ただ、今は晩秋だ。来週にも雪が降る、とローカルテレビのお天気お姉さんはいっていた。この季節には、精々紅葉や菊を愛でるものしか祭りはなく、そしてそれを囃し立てる楽もない。

炊飯器のスイッチを押す。そしてくりちゃんは、大きな鍋に油をしいた。何でもなさそうな顔で、くりちゃんはいふ。

「夢の内容は、いつもばらばらなんだがな。決まって、その鈴の音で起きるんだ。3回ぐらい鳴って、そして止まる」

「それも夢なんじゃないのかい」

「目が覚めたあとに、3回目が聞こえるんだ」

「……とはいっても、僕は聴いてないな」

片目が見えないから、聴覚には敏感だ。ましてや隣室のくりちゃん
の部屋の物音は壁越しによく聞こえるのだ。それで何度、怖い思いを
した事か。いくつになってもオカルト現象と縁が切れなくくりちゃん
と、存外平気そうな本人の落差はとても大きい。怖くない訳ではな
いらしいものの、いかんせん本人の感情表現が乏しかった。

そんなくりちゃんは、豚肉を炒めながらいう。

「それで、段々、音が大きくなっているんだ」

「へ」

「いっただろ、鈴の音が鳴っていると。最初は聞き間違いかと思っ
ていたが、最近はインターホンの音かと思うぐらいには大きくなっ
ているぞ」

「……くりちゃん、最近またどこかで変なの引っ掛けてきたかい」

「俺自身には覚えはないんだが」

「鈴の音といえば、オカルト現象あるあるじゃないか……」

鍋に根菜を追加しながら心底不思議そうにするくりちゃんに溜息
を吐く。頭の水気を拭きながら、これまでくりちゃんが遭遇してきた
オカルト現象を思い返した。

とにかく、何かと攫われそうになりやすい。あり得ない距離をほん
の短時間で行き来してくる。墓場で足を引っ張られる。長じるにつ
れてそうだった事は減ったものの、妙なものに好かれやすいのは変わ
らなかつた。

ふと、僕は思い出す。つい先日読んだ小説に、こんな話があった。
鈴などの、音を鳴らす行為は相手に自分の存在を知らしめるもの。そ
の為に、身分の高いものがそういった品物を身につけて下々の者に先
触れする効果もあった。

そして、くりちゃんに尋ねた。貴いもの。それには少しだけ、心当
りがある。

「くりちゃん。あの子供の頃に住んでいた公務員官舎があった場所。

あそこの近くにあった古い神社、ひよつとして訪ねたりした」

「建て直しをしていたから、通る度に見かけはしたが。あそこ、神社の敷地内の不法占拠の家の住人が亡くなったらしいな」

「くりちゃん。明日、ちよつと別の神社に行こうか」

拒否は許さない。笑みにそういう意志を塗り固めると、くりちゃんは戸惑いながらも肯いた。

この時の僕は敢えていわなかった事がある。

鈴の音が先触れだとしても、音が鳴っていない時。そこに「貴人」が、じつと息を殺して背後に立っている事もあり得るのではないか。

出不精のくりちゃんを引っ張って別の神社に連れて行ったのち、くりちゃんの聴いていた「鈴の音」はやんだそうだ。

祭り囃子は夏に限る。

このこのいつつのおいわりに

くりちゃんが「七五三」と思いこんでいた記憶がある。くりちゃんと僕は同じ神社で七五三を迎えた筈だが、くりちゃんはその時の想い出とは別に、5才の頃に神社に赴いた記憶があるらしい。

とはいっても、先述の神社に、今は亡き母は普段着で共に赴いたそうだが。

先述の神社。実は同じ敷地内に3つの神社がある。正直なところ、神社の詳しい仕組みは知らない。まして僕はその近所にあつた公務員官舎に住んでいた時間がある事情で短かった。だからその神社の事情についてはくりちゃんの方が余程詳しい筈だった。当てが外れた、と知つたのは、そろそろ七五三の季節だと気付いてそれを話題に出した時の事だった。

「俺の七五三は、あの神社でやったと思っていたんだが」

不思議そうに首を傾げるくりちゃんに、「くりちゃん、そこで千歳飴は貰ったかい」と尋ねた。そこではじめて、くりちゃんの記憶の食い違いが発覚した。

くりちゃん曰く、雪が降っていない季節だったそう。薄暗いような空だったので、恐らく曇天の日だったという。

くりちゃんは母に手を引かれ、当時の自宅から100歩もないような神社に赴いた。当時から神社は3つあった筈だが、入ったのは1番端の神社。当時から敷地内を不法占拠するあばら屋があり、その時も既にそこに建っていたそう。宗教法人に関する土地の法律についてはまた勉強せねばならないだろう。

「ああ、いらつしやい」

白色無紋の衣冠。それを着込んだ中年の男性が、2人を迎えたそう。どうやら事前に連絡を受けていたらしい。くりちゃんは母に背中を押され、屋内に上がった。

そこが神社のどこだったのかを、くりちゃんは今でも思い出せないそう。

額縁の掛かった、小さな和室。六畳一間……とまではいかなくとも、当時幼かったくりちゃんから見ても小さい部屋。そこで、母は後ろに。神主の男性の前で、くりちゃんは正座した。くりちゃんと神主の間には、黒い小さな台のようなものが置かれていた。

どれだけそこにいたかを思い出せないというが、幼く、そして決しておとなしさという言葉とは縁が深くなかったくりちゃんがせいぜい母と神主を苦笑させる程度しか動かなかった事を考えると大して長い時間ではなかったのだろう。くりちゃんは、神主が大幣を自分に向けて振っているのを、ひたすら眺めていたそう。

そして暫くすると、神主の男性はくりちゃんに笑いかけた。そして斜め後ろの母に話しかけた事で、何かが終わったらしい事に気付いたという。

そこで自分に渡されたものを、くりちゃんは考えているうちに漸く思い出した。

「多分、あれは形状からして破魔矢だな。紅白2本1セットで貰った」
「破魔矢……お宮参りか何かだったのかい」

「さあ……お宮参りは赤ん坊の頃にするんじゃないのか」

「そういえばそうだね。それに雪がなかったって事は正月でもなかったんだろうし」

お互いに首を傾げる。くりちゃんは、再び語ってくれた。

母と神主が談笑しだした事で、どうやらその場が緊張していた事に気付いた。しかし、くりちゃんにはその理由がわからなかったという。そして母に連れられて、くりちゃんは神主に見送られながら神社をあとにしたそうだ。

その破魔矢は母が大事にしまいこみ、また自身もさして興味がなかった為に、その出来事を帰ってきた父に話す事もなく、当時は水戸の祖父母の元にいた自身も知らず、現在に至る。ただ、数年ののちも何度かどこかの抽斗にその破魔矢が入っているのを見かけた為、お礼参りに返した様子でもなかったそうだ。

「破魔矢は一年ごとにお礼参りで返すもの、だから買うのは面倒だと母はいつていたがな」

「そうだね、いつていたね。……で、くりちゃん。君は結局、何しに神社に行つたんだい」

「さっぱりわからん」

神社の外に出ると、日が暮れそうになっていた。秋の日はつるべ落とし、くりちゃんは母に手を引かれ、やはり100歩とない距離の官舎に戻った。そして今日に至る。

当時もその後も、なぜ神社に赴いたのか。なぜあの時に限って破魔矢を貰ったのか。神社にそうして赴いた機会は、あとにも先にもそれきりだったそうだ。

「破魔矢っていうのは子供への邪を避ける為のものだというけどね。寧ろくりちゃん、小さい頃の方が健康だったよね」

「お前の方が病弱だったろう。右目もそのせいだし」

「でも僕も、特別そういうお祓いみたいな真似は受けた事がないな。兄の僕の右目の件を受けて次男の心配をして、というには5才ってい

うのは今更な感じがするし。僕が目を見失ったのって赤ん坊の頃だし、……」

「どうした」

僕の部屋で漫画を広げながら寝転がっていたくりちゃんは、首を傾げた。そんなくりちゃんに、母と、そして母方の伯母の面影を見出す。くりちゃんは、言葉を話すのが遅かったそう。それを心配した母は、ピアノの教室を営んでいた姉——つまり伯母の元に、会話の練習も兼ねて、3才から通わせ出した。特技といえる程度にはピアノを弾けるようになったくりちゃんは、幼稚園に上がる頃にはそれなりに成立する会話が出来るようになっていたそう。

5才頃なら、外で見聞きしてきた事を比較的しっかりと母に話せるようになっていただろう。

そう、たとえば、外で見かけた幽霊の事とか。

引越した家で「天井裏で小人さんが走り回っている」と発言した当時小学校1年のくりちゃんに、平然と対応した母にも「初心者」の頃があっただろう。

「……まあ、うん。今に問題がないようだし、いいんじゃないかな」

「しかしいずれにせよ、破魔矢は返却しないといけないだろう」

「母さんはどこにしまったんだろうね」

あまりあの神社にはもう行かせたくないのだが。そう思いつつも、往年の母の密かな苦労を偲んだ。

季節はずれ

赤いハイヒール。サングラス。それに、脹ら脛まで届く豹の毛皮のコート。

僕とくりちゃんがその人を見かけたのは、まだお互いに小学生だった、夏休み直前の事だ。

照りつける日光と肌を滑る汗。黒いランドセルを背負って家路を急いでいたその日の事を、今でも鮮明に思い出せる。近所の、最先端の歯学は取り入れるが実際の治療の腕が今ひとつの歯医者者の大きな家。その角を曲がれば自宅の方向だ。そこを暑さから逃げるように急いでいた時、その人を見た。

高いヒールに、確か黒髪の直毛のボブ。真贋の区別はつかないものの、豹の毛皮は見事な毛並みだった。擦れ違いざま、思わず片目で追った。そんな子供の視線など一切構わず、彼女はさっさと僕達が来た方向へと去っていく。

思わず沈黙したまま角を曲がる。もうひとつ曲がれば実家がある。蟬の音が煩かった。そんな中で、僕は小声でいった。

「今の人、暑くないのかな……」

「大丈夫なんじゃないか」

浅黒い肌を更に日に当てながら、当時のくりちゃんはマジックテープの靴を家路に向けた。

「全く、汗を掻いていなかったしな。暑さを感じていないんじゃないか」

今ならわかる。熱中症の症状は「それまで夥しくかいていた汗が止まってしまう」のが初期症状だ。しかし、あの時の彼女は一粒たりとも汗をかいていなかったと、その時のくりちゃんはいっていた。

その話を掘り起こせば、モッズコートをハンガーに掛け直していたくりちゃんはいう。

「だから、『もう』暑さを感じていなかったんじゃないか」

それにしても、あの格好でどこに出掛けていたのだろうか。当時の流行と照らし合わせても、あの派手すぎる装いは、地味な地元には不釣り合いだなと他人事のように考えてしまった。

登山

以前にも書いた気がするけれど、僕とくりちゃんの進路は大体かぶっている。書類に書き出せば、幼稚園から高校までは同じ校名が並ぶのだ。なので自然と学校行事も共通のものを体験している。但し、文科省の方針の変化が即座に現れる学校でもあったので、些細なところで変わっている事もある。

あれは小学5年の林間学校の時だ。僕の時はなかったが、くりちゃんの時は一泊2日のその行程に、「登山」が含まれていた。県内の小さな山だ。しっかりと班を構成させ、列を乱させず、ガイドをつけて山登り。熊が出る心配もないような山だったそう。くりちゃん曰く、坂道からの崖に向かって山彦を呼んだり、その辺に生えていた桑の実をおやつにしたり蛇が出た、と他の子が騒いでもじつとそれを見詰めていたりなど、中々に野生児ぶりを発揮していたようだ。頂上からは雲が眼下に見えたという。昼食を食べ終わったあとは、下山。地元の宿泊施設に向かうバスに乗るだけだった。

ところが、山の中腹。くりちゃんはここで班員とはぐれた。

というのも、桑の実は利尿作用がある。登山中に代謝されたそれが、くりちゃんを山の中腹に設置されたトイレに駆け込ませた。トイレは他の児童で大変混雑しており、出て来るのも時間がかかった。そうして気付けば、同じ班の面子は下山してしまっていたのだ。折しも空がぐずついついてきた頃、他の班員の気を急かせさせた。この頃から単独行動を好むくりちゃんは、正直な事をいえば存在を忘れられがちだった。勿論後ほどくりちゃんが他の班に混ざって貰い下山した際は、担任の先生が顔を青ざめさせていたそう。それはそう、自分の担任しているクラスの児童が山で行方不明となれば、自身にもどんな累が及ぶか知れない。

さて、先述のように単独行動を好むくりちゃんが、ちゃんと他の班

に混ぜて貰って下山した、という事に違和感を抱く人もいるかも知れない。実際、くりちゃんがその場にいた他のクラスの先生に「はぐれたからどこかの班に入れさせて欲しい」と申し出てきた時、その先生も意外そうな顔をしたそう。くりちゃんの単独行動はそれぐらい問題視されていたのだろう。それでも否やはある訳がない。その先生は自分のクラスのひとつの班にくりちゃんを編成させ、無事に下山させた。「大俱利伽羅くん、どうしたのー」「はぐれたのー?」「置いて行かれた」という会話を交わすくりちゃん達。山を下りきる頃にはぱらぱらと雨が降り出し、駆け足になったという。

何とか無事に自分のクラスと班に戻ったくりちゃんは、班員の謝罪を聞きつつ、山を見ていたそう。地元の山の資料館の人の話を聞きながらも、バスに乗ってからも、その視線は山に向かっていたそう。その後、土砂降りの雨になった。午前中の晴れが嘘のようだったと、くりちゃんはいう。

実は本題はその日の夜に起きた怪異にあったのだが、僕はふとその下山のくだりを聴いて、疑問に思った。集団行動を嫌うくりちゃんが、なぜきちんと先生にはぐれたと報告し、まとまって下山したのだろうか。

くりちゃんは頭を振った。

「登山中、過剰な程にもてなされた。それで下山した時にあれ程引き留められれば、いくら子供でも危機感は抱く」

「誰に」

尋ねると、今度はくりちゃんが首を傾げ——強いていえば、と前置きした。

「山に、だな」

山の神は女の人だという。ただ、その山に関しての説話は仏教に関する、古くて有難いお話もある。

気になる点といえば、その近くには全国的に有名な古代遺跡がある事。それと、夜になると火の玉が出る、という話ぐら이다。高僧の魂が山を登っていくといわれているらしいが、勿論真偽は定かではない。

くりちゃんのあとに、僕達より10歳ぐらい下の従弟も、中学までは同じ進路を辿った。けれど林間学校にあの山を登ったかどうかは、聴いていない。

ただ、登山は2度と御免だと、くりちゃんのはぐれた事を今でも根に持っている。

熟睡

このように同じ進路を辿っているの、くりちゃんも高校1年の時に「親交を深める」為に、クラスでの1泊2日の宿泊及びボランティア活動があった。くりちゃんの時も2日目に老人ホームを訪ねたらしい。無論、メインはそちらではない。

くりちゃんの時、軽い肝試しのようなものが行われたそう。

僕の時、特にそういった催しはなかったが、くりちゃんのクラスは中々にアクティブだったらしい。参加したい人だけ参加する、という体裁だったが、ただでさえ「ピアノを習っている」という理由で無理矢理合唱曲の伴奏を弾かされて不機嫌だったくりちゃんにとっては、心底「どうでもいい」ものだったらしい。そうでなくとも、くりちゃんにとって肝試しや、実際にオカルトに触れるとなると「危ない」からだ。実は小学5年、僕の林間学校の催しはそのものずばり肝試しだった。しかも、「経営者がそれより10年前に首を吊って死んだ喫茶店」に入る、という、今にしても学校が主宰するものではない罰当たりなものだった。僕はといえば、雰囲気怖いといえれば怖かったものの、寧ろ床に散らばったガラスの破片の方が危ないな、と暗い中で思ったものだった。肝を冷やしたのは、「そういう危ない破片なんかは昼間に片付けた筈だけ」と先生にいわれた時だったけど。その話を母にしたところ、母は大まじめに「肝試しはやめてください」と先生に訴えたそう。尚、当時のくりちゃんの鞆の底にはお守りの数珠

が仕込まれていたらしい。ちなみに山に登っていた時は登山用の鞆だったので、数珠は持っていなかったそうだ。

閑話休題、いつの間にか終わった肝試しののち、くりちゃんは風呂に入り、宛がわれた部屋に入ると直ぐに眠ってしまった。その日の昼間も様々なレクリエーションがあり、ほとほと疲れていたらしい。同室の同級生達は様々な会話を交わしていたらしいが、さっさと布団を敷いたくりちゃんは、背を向けて直ぐに寝入ってしまったそうだ。さて、なぜこんな風に「直ぐに寝た」という事を強調するか。それは、くりちゃんが翌朝に、寝ぼけ頭に他の同級生から「昨夜騒いでたんだぞ、何であんなに起こしても起きなかったんだよ」といわれたからだそうだ。

くりちゃん自身もよくわからない、という。曰く、「白い影」が出たそうだ。よくある見間違いではないか、と欠伸混じりに答えるくりちゃんに、同級生達は主張したそうだ。

まず、一番奥の部屋から騒ぎ出した。それはくりちゃんが布団に入り、直ぐに寝息を立てはじめて「はやっ」と皆が笑った時だったらしい。悪ふざけでもしているのだろうか……それにしても、悲鳴が高かったという。女子と男子の部屋は廊下で別たれており、男子の部屋の列の中央に先生の部屋があったらしい。だからあまり派手に騒ぐと先生に気付かれるのでは——けれど、次に響いたのは、若い男の悲鳴だった。当時28歳の担任教師の声だったそうだ。それに戦く。一体、今、何が起きているのか。こわごと、くりちゃんの部屋の度胸のあるひとりが、廊下の様子を窺ったそうだ。

ヒトの形をした、白いもの。それが、ぬらり。床や壁を舐めるように、斜め向こうからこちらの部屋へと滑り込んできた。

……そのひとりが視認したのち、それは突如姿を消した。姿を現した時と同時に。騒いだ生徒達は教師の部屋に詰めかけたが、彼はやや狼狽しつつも、「今日はもう皆寝よう」と言い聞かせたそうだ。

そして、戻ってきた同室の同級生は呆れたそうだ。ひとり、置いて行かれたくりちゃん。彼はその騒動の中でも、ぐっすりと眠り続けた。

「元々出る、という話はあったらしいからな」

僕は聴いた事のなかった話をするくりちゃんは、当時の事を思い出しながら締め括った。

「肝試しなんてするからだ。折角寝てて大人しくしてた奴をたたき起こしたんだろ。俺だって怒る」

案外、「それ」はくりちゃんと似た気質だったのかも知れない。くりちゃんはいつになく熟睡できたそうなので。

【どうらぶオカルト】くりちゃんと僕 録【現代パラレル】

堀端の林

くりちゃんが帰ってこない日があった。

地元には、市の中心部を回る1000円バスが走っている。どこから乗っても降りても料金は一律1000円の、循環バスだ。主な乗客は市役所やお城、大学病院に赴く人々。くりちゃんも専らそれを利用して

いる。
そのくりちゃんが、昼過ぎに出掛けたのち、夜になって漸く帰ってきた日があった。我が家の炊事を担当するくりちゃんは、その日は遅くなった事を詫びながらもいつも通りに夕食を作ろうとした。疲れた様子ながらもごくいつも通りにエプロンを巻き付けるくりちゃんに、僕は遅くなった理由を尋ねた。

「そんなに混んでいたのかい」
「まあな」

鞆を無造作に階段に置き、手を洗うくりちゃん。彼は米櫃を改めながら、ごく変わったところなく答えた。

「それに、バスが降ろしてくれなくてな」

「……犯罪かい」
「さあな」

しれっと答えるくりちゃんは、食材を片手に語り出す。

くりちゃんは用事を済ませたのち、最寄りの1000円バスに乗った。この日は冬の早い地元で寒気が訪れ、日が暮れると北風が一層バス停のくりちゃん達を責め立てた。時間も早くなり、バスを待つ乗客は少ない。やがてやってきた1000円バスにも、客はほとんどいなかった。その為に楽に座れたという。

1人用の席に腰掛けたくりちゃんは、鞆を足下に。硬貨を握りながら窓を見た。ガラスから伝わる冷気を、車内の暖房が駆逐する。それに眼を細めながら、くりちゃんは窓からの風景を眺めていた。 城下

町の地元。大学病院、市役所を過ぎれば、直ぐそこに国立公園がある。天守閣を囲む公園だ。

桜の名所のその公園は、ぐるりと堀端に囲まれている。春になれば堀が花卉で埋め尽くし、秋になれば紅葉が目を楽しませる。しかし季節は移ろう頃、漸く色を変えはじめた葉は、ただ夕暮れの陰影を版画のように目に映すだけだった。茜色の夕暮れを、堀端の外の桜と内の松が黒く刻んでいる。

新鮮な光景だった、とくりちゃんはいう。いわれてみれば、この季節、その時間帯に公園の堀端を見る事はない。花見は昼間か夜桜。秋の紅葉祭りも同様だ。黄昏時の堀端の林は、整備された道路を走るバスのくりちゃんに、冷え冷えとした陰影を映していた。

気付いたのは、その林の長さの為だった。不意に、前を向く。バスは直進していた。真っ直ぐ、向こう。公立の高校のフェンスが見える。その突き当たりを右に曲がれば、あとは一路、駅へ向かう。しかし、突き当たりがいつまでも遠いようだった。そして、耳を傾ける。車内はやけに静かだった。運転手がハンドルを握る姿だけが見える。

くりちゃんは困った、と思っただけ。ただでさえ、この日は珍しく寝坊した。それで予定が押してしまい、帰りは寄り道をする余裕もない時刻となっていた。駅に着いたら早々に家の最寄りに着くバスに乗り換えるつもりなのに、いつまでもいつまでも、バスは直進を続けていた。

いつまでも続く黄昏。茜色の夕空に、松と桜の木の陰影が刻む姿は冴え冴えと美しい。窓から漂う冷気と、それを打ち消す暖房がくりちゃんに眠気を誘っていたが、いくら何周もする循環バスといえど、くりちゃんは家に帰りたかった。出来れば直ぐに。窓の棧に肘を突き、溜息を吐いた。

そしてとろとろと目を伏す——少しでも転た寝している間に、駅に着いてくれていればいい。くりちゃんはとうとう眠りそうになったそうだ。

コトン。

くりちゃんの意識を引き戻したのは、右手から落ちた1000円玉だった。慌てて顔を起こしたくりちゃん。木製の床に、1000円が転がっていた。

幸い、1000円玉は転がっていかずに、くりちゃんの席の傍で鎮座した。それに安堵する。バスが停まってから拾おう——そう思つて顔を上げる。くりちゃんは目を瞬いた。バスは、丁度突き当たりになり、右手に曲がる場所だった。バスの中には賑々しさが戻っていた。

1000円を拾つて駅でバスを飛び降り、乗り換えのバスに乗つたくりちゃん。彼は一息吐いた先で、ふと携帯電話の時間を見て、目を瞬いたという。本来なら、せいぜいバスで10分程度の距離。しかし彼がバスに乗り込んだ時より、1時間を過ぎていたという。

「またかあ」

「まただ」

話を聞き終えた僕は、溜息を吐いた。くりちゃんも頭を振る。

くりちゃんが神隠しに遭うのは、珍しくもなんともなかった。「1時間で帰つてこられてよかったね」と、僕は食欲が勝つた気持ちをもめて肯くのだった。

正夢

食器を洗っていた時、2階の自室がノックされ、開かれた。今は父が出勤中だ、くりちゃんだろう。降りてくる足音もくりちゃんのものだ。階段を下りきつた頃に、振り返る。誰もいなかった。

……その後、自室に引き取つた僕の元に、くりちゃんが訪ねてきた。昼寝をしていたという彼は、眠そうな目を擦りながら首を傾げる。

「光忠、お前、食器を洗っていたんじゃないのか」

日常茶飯

「おい光忠、服を引っ張るな」

「へ」

不意にかけられた冤罪に振り向く。風呂から上がった僕は、台所でハンバーグのソースを作っていたくりちゃんを見た。くりちゃんは離れたところにいる僕を見ると、得心した様子で謝った。

「すまん。人違いだった」

日常茶飯である。

話し声

くりちゃんが黄昏時、バスに乗っていた時だという。つまり夕方、帰宅する人々で混雑していたそこで話し声が聞こえてきたそうだ。

「」

「」

しかし、その内容はよくわからない。そも、その言語が日本語なのか、外国語なのか、強いどこかの地方の訛りか。

そのどれも判然としない為に、声高な男達の話し声は内容がわからなかったという。まあくりちゃんはその性格なので、構わずぼんやりとイルミネーションを眺めていたそうだ。くりちゃんが降りるのは、環状線バスのひとまずの終着点の駅前だ。観光地の為色んな人が来るから、気にしても仕方ない事だ。

そう思いながらバスを降りる頃。乗客は駅より前の大型スーパーなどで降りてしまい、くりちゃんと相席していた客もいつの間にかいなくなっていたそうだ。駅前に着くアナウンスに、運賃を握りしめて立ち上がる。そして、ふと。まだ聞こえていたあの会話に、何気なく

振り向いた。

誰もいなかった。

ワンコインのバス賃を払いながら、運転手を窺う。最近では珍しくない女性の運転手だったが、彼女はごく普通に挨拶をするだけでくりちゃんを見送ったそうだ。バスを降りながら乗り換えのバス停まで歩きながら、くりちゃんは再びバスを振り返った。やはりバスには誰もいなかった。

「結局、どこの者達だったのか。それだけが気になっているな」

スーパーで買ってきた食料品を広げるくりちゃんは、そういつてこの寒いのに更に冷えさせるような事をいうのだった。

飲み物

くりちゃんがハーブティーを淹れている。とはいっても、きちんと茶葉から淹れるものではなく、パックのものだ。元はといえば父さんが吞んでいたものを、くりちゃんも興味を示して吞んでみたのがはじまりだ。だからその光景自体ははじめて見たものではない。ただ、今日は2回目だ。

くりちゃん自身は、健康や美容などに気を遣っている訳ではなく「味が1番好み」という理由で、ローズヒップティーを飲んでいる。しかしあまりこの辺りでは売っていないので、くりちゃんは「このハーブティーは1日1杯」と決めているようだった。それが2杯目を淹れているから、溢したのかと思った。

僕が隻眼で見ていると、不思議に思われているのに気付いたらしい。肩を竦めたくりちゃんは「通販でももつと安ければいいんだがな」とぼやきながら、タイマーをセットした。コップに蓋をする。「部屋に置いていたら、空っぽにされていたんだ」

そのひと言で察した。猫を飼う家で勝手に茶や水を飲まれる事はよくある。しかし、くりちゃんは部屋に猫は入れない。

よくある事だ。くりちゃんは部屋に夜間で煮出したお茶のポット

を丸ごと持つていく。最初は物ぐさかと思つていたけれど、聴けば「茶が好きなのよ」という。曰く、飲んでいる途中で、まだ数cmは残っていた筈の中身が目を離れた隙になくなっていく事があるという。

「ハーブティーも好きなのよだね」

最近知った言葉だ。こういうのを「お隣さん」というらしい。人間の「となり」に棲んでいるものを、そう呼ぶそう。

くりちゃんの部屋なら仕方ない。僕は「高いお茶は勘弁して欲しいね」と肯くばかりだった。

のろう

くりちゃんはよく人を呪う。本人は意識してない。そもそもひとりでも、人を嫌う子ではない。でもあれは間違いなく呪いだ。くりちゃん自身が意識していない、呪いの影がいつも彼の足元を彷徨っている。

母が不治の病に罹ったのは、僕とくりちゃんが母方の実家に預けられて両親が都会に出張がてら旅行に行った時だった。今にして思えば「3人目」を、と思ったのかも知れない。僕達もまだ幼かった。特にくりちゃんは小学校低学年で、そして、祖母は「誠に教育熱心」だった。

預けられていた時——僕としては馴染んだ家だ——、くりちゃんがひとりでもそを掻いていた事がある。聴けば、祖母はくりちゃんに勉強を教えていたという。朝も早くからたたき起こしたくりちゃんに、自作のかけ算の問題を突きつけた。くりちゃんは算数は得意で、特に単純な計算なら早い方だった。

それでもその時のくりちゃんは、解けなかったといっていた。手に取るようにわかる。あの祖母ならば、幼い孫に威圧的に接し、パニツ

クを起こさせたのだろう。「どうしてわからないの」と何度も詰られ、進まない鉛筆がその度に震えた様子が目に浮かぶ。「本当はわかるんだ、わかるんだ」と泣いていた。

そんな祖父母の元から解放されたのは年明け、両親が帰ってきた時だ。その時にはくりちゃんは宿題の算数のドリルはとづくに終わらせていたし、くりちゃんが気にしている様子もなかった。4人家族が揃って家に帰り着いた時は、過干渉の祖母の元から離れられてほっとしていた。そして間もなくだった。

専業主婦で、ごく健康的な生活を送っていた母が、病に倒れた。くりちゃんを学校まで車で迎えに来た日、母はひどく疲れていた様子だったという。母は緊急入院し、父は「なぜ気付かなかった」と詰られたそうだ。妻のこれからの制限された生活では、3人目はおろか生活も困窮するだろう。

しかしそんな中で、くりちゃんは入院中だった母に会いに行ったのちに呟いた。

「これじゃ、俺らを置いていってでも旅行なんて、もう無理だな」

その横顔に、なぜか寒気が走った。

くりちゃんの節目で、何かが起きる。必ず後ろ暗い形でくりちゃんを支える。周りに被害を与える形で。些細な口論から発展してくりちゃんを殴った同級生が、他の同級生を骨折させて「長期の欠席」をする事になった。

くりちゃんが知人として親しかった女子の事で絡んできたその子の彼氏を自称していた男子が、彼より顔も頭も運動神経も良い彼氏をその子が捕まえて、面目を失った。その後の進路は不明だ。最近だと、母の生前。

くりちゃんが団欒の場でうっかり膝で踏んでしまった母の足の指がなぜか壊死し、うまく歩けなくなった母を支える事でくりちゃんは家での居場所を得た。くりちゃんが介護の限界を訴えた時、母は死んだ。それから三回忌を過ぎて、くりちゃんの「呪い」が発動しているところは見た事がない。

くりちゃんは意識はしていないけれど、恐らく気付いてはいる。く

りちゃんは何もいわない。ただ、くりちゃんが絡む事で、何かしらが生じてくりちゃんの都合の良いようにする。それが正しい方向に働かない。いつだってマイナスだ。だからこれは呪いだ、僕は認識している。

屹度口を開けば、くりちゃんの「呪い」はより強いものになる。

くりちゃんは高校生の時、担任の先生から貰った書類をなくしてしまった。しかしくりちゃんはそれを渡されていないと思いきみ、担任の先生に自分がなくしたのだと思いきませてしまった。あとからその書類が見つかり、ショックを受けていた。

「自分が正しいと思いきんで、それを相手に強いる。これじゃ洗脳だ。祖母と同じやり口じゃないか」

くりちゃんは担任の先生に謝ったものの、それから余計に口を開かなくなってしまう。くりちゃんは言葉の怖さを誰よりも知っていた。

くりちゃんは何でも思い通りに出来るのだ。困った事に、これは事実なのだ。これは祖母からの遺産だ。

どちらかといえば、その場にいる人間の意思を、自分の言葉で無理矢理統一させるといふものに近い。祖母のやり口だった。それは祖母に育てられた僕がよく知っている。だから、くりちゃんは口を開かない。しかし、くりちゃんが口を開かずにいると、「呪い」が付きまとう。

「何でも自分にとって都合の良いようになるのが、怖い」

くりちゃんは、絶対にこの本音をいわないだろう。

鉄

「妖精さんって鉄が苦手なんだって」

「ああいう手合いは、鉄を通すと正体が露見するからな」

妙に言い切ったくりちゃん。あまり考えたくないけど、くりちゃん

が心霊系に対して機械を通して「やばいかどうか」を判断するのはそういう理由かも知れない。

失せものさがし

警察犬と呼ばれるぐらい、失せものさがしが得意なくりちゃん。探しものを頼むと、必ず本人より先に見つけてくれる。どんな場所からでも拾ってくるのだ。本人は「1度どこかで見たものを脳味噌が覚えているんだろう」といつている。しかし、1回、見た事がある。

新しく買い換えた抽斗。くりちゃんがいない時に父と買ってきたその中に、くりちゃんが僕のなくしたものを見つけにくれた事がある。その時、くりちゃんの目はピントがずれたような視線を辺りに這わせていた。それを抽斗に合わせると、1度も触れた事のない抽斗の1段目を引つ張ったのだ。

「あつたぞ」と当たり前のようにそれを差し出してくるくりちゃん。既視感を覚えたのは、母も同じだったからだ。くりちゃん程ではなかったけれど、見えない筈の場所から失せものを見つけってくる。そして決まって、2人とも自分のものはさがせないのだ。「自分の背中は世界で1番遠い場所」だからだろう。

「くりちゃん。ちゃんと現世を見て生きてるの」

夭折した母を想うと、くりちゃんのピントが時折この世にない事があるのでは。時々それが心配になるのだ。

くりちゃんはいつも、変なものを見ては、その度に向こう側に引つ張られているのではと。

リビジヨニスト

つなぎにバンダナ。軍手に作業靴。男らしい出で立ちで、今日は壁の補修に勤しんでいる。今のところ、この本丸には初期刀——前の部隊で正確には彼しか残らなかった——の自身と彼女しかいない。何せこの部隊、城と大和守安定のみを引き継いだ。大和守は顕現して早々に政府に保護されたので、以前の審神者が何をしてたかは知らない。しかし長らく放置されていたのは確実らしい。どこもかしこもぼろぼろで、ひとまず雨露はしのげるとというのが初日の事だ。あちやあ、と頭を押さえる自身の横で、こんのすけが申し訳なさそうだったのを思い出す。曰く、「明け渡し」がぎりぎり、自分達が来るまでに補修が間に合わなかった。「審神者」が入城した以上、大がかりな工事は出来ない。定期的に土建屋を寄越して少しずつ補修するので、どうにか辛抱して欲しいという。

しかし、開口一番、彼女はこんのすけに手を差し出した。

『まずは水回りを直そう。それから障子や襖、壁だな。瓦も直さないと。今すぐ道具を取り寄せてくれ。大和守、お前も手伝え』

『えっ』

『えっ』

「……主。主ってTOKIO力高いね」

「TOKIOりよくとはなんだ」

「今の陸軍の軍人って、左官の真似も出来るものなの」

あれから数日。まだ審神者と刀剣男士として活動していない事と妖精の手伝いもあり、城は見る間にきれいになっていった。自前だという作業着で壁を補修する様はやけに堂に入っていて、とてもではないが、うら若い女性というよりも、工事現場を彷徨っている若い土建屋の青年だ。上背がありしつかりした体格がそれに拍車を掛けている。男らしくペットボトルを呷っては、割れ目を見つけた度にコテで土を塗り、障子の滑りが悪ければ塗料を塗る。一方、戦術しか知らない自身には最初から期待していないらしく、いわれるがままに材料を練ったり、政府から配給されているレーションを並べる日々だ。こ

れも本丸が粗方直るまで——そう思いながらも、大和守は皮肉に思わざるを得ない。あまりの本丸の半壊具合に、手入れ部屋すら機能不全だ。こちらは妖精が積極的に直してくれているものの、それまでは自分迂闊に戦えない。所謂「チュートリアル」という名の洗礼をこの審神者は受けていないのだ。平たくいえば戦いたい。しかし、「まずは本部を整えるものだろう」と正論で封じられて以来、戦場に出られる日を待ち続けている。尤も、この審神者は軍人だという来歴らしく武骨で精悍な様をしているが、友好的だ。作業を進めながらも、彼女は自身が選んだ初期刀の悪口めいた言葉にも笑って応じる。

「テントを立てたりはするがな。これは趣味と実益だ」

「日曜大工が趣味なの」

「そんなところだな。実家が数百年単位の建物でな。このご時世にあんなでかい建物を維持するのは、一々業者を入れては金がかかる。折を見ては家族総出で補修をするのが小さい頃からの習慣だったんだ」

「……マジで」

「人間が暮らすなら、アパートぐらいの大きさで充分なのにな。ああ、そろそろ休憩するか。疲れただろう」

「う、うん」

思ったより、この審神者は良いところの出なのだろうか。なぜそんな人物が軍人などやっているのだろう。疑問に思う大和守は、それでもコテを置いた審神者に促されて、縁側に腰掛ける。幸い電気は通っており、冷蔵庫は機能している。冷やしてきたスポーツドリンクが体に沁みだした。そして、自身より僅かに背の高い審神者を見上げる。上目遣いになってしまふのは致し方なかった。

「……あのさ、主」

「なんだ。腹が減ったなら、悪いが今日も政府のレーションだ」

「それはいいけど、主の話、もつと詳しく聞かせてくれないかな。僕が聞かされたの、貴女が陸軍の軍人で、そこから陸戦のプロとして派遣されてきたって事しかまだ知らないんだけど」

その時、大和守は見た。「陸戦のプロとして派遣されてきた」の辺りで、一瞬、審神者が動きを止めたのを。しかし次の瞬間には何事もな

かったかのように、ペットボトルの中身を呷る。工事がしやすいように春の景趣にしているものの、日が差す中で作業をするのはやはり人の身には堪えるらしい。やたらと汗を掻いているように見えた。手拭いで口元を拭いた審神者は、「まあ、間違っではないいな」と小さく呟いた。彼女はいう。

「そうだな、わざわざ『私』が派遣されてきた理由はいくつかある。元々、政府から要望があったんだ。陸戦のプロというよりも、人間として対歴史修正主義者と戦っている経歴を持つところから、審神者として派遣して欲しい、とな」

「人間は時代を遡れないんじゃないっけ」

だから特殊な物質で作られた自分達が遡るのだ。しかし、審神者は肩を竦めて苦笑する。

「大和守。『歴史修正主義者』という言葉の由来を知っているか」

「……僕らが倒す敵の事でしょ」

「敵の事は詳しく知っておくべきだ、安定。成る程、私が派遣されてきた訳だ。まあ他にも人材はいたが、偶々こちらに来るタイミングが合ったのが私だけだったという事だろうが」

審神者の言葉の意味が掴めず、首を傾げる。

自分達のいる陸奥国。そこはただの本拠地の名だ。そして敵勢力の名も、刀剣男士として受肉した時から、ただ単に刷り込まれていた。歴史修正主義者——文字通り、歴史を変えようとするもの。そして第三勢力として出てきた検非違使。こちらは歴史を遡航する者全てを片付けようとする、前者とは別の危険を持つものだ。

後者の名前の由来は知っている。昔の警察の事だ。前者の名前は、ただ文字通り、歴史を改変し、自分の都合の良いようにする付喪神の存在だと思っていた——「今度、落ち着いたら公演をしてくれといわれている」。審神者はペットボトルの中身を揺らしながら、春の景趣の中、語り出した。

「最初の『歴史修正』は、100年前に実行されかけたんだ」

「……意外に昔だね」

「技術が完成されるのに時間がかかったただけだ。それよりも問題は、

この時の歴史修正を行おうとしたのは、人間だった事だ」

顔を上げる。審神者の顔は慣れた様子で涼しげだ。

「事件の制圧に当たったのは当時のNATO。各国と連携出来たし、事件自体は技術の未熟さもあって、主犯らの自滅に近い形で終わった」

「なつとー……」

「N・A・T・O。OTANともいうがな。北大西洋条約機構……単純に言えば加盟国同士で治安を維持する機構ってところだな。この時、殊更熱心に、且つ怒り心頭でこの殲滅に当たったのは、この加盟国のひとつである独逸支部だった」

「独逸なら、ちよつと知ってる。医学が凄いところだよな。……でも、そこがどうして」

大和守の前半の言葉に軽く笑いながら、ふと、その笑みを消した。「主犯はネオナチの一派。それも旧ナチズムに限りなく近い連中だった。……ナチスだよ」

「――」

一瞬、気温が下がったように感じられた。吸う息が冷たい。

自分達が主役の時代が終わり、世界で戦争が起きた。日本も焦土となり、焼け落ちた刀剣も多いと聞く。

その日本が同盟を組んでいた国のひとつの首脳は、選民思想に凝り固まっていた。人類史上最悪の戦争犯罪、という言葉も訊いた事がある。殊更それを強調するとは、つまり。

青ざめた近侍に気付いているのか、審神者はボトルを握ったまま淡々と語る。

「送り込まれた年代は1940年代、第二次世界大戦の頃だ。目的は『総統』の自殺の阻止及び、枢軸国を勝利に導く事——当時、時間遡航技術の第一人者であり、裏では過激なナチズムのシンパだった科学者を取り込み、計画は遂行されかけた。……皮肉にも、彼らの身を以て、人間は時空震に耐えられないという事が証明された。生き残った奴らは、とにかく独逸の人間が熱心に捕まえたそうだよ。何せ、人間は100年やそこらじゃ戦の傷を忘れないよ。二次対戦から150年

も経って、漸く信用が回復しかけていたのに、このせいで独逸の信用は再び地に落ちた。まだ科学的に確立されていなかったけれど、時間遡航の悪用に関する刑法はこの時に確立したそうさ。それで、捕らえられた連中は処罰されたそうさ」

「……あれ、それじゃ、未遂で済んだんだよね。それが、何で今……」
「嘗ての第三帝国の幹部にも、追っ手を逃れて寿命を全うした奴がいる。この時の主犯グループにも、数名逃れた連中がいた。ほんの数日のタイムラグだったけれど、世界に取り返しのつかない影響を与えるには充分だった。……イタチの最後ツ屁だ」

不意に、作業着のポケットからデバイスを取り出す。それを見てみると、審神者がホロのモニターで示したのは、今でも最大手の検索サイトだ。それを示して、彼女は皮肉そうに笑う。

「未完成の技術を、ネットにばらまいたんだ。『自分達は捕らえられてしまった。どうが画面越しの同志よ、または歴史を変えて誰かを救いたいと願いたい者。どうかこの術を利用してくれ!』とな」

「——悪質」

それは、人が大勢集まる場所に武器をたくさん放置しておくような所業だ。誰かが好き勝手に持っていつても、それを改造して更に凶悪なものにしても、誰にもわからない。表に出て来るまでは。

空になったボトルの蓋を閉める。審神者は頭を振った。バンダナが揺れる。

「結果として、時間遡航技術は民間や公的機関でも発達せざるを得なくなつた。特に取り締まる側がな。これが23世紀現在まで禍根を残した、最初の歴史修正に関わる事件だ」

「……大変な事があつたのは、よくわかつた」

思わず啞然とする。ちよつと自分が眠っている間にこんな事があつたとは。ボトルを傍らに置く審神者は、デバイスをいじる。そんな彼女に、しかし、と重ねて問うた。

「でも、名前の由来っていうのがわからないんだけど」

「まあ、日本の刀剣だからな。わからなくても仕方ない。ただ、我々にしてみたら、これ以上なくわかりやすく直截的な名称なんだ」

そういつて、モニターを拡大する。文字が大きく映し出された。英語からの日本語訳。それを示して、いう。

「この時に摘発されたのは、ネオナチの一派、『リビジョニスト』。『revision』……見えているものを変える事。日本語訳すると、『歴史の改変』。『歴史修正主義者』になるんだ」

「――」

「元々は言論的な話だったんだがな。この事件が起きてからは、文字通り、物理的に歴史を修正する奴らの事を示すようになった。……今じゃネオナチの活動はちよび髭の元にゾーリングゲンの連中を行かせる事が有名だな。ただ、それに乗じて更に昔に行こうとする連中も止めなくちゃいけないから、専門部署も設けられたが結局あちこち巻き込んでんやわんやだ」

「……」

「……日本にも、ゾーリングゲンの連中がはみ出してきたって話が来た。お前の相棒に関わる話らしい」

「！」

汗がしみたのか、バンダナを解く。審神者の言葉に背筋を伸ばした。

話は聴いている。本来の初期刀、「沖田総司の刀」として提示されるのは加州清光。嘗て主を共にした仲だ。本丸の修繕を終え、仲間を増やしていけばまた彼に会える。その彼に関わる時代、池田屋の記憶に、日本のものではない敵部隊が入り込んできた。

隣のくすんだ金髪の女性は、流暢な日本語でバンダナを伸ばす。

「何を企んでいるのかはわからんが、少なくとも幕末で明治維新が起きなければ、日本が戦争に参加する事もなかったという説も聴いている。恐らくそれが狙いだろう。大和守。前の審神者があつという間に去ったのは気の毒だが、陸軍出身の私がNATOからこうして日本に派遣されたからには、しつかり最後まで共に戦おう。これは私の国が起こした災禍が遠因でもあるからな……」

「――そうだね。その前に、早く本丸を直しちゃわないとね。僕は、主が貴女になってよかったよ」

遙々、独逸からやって来たという軍属の女性。目も髪も肌の色も日本のそれとは違うけれど、ただ、その責任感や誠意だけは、少なくとも信頼できる気がした。

たとえば自分がいつか、嘗ての主を救いたいと願ってしまっても、この人は引つ張っていてくれるだろう。それが自身にとつて幸福か不幸かは、まだわからないけれど。

拳を固める彼女に、大和守は微笑んだ。

リビジヨニスト

「ところで、さっき日本に来た理由について、ちよつと言ひ淀んでたよね。何かあったの」

「あー……セクハラを、されてだな。公衆の面前で」

「何、それで主が罰でも食らったの」

「それで相手を思いきり殴り飛ばしてしまったんだ」

「……公衆の面前で」

「ちなみに相手はこっちの政府高官だった」

「わあ」

「景気よく吹っ飛んで窓ガラスに罅が入っていたな……。マスコミにはちよつとした騒ぎになつてな……。向こう臍を蹴るだけに済ませておけばよかった」

「……………ひよつとしなくても、ほとぼりが冷めるまで島流し?」

「はっはっはっはっは。さて、壁の補修を再開するか」

「ねえちよつと」

「瓦も直さないとな」

「ねえ?!」

End.

国を出てきた理由は、良い理由よりも悪い理由が多い。表立っては公衆の面前でセクハラをしてきた高官を殴り飛ばした為に、ほとぼりを冷めるまで情報部から日本へ島流しにされた。

『君には、暫く日本の歴史を守って貰おう。以前から日本政府から要望があつたからな。……立ち入った事だが、君の先祖に関わろうとする親戚に関しては、こちらで処理しておく』

『別に、女しか生まれないウイルスに罹つてた先祖がどうなったって、私の性別が変わるか、もしくは私という存在がいなくなるかのどちらかでしょう。放つて置いてくれてもいいんですよ』

『君、それは独逸人としてはいつてはならない事だ』

情報部部長の執務室。ブラインドを見詰める彼女の背後に立ちながら、自身は答えた。

21世紀前後。当時の直系の先祖が、あるウイルスに感染し、そして200年後、今の自分が生まれた。けれど、本家がこの200年、ずっと「女系」である事を、氣にくわれない親戚も多い。家族は愛してくれた。親戚は好きになれそうもない。両親は既に亡い。あの広い城で、傍に居るのは執事だけだ。彼女もいつか自分を置いて死ぬのだろう。当時の過激派のフェミニストが作ったウイルスは、他者に感染する事はないが、確実に子孫に呪いを放っている。

寂しかった。いつそ200年前の先祖がウイルスに感染しないようにしてくれるなら、ひよつとしたら今も両親はいたかも知れない。いつそ、先祖を殺してくれた方が、孤独から解放される気がした。

今日の状況は、女である事が全ての原因に思えてならなかった。

『……君には、日本で任務を果たして貰う。ゾーリンゲンの面子に関して調査を。あとは現地で日本政府の指示に従ってくれ』

『いつそ日本で死んできた方が』

『少佐。しっかりとしまえ。……また、元の君に戻るのを待っているよ』

「主」

「——なんだ、大和守」

「また銃兵がコルト9mmSMGを持ってるんだけど」

「おっとしまった」

「投石兵もスリングショット持ってるし、普通の作ってよ……」

【へしゆさに】 ●●部隊所属へし切長谷部撫で切り事
件【十複数審神者】

確かに、最近は何かと事件の解決に参加していた。非合法の風俗店に仕立てられたある部隊の本丸の調査、刀剣男士をマフィアに提供する重火器の製造ラインに携わらせていた本丸の制圧。賭博場を開帳しマフィアに提供した本丸を摘発する時は警察と組んで用心棒に当たっていた刀剣男士をこちらの刀剣男士が制圧し、銃を取り出してくるマフィアには警察が対応という出入り沙汰となった。政府は人材に飢えているという。しかし、ある事件で、元首相だという老婆の審神者と顔を合わせてからは、妙にこういった事に引っ張られる。今なお政府の重鎮だという彼女に気に入られたのだろうか。将来は政府にのし上がるつもりだから、それは都合がよいのだけれど。

それにしたって、大量殺人現場に中学生の自分を引っ張ってくるのはどうかと思う。

「怨念、漂いまくりじゃん……」

「主、中てられたなら政府の者にいつて帰りましょう」

「長谷部の優しさが怖い……」

こういった汚れ仕事の時は必ず連れてくる近侍の長谷部は、他の審神者と同様に血の気が引いている自身の背中をさすってくれる。常ならば「それがどうかしましたか、さあ仕事ですよ」と自身を引き摺っていくのに、今日の優しさはどうした事か。それに、今回の事件は、ただでさえ長谷部を連れて行くのに躊躇いがあったというのに。心配混じりに見上げる自身に、長谷部は胸を張ってみせる。その向こうの壁には、斜めに血痕が飛び散っている。あれは倒れた人を斜めに斬ったものだろう。自分の知識が憎かった。遺体が解剖の為に撤去されている事だけがせめてもの救いである。

飾られた内装。新たな門出を祝う、しかし装飾過多なそれらは、自身の部隊とはまた別の本丸のものだった。被害者は審神者、及び彼と彼の結婚相手の一族。披露宴の為に働いていたこの本丸の刀剣男士

も、軒並み手負いだった。中には破壊された者もいる。生き残りの彼らの手入れをすると、彼らは呆然と証言した。

『へし切長谷部だった』

「……つてな証言があるし、同じ長谷部のお前に何か影響があるんじゃないかって心配してたのに。置いていこうとしてもついてくるんだもんな、お前」

「こういった仕事で主のおそばにいるのは俺です。それにこの程度、貴男の凶太い霊力のお陰で微塵も影響を受けませんよ。ただ、怨念はやたらとこちらに矛先が向かってますが」

「そういう事は早くいおう!？」

先程から何やら手で払う仕種をしていたのはその為か。慌てて長谷部を沓石に降ろして懐の塩をぶつける。ぶつけるのに外に出したのは、「現場保持」の為だ。ただ、美しい庭園の池。そこで他の審神者が自分の近侍に「池の中に落ちていた」と首を見せられて腰を抜かしていたけれど。成る程、なぜ池の縁石に血が這うように流れていたのか理解した。

披露宴の最中。刀剣男士曰く「撫でるように」警備の刀剣男士を無力化していった長谷部は、あそこで誰かを倒し、踏みつけ、首を落としたようだ。

マスクをしてきたものの、噎せ返る血の臭気。それを上回る怨念。それは何も、被害者達のものだけではないだろう。

「おい、そちらの長谷部は大丈夫か」

不意に声を掛けてくる、余所の審神者。自身と変わらぬ体軀だけでなく、女性のようだ。近侍は大和守だ。流暢な日本語だけれど、恐らくゲルマン系の白人だろう。最近来たと噂になった陸軍出身の審神者だろうか。そんな事を考えつつも、残りの塩を懐にしまふ。長谷部は「貴男、ぶつける力が強すぎますよ」と文句を垂れている。顔色は平常通り、繋がる縁も平常通りだ。あるいは平常通り過ぎるのが異常なのかも知れないけれど、自身のような人間が審神者だから相應いのかも知れない。そんな事を思いながら、その審神者の武骨な優しさに微笑んで答える。面布で顔は見えないだろうけど。

「ああ、こいつはいかれるような繊細さはないようなので。それより、見つかりましたか。『花嫁』は」

「生憎、やはりツノカクシしか見つからなかった。……日本の女性の婚礼衣装だそうだな」

「角隠し、ね。色々俗説はあるけどね。多分、もう攫われた彼女はヒトの形骸を保ってないんじゃないかな」

「押しかけてきた長谷部と一緒に、か」

向こうの大和守と会話を交わす。不思議そうな顔をする相手の審神者に、長谷部が説明する。

「角隠し、というのは、俗説がありますが……日本では、特に女性は、古くから怒ると鬼になる、といわれたのですよ。それを隠して従順な妻を装う為、ともいわれてます。俗説の域を出ませんがね」

「それに花嫁の本丸の長谷部は、政府から実施されていた試験的な『極』の修行中だった。それを中途半端に終わらせてきたから、あの本丸の刀剣曰く、『辛うじてヒトの形はしていた』ほどに化けてしまった」

「『極』か。私のところはまだ新参だから、誰もその練度には達していないが聴いている。刀剣が己の過去に接し、向き合い、修行をして新たな力を得てくると」

それはこちらにも知っている。先日、乱と五虎退が修行から帰ってきた。密かに1番驚いたのは、乱の機動もそうだけれど、五虎退の虎が一頭になっていた事だったりする。

しかし、短刀全てに実施される前に、打刀の、よりにもよって長谷部に「極」を実施したとは。本当に試験的なものだったのだろうか――思わず大広間を見る。披露宴が行われる筈だったそこから、怨念が漂っていた。

同じ事を考えていたらしい。長谷部も、相手の審神者と大和守も、同じ方を向いていた。

「『極』は諸刃の剣。本尊に説得がなつてこそそのもの。……恐らく花嫁の本丸の長谷部は、部隊から引き離す為に何かしら吹き込まれて修行に出たのでしょう。あそここのこんのすけは、文字通り『吊し上げられ

て』いたそうですから」

「仲間だと思っただろうに」

本心からかそうでないのか、長谷部は嘆息した。それが長谷部と、この本丸を血まみれにした大惨事の被疑者であり、行方不明となった「花嫁」の審神者を攫った「へし切長谷部」の違いだと感じた。

やって来た政府の職員が、狐面の下の首まで青くなりながらも、こちらに話しかけてくる。今回の事件関係者の資料が纏められたそうだ。それらを受け取って、お互いにデバイスで見遣る。

そして、審神者同士、慨嘆した。

『卒業』という映画は、君は知っているか」

「ラストシーンだけですな、残念ながら。恋愛映画には食指が動きませんので」

「十分だ。……さて、このダステイ・ホフマンは、今は攫った花嫁と、どこでどうしているだろうな」

「不十分な用意の逃走は、破滅しか呼びませんよ。せめてお互いに意識が残っていれば良いのですけど」

「すいません、俺達にもわかる説明をして頂けませんか」

長谷部がいい、大和守が肯く。審神者同士、肩を竦めた。

「何て事はないよ、長谷部」

「こちらではよくあるらしいな。審神者と刀剣男士が恋愛関係に陥った。その末に審神者を神隠しした——ただ、今回はそれに、だいぶん流血を伴ったようだというだけだ」

物音に、身を竦める。そんな気弱な、女の主だった。そんな主を、当初は内心で軽んじていたのは否めない。自分達刀剣男士に合わせて、女の審神者が宛がわれる事が多いと聞く。しかしそれでは、戦に出すのは気の毒だろうに。そう考えるようになったのは、弱々しいながらも、主が微笑みを見せるようになった頃だろうか。

「あんまり、自己主張とか、出来ないの。だから、長谷部くんが頼もしくて、うれしい」

辿々しく、作戦を指示する自身にいう彼女に、庇護欲を抱いた。そ

それは他の刀剣男士も同様だったようだが、それが恋愛感情に発展したのは、いつ頃だろう。気弱な彼女を、どうやら社会人としてまともに生活できない程に気弱すぎる彼女を、審神者にしたのは政府高官の親だという。こんのすけがいうには大層名のある役人らしいが、その名が出る度に、泣きそうな顔になる主に気付いた。自分に気を許してくれたのか、居眠りをしていた彼女が、寝言で父に、そして母に怯えているのを聴いた。

——彼女は、親の所有物だ。少なくとも、互いにそう思っている。自分の手元から離れる事など考えもしない。母親も、夫を内心で嫌いながらも、共に娘に集る気だ。将来、何かあれば娘に何もかもをおんぶに抱っこをさせる気も満々だ。審神者から聴き出した言葉は、「偶に優しい」「私が悪い」「金をかけて育てて貰ったんだから」という、あまりにも「典型的」な答えだ。

だから相談した。刀剣達に、こんのすけに、「仲間」に。彼女を親元から離してやるにはどうしたらいい。悩む自身に、一振りの刀剣男士は、こういった。

「彼女はひとりでは生きられないよ。そういう風に育てられてる。長谷部君、君はその責任を取る気なのかい」

そんなの当たり前だ。言い切った、自分に驚いた。

望むならば、あの主が年老いて天寿を全うするまで傍にいて守ってやりたい。あれ程に自ら思考する事に怯える彼女を——殴られ、詰られると——ほったらかしにする気は微塵もなかった。

その点でいえば、自分も彼女の親と変わらないのかも知れない。しかし、少なくとも怯えさせたくない。傷付けたくない。ヒトではない自分の身の全てを利用して守りたい。そう考えた。

そうして糸を解くように、彼女を安心させる事に腐心した。ここには敵はいない。自分を害する者はいない。歴史修正主義者や検非違使は自分達が全て叩く。わからない事はわからなくていいのだ、聴いてくれればいい。頼ってくれていいのだ。

今にして思えば、あの頃のこんのすけは、姿が見えなかった気がする。

審神者がはじめて満面の笑みを見せた時。突然の指令が下った。「へし切長谷部の極の試験的実装」。乱と五虎退は済ませていた、その矢先の事だった。

「なぜ、急に」

こんのすけの口から伝えられた言葉に、それでも最後には肯いた。極めた乱や五虎退の実力は計り知れない。打刀の自身がそれを行えばどうなるか。自身の過去に向き合う事になっても、彼女を守る力が強くなるならば——そして、自身は彼女に修行に出る旨を伝えた。彼女は笑んでくれた。

「待っているよ」

悲鳴を聞いた。それは嘗ての主達のものではない。女性のものだ。

修行中だった。途中で帰ってくる事の危険性は殊更に強くいわれていた。しかし、構うものか——あの悲鳴は、聞き間違えない。彼女のものだ。手紙を届ける為にやって来たこんのすけに、時空の向こうから聞こえてきた悲鳴について問い質す。最初は渋っていたこんのすけも、白状した。

「これも仕事なのです。審神者様のお父様から、何かあったら娘を連れ戻せ、いつでも同じ審神者様の男性の元に嫁に出して、本丸は取り上げると。所有物が勝手な行動を取るのには怪しからん事ですよ。貴男が1番厄介そうでしたからね。全く、悪いようにはしないと。貴男のせいで台無しですよ。そのうち代わりの審神者様が来るでしょうが。それじゃ、もうばれたし、貴男は予定通りに帰ってきてください」

こんのすけの言葉は、続かなかった。続けさせなかつた。自身が炎に巻かれるのがわかる。自身は浴びる事のなかつた炎。望んだ姿。ただひとつ、刀を握る為の手だけがヒトの形を保ったまま。自分の形が歪んでいく。

無言で時空の裂け目に飛び込もうとしたこんのすけを、形振り構わず追った。警告音がする。修行はまだ途中。今帰れば、溢れた力が自身を怨念の化身と落とすだろう。

だが、彼女のいない本丸で、極めた強さに理由はあるか。

政府高官と縁を結びたい。そういう発想は古今東西変わらないらしい。急な婚礼でも、その相手の審神者は笑顔だった。貼り付けた笑顔だ。はじめて逢う花嫁。いかにも気弱そうな風情で、大人しくいう事を訊くだろう。自身が散々打ちのめした刀剣男士は、肅々と準備を進める。刀剣男士と違い、ヒトの女は殴っても手入れでは「直」らない。程度を気を遣わなければ。花嫁の父母と笑い合いながら、彼はふと、その音を聞いた。

剣戟。何かが燃える——そして、仮にも審神者の端くれ。靈感が背筋を走る。

怨念が、来る。

開け放たれた大広間の障子。そこにいたのは、血だらけの刀剣男士や人間を体に引っ掛けた、恐らくは、へし切長谷部だと思われるモノだった。

それはひどく優しげな声で、座ったままこちらを見上げる花嫁に語りかける。

「駄目でしよう、主。主は人間なんです。俺達付喪神とは違う、人権を持った人。それを害してくる者には形振り構わず抵抗していいんです」

「貴様」

声を発せられたのは、さすが上級の審神者というべきか。花嫁の父が何かを言いかけた時、軽い音がした。

一太刀。畳の上に転がる、鞠の音。

血に塗れた「長谷部」は、そんな姿でも嬉しそうに手を伸ばす花嫁に語りかける。

「帰ったら、お仕置きですよ」

それが花婿になるはずだった男が最期に聴いた言葉だった。

「余所のあいつも、さすが右府様の刀つてところか」

深傷を負いながらも、何とか生き延びていた日本号は、手入れのの

ちにその時の事を語った。

「狂乱の宴つてところか。話を聞いたところじゃ、殺すなら両親と花婿ぐらいで済んだだろうに。本丸にいた全員を手に掛けるたあ、向こうのあいつも怖い奴だ」

肯く、彼はいう。

「ああ、見てたぜ。こちとらろくでもない主でも、本丸を侵犯されちや矜持に関わる。対抗したんだが……極つてのは、本当に諸刃の剣だ。『へし切長谷部が望んだ強さ』が、ヒトの形を保たない事を条件に固まった結果があれだったように思えるぜ」

酒を飲み、口の中の傷に障つたらしい彼は顔を顰める。そして続けた。

「しかし、あんなのでもいいんだな。女つてのは。撫で切りを終えたあとで、花嫁は長谷部にしがみついたそうじゃないか。……それをずっと見ていた筈だ。俺は倒れていたが、見えた気がしたよ。花嫁が落とした角隠し。その下に、角が生えかけてるのをな」

「少なくとも日本では、刀剣男士に人権は認められていません。翻つて、刑法も適用されない。だから今回の事は、『事故』として処理されるでしょうね。これだけの人数が死んだなら、ガス事故かな」

「アンドロイドにも人権が認められたご時世だというのにな」

資料を読み終え、粗方の事情は察した。撫で切りののちの本丸。快樂のままに殺された人間達の怨念は鬱陶しい。中には全く罪なき者もいただろう。しかし長谷部が表舞台にいた戦国の世は根切りが常だった。修行に出ていたというのなら、その時の慣習が「思わず」出てしまつても不思議ではないだろう。これはこの本丸を丸ごと取り潰し、刀剣男士はそれぞればらばらにさせるしか対処法はないだろう。自身がそう考えていると、目の前の彼女は、資料のページを捲りながら、肩を竦めて頭を振る。

「しかし、何だ。この花嫁となった審神者は、結局自分の意志では何も行動していかないではないか。日本の女性は受動的な傾向にあると聞いたが、いくら精神的に虐待されていたとはいえ、成人になつてもこ

うなのか」

「そういえる、貴女は健全に育てられたのでしよう。俺達には理解できないでしょうね」

苦笑する、自身に、自分の近侍の長谷部が見下ろす。資料で見たのは、へし切長谷部がともすればやかしかねないものだ。自身は、この花嫁となった女性の審神者とは異なる性分の為、まず彼が暴走する心配はないだろうけれど。そう思いながら、花嫁に対して怒って見せる審神者に笑う。何事もはつきりと物を言う、欧米でも特にそれが顕著な、恐らく独逸人の彼女にとっては、この花嫁は不可解な存在だろう。親が負担ならば、そういつてしまえばよかつたのだと。一応は法律が機能しているのだから、そちらで何かしらの措置を取って貰えばよかつたのだと。

自身は、ページを捲りながら笑った。

「たとえば、そうですね。あるひとりのヒトを、生まれた時から何の色も見せずに育てます。但し、色の名前は覚えさせていきます。十分にその教育が成功し、知的に成熟した時。はじめて虹色を見せます。果たして、その人は自分の知っている色の名前と、虹の色をそれぞれ呼び分けられるでしょうか」

「……実際に知識はあっても、実物を見た事がなければ、やり方はわからないと」

「あまり正確なたとえではないですけどね、そういうものなんですよ。親と子の恋着関係はひどく著しい……彼女の場合、親から守られていたというよりは、親が所有物を管理するように彼女を維持していたというのが問題でした。こういうヒトは、我々が最低限当たり前に持っている自尊心という心の『底』を、持っていないんですよ。落ち込んだら、あとはどこまでも果てしなく落ちるだけ」

溜息を吐く。子が親に満たされなかつたものが、大人になつてから露呈する。親が子から搾取し、時に子を悪役に仕立てて自身は弱者を演じ、支援を強いる。そんな話は腐る程にある。往々にして、日本人は年長者を敬う傾向にあるから、それが悪徳だと気付けない。

この花嫁も「長谷部」も、助けられただろうか。彼女の本丸では、修

行の途中で帰ってきた長谷部を引き留めようとし、深傷を負ったり、中には破壊された者もいるという。役人からは、彼女達があの本丸に帰ったという話は聴かない。

「長谷部は、どうあってもヒトに尽くす付喪神だ。彼らは一体、どこに落ちていったんでしょね」

池から、短刀男士が浮かんでくる。中から何かを見つけたらしい。自身の主に、それを差し出した。

かんざしだった。ゴジアオイを模った石がついた、豪勢なものだった。やけに先の鋭いかんざしだった。

結局、彼女と彼が見つかる事はなかった。

事件は表向きは事故として処理され、彼女の本丸は別の審神者が引き継ぎ、怨念の塊と化した花婿の本丸は取り潰しを食らった。元より刀剣男士への虐待があったので、これに反発する者は当の刀剣男士達ぐらいのものだった。

そういったまとめの報告を聞いて、長谷部の前で彼の審神者は興味を失ったように呟いた。

「気の毒だね、出世に眼が眩んだばかりに。あそこの審神者も刀剣も。屹度どちらにせよ、あそこの本丸はお取りつぶしになっていたよ。花嫁が初夜に無理心中を凶つただらうから」

その時はわからなかったが、長谷部は資料を見て知った。あの鋭いかんざしは、花嫁がただひとつ、自ら注文したものだということ。

(私は明日、)

(生きる場所を選ばせてくれないのなら、せめて死に場所は選ばせて欲しかった。長谷部、貴男がいらないなら)

End.

【どうらぶホラー】六番目の蔵【コラボ前提】

宛がわれた本丸は、やけに古いお屋敷だった。聴けば、築400年。江戸時代からの建築物だという。現世にあった旧家の屋敷を、そのまま本丸として「切り取った」そうだ。

「切り取ったって」

「何せ重要文化財でしたからね。政府が買い取ったといっても、おいそれと勝手に改築したり、ましてや新地にするなど出来なかったそうですから」

歌仙を初期刀に、屋敷の中を案内されながら自身は見回した。ジユウウブンカザイ。治安の悪化したこの国では、現在その保存に躍起になっているという。これもその一環なのだろうか——背後で歌仙が「雅だね」と喜んでいる声を聴きながら、自身は着慣れぬ狩衣の裾を捌く。屋敷のところどころに、家紋らしいものが刻まれていたが、今ひとつぴんと来なかった。

大学を卒業したはいいいけれど、行き先がなくニートとして生活して5年。病気の母を看病し、その亡きあとは主夫として過ごしていた。先行きは見えなかったけれど、それなりに性にあった生活だった。父の持病が悪化し、医者と治療費の相談をしていた時に、自身に審神者の話を持ちかけられるまでは。

『国立病院だと、そういう下請けまでやってるんですか』

『親御さんの医療費を稼ぐのに手っ取り早いですよ。貴男のお姉さんにはありませんが、貴男には適性があるようですから』

検査結果だというそれを眺めて、自身は母よりは恩義を感じやすい父の為に、看護は姉に任せて出稼ぎに出たのだった。契約金として貰った金だけでも、父の看護を助けるのに十分な額だった事が不幸中の幸いだ。これで在宅勤務とはいえ、姉までが看護のストレスで倒れたら目も当てられない。あとから知った事だが、自身のように身代の為に審神者として「身売り」する者は多いという。世紀末は過ぎたというのに、世も末だ。

閑話休題。修学旅行でも泊まった事のないような豪勢で大きな屋

敷に、自身は呆れたものだ。斜め後ろを歩く歌仙などは気負うところがない。これよりも立派な城にいた事があるからだろうが、生憎とこちらはごく普通の田舎の一軒家育ちだ。一応は城下町育ちで、町中にちらほらと残っていた旧家が、丁度こんな作りだった気もする。

無闇に大きな門構え。そこを潜った先には立派な母屋。時折見える部屋の欄間は透かし彫りで、竹に雀が留まっていた。縁側はひたすらに長く、長い事買い物ぐらいにしか外出していなかった元主夫は息切れしそうだ。政府が買い取ったという事は、この家に長い事住んでいた一族がいたという事だろう。さぞ不便だったに違いない。そんな事を思っていると、不意に視界が開く。縁側の扉が開いており、そこから、蔵が見えた。

並ぶ蔵は、6つ。縁側を下りて石畳が縦に並ぶ向こう。立派なものだ。門扉もしっかりと閉ざされており、中はさぞ涼しいだろう。

「米倉です。庄屋でしたからね、食料を貯蔵するスペースはたっぷりありますよ。これから50人は人が増えるでしょうが、その分の食料を蓄えるには十分の筈です」

「庄屋か、道理で立派なはずだ。余程全盛を誇ったんだろうね」

ふと、歌仙の物言いに含みを覚える。振り返ると、見上げる位置で、歌仙が苦笑いをしていた。

「君の時代でもあるだろう。金持ちが弱い者から更に富を巻き上げる事など。これだけ大きな庄屋ならば、そういった事もやっていたらうね」

「ただ一代、そういうご先祖がいたとは、売り手の方から聞いております」

振り返らない、こんのすけの物言いは、遠回しの肯定だ。眉間を顰める。農家を親戚に持つ身としては、中々に面白くない来歴を持つ屋敷のようだ。

「そしてその方からも、これだけは守ってくださいといわれています」

これから住み込みの職場となる場所への悪印象は、やはり振り返らず、しかしやけに強い語調で告げたこんのすけの言葉で決定打となる。

「1番奥。そう、あそこです。あの6番目の蔵。あそこには、決して近付かないように。ましてや、開けてはいけませんよ」

見ると、他の蔵には改修された痕跡がある。しかし、6番目の蔵は、やけに古びていた。

「へえ、青髭みたいだな」

「お前もそう思うか」

それから1年。順調に刀剣男士は増え、近侍の歌仙に助けられながら部隊の運営は事もなく続けられている。今のところ一振りも犠牲を出していないのは有難い。当初は寂しいばかり、広々としたこの屋敷も、50人近くとなると賑やかさを通り越して騒々しいぐらいだ。恐らく以前の屋敷の持ち主が使っていたであろう近代的な台所もあるが、探せば古い土間や竈もあつた。古きを好む歌仙はそちらを、新しいものに慣れ親しむ燭台切は台所を使っている事が多い。自身が慣れているのは近代的な台所の方だが、このところは歌仙の手伝いも出来るようになっていた。何せ男ばかりの所帯だ。一時に何合も炊く羽目になる。手伝いはひとりでも多い方がよかった。

丁度、新しくやってきた鶴丸に、食事の下拵えの準備を手伝わせないがら、この本丸での「約束事」について話していたのは夕食前の事だ。馬鈴薯の皮をひたすら剥く。さすがに刃物の扱いには長けている刀剣男士の手つきは危なげがない。芽を取る作業をしていた自身は、味噌汁の下拵えを進めている歌仙の背後で、はたと首を傾げる。

「……というか、青髭を知ってるんだな。お前」

「面白いものは何でも習得しておいたぜ。日本でいえば『鶯の里』のよう『見るなの座敷』のような話だろう」

「ちよつと違う気もするけど……まあ、大体は合ってるな」

大学時代は文学部の日本文学を専攻していた。卒業論文は上代文学をテーマにしたが、同じゼミには、卒論に日本の文学と海外の文学の比較をテーマにしていた学生もいた。ペローの童話もそのひとつだった。

簡単にいえば、6人の妻を殺した男の話だ。ただ、この男の行動は

矛盾極まりない。見てはならないといいながら、妻の行動を制限しないのだ。そして好奇心に駆られた最後の妻が見たのは、これまで青髭を生やした男に殺された妻達だった……。

「まあ、僕達付喪神を扱うような屋敷だ。多少来歴がおかしくても、寧ろ僕達にとつては居心地が良いよ」

「そんなもんか」

どうやら話を聞いていたらしい。歌仙は包丁で野菜を切りながら答える。最初は同じ文系男子といっても取っつきにくいかと思えば、案外付き合やすい奴だ。最近は大俱利伽羅と何やら揉めたらしいが、最近来た太鼓鐘を含めた伊達組や、小夜がどうにかしてくれとっているから、放置している。歌仙も敢えて自身には触れないでいて欲しいようだった。戦闘の時はもう少し落ち着いて貰いたいものだが——粗方むき終わった馬鈴薯を籠に入れてみると、ふと、歌仙が鶴丸を見遣った。

「そういえば、この前、蔵から面白そうな絵巻を見つけたんだよ。鶴丸、君も見るかいい」

「いきなり立つな、鶴丸。……ああ、そういえばそんなものもあつたね。あの妖怪絵巻。今は歌仙が持ってたんだっけ」

「そりゃ面白そうだ。是非見せてくれ」

包丁を片手にいう歌仙に、鶴丸は勢いよく立ち上がった。そのせいで馬鈴薯の皮がこちらに飛んできたので抗議する。そして思い出したのは、先日、人数が増えた事で、食料庫としている蔵を改めて整理していた時の事だ。5番目の蔵の話だ。

崩し字だったが、大学を卒業して久しい自身にもそれなりに読み取れた。その絵巻に描かれていたのは、どうやら妖怪のようだった。

『百鬼夜行絵巻』にも似てるんだけど、政府に頼んで資料を取り寄せても、聴いた事のない妖怪ばかりなんだよ」

手袋を嵌めてその絵巻を見せる。保存状態は良好。広間で広げて見せるその絵巻には、おどろおどろしい妖怪達が嗤っている。歌仙が横で正座している中、鶴丸は興味深そうに覗き込んでいた。

「妖怪『ますくち』、『たがらし』、『きぎんわらひ』……うーん、実にい
やげな妖怪達だな」

『小さな枡だと気を許せば、忽ち大きな枡となって人を飲み込む』
……これ以外は詞書きや名前があったりなかったりなんだよね。中
には責め絵みたいなのもあるし。値打ち品つて訳じやないみたいだ
けど、こんのすけ曰く、ここの屋敷は元は庄屋のものだったというか
ら、多分この絵巻の持ち主はその人達だと思うんだよ」

「でも、こんのすけが問い合わせても音沙汰がないんだ。この家を政
府に売り渡した家の人間の消息が掴めないらしくてね」

「そりゃ困った話だな。重要文化財だつて？ それなら管理に金のか
かる屋敷は売り払った方が得だろうが、それなら来歴のありそうなこ
の絵巻を引き取りに来ててもよさそうなものだが」

同様に手袋を嵌めた鶴丸は、絵巻を手取る。彼が口にした事は、
自身や歌仙も思った事だ。今はこの絵巻の来歴だけでも調べて欲し
いとこんのすけに依頼しているところだが、彼は妙にこの本丸に関わ
りたがらない様子だ。今のところ問題は発生していないが、何が彼を
そうさせているのかは不明だ。

この屋敷で過ごして1年以上。青髭の轍を踏まず、新入りの刀剣男
士が入る度に、奥の蔵には決して入るな・近付くなを徹底している。
ただの人間ならば好奇心に駆られて今頃扉を開け放っていたかも知
れない。

しかしそれは不可能だ。1度だけ、自身は蔵に近付いた事がある。
6番目の蔵の鍵は存在する。しかし、鍵穴は蠟で塞がれていた。

果たして鍵穴を塞いだのが、政府か元の持ち主かはわからないけれ
ど。

「審神者様」

——不意に、広間の外。廊下から声をかけられる。豊廊下の向こ
う。開け放していたそこから、小さな狐が姿を現していた。

珍しい事だ。こうして彼の方から直接訪ねてくるのは。応じれば、
彼はおずおずと、首から提げた「それ」を自身の元へ持つてくる。こ
んのすけの首から提げられたのは筒のようだ。それを手に取れば、軽

い。蓋を開く自身の前で、こんのすけは、なぜか逃げ腰だ。怪訝そうな自分達の前で、こんのすけはいう。

「以前、ご依頼のあった、妖怪絵巻の資料です」

「へえ、有難う。よく見つけられたね。やっぱりこの家の人から貰ったの」

「いいえ。……あなた方が見ているそれは、原本からの『写し』だそうです。今お渡ししたのは、その原本をコピーしてきたものです」

目を瞬く。それは他の2振りも同様だ。一瞬、言葉が理解できない。

この屋敷に残っていたものは、原本ではなく写し。そして、今、こんのすけが持ってきたものが原本からのコピーであるという。口にしたのは歌仙だ。

「つまり、原本はこの屋敷から流出し、写しがこの屋敷に残っていた」と

「2000年程前、オークションでその原本を手にした方がいらしたそう。その方からコピーをさせて貰いました。……それと、その絵巻について調べた考古学者の方がいらしたそう。その論文も持ってきました」

「へえ？ 論文にする程えらいものだったのか」

「……」

奥歯に食べ滓が挟まったような物言いだ。鶴丸がその原本のコピーだというそれを筒から取り出す。それを歌仙が覗き込んでいた。俄に蘇ってきた疑念を、早々に辞そうとするこんのすけの背中に投げかける。

「こんのすけ。お前、何か俺らに隠してないか」

即答しなかった。彼がいったのは、ただひと言。

「……『1番奥の蔵に入らない』。これを守って下されば、あなた方は平和に過ごせるのです。それでいいではありませんか」

「おっ、主。これ見てみるよ。さすがに原本は絵が細かいぜ」

鶴丸に招かれて、一瞬目を逸らす。次に見た時は、こんのすけは既に尻尾を巻いて逃げていた。

そして今、自身は6番目の蔵の前にいる。片手には燭台。蠟燭の火が、にらにらと燃えている。向こうからは他の刀剣男士の声。自身は、偶々ひとりでここに立っていた。もう片方の手には、鍵が握られている。「六」という札が下がった鍵だ。蠟燭の直火に羽虫が近付いては燃え尽きていく。夏も近い時節。奇妙な寒さを覚えながら、自身は、自分に言い訳をしていた。聞こえてくる五虎退の声をBGMに。五虎退を極の旅に出す矢先。五虎退の虎が、1匹だけいなかった。極になれば、5匹に別れたれた分霊は1頭の立派な白虎となるという。その為にも残りの1匹を探さねば——旅立つ為に心細い五虎退は泣いてしまった。それを宥める為に手製の菓子をやってから、一緒に虎を探していた。他の刀剣男士達が、他の米倉を探す中。自身はその蔵の前に立っていた。

米倉に集る鼠を処理するのが、これまでの五虎退の虎の役目だった。演練で知り合った、随分と若い審神者にそのやり方を做った。しかし、今回はそれが仇となったようだ。この6番目の蔵を1度外周した時、そこに子虎ならば潜り込める程の穴があった事を思い出してしまった。

いる筈がないのだ。自身にそう言い聞かせる。しかし、足は動かない。先日、知ってしまった事実。それを思い出してしまうから。

政府が持ってきた原本。それには、写しには描かれていなかった欄間があった。竹に雀が留まった透かし彫りの絵。妖怪が女性を襲う絵で、それを見咎める男の羽織の家紋には見覚えがある。

この屋敷のところどころに残っている、五枚笹紋だ。渡された論文。2000年程前、この屋敷を取材したという学者のものだとあった。

曰く、この妖怪絵巻は人を妖怪に擬えたものである。当時のこの家の主の所業を、妖怪のものとして、絵の心得があった家人が描き残したという。

そこまではいい。それならば、心当たりがある。写しにはなかった詳しい背景の中、畳廊下や立派な庭、そして広間にある、竹に雀の乗っ

た透かし彫りの欄間——保存されたこの屋敷が、あの絵巻の身を生々しく脳内で再現していく。だが、そこまでは、よかったのだ。

「……ある訳がない、よな」

ひとりごちる。顎に、冷たい汗が伝った。地面に落ちる。唾を飲み込んだのは、あの妖怪絵巻の絵だ。

資料として渡された論文。当時の当主は、藩に提出された記録では「病死」となっている。しかし、風説がある。

曰く、8代目の当主が、7代目を幽閉した。

「せめて殺してやれよ」

呟く、自身の声は引き攣っていた。蠟燭は異様な速度で溶けていつている。わざわざ懐中電灯ではなく蠟燭にしたのは、「それ」を確かめる為だというのに。

何とか足を踏み出し、石段を登る。蔵の前。鍵穴に、蠟燭の炎を近づける。熱せられた蠟は、こちらの心の準備が整わないうちにどんどん溶けていく。

——閉じこめたのは、この6番目の蔵だ。そういわれている。

『だから入るなっていたのかね』

『骨が野ざらしになってるのかもね』

鶴丸と歌仙が、暢気に話していた。自身はしかし、論文とその2枚の絵巻を照らし合わせ、疑問に思っていた。

絵巻には、どちらも最後に何かを塗り潰した跡がある。反故にしたのならば、絵巻に残す必要はないだろう。それも、写しはただ塗り潰してただけだ。

だが、原本は、格子の絵の上から、墨で塗り潰されていた。

『一説には、1番奥の蔵に座敷牢を作り、そこに閉じこめた』

(その格子が座敷牢の格子だったならば、あの絵は恐らく、7代目の似顔絵だった筈だ。なのに、なぜ塗り潰した)

恐る恐る、冷めた鍵穴に鍵を差し込む。何の差し障りもなく、鍵は開いた。年月を感じさせない程に。

そう、年月があった。8代目が7代目を幽閉し、8代目の弟が絵巻を描いたという。写しは、9代目が描いたとあった。この時代に、コ

ピー機はない。ならば肉筆で写した。それなのに、なぜわざわざ、塗り潰した絵まで写したのか。

死んでいる筈だった。6番目の蔵の座敷牢。9代目はそこで何を見た。

そして400年。なぜ今も、この蔵を開く事を固く禁じた。なぜ、この家の当主だった者は、今になって売り飛ばし、そして姿をくらました。

「……入りますよ」

無意味と知りながら、挨拶をする。言葉が通じる相手ならば、幽閉などされなかっただろう。

そして、血の臭気。僅かに空いた向こうの床穴から漏れる光。その中で、水音が鳴る。格子の向こうに、何かがいる。何かを屠っている——一瞬見えたのは、白い毛皮の小さな体——、ヒトの形をした、何か。

「あ」

燭台の蝋燭が落ちる。転がっていった蝋燭は、格子にぶつかつた。格子は木で出来ていた。古くなつた格子に、火が、容易に燃え移つた。

「何か」が、わらつた。

ここの審神者とは、以前話をした事がある。ぼんやりとした、人の好さそうな青年だった。中堅どころの審神者で、審神者になつた事情は自身と似たようなものだとして、親近感を持っていた。向こうも幼い自分を常識的に見て憐れんでいたらしい。会う度に手製の菓子を与えた。実家では主夫をやっていたという彼の菓子作りの腕前は中々だった。

だから、さすがに。ここの審神者「だったもの」を見せつけられたとあつては、冷静ではいられない。思わず口元を覆つた自身を、近侍の長谷部が支える。

重要文化財だったというこの本丸の屋敷。保存も兼ねて、空間を切

り取り本丸に仕立てたと聞いた。しかし、それは逆効果だったようだ——立派な屋敷はすっかり燃え落ちており、ところどころに破壊された刀剣男士らしき欠片もある。残された刀剣男士は揃って恐慌状態で、肩を寄せ合って他の審神者を拒否する始末だ。自身は他の審神者に呼ばれて、彼らの元へと歩み寄る。

通報があったのは、昨夜の事だという。「6番目の蔵で火事が起きた」。それが意味するところを、正確には自身は知らない。ただ、役人達の顔色の悪さからして、ろくなものではないのは確かだった。政府が無用な隠し立てをして最悪のパターンを招くのは、何度か見た。今回もその極めつけというところだろう。

結局、消防隊は間に合わなかったらしい。否——「水で消せる炎ではなかった」と、役人はいつている。

「……呪いの類か」

「結局、この蔵には何が入っていたんでしょね」

「ろくでもないものなのは間違いないだろうな」

いいながら、出火元の前に立つ。1番燃えさかっただと思われるそこには、土台の上。奇妙に燃え残り、そしてところどころがえぐり取られたような狩衣の男性の遺体。それに、小さな虎の骨。五虎退の虎だろう、他の刀剣男士に囲まれている彼の周りには、遠目にも4匹しかいないようだった。蔵に紛れ込んだまま燃やされたのだろうか。しかし、座敷牢を作っていただろう格子の燃え跡から、様々な事が類推される。走り回る周りの中、自身は刀剣男士達の方へと歩み寄る。彼らとは、何度か自身は面識があった。自身ならば話が出来るだろう、と期待されて呼ばれたらしい。どうやら今回の事件は政府で解決する腹積もりのようだ。マフィアが絡むような事件ならともかく、呪いなどとなれば自身の管轄外だから助かる。そう思いながら、自身がこの本丸の刀剣男士達の前に腰を下ろすと、彼らは怯えた。しかし、自身の顔に見覚えがあったらしい薬研が、虎達を抱きしめてすっかり萎縮していたらしい五虎退に声を掛ける。出来るだけ優しく微笑んで、自身は声を掛けた。

「久し振り、俺だよ。覚えてないかも知れないけど、この前演練で会っ

た筈だけど。……この審神者さんにはお世話になって。出来れば、何があったか、政府の人に教えて欲しいんだけど。一体何があったのか」

「……た」

「え？」

「五虎退？」

薬研や厚が怪訝そうにする。俯いていた五虎退に、背後の長谷部からもそんな気配が伝わってきた。自身が耳を傾けると、五虎退は、呟いていた。

『出られた』って」

「え」

『出られた』って、いつてたんです」

「……誰が」

『出られた』『出られた』『出られた』って、いつてたんです」

「……」

同じ言葉を繰り返す五虎退。不気味そうに見遣る長谷部を制し、自身は、尋ねる。

出られた。ならば、閉じこめられていた何かがあったのだろう。それならば。

「五虎退。じゃあ、その『出られた』って言っていた奴は、一体、どこに行ったのかな」

「とおくへ」

「遠く」

「ひとつ飛びして、本丸を、出て行っちゃいました。あとは、もう」

「……そっか。有難う」

立ち上がり、頭を撫でてやる。そして他の刀剣男士達に手を振り、政府の役人に声を掛ける。ある人物の保護を。

「保護、ですか」

「もう遅いかも知れませんがね」

頭を搔く。面布が邪魔だった。

数日後。海外で、ある金持ちの日本人の遺体が凄惨な焼死体で見つ

かったというニュースがテレビで流れた。その名字には事件の資料より聞き覚えがあったが、「遅かったか」というつぶやきしか漏れなかった。犯人の目星はついていないという。ただ、近隣住民の目撃情報で、屋根の上で踊る異形の炎という怪奇現象が起きていたとネットで流れていた。

六番目の蔵

(家族の為に働いた男が、家族に復讐しに行った化けものに■された話)

息子を殺したのは誰だ、と父親はベッドで唸った。役人はただ、首を振る。

そして、その脇に控えていた長女にいった。

「弟さんの代わりに、残された刀剣男士を率いて頂けませんか」

「結局、誰が一番怖いんだろうね」

End.

【どうら腐】 手書きの文字【にほみか】

「まあ、俺の負けでもいいんだが」

大抵の相手には、そういつて手合わせをはじめるといふ。それに正味な話、自尊心を傷付けられた覚えもある。天下五剣で最も美し刀――しかし、それがいかほどのものか。

（「不殺の刀」なんて、俺達には不釣り合いな肩書きだろう）

「……よし。どーんとかかかってこいや」

正直にいおう。殺意を以て手合わせに臨んだ。

結果がこの為体だ。

「主さんよ、始末書ってこんなもんでいいか」

審神者の執務室。23世紀の人間にしては小柄な女が、そこでちよこんと座している。ホログラムのモニターに向かっていた彼女が顔を上げ、自身が渡した書類に眼を通した。それを機体に同期させながらいう。

「おつけーおつけー。あと手入れ部屋空いたから入ってらっしやい。しかし、あんたも無茶したね。来た早々に、あの三日月と本気で手合わせなんて。ウチじゃたぬきが打刀になって以降、最強の太刀男士なんだよ」

「それを早めについておいてほしかったな」

溜息を吐く。応急手当の絆創膏やガーゼの感触が慣れない。支給された筆記用具。この身を得てはじめて書いたのは、「手合わせのやり過ぎて破損した道場」についての始末書だった。しかもこちらが一方的に負けたのだから、何とも面白くない始末である。審神者からの更なる情報も加え、自身は溜息を吐いた。腰に下げた酒瓶が音を立てる。先程までの酒を飲んでの反省会は、自身と三日月の純然たる練度差によるものという実りしかなかった。笑いながら自身が酒を注いだ相手は、のほほんとして笑うばかりだった。その三日月には、精々頬にガーゼを当てさせるぐらいしか出来なかった。審神者はいう。

「それでも三日月の顔に傷をつけられるなんてのは、やっぱ槍のリーチ差だからだろうね。たぬきから手合わせの様子は聴いたよ。珍し

く三日月がちゃんと相手をしてたっていうし」

「あれでかあ」

食えない笑みを刷いて、自身の突きに応じる太刀。動きづらい衣装をもものともしない動作。あれが「ちゃんと」というのか。化かされた気がしてならない。頭を搔く自身に、審神者は笑う。

「中々腹の中を見せない奴だからね。それより、ちゃんと字は書けたようだね。室町時代ぐらいの崩し字かな、読みやすくて助かるよ」

「俺はそれより、今の、『ふでペン』ってやつか。あれの便利さに驚いたぜ。今はあんなもんがあるんだな」

この審神者、本性はヒトに非ず。生まれは室町の初期だという。ゆえに、刀剣男士もそれに影響され、話す言葉はともかく、書き文字がそれぞれの時代に合わせたものとなってしまった——なまじ、この審神者が、平安時代のものでなら読めるというのが祟った。長谷部や一期一振などは勤勉に現代文字を習得したが、全員が全員、という訳にもいかない。更にはボールペンなどの現代の文房具が受け付けず、かといつて一々硯を出しては面倒だという理由で、20世紀に開発された「筆ペン」なるものが各刀剣男士に配られるに至った、という。自身が来るまでにこの事態は大半が収束しており、特に若い刀剣男士程、現代語の獲得に至っているという。

そして今でも平安の名残を見せるのが、三条派だという。

「歌仙なんかは硯と墨を使って書いてくれるんだけどね。メモ書きなんかには筆ペンが便利なんだよ。三条派も、いまだに万葉仮名とか使ったりしてくるけど使ってるのは筆ペンだよ。鶴丸はカラーインクの筆ペンを欲しがるけど」

「だらうな」

まだ来て日が浅い。しかし彼の奔放さは既に知っていた。カラフルなインクの筆ペンを使って報告書を書く姿など、容易に想像がつく。戦いにおいて、真っ白な衣装を血に染める事に悦ぶ太刀男士だ。戦についてきて貰った際の、彼の戦いぶりを思い出す。

眼にも鮮やかな、彼の太刀筋。

「どうせ渡さなくても勝手にどこからか調達してくるから与えてるけ

どね。——話を逸らしちゃったね。ついでにもう一部屋空いたから、三日月にも一応、手入れ部屋に入っておくよう伝えてくれる」

「あれぐらいの傷でか」

「戦場では、少しの瑕疵が致命傷をもたらすもんだよ」

刹那、審神者が遠い目をしたのは気のせいか。あれはヒトの寿命が持つものではない。永きに渡り存在する者の、かなしみの顔だ。

しかし直ぐに、審神者は怒ったようにモニターの前で口を尖らせる。

「今度からはちゃんと、真剣じゃなくて模擬刀剣を使つて手合わせしてよね」

「へいへい。気を付けますよつと。三日月宗近に手入れ部屋に行け、だったな。伝えとくよ」

——この審神者は、本性は刀剣であるという。いかなる所以か、男ではなく女として顕現したらしい。室町の頃に打たれた刀剣ならば、様々な悲哀を見てきただろう。ゆえのあの顔だろうか。見かけた刀剣男士に声をかけて、三日月へ言つてを頼むと手入れ部屋へと向かう。

思い返すのは、それ以上に永く存在する、あの美しい刀の事だ。

ぬつ、と顔を出す。暑さの目立つこの頃は開けはなつたままの障子。そこから、白い毛並みの男が顔を出す。どこか不機嫌なのは気のせいか。

「主様。日本号とやらはどこに行きましたか」

「え、手入れ部屋だけど。どうしたの」

「……いえ。どんな様子かを確かめたかっただけでございます」

男——小狐丸は、いいながら胡乱そうに辺りを見渡す。どうやら先程まで、ここで立ち話をしていた気配でも感じているのだろうか。小狐丸の野生とやらはそこまでののか。勝手にそんな事を考えていると、小狐丸が見下ろしてくる。先程提出された始末書。日本号のものは意外に早く上がったが、そういえば三日月のものはどうしたのか。

「三日月は酔いつぶれていました」

内心を見透かしたようにという言葉は、溜息混じりだ。実際には不明

だが、三条派の中で、三日月は末弟に当たるらしい。美々しい末弟は、少なくともこの部隊では鶴丸と同様に奔放なところがあつた。しかし小狐丸の言葉に、審神者は目を瞬く。

「おや、珍しい。お前ら平安勢、みんな酒に強いじゃん。羨ましいぐらい」

「主様はお弱いですからね。ええ、本当に珍しい事ですよ。……ただの普通の酒だったのでがね、日本号とやりに振る舞われたのは」

「お前も相伴に与つたのか」

「ええ、甘露でした。ただ、アルコール度数はごく普通でしたよ。だから困っております」

「ふーん」

聞き流して、一瞬、手を止める。そして再び顔を上げた。

「……少なくとも、いつもの三日月なら酔いつぶれるなんてあり得ないって事か」

「浮かれていたようですよ。珍しく、氣勢の強い輩と手合わせできた、と」

「そりや珍しい」

小狐丸と審神者の言葉は、同じでも意味するところは異なる。三日月にとつては珍しい戦う相手。そして自分達にとつては、そんな三日月が珍しい。

空に淡々と浮かぶ月のように、凧いだ気質の三日月宗近だ。何を聞いても本気になる事はない。精々、戦に臨む時ぐらいだろうか。それでも強いだから、堪つたものではない。本性は三日月達同様太刀の刀剣の付喪神に当たる審神者は、そんな彼が心配なので「気を付けろよ」と口を酸っぱくしていつていたものだ。

その三日月が、浮かれて酔いつぶれた。酒のせいだけではあるまい。しかも、日本号が振る舞つた酒という。

「……確か、日本号は三日月の顔に傷をつけたんだっけ」

「ええ、隙を突いて頬をすぱりと、と。同田貫からも聞いております。手当は私が致しましたが、見事な切れ味でしたよ。いつそ手入れをするのが勿体ないぐらい」

「で、日本号はその倍、ぼっこぼっこにされたと。珍しい事に」

「ええ、珍しい。三日月があそこまでするのは」

「……」

「……」

「……小狐丸。どう思う」

目線だけ向ける。日本号を捜しに来たらしい小狐丸が何を考えているかはわからない。ただ、今、語った言葉は、自身にある可能性を示唆してきている。

小狐丸は、自身の視線に気付いたか。ちろりと、眼を向けた。

「良いものか悪いものかは、私にはわかりませぬ」

いって、小狐丸は頬を掻いた。

「不殺の刀に傷がついた。いえ、元々いくつかはついていたそうです
が……変化は、変化ですね」

三日月の兄のひとりには、そうして息を吐いた。

顔に出ていたらしい。日本号は「そんな顔をするなよ、まだ何も
いってないだろ」と目の前で胡座を掻く。夕食後。自身の部屋に入っ
てきた昔なじみは、そうして自身が向かう机の向かいに勝手に座つ
た。

「長谷部、お前、ここの主の近侍をやってるんだよな」

「そうだが。いったらどう、今の主が1番だと」

答えながら、手元の動きは止めない。やっと上がってきた三日月の
始末書を現代語に訳している最中だった。日本号は直接、主に渡した
という。その分、主にかけてしまった負担を気に病みながら、自身は
続ける。

この昔なじみとは、一悶着を起こして、何とはなく決着をつけたば
かりだ。その矢先に、三日月宗近との手合わせによる事件が起きた。
一々騒動を起こさないと気が済まないのか、この槍は——そういう気
持ちをこめて睨めど、「まあほら、酒を持ってきたしあとで飲めよ」と
相手は笑う。……黒田で馴染みの酒だ。晩酌しよう。出された酒瓶
を引っ掴んで背後に置く。あとでこの部屋に設置させて貰った冷蔵庫

庫に入れておこう。そして、万葉仮名を学びやと読めるようになった三日月の始末書を尻目に、自身はいう。

「それで、こんな良い酒を持ってきたという事は、何か悪巧みでもするつもりか」

「悪巧みじゃねえよ。寧ろ、お前にとつても、この部隊にとつても良い事だ」

「ふん、いってみろ」

すると、日本号は、自身の手元を示す。

三日月宗近の始末書を、現代文字に訳す仕事だ。万葉仮名で書かれたそれを見て、焦点を合わせるように眉間を顰める。

「俺に文字を教えろ」

「は」

「特に、万葉文字だ。お前、この本丸にいる刀剣男士の書き文字、全部訳せるんだろ。主がいつてたぜ、『向学心に感動してる』って」

バベルの塔、という話が西洋にあるという。簡単にいえば、人間は昔、同じ言語を話していた。しかし、ある事から神の怒りを買い、人類はバラバラの言語を話す事となったという。

自身が行っているのは、その逆の流れを作る事だ。遡れば、現在最年長といわれる鶯丸。そして刀剣としては最年少の和泉守まで——一千年もあれば、言語はその形を変える。ここの審神者がなまじ古き存在ゆえに、その流れの大半を把握しているのが災いした。話す分には構わない。しかし、政府もこの事態は想定していなかったらしく、暫くは審神者がひとりで刀剣男士達から提出される万葉仮名や崩し字などを訳して政府に報告書を上げていたのだ。

それではいけないと、立ち上がったのが自身だった。平安時代から幕末まで。明治の一新にて日本各地の文字が統一されるまでの日本の文字を習得する為、資料を集めて勉強した。ここで編纂された「本丸用現代語訳集」は、政府にも提出され、似た事例の本丸で利用されているとも聴く。あの時に審神者から誉を賜ったのは長谷部の喜びの想い出のひとつだ。「それ、刀剣男士の仕事じゃなかね」という博多の指摘は無視した。

なので、ただ驚いている。来て直ぐにそんな事を自身に乞うてきたのは、この日本号ぐらいなものだったから。しかも万葉文字だという。驚きのあまり、単純に「なんでだ」と問い返せば、日本号はきっぱりと答える。

「口説く為だ」

「はあ？」

「思いつきり疑問形だな。……三日月を口説く為だ。平安時代は手紙で口説くのが主流のやり方だったんだろ」

今度は言葉にも出来ない。目を瞬く。思わず口を閉じてしまった。それを呆れたととったのか、日本号はやけっぱちのようにいう。

「ほらよ、手合わせで道場壊しちまっただろ。……あの時は文字通りの真剣勝負ですよ。ひと言でいやあ、あの時の三日月宗近に、惚れた。だから口説きたい」

惚れたのだ——日本号は、あれから覚えた高揚の意味に気付いた。最初は馬鹿にされたと殺意を以て。その後は、叢雲からいずる月の如く清廉な太刀筋に。

出来れば刀と槍を交えたい。けれどそれだとまた周囲を巻き込んでしまう。さすがにそれは悪いと思う。それに。

酒を飲んだ姿は意外に愛嬌があるとも思ってしまったから、始末に負えなかった。

「その為に文字を知りたいといってるんだ。……聴いてるか、長谷部」
長谷部は口を閉じていた。閉口していたのかもしれない。しかし、何やら目線を彷徨させた後——

「……………いつからはじめる」
といった。

「出来れば直ぐにでも」

「じゃあ、まずは俺が作った現代語訳集をお前の分も取り寄せる。直ぐ来るぞ。だから明日から、呼んだら来い。とつと覚えてさっさと口説き落とせ」

「完璧に覚えろ、とはいわないんだな」

珍しそうにする日本号に、長谷部は目線を落としながらいう。

「どうせ惚気混じりの講義になるのは眼に見えている。生憎と、お前の惚気話を大人しく聞き続けてやる程、俺は忍耐強くない。……とつとと口説き落とせよ」

「いわれなくとも。ありがとよ、長谷部。案外あっさり聴いてくれて」
それには答えず、日本号は立ち上がると、酒瓶を片手に立ち去る。障子を開いて、案外丁寧に閉じていった彼は、さっさと立ち去っていった。

それから数十秒。長谷部は深々と溜息を吐く。貰った酒瓶を片手に、背後の冷蔵庫へと蹴り寄る。

扉を開いた。そこには、既にもう一本、酒瓶が入っていた。これもまた、高い酒だ。並べて置き、長谷部は溜息を吐く。

本丸に来て、直ぐに文字を教えてくれといったのは、確かに日本号がはじめてだ。

本丸に来てそれなりに経ち、今更「現代語か、もしくは室町時代ぐらいの文字を教えてください」と酒瓶を片手にやって来たのは三日月宗近だった。この始末書を片手に、である。

手入れ部屋から出てきた三日月は、どこかに出掛けていたかと思うと、酒瓶と始末書を持って長谷部の部屋にやって来た。その顔にはいつもの穏やかな微笑みがあったが、どこか頬が紅潮していた。

「長谷部。お前は確か、あの黒田の槍と馴染みだったのだろう」

「そうだが……無礼討ちでもするつもりか」

持ってきた始末書を先に受け取りながら、屋内で桜を舞わす三日月を呆然と眺める。話は聴いていた。手合わせで、日本号が三日月の頬に切り傷を負わせたという。更に返り討ちにして日本号は手入れ部屋行きになった、と審神者が溜息を吐いていた。天下五剣で最も美しい刀は、その返り討ちで気が済まなかったのだろうか。自身には日本号を特に害する気持ちはない。さすがに庇おうと考えていると、三日月はふっくらと微笑んだ。

「それだと、この酒の意味がないだろう」

「酒に睡眠薬でも盛って飲ませろとかいうのかと」

「長谷部、俺はあの槍と仲良くしたいんだ」

そういつて、包みを取る。思わず目を剥いた。老舗の醸造酒だ。そういえばそこそこに金を貯めているとは聞いていたが——驚いたままの自身に、三日月はそつと自分の頬に手を添える。

そこは、日本号が傷を与えた場所だ。

「……長谷部。俺に、そうだな。現代語か、もしくは室町時代ぐらいからの文字の書き方を教えて欲しい」

「字」

「これは授業料だ。……日本号に文を送りたいが、生憎と日本号と俺は生まれがだいぶ違う。だから、日本号に伝わる文が書きたい」

「……」

「あの槍の姿に、そうさな。惚れたのかも知れん」

「惚」

「あんなに酒が甘く感じられたのは、奴のお陰だろうなあ……」

「……いつそ2人まとめて講義を受けさせた方が早いかも知れんな」

冷蔵庫の扉を閉める。これから巻き込まれる事態を想定すると、早々に仕事を終わらせ、主の顔が見たかった。そして晩酌をして寝てしまいたかった。酒を飲んで眠れば、直前に見た主の顔がよく覚えていられるから。

三日月の始末書。手書きの文字。彼の筆致がいつもよりやや蕩けた様子なのも気のせいではないのだろう。そう思いながら、長谷部は溜息を吐いた。

手書きの文字

(ファーストミッション：ジエネレーションギャップを埋めろ)

End.

「正史」【女審神者十陸奥守】

刹那、目の前で膝を突いた老爺に、陸奥守は驚く。しかし更に驚かされたのは、彼からもたらされた、そのたったひと言だった。

「王女殿下……！」

呼び出された政府。通された一室にて、控えていた近侍の彼は、思わずまじまじと自身の主を眺めた。一目で日本人ではないとわかっていた。まだ日本語が不自由で、同席しているこんのすけに搭載された自動翻訳機能に頼っている事も知っていた。しかし、呼ばれた肩書きと、ひいき目に見てもぼんやりとした少女が結びつかない。

しかし、今この時だけは、その老爺を労るように、静かな雰囲気を纏っていた。

「大臣。老けたな」

「元々老いぼれですゆえ……それで、殿下」

「わかつている。その方の様子を見れば、私がまだ我が祖国に帰る事が出来ないのはわかる。母上は、元気が」

「女王陛下はご健勝にあられます。殿下を心配しておいで……」

「母上が元気ならば良い。……良いか、大臣。今は母上を何をもってしても守れ。今の欧米の情勢で渡り合えるのは、我が国では母上ぐらいのものだからな」

「はっ……」

目の前のやり取りを、こんのすけを膝に抱えたままひたすら凝視する。

そして思わず、零れ出た言葉は。

「似合わんのお」

「吉行、本音は今はしまっておけ」

どうやら自覚はあるらしい。きつと睨んできた老爺を制した審神者は、頬杖を突いて溜息を吐いた。

着任して1年以上。この白人の少女がロイヤルファミリーと呼ばれる存在である事を、初期刀の彼は今はじめて知った。

「こつちでも、歴史修正主義者は跋扈してるんだ」

そういつて、手ずから茶を淹れる。ハーブティーと呼ばれるそれは、祖国で愛飲していたものらしい。しかし彼女の身分を知ってから、どうにも落ち着かない。そんな陸奥守の緊張を知ってか知らずか、蜂蜜を垂らしながら審神者は淡々という。戻ってきた本丸。短刀男士達のはしやく声がする。ただの「身内との面会」と聴いていた。真実を知ってしまった今は、その声が遠く聞こえる。思わず抱えたままのこんのすけは、膝の上でその緊張を受けてか、黙ったままだった。カップを差し出してきた審神者は、ごく今まで通りに淡々と話す。

「そのせいで治安が悪化してるのは、ウチの国でも変わらなくてな。ただでさえ王室はこの200年以上で半数以下に激減したから、跡継ぎの私が頼れる国も中々なかった。その中で、手を上げてくれたのが日本政府だったんだ。——所謂『審神者』の適性持ちだったのが決め手だったんだろうな。表向きは留学という体でこちらに来ている。……吉行。坂本竜馬氏はリベラルな人物だと聞いていたが、たかが王女にそんな態度でどうする」

「……おんしが1年も、そんな事をひと言も言うてくれんからじゃ」「いう必要もなかったからな。戦場では、貧民だろうと王だろうと死ぬ。精々墓碑銘が変わるぐらいだな。それに、お前らはこの日本の神であつて、私の国の民ではないだろう」

たかが王女。そういえるのは自分自身が王室の人間だからだろう。そう思いながらも、陸奥守は漸く、腕の中のこんのすけを解放した。直ぐに降り立ったこんのすけは、何もいわずに部屋を辞する。この場になくとも、この本丸の結界の中にいれば自動的に翻訳がなされる。元はといえば千年以上のジェネレーションギャップや方言を話す刀剣男士達の為の機能だったと陸奥守は聴いている。しかし他国語にも対応しているとは。あの小さな体に詰まった高性能さに内心で呆れながら、カップに手をつけた。レモンバームの香りが、心を落ち着かせてくれる。一口飲んだあとで、ふと、陸奥守は顔を上げた。

確かに、歴史修正主義者の跋扈により、国内外問わず治安が悪化している。それ以前から第2次東京大空襲から今なお回復しきっていない日本は国際化に伴い、海外からマフィアも流入している。そう、

日本も決して、海外からの攻勢に安全とは言い切れないのだ。

以前、国際協力して捕まえたマフィアのボスを釈放するよう、身内を人質に取られた審神者が、政府高官の息子の審神者の本丸を制圧。爆弾を仕掛け、「釈放に応じなければ自分達ごと爆破する」と政府を脅迫した。その事件事態は、検非違使を利用して解決したらしいと聞いたものの、つい先程判明した事実は、反芻する度に陸奥守に緊張を与える。前の主ならば、こんな相手にどういう態度をとっただろう。……屹度緊張の欠片も見せなかったに違いない(そういつたところは今の審神者と似ている気がした)。しかし、相手は、損なえばどうなるかわからない人物だ。国はともかく、民に害があつては困る——正体を知られ、先述の事件のような事があつたら。そう思つて正直に口にする。

審神者は平然としたものだった。ローズヒップティーを口にしていう。

「それは政府にいつてくれ。今のこの国の政府は、出来るだけ欧米に恩を売つておきたいんだろう。精々、この本丸を、歴史修正主義者や検非違使はともかく、そういった『外敵』から守るように努めて貰うしかないな」

「おまんは……」

「どちらにせよ、祖国にはいられなかつた身だ。出来るだけ遠く離れたこの国に來られてよかつたよ。……こちらでは、未来の子孫を連れてきて、過去の重要人物に働きかけるといふ事もするからな」

「——成る程」

つまり、物理的に距離を置きたかつたのか。なぜ遙々と、日本に來たのかは理解できた。陸奥守は肯く。

治安が荒れており、いつ拉致されるかわからない。王室の人間が歴史修正主義者に連れて行かれれば、過去のどんな歴史を書き換えられたものかわからない——近くの書架から、洋書を取り出される。このすけの機能により、それが「近世ヨーロッパ史」という書物だと示していた。カップを置き、そのページを開く。英文が頭の中で訳されていく。

日本の「王家」に当たる存在は、謂わば国内の統治者としての権限を発行する役所であり続けた。しかし、それは異端な方だ。この書物の中にある通り、近世以前の王室・王家といえ、国や軍を引っ張り統治する強権的な存在だ。

とかく、その中で目立つのは「ハプスブルク」「ブルボン」「ロマノフ」などの単語だ。本に眼を落とす陸奥守に、柵から引っ張り出してきたクツキーをかじりながら審神者という。

「その本を読めばちよつとわかるだろうが、欧州の王家の人間っていうのはどこかしらで血が繋がってるんだ。政略の為に嫁にやったり婿にやったりしてるからな。ロシアのエカテリーナ王妃なんて簡単にいえばドイツ人だし」

「日本も似たような事をやちよつたようじゃよ、特に戦国時代は。大名同士の話じゃが」

「どこも似たようなもんだ。お陰で、戦後立憲君主制になったウチの国の王家も、あちこちと血が繋がってるね。系図を遡れば色々混ざってて、屹度お墓参りをするなら欧州を行脚しなきゃいけない。これはどこの王室の人間にもいえる事だけどね」

溜息を吐く、審神者をこっそりと見遣る。北欧の出身だと聞いている。テレビや新聞では、あの辺りにある小さな島国が、NATO加盟国と露西亜間の紛争・抗争の中継地に晒されているという。あそこは確か立憲君主制で、今なお王室の言葉が強いとも聞いた。政府で聞いた話の通りならば、恐らくあそこ出身だろう——審神者の正体に思わず溜息を吐き、ふと、ある記述が目につく。

1700年代、ハプスブルク家の相続問題。著者は歴史家として悪癖があるのか、この時の婚姻に際する「if」が綴られていた。この時の長女、マリア・テレジアの結婚相手についてだ。ごく些細な著述だが、そこから目が離せなくなったのは、なぜか。

審神者は、淡々という。

「特に、18世紀にオーストリアからお嫁さんを貰っていてね。そのお嫁さんとその兄弟姉妹の子孫が狙われる傾向にあるんだよ。こつちの歴史修正主義者は、この頃の歴史を改変する事にやたらと固執し

てて」

カップを口にしたら。

『ハプスブルク家マリア・テレジアとプロイセン王太子フリードリヒ間婚姻阻止大隊』なんて長つたらしい部隊名の奴らがいるんだ。彼らの間に子供は5人いてね。うちは偶々娘さんをひとりお嫁に貰ってるもんだから」

「その2人が祝言を挙げたのが、そんなに悪い事だったき？」

「さあ。でも、歴史家はこういつてるよ」

涼しい顔で茶を啜る、彼女は本を片手に淡々と語る。

「もしもマリア・テレジアが政略結婚に甘んじず、ロレーヌのフランツとの恋愛感情を優先させて異例の結婚をしていたら、屹度ヨーロッパ史は大きく変わっただろうって」

「でも、王族が恋愛結婚なんぞできんじやろ」

「だから、歴史家の夢物語さ」

そういつて、ヨーロッパでは有り触れた王女殿下は、ハーブティーを啜り終えた。

正史

(とある「正しい歴史」の話)

End.

【腐向け】ハチがいなくなる4年後に【おてあか】

案内された本丸の庭。広がる畑は、あまりにも牧歌的だ。チョウが、ミツバチが飛んでいた。虫を啄むスズメの姿も見える。

「これでも小さい方だ。他の本丸に比べれば」

自身をそうして庭に連れ出したのは、この近侍だという三日月宗近だ。名乗られた時に聞き間違いかと思った。だが、やはり、このしつかりと自身を導く彼は、この本丸の審神者の近侍だという。好々爺という雰囲気青年だと訊いていたが、この落差はなんだろう。しかし、つい先程。この第1部隊——愛染達短刀に連れてこられてから、何とはなしに、察していた。この本丸の空気は、仄暗い。原因はまだ、わからないが。最後に会わせてくれるという審神者を、しつかりと観察しておこうと思った——ここには、自分の兄弟達がいるのだ。そう考えながら、畑を見渡す。キュウリ、ナス、ピーマン、ニンジン、ジャガイモ、トマト。列を成しており、向こうでは麦わら帽子を被った誰かの姿が見えた。

そしてその傍らに、プチトマトとアサガオ。それにヒマワリが植えられている一角があった。ここだけが、他の内番と区画されていると、憂いを帯びた目元の三日月はいう。

「これは、主の農園だ」

「……農園、いうには、ちっこいですな」

「主が通っている筈の小学校とやらでは、植物を育てるのも教育の一環らしい。山姥切のが、種を調達してきたのだ。今度は短刀男士達と一緒に、ヘチマやカボチャの畑も作ると思っていた」

「へえ」

そのひと言で済ませておく。しかし、内心では、大きく驚いていた。このの主は、どうやら相当に幼いようだ。頭の中で、「記録」を探る。自分が、この刀剣男士として着任した時、他の分霊からフィードバックされたものが多少なりとも存在した。そしてその中で、幼い審神者というのは、大概、大人のろくでもない思惑が働いている。卑屈だという山姥切国広が教育に動いているとは、それだけ火急の事態を

知らせてきた。

(これは、大儀そうやな)

嘆息する。微笑ましい農園は、戦場と立ち向かう本丸の畑には、不釣り合いだった。面倒な事になりそうだ。せめて早く、顔見知りと仲良くしておきたかった。内情を知らねばなるまい。そう思って、次の場所へと連れて行こうとする三日月に話しかける。

「なあ、三日月さん。ここに国俊と螢がいるのはわかったわ
「もう会ったものなあ」

愛染に手を引つ張られて連れてこられた時、玄関には愛しい幼子の姿があつた。飛びつかれ、うっかり初っ端から手入れ部屋に行く羽目になるところだったが。自身は振り返って、鷹揚に微笑む彼に重ねて尋ねた。

帰投する道中、愛染には訊いていた。本丸では、自分達来派以外にも、自身について言及した刀剣男士がいたと。

「それと、あと、義助の槍の方はいらつしやるそうで」

「義助の槍」

「御手杵さんといった方がよろしいでっしゃるか。あの人がおると訊いとつたんですが……」

反復され、嘗ての呼び名から本名へとシフトチェンジする。結城にいた頃は、互いにあだ名で呼んでいた時期が長かったものだ——感慨に耽りかけたところで、三日月は笑んだ。そして、自身の頭の向こうに声を掛ける。

「御手杵、内番、精が出るな。今日の収穫はどうだ」

「ナスが結構取れたから、天ぷらなんかいいんじゃないか。甘辛焼きとかでも」

振り返る。見れば、ジャージに長靴、麦わら帽子に手拭い。軍手を嵌めた手で額を拭う、長身の青年が立っている。

それに面影を見て、三日月の言葉で、自身は声を上げた。

「……手杵さん、随分ラフになりましたなあ」

「お、もしかして国行か。久し振りだなー。来てくれて嬉しいぞ」

機嫌良く笑う好青年。その笑顔だけは変わらないと、駆けてくる被

保護者達の声を耳にしながら半笑いした。

比企の御手杵、天下三名槍で最も古い槍。結城を共にした彼は、重荷を振り払ったように随分身軽な装いになっていた。

「詐欺やわあ」

「それ、何度目だよ国行」

「確かに御手杵は、すっごい現代人っぽいけどさ。国行だって大分だるだるだよ」

「あんたら仲良いなー」

知己ならばよかった。御手杵に面倒を見て貰え。食えない笑みを浮かべ、三日月に仕事を投げられた御手杵は、それでも自身の面倒は見てくれる気があったらしい。畑の収穫を済ませると、自身と集まってきた蛍丸や愛染を連れ、部屋のひとつらしいそこで茶と共に本丸の絵図面を示した。茶菓子は蛍丸達がどこからか持ってきて勝手に並べては食べている。説明の最中に横合いから食べ滓混じりに指摘されながらも、30分もした頃には、自身は御手杵及び弟分達からの説明で、この城での行動の仕方を学んでいた。そして一服、茶を飲んでから、対面する旧知を眺めてしみじみと呟いたのだった。初秋、日差しは強かったものの、吹いてくる風は涼しい。その涼風が似合う爽やかさは相変わらずだった。けれど、と自身はもの申したい。宛がわれた湯飲みを片手に、胡乱に御手杵を見上げるのだった。

結城家にいた頃は、もう少し取っつきにくかったものだ。気質よりも、あれは纏う雰囲気のせいだっただろう。

「せやかて、雪降らし、比企の御手杵、首刺してけの義助の槍って、もつと気迫があつたやないか」

「最後のはちよつと覚えがないぞ」

「へー御手杵ってそんなに凄かったんだ」

「ウチの中では気楽な兄ちゃんって感じだぞ」

こぶしを握る自身に、御手杵のツツコミは飽くまで冷静だ。そして弟分達の言葉こそ、自身には信じられない。嘆息した。

「そもそも、立派な槍やったで。今でも本体は同じやろに、なんで付喪神の自分、そんなに所帯染みてしまったんや……」

大名が、わざわざ発注して作らせた、象徴の為の槍。威風堂々たる、旗と同じだ。それでいながら、作りは立派に人を殺せるもの。自身が出逢った頃には「相当丸くなった」、とは、当時結城家に所蔵されていた他の付喪神達の談だ。今でも、はじめて会った日の事を思い出せる。落ち着いた佇まいに、口元に刷く笑みは太い。単座する付喪神に、思わず声を失ったものだった……想い出は美しい。嘆く自身を物珍しそうに見遣る弟達に対し、御手杵は絵図面を手にながら、笑うばかりだ。

「今の方が身軽でいいけどな」

「かもしいひんけど」

「それに、あんたは変わらないな」

そういつて、御手杵は自身の膝の脇を見る。自身の本体だ。来たばかりで安定していないゆえに持ち歩いているそれと、そして自身を見て、御手杵は懐かしそうに眼を細める。その顔には、見覚えがあった。「変わってなくて、嬉しい。やっぱりあんたの事は好きだな」

「……つん、んん、おおきに」

口元につけかえた湯飲みを揺らす。その程度には動揺した。不意打ちである。何を考えているのか、弟達の視線を浴びながら、御手杵は悪びれもせずに絵図面を片付けて立ち上がる。

「ところで三日月爺さんは、あんたを主に紹介してないよな。俺が今連れて行くから、蛭丸と愛染は遠慮してくれ」

「はーい」

「国行ー、まんばには冗談が通じないからなー」

湯飲みを置き、部屋を辞す御手杵についていく。先程の言葉をまだ飲み込みきれていない。

畑に近いせいか、ミツバチが滑空している。目の前を横切つていったそのの前に、御手杵の背中があった。そういえば、立ち上がったところははじめて見たかも知れない。結城家の頃を思い出す。

そんな事、ひと言もいわなかったじゃないか。

「来派の連中とは、あんたの事は話してたけど」

「そうなん……」

——審神者と引き合わされた後。ひとまず、支給された布団を運ぶ。敷き布団と枕は自身が、掛け布団は先導する御手杵が持つてくれている。振り返らない御手杵は、弟達の待つている部屋へと案内してくれている。その背中を凝視しながら、自身は本丸の廊下を歩いていった。既に他の刀剣男士とも顔を合わせていたが、彼らの顔や名前よりも、御手杵の言葉が思い出されて仕方ない。睨め付けたくもなかった。前を歩く御手杵は、飄々と語る。

「螢丸や愛染とは面識なかったけど、国行とは会った事があるって。あんた、そういえば、結城にいた頃も、口にするのは弟達の事だったな」

「……あの頃のはあんたは、今より気迫があつたからなあ。緊張してたんやろ」

細かい事を覚えているものだ。付喪神の執念深さを思い知らされる。自身も同じ存在の筈だが、ここまで細かく覚えているだろうか。結城家の御手杵について思い出すのは、ただただ、あの威容だけだ。

それが随分と身近になった上に、気軽に、しかも唐突に好意を口にするような輩になったのだから堪ったものではない。頭の中の落差を必死で埋めている最中も、御手杵はいう。

「緊張かあ。そんなに近寄りがたかつた覚えはないぞ」

「意識してなかつたんかい……」

「どっちかっていうと、あんたみたいに身軽できれいな刀に憧れたな。俺は昔から、刺す事しか出来なかつたし」

「……ほんま、あんた、変わったわ」

半ば呆れて、長い廊下を歩く。こんな槍だつただろうか。昔を思い出す。

もつと、落ち着いた雰囲気だつた気がした。それが良いか悪いかは、わからないけれども。

「あんた、あの頃に比べると、なんや浮かれとるわ」

「浮かれてるかあ。生き生きしてるとはいわれたな、物吉とかに」

家康公の愛刀の名を出して、御手杵は笑う。いわれてみれば、活き活き、といえるかも知れないと思う。しかし、それなりの時間を共に

した自身にとっては、今の彼は、羽根がついたようだった。あの重い鞘を礎にした、重厚な雰囲気纏っていた嘗ての御手杵。普通の槍より遙かに大きな体を持った彼に、武器として好意を持たれているのは気付いていた。しかし今日のように、あんなにあつさり口にはしなかった。

あまりに久方ぶりの再会。それが嫌だとは思えない自分もいるけれど。

「……どっちにしろ、主には悪いな。それなら」

「——あの坊ちゃんに、手杵さんは忠誠誓つてはりますの」

片手で頭を掻く御手杵に、それは寧ろ困惑の問いかけだった。嘲りなどはない。ただ、戸惑いだった。

想定した通り。自身を主とした審神者は、幼かった。しかし、それは予想以上だった。10才にも満たない、痛々しい程に幼い子供だ。霊力が一人前以上に高いのが、余計に哀れだ。傍に控えていたこのすけの存在が、悪い意味で強い。庇うように座る三日月は、明らかにあの「使い魔」を敵視していた。

面倒な事態だ。この本丸は、恐らく現行政府の最も黒い部分のひとつに属している。こんな面倒な部隊で、あの主を哀れに思い、彼を守る為に戦う事は考えられた。しかし、忠誠とそれとは異なった。敢えていうなら、自身が蛍丸や愛染に抱いている感情だろう。

「忠誠とは、ちよつと違うな。守る為だ」

予想通りの答え。しかし、返ってくる言葉は、不穏な色を纏っている。

「今の主の事は、結構気に入ってるんだよ。だから、まんばや三日月を手伝って、守ってやりたいって思ってる。……だから、この本丸にいる時だって、戦場に身を置いてる時と気分は変わらない」

「……堪らんのちゃう」

「だから、主には悪いっていつてるんだ」

御手杵は振り返らない。

「俺は所詮、武器だから。戦う機会は、多い方が嬉しいんだよ。屹度、あの主についていれば、今の敵がいなくなっても戦う事がある」

振り返らない御手杵を、見詰めた。言葉の意味を理解したからだ。
——自分達刀剣男士は、歴史修正主義者や検非違使を滅ぼせば、それで役目を終えるのではないか。

しかし、あの審神者の事を思い出す。幼子だ。幼子の審神者は、大概がろくな思惑で審神者をやらされていない。自分の主となつたあの子供は、その最たるものだろう。戦がはじまって、意識の上では1年以上が経つ。あの子供は、どれほど長く拘束されているのだろう。「主を飼ひ殺しにしたい連中がいる」

低く呟いた。その声を拾い、息を飲む。

「正直、主が、人の世の幸福から置き去りにされているってのは、俺の感覚だとよくわかんねえ。でも、まんばや三日月は、主を現世に帰してやりたいといつてた。『その時』の為に戦える時が来る。……俺が浮かれてるとしたら、確実にその事だろうな。真に主の為に戦えるのが、ハチがいなくなつてから4年後だつていうんなら」

「ハチ」

「畑を作る時に、まんばが拾つてきた言葉だ。昔の偉い学者がいつてたんだつてさ」

呆然と立ちつくした自身に、御手杵は振り返つた。それが、あの頃と変わらぬ笑顔だったから、自身はそれを見てすぐむしかないのだ。「物事には段階があるつて事だつて。なあ、国行。俺は戦う事にした。あんたはどうする」

彼はいつた。互いに布団を抱えているのが間が抜けていると、頭のどこかで思った。

「怠けたいにしても、もしあんたが、今俺が言つた事を他に漏らすんなら、俺はあんたをどうにかしなくちゃいけない。それは覚えておいてくれよ」

「……訂正するわ」

自身は答えの代わりに、何とか笑顔を作つた。

「自分、変わつたらん。相変わらずの戦いたがりや」

そこを畏怖していたのは昔からだ。自身の言葉に、御手杵はさも不思議そうにいつた。

「昔もいっただろ。『武器が戦いたいのは当然だ』って」

自身とあまりに対照的な彼は、身軽になって尚、変わっていない。それに気づき、面倒に関わったと思いつつも、嬉しさを覚えていた。御手杵は、変わっていないのだ。今も、昔も。その姿を変えて尚。布団を抱えたまま、ひとまずは忠誠よりも、その穏やかな狂奔に肯く事にしたのだ。御手杵は、嬉しそうに笑った。戦闘狂の笑顔は、きらいではなかった。

ハチがいなくなる4年後に

(いつか全てを終えて、主の為に刃を振るう。その背中に、御手杵がいるだろう)

End.

花底蛇【審神者十長谷部（モブ視点）】

死斑が出ている。それ自体は何の不思議もない。自分達が駆けつけたのは、事件発覚から30分以上が経過してかららしいからだ。ただ、それから推測される死亡推定時刻が可笑しかった。

そも、この遺体の状況事態が尋常ではない。持ち込まれた仮設テントで覆われた事件現場。持ち込まれたシートでは、彼ないし彼女の体は覆いきれない。辛うじて見える大腿に刺し傷が見える。死体の腹から高々と伸びるそれを、呆れた心地で見上げた。季節は春。咲き誇り、現場に散った花卉を散らす、ツツジが美しい。鮮らかな紅色が、薄汚れた仮設テントの中で異彩を放っていた。

「■■■さん」

名を呼ばれ、振り向く。狩衣に面布の少年が、テントのカーテンを潜っていた。どよめき囁く役人やくだぎつね達の中で、長谷部を伴う彼は比較的落ち着いている。何度かこういった「事件」で顔を合わせた事があつたが、肝が据わった審神者だと思っていた。そんな彼も、個人を隠す面布の下で、顔を顰めているだろう事は伝わる。彼の近侍の長谷部が潜ってきた前で、死体から生えるツツジを尻目に、デバイスを展開する。

「いわれた通り、残ってた刀剣男士に事情聴取をしてきましたよ。……この本丸は、もう駄目ですね。丸ごとお取り潰しの方が手っ取り早い」

「そんなにひどかったのか」
「ええ」

いって、自身の長谷部に目を配らせる。対する彼は肯くと、他の役人へメモを片手に歩いていった。

それが今回のこの事件。あの奇怪な死体を作ったと思われる犯人と同じ分霊の彼への気遣いだとは、いわれずとも知れた。声を潜める少年は、デバイスをスライドさせながらいう。向こうでは、自身の近侍の鶴丸と彼の長谷部が何やら話し合っていた。額を寄せると、少年の顎から首まで色が悪いのに気付いた。

『これ』、はじめてじやないようです」

「……このすけは何をしていたんだ」

「よくある怠慢——では済まされない何かに巻き込まれていたようです。調べたら、この本丸に同一に着任した記録があるのに、あの遺体の人以外は行方が知れていないんです。役人も、責任者が転々としていて問題が浮き彫りにならなかつた。着任した人達は、元々予備役で、あとから引き継いだという形で本丸を貰っていたようです」

いわれて、ふと、再び遺体を見遣る。

この被害者の審神者は、恐らく死の直前。デバイスで政府に助けを求めてきた。緊急のホットライン。政府は至急、この本丸のこんのすけに応答を求めた。答えはなく、武装突入をした。

本丸には奇妙に人気がない。しかし、並んで歩いていたり、縁側に座っている刀剣男士達は、穏やかに笑い合っていた。

搜索は難航しなかつた。本丸の執務室の前。そこには庭園が広がっている。そこに、ひとりの刀剣男士が立っていた。にこにここと、愛想良く笑っていた。彼の足元には、狩衣を着た「何か」が倒れていた——腹から、立派なツツジを咲かせた。

長谷部は返り血を浴びたまま、事もなげに笑った。

『おや、どうされたんです。新しい主がやって来たんですか』

へし切長谷部は緊急捕縛。他の刀剣男士達も纏められ、現在役人達が対応に追われている。

この事件の解決の為に呼び出された自分は、同様に招集された少年の言葉を聞いていた。用兵を頼まれる彼に対し、自身は推理を頼まれる。それぞれの得意分野の為にワトソンになってくれた少年は、頭を振りながらいった。

「今までの審神者達については、わかりません。今回殺された審神者については、刀剣男士達から話を聞いて、様子を纏めました」

「教えてくれ」

「……あの審神者が着任したのは、去年の夏だったそうです」

園芸に興味があつた。だから、そのツツジの木を見た時、ひどく残

念に思ったものだ。

「長谷部。このツツジは何色の花を咲かせるんだ」

「桃色ですかね。年々、赤味は増していますよが」

着任してそれなりに経った頃。審神者は、近侍にしていた長谷部に尋ねた。仕事を終えて庭を散策していた中、見つけたのは、見覚えのある低木——低木というには、少しばかり成長しすぎていたが。

これはツツジだ。自宅にも、実家の近所の人々も、好んで植えていた。春になれば黄色、白、ピンクといった鮮やかな色の花々が咲き乱れる。その様はとても美しかった。ここまで高く育ったツツジは、さぞ壮麗な姿を見せてくれるのだろう。だから、尚更残念だった。特にピンクのツツジは、自身の好むところだった。

「そうか、残念だな。もつと着任が早ければよかつたんだが」

「ツツジが、お好きですか」

「うん。特に赤系統のはね。実家で育ててたツツジもピンクだったんだ」

そういうと、長谷部は優しく微笑んでくれた。胸に手を当てて、うつそりという。

「それなら、来年の春まで待ちましょう。手入れは俺がやります。来年の春には、赤いツツジをお見せしましょう」

「長谷部、お前、園芸も出来るのか」

「お望みとあらば」

長谷部は笑う。

「新しい主。貴方の為にも」

そして、その目をツツジの木へと向けた。

所謂引き継ぎだ、とは役人の話だっただろうか。勤めていた会社はそれなりに大きかったが、粉飾決算が発覚して忽ち株価は暴落。せめて退職金が出るうちに、と辞めた足で政府に審神者として戦線に出る事を望んだ。学生時代に見習い期間を済ませ、■だけは取っていた。退職金と保険金で食いつないでしばらく。自身に頼まれたのは、主のいなくなった本丸だった。流行のブラック本丸か、と恐る恐る尋ねても、こんのすけは首を振るばかりだ。

『私達には、審神者様が必要なのです』

何度も繰り返すくだぎつねを、少々不気味にも思った。しかし、懸念は晴れた——本丸は、とても穏やかだった。

特に、近侍として率先して仕えてくれた長谷部は、見習い時代に接した長谷部と変わらない。師とした審神者に対しての長谷部と、よく似ていた。

(同じ『長谷部』なんだから当たり前かな)

だから、何も疑いもしなかった。見習い時代と変わらない、違うといえば立場だけ。刀剣男士達は、何の遠慮もなく自分と付き合ってくれる。彼らを編成し、敵を駆逐する。その繰り返しの日々を続けた。

「主、起きてください」

1年近くが経った頃。そろそろ暑くなってきた季節。晩春の早朝、審神者は起こされた。囁くような小声。揺さぶられて起きれば、長谷部は、障子から差し込む朝日の中、微笑んでいた。

「主、ツツジが咲きましたよ」

「え、本当」

わき起こったのは、1年弱前の事だ。このところ仕事が忙しく、ろくに庭を見ていなかった。長谷部から手入れは欠かしていない、そろそろ咲きそうだと、とは聴いていたものの、いよいよ咲いたという。服を着替えると、習慣でデバイスを懐に入れながら、長谷部に連れられて、庭に下りた。朝露で湿った木々、朝を告げるスズメ達。彼らの声を聴きながら、自身は長谷部に先導されてやって来た。

俄には信じがたい光景が、見えた。

ツツジは、一気に全ての花が咲きそろっていた。赤に近いピンクのツツジが、朝露に濡れている。思わず駆け寄って、造花でない事を確かめた。昨今の造花は出来が良すぎるのだ。そしてそれが真実、生花だと知って驚く。こんなに一時に咲き揃うとは。自身は笑って振り返り向いた。長谷部の胸から上が見えた。長谷部は、優しく微笑んでいた。

「凄いね長谷部、手入れを頑張ってくれたんだ。有難う！ すっごく

キレイだ。次からは自分もちゃんと育てるを手伝うから」

「喜んでいただけで光栄です」

そういって、長谷部は、審神者の太股を刺した。

一瞬の事。何が生じたかわからなかった。目を瞬きながら、膝が落ちる。見ると、貫通した太股から、血がしみ出て来ていた。思わずしがみついたツツジ。縫ったまま、振り返る。

長谷部は音も立てず、抜刀していた。刃の先から、血を振り払うのが見える。長谷部は、笑っていた。

「主は、赤いツツジがお好みだそうですね。これはまだ、桃色の域です。主」

それ以上は聴きたくなかった。痛みと熱、及び出血がひどい。長谷部に背中を向け、這いずり出す。懐でデバイスが作動したが、構っている余裕はなかった。

訳がわからなかった。自分は普通の審神者の筈だった。少なくとも、いきなり殺されるような真似をした覚えはない。なのに、なぜ。

刹那、足首を掴まれる。

「——!!」

「主」

その声は、いっそ、優しくかった。親が子を窘めるような、猫を撫でるような声。

一挙に引きずり込まれる。ツツジの隣に転がされた。その上で、長谷部が切っ先を向けていた——審神者の腹に。

「主のお好きな色に、染めてくださいね」

「遺体の状況と、その話は合わないな」

狂気の沙汰。そうとしかいえない話は、少年の審神者の顔色を悪くさせたものの、自身には腕を組ませるものがある。首を傾げて、自身はいう。指で、遺体を示して。

もがいたのだらう、服がぼろぼろだ。見える皮膚には死斑の出た、性別もわからない遺体。書類を見れば男女ぐらいはわかるだろうが、それは後回しだ。

庭の1部を捜査現場として仮設テントで切り取ったそこ。鮮らかに赤い花卉を散らすツツジは、化生の類だろう。それは疑いようがなかったが、気になるのは、23世紀では一応探偵として活動していた自分の疑問だ。少年に遺体を見せながらいう。

「この死斑。これで死亡推定時刻がある程度計れる。これだごく数時間前に死んだ計算になる」

「それで」

「今の話だと、長谷部は遺体に木を植え付けたんだろう。動機や方法はどうかあれ、これだと、死んで数時間で、こんな大ききのツツジが育つた事になるぞ」

いって、改めてまじまじと遺体を見遣る。傷口から生えたツツジは背が高い。腹を貫通して背中の下の地面には、ツツジの木の根と思しきものが高きから低きに僅かに根を張っている。

そこで、ふと気付いた。この地面は、他の植木と比べ、やけに盛り上がっている。

それをしやがみ込んで観察していると、彼は居心地が悪そうにいう。

「……今、俺が話した話は、刀剣男士から聴いた話を纏めた、っていいましたよね」

「それがどうした」

「つまり、自分達の主が長谷部に殺される光景を、彼らは眺めていたんですよ。それでも、あんなに穏やかに笑っていたんです。……今回は偶々長谷部が手を下しただけで、以前は他の刀剣男士がやったのかも知れない」

思わず振り返る。予想通り、ぼつが悪そうな彼は、じつとこちらを見ている。

「……それを、なぜ許していた。彼らは」

土に触れる。意外に脆い。手袋越しのそれは、あっさりと崩れる。思わず手元を見た。そして目を瞠る。

木の生えた遺体。その下の地面の中。古びた狩衣に、根が深々と絡んでいた。

「これは、憶測でしかないんですけども」

目を睜り、声もない自身。少年はその手元をまじまじと見詰め、いった。

「『屠殺』、じゃないでしょうか」

「誰が土に埋めた人間を食べたというんだ」

その問いに、彼は答えない。ただ、代わりに手招きする。地面から手を離し、呼ばれるまま、仮設テントから顔を出す。

血腥いテントの中とは打って変わった、青々とした木々や草花。向こうには池があり、通りすがりに見た時は、鯉が元気に泳いでいた。自分の本丸よりも、この本丸は、元気なように見えた。特に、丁度、安土城と福岡城を足して割ったようなあの城は美事なものだ。まるで今、建築されたばかりのように、美しさを保っていた。

異様な程に。

『付喪神とは、万物に憑く化生である』

背に氷が落ちた。

躑躅ヶ底、花底蛇

■■■■■■■■■■部隊の本丸は永らく管理を放置されていた。それまでの責任者は処分され、本丸は事件解決に協力した審神者2名の意見を受託し、空間ごと「お取り潰し」となった。

人権を持たぬゆえに罪を問えない刀剣男士達は、奇妙な事に、あの城から離れた事で「正気」に戻ったという。

殊に長谷部は自身の行いに思い悩み、引き取り手が見つかる前に自壊した姿が政府保護下の一室で発見された。

それはまるであのツツジが腹を裂いた審神者のようだったと、現場を見た役人は証言した。

ただ、結局、最初の審神者がどこの誰だったのか。何が起きたのか。それだけは未解明のままだ。ただただ美しい、あの城を残し、消えた審神者は。

E
n
d.

【とうら腐転生パラレル】秋津ヶ原【んばみか】

ここは田舎町。朝、学校に行くのに近道をする公園がある。公園とは名ばかりの、遊具よりも雑草の芝生や木々が生い茂ることを優先とした、平たくいえば野原だ。そこをショートカットに使うのは、目に優しいその光景を好んでのことでもある。春は桜が散り夏は緑が燃ゆる、秋は赤く染まり冬は枝に雪が実る。今は夏の終わりかけ。秋のはじまりを告げるように風が涼しい。草は枯れて敷き詰められ、黄色の絨毯を敷いていた。

自身が、その青年を見たのは秋風の吹き、よく晴れた朝のことだ。

青い狩衣を着た、美しい造型の男だ。それがヒトでないのは一目で看取した。この田舎であのような見目と衣装では、瞬く間に噂が千里を駆けるだろう。それに纏う空気が、ヒトとしてはあり得ないほどに静謐すぎた。自身は生まれつきとても目が良い。おかげで、青年の目もよく見えた——双眸に宿る三日月も。

（平安時代なら三日月の君、とても呼ばれるところだろうか）

その青年は、蜻蛉を纏って歩いてきた。

アキアカネかタイリクアカネかナツアカネか。区別などつかない。少なくとも、その青年が歩く度に先触れするのは赤い蜻蛉だった。透明な羽根で、青年に侍るように蜻蛉が付き添う。まるで貴人に誰をも触れさせないように、蜻蛉が頭から足元まで侍っていた。

蜻蛉の精霊か何かだろうか。蜻蛉といえば、日本では古くから珍重されていると聞く。さて、何の象徴だっただろう——そこまで考え、はたと思い出す。自分は今、学校に行く途中だったではないか。慌てて背中を向けた。

「もし」

赤とんぼが自身に回り込んできたのは、背後から声を掛けられたときだ。

「もし。国広や」

「――」

名前を呼ばれた。しかし、返事をしたものか。どう考えてもこの世

のものではないそれに迂闊に声を出せばどうなることか。だから、無言で振り返った。

三日月の瞳が、こちらを見ていた。訴えるような双眸が、自身の足を縫い止める。蜻蛉が舞い、その形の良い指に乗る。それを見詰めた。そして思い出す。

蜻蛉は勝ち虫だ。不退転の虫。前にしか進まない、ゆえに武士に好かれた虫。

(ならば、そんな虫に傳かれているこの男は)

「国広。忘れたのか。国広」

名を呼ぶ。名を、呼ばれる。その度に脳みそがふるいにかけられる。思い出す、思い出してはならないことが。フード越しに頭を押さえる。しかし、蜻蛉と三日月の双眸から目を逸らすことはできない。

その目が、かなしそうに細められた。

声が、切なく自分を求めてきた。それだけは、身に沁み身を縛るほどに伝わって。動くことができない。

あの目を、自分はいつの日か置いていった。それだけがなぜかわかったのだ。

「忘れたのか、国広」

「俺と共に、最後まで最期まで、突き進み戦い続けることを誓っただろうに」

「俺の手を取って、戦ってくれただろう」

「引き返すことを知らぬ蜻蛉のように」

「……国広」

手が、震える。

「国広」

なんとか、手を伸ばした。今にも泣きそうな、あの青年へ。

「くにひろ」

青年は、か細く見える手で握り替えた。

蜻蛉が、飛んだ。空が暗んだ。

野原を蜻蛉が飛ぶ。赤とんぼばかりが飛ぶ。やがて人がやって来

るだろう。学校に来ず、そのまま方知れずとなった金髪の少年を捜して。

蜻蛉ばかりが飛んでいる、その野原に。

秋津ヶ原

了

【へしさに♂】 赤信号 【転生義親子パラレル】

「主」

名を呼ばれ、砂山から振り向く。見慣れたスーツ姿の男が、通勤鞆を片手に人気のない公園の柵の向こうから手を上げていた。

長谷部だ。

「帰りますよ」

「うん」

声を掛けられ、足元から砂を払う。そしてベンチに投げ出していたランドセルを背負うと、柵をすり抜け、長谷部の手に縋り付いた。すると、握り替えされ子どもは笑う。歩き出しながら話題を振った。

「今日のご飯はなあに」

「海老ピラフとオニオンスープです」

「燭台切ならアボカドサラダも加えるところだね」

「仕事帰りのサラリーマンにそこまで求めないでください。……手伝ってくれたら考えます」

「わあい」

夕焼けが見える。カラスが鳴いていた。行き交う人の中を、似ていない青年と少年が連れ立って歩く。それでも彼らは親子だろう。人はそう推し量るだろう——彼らの会話、言葉遣いをよく聞かなければ。

手を繋がれた子どもは、ふと、目を遠くにやる。その目は、あどけない容姿に似つかわしくない老成したものだだった。

「長谷部。今日も、本丸の誰かと会うことはなかった」

「……いいえ、主。誰とも」

「そっか。俺もだよ」

そういつて、繋ぐ手に力をこめる。長谷部は、その手の小ささをなぞるようにまた握り返す。

この手を最初に握ったのは、この子どもが——嘗ては審神者と呼ばれた男が、幼子として親戚の葬儀の場に鎮座していたときだった。彼がかつて10代だった頃からの付き合いだった。だからすぐにわ

かった。わかったから——まだ子を持つには若く、独り身だったという制限を超えて、その手を握った。子どもは、まだ名乗らなかつた自分を見て「長谷部」と呼んだ。それで、長谷部には充分だった。

この奇跡は、あとにも先にも起きていない。あの頃の誰とも、長谷部は会えていない。それは人生をリセットされて10年そこそこの審神者も同様だった。長谷部が見下ろした先、審神者は遠くの信号にピントを合わせたようだった。歩調は変えず彼はいう。

「ねえ長谷部。どうして俺たちは出逢えたんだろうね」

「……」

「運命とか神の采配とか、そういうので片付けられたら楽だろうけど」
長谷部は答えない。答えられない。審神者の歩幅に合わせてゆったりと歩きながら、横断歩道を目掛けた。見当違いに心配したのは、この、今は幼子となつた審神者の学校での動向だ。大人びた——中には老年の分別がある——この子どもは、学校で無事に過ごしているのだろうか。今は主従ではなく養父と養子として関係を持った審神者を心配していると「聞いている長谷部」と下から声が上がった。あの頃より甲高い声に長谷部は微笑んだ。できるだけ優しく見えるようにと祈って。

「聞いていますよ。——いいではありませんか。2人だけでも」

「……」

「あなたは寂しいかも知れませんが……たとえあの頃の誰ともこれから会うことがなくても、今は俺が父親としてあなたをお守りしますよ」

「……じゃあ、長谷部」

円らな目が長谷部を見上げる。互いに歩みが止まった。信号が、赤になつていた。

「そろそろ、お父さんって呼んでもいい」

「――」

声が詰まる。赤信号が視界にちらついた。

言葉を返す前に、審神者は目を伏せる。大して落胆した様子もない。——慣れてしまったのだ。

「無理しなくていいよ。でも、『主』って呼ぶのは人前では避けてね。何度も言ってるけど」

「……承知しています」

「できれば敬語も外して欲しいんだけど。まあ、無理は言わないよ」
顔を上げてくる。審神者の顔には苦笑が浮かんでいた。

それに罪悪感が募る。

知っていた。今の審神者は生まれ変わった。ゆえに年相応に親の愛を求めている。しかし自分に与えられるのは飽くまで保護者としての愛情だ。親には、代われない。

否。どこかで代わりたくないと思っていた。愛情はある。しかしその愛情の名は――

(この感情の正体を探ってはいけない)

顔を上げる。赤信号を睨んだ。なかなか青には変わりそうもない。それでいいと思った。幼い手を握って。

すくなくとも、この手が小さいうちは、青信号にしてはならない。主のためにも。そう、自分に言い聞かせた。

了

【堀さに♀】酒の肴に過ぎない話

審神者会議にて。

和泉守の言葉に、堀川と審神者が振り返る。

「お、赤ん坊だ」

「ああ、本当だね」

2振りとひとりが見遣る。少し遠目に、別の審神者と話している女性が見えた。和服、できれば狩衣が標準服の審神者においては珍しい、カジュアルな洋服の審神者だ。見れば赤ん坊は生まれて数ヶ月と経っていないだろう。赤子の相手をするならば育児に特化した23世紀の衣服が適しているに決まっている。和装が多数を占める中でその姿は目立っていたが、それより腕の中の赤ん坊に眼を細める刀剣男士が目立った。自分たちも何気なくその姿を目で追っていると、小用でも思いついたのか、その審神者は近侍に赤子を預けた。そして席を外す。感心なことに、赤子は母親の手を離れても泣きもせず大人しいものだ。じつと近侍の顔を見詰め返している。近侍も慣れた様子で体を揺らしていた。

その様子を眺めていた2振りとひとり。そのうち問題発言をしたのは打刀の方だった。

「そーいや主はまだ20才だっけ？ でもいつかは結婚して子ども作るんだろ。男がいい女がいい。あの赤ん坊は桃色の産着を着てるから女みてえだけど」

「ちよつと兼さん！ 今はそーいう話はせくはらになるんだよ！」

「おっそーうか、悪いな主。気に障ったか」

「ああうん、文句を吐ける前に堀川が怒ってくれたから別にいいよ」

苦笑する審神者に、和泉守もやや恐縮した様子を見せる。それに堀川は腰に手を当てながら溜息を吐いた。いくら刀剣男士の中の最年少といえど、時代感覚の違いは300年はずれている。刀としてふるわれていた往時が幕末だから致し方ないといえそうなのだが。それに堀川が溜息を吐いていると、ソフトドリンクの注がれたグラスを傾けた審神者が呟く。

「……和泉守の質問の答えになるけど、私は子どもを持つ気はないよ」
「へえ。まあ今は色んな考えの奴がいるもんな」

和泉守は肯いたが、堀川はその影でひっそりと目を瞞った。

堀川の聴覚は、小さく「もう」と付け加えた審神者の声を拾ったのだ。

途端、壇上でマイクを持った狐面の男性が告げる。

「皆さん『見習い出身審神者会議』、楽しまれているでしょうか」

先程の赤子は、抱えていた近侍と同じ髪の色をしていた。

「主つてよお、今日の『見習い出身審神者会議』に出たんだから、見習い期間のことを隠したがってるって訳じゃねえよな」

「それはないんじゃないかな」

「たしか審神者免状をもらって5年ブランクを経てうちの本丸に着任したんだろ。そのブランクに何があつたのかつて話だよな」

戦装束から内番着に着替える。これからそれぞれ畑当番と馬当番があるからだ。そもそも、本来審神者会議に付き添うのは刀剣一振りのみだが、和泉守が審神者会議というものに興味を示したために、どちらかといえば和泉守の随伴としてこの日の審神者会議に出席した。特にトラブルもなかったから堀川はないしんでよしとする。しかし和泉守の言葉に、会場で引っかけた言葉が浮上してくるのを感じた。和泉守は脱いだ服を衣紋掛けにかけながらいう。彼はふと疑問に思ったことをつらつらと口に行っているだけだろう。堀川はそれがわかったので聞き流しながら相槌を打つ。

「でも結局、今日もろくに話そうとしなかったよな。余所の審神者と
はただお喋りしてただけだし」

「平和だったね」

「別に隠してる訳じゃねえんなら、話してくれたっていいと思うんだけどよ。国広はどう思う」

「そうだね。でも」

ジャージに袖を通しながら、堀川は答えた。

「主さんが話したくなかったときでいいんじゃないかな」
にこりと笑った。

懐かしい話をした。

寢室に堀川が訪ねてきたのは、そろそろ寝ようかと寢床を準備していたときだった。

「主さん、寝酒はいかがですか」

「寝酒か」

確認ののち障子を開いてきた堀川が持っていたのは、盆。それには酒瓶と水差し、それにグラスが2つとマドラー。寝間着に着替えていた審神者も、酒を見て寄ってくる。堀川は酒瓶のラベルを見せた。梅酒とある。

「主さんは20才になったばかりですけど、果実酒なら飲みやすいでしょう」

「いつ買ったのこんなの」

「日本号さんが酒を買うついでに頼んでもらいました」

「あいつは休肝日というものを設けた方がいい気がするんだけど」

「僕ら刀剣男士の体の内臓機能って低下するんですかね。それより今夜は良い月ですよ」

そういって、盆を縁側に置いた堀川は障子を大きく開く。果たして、空には満ちた月が浮かんでいた。それを見た審神者が、膝で躡り寄ってくる。

「ほうほう、月見酒と洒落込みたい訳だ。それで、堀川」

堀川はグラスに梅酒を少し注ぐ。それに水差しの水を注いで攪拌した。それを、縁側に躡り寄ってきた審神者に突きだした。審神者はそれを受け取って薄く笑う。

「私を酔わせてどうする気かな」

「お酒で口が滑りませんか」

自身は原酒をそのまま注ぐ。そして縁側に腰掛けた審神者の横に座ると、グラスを合わせながらいった。

「酒の肴にでも、主さんの昔話をお願いしたいんです。昼間は聞けませんでしたからね」

「……」

審神者は微笑んでいる。グラスを握ったまま。

「昼間、主さんは結婚云々を飛ばして、子供を持つ気はない……『もう』っていつてましたよね。それが気になって」

「……堀川は耳が良いなあ。本当に小声のつもりだったのに」

「それで、兼さんとも話したんですよ。気になるなって。……主さんがいやならただの月見酒でいいし、兼さんにも話しませんよ」

いつている言葉は淡々としている。堀川はグラスを呷った。それを見て、審神者もグラスを呷る。水割りといえどグラスの中身は半分減った。審神者の目が月を映す。彼女はいった。

「そうだね。堀川にならいつてもいいかな。特に秘密にしてた訳じゃないし」

一拍おいて、呟いた。

「ただ、喋りたくなかったただだから。今から、お酒で口が滑ったから話すことだよ」

「どうぞ」

「……昔々、といつても5年ぐらい前。健康診断で政府に審神者の適性を見出された女の子がいました。ところが保護者からの反発があり、直ぐに本丸に着任ではなく、ひとまずある本丸に見習いとして通うことになりました」

「……」

「とはいつても、学校帰りにその本丸に寝泊まりして必要なことを習う、といった形だったから、どうしても時間はかかりました。幸い、その本丸の審神者さんや刀剣はいい人ばかりで、心穏やかに過ごせるはずでした」

「……」

不意に、審神者の顔が俯く。

「ふと、その中の刀剣の一振りと、過ちを犯すまでは」

「……それは、誰だったんですか」

「さあ？」

顔を向ける審神者は、戯けたようで泣きそうに見えた。少なくとも、堀川の目には。

「それは、女の子は黙して語りませんでした。数ヶ月の研修が終わる頃、その刀剣男士が出陣先で破壊され、急報を聞いてショックを受け、流産するまでは」

「……………」

「当然、本丸は大騒ぎになりました。女の子は当時中学生。昔ならともかく、若すぎた。研修を終えて審神者免状は渡されたし、当の相手が生きていれば彼を連れて行くこともあり得たかも知れないけど、それはもうifの話」

「……………」

「ただ、女の子は疲れてしまいました。師匠の審神者と、他の刀剣男士の優しさも。……政府もその報告を受けて、その女の子をすぐに本丸に着任させることを躊躇いました。それで、5年。……5年の月日が必要だった」

「……………それで、女の子はどうなったんですか」

恐る恐ると聞く。月が虚ろに明るい。光を浴びながら、審神者は残り半分の酒を呷った。

「どうもしないよ。今は元気に本丸で審神者をやっている。忙しいけど、満たされている日々だよ。ただ」

グラスを置いた。審神者の目は、庭の池の方に向いていた。

「もう、恋愛も出産も、それにどうしても纏わる結婚さえしたくない。そう思っているよ」

そう答える審神者の目は遠い。堀川は、それを見て自分もグラスを置いた。まだ半分も空けていない。それでも置かずにはいられなかった。

そして、審神者の手を取った。彼女はこちらを見た。堀川は真摯に彼女を見詰める。

「僕じゃ、駄目ですか」

瞬間、彼女は泣きそうな顔をした。

けれどそれはほんの一瞬。穏やかな微笑みを作って見せると、審神者はそっと堀川の手を外した。

「堀川。今のはね、昔話」

「……」

「5年前に色々あったけど、今は忙しくても満たされている日々。だから」

外した手を、僅かに握った。

「だから、これ以上はもう、いいんだよ」

審神者の顔は、穏やかな笑みを浮かべたままだった。

酒の肴に過ぎない話

「年上の女を口説きたい？ 主は私らより遙かに年下だろ」

「実年齢じゃなくて精神年齢の話だよ……」

「まーとりあえず飲みなつて！ この余った酒、良い梅酒じゃないか！」

了

夏を求む

蝉が泣き喚く。太陽から注ぐ日差しは強い。時折吹く風は熱を伴っていた。

この本丸に夏以外の季節は来ない。

「五虎退。主を見なかったか」

括り上げた髪にも熱が籠もる。汗ばんだうなじをやや涼しい風が吹き付け、涼を得られた。書類を片手に粟田口の部屋を訪ねると、目当ての人物は絵本から顔を上げる。そして首を傾げた。

「あるじさまですか。あるじさまは執務室でお仕事をなさってましたよ。さつき僕がジュースを届けました。そしたら次に呼びに来るまで下がって良いって」

「そうかい。有難う」

「蜂須賀さん早く閉めてください。熱風が入ってくるー」

障子を開いたままで尋ねていたら、他の粟田口の者から文句が出る。蜂須賀が立っていたのは縁側。障子を開くと空調が効いていた。訴えを素直に受け入れて早々に障子を閉める。

そして縁側を歩き出した。執務室は、ここからさして離れていない。

蝉が泣き喚く。畳の上に横たえられた少女の体。縦に並べられたすだれの隙間から、夏の日差しが差し込む。腹にかけてバスタオルを握る手に、汗が滲んでいるようだった。

「主」

文机には書類が散見される。五虎退が持ってきたものだろう、グラスの中で氷が溶けていた。刹那、氷が割れる。

他の部屋と異なり、審神者の執務室には空調がない。それは彼女の私室も同様だ。常に夏のこの本丸はときに熱帯夜ももたらす。にも関わらず、審神者は他の部屋のように空調を設置しようとしなない。熱中症の心配もされているが、彼女は構おうとしなかった。こうして昼寝をしている姿も珍しくないが、暑い中眠くなるのは熱中症の兆候とも聞く。

「主」

囁くように審神者を呼ぶ。幼い体はTシャツとスカートを纏っている。長い黒髪が畳の上にざんばらに広がっていた。いつも思うが、枕がなくて首が痛くないのだろうか。蜂須賀は暑さによりややぼけた意識で考える。そも、彼は彼女より厚手の格好——着流しの上に羽織を着ていた。暑さより見栄えを優先していたが、彼のきょうだいは遠慮せずに脱いでいる。彼らを見習って自分も薄着の工夫をしようかと考えているこの頃だ。刀剣男士は体が頑丈で今のところ熱中症患者は出ていないが、それも保障され続けているものでもなかった。

「主」

そもそも、主が夏以外の季節を景趣にしてくれば解決する話だった。しかし彼女は決して、夏以外の景趣にしようとしなない。それは初期刀の蜂須賀が知る限り、この本丸がはじまってからずっとだ。その理由を、蜂須賀は知らない。ひよっとしたら近侍を務めることの多い五虎退は何かしら聞いているかも知れないが、彼の口からそれに関することはもたらされたことがなかった。

「主」

蝉が泣き喚く。審神者の前に屈み込む。太陽がやや傾いてきているのだろう、蜂須賀の影が審神者に差し掛かった。そういえばこの部屋は西側だったのか。そんなことを思っていると、不意に審神者が寝返りを打った。蜂須賀の方に顔が向く。起きないかと、顔を覗き込んだ。

その顔が、苦渋に満ちていた。

「……寒い」

口から、気温と無縁の言葉がこぼれた。

審神者は寝たまま、自らの体を抱きしめる。バスタオルが畳に落ちた。体を縮こまらせる審神者の様子に、焦った蜂須賀はより顔を近づけた。審神者の口からは、吐息混じりの呟きが漏れ続ける。

「寒い……寒いよ……」

蝉が泣き喚く。

「お父さん……お母さん……」

蟬が泣き喚く。

「……やめて……」

蟬が泣き喚く。

「食べないで」

蟬が泣き喚く。

「お父さんとお母さんを食べないで」

泣きやんだ。

跳ね起きた。

「……あ……蜂須賀。どうしたの」

蜂須賀は目を瞬く。尻餅を搗かなかったのが不思議だった。飛び起きた審神者を避けられたのは刀剣男士の反射神経の賜物だ。しかし驚いている蜂須賀に、目を見開き、そして目を伏せた審神者は、肩で息をしながらも尋ねてきた。それはいつも通りの、年齢に見合わぬ沈着な彼女で。蜂須賀は、それで、本来彼女を訪ねてきた用事を思い出す。右手に握っていた書類を差し出した。

「ああ……君の研修先だった本丸から連絡があつてね。なんでも今度の審神者会議について相談したいことがあるらしい」

「……叔父さんからか。わかった。下がって良いよ」

それまで眠っていたことが嘘のように、スムーズに半身を起こし書類を受け取る。バスタオルを片手で握ると、そのままずると文机の方へ畳を這っていった。その様を、普段なら無精だと叱るところだった。しかし。

「主」

「なに」

振り返る審神者に、蜂須賀は言った。

「寒くないか」

審神者は、瞼をゆつくりと開閉させる。そして、笑みを刷いた。ものの悲しい笑みだった。

「『ここ』は冬にならないから、平気だよ」

背中を向ける。小さく細い背中を見つめたが、やがて立ち上がった。すだれを避けて縁側に出る。

刹那、日差しが降り注ぐ。目が眩んで手を翳した。
蝉が、再び泣きはじめていた。

了

【へしさに♀】「主が厨で身悶えてたけど何かあったのかい」

血走った目で、長谷部は宣った。

「今日はキスの日とやららしい」

「急にどうしたの」

答えたのは、執務室にて同席していた加州だ。座卓にて向かい合わせに座っていた彼は、近侍を務めている長谷部を怪訝そうに見遣る。「キスの日」という言葉自体には聞き覚え自体はあった。テレビや雑誌で見かけた気がする。それがなぜ長谷部の口からもたらされたのか。ある予感を持ちながらも加州は問う。

「魚の鱧の日とかつてボケじゃないよね」

「そういうボケは100万回は見た。接吻の話だ」

「切腹……」

「加州。ボケはいらんといっているだろう。口付けの話だ」

「……で、そんな話をふってきたのは理由があるんでしょ」

「無論だ」

持っていた書類を繰りながら、長谷部は言う。

「主に合法的にキスをしてもらえる日じゃないかと思ってるな」

「長谷部。眠いなら寝たら」

「毎日8時間は寝ているし三食摂っている」

「心が疲れてるんじゃないの」

「何を言う。主の元で日々主命をいただき戦場を駆け抜ける。これほど充実した生活はない」

「……というか、そもそも付き合ってるんでしょ。キスの日じゃなくてもキスしてるでしょ」

「何を言うか」

長谷部は座卓を叩く。飲み物がなくてよかった。加州はそう思った。座卓に置いた拳を固めて、長谷部は唸る。

「日本人はクリスマスやバレンタインやホワイトデーを恋人同士で祝

う。それが特別な日だからだ。特別な日に特別なことをしたいと願うのは摂理だろう！」

「わかったわかった。とりあえずキスをするにしろしないにしろ目の前の仕事を片付けよう——あ、主。廁から戻ったの」

「主!?! い、今の会話を聞いてましたか」

加州の言葉を遮るように障子が開かれる。目を剥いた長谷部は、思わず書類を握り潰しそうになりながら彼女を見上げた。審神者は、きよとんと目を瞬いている。

「何の話? 猥談?」

「えっちな話なら長谷部とはあんまりしないなあ。近いものはあつたけど」

「主、仕事中にするべき話ではないですよ」

顔を引き締めて長谷部は宣う。そんな彼を加州は胡乱な目で見遣った。キスがしたいと先に言い出したのはお前じゃないか。

審神者はそんな2人の会話を知らずに、ふと座卓を見下ろす。そして言った。

「お茶淹れてくるよ」

「そんな、俺が淹れるよ」

「いえ俺が」

「2人は座つてて。仕事を手伝ってくれる2人に私が淹れたいんだし。廁に行く前に言い忘れたけど休憩にしよう——長谷部はなんだか疲れてるみたいだし」

「そんなことは……」

立ち上がりかけた姿勢のままの長谷部に、審神者は微笑む。そして、彼の傍に寄って腰を屈めた。

長谷部の前髪を退けると、その額に唇を落とす。

そして身を離した。審神者は微笑んだままだ。

「なんだか知らないけど興奮してるみたいだし。鶯丸じゃないけど、落ち着いてお茶にしよう。美味しいお茶菓子ももらったからね。それにしても清光」

「なに」

「キスの日だからってノリでやるもんじゃないね。あとは頼んだ」

そういつて、審神者は踵を返すと後ろ手に障子を閉めた。

その声がうわずっていたのを、加州は聞き逃さなかった——今日の前にいる男など、顔を手で覆いながら首まで赤いが。

加州は、審神者に心で叫んだ。

(恥ずかしいんならやるなよー!!)

「……主……口がよかったです……」

「黙れ長谷部」

顔を覆ったままの長谷部が欲望を吐露するのを、加州は低く吐き捨てた。

了

【山姥切十男審神者】 ※誤記ではありません

ただの疑問だった。

「主。あんたはいつもは素顔なのに、会議や政府への出向のときは面布をしているな」

それは審神者会議から帰ってきたあとのことだ。執務室。つけていた面布を外した審神者に、山姥切は何気なく尋ねた。ただの純粹な疑問だったのだ。

「なんで外で顔を隠すんだ。よく、俺たちの前でも顔を隠すという審神者の話は聞くが」

「別に俺みたいなのは珍しくないと思うけど」

そう言ってから、審神者は面布を片付ける。

「まあ俺の場合は女優やってたから、面が割れてるんだよね。審神者やってるってあまり知られたくないんだよ」

「へえ、そうなのか」

「それじゃ俺、トイレに行ってくる。まんばも御苦労様」

そう言って、審神者は執務室を出て行った。山姥切も、今日の務めは終わったものとして自室に引き取ろうと思った。そして、それから、審神者の言葉を反芻し——気付く。

「……『女』優？」

審神者の性別は男だったはずだ。

(どういふことだ……?)

山姥切は縁側を歩きながら首を傾げる。先程の審神者の言葉についてだ。

『女優やってたから』

大浴場で一緒に風呂に入ったこともある。審神者の性別は男だ。だから彼は混乱する。布をかぶった頭を抱えながら歩いていた。庭では短刀男士たちがはしゃいでいる。

男性・女性の役者の双方を「俳優」と呼ぶことはある。しかし、女優と限定されればそれは女性の俳優のことだ。尚のこと山姥切は困

惑する。まさか魚のように性別が変化した訳ではあるまい。一応は人間のはずだ。

(まさか手術で男に……？　今はほぼ完全に自由に性転換手術が受けられると聞くが)

審神者は若い。確か20才そこそこのはずだ。山姥切の知識だと、そういった手術は男性から女性に施行する場合は早ければ早いほど良いと聞く。しかし審神者の場合は逆だ。その場合はどうなるのだろうか。山姥切の思考は混迷の一途を辿っていた。

『犯人は山口さん。あなたです』

不意に、脳に声が届く。

山姥切は、そちらを向いた。見れば、縁側に面したとある一室。籠手切、堀川、物吉など——脇差男士らがTVに向かって座っていた。彼らの周りにはディスクのケースが散らばっている。山姥切は首を傾げながらその部屋に入った。1番手前にいた堀川に話しかける。

「何を観ているんだ」

「あ、兄弟。今良いところだからちよつと……」

『『女子高生探偵巽屋れいな的事件簿』ですよ』

画面を見ていた堀川の、代わりに答えたのは籠手切だ。「僕は何度も観ているので」と彼は言う。彼の手には空のDVDケースが握られていた。それには先程彼が口頭で答えたものと同じタイトルが付されている。TV画面では、見るとセーラー服を着た少女と思しき人物が、人々に囲まれながら中年男性と対峙している。男性は見るからに狼狽えていた。達者な演技の役者らしい。山姥切はそれを見ながらも思ったままに口にする。

「随分色物のタイトルのドラマだな」

「それがですね、意外に本格派なんですよ。一見ラノベか漫画が原作っぽいタイトルですけど、名作刑事ドラマ『片棒』の映画版から派生したドラマです。脚本が良いんです。俳優陣も豪華ですし、起用されてるジョニーズのアイドルも光る演技を見せてくれるんです」

それを聴いて山姥切はなるほど、と納得する。籠手切は歌って踊れる付喪神を目指しているという。ジョニーズといえば2000年の伝

統を持つアイドル事務所だ。そのアイドルが出演しているドラマとなれば、恐らくこのDVDの所有者は彼だろう。俳優として活動するアイドルの動きも見たいに違いない。鯨尾がポテトチップスを頬張りながら「犯人こいつだったんだな」「予想外だ」と骨喰と会話を交わしている。につきりも彼らに肯いていた。籠手切は視線はTV画面を見つめたまま、残念そうに肩を竦める。

「ただ、残念なのは主演女優が入れ替わっちゃったことですね。今の2代目もなかなか好演はしてくれてるんですけど。今は女子大生探偵で」

「舞台を降りたのか」

「ええ。引退しちゃったんですよ、初代は」

山姥切は籠手切に釣られるようにTVを観る。

そして気付いた。言葉が出なかった。籠手切はそれに気付かない。「そんな年じゃなかったのに。20歳で女優をやめちゃったんです。理由は一切不明で、引退後の動向も全然知れてないんですよ。他のドラマでも良い演技してた女優だったんですけどね」

どうして皆、気付かないのか。きつと化粧をしているせいだろう。しかし、初期刀として、3年間連れ添ってきた山姥切には、わかる。

審神者だ。審神者が、女優としてTV画面で動いていた。

「ああ、懐かしいな。籠手切、DVD持ってたんだ」

その日の夜。山姥切は執務室を訪ねてその日の昼に観たことをつらつらと報告した。すると審神者は、さも当然のように答える。手にはペンが握られている。彼は書類仕事を片付けていた。その傍らで彼は山姥切の疑問に答える。

「元はといえば、勿論男優希望だったんだよ。というか男が男優をやるのは当たり前というか常識だろ。でも事務所が『ちよつと女優やってみない?』って……そしたら世間に受けちゃって。そのままずる高校卒業しても『女優』続ける羽目になって」

審神者は溜息を吐く。

「でも成人過ぎたらいくらなんでも女優を演じ続けるのはきつい。そう思ってた矢先に、政府から声がかかってね。『審神者の適性があ

る』って。だから切りの良いハタチで引退して審神者になつたって訳。事務所にも愛想が尽きてたしね」

「……でも、ドラマのあんた、活き活きしてたぞ」

山姥切は呟く。あのあと、DVDを一気に視聴していた脇差男士の仲間に入ってドラマを観た。籠手切の言う通り、脚本は面白かったし、山姥切は詳しくはないが俳優陣は演技が達者だった。ジョニーズのアイドルだという青年も良い演技をしていたと思う。何より、主演女優が好演していた——画面越しの笑顔は本物に見えた。少なくとも、3年間寄り添い続けた審神者の笑顔と変わらないように思えた。

それに、審神者は苦笑する。

「そうだね。いくら事務所がアレでも、お芝居は好きだったから。ただ、『私』はハタチ以上は生きられなかった。それだけだよ」

寂しそうな笑顔だ。山姥切はそう思った。そこで気付く。

ドラマの中で、「彼女」は良い笑顔を見せていた。そして山姥切は、3年間連れ添ってきて、「彼」の笑顔を見てきた。それは、ほぼ同一のもので。

山姥切は尋ねた。

「主。女優をやった頃、楽しかったんだな」

「うん、そうだね。性別がばれないように大変だったけど、それでもやり甲斐はあったよ」

「じゃあ、今も楽しいんだな」

「え?」

「笑顔が同じだ」

目を瞬く審神者に、山姥切は言った。

「せめて、今あんたが生きるのがつらくないんなら、俺はそれでよかったと思う」

すると、審神者は微笑んだ。今度は先程より。寂しさは薄らいでいた。

「……そうだね。戦いだからそりや大変なこともあるけど、でもみんなと過ごすのは、楽しいよ」

「なら、よかった。俺はそれが確認したかった」

山姥切は微笑んだ。審神者は目を疑った。たしかに山姥切は、薄らとだがたしかに微笑んだのだった。

「お芝居をやりたい？」

乱の言葉を反芻する。それはある日のこと。執務室にて書類に向かつていた審神者に、やって来た乱がそんなことを言い出した。手には既に脚本と思しき冊子が握られている。乱はにこにここと笑って言った。

「この前ね、籠手切さんたちが観てたドラマを見せてもらってね。推理ものかっこいいねー犯人を突き止めるのかっこいいね僕たちもやりたい！ ってことで推理もののお芝居をやりたいなってことになっただんだ」

「お芝居自体は好きにやってもいいよ」

「つきましては、あるじさんに演技指導してもらいたいなって」

「えっ」

ぎくりとペンを握る。そんな審神者の反応に気付いてか気付かないでか、乱は笑って言った。

「あるじさん、その道のプロだってね！ 山姥切さんが言ってたよ」

「あの野郎」

「ねえ、あるじさん。内輪だけでやるからさ、手伝ってよ」

「……しようがないなあ」

身を乗り出してきた乱が、審神者の腕を掴む。それに、ペンを置いた審神者は頭を掻きながら息を吐いた。その顔には微苦笑が滲んでいる。

「どうせ俺が指導するなら、審神者会議で発表できるぐらいのものにしてやるよ。ただし覚悟しろよ」

「わあい、あるじさん有難うー！」

乱が喜ぶ。立ち上がる彼に引っ張られ、審神者も立ち上がった。

了

それでも、手を差し伸べてくれて、ありがとう

「俺が、何もしなければよかったのかも知れない」

彼はそういって、頭を抱えた。悲痛な声だった。自身の本丸での彼を知る身としては、あまりにもその落差が激しく、哀れさを催した。

——調査に携わったある審神者より

厚がその本丸に着任したのは、夏の名残を残す初秋のことだ。

「それで、ここがあなた方粟田口の部屋になります」

「へー、広いんだな」

着任した者は次にやって来た刀剣男士を世話すること。それがこの本丸のルールだった。特に異を唱える者はいなかったので、今回は江雪が、彼の次にやって来た厚の面倒をみているところだった。

「粟田口は大所帯です。これからも粟田口が実装されることが予想されると聴いて、主が判断なされました。希望があれば別室を用意するのですが」

「いや、ここがいい。黒田の連中と組みたいところだが、小夜も長谷部もそういうのは嫌いそうだしな。蒲団はどうすりゃいい」

「押し入れに予備がいくらでも詰め込まれていますよ。他の方が自分の蒲団を下ろし終わって、余ったうちの一組が貴男の蒲団です」

「わかりやすいな」

「合理性を追求したと主は仰有っていました。私たちには、本当に優しくしてください……さて、これで一通り案内は終わりました。何か困ったことがあったら、北にある私の部屋を訪ねてください。それでは」

「おう。ありがとな」

そういって江雪は立ち去る。足音もなく髪を揺らして歩いていく彼は、やがて静かに廊下の角を曲がっていった。厚が何とはなしに嘆息したのはそのときだ。

良い雰囲気の本丸ではあると思う。鍛刀された直後に会った審神

者は、人が好きそうだった。大凡白刃隊を率いる将とは思えなかったが、「争いは嫌いですが」という言葉を皮切りにはじめた江雪によると、無理な出陣はさせず、重傷になったら即撤退。手入れも放置せずその日のうちに行ってしまう。資材のバランスも整っている。そういう、所謂「ホワイト」の本丸らしいとは聴いていくうちに理解した。ただ、ひとつ。気になったのは、江雪の――

「ひゃっ」

「うおっなんだ」

ぼんやりと、粟田口部屋の前で立ちつくしていた厚。その腰の辺りに何かがぶつかってきた。悲鳴が上がる。――これは子どもの声か。短刀の誰かだろうか。苦笑して振り返った。

「こら。俺は今日来たばっかりなんだから奇襲は勘弁してくれよ」

「あ……ご免なさい。前を見てなかった」

「――」

振り向いて、驚く。そこにいたのは、どう見ても幼い少女だった。年の頃は10才にも満たないだろう。襟の伸びきった大人向けサイズのTシャツをワンピースのように着ている。首には黒いチョーカーのようなものが巻かれていた。髪はぼさぼさで長い。足は裸足だ。

少女のような装いをする藤四郎とはもう会った。この本丸の初鍛刀だという彼はオレンジ色の髪に碧眼。しかしこの少女は、どう見ても平均的な日本人の肌色と髪と目をしていた。だから、余計に混乱する。この少女は一体誰だ。

少女は、困惑する厚に構わず頭をひとつ下げた。

「本当にご免なさい。次があったら気を付けるから」

「あ、おい」

厚の横をすり抜けて、少女は駆け去る。手を伸ばしても、その少女はやがて角を曲がって見えなくなった。

呆然と、残された厚は、少女の去ったあとを見る。この本丸に着任して1時間弱。もう疑問が出てしまった。

「なあ、江雪さん」

「呼び捨てで構いませんよ」

「なら江雪。刀剣男士って、男体しかないんだよな」

厚が疑問をぶつけたのは、その日の大広間での夕食でのことだ。いくつもの四角い卓袱台をくつつけたものに食事の膳が配置されている。上座には審神者が座っていた。同じ粟田口の誘いを断り、小夜を挟んで左文字で座る江雪の隣に「世話係」を口実につけて陣取った。静かに箸を運ぶ江雪に、心持ち低い声で尋ねる。江雪は伏せ勝ちの目を厚に向けた。

「ええ。男性の体を持った者だけです。余所の本丸では、バグとやらで女性の体を持って鍛刀される刀剣女士というのもいるそうですが、少なくともウチの本丸にそういう例はありません」

「隠してるとって場合は」

「ウチの風呂は大浴場です。……まあ、主の私室に個人風呂があるんですけど、基本的には刀剣は大浴場を使っています。使っていない刀剣は、今のところ見たことはありませんね。……それがどうしましたか」

「……」

厚は、自らの疑問の可能性を悉く潰されたことを知った。だから、代わりにぶつけられた疑問に、彼はただ答えることしかできなかった。その声は、存外、大広間に響いた。

「女の子がいたんだ。10才にも満たないぐらいの」

——刹那。水を打ったように室内が静まりかえる。

厚は慌てて辺りを見渡した。何か不味いことをいっただろうか。きよろきよろとする厚に、上座の審神者が、ゆったりと声を掛けてくる。

「その子はお客様だよ。好きなようにさせておいて。御役目のためにこの本丸にいるんだから」

「……そうなのか」

審神者以外に、誰も言葉を発しなかった。ただ、黙々と目の前の食事を平らげること集中しようとしていた。

どうやら、その「御役目」とやらは余程の大事らしい。なんとなく、

そう思った。

そんな大事なら、政府も関わっていることだろうか。なら、政府との交渉係だというこんのすけに聴けばわかるだろうか。夕食を食べ終えたらこんのすけを探そう。そう決めた。

結果として、こんのすけは最後まで姿を見せなかった。あるいは、見せることができなかつたのかも知れない。

その少女に2度目に会ったのは、畑内番のときだ。

まだ残暑の厳しい季節。汗ばむ陽気に、額の汗を拭った。まだ土いじりというものに慣れていない。辿々しい手で、この日同じ畑内番だった薬研に教わった通りに、畑になったトマトを収穫していた。ちやうど、薬研は厠へと席を外していたときだった。

「こ精が出ますね」

不意に、声を掛けられて振り返る。聞き覚えのある声だった。トマトを片手に見れば、果たして、予想していた通りの人物だった。

襟の伸びきつたTシャツをワンピースのように着た、ぼさぼさの黒髪の少女。よれて薄汚れたTシャツと同様のクロックスに対し、首のチョーカーは真新しく見える。それに違和感を覚えながらも、口を突いて出たのは、

「あんた、まだここにいたのか」

という言葉だった。審神者にこの少女は客分だと聴いていた。大抵、客というのは長く逗留しないものである。とはいっても、厚がこの本丸に来てまだ2、3日だ。参勤交代を思えば短いものだ。そう思いながらの言葉だったが――少女は、厚の言葉に苦笑う。その手が、チョーカーに触れた。

「うん。出してもらえないからね」

「――？ どういうことだ」

「あのおじさんからは何も聴いてないの」

少女に不思議そうに問われ、厚は思考を巡らせる。「あのおじさん」。恐らく少女が指し示しているのは審神者のことだろう。現在この本丸にいる刀剣男士で、年嵩に見えるのは石切丸や山伏、あと長谷部だろうか。しかしなぜか彼らとは思えなかつた。恐らく審神者がい

かにも人の好きそうな中年男性のせいだろう。中年太りもしているし、なにより頭部がすだれ模様の冬景色だ。この本丸の中でおじさん of おじさんを選ぶとしたら全員が全員審神者を示すだろうことは想像に難くなかった。閑話休題。厚は先日の夕食で聴かされたことをそのまま答える。曰く、客分で、大切な御役目があるから放っておけといわれたと。

すると、少女は今度こそ笑った。嗤った、という方が近かったかも知れない。

「そうだね、『大事な御役目』があるね。……お兄さんはそれ以上は知らないんだね」

「おう、大将からはそれしか訊いてないな。……1個食べるか？」

「ありがとう」

持っていたトマトを、手拭いで拭いてヘタを千切り取ってから少女に手渡す。少女はその場でトマトにかぶりついた。熟したトマトが少女の口に吸い込まれていく。ぼんやりとそれを眺めていた厚だったが、やがて少女がトマトを食べ終わると、何とはなしに尋ねた。

「なあ、『御役目』ってなんだ」

「――」

「……って、俺が訊いたらまずい話か？」

口を手の甲で拭っていた少女は、厚の言葉に顔を強張らせた。それを見て厚は焦る。こんな子どもにできることは思いつかないが、自分も短刀男士として子どもの姿で顕現している。ひよつとしたら人間の子どもでも今の時代ならできることがあるかも知れない。そう思ったからだったが――少女は、辺りを見渡すと、そつと厚に近寄った。

「あのね」

恐る恐るといった様子で、少女は口を開いた。

「私の『御役目』っていうのはね」

「おーい厚、待たせたな」

「薬研。――あ、おい」

薬研の低い声が向こうから届く。廁から戻ってきたらしい。する

と、少女は身を翻した。厚が止める間もなく、少女は背を向けてどこかに立ち去る。

「? どうした、厚」

「ああ、うん……」

薬研は手拭いで手を拭きながら戻ってきた。それを尻目に、厚はトマトの収穫に戻ることにする。少女の言葉に引っかけかりを覚えながら。

3度目。その日は、朝からぴりぴりしていたと厚は思った。

尤も、ぴりぴりしているのは刀剣男士たちの間だけで、審神者はなんともなかった。寧ろ上機嫌だと、厚は感じた。なんで上機嫌なのかは、わからなかったが「今日は客が来る」という言葉で納得することにした。この日は出陣の予定は入れられておらず、全ての部隊が遠征に赴くことになっていた。

厚とはいえば、まだ練度不足で遠征要員には入れられていない。出陣で練度を上げねばならないが、その出陣がない。手合わせの内番もないから、この日は顕現されてはじめてまともな休日となった。しかし、まだ趣味らしいものではなく、同じ粟田口は皆遠征に赴いている。仕方ないので家事の手伝いでもしようかと考えていた。

しかし、洗濯室を見ても、誰もいない。厨を見ても誰もいない。今日は客が来るはずなのに準備もしていないのだろうか。これはどうしたことかと、初日に教えられた江雪の部屋を訪ねることにした。正確には左文字の部屋である。

訪ねていく道中、どの部屋も静まりかえっていた。誰も廊下を歩いている。昼間だというのに談笑する声も聞こえない。

角を曲がって、3番目の部屋。そこが左文字の部屋だった。障子の前に立ち、声をかけようとしたとき、その会話は漏れ聞こえた。

「……いつまでこんなことを続けるんでしょうね、主は」

「あれは……もう、どうしようもないのでしょうか。せめて、今の少女も、これから来てしまうだろう子どもにも、平穏が訪れることを祈りましょう……」

「あの子たちは……復讐を求めるだろうね……」

「――入っ方がいいか」

「おや、厚殿。どうされましたか」

聞こえてきた会話は不穏だったが、そのまま立ち聞きしているのも気が引けたので、断りを入れて入ることにする。障子を開くと、左文字兄弟が車座になって座っていた。厚が入ってくると、宗三と小夜は視線を逸らす。江雪は入って来た厚に膝を向けた。厚は頭を掻きながら尋ねることにする。

「あのさ、今日、なんで誰も外にいないんだ。俺は今日は休みなんだけど、客が来るって訊いたから準備を手伝おうと思って厨とかも訪ねただけど、誰もいないし。いいのかなって」

「ああ、そのことですか。いいですよ、何もしなくても」

「え、でも」

『彼ら』は自分たちで簡易な水や食料も持ち込んでくるそうですから。何か必要になったら主が自ら用意するので、我々の手伝いは必要ないそうです」

「そうなのか……」

「あと」

江雪は言った。

「今日は、夕食まであまり表に出ない方がいいですよ」

「なんで」

「……理由も、知らない方がよいでしょう」

厚の質問を、このときの江雪は答えなかった。

そして結局、厚はこのときの江雪の言葉を聞き入れなかった。

「あーあ、暇だな」

欠伸混じりに庭を歩く。ここの本丸の庭はそこそこ広い。あまり庭の手入れ自体は熱心にされていないようだが、それでも自然に咲く花は美しかった。それらを眺めながらぼんやりと歩いていた。反芻するのは、左文字部屋で漏れ聞いた彼らの会話だ。特に、気になったのは江雪の言葉だった。

『せめて、今の少女も、これから来てしまう子どもらにも、平穩が訪れることを祈りましょう』

(少女って、ひよつとしてあの女の子のことか？ まさかな)

根拠もなく、自身の考えを否定する。この瞬間の厚は、まだ幸せだったかも知れない。

とりとめもなく思考を巡らせながらぐるりと歩いていった先。そういえばまだ来たことのない場所にも、厚はやって来た。

そこに、ゲートがあった。そして審神者が立っていた。あの少女も、彼の傍らに立っていた。

(なんで裏手にもゲートがあるんだ？ ゲートって普通ひとつじゃないのか)

反射で身を引つ込めたのは、もしかしたら頭のどこかでは事の次第をわかっていたのかも知れない。建物の影からそつと覗いていると、ゲートから人がやって来た。それも複数。

(あれが客か？)

そう思いながらも、厚は違和感を覚えた。なにせ彼らは機械のようなものをそれぞれ携えていたからだ。のちにそれが「機材」と呼ばれるものだと知ることになる。彼らは審神者と何事かを話していた。談笑といつてよかったが、それにしても下卑ているように感じた。困惑した。着任して日が浅いが、審神者のそのような姿は見たことがなかった。あるいは、隠されていたのか。

審神者たちはどこかへ歩いていく。少女はその場に立ちつくしていた——かと思うと、審神者に腕を引つ張られる。

「行くぞ」

「――」

少女は抵抗するようなそぶりを見せたが、審神者に強く引つ張られると、もうそのまま引き摺られていった。

厚は、無言で彼らのあとを追った。

審神者たちが入っていったのは、ひとつの部屋だった。障子を開け放ち、機材を搬入している。その様子を木陰から覗いていた。まだ練度は特にも達していないが、刀剣男士の視力は人間のそれよりも強化されている。今の位置からなら中の様子がよく見えた。

部屋の中央。そこでは審神者が蒲団を敷いていた。機材がその蒲

団を囲うように置かれる。少女は人形のように、部屋の隅に座っていた。会話は聞こえない。

やがて何かの準備が整ったらしい。のちに「カメラ」だと知るそれが回され出したとき、審神者は少女の腕を引つ張った。少女は嫌がる様子を見せたが、やがて蒲団の上に引つ張られる。声は聞こえない。

厚は目を瞠った。少女は相変わらずTシャツ1枚だった。そのTシャツの裾が、審神者によってゆっくりと捲られる。少女はTシャツの下はパンツ以外何も着ていなかった。それがわかったのは、そのまま捲られていったからだ。

審神者の舌が少女の小さな尖りに触れ、右手は少女の下着へと伸びた。声は、聞こえない。

初日の江雪の言葉が蘇る。

『私たち』には、本当に優しくしてください』

厚の頭がスパークしたのと、その部屋に乱入し、審神者の手から少女を奪ったのはほぼ同時だった。

「どこに行くの」

「逃げるんだよ!」

刀剣男士の足と、人間の少女の足とでは速さが違う。その上少女は裸足だ。いつそ抱えた方が早かったが、このときの厚にはその発想は浮かばなかった。少女を引つ張る形で走りながら厚は唸る。

「大将があんなことをしてたなんて——」

「前からだし、私がはじめてじゃないよ。あなたは最近来たから知らないだろうけど」

「え——」

思わず立ち止まる。やがて審神者たちが追いかけてくるのが見えただので再び走り出したが、少女は息を切らしながらも話を続けた。

「私は家出をした先で捕まってここに来た。ここに来たとき、私の前に私と同じ年ぐらいの子がいたし、その子は私が来るとどこかに連れて行かれた。たぶん、生きてないと思う」

「——」

「私の『御役目』はね。ここで、大人の男の人たちに気持ち悪いことを

されて、それを撮影されることなの。すくなくとも、ご飯は食べさせてもらえる。おうちにいたときよりそこだけはましかな」

「……あなたがはじめてだよ。怒って、こうして連れ出してくれたのは。でも、ここまででいい」

表のゲートの前。誰もいない。政府へのコードを入力させている最中、少女は厚の手を放した。

厚が目を見開く前で、少女は微笑んだ。

「私はここを出ると生きていけないから」

「何を言ってるんだよ！ ここにいたってろくな目に遭ってないだろ！」

コードを入力し終える。政府へのゲートが繋がった。空間の向こうに施設が見える。厚は再び少女の手を取った。

「部下を大切にしない奴はひどい目に遭う。でも女子どもを大切にしないどころか無体を働くのは、もっと非道だ！ こんな主の元にはいられるか！ 一緒に政府に行くぞ！」

厚はゲートを潜り抜ける。少女の腕を引っ張った。少女の体が、すべて政府施設側に滑り込んだ。

途端に、少女の目に諦観が宿る。

首のチャーカーが点滅しだした。それを見る厚に、少女は問いかける。

「ねえ。あなたの名前は」

「え？ ああ、俺は厚藤四郎」

「そう。私はね」

少女の言葉は続かなかった。

チャーカーが爆発したからだ。

少女の首が吹き飛び、床に転がる。少女の首のない体がぐらりと傾ぐ。やがて施設内から悲鳴が上がり出す。血飛沫を浴びた厚は、呆然と、少女の体を支えた。

何が起きたのかわからなかった。ただ、漠然と、恐らく少女を「本丸の外」に出したから爆発したのだろうと、見当が付いた。

『私はここを出ると生きていけないから』

あれは、事実をそのままに言っていたのだ。やがて武装した政府職員が駆けつけてくる。厚はただ呆然と、少女の体を支え続けた。

『キッズポルノ本丸』

罪状：本丸不正利用、ゲート不正増設、殺人、児童虐待、人身売買、未成年者略取、……

■ ■ 国 N o . ● ● ● ● ● 審神者

・ 14人の子どもを本丸に連れ込み、性的暴行を行いその様子を撮影した動画を売買

・ 共犯グループとはネットを通じて共謀

・ 13人の子どもの遺体は本丸内に埋める

・ 14人すべての子どもの首に本丸を出ると発動するセンサー付爆弾を装着させていた。子どもたちにはそのことで脅して動きを拘束していたと供述

14人目は厚藤四郎（後述）に本丸から政府施設に移動したことで爆弾が作動。即死

「本丸を使えば子どもを拉致監禁しておくのに便利だと思った」と供述

・ 所属する刀剣男士33名のうち32名は保護、別本丸に配属

・ 残り1名の厚藤四郎は現在（22***/09/25）も放心状態

が継続 要観察

補遺

当本丸の厚藤四郎は22***/09/30に正気を取り戻したものの、重度の鬱状態が見られる

刀剣男士カウンセラーの処置が求められる

【どうらぶホラー】くりちゃんと僕 死地【現代パラレル】

笑い声

夏風呂は熱い。ゆえに、窓をほんの少し開いて湯船に浸かるのが夏が来てからの習慣だった。以前は網戸というものがあつたが、スクロール式のそれが壊れて久しい。虫が入ってこないのを祈りながらの入浴と相成る。

さて、そうなると思こえてくるのが向かいの家の喧噪だ。窓を閉めていても聞こえるのだ。開ければステレオが届く。

向かいの家は3世帯家族らしい。祖父母に両親、子ども（恐らく男の子）が2人。彼らが引越しの挨拶に来たときは偶々席を外していたから直接の面識はない。挨拶の品として色のついたフェイスタオルをもらったので今もそれを使っている。このときも入浴するのにそのタオルを持ち込んでいた。

僅かに開いた窓から、温度差によるほんの少しの涼気が流れ込んでくる。水道代の節約のため強制的に半身浴となる風呂で、ぼんやりと長湯する。BGMは向かいの家からの大声だ。夏ゆえに窓を開けているのだろうか。子ども特有の高い声はよく響いていた。走り回り、母親もしくは祖母に叱咤される声。祖父や父親の声は聞こえなかった。……しかし、本当に子ども声が賑やかだ。床を駆け回る音がこちらにも聞こえる。それに微笑しながら湯船に浸かっていた。

暑い夏、窓からの涼気でやや冷めた湯の中に浸かっていた自身は、ふと、洗い髪の下、頭の片隅にこんなことが思い浮かんだ。笑い声が響く。

たしか引越しの挨拶を応じたのは母と兄だった。その母がその後亡くなり既に5年経つ。笑い声が響く。

5年。5年だ。決して短い年数ではない。

なのに、なぜ向かいの子どもの笑い声は、この5年、何も変わっていないのだろうか。

そう考えた途端。ぴたりと声が止んだ。

浮かしかけていた腰を止める。その沈黙は、痛いほどだ。気付けば虫の声も聞こえない。のどが鳴る。

永遠とも思える数秒間——次第に子どもたちの笑い声が響きはじめ、大人たちの制止する声が届いた。そこで嘆息し、急いで湯船から上がる。

きつと、そういうこともある。自らに言い聞かせた。

というような話をくりちゃんから聞かされ、僕は尚更風呂は早くに入ろうと決めた。

行き止まり

今年も盆の季節がやって来た。盆といえば精霊馬、盆飾り、いつもより少し豪華なお供え物。

そして迎え火である。

余所の地域では知らないけど、地元では迎え火を1週間焚き続け、8日目日に送り火を焚く。つまり火の七日間+α。夏に焚き火などという暑苦しいことこの上ないが、冷涼な地元では夜の7時ほどになると暗く涼しくなり、中々に丁度良い塩梅になる。この日は、火を点けはじめて2日目。玄関先、中々灯らない火を四苦八苦しながら点けようとするくりちゃん、道路に背を向けていた。住宅街でまだ夜の7時前、宵の口だ。街灯が灯る。焚き火に団扇を扇ぎ続ける。

「こんばんは」

そんなとき、声を掛けられた。くりちゃんが背を向けたのはワンテナポ遅れた。僕が先んじて挨拶を返す。

玄関から出て左隣の家の夫人だった。年の頃は正確にはわからないうが、少なくとも還暦は疾うに迎えていると思う。そんな夫人が、ゆっくり、ゆっくりと家から反対方向へと歩いていった。車1台しか通れないような狭い道路を、ゆっくりと。

くりちゃんは、いつの間にか本調子になっていた焚き火をじつと眺めていた。そしてぼつり、呟いた。

「今の人……」

「隣のご夫人でしょ」

「……」

くりちゃんは答えない。ただ代わりに、火の消えかかった炭を弄り回すだけだった。

そしてこの日の迎え火を終えて火の始末をする。後片付けを終えて家に戻ろうとしたところで、ふと気付いた。

家の前の通りは、先述の通りに狭い。そして何より短い。我が家の右隣の家があるだけで、最奥の家は空き家になって久しい。そしてなにより、あそこは行き止まりではなかったか。

いや、抜け道もあったかも知れない——そう思おうとする僕に、淡々と薪の片付けを終えるくりちゃんの態度が思い返される。

彼は「隣の夫人だろう」という断定を、決してしなかった。

あれは誰だろう。

影

これはくりちゃんが近所のスーパーに買い出しに行ったときのことだ。

炎天下、というほどではない。都心に比べて30℃に達することが珍しい地域だ。近年は35℃を記録することもあるが、本当にそれは稀だ。日差しはきつくとも日陰に入れば涼しい。そういうからつとした暑さだった。

車通りの激しい、緩やかな下り坂。スーパーを囲う塀の背が高い。ふと、視界に入ってきたのは影だった。夏らしい、くつきりとした黒い影。被った帽子の罅すら縁取られていた。

日差しが強い証拠だろう……くりちゃんはそう考えながら、1歩踏み出した。

影は動かなかった。

「……………」

振り返る。影はそこにいた。

顔を戻す。また1歩踏み出す。今度はついてきた。そのまま歩き出しつつもちらちらと影の様子を窺ったが、まるで何事もなかったかのようにしれっとくりちゃんの足元に縫われたままだった。

「涼しい方とはいえ、連日暑かったからな」

まるで畑の様子を語るかのように、くりちゃんはそんなことをいうのだった。

名前

初春のことだった。

「■■■■」

名前を呼ばれて目を覚ました。

「……………」

頭を掻きながら辺りを見回す。自分がいるのは蒲団。寝る前と変わらない部屋。時計は朝7時。ごく普通の朝だった。

否。普通ではないことがあった。

(頭が痛い……………)

頭の奥が鈍い重さを持っているように感じた。蒲団の中から這いずり出る。何はともあれ朝食にしなければ。

しかし、朝の席で顔を合わせたくりちゃんに言われた。

「光忠。お前、顔が赤いぞ」

いわれて、自分の頬に触れた。たしかに熱かった。

……朝食を摂ったのち、くりちゃんに引き摺られて病院に行った。先生の診断はインフルエンザ。帰ってくるのと蒲団に押し込められて、その日はくりちゃんのお粥を食べることになった。

「スポドリを飲んで寝てろ」

くりちゃんがスーパーで買ってきたスポーツドリンクのペットボトル。コップが隣に置かれる。そうしてくりちゃんは部屋を出て

行った。それを見送ったのち、言われた通りにスポーツドリンクを飲むと、蒲団に入り込んだ。

熱に浮かされながらも暇になった。そこでふと思い出す。

今朝、自分を起こした声は母の声だった。もうすぐ命日だった。

ひよっとしたらあれが最初で最後とは限らない。あれからインフルエンザや風邪には罹っていないので。

逆

くりちゃんと僕の生活リズムはややずれている。僕は早ければ8時に寝てしまうこともあるが、くりちゃんは宵っ張りだ。最近こそ0時に寝るようになったけれど、これは夏だからだ。朝になると暑くなって目が覚めてしまうし、その目の覚め方が不快だからだそう。暑くなる前に目が覚める僕にはわからない感覚だったけども。

そんなくりちゃんは炊飯係である。家事の大半を請け負うくりちゃんは料理も担当している。そして毎晩、朝に炊きたてのご飯を食べるために予約の炊飯を設定しておく。

その日の晩も、くりちゃんはひとりで米を研いでいた。テレビで観た「美味しい研ぎ方」を参考にして研いでいるという。研ぎ終わり、うるかす（方言らしいが標準語での表現がわからない）時間を計るためにタイマーを取ろうとした。

タイマーは、冷蔵庫に逆さまにくっついていて。1度取り外したあとで戻すときに逆さまにくっつけてしまったんだろう。くりちゃんはそう思いながら触れようとした。

その瞬間、「00:00」が「88:88」になった。そして鳴った。『あああああああああ』

タイマーの音は電子音である。しかしそれはどう聞いても人の悲鳴だった。

くりちゃんは動転した。動転しながら、タイマーを掴み、引っ繰り返して上下正しく貼り直した。

びたり。泣き声は止んだ。表示も「00:00」に戻っていた。

そんな音は聞こえなかったし、僕がヤカンで茶を沸かすときに使ったときはごく普通だった。ただ、それはタイマーの上下が正しかったからかも知れない。

「逆さまになって血が上ってたのかもな」

くりちゃんがそんなことを言うので、僕はこのタイマーを決して逆さまに貼り付けないように心懸けることにした。

札

風呂場の脱衣所兼洗面所の扉。そこにはドアノブに札が引っ掛けられている。「入浴中」というごく単純な札だ。勿論使用目的はただひとつ。誰かが風呂に入っていることを知らしめるためにかけるのだ。

特にくりちゃんは家族にも肌を見せたがらず、他の家族が稀にかけ忘れてもくりちゃんだけはかけ忘れない。生前の母だけはごく稀に風呂場に突入したが、亡くなってからはからはそれきり。父も干渉してこないでくりちゃんは以来ずっとひとり風呂だ。僕も敢えてそこにはつつこもうとはしなかった。嫌なものは嫌なんだから仕方ない。

そんなくりちゃんが、ある夜、脱衣所のドアの前に立っていた。僕にとっては既に就寝時間を過ぎていたが、偶々トイレに起きてきた。くりちゃんはそんな僕に構わず、そつとドアに耳を敬っていた。

……くぐもった水音。それは丁度、脱衣所と浴室のドアを2枚挟んで聞こえる、風呂場で湯を使う音だった。湯船からお湯を汲む音。

見れば、札が下がっていた。「入浴中」となっている。だから僕は首を傾げた。

「父さんが入ってるんじゃないのかい」

「親父は軒を搔いてたぞ」

そして母は既に亡い。そう考えた刹那、背中に氷が落ちる。

誰が入っているんだろう。

硬直する僕の前で、くりちゃんは、札をじつと見つめていた。そし

てその紐を手にとると、引つ繰り返した。無地。「誰も入っていない」という証。

途端。水音は止んだ。

驚く僕に、くりちゃんは嘆息した。

「風呂を上がったら、ちゃんと札は引つ繰り返しておけ」

僕は肯くしかなかった。

翌朝になって、そういえば風呂のお湯は捨てていたことを思い出したのが今回のハイライト。

猫の手

くりちゃんが洗濯物を畳んでいたときだった。

「ん」

洗濯物の山から、猫の前足が出ているのが見えた。

いつものことだった。年少の飼い猫が乾いた洗濯物を好んだ。ハンガーから外すときにその真下で洗濯物が降ってくるのを待機し、また置きっぱなしにしようものならいざ畳もうと思ったときにこうして潜り込んでいることはよくあった。このときも、ハンガーから外したのちに少々席を外しており、飼い猫が潜り込む隙はあった。

潜り込むのは構わない。しかし、問題は、潜り込んでいるときの飼い猫は非常に興奮している。うっかり手を出そうものなら引つ掻かれたり囓られる。だからこのときのくりちゃんも、そっと猫の上の位置にあるだろう洗濯物を手に取った。

そこには何もいなかった。猫の前足だけが、タオルから生えていた。

くりちゃんは取り上げた洗濯物を再び被せた。今度は前足を全て覆うように。

次に取ったときには、前足は陰も形もなかった。

「たしかにあの前足はウチの猫だったんだがな」

くりちゃんはコーヒーを飲みながらそう語った。

了

死んだ養父が10年前に死んだ実父が好きだったら
しいんだが

養父がおかしいことに気付いたのは、引き取ってもらってから数年
後。引き取られた当時10才だった私は、中学生になっていた。

中学生ともなると、多少の分別はつく。引き取られた当初から、「驚
きを求める」スタイルの父は大概可笑しかったと認識していたが、そ
の方向性の雲行きが怪しくなった。

「――」

「え？」

学校に向かうために玄関で靴を履いていたとき。声がかげられた。
しかしその声が不明瞭で、聞き返すために振り返った。

養父は、「しまった」という顔をしていた。常に余裕を保っている養
父の、あれがはじめての焦り顔だったかも知れない。

五条鶴丸の焦り顔は。

鶴丸の家に引き取られたのは、両親を亡くしたからだ。とはいって
も一気に亡くした訳ではない。幼稚園の頃に母が突然の病死、父は私
が10才のときに事故で帰らぬ人となった。父の遺産は莫大なもの
で、当初は私の引き取り手は引く手数多だったが、弁護士によって「遺
産はすべて娘が成人してから本人に受け取らせる」という父の事前の
遺言が発表された途端、引き潮のように引いていった。押し付け合い
がはじまる中――

『よっお嬢ちゃん。俺のところに来ないか』

そう言っつて私の手を握ったのは、葬儀に1番遅れてきた男、鶴丸
だった。

鶴丸は美しい男だ。死んだ父はAPP18はありそうだったが、鶴
丸も16から17ぐらいあるだろう。鶴丸は父方の親戚だったから、
容貌が優れているのも、そして年を取らないのも家系なのかも知れな
い。実際父方の家系は、金に纏わるあれこれは置いておいても見目の
良いものばかりだった。対して母方の方は、不細工ではないがごく普

通というところで、自身はその平凡な母に似ているといわれる。正直なところ、美しい父に似たかった気持ちと、無用なトラブルを避けるためにも似なくてよかったという気持ちが半々だ。閑話休題、そんな美しい男は独身である。ちなみに文筆業だ。あまり身持ちが堅いとはいえない男に引き取られることに結局決定したのは、他に引き取ろうとする者がいなかったからにすぎない。

消去法で、私は五条鶴丸の養女となった。

「■■■■のお父さんってすごいカッコいいよね」

「まあ、顔は良いな」

参観日のあと、決まっていたいわれた言葉だ。カッコいいか、といわれるとなんとなく首を傾げる。常に格好を気にしていて実際格好いい光忠という養父の友人ならいるが、養父がかっこいいかといわれると首を傾げる。自身にとって、養父は「きれいな人」という印象だった。同級生の気持ちを忖度して「カッコいい」ということにはしていた。同級生の言葉のあとには「似てないね」という言葉が付随しているのにも気付いていたが、実の両親がいた頃からそうだったので気にしなかった。大好きな実母からもらった顔なのだ。嫌う訳がない。

しかし、そのことに不安を覚えたのは中学の卒業間際。第1志望校の受験日。しっかりと靴を履く自身は、緊張を解すためだろう、話しかけてくる父に相槌を打っていた。

「受験票は持ったか。鉛筆は持ったか、消しゴムは持ったか。あとハンカチとティッシュと」

「ははは、持った持った。養父さんは心配性だな」

靴紐を結びながら笑う。解けないようにしっかりと結んだ。志望校に受かるだけの学力は積んだつもりだったが、転んで士気が下がることが避けたかった。この年は暖冬で凍った水たまりの心配もなかったが。立ち上がり鞆を背負った。そしてドアノブを握った。

「それでは、行ってくる。待っていてくれ」

「——ああ、行ってこい。■■■■」

聞き間違いかと思った。

「え？」

振り返る。その先で、鶴丸はきよとんとした顔をしていた。こちらも目を瞬いていると――鶴丸は青ざめた。「ああ、いや、間違えた。行ってこい。■■■」

「……ああ」

訂正された。呼ばれた名前は、自分の名前だった。不安に思いながらも、自身は家を出た。

志望校には受かったものの、そのときの鶴丸の言葉が忘れられなかった。

『行ってこい。三日月』

それは父の名だった。

初見の人に、父に似ているといわれたことは1度もない。父に似たのは黒髪ぐらいだ。そう思っていた。

「■■■ちゃんって、意外に三日月さんに似てるね」

テスト期間。部活が休みだったので早々と家路に就いていた道中で出会った光忠は、喫茶店でパフェを奢ってくれた。パフェの甘さに舌鼓を打っていると、頬杖を突いていた彼はそう言った。彼は実の両親とも面識があつたと、思い出したのはこのときだ。マドラーを片手に目を瞠る。

「そうか？ 私はそうは思わんが」

「その口調とかさ。今時喋り言葉にジエンダーがどうのとかいわないけど、少なくとも君のお母さんはそういう喋り方じゃなかったなあ。君と話していると三日月さんを思い出すよ。声も似てるし」

「ふむ……」

いわれてみて、このときまでの短い人生を思い返した。たしかに自分のような口調の女子はいなかったし、男子にもあまりいなかった気がする。咎められることもなかった。

そしてふと思う。自分のこの口調を、今、1番身近に聴いていたのは誰だろう。

その日の帰宅後のことだ。

「お帰り」

「今帰ったぞ。今日は光忠さんに会ったぞ」

「おっナンパされたか」

「パフェを奢ってもらっただけだ。やれ、あの人は女に奢るのが好きだな」

「あいつは人好きだからな。男にも子どもにも奢るぞ」

「……いつ会っても暇そうなんだが、あの人は何をしている人なんだ」

「喫茶店のオーナーシェフのはずなんだがな。不思議だよな」

そんなとりとめのない会話をする。その間に、自身は心に決めた。制服から着替えるために自室に引き取る直前、「なあ」と尋ねる。

「どうした」

「養父さん。養父さんは私が実の父親の口調に似ているのを、どう思っている」

鶴丸にとつては唐突な問いかけだっただろう。しかし、それだけでなくとも、鶴丸が動揺したのは手に取るようにわかった。普段は飄々とした鶴丸の、珍しい動揺だった。今にして思えば、鶴丸は実父のことに関してのみ動揺していたように思う。

鶴丸は、動揺して——そして、微笑んで言った。さみしい微笑だった。

「お前はそのままでもいいよ。無理に変わらなくていい」

その言葉を額面通りに受け止めるには、このときの自身は大きくなりすぎていた。

鶴丸がおかしくなりだしたのは、この頃からだ。

高校を進級することに、私の名を「三日月」と呼ぶ回数が増えた。それはむりからぬ気がした。自身は、少しずつ、少しずつ実父に似てきていた。あの美貌ではない。目鼻立ちの特徴が似てきていたのだ。しかし、それでもベースの顔は飽くまで実母だ。時折会う鶴丸の友人たちにも特に何も言われたことはない。それでも鶴丸は、自分の口から「似ている」といわなくとも、その「三日月」と呼ぶ声が、如実に亡き父を求めていることがわかった。

そう、鶴丸は実父を——三日月を求めているのだ。

それに気付いたのは高校3年。県外の大学に進学を考えてそれを相談した折、思いの外反対を受けたときだ。学費の問題はないはず

だ。鶴丸は「鶴丸国永」の筆名で遊んで暮らせるほど稼いでいる。私を私大の医学部に通わせても問題ないほどに金はあるはずだった。

しかし、鶴丸は拒んだ。テーブルを挟んで相談する私の腕を、鶴丸は掴んだ。その声は切羽詰まっていたと、今でも思い出せる。

「君は」

声が、震えていた。

「君は、どこにも行かないでくれ」

それで、得心した。だから、それを口にした。

「養父さん。私は、三条三日月ではない。貴男の養女の五条■■■だ。貴男は私に何を求めているのだ」

そのときの、鶴丸の絶望した顔を、私は一生忘れないだろう。

このあとから語られた話を、私は今でも信じているとかといわれれば嘘になる。ただ、鶴丸は真剣だった。

「前世というものを知っているか。俺と三日月、それに君のお母さんも前世で会っていた。それだけではない。君のお母さんは……謂わば前線の指揮官。俺と三日月は同僚だった。他にもたくさん同僚がいたが、俺にとって三日月は特別だった。

指揮官といっても、普段は暢気なものでな。色恋沙汰も発展した。君のお母さん以外は男所帯だったから、まあ、所謂衆道も流行った訳だ」

言葉を切った。肘を突いて組んだ手に顔を埋める。白い頭の天辺が見えた。それを無心に眺めていると、鶴丸は言った。

「俺も、三日月が好きだった。けど三日月は、主が好きだった。主も、三日月が好きだった。まあ、横恋慕だったな。そして俺は、そんな2人の仲を裂くことはできなかった。そんな折りだった。敵の襲撃を受けて、主も三日月も死んでしまった。俺は言葉もなかった。……その後、新しい主が来て、その戦いは終結した。俺たちは生まれ変わることになった。できれば三日月の傍に生まれたいと願った。願いは叶った。だが、出逢ったときには、三日月はもう、同じように生まれ変わった主と付き合っていた。……前世からの因縁っていうのは恐ろしいな。俺は結局、また何も言えないまま、三日月と嘗ての主が結

婚するのを見届けた。これも運命なんだろう……そう思って諦めていた。

君のお母さんが死んだときは、正直チャンスだと思った。折に触れるごとに俺は君のお父さんに接触した。君は知らないことだろうがな。けれど、君のお父さんにどうにもできないまま、唐突に彼は死んでしまった」

鶴丸は顔を上げた。金色の双眸が、虚ろに細められる。

「残された君を見て、手に入れなければと思った」

「――」

「性的な意味も恋愛の意味でもない。ただ、君を手元に置かなければと思った。あれ程恋い慕った、けれど叶うことのなかった三日月への想いを、君を手元に置くことで昇華できると思った」

「……」

「でも、想いは加速するばかりだった」

手が伸ばされる。私は無抵抗だった。私の手を、鶴丸は握った。見た目は変わらないが、その手は10才のあの日、幼い私の手を握ったものより細く感じた。握り返すと、その手は冷たかった。

鶴丸は片手で自らの目を覆った。

「君が成長するごとに、三日月の面影を見てしまう。君は女で、まして主に似ている。それはわかっていのに、この目が勝手に三日月の面影を求めてしまう。そうしてほっとすると同時に、三日月はこの世のどこにもいない事実打ちのめされる。それを、この8年、繰り返してきた……苦しいことの連続だったはずなのに、それでも君を手放したくないんだ」

鶴丸が、深く、息を吐いた。

「傍にいてくれないか」

それは、ともすれば熱烈な愛の言葉だったかも知れない。けれど、私にはわかってしまった。

これは、助けを求める声だ。

それをわかっていて、私は、断罪の言葉を告げた。

「すまない。私は外に出たいんだ」

鶴丸が息を飲む音がする。彼は、私の手を握った。それに縋るように、額をこすりつける。その姿はか細く、この人はこうしてひとりであがり泣いていたのかと思った。だが、外に出たいという欲求は自分の中で強く、恩知らずと知りながらもこの人を突き放す言葉しか出せなかったのだ。

その鶴丸が死んだのは、私が大学を出て、亡き実父の事業を継いでしばらく経った頃のことだ。寒い冬の日。心臓発作だった。

あの日のことがなかったように、次の日からは私が県外の大学に進むことを賛成してくれた鶴丸。名前を呼び間違えることのなくなつた鶴丸。しかしその頃からその背中が日増しに痩せていつて見えた。それでも鶴丸は笑ってくれたから、私は見ないふりをして、家を出た。大学に進み、夏と冬には帰省した。鶴丸は笑っていた。

鶴丸の葬儀には参列者が多く、養父の死を嘆くよりも喪主としての仕事の方が忙しかったぐらいだった。

遺影の養父は、やはり笑っていた。遺影を選ぶとき、笑った写真しかなかったのだ。

あの人泣いたのを見たのは、18才のあの日だけだった。遺骨は養父の髪のように白く、骨壺は重かった。

鶴丸が死んで、今日で6年になる。継いだ実父の事業も安定し、穏やかな日々が続いている。そんな中でも、養父のあの日の告白を思い出す。

ひよつとしたら、前世というのは養父の妄想で、単に実父との関係に理由をつけたったのかも知れない。それでも、養父のあの涙は本物だった。

養父は、あの世で実父に会えただろうか。それとも、また転生とやらを繰り返しているだろうか。いまだこの世に縛られている身としては、それは想像するしかできなかった。

了

〔男審神者×によたんばR―18〕 靈力を安定供給するため政府に出された指示とは（エロ小説導入）

置行灯が、薄明るく部屋を照らす。障子に、蒲団の上に座った自分たちの影が差した。俺はいつもの和装。国広は布や装備や上着を脱いだ、ミニスカートに水色のベスト、白いシャツ、ネクタイだ。その姿は無防備だった。喉を鳴らして、俺は国広の肩を掴んだ。国広も、どこか緊張した面持ちで俺を見つめる。橙色の灯りの中でも、翡翠の双眸は美しかった。

「国広、いいか」

俺が尋ねると、国広は数瞬のちに首肯した。それを見てから、俺は国広の唇を唇で塞いだ。甘い感触だった。肩から手を外し、抱き締めて、背骨をゆっくりとなぞり上げる。

「んう」

国広の口から吐息が漏れた。俺はそれを唇で感じながら、彼の――否、彼女の唇を食った。

この本丸に顕現した山姥切国広は女体だった。当初は問題ないと思われていたが、ある日突然意識を失って倒れた。本丸だったからよかったが、戦場でまた同じことが起きたら堪らない。政府の検査結果は直ぐに出た。

『本来男体として顕現するはずの刀剣男士が女体として顕現したことによる、靈力伝達障害』

そう長つたらしい病名を言われ、治療法はあるのかと尋ねた。そうしたら、ひと言。

『審神者と性交渉すれば治ります』

そういうわけで、今、こうして自分は国広の体に触れている。勿論他の解決策も提示されたが、1番身体的ダメージが少ない方法がこれだった。血液を与える手段もあったが、長期的に血を与え続けるのは審神者の体が保たない。そういうわけで、この手段が採られることになった。

深刻な顔で告げる検査官。呆けていた国広。それを耳にしながら、ああ、そうだ、白状しよう。

(よっつっつっつっつしゃ!!!)

この日を待っていた!!!

この男所帯の中の唯一の目の保養だった刀剣女士・山姥切国広。仮にも最前線のためデリヘルも呼べないし刀剣男士のように花街遠征があるわけでもない。女審神者は見目良い刀剣男士に夢中だし、さりとして自分は衆道には端から興味がなかった。ゆえに、着任してほんの数ヶ月だが、既に限界が来ていた。その矢先の神のお告げだった。どの神様かはわからないが、まさか大国主命ではあるまい。恐れ多すぎる。閑話休題、俺は検査官に尋ねた。俺にとっては1番大事なことだ。

「霊力供給ということは、つまり、ゴムはなしのナマってことですよね」

「そうなりますね」

「ごむ?」

首を傾げる国広。何も知らなそうな彼女に良心は痛んだが、それ以上自身はよからぬ期待で胸が膨らんでいた……。

そして今、深い口付けから口を離すと、国広はほう……と蕩けた様子で、無意識にか唇に手を添えている。再び唇を貪りたい気持ちに駆られたが、それよりも目についたのは、こうして上着や装備を外してみるとよくわかる、乳房の大きさだ。左手で、右の乳房をそつと握る。国広の体が揺れた。同時に気付いた。恐る恐る尋ねる。

「国広……お前、ブラジャーはどうした」

「ぶらじゃーとはなんだ」

「……両手を挙げる」

「えっ。わっ」

そのひと言で、事態を察した自身は国広に両手を万歳させるとベストを脱がせた。それを適当に放って視線を戻すと、ごくりと喉を鳴らした。

男の手にも余りそうな、豊かな乳房。それに、ふつくらとした恐ら

く陥没乳首が白いシャツを押し上げていた。

これには堪らない。手を伸ばした。

「なに——ひゃっ、あ」

シャツの上から両手で乳房を鷲掴みにする。やや乱暴だという自覚はあったが、この乳房を前にして冷静さは保てない。何度ももみしだき、上下左右に形を変える。そして、乳首の先端をかりっ……と引っ搔いた。

「ひゃんっv」

声が上がった。顔を上げるとさつと国広は口を押さえていた。しかし自身はそれでも気をよくした。よくして、乳首をかりかりとこすり続ける。「あ、あ」と国広は口を押さえたまま小さく喘ぎ続けた。

辛抱堪らなくなったのはこちらだった。ネクタイを避け、ボタンを外していく。「あ、待て」と国広から制止がかかったが待つていられるものか。全てのボタンを外すと、バツとシャツを開いた。

そこには大きく形の良い乳房と、桜色の乳輪と乳首が待ち構えていた。

その乳首は、自身にとってあまりに好みすぎた。ふつくらとした乳輪に乗っかる乳首——まだ陥没気味のそれらは、自身にとって情欲をそそるものでしかなくて。

「あつやだ、やめろおつv」

国広の声がうわずるのが聞こえる。それに構わず、自身は左乳房に吸い付いた。

柔らかく、少し唇を窄めると沈み込む乳。赤ん坊に還った気分で柔らかい乳輪に吸い付いては舐り続ける。その間に右乳房を左手で引っ搔いたり強く摘んだり撫でたり、時には指先で弾いたりした。その度に「あつあつ、あんっv」と声上がる。堪らない。

更にその間にも空いた右手で背中や腰、尻、太股を撫でる。指でなぞるようにすると、「あ、あ」とこちらの服を摘んでくるようになった。何かに縋っていないと、芯が崩れ落ちそうらしい——自身は思わずほくそ笑みながら、ちゅぽんと乳房から口を離す。それは唐突だったので、顔を上げたとき、国広が物足りなそうな顔をしているのを、自身

は確かに見た。それに笑いながら、スカートの裾から手を入れる。再びびくりと体が揺れた。だが構わずにショーツを降ろす。

乳房を、主に乳首を弄っていただけだ。それなのに国広のショーツは濡れていた。思わず呟く。

「もうこんなに濡れて……いやらしいやつだな」

「い、いやらしくなんかないっ……」

抵抗を試みたらしい国広は、しかし顔を赤くしている。それを眺めながら、自身は脱がしたショーツを放ると、スカートを捲り上げた。

そこには陰毛に覆われた国広の秘部があった。髪と同じ金色だから、覆われていてもすぐわかる。国広に膝を立てて脚を開かせると、陰部から漏れ出た愛液がショーツに染みを作っていた。それを眺めて、国広を押し倒すと——自身は国広の股ぐらに顔を突っ込んだ。

国広は仰天した。

「なっ何する、あっっ」

俺は国広の陰部を舐めた。大陰唇を、それを広げてクリトリスを。クリトリスは包皮を剥がして吸い取った。その瞬間国広は1番甲高い声で悲鳴を上げた。その反応が堪らず、執拗に舐る、吸い取る。そうすると自身の体を挟んでいる国広の両脚がびくびくと跳ねた。

「やつやだあ、あんっっ音立てるなあっっ」

そう言われて、自身は益々水音を鳴らした。愛液に自身の唾液が混ざる。ぴちやぴちや、ぐちゅぐちゅ、淫らな音が鳴る。再びクリトリスを舐め上げた。そして包皮を剥き、先程よりもずっと強い力で吸い取った。国広の体が一層強く跳ねる。

「あっあっあーっっvvvvvv……あ、ああ……」

どうやら気を遣ったらしい。小さく痙攣しながら、国広の呆けたような声上がる。陰部から口を離れた自身は、口を拭うと和服の下を開いた。下履きの窓から、俺自身を取り出す。国広の淫らな様を見せられて既に臨戦態勢だ。静かになった俺に気付いたらしい、国広が顔を上げ——俺が魔羅を取り出しているのを見て、ぎよっとした様子で身動きする。

「ちよ、ちよっと待て主、まだ早い」

「これだけ濡れてれば大丈夫だ」

「そ、そういう問題じゃ——駄目、駄目……あつvそこだめつvちくびだめつv」

そそり立った自身は先走りが滴っている。国広の両脚を抱えると、俺は腰を寄せた。そして再び乳首を舐る。びんびんに硬くなった乳首は舐めやすかった。癖になりそうだ。そう思いながら、俺は自身を国広の陰部に——突き立てた。

「あっ!!」

国広の声が今夜1番に高く上がった。俺は笑う。

「はは、国広のナカはきついな」

「あつ、あつ……やら、もつとゆつくりいっ……v」

「ん? こうか」

「あつあつv」

1度一挙に最奥まで突くと、抜ける1歩手前まで引き抜く。言われた通りに緩やかに突き進め、それを繰り返してピストンすると、国広の膣が僅かに俺自身を締めつけた。国広の声上がる。

「あつ、あつ、あんっあんっv」

「どうしたんだ国広、そんなに気持ちいいのか?」

「あつ違、あつあつv」

国広はまだぎりぎりの理性が残っているようだ。しかし、そろそろフィニッシュを迎えそうな自身としてはそれが気に掛かる——そしてふと思つて、上体を伏せた。ピストンする度に淫らに揺れていた乳房に口を寄せる。硬く尖った乳首を舐り——そして軽く歯を立てた。

「あつvvvvvvvv」

その瞬間、一際力強く最奥を突いた。国広の体が揺れ、声が上がった。

「あつ、あつあ——つvvvvvv」

俺は国広の最奥に、精を放った。

萎えた俺自身を引き抜く。俺は精力絶倫という訳ではない。この1回で充分だろう。そう思っていた。

しかし、国広の手が、俺の服を摘んだ。そして上気した顔で言う。

「なあ、もう1回……シないか？」

甘い声だった。

その瞬間、魔羅が再び立ち上がった。

「えっ、——あっ、主っ」

俺は国広の体に覆い被さった。国広の乳房に吸い付く。

「あっvやっ」

「お前が誘ったんだからな」

「あっvあっvあんっ」

国広の足を再び抱えた。

俺はこの日の夜、自身最高記録の精を放つことになる。

そして、この日から国広とは週6でスることになり、検査官に「そんなにシなくていいんですよ」といわれることになる。

了

【水磨R―18】花火

ここの本丸は、比較的火を怖がる者が少ないと聴いてはいた。その上、無類の祭り好きとして政府にも知られていた愛染国俊の以前からの再三の要望。それを受けての、「花火の景趣」が実装された。この景趣が設置されている間は、決まって夜8時から9時まで間断なく打ち上げ花火が上がる。季節は主に夏だ。どこの愛染も暦の上でも夏にこの景趣を設置することを要望した。祭りの季節に合わせたらしい。そういうわけで、昼は空調の効いた部屋で、夜は蒸し暑くとも花火が打ち上がるのを縁側から眺めているのが、ここ最近の本丸の刀剣男士や審神者の習慣だった。

尤も、それに熱を入れない刀剣男士もいる。縁側からでなくとも、窓から見ることできる。

水心子と清磨も、部屋で花火を見る派だった。尤も、それは最初だけのことだ。

「清磨」

「なんだい、水心子」

風呂上がり。互いは既に寝間着だ。まだ風呂上がりの汗がお互いの首にしつとりと浮かんでいる。その中で、蒲団の上。水心子は清磨の手首を掴み――じっと、見つめた。その瞳の奥には隠しきれない熱が籠もっていた。

それを見て、清磨は微笑んだ。掴まれていない方の手を、水心子に差し出す。

「おいで、水心子」

その言葉で、水心子は清磨の口を口で塞いだ。甘い味がした。

清磨の寝間着の上衣をはだける。つつ、とその腰のラインをなぞった。

「ふ……」

清磨の声漏れる。それは気持ちいいという証なのだろうか。わからないのでそのまま清磨の背中をなぞり続けた。ん、ん、と小さく声上がる。それを良いことに、水心子は清磨の寝間着の下をはだけ

た。下履きを脱がす。さらけ出されたのは清磨自身だ。それを喉を鳴らして見つめながら、清磨の乳首に吸い付く。

「あつ」

清磨の声が上がった。それにやや気をよくした水心子は、露出している清磨自身を手で扱きはじめた。最初は歯を食いしばっていた清磨だったが、先走りが漏れ出すにつれ小さく間断なく声を上げていく。「あ、もつと」

そういわれた途端、堪らなくなる。手の動きを速くすると、あ、あ、と清磨は体を震わせていく。

「清磨」

手で扱いたまま、耳元で囁く。その瞬間、清磨は果てた。

息切れをする清磨。下腹は白濁に塗れている。

「清磨……」

水心子は自身の行き場のない昂ぶりをぶつきたい。淫らな清磨の姿を見せつけられて、自身は既に限界だ。自身の下履きを脱ぐ水心子が避妊具をつけようとする手を、清磨がそつと手を添えて止めてくる。顔を上げると、彼は寝間着の前を完全に寛げ、裸体の前を晒した。そして手を後ろに回し、何かをしているようだった。それが後孔を寛げる様だと、すぐに了解できた。清磨は上気した顔で、水心子を見下ろした。

「水心子。もう、後ろの準備は済ませてきたから……ね。水心子の、すぐにに入れて欲しいな」

「――」

「あつ、水心子」

途端、水心子は清磨の体を押し倒した。止まらない。清磨の両脚を抱えると、怒張した水心子自身が、すぐに清磨の後孔を探し当て――挿入した。

「あつ――あつ、あつ！」

清磨が声を上げる。艶めいた声に、水心子の怒張は止まらない。ぐいぐいと何度も押しつけては、限界まで引き抜き、何度もピストンする。余裕などない。毎回こうだ。情けなくって涙が出そうになるが、

次に出て来る清磨の言葉と仕種で、全てがどうでもよくなる。

水心子に突き上げられる清磨。そんな彼は、胸元にまで来た水心子の頭を、そつと優しく撫でた。慈愛に満ちた声で囁く。

「よしよし、良い子良い子」

「~~~~~っ！」

「あつ、駄目だよ水心子、あつ、あつあつ」

子ども扱いされたことが悔しくて、それ以上に優しくされたのが嬉しくて、ごちや混ぜになる。だからいつも、こんなことをされると、ピストンを激しく突く。何度か突くと、清磨の甲高い声が上がリ——かくりと腰が落ちた。慌てて自身を引き抜くと、水心子は「大丈夫か」と声を掛ける。それに対し、清磨は顔を上げると——水心子の頭を撫でた。

「気持ちよかったよ。よしよし、良い子良い子」

「~~~~それはやめろと言っているだろう！」

「あ、ほら花火がまた上がった」

「話を聞け清磨！」

白濁を纏ったまま、寝間着は乱れたまま。それでも構わず、清磨は窓から花火を眺める。そして水心子は密かに決意した。

この余裕綽々といった様子の親友兼恋人に、いつか「良い子良い子」なんて言う余裕のないセックスをする。しかし専らの練習相手はこの年少の姐さん女房だったので、その道は遠かった。

了

【磨水R—18】 37度5分の恋

俗に刀剣風邪と呼ばれる流行病がある。それとは別に刀剣インフルエンザというものもあるが、どちらも人間が罹る風邪やインフルエンザと症状はほぼ変わらない。原因が菌やウイルスではなく歴史修正主義者の呪いであることが最大の違いだ。主に戦場で呪いをかけられた者が発症し、演練場で伝染する。練度が高い者ほど罹りにくいが、新入りは罹りやすい。

そういうわけで、比較的新参の清磨も罹患したのである。

(あゝゝ熱が中々下がりがりきらないな……)

私室で咳をしながら、清磨はぼんやりと天井を見上げていた。体力は落ちているが、既に眠気は消え失せている。拗らせたのか、もう1週間ほど床が上がらなかつた。そもそも、流行の時機を逸して罹ったのがいけなかつたのかも知れないと清磨は思う。少し前に流行ったときは、本丸中の刀剣が倒れ——水心子も倒れた——、数少ない無事な刀剣と共に看護に駆け回ったものだった。自分は大丈夫なのだと思っていたが、それは何の根拠もない自信だった。一時は39度まで熱が上がったものだ。それがようやく下がってきて、今朝測ったときは37度5分。それでもまだ起き上がるには辛いので、こうして横たわっている。

辛い。体の節々が痛いのも辛い。しかし、一番辛いことがある。

(もう1週間も水心子とやってない……)

さて、この本丸の清磨と水心子は恋仲である。この本丸に着任する前からの付き合いだ。清磨は外見に見合わずそれはそれは精力的で、週5で水心子と事に及んでいた。本当は毎日したい。その本音は偏に水心子に嫌われたくないので言っていなかった。閑話休題、なので、清磨は困っていた。週に5回事に及ぶ間柄の相手と、1週間もしてないのだ。熱が高かつた頃はそちらが辛かつたので性欲を忘れていたが、熱が下がってくると段々溜まってきた。何がとは言わない。いや言ってしまう。性欲が溜まっている。頭の熱にも草臥れていたが、下半身の火照りにも困っていた。

ああムラムラする。清麿がどちらの熱にも困っていた矢先だった。
「清麿、入るぞ」

愛しい恋人がやって来た。

障子を開いてきた水心子は内番着で、膳を持っていた。時刻の感覚を忘れていたが、恐らく今は昼時なのだろう。清麿がそう思いながら起き上がろうとすると、「ゆっくりでいい」と水心子は膳を蒲団の傍らに置いた。盆の上には土鍋が載っている。水心子が土鍋の蓋を開くと、それはうどんだった。ネギが刻まれ、蒲鉾が乗り、卵がぽつんとひとつ、落とされている。審神者が病弱のため病人食はそれなりにバラエティーに富む本丸だが、今回のものはシンプルだ。少々不思議に思っただけ目を瞬いていると、水心子が恥ずかしそうに言う。

「そろそろ本格的な病人食じゃなくてもいいかと思っただけ、私が作ってきた。……どうだろう、食べきれなくても構わな」

「完食する」

「く、喰い気味に言わなくても」

水心子が動揺する前で、清麿は箸を手取る。いただきます、と言って鍋に手を添える。うどんを啜った。そして笑う。

「美味しいよ、水心子」

「そうか。それならよかった」

ほっと胸をなで下ろす水心子。襟から見える微笑みが清麿も嬉しかった。

しかし、それはそれとして。清麿の頭をある思考が占めていた。

清麿はあつという間にうどんを食べ終えた。腹が膨れる。それを見て満足そうにした水心子は、土鍋の蓋を閉めて膳を持ち上げようとした。

その手首を掴んだのは清麿だ。

「どうした、清麿」

水心子は驚いてそちらを見遣る。何かあったのだろうか。風邪が悪化したのだろうか。そう思っただけで見遣ると――清麿の目に、熱を見た。それは病の熱ではない。もっと根源的な熱だ。しかし瞳の色はつきりしているのに、清麿は口籠もった。

「……その、水心子。悪いんだけど」
「何だ」

「……………その。シたい……………な」
「……………シたい？」

「シたい。」

清麿の言葉の意図を正確に察した水心子はカツと頬を熱くさせたが、それでも呆れが来る。

「お前……………まだ熱があるだろう」

「1週間もしてないんだよ。溜まるよ。すぐく溜まつてるよ。ねえ水心子、だめかな、すぐくシたい。だめかな……………」

半ば懇願する。清麿はしっかりと水心子の手首を握っていた。これは肯定か否定かをはっきりしないと放してくれないだろう、水心子はそう判断した。

判断して、その手を外した。

「とにかく膳を片付けてくるから、そういう話はあとにしてくれ」

「水心子……………」

清麿は子犬の目をしていた。子犬にしては、獯猛さが隠し切れてない目の色をしていたが。水心子は溜息を吐いた。膳を持ち上げ、障子の前に置いて、障子を開く。そして膳を縁側に置き、立ち上がって――振り返った。

「またあとでな」

障子が閉まった。

置いて行かれた清麿は、半ば呆然としながらも蒲団に戻る。

（またあとでな、つてことはどっちだろう……………夜はいつも通り同じ部屋で寝てるからただまた戻ってくるという意味なのか、そっちを期待して良いのか……………）

熱にやられていた思考は、最早ピンクで染まっている。

時計の針の音が無限に感じられた。熱は微かなまま下がらない。

このまままた眠ってしまおうか……………数十分と経った先、不意に障子が開いた。顔を上げる。

水心子が、そこにいた。

水心子の向こうはまだ明るい。寝るにしても事に及ぶにしても時間はまだ早いのではないか。そう思っていると、障子を閉じた水心子は、つかつかと歩み寄ってきた。蒲団の傍らに座る。

そして、清麿に覆い被さり、彼の顔を手で挟み——口付けてきた。

「!?」

「……………ふっ……………」

緩んでいた清麿の口に、水心子の舌が容易く侵入してくる。それに無意識に呼応して舌を絡めた。水心子の息が漏れる。唾液の混ざり合う音が耳朶に響く。やがて水心子は口を離した。間近で見るとわかる。その頬が赤らんでいるのを。垂れた唾液を男らしく拭った水心子は言った。

「欲求不満だったのがお前だけだと思ふな」

「——水心子、それは、あつ」

水心子は体を離れたかと思うと、右手を蒲団の中に滑らせた。そして素早く清麿の寝間着の下の前を寛げ、下穿きに触れる。ボクサーパンツ越しに触れる手が、自身の熱よりも高く感じた。

その手が、下穿きの中に滑り込む。

「水心子、っ」

「……………溜まっているというなら、1回抜いた方がいいだろう。ほら、任せろ」

「……………っ」

水心子のそれなりに堅い掌が、清麿自身を包む。緩く緩く上下する。1週間触れられていなかった部分が体温で包まれ、擦られ、清麿は思わず自分の口を押さえる。普段はしてくれないことをしてくれていることが嬉しい。その事実もそうだったし、現在の行為により声が漏れそうになるのを抑えるためもあった。繰り返すが、まだ明るいのである。遠くから短刀男士たちの笑い声が響いてきた。そんな中で自分たちは淫らな行為に及んでいる。堪らなかった。

「……………っ……………」

「あ……………先走りが出て来た……………いつもより早いな……………?」

蒲団の中から微かな水音がする。水心子の手が上下する。時に緩

やかに、ときに速く。緩急をつけた動きは、精確に清磨の性感を刺激した。水心子に、水心子が、こんなことを覚えるなんて。自分の性感のツボを憶えるなんて。と、清磨は内心で辛抱できなくなる。散々関係を持っていておいて、今更ながら自分が己のヒーローを汚した気がした。しかしそれにも興奮してしまう自分がいて、清磨は自己嫌悪と興奮の狭間にいた。

「……そろそろ出そうか？」

そうこうしている間に、自身の限界を察したらしい。水心子が囁きかけてくる。口を塞いだまま肯いた。すると水心子は手の動きが速くなった。清磨は感じた。先走りで濡れそぼった水心子の手を。それをまざまざと想像して、清磨は唸った。

「っ、出る」

「わかった、手に出して」

「……っ！ あ」

びくびくと腰を震わせ、清磨は1度果てた。彼自身からびゆるびゆると精液が飛び出る。

水心子はそれを手で受け止めると、下穿きと蒲団の中からずりりと手を引っ張り出した。白濁に塗れた彼の右手。清磨はまだ熱に浮かされた頭でそれがひどく冒瀆的な様に見えた。

水心子はその手を舐めたことにはもっと驚いた。

「す、水心子」

「……苦い」

「それはそうだと思うよ、ほら、ティッシュで拭いて……——水心子!？」

「あまり大きな声を立てるな。気付かれる」

枕元に置いていたティッシュ箱を引き寄せようとした清磨だったが、その次の水心子の行動に仰天した。彼は掛け布団を剥ぐと、清磨の脚の間に蹲り、下穿きから精液塗れの手で清磨自身を取り出したのだ。清磨が見つめると、水心子の顔は先程見たときより赤らんでいるようだった。そして清磨自身に頬ずりする。滑らかな肌の感触が、萎えたばかりの清磨自身を力ませる。

「……次はこちらだ」

そういつて、水心子は清麿自身を口に含んだ。清麿の体がびくりと跳ねた。それは温かに濡れた感触に感じたからであり、そして何より水心子の常に行動のためだった。慌てて水心子の頭を押さえる。

「す、水心子、駄目だよ」

「じゃまをするな」

「あつ歯を立てないで、あつ」

水心子は清麿自身の亀頭を唇で触れると、喉にまで一気に飲み込む。えずくような声が聞こえて慌てて下を見たが、水心子は構わず同じ動作を繰り返した。かと思えば竿を舐め、精嚢を柔らかく口に含み唇で揉む。水心子の舌の動きに翻弄され、清麿自身はむくむくと持ち上がり、先走りが垂れた。それも舐め取られて、清麿は水心子の頭を押す手に力をこめてしまう。

「水心子っ……」

「……そろそろイクか？」

水心子が口を離すと、こぼれた清麿自身が腹にくつつきそうな程立ち上がる。普段のセックスではさほど気にならないのに、今はとても恥ずかしい。そう思っていると、水心子の体が離れた。見れば、水心子は内番着のズボンを脱いでいた。それと、パンツ。

水心子自身も持ち上がっていた。内番着の上着の縁に引つ掛かっている。そして彼は清麿の脚の間で膝と片手を突き、清麿の精液に塗れたままの手を、指を、彼自身の後孔に突き入れた。

「んっ……はあ」

「水心子、水心子、何をしてるんだい」

「待っている……さつき、いつも通り主の部屋の風呂で後ろを『準備』してきたから……あとは滑らせるだけ……」

さり気なく爆弾のような事実を投下され——確かにこの本丸には大浴場しかなくて個室の風呂は審神者の部屋にしかないがそんなことは知らなかった。ちよつと待たしかこの本丸には自分たち以外にも刀剣男士同士のカップルがいなかったか——動揺する清麿に構わず、水心子は跨ってきた。意図に気付いて、清麿は止める。

「水心子、待つて」

「……私の中に入れるぞ」

制止に構わず、水心子は清磨自身の亀頭を後孔に宛がい、滑りのままに——中に押し込んだ。

「あつ」

「んうっ」

一気に水心子の中に清磨自身が収まる。1週間ぶりのそこは常よりきつく感じられた。舐められて昂ぶっていたそれが、すぐにも暴発しそうになる。しかし、水心子は笑った。

「まだイくなよ」

「あつ、水心子っ」

根本まで水心子の中に収まっていた清磨自身が、亀頭まで引き抜かれる。そして再び収まった。その上下運動を水心子は繰り返す。清磨は耐えかねていた。精を放ちたい。水心子から漏れる吐息と「んう」や「あつ」などといった喘ぎ声もそれに加速をかけていた。

「んっあ、あつ」

「水心子っ……！ もう、出るっ……」

「……僕も」

漏れた一人称が、水心子の理性の瓦解を示していた。

水心子の腰の動きが加速する。清磨も腰を振った。何度かの蠕動。そして。

「あつあつ、あーっ……」

「水心子っ！」

水心子の中に清磨の精が放たれ、ほぼ同時に水心子の精が清磨の寝間着に散らばった。

清磨自身を後孔から引き抜いた水心子。清磨は起き上がりながら寝間着を脱いだ。適度な運動をして熱が下がった気がする。それに寝間着も洗わなければ。今は昼間だから風呂も人気がないだろうか——そう思いながら、水心子を見る。

水心子そのまま、蒲団からはみ出し畳の上に倒れた。清磨は再び仰天した。

「水心子!？」

「……大丈夫だ……少しふらついただけ……」

「ちよつと額触らせて——熱があるじゃないか! 休んで、つて先にこつちを片付けな」と

「……大丈夫……大丈夫……」

水心子は夢心地のように呟いていた。清磨は水心子の体をティッシュで拭ってやりながら、このあとどうしようとして少し途方に暮れるのだった。

なお、その後測つたら清磨と同じだった37度5分だった。

了

【磨水前提さに磨R—18】つきがきれいですね

満月の夜だ。

抱いて欲しい、そう言った声は、自分でも掠れていたと思う。しかし、主の耳にはしつかりと届いたらしい。蒲団の上に座りながら書物に落としていた目を、驚いたように瞠ってこちらに向けたから。それでも、僕は、寝間着の帯を解いた。潤滑液の瓶を片手に。

「準備はしてきたから」

前を開く。下穿きは穿いていなかった。

「抱いて欲しいんだ。何回でも。水心子のことを忘れさせて欲しい」

短い言葉だったと思う。それでもつつかえつつかえで、言い終えるのに1分を要した。前を開いたままの僕に、主は、息を吐いた。そして本を置く。

「俺が抱かれてもいいけど」

それは、同衾への合意。主の声は落ち着いていて、それに泣きたくなる。それでも涙は出なかった。あの日、あのときから、涙腺は動きを止めていた。泣けない。泣けないのだ。

あんなにも水心子のことを思い出すのに。

僕は笑った。きつと、下手くそな笑い方だったと思う。

「男を抱くと、水心子を思い出すから。だから、抱いて欲しいんだ」

「……わかった。おいで」

胡座を掻いた主が、両手を広げてくれる。ああ、はじめて会ったときはほんの少年だったのが、随分と大きくなった。背丈はさして変わらないが、体の厚みが増し、顔つきが大人びて、低い声に見合った外見になった。いつまで経っても少年のままの自分たちと違って、主は成長し、年を取っていくのだ。

自分たちは変わらないはずだった。それはこの本丸が終焉を迎えるまで。それなのに。

僕は主の膝に乗る。彼の肩に手を添えると、主は僕に口付けてきた。温かい感触が、かなしかった。

障子を開いたまま、僕たちは事に及んだ。

水心子は破壊された。1ヶ月前のことだ。

本丸が襲撃を受け、運悪く門の1番近くにいた水心子は応戦したが、多勢に無勢。他の者が——僕が駆けつけたときには、既に折れた刀だけが残っていた。

僕はその折れた破片を拾った。硬く、冷たい感触だった。握ると、痛みが走った。掌が切れていて、破片に血が付着した。ぼたり、地面に血が流れた。涙は、出なかった。

「んっ……」

蒲団の上に横たえられた体。乳首が舐られる。くすぐりたいように、微熱のような性感が伝わってくる。そして、主の手が、僕自身に添えられた。緩く上下し出す。審神者は基本的に戦わないが、刀剣男士に剣を教わり体を鍛えることがある。この審神者もその例で、彼の場合は病弱な体を鍛えるためだった。かくして10年、スポーツもやっていた彼の手はすっかり硬くなっていた。女のように柔らかくない。しかしその感触は、自身に熱を与えるのに充分だった。主の手はそれなりに大きく、僕自身を包み込む。緩急をつけて与えられる刺激に、声が漏れる。

「ふ、うっ……」

ぞくぞくと、背筋に快感が走る。成る程、これが抱かれるというところか。為すがままの体。与えられる快樂。身の内に燦るような感覚が生じ——呆気なく達した。恐らく今までで1番速かったと思う。あまりに速かったので、主は呆れていないだろうか。それよりも服が汚れていないだろうか。そう思いながら、体を起こそうとした。不意に、視界に空が入る。夜空。そこに浮かんだ白く丸い穴。

満月だ。

思い出した。1ヶ月前のあの日の前の晩も、こんな月夜だった。

「月がきれいだな」

あの夜は、酒を酌み交わしていた。寝間着で、縁側で。あまりに良い月夜だったから。交わしていたたわいない会話の中で、不意に水心子が呟いた。僕は何気なく肯いた。

「そうだね、きれいだね」

「……………あつ、違う、そういう意味じゃなくて」

「えっ？」

「あつわからなかったなら、その、いい……」

「……」

慌てふためいた様子の水心子を眺めて、ふと、自身は思い至った。成る程、と。僕は笑った。

「僕は死んでも良いよ」

「つよくない」

「……今の返事のつもりだったんだけどな」

「あ、うん。あ、でも……」

水心子は噛みつくぐらいの勢いで否定して、僕の続きの言葉を聞くと、肯いたあと、頭を振った。

不安そうな顔だった。

「たとえば、よくない。一緒に、月がきれいだと言ってくれ」

「……………そうだね、水心子。君が望むなら」

君が望むなら、僕は破壊されたって構わなかったんだ。

「大丈夫か」

不意に、声が降ってくる。見ると、主が、心配そうな顔をしてこちらを見ていた。僕の右足を抱えていたが、その手を止めていた。

「駄目なようならやめるけど」

「……………いい。大丈夫」

僕は頭を振った。想い出の中の水心子のように。

僕の目は、月を映した。

「ただ、今は月を見させて」

「……………わかった。続けるよ」

そう言われた途端、後孔に冷たいものが触れる。潤滑液だろう。後孔の周りでくると指が回る感触がする。「準備」をしてきたとはいえ慣れない感覚だ。やがてその指は、音を立てて僕の中に入った。

「んっ」

声が漏れる。潤滑液のお陰で滑りがよい。僕の中に入ってきた指

はほとんど未知の感覚だ。その指は慣れたように僕の中の良いところを見つけた。ぐ、とそこを圧される。背中がピンと伸びた。ぐりぐりとそこを圧されて、さらに指が2本、3本と滑り込んでくる。眩暈がしそうだったが、それでも僕の目は、月を映していた。

「……入れるよ」

「んうっ」

宣言と共に、僕の中に指よりももっと太いものが入って来た。体が仰け反る。左足を抱えられ、ゆっくりゆっくり、主のものが挿されては限界まで引っこ抜かれる。

ふと、僕自身にも手が触れたようだった。前立腺を刺激されて半分ほど屹立していたそれが、主の手で擦られてどんどん硬くなる。先走りが主の手を再び汚したようだった。後孔を突かれ、前を触られ、僕は喘いだ。

それでも、僕は月を見ていた。

「んっあっ、あっ」

「清磨……イくよ」

「あっ……うん、あっあっ」

快感が高まる。主のピストンが、僕自身に触れる手の動きが激しくなる。僕は敷布を握りしめながら、仰け反って絶頂した。

果てた僕の目に、月が映っていた。

「え、子どもが？」

「おめでとうございませす、3ヶ月ですネ」

主に抱かれる生活を3ヶ月か4ヶ月ほど過ごした頃だろうか。体調を崩した僕は手入れでも治らず、政府で検査を受けた。その結果が受胎告知だ。

主が避妊具をつけていなかったのは、はじめの日の夜だけだ。だから、あの月夜の晩に孕んだのだろう。ぼんやりと、医者や主の声を聴きながら、僕は自分の腹に手を添えた。

3ヶ月。ここにいるのは、どう足掻いても水心子との子ではないんだ。主に抱かれる日々を過ごしてかなしみは薄れた。けれど、喜びも

薄いようだった。

それが、腹の子に申し訳なかった。

目を開くと、そこに愛しい人がいた。

「清麿、起きたか。魘されていたぞ」

「……水心子？」

雀の鳴く声が聞こえる。遠くから刀剣男士たちの声も聞こえるようだった。蒲団の中にいた僕は、水心子に顔を覗き込まれていた。どうやら頬を軽く叩いていたらしい、水心子が僕の顔から手を引っ込めた。彼は優しく微笑んだ。

「悪い夢でも見ていたのか」

「……夢……夢だったのかな……——」

「つおい？ どうした」

起き上がり、水心子に抱きつく。途惑う水心子に構わず、彼の首筋に顔を埋めた。水心子のおいだ、水心子の体温だ、水心子の体の形だ。ぎゅっと抱き締めていると、水心子の手が恐る恐るといった様子で背中に回される。そして軽く叩かれた。

「そんなにひどい夢だったのか？」

尋ねられて、僕は思い返す。

「……優しい夢だったよ」

「それならなんで」

「優しくて、かなしい夢だったんだ」

そういって、僕はさらに力をこめて水心子を抱き締めた。蛙が轢かれたような声があったので力を緩めたが、それでもしばらくは水心子を放すことはできなかった。

僕らが朝食のことを思い出したのは、偶々らしく部屋の前を通り過ぎた主だった。主は、出会ったときと変わらない中学生ほどの外見をしていた。そもそも出会って1年も経っていないのだ。主があんな

に大きい訳がない。彼は「仲が良いのは良いけどご飯を食べてからにしたら？」と優しく笑った。あの夢の中の月のように。
夢だった。月の夢だった。

了

【水磨R―18】まだ姫始めちやいけません！

まだ酒豪連中は大広間で酒を飲んでいる。まだこの部屋に喧噪が僅かに届いてきていた。元日の夜である。

「あいつらは元気だな」

「はは、そうだね」

私室に戻って蒲団を敷く水心子と清磨は、既に寝間着だ。短刀男士たちと同じ頃に大広間から離脱した2振りは、風呂に入り部屋に戻ってきていたのだった。大晦日に取り替えたばかりの敷布はぱりつとされていて肌触りがよい。掛け布団を敷きながら、ふと水心子は尋ねた。

「そういえば、清磨。お前はいいのか」

「うん？」

「お前も酒が好きだろう。一緒に飲んでくればよかつたのに」

同様に掛け布団を敷いていた清磨は、水心子にそう言われて、ふと微笑んだ。その笑みに、艶を見出して水心子は僅かにたじろぐ。清磨は、蒲団の傍らにしゃがんでいた水心子の傍にそつと躡り寄ってきた。そして、彼の頬に手を添える。

「お酒もいいけどね。今夜は君に酔いたいな、水心子」

「そ、それってどういう」

「ふふ、わからせてあげるからこっちにおいで」

そういって、清磨は水心子を蒲団の上に引き倒す。そして、水心子に口付けをすると、彼の寝間着を脱がそうとして――

「だ、駄目だ！」

顔を手で突っ張られた。

まさかの制止に、清磨は途惑った声を出す。顔は突っ張られたままだ。

「ど、どうしたんだい水心子」

「知らないのか、ひ、姫始めは2日からだぞ！ 1日にしちやいけない！ 今はまだ1日の夜だ！」

そういわれて、清磨は突っ張られたまま、水心子の主張は納得した。

姫始めとは新年初の夫婦の交合を指す。水心子と清磨は男同士であり夫婦ではなくそもそも結婚もしていないが、まあざっくり言えば新年初の交合はだいたい皆姫始めと考えてもらいたい。水心子もそれを主張したらしい。清磨の顔をつっ張ったまま真っ赤な顔で言う水心子に、手を1本1本外した清磨は肯いた。

「成る程。確かに2日からだったね」

「そう、だから」

「だからあと1時間か2時間かな」

「えっ」

「挿入しなければいいんだろう」

そういつて、清磨は水心子を蒲団の上で抱き締めた。そして、その手が水心子の体を寝間着の上から滑る。

「んっ」

「……服の上からのペッティングだけなら、交合に入らないだろう」

「き、清磨」

「大丈夫」

清磨は、水心子の顔の間近で微笑んだ。いつも通りの優しい笑みだった。

「気持ちいいだけだから。声も我慢しないでいいよ」

そういつて、水心子の尻を撫でた。

「んっ」

水心子の腰に跨った清磨は、寝間着の裾の上から脚をなぞった。つつつ、と指が這う感覚がびくりと僅かに水心子の体を震わせる。何度か上下したのち、その手は水心子の脇腹を布の上から撫でた。以前はくすぐりたいだけの感覚だったが、今はそれだけで熱に変わる。水心子自身に集められる熱に。清磨の手で変えられた部分の何と多きことか——水心子が既に喘ぎはじめていると、その手は1番案じていた部分に触れられた。乳首の上だ。服の上から正確にそこに触れられた。びくりと体が跳ねる。

「ん、っ」

「ああ、ここかな」

「なんで、わかっ」

「僕が水心子に何回抱かれてると思う？ 数えてごらん」

「……憶えてない」

「それぐらいだよ」

「んつやめ、んんつ」

説明しておくが、彼らの着ている寝間着は冬向けの、比較的厚手のものだ。しかしそれでもとても厚いというわけではない。そういうわけで、清磨が水心子の寝間着越しに乳首へ与える刺激は、敏感にされてきたそれに十分な影響を与えた。かりかり、かりかり、爪で引つ掻く。

ふと片側の手が乳首から離れたが、その手は腰や尻、脚を何度も往復する。敏感になりはじめた体に、それは十分な刺激だった。乳首に、脚に、腰に、尻に——それが何度続いた頃か。ふと、清磨が破顔した。

「あは、水心子の、硬くなってる。僕のおしりに当たってるよ」

「……っ！」

羞恥でさらに顔を赤らめる水心子に、清磨は艶やかに笑いながら謳うように言う。

「嬉しいなあ、気持ちいいんだね。早く0時にならないかなあ、僕、ちゃんと後ろの準備をしてきたんだよ。元日だつてことを忘れててさ。早く君に抱かれないなあ、いっぱい入れて欲しいなあ……」

その間にも撫でる手は止めない。手を交互に入れ替え、過敏になっていく水心子の体は、清磨の下でびくびくと震えていった。

0時を告げる、時計の鐘が鳴る。それに、清磨は顔を上げた。彼の下でこの2時間弱体を震わせていた水心子は、すっかりぐったりとしていた。その代わりといわんばかりに彼自身は強く主張している。それなのにこのこと機嫌良く笑っている清磨は、一旦彼の体の上から退いた。戸棚へと向かう。中には潤滑液の瓶が入っていた。それを取って戻ってきた清磨。水心子の下の前を寛げようとして——その手を掴まれた。

「えっ」

「……いい加減に、しろ。清磨」

瓶を取り落とす。それは蒲団の上に落ちた。それに構わず、水心子は起き上がり、清磨を蒲団の上に引き倒した。先程と逆転した位置関係。水心子は素早く清磨の寝間着の下を開くと、彼の下穿きを脱がせた。清磨が止める暇もない。水心子は清磨の脚を開くと、潤滑液の瓶から中身を手に注いだ。そして、清磨の後孔にそれを宛がう。

「ひゃっ……冷たい……」

「我慢しろ。僕も2時間我慢したんだ」

水心子の声が低められていた。清磨が恐る恐る見ると——水心子は、普段見せないような、「雄」の顔をしていた。水心子自身も猛っているのがわかって——清磨は背筋を粟立たせた。それは歓喜によるものだった。

水心子は、清磨の中に潤滑液が充分滑り込んだことを確認するや否や、自分自身を下穿きから取り出す。それは2時間弱の清磨によるペッティングによりすっかり硬くそそり立っていた。それを見て、清磨は自ら両脚を大きく広げる。

「ん……水心子、来て」

「いわれずとも」

「——あつ、あつ……！」

水心子は、避妊具もつけずに清磨の中に自身を突き入れた。常の彼ならあり得ないことだった。傍に見当たらなかつたのもある。しかしいつもの彼ならば準備も怠らなかつたし、探したはずだった。それが、なんの余裕も遠慮もなく清磨の中に突き入れられる。清磨は薄い膜越しではない感触に、歓喜に震えた。びくびくと腰を震わせる。

水心子は何度も自身を抜き差しした。突き入れられる度に、清磨は何度も高く喘いだ。清磨自身も先走り垂れ、そして絶頂がもうすぐそこだった。清磨は喘ぎながら言う。

「水心子、すいしんし、イク、イっちゃう」

「僕もだっ……」

「ぎゅって、おしり、ぎゅってするから、水心子もイって……」

宣言通り、清磨は後孔を締める。その感覚に、水心子は堪らず後孔

の中で精を放った。最後に前立腺を掠ったことで、清麿自身も白濁を放った。

互いに息が荒い。水心子が自身を抜くと、清麿が「んう」と小さく喘ぐ。それに再び火が点きそうだと、水心子が思っていると、清麿は、とろりと溶けた目で言う。

「すいしんし、きもちよかった……？　僕はすつごいよかったよ……」

「——もう一回するぞ」

「えっ、水心子？　えっ、んっ」

途惑う清麿の口を口で塞ぐ。そして清麿の両脚を抱えたのだった。翌朝、寝不足で朝食の席で船を漕いでいる2振りの姿が見られた。

了

【さ】にちよもR—18【刺青にキス

余所の山鳥毛は、所謂すばだりという個体が多いらしい。そうでなくともヤクザ。審神者に好意は示してくれるが、それは飽くまで臣としてのものだという。

この本丸の山鳥毛といえは。

「小鳥、……今宵、閨を尋ねても良いだろうか」
これである。

縁側を歩いているときにすれ違いに囁かれることもあれば、書類を渡しに来たときに言われることもある。なんなら食事の席でも隣に座っているときに醤油を渡してくるときにもぼそつと話してくることもあるから気が抜けない。とにかく、山鳥毛は自身を閨に誘ってくる。

それを断ったことのない自分も自分なのだが。

ゲイとして生きてきて30年と少し。所謂クマ系、テディベア系と評される自分はゲイの1部の需要はあった。だが、刀剣男士たちの性的嗜好はどのようなだろうか。確かめたことはないからわからない。少なくとも、この山鳥毛は、割と最初から自身に誘いを掛けてきていた。どこで調べてきたのか、最初から後ろの準備を済ませて、どこで調達してきたのか潤滑液の瓶を持ってきて。おかげではじめての山鳥毛との性交渉も比較的スムーズに済んだし、山鳥毛も嬉しそうに満足していた様子だったから、それはよかったと思う。

しかし、気になった。他にも一般的な美形の刀剣男士もいる。なぜ自分なのだと——今宵、閨に迎えた山鳥毛に、自身は改まって尋ねた。いつもと様子が違う自身に警戒心が出たのか、「なんだね」と尋ね返してくる。

「なんで俺なんだ？」

「え？」

「はつきり言って俺はゲイ……男の同性愛者の1部界限にしか受けない見た目をしている。なのにお前は最初から俺のことを閨に誘ってきたよな。なにか遠慮していることでもあるのか、……山鳥毛？」

「……」

山鳥毛は寝間着のまま、顔を伏せる。そして顔を背けると、前髪を掻き上げた。薄暗い夜の中、山鳥毛の顔に赤みが差したのを俺は見ただ。

「……笑わないで聴いてくれるか」

「努力する」

「……………一目惚れだったんだ。悪いか」

「——それはそれは」

「あ」

立ったままだった山鳥毛の片手を引っ張る。そして胡座を掻いていた膝の上に、山鳥毛の体を乗せた。筋肉がある分それなりに重い。これぐらい自分の体重ならなんともない。そして間近に迫った山鳥毛の顎を引く。

「光栄の限りだよ」

「……………」

山鳥毛の腰を撫でる。口付ける唇から、山鳥毛の吐息が漏れた。

山鳥毛の寝間着が乱れる。ほとんど帯紐で引っ掛かっているだけの状態だ。

山鳥毛は自身の股座に跨ると、潤滑液で湿らせたそこが俺自身を受け入れる。騎乗位に近い体勢で、僅かに上体を起こしている自身の突き出した腹に、山鳥毛の立派な逸物が引っ掛かって、俺の腹を湿らせた。がくがくと体を揺らす山鳥毛は、ほとんど掠れた声で囁く。

「あつ……小鳥、小鳥」

「なんだ。ここがいいのか」

「うあつ」

慣れたもので、俺自身で山鳥毛の中を引っ掻く。山鳥毛はびくびくと体を震わせた。

しばらくそうしていたかと思うと、山鳥毛はゆっくりと腰を揺らし始める。後孔に俺自身を抜き差しした。直前まで引き抜いて、また深く突き入れさせる。その度に「う、ん」「あつ」などと声を上げる。掠れた声ははつきりいって耳の毒だ。忍耐して自分の腰を動かさな

いようにしたが、山鳥毛が自ら腰を振り喘ぎ声を小さく上げるものだから堪えがたい。

「うっ……小鳥」

「気持ちいいところは見つかったか？」

「もう少しっ……」

腰に手を添える。山鳥毛の腰の線は美しい。つつ、となぞる。「う」と山鳥毛は小さく唸った。それでも腰を振ることはやめない。

不意に、山鳥毛の腰が自身の股座にべたつとくつつき、彼の中を深く穿った。

「あっ……いー」

再び体がびくびくと震えた。山鳥毛の自身は硬くそそり立っている。この彼の逸物は、この本丸に顕現した以上誰にも使われることはないのだ。それを思うと、優越感や征服感といった感情も浮かぶ。そしてそれ以上に愛おしかった。堪らず抱き締める。俺の突き出た腹と山鳥毛の引き締まった腹の間に、山鳥毛のそれが挟まった。俺が腰を振ると、俺の肩を掴んだ山鳥毛が声を上げる。

「やめっ、こすれる、こすれるから、離してくれ、腰を振らないでくれ」

「嫌だ」

「あっ、あっ」

蒲団の上に引き倒す。山鳥毛の脚を抱えると、体をくつつけたまま俺は腰を振った。ピストンする度、山鳥毛の声が上がる。垂れた先走り俺の腹はもうびしょ濡れだった。

山鳥毛の中を深く挟む。

「山鳥毛、イクぞ」

「あっ……私もっ……」

ピストンする速度が上がる。何度も擦ると、山鳥毛の腰が震えた。後孔が強く引き締められ、俺は山鳥毛の中に精を放つ。それとほぼ同時に、山鳥毛の精が俺の腹の上に放たれた。

置行灯の薄明かりが灯る中、喘鳴にも似た息切れが部屋に響く。俺が山鳥毛の顔の刺青に唇を落とすと、彼は幸せそうに微笑んだ。

了

【水磨♀R―18】搾乳機（刀剣男士）

▼清磨 は のろいをうけた！

▼おんなのこになって ほにゆうが とまらなくなった！

「どういう呪いだよ!!!」

「主、主、落ち着いて!」

本丸の玄関前、事の次第を聴いた審神者はそう叫び、当の被害者である清磨に宥められた。他の刀剣男士のほとんどは彼ら――彼女たちを見つめている。

歴史修正主義者の呪い。時に相手を直接破壊や死に至らしめたり、時に真綿で首を絞めるような呪いをかけたり。様々だ。主流などころでは、敵の刀装を破壊したときに、破裂したそれから呪いが流れ出てくるというものだ。今回清磨が呪いにかかった経緯もそれらしいと、部隊長の加州が囁く。審神者が頭を抱える前で、清磨は困ったようにケープの下に手を入れていた。恐らく突然膨らんだ胸と、それから流れ出てくる母乳に困っているのだろう。ケープのために見えるいが、母乳が溢れて止まらなくなったと報告してきたということは服も湿っているに違いない。それを思うと、審神者は更に頭が痛くなる。自身が子どもを産んだのもう500年以上前で、そのときも子どもに乳をやったのは乳母だ。自分が乳をどうしていたかなど、もう記憶の彼方だ。悩む審神者の横で、加州が冷静に分析する。

「たぶん、女の子にして腕力をダウンさせて、さらに母乳を止まらなくさせることで集中力を欠かせて最終的に討ち取りやすくするための呪いじゃないかな」

「誰だよそんな回りくどい呪いを考えた奴は……責任者を出せ……」

「敵だね」

「敵か……ならしやうが……なくはない！ あーもう！ どうしろつてんだー!」

「ごめんね主」

「あんたは悪くないからいいの！ あーもう、とりあえずブラジャーかな……」

顎に手を添える審神者は、じつとケープ越しの清麿の胸を透視しようとする。できなかつた。しかし恐らく、自身の下着はサイズが合わない気がした。刀剣男士だから（今は女士だが）形が崩れる心配はないだろうが、要は母乳で湿る胸をどうにかしたいのだからサイズが合わないという意味がない。審神者は貧乳の自覚があつたので恐らく少なくとも清麿の方が大きいだろうと洞察していた。そうなる乳首が溢れてしまう。つまり母乳が溢れる。審神者は困ってしまった。思考が迷走しはじめた。

「うーん……いつそ搾乳機を注文した方が早いかな……？」

「主、その前に怪奇対策部に通報して呪いを解いてもらわないと」

「ああお願い。でもたぶん直ぐ死ぬ訳じゃないから緊急性が低いと判断されそうだな……あそこの解呪のプロいつも忙しいし……それまでどうしようか……やっぱ搾乳機……」

はたと、審神者は周囲を見渡す。怖々とした様子でこちらを遠巻きに見つめる刀剣男士たち。彼らの中にいないかと捜して——足音が聞こえた。慌ただしい音だった。

「我が主！ 清麿が呪いを受けたというのは本当か！」

水心子だ。確か今日は手合わせの内番を組ませていたので、そのためか木刀を片手に走ってきていた。向こうから対戦相手の桑名が追いかけてくる。人垣を越えて駆けつけてきた水心子は、審神者との間に割って入って、木刀を取り落として清麿の肩を掴んだ。

「清麿！ 体は大丈夫か！ どこか欠けたのか!? 腕も……脚も無事だな、どこを悪くしたんだ!?!」

「えーとね、水心子」

「水心子、丁度良いところに来た」

後ろから、水心子の肩を叩く審神者。彼が振り返ると、彼女はごく真面目な顔で告げた。

「あんたに任せた」

「えっ?」

「よかつたね、乳搾り体験ができるよ」

「えっちちしぼ……なんだって?」

「とにかく今日は今から清磨と2人きりで部屋に籠もるように。あと他の奴らは今日いっぱい彼らの部屋に近付かないように。あ、あと清磨は今日は私の部屋の風呂を使ってね。何時になってもいいから以上、解散」

「えっ? えっ?」

号令と共に、他の刀剣男士らと共に審神者は解散する。取り残された水心子と清磨——その中で、清磨は水心子に言った。

「水心子、お願いがあるんだ」

「えっ、なんだ?」

「……とりあえず、僕らの部屋に行こう」

水心子の手を肩から外させると、清磨は彼の手を握って引つ張る。水心子はその手がいつもより柔らかいことに気付いて、途惑った。何が起きたのだろうか。

何が生じたのかを知ったのは、部屋に戻ってからだ。ケープを捲り上げる清磨の、胸部の2つの膨らみにぎよっとする。

「お前っ、女性にっ……!?!」

「うん。なっっちゃった。それによく見て、湿ってるだろ」

まだ明るい、外からの障子越しの光。その中で、清磨が言うように胸部は濡れそぼっていた。それに目を瞠る水心子。彼に、清磨は恥ずかしそうに言う。

「そのね。母乳が止まらないんだ」

「ぼにゅう」

「だから、その……困ってるんだ。だから……水心子が吸ってくれないかな」

「僕がっ!?!」

動揺して素の一人称が出てしまう。そんな彼の前で、清磨はケープを脱いだ。ぱさり、畳に置かれるケープ。上衣も、前を開く。その下に、形の良い乳房が並んでいた。その小振りな乳首から流れた、てらとらとした母乳の跡が障子越しの薄明かりに照らされていた。前を開く清磨は、固まる水心子の前で恥ずかしそうに言う。

「その……恋刃の君にしか頼めないんだ。お願い……」

「恋刃」。そのひと言で、水心子は動き出した。

「ちよつと待っていていろ」

「えっ」

そういつて、水心子は自分のケープを脱ぐ。それを畳に置くと、手袋を脱いだ。それも放る。そしてずい、と清磨の前に迫った。清磨は見た。水心子の目が据わっているのを。それを見て背筋を震わせた。水心子の、欲望のスイッチが入った目だった。

「んっ……」

水心子の手が、右の乳房に触れる。それだけでピュツと母乳が出た。水心子が生唾を飲む。左の乳房に手を触れ——それに吸い付いた。

「んんっ」

小振りで丸い乳首に、水心子の舌が絡む。じゅっ、と強く吸った。水心子の口の中に甘酸っぱいミルクの味が広がる。それに目を瞠った水心子は、夢中になって吸い付いた。じゅっ、じゅっ、と音を立てる。左手は清磨の右乳房を握っており、ミルクが手から溢れている。それに気付いた水心子は、手を放して自らのそれを舐める。清磨はその姿を見てぞくりと身を震わせ、顔を赤らめた。それに構わず、水心子は今度は右の乳房に吸い付いた。じゅくじゅくと音を立てて吸う。時折乳首を舐られたり軽く歯を立てられたりして、その度に清磨は体を跳ねさせた。そして片方の乳房からミルクが溢れる度にそちらを吸うのを繰り返す。あまりに強く吸われるので、次第に太股の間を熱くさせた清磨は堪りかねて言う。

「水心子、そんなに強く吸っちゃやだあ」

「お前が止まらなくて困ると言っただらう」

「あ、やだ、ああっ、あっ、ああっ」

水心子は構わず、清磨のミルクを吸い出した。

——10分と経った頃か。ようやく清磨の乳の出が収まってきた。その頃にはすっかり蕩けきった顔と目をしていた清磨は、その事実には喜びを覚える。水心子の手から溢れるほどではなくなったことに気付いたのだ。それでもまだ乳首を吸う水心子を押し退けようとした。

「すいしんし、もうだいじょうぶだよ、きみのおかげで母乳の出も……
——ひゃうっ!？」

水心子の左手が、清磨のスラックス越しの秘部に触れた。ただでさえ熱くなっていたそこに、僅かながら刺激を与えられて、未知の感覚に声を上げてしまった。思わず口を押さえる清磨に、乳首から顔を上げた水心子は言った。その緑の目は、欲望に燃えていた。

「……こちらも女性になっているのだろう、清磨」

「あ、うん……」

「……入れさせてくれないか」

そう言っただけ水心子は再び秘部に触れる。その度に清磨の体は揺れた。どうしよう、という不安はあった。しかし——自分の欲望も抑えられない。それに、相手が水心子なら、とも思った。だから、清磨は微笑んだ。

「水心子が望むなら」

「……有難う」

そう答えるや否や、水心子は行動に出た。清磨の体を畳の上に押し倒す。そして清磨のスラックスの前を寛げると、下着ごと脱がせにかかると。清磨は下着が離れるとき糸を引く感覚がして顔を更に赤らめたが、水心子に構った様子はない。濡れきった清磨のそこを見ると、彼は自身の前を寛げた。すっかり屹立したそれは比較的に慣れたもののはずだが、今自身の体が女性になっている以上、受け止め方が違うように思われた。水心子は清磨の太股を抱えた。そして囁く。

「入れるぞ」

「あつ、——っ!!」

めりめりと、音を立てるようだった。女性としては真つ新たな体だった清磨のそこが、今、水心子自身を受け入れていく。男性の体るときに後孔で受け入れたときは違う感覚だった。正直に言えば、痛い。十分に濡れていたはずだが、それでも水心子を受け入れるには辛かった。それでも——清磨は嬉しかった。水心子を自分の中に受け入れられたことが。

「っ、水心子」

水心子は答えない。彼自身を最奥まで突くと、限界まで引き抜く。そして再び突き入れた。気のせいか、息が荒い。限りなく近い位置にある水心子の顔は真っ赤だった。水心子は自身を何度も突き入れる。浅く、深く。何度も、何度も。

「あ、水心子、すいしんしっ」

「清磨っ……」

絞り出すような声だった。それがかわいらしくて、つい彼の頭に手が伸びる。何度も撫でていると、水心子は唸るような声で言った。

「もう……イクぞ……」

「うん、来て、水心子。——あっ！」

ゆっくり、速く、速く、ゆっくり。そんな動きを繰り返し、悦楽の波が清磨に激しく押し寄せてくる。がくがくと揺さぶられ、乳が踊った。またミルクが溢れる。それを見た水心子は、また乳にむしやぶりついた。強く吸われ、清磨は一際声を高く上げる。

「やっ……すいしんし、どっちかにして、やあっ、あっあっ」

子宮を貫かれ、乳を吸われ、清磨の頭は混乱する。真っ新だった清磨の子宮はぐずぐずに解け、同時に中で水心子自身を締めつけた。性感が極限まで高まる。水心子が乳から口を離して言った。

「中に出すぞっ……」

「あ、あ、あーっ!!」

水心子が清磨の中を深く抉った。同時に、2人は果てた。

2人は息を荒げる。部屋の中に、2人の呼吸の音が響いていた。少し落ち着いた頃、清磨はふと気付く。

水心子が、清磨の中に入れっぱなしだ。

「あの、水心子……抜かないのかい」

「……」

清磨は起き上がろうとして、乳が揺れた。ミルクが畳に溢れた。それを見た水心子自身が、清磨の中で再び形を持ちはじめ。

「えっ」

「清磨」

「なに——んうっ」

清磨の乳房に水心子は吸い付いた。一頻りミルクを吸い終えた頃には水心子自身はすっかり硬くなっていた。驚いている清磨に、水心子は据わった目で言った。

「すまない。もうしばらく付き合ってくれ」

「えっ——あつ、やつ！」

再び引き抜かれた水心子自身が、清磨の中を突いた。

「申し訳ない」

——数時間後、すっかり草臥れきつた清磨の前で水心子は土下座していた。畳の上で転がる清磨に、水心子は額を畳に擦り付けながら言う。

「未知の感覚に夢中になってしまった。本当に申し訳ない」

「……いいよ、水心子。僕が母乳を吸って欲しいって言い出したことが切欠だしね……それよりお布団を出して欲しいかな……あと主の私室に連れて行って欲しい、お風呂入りたい……」

応える声も掠れている。水心子はすっかり恐縮しきり、とりあえずといわんばかりに押し入れを開けているのを、清磨はぼんやりと眺めた。母乳はすっかり出尽くし、しばらくは大丈夫そうだ。水心子は反省しているようだったが、乳首を吸われる感覚は当分忘れられそうにないな、と思った。

後日無事元の体に戻った清磨が、乳首を吸われる感覚に病み付きになり、水心子との閨事の度に「乳首を吸って欲しい」と強請り、膨らみはなくなったものの形の変わらない清磨の乳首に水心子が夢中で吸い付くようになったが、これは余談である。

了

【ちよもさに♂R-18】※どっちもイかないといけません

真っ白い四角い部屋。隅にはダブルベッド。机の上には小瓶がある。それらを一通り眺めた山鳥毛は、腕を組みながら真正面の扉を見た。鋼鉄製で、どう足掻いてもぶち破れそうにはない。

「このけったいな部屋はなんだね」

審神者は頭を掻いた。今日は非番を決め込むつもりで、いつもの狩衣ではなく着流し姿だった。

「あー、特定条件を満たさないと出られない部屋だね……俺何回目かなあ遭遇するの」

「バグか何かか」

「らしいよ、よくわかんないけど本丸に紛れ込むことがあるんだ。さて……俺の嫌な予感が当たったとすれば……」

2人が扉を眺めていると、その上に掲げられたプレートに文字が浮かぶ。左から右に、墨色の文字が……

「……『セックスしないと出られない部屋』。直球で来たな」

「……小鳥よ。その、つまりそういうことか」

気まずそうに見下ろしてくる山鳥毛に、審神者は溜息を吐く。

「そういうことだね。あー嫌だ嫌だ、前は3Pしないと出られない部屋でそのときは外から助けてもらえたけど、今回もそういう幸運に恵まれるとは思えないし。しょうがない、山鳥毛、ヤろう」

「そうか。それでは、小鳥。横になってくれ」

「山鳥毛が横になってよ」

「……」

「……」

見つめ合い、互いに黙る。それが数十秒ほど続いただろうか。じり、と間合いを取り合う。そして、突然互いに両腕を掴み合った。ベッド際で攻防した。

「まあ待ってよ山鳥毛、俺は男を抱くの慣れてるよ。そりゃ最近は

抱く方はご無沙汰だけどき、経験がある方に任せた方がいいよ」

「小鳥の意見には一分の理がある。しかし膂力が強い方が抱かれる方の喘ぐ力に対抗できるんじゃないか」

「本音を言いなよ山鳥毛」

審神者が睨むと、山鳥毛は言った。

「抱かれるのは嫌だ。抱きたい」

「俺もだよ！ あつくそ、寄り切るな、あつ」

審神者がベッドの前に来た途端、山鳥毛はそのタイミングを見計らって足払いをかけた。バランスを崩した審神者がベッドに沈み込む。無闇にスプリングの利いたベッドだ。ぎしぎしと音を鳴らすベッドの上で、2人は見つめ合う。しばし黙っていたが、山鳥毛は審神者の体をベッドに押し上げ、指ぬきグローブを外すと、それを放つて自らのネクタイを緩めた。押し倒されたままの審神者を見下ろして、微笑んだ。

「大丈夫だ、小鳥。できるだけ優しく抱くからな」

「嫌だって言ってるんじゃない！ くつそ、あ、帯を解くな！」

山鳥毛は、審神者の両手首をまとめて抑えた。空いた右手で審神者の着流しの帯を解く。そして、境目から素肌に触れた。びくりと審神者の体が揺れる。

「ちよっ……と」

「力を抜け、小鳥」

「んっ……」

する、と山鳥毛の手がゆつくりと審神者の体をなぞる。腹から、腰にかけて。着流しもはだけ、下穿きが露出する。恥ずかしそうに身を振る審神者に、山鳥毛は内心楽しくなってきた。着流しの中に突っ込んだ手で、浮いていた審神者の背骨をなぞった。体が跳ねる。過敏な反応に、山鳥毛はうつそりと微笑んだ。着流しの前を開き、鎖骨に唇を落とす。そして囁いた。

「……随分開発されているのだな」

「うるさっ……！ あ、やだ」

抵抗を再開しようとした審神者だったが、指で乳首をなぞられてそ

の気概が萎える。唇が宛がわれ、吸われる。審神者はびくびくと震えた。

「やつ、あつ、くくつ」

10秒ほど吸われたのち、唇が離れた。審神者は顔を背けながら息を荒げる。山鳥毛は、審神者の自身が下穿きの中で形を持ちはじめているのを見て、それから審神者の背けられた顔、普段は髪で隠れている耳を見た。真っ赤だ。それを見て悪戯心が起きる。腹や腰を撫でながら、そつと耳打ちした。

「気持ちいいのか、小鳥」

「んっ……………」

1番強い反応だった。抑えていた手が持ち上がろうとする。それを力尽くでねじ伏せながら、山鳥毛は、耳を啜えた。

「やつ……………」

身動きする。それをねじ伏せたまま、耳を甘噛みした。そして耳朶に舌をなぞらせると、声もなく——噛み殺している——審神者は震える。それに愉悦を感じながら、耳の孔に舌尖を突っ込んだ。舌尖を細く尖らせ、唾液で湿らせ、音を立てて蹂躪する。審神者は口をはくはくと開閉させていた。それを眺めていた山鳥毛は、ふと舌を離すと、耳に息を吹きかけた。

「耳が弱いんだな、小鳥」

「っ——あつ……………」

「ん？」

審神者の腰が揺れる。見ると、下穿きから主張していた審神者自身が萎えていた。そして下穿きが濡れている。それはつまり、と山鳥毛は言う。

「……………耳だけでイったのか」

「……………うう……………」

見下ろすと、審神者は哀れなほどに顔を真っ赤に染めている。唾液で湿った耳はぬらぬらと照らされていた。そして、山鳥毛は残酷な事実を告げる。

「小鳥よ、小鳥が達してしまっただのは事実だが……………私はまだイってい

ない」

「……………つまり」

審神者は一挙に青ざめた。

「まだ付き合ってもらうぞ」

「うえ、も、もうやだあ、恥ずかしい」

「恥ずかしいがり屋は私の専売特許だぞ。安心しろ、痛くはしないと」

「体は痛くなくても心は痛いよお、あ、ひゃ、やめ」

既に抵抗することは諦めたらしい、手首の拘束をやめても暴れることはなかった。脱力しきっていたのもあるようだ。そんなことを思いながら、山鳥毛は審神者の下穿きを脱がせた。先走りと精液に塗れている。それを放ると、ベッドの脇に置かれていた机の小瓶を手にとった。「潤滑液」とわかりやすくラベルが貼られているので、それを使わせてもらう。手にとつて滑らせて温めてから、審神者の後孔に宛がった。びくりと体が震える。

「ちよつと待つて、やだ」

「早く済ませたいだろう？ 大丈夫、ちゃんと慣らすから」

「そういう問題じゃ——あつ、あつ！」

充分湿らせた後孔、そこを山鳥毛の指が滑り込んだ——そして拡張を済ませると、置いてあった避妊具を装着する。審神者の裏腿を持ち上げると、後孔に山鳥毛自身を宛がった。震える審神者に、山鳥毛はできるだけ優しく微笑んだ。そうしたところで、それは猛禽類の笑みだった。

「大丈夫だ、充分慣らしたからな」

「あ、やだ、やだ、あ、——っ!!」

膝を抱えて、審神者の中に山鳥毛自身を挿入した。一挙に最奥を突いたそれは、ゆるゆると引き戻され、ゆつくりとまた最奥を突く。緩急をつけたその動きに、後孔で性感を覚えることに慣れてしまった審神者の体は、触れられずとも再びぐんぐんと形を成していった。山鳥毛自身がぐいぐいと前立腺を刺激することで、どんどん強張っていく。審神者自身。その度に後孔が締めつけられていく。締めつけることで審神者は更に性感を高めていき——最奥が強く強く抉られたとき、

審神者は仰け反った。

「あつ、あつ、あつ……—!!」

「くっ……—」

審神者の精が放たれ、ほぼ同時に山鳥毛も避妊具越しに審神者の中に精を放った。

どうやってもぶち破ることのできなかつた扉。そこから山鳥毛と審神者が出て来たのは1時間ほどのちのことだ。取り囲んでいた面子は驚いた。なんと、いつも腹の底を見せない審神者が泣きじやくつているのである。その肩には山鳥毛の上着がかけられていた。何とも気まずそうな山鳥毛。そんな彼らに突撃したのは、初期刀の加州であった。

「主、何があつたの。言つてごらん」

「さ、山鳥毛に」

泣きじやくりながら審神者は言った。

「ちよもに、耳イキされまくつた……嫌だつていったのにつ……」

「………すまん。楽しくなつて、つい」

審神者の乱れた髪。常は隠れている髪から覗いた耳は真っ赤に染まっていた。

了

【桑蜻】それ以上脱いではいけません！

なぜこの状況に至ったか。それは自身にもわからない。ただ、本丸の廊下を蜻蛉切と一緒に歩いていただけだ。自身は畑から収穫してきた野菜の入った籠を持って、蜻蛉切は厨の手伝いに。だから、入ったのは厨のはずだった。そう、厨に入った、という認識をした。

なのに、入った先は真っ白な空間だった。思わず呆ける自身より、素早く背後を見た蜻蛉切はさすが極と叫んだところだろう。しかし、扉はそんな蜻蛉切より早く閉まった。驚いたことに、扉は木造のはずだったが、入った空間から見ると鋼鉄製のものになっていて。野菜籠を持ったままの自身は、扉に飛びかかった蜻蛉切の後ろ姿を眺めつつ、扉の上にかかったテロップを見た。そして、そのまま音読する。

『野球拳（服を脱ぐ方）をしないと出られない部屋』

「は？」

「……と、あります」

「……………噂には聞いていたが……これは出られない部屋の類か……まさかこの本丸にもそんなバグが出るとは」

振り返った蜻蛉切は、自身と同様に電光掲示板を見上げながら、深い深い溜息を吐いた。自身はと言えば、訳がわかっていなかった。「出られない部屋」とはなんだろう。野菜籠を持ったままの自身に、蜻蛉切は嘆息しながら、説明してくれた。

曰く。時折、本丸や演練場、政府施設などに現れる部屋である。

曰く。バグであるらしい。

曰く。呈示された条件をクリアすれば出られる。

曰く。呈示される条件はそのときどきで違うらしい。

「最悪の条件で『どちらかを殺さないと出られない』というものもあつたらしいが……今回は、まあ、安全な方だな」

「でも、その……服を脱ぐ方の野球拳、とか言ってますけど」

野球拳というのは、座敷芸のひとつとして知っている。正確には本来の形から歪められて、ジャンケンで負けるごとに服を1枚脱いでいくというものだ。時折開催される飲み会が宴もたけなわになると行

わられることも多い。大抵皆が泥酔していて服を脱ぎ終えるまでに酔い潰れてしまうパターンが多いのだが——閑話休題、野球拳である。野菜籠を置いた自身は、「それで」と息を飲んだ。

「つまり、僕と蜻蛉切様が野球拳をして、どちらかが勝たないと出られないってことですか」

「まだ易しい条件でよかった。それでは、早速はじめようか」

そう蜻蛉切が言った瞬間、どこからともなく音楽が流れてくる。これは「野球拳」の音頭だ。野菜籠を足元に置いた自身は、作法は知らないながらも、やることはようはジャンケンであるということだけは理解していた。理解していたので、「よよいのよい」で拳を出した。

蜻蛉切はチョキだった。

自身は青ざめた。

「あ、あの、申し訳ありません蜻蛉切様っ……」

「何。これは勝負事だ。それに恐らく終わらせないと出られない部屋だろうし、どちらかが禪一丁になるまで出られないだろう。生命維持に関わるその前に決着をつけたい。それでは次だ」

言うや否や、蜻蛉切は足袋を脱ぐ。それを眺めながら、自身は嫌な予感に包まれていた。

「……蜻蛉切様」

「なんだ」

「ひよっとして、ジャンケンに弱いんですか」

「そのようだな。この5年で薄々察していたことだが」

そして今。自身は長靴とジャケツトと帽子をロスト。蜻蛉切は既に襦袢と禪一丁になっていた。自身としては罪悪感がひどい。ジャンケンはその時の運とあと動体視力が勝負だが、生憎と自身はそこまで動体視力に自信がない。よって、これは完全なる運である。ここまで運が悪いといっそ清々しい。だがこれも最後だろう——次も恐らく蜻蛉切が負けることを推察しながら、自身は音頭に合わせてジャンケンを繰り出した。

自身はパー、蜻蛉切はグー。

蜻蛉切は、黙って襦袢を脱いだ。禪一丁だ。恐らくこれで終わりだ

ろう——2振りともそう思いながら、蜻蛉切は襦袢を落とした。

何の反応もない。

え、と顔を上げる2振りの前。電光掲示板には注意書きが足されていた。それを自身は思わず読み上げる。

『裸になるまで終わりません』……だと……?』

「……仕方ない、桑名。続けるぞ。どうせここにいるのは俺たちだけだ、ジャンケンを続けよう」

その言葉に、自身はサツと青ざめる。そして、次の自分の取った行動に自分でも驚いた。

蜻蛉切の腕に縋り付いたのだ。

「駄目です、駄目ですよ蜻蛉切様」

「桑名?」

「裸であることが認識される、ということとは、俺たちの今の様子をどこかで誰かがモニターしているかも知れないってことでしょう」

自身は蜻蛉切を見つめた。前髪に切れ目が生じる。それに蜻蛉切が息を飲んだのがわかった。

「恋刃の痴態を他の誰にも見せたくありません」

その瞬間、扉が開いた。

「へっ」

ぷしゅー、と間の抜けた音がする。空気が抜けた音らしい。鋼鉄製の扉は大儀そうに観音開きになっていく。それをぼかんと見つめていた自分たち。口火を切ったのは蜻蛉切の方だった。彼は服を掻き集めながら言う。

「……あー、先程の桑名の言葉が、『裸のままの言葉』としてカウントされたのではない、か」

「え、ええー……は、恥ずかしいなあ……」

「お? なにこの部屋。こんなのがあったっけ」

「主、見るな」

幼い声が響く。まだ小学生ほどの年頃の審神者に、今の蜻蛉切の姿は少々刺激が強い気がしたので、桑名は咄嗟に彼を背中に庇ったのだった。背丈は足りなかったが。尤も、幼いために審神者は他の刀剣

男士たちと一緒に大浴場に入るのが常なのでそれは杞憂だったが。
こうして「脱衣野球拳脱出の部屋」は無事にクリアできたのだった。
なお、先程の桑名の発言ののち、蜻蛉切が夜に彼を招いたのは余談
である。

了

【山鳥毛十男審神者】第三夜

「私を見つけてくれ」

その壁の前で、そう囁かれると言う。

窓の向こうでは、落ち葉が散っていた。

(また学校に通うことになるとは思わなかったな)

彼はそう思いながら、静かな廊下を歩いていった。昼休み、恐らく本来賑わうはずの校舎は、奇妙なほど静まり返っている。彼は無理もない、と思いつつながら、食堂で手早く昼食を食べ終えたその足で目的の場所へと向かっていた。校舎の地図は、本丸で頭に叩き込んできた。――彼は審神者だった。10代後半、着任3年目。歴史修正主義者との戦いがはじまって数十年経つ中で、比較的新人だった。さて、審神者の仕事は本丸での戦線の指揮である。ましてや彼は学生審神者ではない、専任審神者だ。それがなぜこんなところ――学校にいるのか。理由は勿論あった。

創立200年、改築されて30年。まあまあ名門と言って良い寮付きのその高校に、怪異が起きた。それも、恐らく刀剣男士絡みというわけだから、政府としては放置できなかつた。

(「私を見つけてくれ」。そう囁く声……ね)

彼は訝しげに顔を顰める。

以前から噂はあったという。他愛ない七不思議の類だ。夜、あるいは黄昏時。校舎のある辺りを歩いていると、囁く声があるという。「私を見つけてくれ」。「私」という一人称からして女性を想定するが、実際に聴くとそれは男性の声だという。以前までは、ただそれだけの怪談だった。

異変が生じたのはこの年の春からだ。

人が消えた。

寮生の男子生徒で、行方不明が発覚したのはいなくなつた翌朝の出席確認のことだ。最後の目撃情報が、部活へ向かっていた女子生徒がその男子生徒がくだんの廊下近辺を歩いていたところを見たというもので、これは当初伏せられていた情報だった。

しかし、夏休み前までに合わせて7人の生徒が消えた。警察も介入したが、彼らは3人目と4人目と6人目の失踪のときに途惑った。戸惑いながらも捜査をしたが、梨の礫だった。いなくなった生徒の最後の目撃情報はいずれもくだんの廊下近辺。ここまで来ると、生徒の間にも箝口令が敷かれたはずの目撃者から情報が拡がる。そして符合するのだ。くだんの廊下は、あの怪談が囁かれていた場所だ。そして3人目と4人目と6人目の失踪者について、「最後の目撃者」から噂が拡がった。

『“私を見つけてくれ”、そう囁かれたときに一緒にいた友人が目の前から消えた』

捜索が続けられたが失踪者は見つからず、そして夏休みが明けてしばらく経った頃。8人目の失踪者が出た。このとき、事態は時の政府をも巻き込むことになる。

『“私を見つけてくれ”と言う声は、あれは刀剣男士の声だった』

8人目の失踪者と共にいたのは、政府でも高い地位に食い込むベテランの審神者のひとり息子だった。この春に入学したばかりの1年生である。霊力はあるが審神者の適性がなく、刀剣男士のことは知っていたがそれは父の本丸に遊びに行ったことがあったからだった。その息子（仮にAとしよう）が級友とくだんの廊下に赴いたのは偶々だったという。

そもそもその廊下はそこそこに人通りの多い場所だった。袋小路となつているが、進むと右手に階段へ通り抜けられ、左手にはトイレ。両側に窓があり、さらに進むと空き教室があった。Aとその級友がそこを通ったのは、何てことはない、小用を足すためだった。用自体は済んだものの、落ち着いた彼らはそこが失踪者が多数出ている場所だと思ひ出した。しかし彼らはあまり深刻に考えていなかった。何せまだ6時限目を終えた掃除の時間——黄昏には近いが、明るい時刻だったのもある。闇は人の思考力を過度に加速させるが、光は思考力を鈍らせもする。明るいから大丈夫だろう、そう安易に考えて彼らはそこで噂の真偽などについて語っていた。それがよくなかった。

「私を見つけてくれ」

そう、くつきりと声が聞こえた。それは級友もそうだったようだ
と、Aは証言している。顔を見合わせて、口の端を引き攣らせ——そ
して、消えたのは友人の方だった。

当然騒ぎになった。しかし騒がせたのは、Aの証言——刀剣男士の
声だった、というもの。警察は一連の事件が怪異によるものだとほぼ
断定していた。23世紀現在の日本で怪異に対する捜査部署は存在
するものの、刀剣男士、あるいはそれに類する怪異となれば話は別だ。
事態は政府に通達され——Aが父親に直訴したのもある——、調査員
を派遣することになった。

そこで、高校に潜入できるぐらいの年齢の審神者という中で、この
審神者が選出されたのだった。ただ、他にも同じ年頃の審神者はいく
らでもいる。その中で、なぜか彼が選ばれた。

(たぶん何が起きても誰からも文句が来ないからだろうけどな)

と、彼は冷めた考えだ。彼は詳細は省くが家庭環境に恵まれず、施
設で育ち、そのうち審神者適性を見出され中卒で審神者になった。学
費を稼いでから進学する、という考えは端からなかったから勉強も一
切していない。潜入調査ということ編入試験は免除されたものの、
彼が転入したクラスで受けた授業は彼には呪文のように思えた。こ
れは早々に解決しなければなるまい、彼は密かに意を決していた。だ
から連続失踪事件に萎縮し、半端な時期にやって来た余所者の編入生
を遠巻きにする同級生たちと無理に親しくして情報を入手するとい
う方策は放棄して、直接現場に赴きに来たのだった。

本丸にいた時点で捜査資料は読み込んでいた。結果として、今のと
ころ昼休みは失踪者は出ていない。なのでゆったりとした昼食の時
間を犠牲にして来た。この廊下近辺には本当に人気がない。元々人
通りの多かった廊下といえど、遠回りすれば避けられるところだ。こ
の辺りも生徒の掃除区域のはずだが、辿り着いてみると、何となく
埃っぽかった。彼は辺りを見渡す。

窓はあっても薄暗い。それを抜きにしても普通の廊下だった。廊
下の片端に置かれた、机の上の黒板消しクリーナーの姿が何ともわび
しい。まだ付喪神が憑くほどの年季は経ていなさそうだが、審神者の

力を以てすれば頑張れば妖怪化するかも知れない。戯れにそれに触れようとして、——聞こえた。

『私を見つけてくれ』

(——……)

確かにそれは、刀剣男士の声だった。聞き覚えがある。しかし、彼はそこで訝しく思った……。

「ふー……」

彼は寮に帰り着いた。その足で寮の食堂で夕食を摂り、部屋に戻る。基本的にこの寮は2人1部屋だが、「編入生」の彼の部屋はちょうど一部屋余っていたのでひとり部屋だ。尤も、たとえ余っていないくても無理にでもひとり部屋にされる手筈だった。理由は簡単だ。鍵を開けて部屋に入る。電灯を点けた。そして柏手を叩く。

『ただいま』

途端、部屋の中にノイズが走った。

そのノイズから、2人の青年が出て来た。

「お帰り主」

「学校生活はどうだった？」

燭台切光忠と大般若長光だ。

怪異に対して審神者ひとりだけを派遣してもほとんど何の利点もない。せいぜい多少オカルトに耐性があるというぐらいで、それなら警察の怪奇対策部署が担当すればいいだけだ。今回のように刀剣男士が絡んでいると思われる事件だからこそ審神者は派遣される。そして、審神者が派遣されることの利点——それは刀剣男士というオカルトへの武力を連れ出せることにあった。さらに今回は特例として、彼には通常予備役に付与される「鍵」を与えられていた。これはどこにいても刀剣男士を本丸から呼び出せる機能だ。ただ、学校という場所に潜入する以上、人前で彼らを呼び出すわけにはいかない。ベースキャンプが必要だった。そういうわけで、寮のひとり部屋がその役目を果たすことになった。

さて、このときの彼は丁度良い、と思った。「鍵」の当番はシフト制で、今回の捜査においては常時最低2振りは直ぐ出て来られるように

待機してもらっている。その中で燭台切と大般若が来たのは丁度良い、と思った。「彼」とは縁がある。

(まあ、大体の刀剣は濃かれ薄かれ縁があるものだが)

「授業は呪文のようだったよ。何を言っているのかさっぱりわからん」

「だろうねえ」

「君、戦の采配はできるのにな。それで例の現場の方はどうだった」

「それなんだけど、山鳥毛を呼んでくれるか」

「山鳥毛くんを？」

燭台切が隻眼を瞬かせた。大般若も意外そうだ。彼は肯いた。

「山鳥毛に用があるんだ。どっちでもいいから呼んできてくれないか」

「じゃあ俺が行ってこよう」

そういつてノイズが走り、姿が消える。残された燭台切は、自らの主に怪訝そうに問う。

「なんで山鳥毛くんを？ 今回の事件に関わりがあるのかい」

「多分な」

「多分って」

ノイズが走る。

「おおい、連れてきたよ」

「早かったな」

「小鳥、私に何か用か……？」

取るモノも取り敢えずという様子の山鳥毛が、大般若に引つ張ってこられた。どれだけ取り敢えずかと言うと、内番着に押っ取り刀という姿からして察して欲しい。戦闘着に着替える時間ぐらいは待てたのだが……と彼は思いながらも、折角来てくれたので、彼は山鳥毛の前に出た。途惑う彼と面突き合わせて、彼は頼んだ。

「山鳥毛。『私を見つけてくれ』と耳元で喋ってみてくれないか」

それに山鳥毛どころか山鳥毛の後ろに控えていた2振りも目を瞠ったが、彼は構わず続ける。

「それも『主を害するぞって脅されて現世に売られた挙げ句怪異に巻

き込まれてよく分からん場所に閉じ込められて誰にも知られないまま何十年も経過した心境』で頼む」

「難しい注文をつけるな……」

言いながらも、しばし考え込んだ様子の山鳥毛は、咳払いした。そして、言った。

「——私を、見つけてくれ」

それを聴いて、彼は肯いた。

「うん。これなら確かに、あの校舎の声は山鳥毛の声だ」

それを聴いて燭台切がじゃあ、と言う。

「よくわからないけど、じゃあ別個体の山鳥毛くんが……なんだっけ、売られて怪異に巻き込まれてどこかに閉じこめられて誰にも知られないまま何十年も経過しているってこと?」

「それはモノの例えだったが、多分かなり近い状況に置かれていると思う。問題はどこにいるかなんだが……そういうわけで、山鳥毛。俺についてきてくれないか。現場まで、霊体化して」

「今からか?」

山鳥毛は怪訝そうだ。

今回の潜入調査に当たり、予備役に付与されるもうひとつの機能を与えられている。それは刀剣男士の霊体化だ。本来なら昼間学校にいる間も近侍が霊体化して付き添うべきだったが、霊感の強い生徒には見えてしまうのでこうして寮の一室で姿を現させたのだ。

それが、今からついてこいという。秋だから夕暮れは早い。一連の事件を受けて部活の練習時間も短縮されているという。霊体化して付き添うということは、その人気のない校舎で、見た目はひとりで歩かせることになる。さらには、聴いた話では2人いればひとりが攫われるという。それを心配しての言葉だったが、彼は平然としたものだった。

「現場近くになったら実体化してもらおうよ。人目もないだろうしね。それに消えるのはひとりだけなんだ。2人居ても片方だけが連れていかれる。山鳥毛は刀剣だからノーカンドろ」

「その理屈はちよっとおかしくないかい」

「まあ主くんには考えがあるんだろうけど……それより、主くん。君にはまだ気になるところがあるんじゃないかい」

「……まあな。ただ……」

彼が顎を支えたところで、扉が叩かれた。慌てて3振りは霊体化する。明らかに高校生ではない彼らが部屋にいるとなれば騒ぎになるだろう。彼らが完全に霊体化したのを確認した彼は、扉を開いた。

そこには、一見見知らぬ少年が立っていた。15、6才といったところか。恐らく同じ1年生だ。彼が「どなたですか」と途惑っている、少年は言った。

「あの、Aです。あなたは調査に派遣されてきた審神者さん……なんですよ」

「ああ、あの息子さんの」

言われて思い出した。顔自体には見覚えはほぼないが、息子のAには調査が入ることは事前に伝えられていたはずだ。それを思い出しながら、さて、このAという少年は何をしに来たのだろうと思う。彼が首を傾げていると、「ついてきてもらえませんか」とAは言う。

「編入したばかりでは校内に不案内だったでしょう。俺が今から現場に案内します」

さて、このときの彼の顔は、山鳥毛からは見えなかった。しかし念話はできるはずだった。

『小鳥よ、なにか怪しくないか？ このままAについてくのは』

『とりあえず山鳥毛がついてきてくれればそれでいいから。あ、刀は忘れるなよ』

彼は取り合わない。ただ、警戒だけはしろという風に帯刀を促してくる。元より刀を手放すつもりはなかった。振り返ると室内で燭台切と大般若が不安そうにしている。その視線を背中に受けながら、彼は笑った。

「ええ、お願いします。まだクラスの人に馴染めなくて、ましてやあの事件現場のことは教えてもらえなくて」

「でしようね。校門が閉まる前までに見に行っちゃいましょう」

そういつて、Aは先に歩き出す。彼はデバイスをポケットに突っ込

むと、ただそれだけでAに付き従った。山鳥毛は室内の2振りに軽く手を上げながら、自らの主へとついていった。

秋の日はつるべ落とし。時刻はまださして遅くはなっていないが、校舎は充分暗かった。こういうときこそ校内を明るくしてどこもかしこも人目につきやすいようにするのが得策だと思うが、この学校はそういう発想には至らなかつたらしい。彼はどうにもその反応の鈍さが気に掛かったが、それより今はあの事件現場と、このAという少年についてだった。彼は校内を歩きながら、先導して歩くAに世間話のように話しかける。

「この学校も伝統ある感じですね」

「最後に改築したのは30年前らしいですからね。理事長が改築案に対して首を縦に振らないらしいですが」

「へえ、予算が足りないんですかね」

「そういうこともないはずなんですがね……」

沈黙が降りる。暗い廊下、人気のない校舎。校舎が古い分不気味だった。もし彼が審神者でなければもう少し怯えていたかも知れない。ましてや実際に失踪事件が起きているのだ。そして、自分たちは今将にその現場へと赴いている。

やがて、角を曲がる。現場に着いた。「ここです」とAが小さく言う。確かに、そこは彼が昼休みにやって来た場所だった。窓はあるが、既に暗い時間のため明かり取りとしては意味を成さない。薄暗い中彼がきよろきよろと見渡していると、背中を向けたままのAがぼりと呟いた。

「何としても、友人を連れ戻したい……」

それは本音だろう、と彼は思った。霊体化して一緒にいた山鳥毛も同じように思った。しかし、彼の口から出た言葉は、山鳥毛の予想を裏切っていた。

「ひとつお訊きしたい」

「なんです」

「なぜ、刀剣男士だと思ったんです？」

しん、と静まり返る。山鳥毛が凝視する中、彼は続けて言う。

「いくら本丸に行ったことがあるといっても、声を憶えておくのには限界があるでしょう。人は、声から忘れる生きものですから。なぜ、刀剣男士だと？ 審神者でもないあなたか？」

「それは」

「あるいは」

Aの答えを遮り、彼は言った。

『『そう言うように』『誰かに』言われたとか？』

さて、彼の考えはこうだった。Aはこの学校で起きている怪異に操作されているのでは？ 怪異となった刀剣男士たちに、政府に通報するよう暗示をかけたのでは？ そう考えていた。

しかし――

「信じますか？ あなたは」

宗教勧誘のような出だしで、Aは言った。Aは振り返らない。

「審神者だった前世の自分を殺した審神者が、自分の父親だという話を」

――

「死んでしまい、生まれ変わって、審神者適性を持たない今の自分は、前世の刀剣たちを取り戻せないもどかしさを」

――

「刀剣たちが主を求める声が聞こえますか」

――

「身代わりを求める声を」

――

『私を見つけてくれ』と嘆く声を」

Aは振り返った。その顔はよく見えなかった。

――そのAを覆うように、周辺から瘴気が溢れて来た。彼は叫んだ。

「山鳥毛！」

それに呼応して山鳥毛が姿を現す。薄暗い闇よりも濃い瘴気がAを覆おうとしていたのを斬り伏せる。しかし瘴気は構わず増大し、天井にまで満ちる。そしてそれらが主を襲おうとして――彼は、はつと

気付いたように怒鳴った。

「山鳥毛！ 突き当たりの壁を壊せ！」

山鳥毛は言われて、ようやく気付いた。

ここは袋小路の廊下だ。階段があり、トイレがあり、空き教室があり。そして、今気付いた。突き当たりの壁があるはずなのに、なぜかそれを認識できていなかった。

山鳥毛はAの横を刀で瘴気を切り開きながら突き進む。そして、渾身の力で壁を蹴り壊した。

途端、瘴気が消えた。Aがその場に頽れる。自分にまわりついてきた瘴気を振り払っていた彼は、倒れたAの元に駆け寄った。息があることを確認した彼は、壊した壁、その向こうを見つめたままの山鳥毛を見遣った。

「山鳥毛、何を見つけた？」

「小鳥、人を呼んでくれ。——まだ生きている人間がいる」

山鳥毛の目には、崩れた瓦礫。窓のない空間。複数の白骨化した遺体と、腐りかけた遺体、そしてまだ辛うじて生きている少年。彼らが囲う形で、複数の刀が置かれていた。その一番上に、「山鳥毛」があった。

結果として、露見したのは理事長の過去の連続殺人と死体遺棄、刀の不法買取。それに政府高官の審神者の過去の殺人事件及び刀の不法売買だった——後者はAの父親である。「殺した動機と刀を買った動機はまだ取調中だけど、とにかく死体と刀の隠し場所に困った当時一介の教師だったのちの理事長が、改築中だった校舎に隠した。死体はともかく折角買い取った刀を隠した理由はわからないが……結果として、ただでさえ殺された人間の被害者たちの怨念が渦巻いていたのに、そこに付喪神の宿った刀剣が閉じこめられて、怪異になった。……というわけかい」

「そういうことみたいだな」

学校生活は1週間と続かなかった。戻ってきた本丸にて、彼は大般若と話していた。彼の手元には調査任務の報酬についての書類がある。それを見て、彼は溜息を吐いた。

「俺のことは本当に捨て駒のつもりだったみたいだな。予め言われてた額より報酬が高い。詫びだなこりゃ」

「まあ想定はできてたな。しかし、なんだってこの春から急に人を攫いはじめたんだ。あの怪異は」

「たぶん、Aが入学してきたからだろうってのが捜査関係者の見解らしい。調査の結果、Aの前世が審神者だったってのは本当で、Aの魂と縁のあった刀剣が刺激されて活性化した……30年閉じこめられた結果、怪異は校舎全体に『根』を張っていたらしいからな。Aが前世の記憶を取り戻したのも入学してかららしいし」

彼は言う。嘆息しながら。

「けど誰が嘗ての主だったかはわからなかったみたいだな。たとえば言うなら目隠しされた状態だったというべきか……少しでも審神者適性のある奴がひとりいたら取り込んで、2人いたら、審神者適性の高い方を取り込んで連れて行った。それで俺は霊体化していたとはいえ刀剣男士を連れていたから確実に審神者だろうということと連れて行こうとした……それでも、目の前に生まれ変わった主がいたことに気付かなかつたのは、かなしいとしか言いようがないな」

「それにしても偶然なのか。自分が殺して刀剣を奪った審神者が生まれ変わって自分の息子になって、その息子が刀剣を売り払った相手の学校に入学したとは」

「運命の皮肉っていうやつだろうよ。……ただ、気付いてたんじゃないかな。父親は」

大般若の言葉に、彼は言う。ホログラムのモニターには、今回関わった事件について、過去の審神者の画像——Aの前世の写真があった。

「殺せるほどに油断させた。それ程近付いた人間と、息子のAはそっくりだ。取調でも静かなものらしいよ、父親の方は」

「罪の意識ってやつかね。ところで、回収された刀剣はどうなったんだい」

「怪異になってしまったからね。政府刀剣になるか、浄化して本霊に還されるか……Aには罪状はないし、生まれ変わった彼の刀剣男士に

なつてもらうのが1番よかつたんだろうけど、Aには審神者の適性は
ないから」

「……怪異に巻き込まれてしまって、主を求めた。それなのに報われ
なかつた。1番声の強かつただけに、気の毒だな。その山鳥毛は」
「呼んだか」

縁側から、山鳥毛が顔を覗かせる。山鳥毛の手には盆があり、それ
には湯飲みと茶菓子が載っていた。山鳥毛は彼の机にそれらを置き
ながら、「調査の話か」と尋ねてくる。彼は肯いた。

「もう俺らは関わりのないことだけだな。お前は本当にご苦労だつた
よ。Aの友人が辛うじて助かつたのはお前の功績だ」

「私は小鳥の命令に応じたただけだ」

そう言つて、盆を片手に山鳥毛は微笑んだ。

「何かあつたら、私を見つけてくれ。そうすれば応えられる」

山鳥毛の後ろで大般若が微笑んでいる。それを尻目に、彼は微笑ん
で「ああ」と応えた。

了

【鬼さに♀】もう、何も聞こえない

それは「仕事」帰りのことだ。自身は、何気なく、主の背中に声をかけた。正確には、頭髪のないそのつるりとした頭に。

「あんた、髪は伸ばさないのか」

「……伸ばして欲しいのか」

振り返る彼女——そう、彼「女」だ——の声は平板だ。まるで自身の言葉を意に介してない様子で。その左耳に赤いピアスが光っている。片耳だけのそれは、彼女によく似合っていた。それは頭髪がないからこそ際立っていたと言えるかも知れない。しかし、と自身は思うのだ。

「あんたは、はじめて逢ったときからずっとその坊主頭だからな」

「スキンヘッドと言ってくれ」

「同じだろう。……髪型を変える気はないのか」

「ないな」

言いきる声が強い。体ごと振り返った彼女は、腕組みをする。

「生まれたときからロングヘアを強いられてきたからな。スキンヘッドに慣れた今はもう髪があった頃には戻れん」

「しかし……神職の女は髪が長い方がいいんだろう。霊力を貯めるためにも」

「まあ、僧籍を取っているとはいえ、今は私は審神者だからそうするべきなんだろうが……特に霊力に不自由はしてないしな」

そう言つて、自身の向こう——たった今辞してきた「現場」を見遣る。まだゲートを潜り抜けていないので、ここはまだ「現場」の本丸だった。

そこには、死因不明の審神者の死体が転がっている。不明だった。彼女が来るまでは。

「お陰で、余計なものまで聞こえる」

そういつて、彼女はゲートへと歩き出した。

「聴耳」。彼女の耳が聴くのは生者の声だけではない、死者の声もだ。特に彼女は23世紀のイタコとも呼ばれるほどの才幹を持つ。

こうして、ブラック本丸などで死因・身元不明の死体が出ると彼女が呼ばれることが専らだった。その性質ゆえに物騒な事件に関わることも多い。以前は霊的違法薬物の事件に関わったこともあった——閑話休題。

ゲートを潜り、直接本丸に帰ってきた。いつもはすぐに来る出迎えが、今は忙しいのか誰も来ない。鳥が囀る。その中で、彼女は言った。「それに、この頭の方が耳を削いでもらいやすい」

その言葉の意味を、正確に理解したのは今。

「鬼丸！ 主は——」

「死んだ」

轟音が聞こえる。騒ぐ声が聞こえる。駆けつけてきた国広が叫ぶ。聴きたくもないものが聞こえる。聴きたいものは、聞こえなかった。主の声は、もう、聞こえない。彼女の首は掻き切られていた。敵短刀の残骸が、執務室の隅に転がっている。

本丸が襲撃に遭った——それに気付いたのは、本丸の結界が大きく揺らいだからだ。それは本丸の主たる審神者に何かが起きたことに他ならなかった。国広が自身に「主の様子を見てきてくれ」と頼んだとき、彼はゲートの方へと走り出していた。自身は走った。嫌な予感が首を擡げてきて、それを振り払いながら執務室に駆けつけた。

——執務室の障子は開けっ放しだった。そして駆け込んだとき、彼女は畳の上に倒れていた。敵短刀が襲ってきて、それを斬り捨てた。そして倒れている彼女を見て、首から血を流しているのを見て——自身は、あることを思い出した。

「……鬼丸？ 何をしているんだ」

「生前、主に言われていたことだ」

そう言っつて、刀を取り出す。主の懐から懐紙を頂戴し、刀身を握った。そして、彼女の耳を削ぐ。

「——何を」

「主に言われていたことだ」

止めようとしてきた国広に、自身は重ねて言った。その声が自分でも虚ろだと認識していた。

『聴耳は死んだときに耳を削ぐ。次は聴耳に生まれないように』と
『次の人生ってというのがあるとしたら、できればもう死人の声は聴きたくないな』

そう言っつて、彼女は振り返って笑んだ。寂しそうな笑みだったと、今でも思う。

『生きている人の声だけ聞こえる人生っていうものを、歩んでみたい。あんたの声も、きつと今も純粹には聞こえてないと思うから。……あんなの声が聴きたいな』

耳を削ぎきる。まだ、血が流れていた。左側の、ピアスが嵌った耳が重い。それは彼女の魂の重みを示しているようだった。手の中の耳から流れる血は、まだ温かい。掌から滴り落ちる血を眺めていた。国広は肩に手を置いてくる。

「鬼丸。俺たちにはまだやることがある。侵入してきた敵を殲滅することだ」

「……もう、意味はないんじゃないか」

力なく答える自身に、国広は言う。

「俺たちが落ちれば、政府はこの空間を丸ごと取り潰さないといけない。そうなれば、主の遺体を誰が吊ってくれる？ その耳を、別に埋めてくれる？」

「――」

「……刀を取れ、鬼丸国綱」

国広は刀を振った。

「吊い合戦だ」

「……ああ」

耳をそつと畳に置き、懐紙で手の血を拭い、本体を携える。

恐らく、これが最後の戦だ。たとえ敵を殲滅できても、政府に保護されても、自身はこの主以外に仕えまい。そう決めて、国広と共に駆けだした。

了

【さに磨前提水磨】 罪深いのは僕だけだというのに

拒否しようと思えばできたのだ。しなかったのは、僕の惰性だ。あれだけ、常日頃から「納得できないことはすべきではない」と言っていたのに。

その結果が、これだ。

「……あ、清磨……」

水心子が、震えている。刀を構えたまま、白い顔に返り血を浴びていた。普段なら返り血など浴びないようにきれいに斬るのに、今は動揺していたようだ。無理もない。僕のせいだ。僕は怠い体を叱咤しつつ立ち上がる。今夜もこの審神者だったものに無体をされていたから、腰がひどく痛む。しかし今はそれどころではない。体を動かすと後孔から、便所のように注がれた精液が垂れる。それに構わず、自身はそっと水心子に歩み寄った。水心子は一振りて遠征に出た帰りだと、記憶している。名目上は近侍として審神者の傍にいたからそれは把握していた。問題は、「いつ」帰ってくるかを、今夜に限ってきちんと把握していなかったことだ。律儀な水心子は、もし審神者が起きていたら報告をするつもりだったに違いない。いつもそうだったから。そこで、恐らく、部屋の前で聴いてしまったのだろう——僕の喘ぎ声を。

そして覗いた水心子は、見てしまったのだろう。僕の両手首を纏めて握り、腰を振る審神者の姿を。

僕は見た。水心子が迷いなく刀を抜くのを。そして、迷いなく審神者を斬りつけるのを。

……畳の上には、裸の遺骸が転がっている。審神者は声も立てることなく事切れた。蒲団も畳も血に塗れていた。解放された僕は、今こうして、水心子の前に立っている。審神者に剥ぎ取られた衣服も血に染まってしまったから、着るものはない。裸のままだった。その間抜けさを自覚しながらも、僕は、そっと、水心子の手を握った。

「落ち着いて、水心子」

「――」

「大丈夫だよ水心子、僕がいるよ」

何が大丈夫なのだろう。自身のせいで、水心子は、信頼していた審神者の実態を知ってしまった。僕に無体を働く審神者の浅ましい姿を見てしまった。ただ、それでも、それでも今は、水心子を宥めなかった。瞳孔を開いて、震える水心子。彼は、僕が声をかけると、ようやくこちらを見た。

「清麿」

声が震えきっていた。触れる手も、ひどく冷たかった。それを、温めたかった。

「水心子」

僕が再度名を呼ぶと、水心子は刀を取り落とした。そして膝を突く。水心子の旋毛が見えた。水心子がか細い声で言う。

「わがあるじ」

と。

俄に、嫉妬心が起きる。そう、これは嫉妬だった。何に対しての嫉妬なのかがわからない。ただ、それは、「親友」に対して抱いていいものではないものだというぐらいはわかった。だから、自分は別れを告げることにした。

これまでの、水心子の親友という立場に。

しやがみ込み、水心子に目線を合わせる。ゆるゆると顔を上げた水心子の襟を払げる。そして、口づけした。口の中には血は入ってなかったらしい。ただ、唾液の味がした。たぶん水心子には不快な味があっただろう。自身の口の中も精液に塗れていたから。

口を離すと、水心子が目を瞬いていた。そうしていると本当に幼い。僕は微笑んだ。

「愛してるよ、水心子」

水心子が目を瞞った。その顔の血を手で拭った。そして、僕は彼の手を握る。

「だから、一緒に逃げよう」

僕はこのとき、3度目の罪を犯した。

1度目は審神者に体の関係を強要されたとき、強く拒否しなかった

こと。

2 度目は水心子にこの関係を知られてしまったこと。

3 度目は、——水心子の自首の機会を奪うこと。

それでも僕は、後悔していなかった。

水心子は、僕の目を見て、審神者の死体を見て——再び刀を握った。血で曇ったままのそれを鞘に納める。

「わかった」

水心子の声は、まだ少しだけ震えていた。それでも、しっかりと芯は通っていた。

「共に逃げよう、清磨」

それでもこのときの清磨は正気ではなかったに違いない。落ち着いていれば、自分たちの状況を見ればなぜ水心子が審神者を殺したのが明白で。それで水心子には多少の罰を与えられるとしても刀解されることもなかったはずだ。

だからこれは、ただの駆け落ちだ。

——身を清め、身の回りのものをできるだけ少なく持って、僕たちは本丸の外に出た。当て所もない旅になるだろう。

「行こう、清磨」

ゲートの前で手を差し出してくる水心子に、僕は再び笑んだ。

罪深いのは僕だけだというのに、仄暗い喜びが僕を浮き立てた。そのまま、僕は水心子の手を取った。

夜明けが近い。恐らく審神者の生命反応が消えたことで政府から調査隊が来るだろう。その前に出られてよかったと、僕は思った。朝日を浴びながら。

了

【歴史修正主義者×女審神者R―18】 堕ちた先に

いつもの朝は、初期刀に起こされることはじまる。それが本丸に就任してから、ずっと続いていた慣習だった。

だから今、眼を覚ましたとき。自分の状況がすぐには理解できなかった。眼を覚まして真つ暗だったので。

「……!? もがっ」

後ろ手に縛られて猿轡も噛まされて転がされていることはわかる。それはわかるのだ。ただ、縛っているものの正体がわからない。手錠にしては温かいし、縄にしては粘っている気がする。そもそもなぜ縛られているのか。

『――』

声がある。それはがちやがちやとした、金属が触れ合うような音だったが、自身はなぜかそれを「声」と認識した。たとえるなら耳慣れない外国語。そしてそれにまたがちやがちやと声がして、少なくとも拘束されている自分の傍に、そんな不気味な言語で会話する者達が2人いることに気付いた。それに、このエンジン音、独特な匂い、顔に伝わってくるシート感触――車だ。自身は車で運ばれているらしい。今時は完全自動運転だから、免許を持ってない者でも乗ることはできる。そのため誘拐犯罪の温床になりがちとは聴いていたが、まさか自分がその被害に遭うとは――否、あり得る事態だ。自身は白刃隊を率いる審神者なのだから。自慢ではないが霊力が非常に豊富な家系に生まれた。それに眼をつけられたのかも知れない。

(眼をつける?)

自身の言葉に、自身で問う。

そう、眼をつけられた。霊力が豊富な自分が。なぜ? なぜそんな人間が攫われる?

嫌な予感が冷や汗となつて背中を伝う中、車が止まる気配がした。目隠しをされているので外の様子は見えない。空調も効いているから温かい時間なのか冷える時間なのかわからない。情報が足りなすぎる。そう思っていると、音がした。金属音。それが近づいてきて

——目隠しが外された。

「ひっ……」

途端、自身は息を飲んだ。

運転席と助手席。そこには歴史遡航軍の打刀と太刀がいた。大きい図体なのにシートに収まっているのは恐らく空間操作技術だろう。青い発色と緑の発色だからさして強くはない。ただしそれは刀剣男士に相手取ってもらった場合だ。ただの霊力が強いだけの審神者には、1部の戦闘系審神者以外普通は太刀打ちできない。ましてや今は拘束されている身だ。自身はそもそも術なども使えない。本当に霊力が溢れるほどに強いだけなのだ。

目隠しが取れたところで、無理に起き上がり辺りを見渡す。窓の外は暗い。自分の服装は寝間着の浴衣のまま、下駄すら履いていない。幸い足は拘束されていなかった。打刀と太刀がなにやら笑い合っている様子——推察するに恐らくろくでもないこと——を尻目に、後部座席のドアロックを外す。そしてドアを蹴破って外に出ようとした。

それを、外から割り込んできた「それ」に阻まれる。

「——っ」

息を飲む。それは歴史遡航軍の中脇差——あの、巨大な蜘蛛のような敵。

それに、後部座席に押し戻される。中脇差は器用に後ろ手でドアを閉めた。ロックもかける。用心の良いことだ、と感心している場合ではない。退路を塞がれた。

太刀がなにやらがちゃがちゃと言ってくる。どうせ意味はわからない。わからないが、やはり私にとって有益なことではないことは確かだ。

それに対し、発声器官を持っていると思えない中脇差が、答えた。

「——」。「——」。その言葉に、打刀と太刀が舌なめずりしたのを見た。舌があつたのか、などと考えている余裕もない。私が反対側のド

アまで躪り寄っていると——白い糸が伸びてきた。それが中脇差の放った糸だと気付いた瞬間には、私の寝間着は剥ぎ取られた。

「——っ！」

』

がちやがちや、がちやがちや喚いてくる。下卑た言葉を吐きかけられたことだけはわかった。私は寝るときブラジャーをつけない。キャミソールとパンツだけだ。それが脅威の粘度を誇る中脇差の糸で、その下着も剥ぎ取られてしまった。びりびりである。こんなのエロ漫画ぐらいでしか見たことがない。私が羞恥に耐えつつ現実逃避を図っていると、びたり、乳房に貼り付いてくる何かを感じる。それが糸だと気付いたときには、糸はまるで触手のように私の体をなぞっていつていた。剥き出しになった体は、空調の効いた車内で糸に嬲られていく。粘度の調整もできるのだろうか？ それらは私の肌にくつつくことなく、ただなぞっていく。いくだけなのだが——私はもじ、と落ち着かなくなっていた。

気持ちいいのだ。気色悪いだけなのに、そのはずなのに、この糸になぞられていくと、堪らなくぞくぞくする。ふと視線を落とすと乳首も立ってしまった。恥ずかしい——そんな心の声を聴いたように、糸が乳首に近付いた。

そしてぴん、と強く弾かれる。

「っ！」

ぴりぴりとした快感。思わず仰け反ると、下卑た笑い声と思しきものが沸き立つ。そちらは腹立たしいが、攻め入るように何度も何度も乳首を弾かれては摘まれ、舐めるようになっていくなぞられ、腰が揺れてくる。ああ、こんなにも乳首が気持ちよかったなんて！

気が付くと、位置関係が変わっていた。最初のように私が後部座席の真ん中に座り、中脇差は私の真ん前に陣取る。私はどうやら乳首が弱かったらしい。すっかりびしょ濡れになった股間がシートを濡らしている自覚があった。私がぼんやりとしていると、中脇差がずい、と迫ってきた。私が途惑っていると、中脇差の脚が器用に私の腰を掴

む——そして、私の股間に「それ」を宛がった。

途端、電流のように閃く。

私は種を付けられる。もしくは卵を産み付けられる。

「——っ！」

私は抵抗した。しかし私の足は中脇差に囚われているし、勿論太刀も打刀も私を助けることはない。そして、私の腰は抱え上げられ——「それ」が、私を貫いた。

どぶどぶと溢れてくる熱い泥。本当にそれは熱くて、私の子宮は過敏にそれを受け止めて。何度も何度も注がれた結果、私は氣をやって、意識を半ば手放した。

意識が薄れる中、私は会話を聞いていた。中脇差の「それ」を受け止めた結果だろうか。敵たちの会話が聞き取れるようになってきた。

『しかしおっぱいは形が良いしでかいし美人だし、なにより靈力がこんなに溢れてる女審神者を連れてこられるとは思わなかったな』

『中脇差も頑張って産み付けしてくれよ』

『お前ら良い戦力なんだからな。産卵のために引つ込まれると困る』

『そうそう。こういう女審神者を攫って孕ませて苗床にするのが一番だよ』

私はそれらの会話を聞いても、これからの自分の運命を悟っても、動くことすらできなかつた。

そして、産み付けられたことで何かが生じたのか。私は、その「苗床」とやらの運命に甘んじることが私の最大の幸せだと感じてしまっていた。

その日、ある本丸が襲撃を受けた。

そのの、将来を囑望されていた女審神者が攫われて、今もなお行方不明。

同時期より敵勢力の強化がなされたことから、同一人物の審神者が何らかの関連をしていると見られている。

了

【モブざこR—18】絶えた望み

その日、五虎退は休日だった。待ちに待った非番の日。彼は以前から審神者に休暇申請をしていた。即ち、現世へのお出かけである。それもひとりだ。

これには一期一振筆頭粟田口の面子が心配したが、「ひとりで出掛けられるようになりたいんです」という五虎退自身の強い要望があったから仕方ない。結果として、五虎退は非番の日、現世にひとりで出掛けていった。

この後、彼が決してひとりでは出歩かなくなった原因となる事件へと向かって。

乱や加州、次郎太刀などに影響されて、ウィンドウショッピングなものに興味を示した五虎退は、有名な街へと赴く電車に乗っていた。そこで五虎退は面食らうことになる。

五虎退の乗った車両は非常に混んでいた。実のところこの電車が混んでいるのはいつものことだったが、現世慣れしていない五虎退には途惑うしかなく、気付いたら扉の前でぎゅうぎゅうと潰されそうになっていた。息が詰まりそうだ。そう思っていると、電車が動いて体が傾いだ。そしてようやくまともに立てた。

そのとき、気付いた。

(……………)

五虎退の腰のラインを、なぞる感触。最初は何かの間違いかと思っただが、その感触が——手が、臀部。即ち尻に触れた瞬間、悪寒が走った。その手が明らかな意志を持っていると感じたからだ。

その手は、短パンを穿いていた五虎退の太股を撫でさす。しつこいほど、ねっとりとした動きで、滑らかな五虎退の太股を手で舐った。悪寒が止まない。鞆をしつかりと掴んだまま、黙って耐えていると、その五虎退の様子に凶に乗ったらしい。五虎退の背中に誰かがくっついてきた。

そして、五虎退のサスペンダーを素早く外すと、緩んだ短パンから下着の中へ手をつ突っ込んできた。片手は前へ、片手は後ろへ——前は

五虎退自身を扱き、後ろは五虎退の尻を揉んだ。そのあまりに無遠慮な動きに抗議の声を出したかったが、今の自分は、この男——手の感触からして男だろうと判断した——が体をずらせば、自分は公衆の面前でパンツはおろか、パンツを下ろした姿を晒してしまうかも知れない。その躊躇が、男を更に凶に乗らせた。

その間にも男の片手は五虎退自身を扱くし、その動きは緩急をつけていて不覚にも立ち上がらざるを得ない。そして後ろの手は、一旦手を引っこ抜かれた——かと思うと、再び尻に戻ってきた。

ただし、湿った感触がした。湿った手が、五虎退の尻の割れ目、後孔の周辺をなぞり——それが唾液だと気付いたとき、おぞましが最高潮に達した。そこで耐えきれなくなった。

「やつ……！」

小さいながらも声を出すと、男はあっさり退いた。五虎退はそれに安堵し、サスペンダーを戻すと、次の駅で駆け下りた。

そんな不快極まる出来事も、買い物を済ませた頃には忘れ去っていた。うっかりショッキングを楽しみすぎて夜になってしまった。特に短刀の面にウサギのぬいぐるみを買ったのが嬉しかった。喜んでくれるといいなと思う。この季節の日暮れはまだ早い。だから五虎退は、政府最寄りのゲートがある施設をひとり歩いていった。すっかり浮かれていたので、五虎退は忘れていた。今の彼は本体の短刀を持たぬ——審神者同伴ならば許可される帯刀も刀剣男士のみだと許されないことがある——、少しばかり膂力の強い幼子に過ぎないことを。

だから、背後から——そう、駅からずつとついてきていた陰に気付かなかった。それが、彼を先回りした路地裏にいたことに。

五虎退は紙袋を片手に歩きながら、「もしもし」と声をかけられて完全に気を抜いて答えた。

「はい、なんでしょ、——」

そして、五虎退はあっという間に路地裏に引っ張り込まれた。

「いやっ……やめて、やめてくださいあいつ……！」

「へへへ、こんな夜道にふらふらしてることには襲ってくださいいっ

て意味だろ？ 今までの奴らもそうだったぜ」

帽子が吹っ飛んだ。ジャケットを脱がされ、サスペンダーを引き千切られ。シャツのボタンは弾け飛んだ。色白の肌に相応しい桃色の乳首が晒される。外気に晒されて乳首が硬く尖った。その間にも男は手早く五虎退の短パンを下穿きごと脱がす——幼子に相応しい大ききの彼自身。その体が俯せに引つ繰り返される。五虎退が途惑う。意図がわからない。しかしそれは直ぐにわかった——五虎退の臀部に挟まれた後孔。そこを、舐る何か。たつぷりの粘ついた唾液が、五虎退の後孔を舐った。

「あつ、やつ、いやあつ……！」

肘を突いて喘ぐが、男は動きを止めない。寧ろ加速させて——後孔の中に舌先まで突っ込んだ。そこで「ひう」と声を上げてしまう。

そこで五虎退は失策に気付いた。「感じてしまった」。そう取られでもおかしくない反応をしてしまったし、事実感じてしまった。男の舌の動きは一瞬止まったが、ニチャア、という口が開く音と共に声が出た。

「そつかあ、君は後ろで感じちゃうんだねえ。これはおじさんが満足させてあげないとね」

「ち、ちがつ……！」

「はい、おじさんのおちんぽ、君のちっちゃくてかわいいお尻に突っ込んでんじやおうねえ。よいしょつと」

言いながら、男は五虎退の細腰を掴んだ。彼の手で指先がくつつきそうなほどの細さだ。それに男は情欲を更に強く抱きながら、くつろげた自身を五虎退の後孔に宛がい——強く押し込んだ。

「あつー！」

「おつ、よく締まるねえ。はじめてかな？」

「あつ、あつ、あつ！」

男の舌先と唾液で充分解されていたが、それでもなお男の凶悪な逸物は五虎退を突き上げる。突き上げる度、五虎退の中の「何か」に触れ、それが五虎退自身を屹立させていった。男は五虎退の体に覆い被さると、腰から手を離し、剥き出しになっていた五虎退の乳首を弄り

出す。五虎退は堪らず嬌声を上げた。

「あつ♡駄目です、駄目ですうっ……!」

「へえ、乳首で感じる子なんだね君。おじさんそういう子も好きだよ。ほら、締めりがよくなった。こうしたら、もつとよくなるかな?」

「——あつ……!」

強く乳首を抓られ、その瞬間後孔を強く締めてしまう。屹立した五虎退自身はそれでがくがくと腰を震わせた。それに男は舌なめずりしながら、ピストン運動を繰り返した。五虎退が声を上げる度に、その男の逸物は太く硬くなつていく。五虎退は意識が朦朧としはじめた。早く、早く終わつて。そう涙ながらに願っていると、男は逸物を出口付近まで引き抜いた。このまま終わってくれるか、そう思っていた矢先、男は耳元で囁いてきた。

「今からまた1番奥を突いて上げるね。気持ちいいよ、良い声をあげて欲しいな」

「——やめてください、やめて、いや」

五虎退は懇願の声を上げた。しかし彼からは見えなかったが、男はにっこりと微笑んだ。

「嫌だね」

絶望の宣言と共に、男は五虎退の最奥を突き上げた。途端に五虎退自身も白濁を吐き出した。

服を着直す気にもなれない。五虎退が無様に路地裏に転がったまま男を見ていると、男は散らばった五虎退の荷物を見た。その中から転がり出たぬいぐるみに目を付けた。ウサギのぬいぐるみだ。

それを無造作に掴むと、男はぬいぐるみを引き裂いた。

身二つに別れたそれで、男は自分の魔羅を拭うと、適当に放り出してその場を立ち去った。あとに残されたのは、精液と唾液に塗れ、恥辱と陵辱を受けた幼い少年。

この後、五虎退の体から検出された体液により男は捕まったが、五虎退は面合わせを拒否。彼は出陣以外は拒むようになったし、単騎出陣も単騎遠征も拒むようになった。

了

【男審神者×包丁R―18】ラインを超えて、

何がいけなかったのだろうと、包丁は思う。彼にはわからなかった。

「主もさあ、人妻を見習って俺に優しくしなよお。まずはお菓子ちようだい？」

こんなことを言っても、審神者は穏やかに笑って済ませていた。一期一振に「いつも弟がすいません」と言われて、いやいや、と手を振って済ませていた。そういう審神者だったから、包丁も内心ではとても懐いていた。

内心で、だったからまずかったのだろうか。包丁は思う。

近侍の当番の夜のことだった。近侍は審神者の隣室で眠る。包丁も例外なくそうして、蒲団で健やかな眠りに就いていた。

「それ」に気付いたのは、就寝して2、3時間ほど経った頃だろうか。障子が静かに開かれた。

「……ん……主……？」

「……」

月を背にした彼は何も言わない。ただ、何かを片手に持っているのが窺えた。寝ぼけながら目を擦っている包丁の前で、審神者は後ろ手に障子を閉めた。そのとき、障子に何かを貼った——それが防音の札であったことを、包丁はのちに知る。

そこからが問題だった。審神者は包丁の元に歩み寄ると、彼の被っていた蒲団を乱暴に剥ぎ取った。目を剥く包丁。しかし相手は主だ——そう思ってしまったのが包丁の運命を決定づけた。

身を起こそうとした包丁の顔を、審神者が強かに平手打ちした。

「っ!？」

「……このクソガキが……」

咄嗟のことで受け身も取れない。相手があいつも優しい審神者だということもあった。彼の口から漏れた声と言葉には怒りが滲んでいる。審神者は敷き布団の上に転がった包丁の腕を組み上げると、彼は包丁の腹に拳を叩き込んだ。噎せる。

「げほっ……！ な、なにすんだよ主！」

「うるせえ、こつちが大人しくしてりや調子に乗りやがって」

「いたっ……！」

ねじり上げられた腕に何かが貼られる。それで身動きが取れなくなった。それは刀剣男士の動きを封じる札だと知るのも後ほどのことだ。かちんと体が固まってしまった包丁の上に跨った審神者は、顔に怒気を漲らせていた。

「こつちが良い審神者、良い主として振る舞わなきや外間に障ることがわかってんだろ？ それで今までよくも好き放題しやがって」

包丁は彼の言っていることがわからなかった。少しも、わからなかった。身動きの取れない体、それを包む寝間着を審神者は剥いだ。途端、その怒気に好色が混じる。

「なに——」

「わからせてやる。今後お前がなめた口を利けないようにな」

晒された包丁の体。審神者は下穿きに手をかけた。

「やつ……！ やめて！ やめてよお！」

「良い声で啼くじゃねえか。いつもあれだけ好き勝手喚いてるだけあるな」

包丁の幼い自身を審神者の硬い手が乱暴に扱く。包丁は未知の快楽に動かせない体を震わせた。普段排尿にしか使わない部分が痛いほど扱かれ、しかしその動きに体の中がむずむずとしてくる。それが訳がわからなくて包丁は悲鳴を上げたが、審神者は決して手を止めない。寧ろ動きを激しくした。がくがくと体が揺れる。それは包丁自身が制御できないものだった。

「しごくのー！ しごくのやめて！ 怖い！」

「気持ちいいの間違いだろ？ 大人はみんなこういうことをやってるんだぜ。ははっ、お前の好きな人妻だってダンナのちんぽ、こすつてんだよ。お前だって人妻にこうされたかったんだろ？」

審神者はひどく愉快そうだった。そう言っている間に、包丁自身がむくむくと形を取ってくる。先走りか審神者の手を汚した。包丁は迫り上がる何かを感じて頭を振った。

「やだ、やだあ……！」

「ほら、もう出るだろ？ イけっほらいけよ！」

「ひい……！」

審神者の言葉に従うように、包丁自身が精液を吐き出した——果たした。

包丁が息を荒げている間に、審神者は彼の脚を持ち上げて開いた。そして——包丁の精液と先走りに塗れた指を、彼の後孔に宛がった。

「ひうつ!? なに、」

「短刀の癖にわかんねえのか? 『そういうこと』に長物連中より余程詳しいって聞いたけどな」

言いながら、審神者の指は包丁の後孔に滑り込む。

『衆道』つてやつだよ。これでわかるか」

「——! や、やだ！」

「やだじゃねえよ、今からお前は俺に犯されんの。ぐっちやぐちやにな。ああもう俺の手で精通しちまったから犯された範囲か。でもまだ足りねえな」

「や、あ……！」

審神者が言いながら1本の指をぐりぐりと後孔の中でかき回した。異物感と違和感、そして迫ってくるナニカ——音を立てる後孔に包丁は歯噛みする。それに構わず審神者はひどく楽しそうに、愉しそうにしている。

「いきなりちんぽつつこまないだけ優しいだろ? 切れたらやだもんなあ。ほら、優しい主がいいんだろ? 優しいだろ俺。ほら2本目！」

「ひ、いっ——！」

ぐち、と音を立てて2本目の指が這入り込む。後孔の中で2本の指が開かれた。その中で——片方の指が、「それ」に当たる。

「あつ、——！」

「おつ、前立腺当たったか? 感じる奴なんだなお前」

「や、だつ、やだあつ……！」

「それ」を見つけた審神者は嬉々として指を擦る。包丁は堪らず声

を上げた。圧迫感と遠回しの快樂。再び包丁自身が形作りはじめる。それを見て嗤わない審神者ではなかった。

「はは、お前見えるか？ 見ろよ。お前、ケツで感じてちんぽ押っ立ててんだな！ あんだけ人様の女のケツ追っかけてる奴が男にケツ掘られて感じてんだな！ 無様だな！」

「う、るさいっ……！」

「あ？」

包丁が抵抗の声を上げた途端、審神者が底冷えする声を出した。

「……！」

包丁は内心で怯えたがどうしようもない。既に出てしまった言葉だ。審神者は指を引き抜いた。そして彼自身の前を寛げる。

包丁の目に、ひどく大きな逸物が見えた。それはぎんぎんにそそり立っていた。

「人が優しくしてやってたら付け上がりやがって」

そして、包丁の脚を抱え——後孔に彼自身の先端を宛がった。

「もうぶちこんでやる。ケツマンコで無様に喘げよ」

そして、突き込んだ。

「——っ！」

最初は声にならない悲鳴。後孔の端が切れなかったことが奇跡だと包丁はのちに思う。それだけ大きなモノが後孔を突き上げた。包丁は仰け反った。

「あっ……あっ……！」

「やっぱガキのケツ処女は締まるなあ！ あー気持ちいい、役に立つの戦闘のときだけだと思ってたけどこっちの具合も良いんだな。ほら、お前も気持ちいいだろ？」

「っ……っ……！」

「あ？ ほら、こころだろ、こころ」

声もなく喘ぐ包丁に、言いながら審神者はやや引き抜いたのち「それ」を抉った。

包丁は体を大きく跳ねさせた。

「あ、うっ♡」

「お、気持ちいいだろ。良い声出すじゃねえか」

包丁は世界が塗り替えられたようだった。先程まで指でいじられていただけではわからなかった感覚。包丁の「それ」は審神者の凶悪なほどの逸物で扱われ、包丁の頭の中を一挙に快樂で満たした。

「あつ♡あつ♡♡」

「喘ぎ声に脂がのつてきたな。ほら、よっ」

「あつ♡♡♡♡♡♡」

幾度も幾度もピストンされ、包丁は喉を晒した。幼い声で喘ぐ。汗が滲む細かい体。突き上げながら、審神者は言う。

「ほら、気持ちいいだろ？　そういうときはなんて言えばいいかわかるな？」

「あつ♡♡♡♡♡」

喘ぎながら、包丁は少しだけ思考を巡らせた。そして言う。

「もつと♡♡♡♡♡気持ちいい♡♡♡♡もつとお♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

「もつと、なんだ？」

試すような審神者に、包丁の理性は決壊した。

「もつと……もつとおちんぽ♡♡♡おちんぽちようだい♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

「よく言えたな。ほらよー！」

「あつ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

刹那、包丁の奥深くを審神者の逸物が強く強く抉った。そして包丁は果て、審神者の逸物を締め上げて後孔の中に精を放たれた。

「主……」

数日後。

あのあと第2ラウンド、第3ラウンドと重ねた結果朝になり、審神者の私室のシャワーで痕跡を流された包丁は何事もなかったかのようになり日常に戻ったように思われた。しかし、その日包丁は戻ってきた。既に寝間着姿で。

「なんだ」

「あのさ……俺、今日頑張ったからさ……誉いっぱい取っただろ……？ だからさ……」

そう言つて、包丁は後ろ手に障子を閉めたのち、自身の寝間着の前を開いた。

そこには下穿きがない代わりに、どこで覚えた知識だろうか。包丁の亀頭にピンクのリボンが結ばれていた。

「ご褒美、頂戴」

審神者は笑った。

——物わかりの良い「メス」になつたな。

「いいぞ。今日はいっぱいかわいがつてやろうな。おいで」

胡座を掻いて膝を叩く。撓垂れ掛かつてきた包丁に、唇を重ねた。

わからせてやった。そう言う薄暗い悦びがあった。

了

【男審神者×包丁R―18】誉のご褒美ツクス♡

体を暴かれ、すっかり洗脳された包丁は思う。これは、幸せなキスだと。

「んっ、ん……」

蒲団の上で胡座を掻いた審神者の片膝に乗った寝間着姿の包丁は、彼と唇を重ねた。既に覚えている。舌を絡めることを。素直に舌を出すすと、審神者はそれを絡め取って包丁の口腔を蹂躪する。歯列を、硬口蓋をなぞられ息も詰まりそうだ。その寸前で口が解放される。涎が垂れた。惚ける包丁の頭を審神者は撫でながら、「良い子だな」と彼の耳元で囁いた。

「今日もよく頑張ったな、包丁。お前は俺の自慢の刀だ」

「えへ……」

「そんな良い子には、今日もご褒美をやらないとな」

言いながら、照れ笑う包丁の寝間着の帯を解く。薄い躰が、行燈の明かりで白く照らされる。その中で、ぷつくりとした桜色の尖りに触れた。びくりと躰が跳ねる。

——ここも、すっかり開発されてしまった。

審神者は薄く笑いながら言った。

「包丁、ここ、好きだもんな。それにちんぽ擦られるのも好きだもんな」

「うん……♡」

「今日は両方1度にやろうか」

「あ、んっ♡」

言ってから、審神者は包丁の躰を蒲団に横たえようと、彼の乳首に吸い付いた。そして同時に、片手で下穿きから包丁自身を取り出した。擦る。そうすると包丁は小さく喘いだ。

——背徳的な気分だった。見た目の幼い、それも少年の包丁の乳首を懸命に吸う様は母を求める赤子のようだとも。しかし実際包丁のそれは甘美だった。舌先で乳首を転がし、時に強く吸い上げると、包丁は母親がしない媚態を見せる。

「あっ♡あるじっ♡もっど強く吸って♡♡♡おちんぽもこすつてえ♡♡♡♡♡」

「こうか」

「あっ♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

言われるがまま唇で挟んだ乳首を強く吸い上げ、おぎなりになっていた包丁自身を擦り上げる。自身を扱っていると、徐々に先走りが溢れてくる。乳首に柔く歯を立てると、「んっ♡♡♡♡♡♡♡♡♡」と躰を跳ねさせた。少しぐらいなら痛いのも気持ちいいらしい。これはスパンキングの素養もあるな、と思っていると、今の刺激で達したらしい。包丁の躰が震えて審神者の手を白濁で汚した。それにとりと審神者は笑う。

「お前、今乳首でいったな。乳首でイけるようになったんだな」

「あ……そんなオレのこと、嫌い……？」

「——まさか。かわいいよ、俺の包丁」

哀願する包丁に、審神者は本音を言う。

そう、あのはじめての夜。あのととき鬱憤を晴らしてからは包丁を素直に可愛いと思えた。それは情欲込みで。あれから普段は今まで通りでも、審神者の前ではしおらしくなる包丁は、「とても都合の良い愛玩人形」だった。乳首を舐っていた口を包丁に重ねて、それからできるだけ優しく笑んだ。

「愛してるよ、包丁。俺のかわいい刀。昼は勇ましくて夜はしおらしい。そんなお前に、今夜はもっど♡褒美をあげよう」

「え……？」

「よいしょつと」

「——あっ♡」

言いながら、包丁の股座に移動した審神者は——包丁自身を口に啜えた。

まだ幼い、これから成長することもない包丁自身の亀頭に口づけをする。それから口の中にくわえ込んだ。小さいから比較的容易く口で包めこめる。そして口をすぼませ、思い切り吸い上げた。バキュームフレラだ。

「ふああああっ♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

何度も何度も吸い上げると、その度に包丁は喘ぎ声を上げる。時折口を離して竿を舐め上げ精嚢を軽く唇で食んだ。そしてバキュームフエラ。

「あっあーっ♡♡♡あっ♡♡♡あっ♡♡♡あっ♡♡♡あっ♡♡♡あっ♡♡♡」

感じたことのない快楽に、包丁のそれは先程1度達したにも関わらず既に口の中で硬く形を成している。先走りが唾液に混じって口から零れた。包丁が喘ぐ。

「あるじ、あるじっ♡♡も、オレイっちやう♡♡♡♡♡」

「いいよ、イけ」

より一層強く吸い上げた。

「あっ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

包丁は喘ぎ——審神者の口中に精を放った。

包丁は乱れた寝間着の中、幼い躰を晒している。ごっくんと精を飲み込んだ審神者は、戸棚から「それ」を取り出す。通販で買ったローションだ。包丁はそれを見て生唾を飲んだようだった。既に抽斗の音で自分が次に何をされるか学習していた。

(良い傾向だ。俺好みになってきている。調教の結果が如実に出てきたな)

そう思いながら、包丁の躰を引つ繰り返した。そして尻を突き出させる。ピンク色のかわいらしい臀部。期待が籠もっているのか、後乳が既にひくひくと蠢いていた。審神者は包丁に見えないことをいいことにひどくあくどく笑いながら、ローションを手を取った。

「包丁、後ろ解すよ」

「——ひやつ、あんっ♡つめたいい…………♡♡♡主、冷たいのイヤって言ったじゃん…………♡♡♡♡♡」

イヤと言いなながら、声は欲情しているのが明らかだ。それに口先ばかりで謝りながら、指を入れた。既に慣れて、包丁の「イイところ」はわかっている。だからそれを素直に突いた。1本目の指。ぐりっと押すと包丁が喘いだ。

「あっ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

「気持ちいいだろ？ こつちから見てもいやらしいな。後ろの孔から溢れたローション、蒲団に垂らして……これなら2本目ももう余裕だな」

「う、んっ……♡♡♡♡♡もっ♡♡♡♡♡はやくう♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

言いながら審神者は宣言通りに2本目の指を滑り込ませる。ぐぱぐぱと縦横斜めと指を広げた。それで包丁は声のない嬌声を上げる。枕にしがみつくと包丁は、無意識なのか腰を揺らした。それを見て生唾を飲んだ審神者は、宣言なく3本目の指を入れた。そして「イイところ」を指を揃えて押した。

「——っ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡あっ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」
「もういいな」

指を引き抜くと、審神者は自身の前を寛げた。そして凶悪なほどの逸物に避妊具を纏わせると、蒲団の上にならなく横たわる包丁の尻を叩いた。包丁の躰が跳ねる。

「ひうつ♡♡♡♡♡な、に♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」
「ほら、今俺が挿れるから。尻を出せ。ほら、早く」

「出すから、出すから叩かないでえ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」
「へえ、口ではそう言ってるけど、『こつち』は喜んでるぞ。尻を叩かれるの好きなんだな」

「ひう♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡そんなこと♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」
持ち上がった尻の下に手を回す。そこではやわやわと包丁自身が3度目の形を成そうとしていた。興が乗って、3回、4回尻を叩く。その度に包丁は「あんっ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」と嬉しさを隠しきれない嬌声を上げた。

けれど7回目ほどで包丁がこちらを見上げてきた。
「あるじ……もう、入れてよお……♡♡♡♡♡♡おしりたたかかれるのきもちいいけど、主のおちんぽ欲しい♡♡♡♡♡」

「——そうかそうか。じゃあ、今最後のご褒美をやるよ。そら」
「ひっ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

審神者は包丁の腰を掴み、後孔から一挙に逸物を突き込んだ。それ

「どうらぶホラー」 くりちゃん 鉢 「現代パラレル」

金魚鉢

雨が降っていた日、出かけたときのことだという。

いつも通る道。さして広くもない道に車が路駐されている。自分の敷地に駐車スペースを持たない家がやっている。勿論法律に触れることだけど、この住宅街では有名無実だ。

その中でも、必ず空いているところがある。緊急時に消防車や救急車が止められるためのスペース。詳しいことは知らないけれど恐らく国有地なのだろう。そこにはアスファルトも敷かれておらず、やや土が発生しており春から秋にかけて雑草が生える。冬になるとそこは雪捨て場となる。繰り返すけどもここは消防車などの駐車スペースだ。しかし冬は雪捨て場となっている。住宅街ゆえに流雪溝もないから自然とそうなってしまうのだ。引越してきて以来そういう事件は起きていないけど、冬に火事が発生したときはさぞ道路は混雑するだろうなと思う。

閑話休題。先述の通りこのスペースには土がある。雨が降ればそれは泥になった。そして水溜りができた。夏から秋にかけてトンボが卵を産み付けていることもよくある。そしてその日、くりちゃんが傘をさして通りかかったときも、当然のように水溜りができていた。

ふと、影が見えた。

くりちゃんは目の錯覚かと思い、思わず歩み寄ったという。そして水溜りの中を見た。

小さな魚——金魚だった。

黒い金魚、というにはあまりに黒過ぎた。それは宵闇の色をしていたという。それが水深がほんの数cmもないはずの水溜りの中で、すいすいと泳いでいた。よく見ると、水草のようなものも見える。それがゆらゆらと、気持ちよさそうに揺れていた。その水はとても澄んでいて——それを半ば夢中で覗き込んでいたくりちゃん。不意に、彼の

目の前を何かが上から下へ落ちていった。

ぼちゃん。

それは水溜りの中に落ち——2匹目の金魚が泳ぎはじめた。それを見て、くりちゃんは空を見上げた。雨天。

恐らく、空の金魚鉢から零れ落ちたのだろう。

そんなことを思ってから目線を落とす。水溜りはただの泥水になっており、金魚も水草も姿を消していた。

イチヨウの記憶

はらり、黄色い葉が落ちる。枯れ葉だ。

顔を上げると、白い3階建ての建物が見える。それで、はたとくりちゃんは首を傾げたようだ。

くりちゃんが出て来たのは大学病院。その敷地内を薬局に向かうために歩いていた。そして、枯れ葉が落ちて来たのはまだその広い敷地の中だった。見上げると、つい数か月前に増設された施設の建物。何の目的かはわからないが、とにかくそれは建てられた。駐輪場と、それを見下ろすイチヨウの樹があった場所に。

(立派な樹だったんだが)

そのことを思い出しながら、くりちゃんは枯れ葉を拾う。気になることがひとつ。

この辺りには、あの切り倒された樹以外にイチヨウの樹はないのだ。この辺りは、桜の景勝地だから。

ならば、この枯れ葉はどこから落ちて来たのだろう。

——建物を見上げた。あの樹の姿はどこにもないけれど。

紅葉したこの葉は、この道の記憶そのものなのだろう。そう、思いながら、枯れ葉を放ると、それは秋風に吹かれて飛んでいったようだ。

赤い彫刻の旅立つ日

湖を眺めていた。

秋の夕暮れが眩しい。輝くそれを、水面が反射していた。きらきらと美しかった。

その水面を、白鳥が泳ぐ。木彫りの、それも赤く塗られた白鳥だ。ペンキで塗られたようにべったりと赤かった。

木彫りなのだからそれは正確には浮いている、というべきだった。しかし、その赤い白鳥たちは確かに足をばたつかせていたようだった。等身大の木彫りのそれらは、あまりに精緻で、生々しい存在感を放っていた。

ゆったりと、且つ忙しなく揺蕩う木彫りの白鳥たち。それを、白い息を吐きながら眺めていた。

きゅあきゅあ、ぎゃあぎゃあ。下手なバイオリンの音色のような鳴き声。それはいつか自然を映した動画で聞いた白鳥の声に瓜二つだった。白鳥は美しいが鳴き声まではそうはいかないらしい。嘗て抱いた感想と同じ気持ちを抱いた。

——不意に。

その中の1羽の白鳥が顔を上げた。そして、ぎこちない動きで羽を広げる。ぱらぱらと木片が水面に散らばった。それでも構わず——木彫りの赤い白鳥は、羽搏いた。空に向かって。あの夕暮れに向かつて。

それにつられるように他の白鳥たちも羽搏き——羽根の代わりに、木片がいくつも水面に残った。水面に近づいて、その木片を拾う。柔らかい木材のようだったが、木材に詳しくなかったから何の樹なのかはわからなかった。

そして、思う。

(ここは白鳥の飛来地なのに、あの木彫りの白鳥たちは旅立ったんだな)

——気付くと、既に日が暮れていた。

はたと辺りを見渡すと、そこは湖でもなんでもない貯水池だった。暗がりによくわからなかったが、木片などひとかけらも見当たらず。

ただ、遅く帰ってきたくりちゃんが土産話と共に渡してきた木片が、その白鳥の証だった。

それはペンキの匂いがした。

たぶん1D3/1D10ぐらい

くりちゃんはあまり「犬運」が良くない。

小学生の時には放し飼いにされていたゴールデンレトリバーに追いかけられたし、中学では友達の家ofラブラトルに押し掛かられた。

それでもくりちゃんがとても犬嫌い、とまでいかなかったのは親戚の家で飼っている犬のおかげだろう。昔は雑種の大型犬を飼っていて、この間まではトイプードルを飼っていた。猫派の次男一家とは違い父の実家は犬派らしい。

だがそれでも、さすがに明らかに狂犬病に罹っていきそうな野良犬と出くわしたときは、平和主義は返上したくなったという。じりじりと後退りながら、さてどうしたものか、と路地の前を後退りで通り過ぎた。

しびれを切らしたのは犬の方だった。

脚力で飛び上がり、くりちゃんに噛みつこうとしてきた。それをくりちゃんは持っていた鞆で横つ面を叩こうとした、らしい。

らしいというのは、その後の展開があまりに冒瀆的だったからだ。飛びかかろうとした犬が、路地からにゆるりと出て来た触手に絡め取られた。

目を瞠るくりちゃん。声も出ない犬。吸盤の生えたその触手は、粘液を撒き散らしながら、ぬるりと路地に引つ込んでいったそうだ。

あまりの事態に、武器にする予定だった鞆を持ったままのくりちゃん。彼は鞆を背負い直すと、恐る恐ると路地を覗き込んだ。

そこは、いつも通りの薄暗い路地だった。何にも変化のない、青いポリバケツすらいつも通りの光景だった。

「助けてくれたのか、餌を捕食したかったのかはわからないが。とにかく助かったし、まあいつものことだな」

「くりちゃん、くりちゃん、そのSAN値チェックものの事態を受け入れるのはどうかと思うよ？ その路地裏があるところどこ？ 2度と通らないから」

「あれはたぶん、路地……蛸壺のようなものがあればどこからでも出てくるんじゃないか」

「イヤッ!!」

冒流的な光景の情景描写を読んでもしまったあなたは1D3/1D10のSAN値チェックです。

足音

病気が流行り出して以降、くりちゃんがスーパーへ買い出しに行くのは遅い時間になるようになった。偏に人混みを避けるためだけど、色んなものを惹きつけるくりちゃんにはあまりよくないことのように感じた。

卵の特売日で最寄りのスーパーに行って帰ってきたくりちゃんは、いつも通りの顔色で——実のところ顔色はわかりにくいんだけども——、首を傾げながら言った。

「帰って来た時。道の向こうから足音がしたんだ」

「それで？」

「足音は近付いてきたんだが、誰もいなかった」

「怖……」

「ただ、ここで奇妙だったのが……」

くりちゃんは言った。いつも通りのごく真顔で。

「見えないその誰かは、エコバックを肩らしきところにかけてた。それで俺の横を通り過ぎて歩いて行った」

「……」

「これは幽霊なのか？ 透明人間なのか？ それとも俺の頭がまづい

のか？」

「最後のはそういう漫画あったね……とりあえず他の人が見えてるんだから幽霊じゃない？ 透明人間は現実的じゃないよ」

僕は言ってから、「幽霊も現実的じゃないよね」と自省した。けどくりちゃんは気にしてない様子で「やはり幽霊か……」と独り言ちていた。

こういうことが日常になってしまっているくりちゃんだった。

了

【さきに乱R―18】 男審神者と乱の新婚旅行温泉浴衣セックス♡

置行灯がゆつたりと和室を照らす。布団の上に座った乱の、旅館の浴衣に包まれた細い身体もぼんやりと照らされていた。その中で俺は、乱を抱き締めながら唇を重ねた。

「んっ……っ♡」

甘い声。舌を絡ませ、口腔を蹂躪する。硬口蓋をなぞると乱の体がぶるぶると震えた。何度か口を離し、それからねつとりと口付ける度に唾液が甘く感じた。媚薬のようだ、と思う。そして今の状況に歓喜していた。

ここはある地方の温泉旅館。審神者が刀剣男士との新婚旅行に使われる人気の宿でもある。刀剣男士は本体の刀から離れられないので基本的に海外旅行ができない。そのため国内の旅行先を模索すると自然と温泉旅館になる。その中でも俺は特に人気の宿を選んだ。偏に、「妻」になった乱のためだ。

乱は初鍛刀。そしてはじめて極のレベルカンストになった刀でもある。強く頼れる我が短刀。そして随分早くから夜の相棒でもあった。俺が乱に惚れてしまい、乱の名を呼びながら自慰をしていたところを彼本人に見つかってしまい、「主さんたら僕がいいの?」と言いなから乱は俺の膨らみ切った肉棒に手を添え――要はほぼ体から始まった関係だが、色々あってコンヤクカツコガチ、そして極のレベルカンストと同時にユイノウカツコガチに相成った。

新婚旅行。観光をして、温泉宿にチェックイン。男風呂と一緒に入ったときは脱衣所がやや騒然となったものだった。俺としては、風呂から上がったあとの乱の上気したうなじが堪らないんだよな、という気持ちでいっぱいだったが。

そして夕食を終え、夜。ひとつだけ敷かれた布団の上で、俺たちは睦み合っていた。本丸でも初夜はしたが、本当に2人きりと言うのははじめてだった。だから俺もがつついてしまう。乱の唇を貪ってい

ると、抱き締めていた体が傾ぐ——そして、布団の上に倒れた。俺がそこでようやく体を離すと、乱は薄暗がりの中で妖艶に微笑んでいた。

「主さんったら、かわいい……いっぱいシよ♡」

それでも俺は理性がはじけた。

「あつ……あつ……♡主さんっ♡」

乱の浴衣の前を寛げ、愛らしい桜色の尖りを舌先で転がす。舌先で尖りの周りをぐるぐると舐めまわすと、その度に乱は喘ぐ。

「ちくび♡♡なめなめやめてえ♡♡♡」

「じゃあこうかな」

「ひゃんっ♡♡♡」

尖りに唇を当てると、思い切り吸い上げる。乱が一層高く声を上げた。空いた手で片側の尖りもピンピンと弾いたり摘んだり。乱は長い髪を振り乱した。

「あつ……♡」

「お前乳首弄られるの好きだよな。気持ちいいんだな」

「うんっ♡主さんに弄られるの大好き♡♡気持ちいい♡♡」

「可愛い奴だな……」

「あつあつ♡♡歯を立てちややだあ♡♡♡」

尖りに甘く噛り付くと、乱がびくんと震えた。

……思う存分乱の尖りへの蹂躪を終えて乱の下半身へと体をずらす。乱の下履きはかわいらしいピンクのレースだ。俺も気に入っている品で、どうやらわざわざ旅行先へ持ってきたらしい。着替えているときは乱のうなじばかり見ていたので気付かなかった。

そのレースの下履きの中で、乱自身が屹立しているのがわかった。

先走りで湿っている。俺は薄暗がりの中で笑んだ。

「乳首を弄られるだけでいつもこれだもんな。いやらしい奴だ」

「主さん好みになったでしょ♡」

「お前ならなんだって好きだよ。愛してるよ、乱」

「僕も……♡」

言いながら下履きを脱がすと、俺は鞆の中から取り出して戸棚の抽

斗にしまっていた瓶を取り出す。潤滑油だ。その瓶を見せながら、俺は寝転がった乱に言う。

「乱、脚を開いて。いつも通り、かわいいペニスとアナルを見せてくれ」

「んっ……こう……？」

「かわいいよ乱。いっぱいかわいいがってやるからな」

開脚した乱のピンク色の乱自身とヒクヒクと蠢く後孔を見ながら、俺は手にたっぷりと潤滑油を落とし——乱の後孔に塗布した。

「あんっ♡♡♡」

「乱、指を入れるよ」

「あっ♡♡主さんの指ふとい♡♡」

「俺のを入れる前に俺の指で馴らしておこうな。いつも通り」

乱のナカに指を入れる。1本、2本、3本。3本目を入れた時点で乱の後孔はグチャグチャで、ナカで掻き回しイイトコロに当たる度に乱が細く声を上げた。乱自身が彼の腹に当たるほど屹立し先走りは敷布を濡らしている。乱は瞳を潤ませながらこちらを見ていた。

「主さんっ、もうっ……♡」

「——そうだな。俺もそろそろ限界だ」

「あっ♡」

ズルリと指を引き抜く。乱がその余韻で少しだけ気をやりそうになった。しかしまだ早い。俺は浴衣の下、下履きからガチガチに屹立した俺自身を引き抜き——乱の両足を抱えた。ぴたりと乱の後孔に先端を宛がう。その感触に気付いたらしい乱が切なげに声を上げた。

「主さん……♡」

「入れるぞ、乱」

「あっ♡♡♡♡♡」

ずぶり、と音が立つほどの勢いで乱のナカに突き入れた。最奥を突く。

そこからはピストンを繰り返した。緩やかに抜いたり、激しく入れたり。それを繰り返すと、乱は敷布を掴みながらガクガクと体を揺らした。それを見下ろしながら思う。

少女のような顔をして、中性的な平たい胸をして、下半身は少年で、堪らない。ああ、俺は永遠の少女にして少年を妻にしたのだ――

「も、イクっ……♡」

「いいぞ、イケ」

そんな感慨から脱して、俺は乱の言葉に頷いた。乱が俺を強く強く締め付け、精を放つ。俺もそれとほぼ同時に乱のナカに射精した。

「ふう……」

息を吐く。乱のナカから自身を引き抜こうとすると、腰に乱の脚が回って来た。そして顔に手を回され深々と口づけられる。

顔が離れると、間近で乱が艶やかに微笑んでいた。

「まだ抜かないで、旦那様♡」

――その一言で、俺自身が再起動した。

むくむくと形を取り戻していった俺は、「えっ」と戸惑う乱に息を荒くしながら言った。

「今のもう一回言ってくれ」

「えつと……『旦那様♡』？」

「いい。今度から2人きりのときはそう呼んでくれ。堪らん」

言いながら俺は乱の脚を掴んだ。

「お前は俺の妻になったんだからな」

「――はい♡旦那様♡」

それから朝まで盛り上がったし、帰宅後も夜になると乱に「旦那様」と呼ばれる度に俺自身が盛り上がったのだった。

了

【笹さきに♀】「なんで?」ってなった

確かに、従兄のことは嫌いではない。

嫌いではないが、結婚しろと言われたら困る。

「待って、お姉ちゃんもいるじゃん。なんで私?!」

腕を掴まれて、困惑する。祖母がにこにここと笑っている。従兄の顔は暗くてよく見えない。私は腕を振り払おうとするが振り解けない。その中で従兄の声がする。

「お前がいいんだ」

それはともすれば情熱的な口説き文句だっただろう。しかし、それは恋愛の意味で好意を持っている相手から言われたら嬉しいと言っただけだ。私は兄弟愛的な慕情は持っていても恋愛感情は到底持てなかった。ただただ困惑する中、従兄が段々近づいてきて——私は叫んだ。

「駄目だって! 私には笹貫がいるから!」

「は?」

気が付けば、布団。敷布団の上に寝ていた私は、掛布団を蹴飛ばしていた。外からは雀の囀り。障子からは朝日が差し込んでいた。海の細波の音も聞こえる。海の景趣にしているからだ。

そう、ここは本丸。審神者として着任して7年経つ、最早古巣と言っている居場所だ。

要は夢を見ていたようだ。

体を起こしながら顔を両手で擦る。溜息を吐いた。

(なんでこんな夢を見たんだ……?)

夢に出て来たのは父方の祖母と従兄。審神者になってからも何年も会っていない。なにせ審神者は軍人のようなもの。盆も暮れもない。法事にもろくに顔を出してない。家族の顔すら思い出すことはなかったのに。蹴飛ばしていた掛布団を引っ張りながら、とにもかくにも身支度を済ませることにした。時計はそろそろ朝食の時刻を示していたし、近侍の蜂須賀が起こしに来る頃だったので。案の定蜂須賀の足音が近付いてきたので、私は「今日はもう起きてるよ」と障

子越しに声をかけるのだった。

そもそも、なぜ笹貫だったのだろうかと思いつながら。

その疑問を一緒に考えてもらおうべく、彼に声をかけることにした。

「笹貫―」

「なんだい」

現在行われている連隊戦。彼――笹貫はこのイベントの報酬でやって来た。やって来てすぐさま部隊長に据えて連隊戦で戦わせた結果、夜光貝が20万個貯まる頃にはカンストしていた。なので既に彼は極の修行まで隠居の身分である。そんな彼が縁側で涼んでいたのを、パピコを持ってやって来た私は彼に半分あげながら尋ねたのだ。

「もし私が無理矢理結婚させられるってなったら、笹貫は止めてくれる?」

笹貫は、パピコの蓋を開けてから、こてんと首を傾げた。

「……そもそも、オレ、主のことまだよく知らないんだけど」

「だよ。ウチの本丸に来て1か月も経ってないもんね。ごめんね、変なこと訊いて」

「なにかあったの?」

そう問うてくる彼は優しい。そもそも刀剣男士は皆審神者、と言うか人間に優しいのだ。その優しさが身に染みるのを感じながら、「単に夢を見ただけ」と苦笑する。

「夢?」

「従兄と無理矢理結婚させられる夢でさ。本当に嫌だったんだけど、なんでか咄嗟に口に出たのが『笹貫がいるから』だったんだよね。不思議」

「……不思議だね」

「そこで目が覚めたからその後どうなったかはよくわからないんだけどね。そもそも従兄とも何年も顔を合わせてないからどうしてこんな夢を見たんだか」

「心当たりは本当はないの?」

パピコを吸う笹貫が問うてくる。私は、考え込んで――ふと、思い

出したことをそのまま口にした。

「ウチの父方、近親婚が普通でさ。祖母も再従弟と結婚して子どももうけたし。そもそも近親婚だったって知ったの中学生ぐらいのときでさ。それで個人的には私は親戚とは結婚したくないな〜と思っただなあ……ただ」

「ただ？」

「従兄が、私が中学生になった頃にセクハラしてきて。母が止めてくれたんだけど……それ以来従兄とは疎遠になったな。『ああ、この人は妹のように接してきた相手を性的な目で見れるんだ』って忌避感が出て……」

口から出るに任せて話したことは、後半になるにつれて私が記憶に蓋をしていたことだった。そう言えばそんなこともあったな、とぼんやり思っていると――笹貫は、声をかけてきた。優しい声音だった。

「パピコ溶けるよ」

「おっと」

「……そうだね、主」

急いでパピコを吸う私に、笹貫は穏やかに微笑んだ。

「それならさ。主が嫌がることなら、助けることにするよ」

さて、それから私が政府の役人から無理難題を押し付けられたり現世の遠征先でナンパされたりすると笹貫が庇ってくれるようになるのだが、それはこの先の話である。

了

【どうらぶホラー？】御役様と生き稚児

ニユースを観ていたときのことだ。主が言い出した。

「そういや俺、昔生き稚児やったことあるんだよな」

そのニユースは丁度、京都の祇園祭について報じていた。

主は見た目こそ幼いが実年齢は10代後半だ。なので喋り方も昔に比べればしっかりしていた。多少肉体年齢に引きずられているところはまだあるが……閑話休題。

「生き稚児とは、祇園祭で選ばれた男児の役目だろう。主は第3新東京市出身だろう？ 京都とは程遠くないか」

「それに生き稚児とはまんしょんが建つほどの金がかかると聞くぞ」
会話に参加してきたのは、縁側で饅頭を食べていた三日月だ。どうやら背中でテレビの音声を聞いていたらしい。主は苦笑した。

「勿論祇園祭ほど本格的なところじゃなくて、地方だよ。親戚の家で子どもの成り手がなくて言われて、俺が引き受けたんだよね。小学校に上がる前の話だけど。ウチは親戚の中でも金がある方だったから。本当は年頃の兄ちゃんがやるはずだったんだけど、知っての通りウチの兄ちゃんメチャクチャ体弱くて……いつ体調を崩すかわからないから、その点健康優良児だった俺にお鉢が回って来たわけだよ」

「なるほど」

「兄君は精神面は玉鋼だが病弱だからな」

言われて思い出すのは、嘗てウチの主がこんのすけに洗脳されていたとき。弟を救うべく真名はおろか諱まで近侍に渡した主の兄の背中だ。線の細い美少年だが、三日月の言う通りメンタルは玉鋼だった。その後神隠しされたとは聞かないので、刀剣男士との信頼も篤いようだ。まあ本丸それぞれだ。俺は「それで」と問うた。

「生き稚児と言うのは大変だと聞いたが」

「大変だよー。祭りの1か月前から精進しないとイケなくて。未就学だったのに母さんに抱っこもしてもらえない。そもそもその親戚の家で過ごすさなきやいけなから父さんや兄ちゃんにも会えなくてさ。

親戚の男に世話してもらいながら過ごすわけ。地面にも立てないし」「その辺りは祇園祭とあまり変わらないんだな」

「ああ、でもやらされることは全然違うな」

ふと思いついたように、主は顎に手を添える。その仕草が外見年齢と釣り合っていないように、主は顎に手を添える。その仕草が外見年齢のあとの話を聞いたあとは笑いなど漏れることはなかった。

「強力さんに乗せられた神輿に担がれて山の神社に行くんだけどね。そこのお社って言うのが変わってて、鳥居がドーナツツみたいなんだよね」

「ドーナツツ？」

「あの、トンネルの入り口みたいなの……今絵に描くね」

言いながら主は、その辺りにあったメモ帳を一枚剥いでボールペンで何やら描き出した。

……主の絵心の問題だろうか。それはなんとなく冒瀆的な形をしていた。敷石の上に半円状の物体が描かれている。ただしそれはただの半円ではなく、ボコボコとところどころが出っ張っていた。主の書き損じだろうか？ 目玉があるようにも見える、しかもいくつも。

主は心なしか得意げに言う。

「我ながらうまく描けた」

「これがか……？」

いつの間にか振り向いていた三日月が眉間を顰める。奴も冒瀆的……否、瀆神的なものを感じているのだろう。妙な話だ、神社の話のはずなのに。

主は俺たちの困惑に構わず続ける。メモの絵を掲げたまま。

「この鳥居を潜って、洞窟にできたお社で生き稚児は一晚過ごすんだ。寝ててもいいし起きててもいいって言われて、俺は眠っちゃったなあ」

「まあ7歳にもなっていないなかったんだらう？ 疲れていただらうし眠ってしまったって……」

「なんかよくわからない思念？ テレパシーみたいな浴びて疲れちゃってさあ」

とんでもないことを言われた。三日月と並んで目を剥くと、主は戸惑ったように言う。

「俺も困ったんだよ？ うーん、あれを言語化するなら『私の憑代になりなさい』だったかなあ。なんだか心音も聞こえて来て……憑代、もあまり正確じゃないな。そんな一時的なものじゃなくて、俺を器にしようとしてたみたいな……」

「おい」

「ああでも断ったよ」

「断れたのか?！」

三日月の声がひっくり返った。わかる。それぐらい絶望的な状況だった。主はけろりとしたものだ。

「断れたというか、無理矢理押し入って来ようとしたからエイツてやったらなんか弾けた。そしたらどつか行つて、気が付いたら寝てて朝だった」

「……主らしい……」

思わず唸る。

さて。先述の通り、嘗て主は洗脳されていた。これは主があまりに強力な霊力を持っていたがゆえに利用されるためだった。具体的に言うとなんの準備もなく刀剣の付喪神を顕現させられるぐらい。これはガソリンの入っていない車を鍵もなしに起動させるようなものだ。主のような者を聖杯、夜の愛し仔など様々な名で呼ぶが、1番近いのは魂蔵持ちだと言われている。検査の結果、主は霊力のある限りいくら殺されても死なない身体だとわかったからだ。これは魂蔵持ちの特徴だ。

(なるほど、その神……と思しき存在は主の霊力に目を付けたんだな)俺は納得した。そして安堵した。主は洗脳を受けたものの、その強すぎる霊力のため本来は外部からの干渉を弾くのだ。大抵の怪異は彼に干渉できない。この本丸は主の霊力で満たされているので、オカルト現象が起きたことはほぼない。全くないと言うのがかなしいところだが。

それで俺は尋ねた。

「そう言えば、その神の名はなんというんだ」

「えつとねえ……『御役様』って名前だったな」

主は言った。

「通称ミヤクミヤク様だと思ったよ」

了

御役様（通称ミヤクミヤク様）

・とある雪深い地方の土地神

・元は「御役目」を背負っていた大いなる神の下役だったが、この土地に来て祀り上げられ神性を得た

・作中では触れられなかったが恵みも災いも為す神。生き稚児、とされているが実際のところは生贄である。普段は人形で済ませられるが不定期に子どもを欲せられる

・恵みを為すときは「実葉様」、災いを為すときは「深厄様」と呼ばれる。この2つの性質を合わせて「ミヤクミヤク様」と呼ばれる

・そのお姿を直接見たものは心を連れて行かれる——要は発狂する

「どうらぶホラー」くりちやんと僕 苦【現代パラレル】

卵が先か、

時々語っていたことだと思っけども、ウチではくりちゃんが調理担当だ。僕はどちらかと言えば掃除や洗濯の担当。父は偶に気紛れに皿を洗うが乾いた食器の上に濡れた食器を重ねるのはやめて欲しい。閑話休題。

そう言うわけで、安売りしていた食材や親戚の農家からもらった野菜などを繰り回して日々の献立を立てるのもくりちゃんだ。主に夕食が担当で、朝食と昼食は家族が各々で勝手に食べている。朝食の白米はくりちゃんが夜に米を研いで予約炊飯をしている。それともかく。

くりちゃんは父が夜勤のときは手を抜く。野菜が欲しいと言う父に対して、くりちゃんと僕はまだ動物性たんぱく質だけでも大丈夫だからだ。そのうち駄目になってくるのだろうけど……それでくりちゃんは、彼と僕のと きだけは卵料理を作る。本当に簡単なもので、目玉焼きか炒り卵か……気が向けば卵焼きを作る。変則で2人分のパスタと言うこともあるが、今回重要なのは卵のことだ。

その卵は、安売りの日にくりちゃんがスーパーから買ってきたごく普通の10個入りパックの卵のはずだった。くりちゃんはいつも通りに卵を割った。

出て来たのは髪の毛だった。

ぞるんと長い黒髪。それが黄身や白身に混じってボールに流れ出て来た。

くりちゃんの声なき悲鳴。僕は偶々テレビを観るためにリビングにいたので気付けた。そしてその現場に駆け付けたのだった。

……僕はそっと、ゴミ箱に卵と一緒に髪の毛を捨てた。

さすがにその晩は卵料理を作る気にはなれなかったようで、ミートソーススパゲティになった。

以来、くりちゃんが卵を使うのを躊躇っているのを僕は何度も目撃することになる。

老いの繰り言

さて。僕たちの地元は田舎だ。どれぐらい田舎かと言うと、市内を移動する手段がほとんどバスしかないという点だ。私鉄はあるのだが、それもほとんど使われないので万年赤字だ。

くりちゃんもそのときバスに乗っていたという。

家に帰るためのバスで、夕暮れ時。くりちゃんはマナーを守る子なのでスマートフォンを弄することもなくぼんやりと窓の外を眺めていたらしい。いつも通りの地元の風景。

不意に、気付いたと言う。

くりちゃんは後ろの方の席に座っていた——前半部分は優先席なので——らしい。その後ろの席から、ブツブツと声が聞こえて来た。それはどうやら老婆の声のようで、何を言っているかまでは聞き取れなかったと言う。くりちゃんは不気味に思ったが、それだけだった。田舎ゆえ、不審者は多い。そう言うものだ。慣れてしまったりくりちゃんはこれもそういうことだろうと思った。

くりちゃんが降りるときまでその声は続いていたらしい。鞆を片手に立ち上がったところで、ふと後ろを向いた。

後ろの席には誰も座っていなかったという。

ヌシ

くりちゃんが小学校1年生のときのこと。

くりちゃんとは高校まで同じ学校だったから知っていることだけど、ウチの小学校は1年の学年のみ校舎が振り分けられている。例えて言うなら2年生以上が東校舎で1年生のみ西校舎の1階。具体的な方角は忘れたけどいたいこんな感じ。

それで1年生の教室の外は4クラス分ぶち抜いた土地が庭になっ

ている。

そこに、コンクリートに池がある。2つの長方形の短い方の辺の角を重ね合わせたような形だ。これが僕の頃から変わらず淀んでいて、何が棲んでいるかもわからない。藻で覆われているような状態だと言う。大人になった今は、あれは危ないんじゃないかと思う。小学校1年生の子どもなら簡単に溺れてしまう。しかしくりちゃんの頃にも変わらずそれはそこにあった。

これは水に対する恐怖心なのだろうか。僕の頃から変わらない怪談がある。

この池には鰐がいると言う。

地下水道の都市伝説のようだけど、そんな話がある。勿論鰐など棲めるほどの大きさではない。それに鰐がいればあんな浅さの池など簡単に出て来てしまう——要はその話が肝らしい。

くりちゃんはこの頃からクールだったので、そう言う話は信じていなかった。幽霊や妖精の類を感知できるからこそそのクールさだと思う。

けれど1年生の秋も深まった頃。くりちゃんが何気なく池の傍にいたとき。

何かが背を見せたという。

その顔を見ることはできず、くりちゃんが見たのは背中。それも随分大きくて、そのあとシンン……と池は静まり返った。

そのときのことを思い出して語ったくりちゃんは、最後にこう締め括った。

「多分、あれは鯨だったな」

引き潮

ウチの母は亡くなっている。もう9年前のことだ。持病が悪化したことだった。

そういうわけで我が家には母の仏壇がある。父も亡くなればここ

に収まることだろう。まあ、人間なんていつ死ぬかわかったものじゃないから僕やくりちゃんが先に入ることになるかも知れないけど。

それはそれとして、日頃仏壇のお膳を取り換えているのはくりちゃんだ。これは特に取り決めをしたことではなく、ただなんとなくくりちゃんが担当しているだけのことだ。僕はと言えば、あまり死に纏わることに関わりたくないと言うのが本音で、週に1回線香をあげるのがいいところだ。お盆の迎え火や送り火もさして熱心ではない。くりちゃんはと言えば、見えるからだろうか。割とこういった先祖崇拝的なことに熱心だ。

そんなくりちゃんが、その日もお膳を変えていたときのことだ。

抽斗から替えの水入れを取り出したとき。ふと、くりちゃんは波の音を聞いた。

不思議に思っただけの水入れを見ると――器の中で、水が潮のように押し寄せては引いていった。

それは一瞬のことで、くりちゃんが目を瞬くと元の空の器だったという。

さて、母はどこにいるのだろう。

探し物はなんですか

仏壇繋がりになる。

唐突だが、くりちゃんが咳喘息になった。否、喘息自体は以前から発症していたのだけど、ここ数年はなんともなかったらしい。ところがこの季節の変わり目に激しい咳をするようになった。しかし熱はない。なので近所の呼吸器科に受診したところ、「咳喘息がぶり返した」と言うことだった。

そういうわけで処方されたのは、咳止めと吸入薬。詳しいことはわからないけど、後者は長期的に服用することでじわじわと喘息の炎症を抑える、らしい。朝晩1回ずつ吸入するもの。要は中断するとまずい。

まずいのには、くりちゃんはそれを紛失してしまった。

くりちゃんの過失はあまりない。いつも通りテーブルの上に置いていた。その日は美容院に行って散髪してもらった。ところでくりちゃんとは同じ美容院に行っているのだけど、くりちゃんが美容師さんとどんな話をしているかは知らない。多分黙々と雑誌を読んでいる気がする。それはともかく。

夜になってくりちゃんが薬を使おうとしたとき、はじめて紛失に気付いた。くりちゃんはまずい、と思った。探し回ったし、まさか飼いや猫が玩具にした可能性も考えて常に扉を開け話している父の部屋まで訪ねて猫の様子を見たが特に何もなかった。なかったから困った。元々この時点でかなり眠かつたくりちゃんは諦めて寝てしまった。

翌朝、僕が訊かれたけど勿論わからない。否、心当たりはちよつとあつたが、僕の心当たりはと言えばテーブルにぶつかつて吸入薬を転がしてしまい、それを拾い上げて元の位置に戻した……というぐらいだ。くりちゃんはこの日は祝日で病院が休みだったので、翌日紛失の旨を伝えて病院で吸入薬をもらいにいく心構えをしたそうだ。それはそうとして仏壇のお膳を替えようと、替えの器を取るために抽斗を開いた。

果たして、そこに吸入薬はあつた。

断つておくが、僕は先述の通り仏壇にはあまり近寄らない。少なくともこの日の前日からこの日にかけては一切近寄っていないのだ。そして帰って来た父も「入れてない」と言う。

では誰がここに入れたか。よりにもよつて仏壇の抽斗に。

「……母と言うことしておくか」

「普通にホラーなんだけど」

それはそれとして、わかりやすい場所なので今後も吸入薬は仏壇の抽斗に入れておくつもりらしい。ちよつとやめて欲しいな、と思つた。

了

「とうらぶファンタジーパロ」エルフ大俱利伽羅と不死鳥（機能不全）燭台切、ユグドラシル薬師生活。

物心ついた時から、家族は森の植物だった。木々であり、草花であり、彼らと共生する動物や虫たちだった。

当たり前のように与えられていた木の家で、彼らに与えるべきものを与え、そして彼らからその倍の恩恵を授かる。そうして日々を生きていた。日が昇れば起き、自然と声もなく戯れ、日が沈めば眠った。そんな日々の中で、自身がエルフであることは当然のように自覚していた。自然を司る、あの天を覆う世界樹の森で暮らすエルフ族。すべきことは自然と暮らすこと。ただ、それを繰り返していた。

変化は、唐突に落ちてきた。

「……何だ、これは」

何十年ぶりに出した声だろう。幼い見目の自身に相応しい幼い声は、地面に陥没したそれに放たれた。

見上げれば、焦げた痕のある木々の枝。名残か、少しばかり「それ」からは熱を感じた。黒い装束、黒い髪の子。地面に倒れ伏した彼の両手は、赤い炎の翼だった。

次第に鎮火していく、それに恐る恐る歩み寄る。すると、ゆっくりと上げられた顔——右目は、血と泥に塗れて見えない。しかし、その左目は、自身と同じ金色の目をしていた。

今から数百年前の話である。

「おー、やってるか大将」

「鶴さん、うちはおでん屋じゃないよ」

鈴が鳴る。扉が開かれたのち、軽快な声をあげたのは白い装束の青年だ。彼は眼帯の青年——燭台切に「まあいいじゃないか」と言いながら、その辺りにあった丸椅子に勝手に腰かける。店内は薬草の匂いで満たされていた。

ここは薬局「伊達組」。ユグドラシルの木の根元で営まれている、エルフの店だ。なお旅人などからは「高い効き目の薬があるアイテム

屋」と呼ばれている。

正確にはエルフと謎の青年が営んでいるし、経理は後者が行っているようなものだが。

白い装束の青年——鶴丸は刀を膝に乗せながら言う。

「相変わらず伽羅坊は経営をお前さんに投げっぱなしか」

「伽羅ちゃんは世俗のことには疎いから……」

「そういうお前さんも元は天界の出身だろう」

「僕はもう順応しちゃったからね……」

「世俗に疎くて悪かったな」

のれんを掻き分けて、褐色肌の青年がやって来る。耳の長いその青年は、袖を捲った左手に竜の彫り物があった。世間一般のイメージするところのエルフとは少々趣が違うが、世界樹を最奥に擁する森に住まい、自然を友とする彼はやはりエルフだった。彼は紙袋に入ったそれをカウンターに置く。

「いつもの湿布薬だろう。まったく……そろそろ隠居したらどうだ」

「ははは！ 天狗にそれはないさ！ ありがとな伽羅坊、お代は……」

「光忠に任せてる。俺は薬草を採りに行ってくる」

そう言って大俱利伽羅はのれんの奥へと再び姿を消した。やがて足音が遠のき、裏口の扉が開かれ閉じる音がしたのち。燭台切は苦笑した。

「いつも通りでごめんね、鶴さん」

「なに、伽羅坊のやりようはこの数百年で慣れっこだ。寧ろ明るくなった方だろ、何せ薬局を開いたぐらいだ。あのときも聞いたが、提案したのはお前さんだが決めたのは伽羅坊なんだろう？」

「そうだね」

銀貨を取り出す鶴丸に、それを受け取りながら燭台切は懐古した。

「伽羅ちゃんと出会ってから、もう何百年も経つんだなあ」

燭台切が目を覚ましたとき、木々や花々、薬草の匂いと小鳥の囀りを感じた。天界とはまた異なるそれに、彼は慌てて起き上がった。

そこは寝台。見渡せば、部屋の中には簡素な家具が並ぶ。窓辺では

小鳥が2羽、止まっていた。

そこで気付いた。右目が見えない。触れると、そこは包帯で覆われていた。その手にすら爪先まで包帯が巻かれている。体の彼方此方に傷があるのが痛みでわかった。

ここはどこだろう。窓から外を覗いた。小鳥が飛び立つ。見えるのは、果てが見えないほど大きな大きな木——あれはユグドラシル。自分は世界樹の傍に落ちたのか？

「なんだ、目を覚ましたのか」

不意に扉が開く音がする。燭台切が慌ててそちらを向くと——若い少年がいた。褐色の肌、長い耳。金色の目は自分と同じだ、と燭台切は思った。少年は盆を持っていた。盆には包帯と湿布らしきものがある。

少年は燭台切の横たわるベッドのサイドボードに盆を置くと、「起きてるなら丁度いい」と丸椅子を引っ張って来た。

「包帯と湿布を替えるつもりだったんだ。まず左腕を寄越せ」

「あ、うん……その、君……ここはどこなんだい？」

「ユグドラシル外周東のどこか」

「大雑把だね」

「俺も詳しいことはわからない。物心ついたときからここで暮らしているから」

「……君、いくつ？」

「130歳」

「わあ」

長い耳を見た時点で察していたが、やはり人間ではなかったらしい。燭台切は納得しつつも、ふとのちほど「軽率だった」と後悔と反省することになる発言をしてしまった。

「ダークエルフかい？」

燭台切の包帯を解いていた手が、一瞬止まった。数秒後、その手が進んだ。

「……そういうことにしている」

「？ そっか。あ、僕は燭台切光忠。一応フェニックスだよ」

「フェニックス？ ああ、そう言えば燃えていたな……しかし医者には一応診せたが、再生していなかったぞ」

それに、燭台切はふと苦笑した。諦めが大分籠っていた笑みだった。

「ああ……天から落つことされたときに奪われたみたいだ。再生の権能を」

「なぜ？」

「ちよつとだいぶ恥ずかしい失敗だから言いたくないな……それより君の名前を教えてよ」

「……俺は大俱利伽羅」

「それじゃ伽羅ちゃんって呼ぶね」

「なんでだ」

「僕のこと光忠でいいよ！」

それから大俱利伽羅は、燭台切の面倒を見続けた。燭台切は言いそびれたが、払える礼もない。それを口にしたこともあつたが、「暇潰しのようなものだ」と燭台切の傷口に薬草を塗布した湿布を貼るのを繰り返した。そう言えば、と燭台切は問うた。

「その薬はお医者さんに処方してもらったものなのかい？」

「いや、俺が作った。こんな森の奥までそうそう医者に来てもらうわけにいかないからな。……安心しろ、俺の薬は逆に医者が買っていくぐらいだ」

それを聞いて、燭台切は思った。薬草を扱えるとなると、大俱利伽羅は自然に寄り添うライトエルフに近いように思える。ダークエルフはどちらかと言えば世俗に強いと燭台切は聞いていた。こうして森の中で暮らしている辺り、彼はライトエルフなのではないか？ しかし外見の特徴がダークエルフのそれだ。燭台切は徐々に治っていく傷を感じながらずっと考えていた。出される食事は野菜料理（偶に魚）がメインだったが特に問題はなかった。寧ろ野菜だけでこれほど美味しい料理を作れるのかと感心し、燭台切は彼に料理を教えて欲しいと思ったものだった。天界では上げ膳据え膳だったが、自分で作るのも楽しそうだと思ったのだ。

そして、歩けるようになってから気付いた。大俱利伽羅は自由にしていると言っていたが最初は遠慮していたものの、なにせ痛みがなくなってくると暇になるもので家中を歩いた。

そこで、干し肉を見かけた。さらに弓と矢を見つけて、驚いたものだった。

まず干し肉は、恐らく鳥肉。フェニックスと自分が言ったから鳥肉を出して来なかったのだろうと燭台切は察した。短い付き合いだが、彼がそういう気遣いのできる人物だと察していた。今度「人間が猿料理を食べるようなものだから気にしなくていいよ」と伝えなければ、と言う思考は浮かんだが、それよりも弓矢に気が惹かれた。

それは手作りの弓矢のようだった。ナイフで削った跡が見える。弦は麻だろうか。否、それよりも、それよりも——弓矢を使う。しかも手作りの。それは即ち——

(伽羅ちゃんはライトエルフなのか……?)

ライトエルフとダークエルフ、どちらが弓矢を使うかと言われると前者だ。孤高を保ち森の中で自然と寄り添い狩猟をして暮らすのがライトエルフ。特に弓を得意とするのが森で暮らす者の中でも特徴だ。そして嘗てはライトエルフと同じ過ごし方をしていたが、やがて人間と商売をして過ごすようになったダークエルフ。どちらの生き方が正しいとは燭台切には言えない。しかし彼らが相容れないだろうというのは察しがついた。

燭台切は、自分が目を覚ましたときに言った言葉を憶えていた。

『ダークエルフかい?』

そう言ったときの、大俱利伽羅の複雑そうな様子。

「プレイバシーに関わることもかも知れないけど、君はひよっとしてライトエルフに属する者なのかい?」

その日の晩。食卓に着いて食事を摂れるようになっていた燭台切は、向かいに座ってスープを飲む大俱利伽羅に尋ねた。大俱利伽羅は珍しく目を瞬いたが——

「……何か見たか」

「手製と思しき弓矢を」

「……森で狩猟して暮らすダークエルフもいるだろうに」

「でも、君は今否定しなかったね。……最初に、だいぶ失礼なことを言ったと思ってるね。君に謝罪するついでに訊きたい、と思ってる」

「物好きだな」

「それでもなければ天から落とされてないよ」

「それもそうだな」

ふ、と大俱利伽羅は口元を緩めた。スプーンを皿に沈めたまま彼は言う。

「生まれはライトエルフだったと聞いている。ただ、生まれつきこの姿だった。両親はどちらも白い肌に灰色の目のライトエルフだったらしいのにな。詳しいことは俺も聞いていないが……相当揉めたよ。うだ。普通は不貞を疑われるだろうからな。それで結果として、子どもを放逐することで片付けたそう。2度と里に踏み入れないように刻印を刻んで」

そんな、という声を燭台切は呑み込んだ。その隻眼には大俱利伽羅の左腕の刺青が映っていた。

「……俺をここで育てたのは祖父だった。エルフの血が流れてる親戚も近くにいたし、世界樹の森は優しかった。俺は教えなくても弓矢が扱えた、と祖父は言っていた。結果論として、俺は確かにライトエルフなのだろうとも……でも、今はもうどうでもいい話だ」

大俱利伽羅はぐつとスプーンを握り込む。まったくどうでもよくない話なのだろうとは燭台切も察しがついた。130歳……ライトだろうとダークだろうと、エルフならば思春期だろう。

燭台切は、それきり黙ってしまった大俱利伽羅に、何と声をかけるか迷った。迷ったが、確かに言えることがあった。

「そうだね、君にとって今はどうでもいい話かも知れない。でもね、伽羅ちゃん」

燭台切は微笑んだ。

「君がここにいてくれて、僕は助かったんだよ」

大俱利伽羅は、「そうか」と小さく頷いた。

「……傷は治ったな。しかし不死鳥だと言うのに人間並みの治りだっ

たな」

「再生の権能が奪われたって言ったでしょ……」

それから数週間後、燭台切の傷はほぼ完治した。唯一、右目だけは治らないだろうとされたが。今はまだ包帯を巻いている。体は動かせるから、街に降りて職を得たら眼帯を購おうと燭台切は考えていた。天に戻ることはできないので。

大俱利伽羅はこれからの身の振り方を考えている燭台切をじっと見ていた。そして言った。

「光忠。ここで暮らすか」

「えっ」

「……暮らすには俺ひとりで十分だが、さすがに身一つで放り出された奴は見過ごせない」

それは、大俱利伽羅なりの不器用な優しさだろう。燭台切はそれに感銘しつつ、少し迷ってから――

「タダで暮らすのは少し気が引けるし、働きたいんだけど。そうだ、伽羅ちゃんの薬を売るのは？ 僕はそれを手伝うから、なーんて」

「ああ、その手があったか。それならお前が交渉役になってくれ。俺より世の中を知っているだろう」

あつさりそう言うので。燭台切は後に引けなくなり、「それじゃ、宜しく……」と笑うのだった。

「それから数百年か」

「あつと言う間だったねえ」

茶を飲みながらまったりと過ごす。大俱利伽羅はまだしばらくは戻ってこないだろう。鶴丸は燭台切に出された茶を飲みながら笑う。

「俺も話題の薬局に来てみたらまさか光坊がいると思わなかったな。天界から追い出されたとも聞いて驚いたな！」

「もう昔の話だし……」

「何より傑作なのが」

鶴丸はコップを片手ににやりとした。

「お前さんがうっかり処女神をナンパして怒りを買って天から落とさ

れたってあたりだな！」

「ナンパのつもりはなかったんだよ……挨拶のつもりだったんだ……もうその話はやめようよ……」

「——実際、戻るつもりは本当じゃないのか？」

鶴丸は表情を引き締める。コップをカウンターに置いた。

「お前さん、不老ではある。しかし不死ではない。再生の権能を奪われたんだからな。このまま地上で暮らしていれば、いつかは……」

「いいんだよ、鶴さん」

燭台切は微笑んだ。受容の笑みだった。

「ここが僕の終の棲家だ」

「……そうか」

「おい、胃薬をもらえるか——なんだ鶴丸、来ていたのか」

「ああ長谷部くん」

——ユグドラシルの根元の東側。そこで森に溶け込むような造りの薬局があった。エルフトフェニックスの青年が営む、穏やかな店だった。

End.

【さきに水R―18】翌朝、障子を開けると笑顔で刀を抜く清磨の姿が！

紆余曲折を経て、俺と水心子は両思いとわかり今夜、初夜を迎えることになった。

布団の上に寝間着姿で、水心子は顔を赤らめて俺を見詰めていた。置き行灯の仄かな明かりの中、その姿はとてもかわいらしい。俺はそつと手を取る。

「優しくするから」

「……うん。我が主」

そして唇を重ねた。

ただたどしく舌を出してくる水心子のそれを軽く飲み、吸い付き、舐める。水心子の口腔を舌で蹂躪しながら、ゆつくりと布団の上に押し倒した。寝間着の胸元をはだけさせると、乳首が見える。それを指で摘んだ。びくと水心子の体が跳ねるが、俺が今水心子の口を口で塞いでいるため喘ぎ声はしない。それでも目をぎゅつと瞑って何かに耐えているようだった。それが面白くて、指先でコロコロと乳首を摘んだり抓ったり。体をびくびくとさせる水心子は、俺がようやく口を離すと、糸の垂れた顔で眉間を顰めていた。

「主、あんまりそこを弄らないでほしい……」

「ん？ どこかな？」

「ひゃうっ！ ……んんっ」

指先でピン！ と弾くとひときわ高く声が上がった。それから恥ずかしそうに咳払いをする。それが大層愛しくて、俺は彼の俺から見て右側の乳首に吸い付いた。

「ひゃあ、や、やめ……んあっ」

舌先で勢いよく吸い付く。恐らく母の乳房に吸い付く赤子よりも勢いが良かっただろう。舌先で転がす度に「あんっ、あっ」と声がかかる。乳首が弱かったとは。今後参考にしておこうと脳内のメモ帳に書き留めつつ、左手で彼の空いている乳首を弄った。爪先でかりか

りと引つ搔くと、やはりその度に体が跳ねた。

「あ、あ……」

「いやらしくていいね、水心子」

「いやらしくなんか、なっ……あっあっ、あっ！」

びくん、と一際大きく体が跳ねたかと思うと、水心子はやや呆けた。

それを見て、俺は水心子の寝間着の帯を解き下履きの中に手をつ突っ込む。そこは粘っていた。俺はにやりと笑う。

「乳首だけでイツちやった？ 気持ちよかったんだね、かわいいね水心子」

「か、かわいくなど……—ひうつ！」

「そんなかわいい水心子にもっと気持ち良くなってもらおうね」

言いながら下履きを脱がせた俺は、水心子の股座に顔を埋め、水心子自身の亀頭に舌を這わせた。

それから竿を舌で舐りはじめた俺に、水心子は焦ったように言う。

「だ、だめだあるじ、そこはおしっこするところ」

「人間はこういうことをして気持ちよくなるんだよ。今度水心子も俺のをなめて欲しいな」

「が、がんばる……—あっ」

次のセックスを確約してから、俺は口の中に水心子自身を啜えこんだ。少し苦しいが、水心子のそれは平均よりやや小さいのでそこまでではない。何度も口で扱くと、水心子は喘いだ。

「あ、だめだ、だめだ、あるじっ、そこっ」

先走りが口の中を満たす。それを吐き出して水心子自身を滑らかにしながらさらに舐った。

水心子が背を撓める。俺の頭を脚が挟んだ。

「出る、でちやう」

「いいよ、口の中に出して」

「あ——っ!!」

次の瞬間、新鮮な精液が俺の口に流れ出て来た。

「……出しちやった……」

「美味しい精液を有難う。それじゃ……次はこっち行こうか」

「え？ あっ」

言いながら水心子をうつぶせにさせる。尻を突き出させたところで、寝間着を取り払った。

水心子のかわいらしい尻が薄暗がりの中で白かった。

それに舌なめずりをしながら、俺は水心子の臀部を掴む。くぱくぱと、入れられることを知らない後孔が無垢にあどけなかった。

——これから、自分が汚すのだ。

堪らない背徳感を覚えながら、戸惑っている様子の水心子の横から潤滑油のボトルを手取る。そして手の中で温めたのち、水心子の後孔にそれをまぶした。水心子は驚いたようだった。

「あっ!? なんか……ぬるぬるしたものが……」

「ローションだよ。これで今から水心子のお尻の穴を解すからね」

「え、あ、——あっ」

そして指を突き入れた。

潤滑油でぐちゅぐちゅと音を立てて指を掻き回すと、そこは酷く狭い。めりめりと音を立てるように突き進むと、水心子がシーツを掴んで声を上げる。

「あっ……な、んか変」

「どう変なのかな」

「圧迫感が……」

「ふうん。——指、増やすよ」

「あっ!」

2本目の指を突き入れる。後孔の中でピースするように押し開くと、「あ、そこっ」と声上がる。それで俺はにやりと笑った。

「ここか。」

「ここが気持ちいいの?」

「なんかっ……ぞくぞくするっ……」

「そっかそっか。じゃあもっ指を増やそうね」

「えっ、あ——……っ!」

3本目の指を滑り込ませた。水心子が反応した部分を指で容赦なく押し上げる。そして同時に水心子自身に触れると、それは既に形作

りはじめていた。順調に感じているらしい。そこで一層強く押し上げたのち、指を引き抜き——俺は自分の前を寛げた。水心子の痴態ですっかり臨戦態勢だ。指が抜けたことで気が抜けたのか、ゆるゆるとこちらを振り向く水心子。それに、ぎよつとした顔をした。

「あ、あるじ、それは」

「俺の自慢の巨砲だよ。今から水心子の中に入れるから」

「むり、そんなのはいらない」

「大丈夫、そのために今慣らしたからね。それじゃ、入れるよ」

「まって、まつ、——っ!!」

俺は水心子の躊躇の声に構わず、ずん、と自身を突き入れた。指で馴らしきれていなかった部分がめりめりと音を立てるように開く。同時に水心子の「イイトコロ」も刺激したらしく、水心子は大きく喘いだ。

「あっ! あっ!! わがあるじ、それは」

「水心子のナカ気持ちいいよ、やっぱナマはいいね」

「あ、あるじ、こういうときはこんどーむなるものをつけるものだ」と

「大丈夫だよ水心子」

俺は最奥を突くと、彼が見えないことをいいことにやりと笑った。自分でもあくどい笑みだったと思う。

「好きな人同士のえっちならゴムをつけなくてもいいんだ」

「そ、いうものなのか」

「そういうものだよ、——さあ、ラストスパートだ」

「あっ!」

俺は一旦ギリギリまで引き抜き——ずどんと再び最奥を突いた。

「あっ! あっ! あるじ、あるじっ」

「水心子、ぎゆうぎゆう締め付けてくれるね。気持ちいいよ」

「ほんとう……? よかった……—あっああっ、あっ! またおつきく、—!」

けなげな返答に、思わず俺の息子が大きくなる。お前の中で立派に育ったよ、と思いつながら、俺は水心子が精を吐き出すと同時に俺自身も種を水心子のナカに噴き出した。

……それから何度もセックスしたのち。びしょ濡れの布団の上でくつたりと横たわった水心子の口を引き寄せる。唇を重ねると、水心子はゆるゆると微笑んだ。

「わがあるじ」

「なにかな」

「……ぼくのおしり、あるじのせーえきでいっぱいだから……かきだしてほしい……」

——見ると、確かに俺が散々吐き出した精液でいっぱいではみ出ししていた。俺はにつこりと微笑み、水心子を抱き上げた。

「わかったよ、掻き出してあげるね」

そして私室の浴室に入ったのち、水心子の尻から掻き出しているうちに再びムラムラとして来た俺たちは何ラウンド目かも憶えていないセックスを再開したのだった。

了

【江きこ♀】白雪姫コンプレックス

「煙草を喫ったら、早く死ねるから」

はじめて喫煙をしているところを見たとき、咎めたことへの、主の返答がそれだった。

その日の夜も、主は縁側に腰かけていた。鈴虫が静かに輪唱している。アルミの灰皿を傍らに置いた彼女は愛飲している煙草を1本口に啜えようと、人差し指を巻紙の先端に添えた。

指が、見る間に赤く染まる。それは血の色ではなく、高温の色だった。そして発火し、煙草に火が付く。それを深く深く肺腑に吸いこんだ審神者は、超高温の指先をもみ消すようにこすり合わせた。あつと言う間に温度が下がったようで、赤みが消える。

体温を異常なほど上下させられる——下は零下30℃、上は少なくとも260℃以上——、彼女の異能の一端がこれだった。彼女はこれを「シガーソケット替わりになって丁度いい」と評している。

煙を吐き出した彼女は、「それで」と、ようやく傍に控えていた私を見た。

「また煙草を喫うの止めに来たの？ 飽きないね」

「いえ、もう止めるのは諦めています……あなたのその匂いにも馴染みましたしね。今日は別件です」

私は、切り出した。

「今日、政府で妹さんに会われたでしょう。そのときのこと気が気にかかっていました」

「——楽しい話じゃないよ。あの子との会話でもわかったでしょ、ウチは家庭環境がちよっとアレなの」

紫煙を燻らせ表情を隠す、彼女の得体は何年も仕えて来た身としても知れない。

超能力と言っているいい異能ゆえに、怪奇対策部に駆り出されることもあるこの主。聞いたことのあるのは、本来はパイロキネシスの家系だということ。

その本来の「パイロキネシス」の異能を以て、怪奇対策部に駆り出

されるようになったのが彼女の妹だった。面差しもストロベリーブ
ロンドの癖毛も、よく似ている。ただ、喫煙者と言うだけでなく荒ん
だ印象を他者に抱かせる姉に対し、妹はいかにも「人に愛されて育ち
ました」という風情だったが。

その妹は、風邪かアレルギーかは不明だがマスクをつけていた。そ
れ越しに彼女は姉に語り掛けた。

「久しぶりだね、お姉ちゃん」

「……LINEでは聞いてたけど、本当に審神者になったんだね。イ
ギリスで魔法使い関係の仕事に就くと思ってた」

「もう2年経つよ。私の卒業時点で、日本で魔法使いが求められてる
と聞いてね。まあ、まさか元ブラック本丸を宛がわれると思わなかつ
たけど」

そう言つて擦ったように隣の山姥切国広を見やる妹。彼も苦笑し
ていた。主は言う。

「そっか。元ブラック本丸、って聞いてたから心配はしてたけど……
その様子だと大丈夫そうだね」

妹の傍らには極の山姥切国広がいた。彼が彼女の初期刀なのか元
ブラック本丸にいた彼なのかは不分明だったが、極になっているとい
うことはそういうことなのだろう。納得した私の前で、妹は姉に尋ね
てくる。

「そう言うお姉ちゃんは大丈夫？」

「あんたよりはしつかりやってるから大丈夫」

「あつひどいなあ」

「優秀な近侍もいるしね」

そう言つてちらりと私に目配せしてきたので、私は軽く一礼した。
こういう時の礼儀ぐらひは弁えているつもりである。

不意に、妹の表情が陰った。

「それでさ、お姉ちゃん。お母さんのことは」

「あの女の話はしないで」

ぴしやりと叩きつけるような返答。息を飲む私の前で、主はふいと
顔を背けた。

「……あなたにとっては、通信教育を支えてくれた大切な母親かもしれないけど、私にとってはそう思えない。お父さんが離婚したのも当然だと思ってる。だから、この話はここでおしまい。……でも、何かあったら連絡するんだよ」

「……うん。わかった。お姉ちゃん、ごめんね」

それが何に対する謝罪なのか、私には聊か不分明だった。

宵闇に、紫煙が揺蕩う。開け放たれた彼女の私室からの明かりで、地面に影ができていた。それを眺めながら、彼女は言う。

「なんてことはないよ。よくある話」

吸いさしの煙草を指に挟んで、アルミの灰皿に灰を零した。

「私たち姉妹の母親は、母親になるべき人間じゃなかった。それだけの話だよ。——娘が、第1子が、長女が、初孫が生まれたことで自分の両親も義実家も夫も、関心を自分から離れた。当然の距離感が生まれた。それが、ウチの母親には許せなかったんだよ。——その憎悪の対象が、自分そっくりだから猶更。鏡に映った娘を、母親は憎悪した……——次女は長女ほどには『特別』じゃなかったから常識程度に愛せただけ。私は母親と反りが合わなくて、中学に上がる頃には友人や男友達の家泊まりこんでた。ああ、煙草もその頃憶えたな」

長広舌ののち、彼女は息を吐く。煙が僅かに漏れた。黙り込んで話を聞いていた私に、主は笑って見せた。かなしい笑みだった。

「ここは楽だよ、江雪。男は私が愛想を振りまくだけで泊まらせてくれた。けど、ここの皆は私が何もなくても……審神者として振る舞えば、ちゃんと主として扱ってくれる。人間として認めてもらえてる気がするんだ」

そして、彼女は灰皿に煙草の先端を押し付けた。そして、煙草の箱と灰皿を手取る。

「もう寝るよ。——ああ、ちゃんと歯磨きはするから」
「主」

私は言葉に詰まっていた。けれど、なんとか声を絞り出す。

「私たちは——私は。あなたの味方ですから。何があっても、ずっと」
それに、今度こそ主は破顔した。

「有難う」

そう言つて、彼女は私室へと引つ込んだ。障子が閉じられる。

煙草の残り香を感じながら、私は障子の向こうの灯りが消えるまで、そこにいた。

了

「どうらぶ×ツバサ+α」掬い取った、その手は幼かった

その日はごく普通の昼下がりだったと思う。

着任当初の諸々の問題が解決して既に数年。相変わらず俺の力は無暗に溢れて周囲に影響を与え続けるけど、こればかりは仕方ない。5歳離れた実兄が審神者適性が出るまで霊力を上げてしまったほどだ。そして、家伝の宝刀を施設も何もない場所そのまま「顕現」してしまった。

そのせいかわからないが、我が本丸のゲートは度々不備を起こす。それも行き先は明らかにこの世界ではない。戻って来られるのは、偏に俺が尋常でない霊力の持ち主だからだという。霊力と呼称してはいるが、呪力とも魔力とも言われるものだと言う——そして大抵、巻き込まれるのは俺ひとりではない。

今回はこんのすけと近侍の山姥切国広だった。

やPて来た感想は、揃ってひと言。

「寒い!!!」

残暑!厳しい初秋の本丸からやって来た身としては、薄手にも程がある。おまけに偶々俺は畑内番の手伝いをしていたため薄ら汗をかいていた。そのため吹雪のその場所ではあつと言う間に身が凍りそう

だ。
途端に温かい何か肩にかけられる。見ると、国広が内番着の布を取って俺の肩にかけていた（注釈：ここの国広は極である）。

「主のあんたが凍り付くと困るからな」

そう言う国広に俺は慌てる。

「切国だって汗かいてたんじゃ」

「反射的に寒いとは言ったがな、刀剣男士にこれぐらいは平気だ。それに、こんのすけ。こっちに来い」

「はい何でしょう」

全身毛むくじやらの生きたホツカイ口は、国広の懐に収まった。

「これで温かい」

「あつそれはそれで羨ましい……」

「それよりここはどこなんだ？——明らかに異国の何かだが……異様だ」

見上げる先に、自分の足場を確認する。

それは、宙に浮いた岩だった。それだけでここが尋常の場所でないことだけはわかる。

そして、それを見た。

——宙に浮かぶ異国の城。それはアラベスク模様に近いような紋様が描かれた法円に覆われていた。こんのすけが国広の懐から指示を出す。

「もう少し近寄れませんか」

「そうだな。主、抱えるからこっちに来い」

「はい」

言われるがまま小脇に抱えられる。石伝いに近寄って行くと、法円の近くまで来られた。

こんのすけが国広の懐から前足を出して精査する。すぐに結果が出たらしい。

「あー、これ、閉じてますね」

「閉じてる？」

俺が鸚鵡返しに問い返すと、こんのすけはけろりと答える。

「ウチの審神者殿には問題ありません。ちよつと触れて靈力を込めてください」

「どう？」

言われるがまま、法円に触れる。

途端、それは音を立てて割れた。ガラガラと崩れ落ちていくそれは、あつと言う間に塵となって風に乗って消えた。こんのすけは重ねて言う。

「それと、見えている道はまやかしのようです……城の方までは、審神者殿に私たちを連れて『跳んで』行ってもらえますか」

「まあお安い御用だけだね。2人とも、俺の手を握ってて」

言いながら意識を集中する。

——魂蔵持ち、聖杯、夜の愛し仔。様々な呼び名で呼ばれる俺が起す奇跡。それは「結果を過程を経ずに引き寄せること」。つまり、こんのすけと国広を連れて城の前までテレポートするなどお茶の子さいさいなのだ。

そして。着いた先。大きな門を開いて気付く。

中は瓦礫で溢れていたし、荒廃していた。あちこちにこの国の防寒仕様らしい衣服をまとった白骨遺体が転がっている。何があったのやら。「足元に気を付けろ」と国広がこんのすけを抱えたまま言う。こんのすけの柔らかい肉球にこの瓦礫は酷だろう。ガラガラと押し歩きながら、俺はこの空間の「ナニか」に気付いていた。

それは、奥の間で見つけた。

あの城を覆っていたアラベスク模様——それに彩られた法円が、宙に浮かんでいた。

俺にとっては容易いことなので、2人を連れてその法円へと飛ぶ。中には瓦礫と共に何かが閉じ込められている様子だった。

こんのすけは最早何も言わず、法円を肉球で叩く。俺も何も言わず、霊力を込めた。

途端、破碎する法円。瓦礫がガラガラと崩れていったので、俺はその中で落ちそうになっていた「それ」を手を取った。そのまま国広に抱えられて地面に降り立つ。

……地面に置いた、それは長剣だった。日本刀に酷似している。血曇りがあったことと、鞘がないことが気がかりだった。

「主」

「うん。——付喪神がいるね」

「待ってください審神者殿。ここでいきなり刀剣男士化させないでくださいね。どうなるかわからないんですから」

「わかってるよ、最初みたいな失敗はしない」

最初の失敗、というのは俺の家に伝わる家伝の刀を、政府が引き取りに来たその場で顕現してしまったことだ。このことで本来は俺は審神者になるはずではなかったが「これほどの才能を」と引き摺られ

る形で審神者になった。時間停止型審神者として小学生の姿のままだが、もう何年になるだろう。

そういった感傷は振り払い、刀に手を触れ、意識を集中させる。

——そして、対話は終了した。こんのすけを振り返る。

「こんのすけ、この刀、連れ帰るね」

「えっ!？」

こんのすけが声を上げる。国広は怪訝そうだ。

「正気か。いや本気か。こんな怪しいところの……」

「んー、でも事情を話したら戦ってくれるって。あの法円に閉じ込められ、主人の片腕と共に朽ちるはずだった身を救ってくれたのはあなただ、と」

「……まあ、このままここにお刀様を置いて行くのは寝ざめが悪いですしね。鞘はこちらの世界で捨えることにしましょう」

国広はまだ不満そうだったが、「主である俺が決めたことだよ」というと、渋々と言った態度で承諾した。そのとき、丁度こんのすけの鈴から機械音が鳴る。

「ああ、ゲートが開けたようです。皆さまこちらへ」

そう言っこんのすけは、鈴から光るゲートを示す。まず国広が出て、次に俺が刀を抱えて出て、最後にこんのすけが出た。

その世界は、再び氷に閉ざされた。

本丸に戻ってきて、まず最初にやったことは。鍛刀の間でその刀の鞘を作らせ——そして、顕現させたことだ。

——長剣を振るうに相応しい長軀。青い短髪に青い目、日焼けした肌の、厳つい顔立ちの青年だった。

彼は、俺を見下ろして言った。

「救ってくれた礼を言う。俺の剣はあんたの寄る辺に。長剣、『蒼氷』。ここに見参」

「うん。宜しく」

俺は彼の手を取った。

長剣「蒼氷」が破竹の勢いで戦績を伸ばすのはこのあとのことだ。

了

「くりかしゃR―18」刻み込まれた竜に嫉妬するな
ど、

「そう言う関係」になった切欠は、よく憶えていない。

ただ、本丸に来てから近くに来るようになった、弟子とも弟分とも兄弟とも取れる相手に触れるようになった。それは頭であったり、頬であったり、肩であったり。

腰を抱くようになった辺りでこれはまずいな……と自分でも思った。思ったし、嫌がられるだろうと思ひ、腰から手を離そうとした。相手が――火車切が満更でもない顔をしていたから、離せなくなっ
てしまった。

それで現在、火車切を押し倒してしまっている。卓袱台の横でだ。本丸の刀剣男士のほとんどが遠征などで出払っている日の昼間のことだ。

畳の上に組み敷いた彼は、目を瞠っている。……それはそうだ。こういうったことの意味がわからないほど幼くはないだろう。猫のように固まっている火車切に罪悪感が湧いたが、俺の衝動は簡単に収まりそうになかった。

本当ははじめて逢ったときから、ずっと。

少年の身体特有の細い手首を強く握り、俺は言う。

「……嫌なら、言葉で拒んでくれ」

元太刀の打刀の膂力に脇差、ましてや初では力では対抗できないだろう。それがわかっていたから、瞳を見つめてそう言ったのだ。拒まれるだろう。そう覚悟してのことだ。

けれど、火車切はとろりと目を細める。

「いいよ。大俱利伽羅なら」

——そう言われて、留められる理性は残っていなかった。

「んっ……」

脱がした肌は俺とほとんど同じ色をしていた。胸の突起に舌を這わせながら、細い腰をなぞる。声を漏らす火車切は、両腕を交差させ

て口元を覆っていた。できれば顔は見せて欲しいが今は互いに余裕がない。線の薄い腹筋に唇を落としながら、腰紐を解く。蝶結びのそれは丁寧なラッピングを思わせた。力任せに剥いていきたい衝動だけは必死で抑えて、ベルトを外す。びくりと身体が跳ねた。

「大丈夫だ」

常なら絶対に言わない台詞を言ったのは、やはり火車切への熱に浮されていたからだろう。大事にしたい、無体を働きたい、そういう相反する感情が心で荒ぶる。その2つの感情が拮抗していたからこそ、ボトムをそつと脱がせられたが、下着も一気に脱がせてしまった。

僅かに形を成している火車切自身がそこにあつた。

「……あんまり見ないで……」

交差させた腕から、火車切の声が聞こえる。しかし聞かなかつたことにした。俺はそれに手で触れると、口に含んだ。

「ひ、あつー」

恐らく未経験ゆえの新鮮な反応。それに抑えても抑えても気を良くしてしまう。火車切自身に舌を這わすと、その度に頭上から声が漏れる。精嚢を唇で甘く食み、根元から先端まで舐め上げる。亀頭に舌先を埋めると、一際高い声が出た。

舐めて、しゃぶつて、手で扱く。先走りが溢れ——やがて、果てた。

火車切が息を切らす音がする。俺はと言えば、一旦火車切から体を離して起き上がった。

「おおくりから……?」

やや舌足らずに俺を呼んでくる火車切を今すぐもつと暴きたい欲望を堪えて、目的のものをを見つける。軟膏だ。

火車切の元へ戻つてくると、俺は軟膏の蓋を開けた。蓋を卓袱台に置くと、火車切の足を開く。

そして、軟膏をたっぷり取った指で、火車切の後孔に触れた。

「あつ……? ——あ、おおくりから……!」

声が上がったが、今は無視した。軟膏は体温で柔らかくなり、火車切のナカでとろりと溶ける。指を1本、2本。ナカで指を拡げ、奥へ奥へと押し入れる。

——押ししていると、火車切が悲鳴に近い声を上げた。

「あつ、そこ、駄目……！」

「ここか」

「ひうつ、ー！」

ここが火車切のイイトコロなのだろう。指で押す度にびくびくと身体が跳ねた。3本目の指を入れて押し広げ、引き抜く。

俺は前を寛げると、火車切の媚態ですっかり屹立した自身を取り出した。それを見た火車切が小さく声を上げる。

「おおくりから……」

「……入れるぞ」

「ん……」

不意に、火車切が両手を広げて来た。その意図するところを察した俺は、火車切の腰を掴んで——挿入したのち、火車切に覆い被さった。

「んっ、あ……！」

てつきり抱き着いてくるかと思った火車切は、口元を手で覆って喘ぐ。俺は緩急をつけてピストンを繰り返す。火車切のナカは狭く、温かい。それに蕩けそうになったとき、不意に左腕に触れる感触に気付いた。

火車切の顔の真横に置いた左腕に、彼がうっとりとした顔ですり寄っていた。

——それに、俺の胸に去来したのは。

「おい」

顎を引き寄せる。細い顎だ。きよとんと眼を瞬く火車切に、俺は自分でもあからさまに不機嫌だろう顔を晒しながら言った。

「今は、俺を見ていろ」

そして、唇を重ねた。

同時に、最奥を突く。

「んっ……!!」

火車切の後孔が強く締めまり、彼が果てる。俺はその締め付けでほぼ同時に果てた。

「……体は大丈夫か」

シャワーを浴びて来た火車切を見て、最初に口をついて出た言葉がそれだった。縁側で座り込んでいた俺に、火車切は微笑む。俺の前では表情の柔らかいことの意味を深読みしたい。そんなことを考えていると、火車切は俺の隣に座った。——俺の左腕を好む彼が、俺の右側に。

そして肩に寄り添って来た。

「大丈夫だよ。……もつと手酷く抱いてくれてもよかったのに」

「……そういうことは言うな。本当に酷くするぞ」

俺は一旦は発散されたはずの熱がまた集まるのを感じて、そんな自分を誤魔化すために、火車切の頭を乱暴に撫でた。

結局互いの気持ちも確かめず、けれどこのとき体の関係ははじまってしまったのだった。

了

「くりかしゃ×オメガバースR―18」本能と理性の間

そもそも刀剣男士にバース性は要らないと大倶利伽羅は常々考えていた。刀剣男士と言うかりそめの身体で子どもなど作って何になるのだろうか。

異去への出陣には、そんな大倶利伽羅も付き合わされた。彼の極としての練度はそれなりに高かったのだ。

それが間違いだったらうか——大倶利伽羅は張番だという脇差男士に直面したとき、思った。

アルファとしての本能が、彼を手に入れろと訴えかけて来たからだ。

(参ったな……)

大倶利伽羅のいる本丸もそれなりにゴリラだ。なので、今既に火車切は本丸に来てしまった。オメガへの対処法を考える暇もなかった。大倶利伽羅はひとり、部屋で考え込む。こういうときこの本丸が基本的にひとり部屋なことに感謝の念を抱かざるを得ない。希望者は相部屋になるが。大倶利伽羅は頭を乱暴に掻く。彼にしては珍しい仕事だったけど、それを見咎める者はいない。——今は。

(俺は番を持つつもりはなかったし、信じてもいなかったが……これは所謂「運命」というやつだろう)

彼が今悩んでいるのは、大倶利伽羅に対処の暇も与えずやって来た火車切のことだ。第二の性別については本人の口から直接訊いていないが、アルファの大倶利伽羅にはわかってしまう。あれはオメガのフェロモンだ。

人間で言えば、自身の第二の性別を知るのは丁度脇差男士の年頃……10代前半ぐらいだと言う常識は大倶利伽羅にも刀剣男士のプリセットの知識として備わっている。だから短刀男士は自身の第二の性別を知らない者も多いし、脇差男士の中では区々だ。たとえば体の大きいにつかりは自身の性別を把握していることが多いが、それ以

外の脇差男士はばらばらの場合が多い。番ができた場合、ヒートが来ることもあると言う。それを考えると大俱利伽羅は頭が痛い。

彼は本当に、番を持つつもりがなかったのだ。多くの刀剣男士に言えることだが、分霊として顕現した彼の第二の性別は分霊ごとにバラバラで、彼は偶々アルファだった。古馴染の伊達の刀剣男士に運命がないことに安堵して、9年。この9年間、誰も運命ではなかった。だからこれからも運命に出逢わずに済むだろうと根拠もなく考えていた。それがこれである。

(……なんだかキラキラした目で見られていたが……要は番にならないければいいんだ)

「大俱利伽羅、入っていいか」

不意に障子の外から声がかけられる。ここの近侍の長谷部の声だ。応えを返すとすらりと障子が開く。

途端、漂ってくるフェロモン。

大俱利伽羅が目を瞞っていると、長谷部は後方に火車切を連れたまま言った。

「今日から火車切と同室だ。火車切の希望でな」

「……よろしく」

断ることもできず、大俱利伽羅は「……そうか」と小さく呟いた。

その日から、大俱利伽羅の生殺しがはじまった。

「……太鼓鐘」

「なんだあ?」

ある日の馬当番。偶々一緒になった太鼓鐘に、火車切は切り出す。本丸で接するうちに「信用してもいいだろう」と判断した相手だ。

「俺、大俱利伽羅に嫌われてるのかな」

「えー、それはないんじゃないかねえか? 寧ろ可愛がつてるだろ、あれは。なんか根拠あるか?」

「根拠と言うか……」

火車切は思い出す。

初陣で大俱利伽羅と共に出陣した。そのときに火車切は大俱利伽

羅に憧れている、と言うようなことを——正確には大俱利伽羅の左腕の竜——言った。そのときの大俱利伽羅は、彼にしてみれば優しい反応だったと部隊長の式神を通して様子を見ていた審神者が火車切に教えた。

なので安堵していた。しかしその安心も束の間。

「……なんとなく、距離を取られている気がする」

「うーん、なれつもなれつもって普段言ってるけど、そつと傍にいる程度なら何もしないはずなんだけどなあ……」

太鼓鐘は竹箒を抱えながら思案する。彼の知る大俱利伽羅は、何だかんだと懐かれたら傍にいてもそつとしておくところがある。ましてや火車切は同じ広光派だ。最初から懐に入っているような相手だ。そんな相手と距離を取る理由とは。太鼓鐘はそこまで考えて、ふと、彼にしてみればただの思い付きで尋ねて来た。

「なあ、お前の二次性別オメガ？」

「えっ、なんでわかるの。そういうあんた、アルファ？」

「いや、俺はベータ。あのさ、伽羅はアルファなんだよな。まさか運命じゃないだろうけど、フェロモン気になるんじゃないか？ なーんて……あつ悪い、ただの思い付きだからそんな深刻な顔しなくても」

「ねえ、大俱利伽羅。俺、部屋分けてもらった方がいい？」

その日の夜、布団を敷く大俱利伽羅に火車切はそんなことを言い出した。大俱利伽羅は、なるべく冷静に問い返す。

「何か言われたか」

「うん、と……大俱利伽羅がアルファだって。それで、俺の匂い、気になるんじゃないかって……」

「誰に言われた」

「太鼓鐘」

（貞、明日話がある）

「それで、大俱利伽羅、やっぱ気になる？」

大俱利伽羅はずるい、と思った。その目で見つめられては、大俱利伽羅としては拒めない。

大俱利伽羅は正直に言えば、そもそもこの弟分が可愛くて仕方ないのだ。それは本能以前の問題だった。

だから、大俱利伽羅としてはこう言わざるを得ない。

「……大丈夫だ。不安にさせたなら、悪かった」

こうして大俱利伽羅の生殺し生活は継続することになった。

変化は突然に訪れた。否、大俱利伽羅からしてみれば「少し様子が違うな」と言う程度の変化はあったのだが、明確な変化が起きた。

火車切がぼんやりとしている姿が増えた。元より身内以外にはどちらかと言えばぼんやりしているので、身内以外はその変化に気付かなかった。上杉の刀は「最近ぼーっとしているけど、大丈夫か？」と尋ねた。火車切は「ちよつとぼーっとしてただけ」と答えたので、問答はそれで終わった。

大俱利伽羅にとっての大問題がここで発生する。

「おおくりから」

ある日、火車切は起きて来なかった。その日の火車切は非番だったので偶の寝坊ぐらいいいだろう、と大俱利伽羅は特に声をかけていなかった。しかし昼過ぎに内番から戻って来ても、火車切は布団をかぶっていた。さすがに心配になり声をかけると、先程のぼんやりした声をかけられたのだ。大俱利伽羅の心臓が跳ねる。

布団から、フェロモンが漏れて来ていた。それに喉を鳴らしていると、火車切は布団から顔だけ出した。そして右腕も出してくる。

「うわぎ、かして」

「え？」

「いまきてるやつ……おねがい……」

「ああ……？」

大俱利伽羅は戸惑いながらも、着ていた内番着の上着を差し出す。火車切はそれを受け取ると、再び布団の中に引き籠ってしまった。それから何も聞こえてこないの、しばらく火車切の今の行動の意味を考えた。

そして、大俱利伽羅はある答えに至る。

(巢作りか……！)

ばつと火車切を見る。正確には彼が籠っている布団を。

よく見るとそれは大俱利伽羅の掛布団だった。恐らく大俱利伽羅が押し入れにしまったのを引っ張り出したのだろう。しかしそれは満足できずに、今大俱利伽羅の上着を奪っていったのだろう、大俱利伽羅はそこまで推察した。

大俱利伽羅は無意識に口元を押さえる。「かわいいな」と呟きそうになったのを抑えたのだ。そして同時に絶望に近い気持ちも現れる。巢作りをはじめた。と言うことは、ヒートも間近だ。

大俱利伽羅はアルファ用のヒート誘発制御剤の処方審神者に求めようと決めた。

しかし、事態は大俱利伽羅の思うように動かない。

突然、審神者が現世出張に赴いてしまったのだ。詳しくはわからないうが急務だそうで、3日は本丸を空けるしなんならもつと期間が延びる可能性もあるという。近侍はいつも通り長谷部がつき、第1部隊長の加州が留守を預かることになった。

本丸には極カンスト刀剣男士もそこそこいる。本丸が襲撃されても容易く返り討ちにできるだろう。大俱利伽羅はその心配はしていなかった。

問題は薬をもらえないことだ。

この本丸には他に番が何組かいるが、基本的にヒートのときは特別休暇をもらって引き籠っているからヒート誘発制御剤は処方されていない。つまり、誰かから薬を分けてもらうことはできない。

大俱利伽羅は絶望の気持ちで、審神者が帰ってくるまでできるだけ心を強く持とうと頑張った。

頑張ったのだ。

——そして、それはやって来た。

審神者がいないから出陣は休みで、火車切はあれからほとんど布団の中に引き籠っている。布団は返してもらえなかったので火車切のものを使っているが、問題はそこではなかった。日毎にフェロモンが強くなっているのだ。

大俱利伽羅は頑張った。本当に頑張ったのだ。

けれどその夜。大俱利伽羅が大浴場で冷水を浴びて自我を保ち戻って来た先で、障子を開いた先から強烈なフェロモンが襲って来た。

火車切はぼんやりと布団の上に座っていた。潤んだ目で、大俱利伽羅を見つめてくる。寝間着は胸元が開けていて――

「おおくりから」

彼を、呼ぶ。

「からだ、あつい」

大俱利伽羅を見つめてくる。手を、差し伸ばしてきて。

「たすけて」

――この辺りで、大俱利伽羅の理性の糸は音を立てて切れた。

「あ、おおくりから、おおくりから……い！」

火車切が切なそうに彼の名を呼ぶ。

大俱利伽羅は火車切の細い腰を強く掴み、彼自身を突き入れる。火車切は敷布を握りしめ、ピストンを受け入れる。既にお互いに何度も精を吐き出していた。火車切の後孔からは白濁が溢れていた。大俱利伽羅の理性は火車切のフェロモンで焼ききれていたで、それを掻き出してやる余裕などない。ただ精を注ぎ込むだけの獣になっていた。いい加減涸れそうになる度に火車切が大俱利伽羅の名を呼ぶので、その度に彼自身がそり立ってしまう。

――不意に大俱利伽羅にわずかながら理性が戻ったのは、火車切が枕を抱き締めながら彼を見ていることに気付いたときだ。

「火車切？」

「かんで」

相変わらず舌足らずな声音だったが、大俱利伽羅はその言葉の意味するところを察する。

「うなじ、かんで。おおくりからなら」

常ならば、ここでちゃんと理性を以て考えたことだろう。

しかし、可愛がつている弟分。加え、火車切のフェロモンで大方の理性が吹っ飛んでいた大俱利伽羅は。

間髪入れず火車切の項を噛んだ。血が滲むほどのそれは、けれど火

車切の性感を促し、そして確実に彼の身体を作り替えるものだった。

……やがて1度落ち着いたのは一夜明けてのことで。

喘ぎすぎて声の嘎れた、全身噛み跡だらけの火車切に、大俱利伽羅は「責任は取る」と重い決意をした顔で告げた。火車切はまだ意識が呆けていたが、幸福そうに微笑んだ。

「俺は大俱利伽羅がいいんだよ」

審神者が帰って来たのち、「大俱利伽羅が弟分に手を出した」と言う騒ぎが起き、上杉の刀剣男士たちに「ちよつと話がある」と言われるのはまた別の話だ。

了

「くりかしやR-18」それはそれとして仕事はしました

火車切は学校から帰ってきて、家路につく。学生服で。ピアスが歩く度にちやらちやらと揺れていた。

自宅アパートは裏通りにある。アパートと言う響きに反して割と広いところだ。帰宅途中で買って来た食材の入ったエコバッグを片手に、てふてふと歩いていく。

アパートが見えて来た。2階の自宅に灯りが点いている。大俱利伽羅はもう帰ってきているのだろう。そう当たりをつけた火車切は、足早に階段を駆け上がると玄関の扉を開いた。

「ただいま、『兄ちゃん』」

「……ああ、お帰り。『かしや』」

ソファに座る大俱利伽羅が、首だけこちらを向いた。

「食材買って来たよ」

「ああ」

「冷蔵庫しまつとくね」

言いながら通学用鞆とエコバッグを床に置き、冷蔵庫にネギやら豆腐やら突っ込む。仕舞い終えた辺りで、それをずっと見ていたのだろうか。大俱利伽羅が声をかけてくる。

「かしや」

それは、常ではない甘い声。火車切はそう呼ばれただけで背筋がぞくぞくとしてしまう身体になってしまっていた。振り向くと、大俱利伽羅がやはり首だけ火車切の方を見ていた。

「おいで」

その言葉で、ふらりと火車切はソファへと誘われる。

ローテーブルには雑多なものが置かれている。その前に置かれたソファで、大俱利伽羅は両手を広げていた。火車切は無言で促されるまま、彼の膝に乗り上げた。火車切の細い腰に手が回される。火車切は、大俱利伽羅の顔を手で挟んで唇を重ねた。何度か口づけを交わす

と、火車切の吐息が熱っぽくなる。

けれど不意に、大俱利伽羅が尋ねてくる。

「それで、今日の潜入結果はどうだった」

「——〇〇と言う教師が、一部の霊力の強い生徒を教導して歴史修正主義者の価値観に染めようとしている証拠は掴んだ。不良校の中で『非行少年に理解ある教師』として振る舞ってる」

「こちらにも似たようなものだ。そろそろ任務も終わりだな」

時は数か月ほど前に遡る。

とある本丸に、現世への潜入調査が依頼された。

「ある中学と大学に歴史修正主義者の動きあり」とされ、刀剣男士の中で大学生ぐらいの見目と中学生ぐらいの見目の者たちが求められた。

結果として、2人暮らしの兄弟として通じる現行の広光派が選ばれたのだった。

——尤も、これは審神者の思惑が絡んでいた。

実は既に恋仲の2振りを現世で2振りきりで過ごさせようと言うものだった。仕事には真面目な2振り——ましてや片方は政府刀——なのでそちらの期待もあったが。

なおこの思惑に関しては、2振りを執務室に呼び出し「2人きりで存分にいちやいちやしてきな。仕事はしなよ」と直接宣ったので2振りの関知しているところである。

火車切は所謂不良校、大俱利伽羅は所謂Fラン大学。それぞれで潜入任務することになった。

中間報告を挟み、潜入調査の結果は今のところ上々と言ったところだった。

ついでに性生活も充実していた。

火車切は大俱利伽羅の膝の上、熱い息を吐く。学生服の下に着ていたTシャツの裾から手を滑らされて、火車切はぴくりと反応してしま

う。

「んっ、制服……」

「脱がせたからいいだろう」

「皺になっちゃう」

「気にするような奴がお前の学校にいるか？」

「……いないなあ……んっ、Tシャツは自分で脱ぐから……」

言いながら、火車切はおずおずとTシャツを脱ぐ。肌色とよく似た健康的な小麦色の尖りが主張していた。大俱利伽羅は火車切の腰を引き寄せると、その突起に舌を這わす。再び反応してしまう。大俱利伽羅の肩に置いた火車切の手が震える。火車切の薄い腹筋に手が這い、ベルトが外される。

「あ」

と呟く暇もなく、大俱利伽羅は器用に火車切からスラックスと下着を脱がせた。そしてその辺りに放る。無防備に晒されたそれは、既に形を成しつつあった。大俱利伽羅が薄く笑う。それは彼以外にはほとんど見せない表情だった。

「……乳首を舐めただけだろう」

「そうなんだけど、大俱利伽羅にされるとっ……」

「こら、かしゃ」

「んっ……！」

曝け出された火車切自身を、大俱利伽羅が柔く握る。それだけで火車切には十分だった。

「……ベッドでは、兄呼びだろう」

「んっ……ここ、ソファ」

——それは、本丸にいた頃からの取り決め。それは大俱利伽羅の倒錯的趣味によるもの。

『布団の中では兄呼びしてくれ』

それを聞いたとき、「兄ちゃん？ 兄さん？ 兄貴？ どれがいい？」と裸の火車切は機嫌よく訊いてしまったものだった。今は現世で兄弟を演じているため、普段から兄呼びしている。

「屁理屈を捏ねる奴にはお仕置きするぞ」

「え、何してくれるの……？」

「……そういはしたくない期待する悪い子にはしてやらない」

「ケチ……」

唇を尖らせる、その仕草が愛らしいと大俱利伽羅は思ってしまう。思わず口付けてしまう程度には。そして、じゅつと火車切自身を強く扱いた。高い嬌声上がる。そのまま乱暴に扱き続けるから、火車切は堪らない。

「あつ、兄ちゃん、兄ちゃん」

「……かしや」

最早大俱利伽羅の肩に置く手に力は入っていない。ほとんど彼の胸に凭れかかっている。それでも大俱利伽羅は火車自身を扱く手を止めない。やがて先走りが大俱利伽羅の手を汚し——果てた。

火車切が息切れする中、大俱利伽羅は「テーブルのそれを取ってくれ」と頼んでくる。何かと思えば——軟膏。その意図するところを正確に察した火車切は、ただでさえ紅潮していた顔色を更に赤くさせる。それでも軟膏の瓶を大俱利伽羅に渡した。

「火車切、膝立ちになれ」

言われるがまま、火車切は大俱利伽羅の肩に手を添えたまま、ソファに膝立ちになる。

軟膏を手につつぷりと取った大俱利伽羅は、火車切の後孔につつぷりと塗りつけ——ナカに挿入した。

「んっ……い」

1本、2本、3本。充実した性生活ですつかり火車切の弱いところを把握していた大俱利伽羅は正確に性感を高める部分を押ししていく。その度にびくびくと震える火車切に加虐心のようなものを感じつつも——人はそれをキュートアグレッションと呼ぶらしい——、無体は強いたくなかった。だからできるだけ丁寧に解す。

大俱利伽羅自身を突き入れるぐらいには解れた後孔。そこで、火車切が言い出す。

「今日、騎乗位したい」

「騎乗位？ あれはお前の身体に負担が……」

「偶にはそう言うのもいいでしょ」

「……お前の好きにしろ」

言いながら、大俱利伽羅は前を寛げる。火車切の痴態ですつかり元

気になっていた大俱利伽羅自身。それを、火車切が後孔で受け止める。

「ん、はっ……」

大俱利伽羅自身を飲み込んだ火車切は、背もたれに寄りかかる彼の前で腰を振る。

はじめはその媚態に注目していた大俱利伽羅だったが、不意に気付いた。

「どうせ不良校に入るんだからそのままでもいいでしょ」とそのままだったピアス。それが、火車切が大俱利伽羅自身を飲み込むピストンを繰り返す度に、しゃらしゃらと音を立てて揺れる。裸の火車切の中で、唯一彩るピアスが揺れる。

それがあまりに煽情的で。

「んっ……兄ちゃん、大きくなった……」

「気にするな」

「気にするよ、あっ、あんまり大きくしないで……!」

そう言われる度に火車切のピアスはしゃらしゃらと揺れる。主人の媚態を煽るようなそれに、大俱利伽羅は「これからも騎乗位をしてみらうときはピアスをつけてもらおう」と心に決めつつも、火車切がぎゅうと後孔を絞め付け、大俱利伽羅も火車切も果てた。

さて、無事に任務から帰投した広光兄弟。火車切が大俱利伽羅を「兄ちゃん」と呼ぶようになり、微笑ましい周囲に対しなぜか顔を赤くする火車切が目撃されることになる。

了

「くりかしやR―18」忘れがちだが、打刀も夜目が利く

基本的に、事に及ぶときは置行灯の仄かな光の中である。はじめに火車切が大俱利伽羅に抱かれたときは昼日中の居間だったが、そのときは感じることに精いっぱい気付かなかったのだ。

明るい中では、自身の顔が丸見えだと言うことに。

——だから、夜。煌々と灯りを点けたまま事に及ぼうとした大俱利伽羅に、火車切は最初抵抗した。

「ちよつと待つて大俱利伽羅、何するの」

「ナニだが」

「それはわかるけど、で、電灯消して……」

布団の上で抵抗する火車切。それに、大俱利伽羅は笑った。獸性丸出しの笑みだった。

「断る」

にべもないとはこのことだ、と火車切は思った。

「あつ、やあ……!」

大俱利伽羅に後孔を突き入れられ、火車切は体を揺すられる。電灯が眩しくて、火車切は目を空けていられない。そもそも顔を見られたくない。今はぐずぐずに溶け切って入るはずだ。だから股を大きく開かれ、帯に引つかかっただけの寝間着と言うあられもない姿もしているのもあり、顔を見せられない。火車切は必死で顔を手で覆った。

——けれど、大俱利伽羅は無情だ。

彼は火車切に挿入したまま体を重ねてくる。そして、大俱利伽羅は火車切の手を丁寧な顔から退けた。

金色の目が、同じ色の目を射抜く。

「顔を隠すな。俺だけを見ていろ」

電灯の下で、火車切の顔が赤く染まる。

「や、やだ、見ないで」

「見慣れてるから大丈夫だ」

「見慣れてる……?」

聞き捨てならない台詞を聞きとがめると、大俱利伽羅はしまったというような顔をする。それでも顔は背けなかった。彼は宥めるように火車切に囁く。

「俺たちの目の色素が、比較的薄いのは知っているだろう」

「うん……」

「それに、お前は暗がりでも恥ずかしかって顔を隠しがちだから気付かなかったかもしれないが」

大俱利伽羅は言った。

「俺も打刀だ。夜目が利く」

夜目が利く。そのひと言で火車切は全てを察した。

つまり、大俱利伽羅に翻弄され、本能のままにぐずぐずの顔が、大俱利伽羅にはすべて見られていた――

「……っ!」

「おっと。逃げるなよ」

言いながら及び腰になった火車切の腰をしつかりと掴む大俱利伽羅。火車切は抵抗を試みる。

「は、放して」

「いいのか? ……ここがこんなことになっているのに」

「んう」

やや強く火車切自身を握られる。それは大俱利伽羅の腹筋と火車切の薄い腹筋の間で硬くなっていた。片手が空いた隙に顔を隠そうとするが、すぐに大俱利伽羅は手を退ける。

「大丈夫だ」

火車切の耳元で、火車切は囁かれる。

「お前はかわいい」

そう言う問題ではないと言いたい火車切だったが、その言葉で火車切は達しそうになる。

その瞬間、大俱利伽羅は火車切の最奥を突いた。

「あ、あ……っ!」

火車切は大きく喘ぎ、果てた。

なお、この件でいじめすぎたせいでしばらく火車切に口を利いても
らえなくなったために、大俱利伽羅はご機嫌取りをすることになる。

了

「くりかしやR—15」お前が見ているのは、

基本的に、誉の褒美と言うのは審神者に対して要求するものだ。

その審神者から「火車切のお願いを聞いてあげて」と言われたものだから、大俱利伽羅は驚いた。要は主命である。長谷部ではないが、余程意に染まぬものでなければ大俱利伽羅は主命を聞き入れた。ましてや可愛い弟分——既に恋仲——の「お願い」である。

しかし審神者を通してまでとはどんな願いやら。大俱利伽羅は首を傾げた。

そして夜。「こういうことか」と大俱利伽羅は納得する。

「ん……」

大俱利伽羅の寝間着の左袖を小さな手が捲る。そして、小さな口から出た小さな舌が、大俱利伽羅に刻まれた竜をなぞった。置行灯の薄明りの中、布団の上で行われていたことだ。

『……その、俱利伽羅竜を舐めさせて欲しい』

勇気を振り絞った、と言う様子で告白してきた弟分——先述のように恋仲でもある——を無碍にはできなかつた。なので、薄明りの中、布団に座る大俱利伽羅の横に座る火車切に好きなようにさせることにした。

舌先が、竜の身体をなぞる。大俱利伽羅の腕を這う舌先は擦りたいばかりで性感は誘われない。——だが、薄明りの中でもわかる火車切の上気した顔。大俱利伽羅の腕の竜を追うことに懸命で開けている胸元や捲れた裾から覗く細い脚。大俱利伽羅は黙っていた。黙って、それらを眺めていた。

腕の、擦りたい感触。湿った音が立っている。気付けば、火車切はほとんど頬ずりするように大俱利伽羅の左腕にすり寄っていた。蝸牛のように這う舌先は赤い。れる、と竜の身体を丁寧になぞる。軽く甘噛みすらしてくる。これは夢中になっているな、と大俱利伽羅は思う。

——不意に、大俱利伽羅は思う。

この少年は自身に憧れてくれている、らしい。けれど自身に話しか

けて来たときは、「竜が一番かつこいい」と言う趣旨の発言をしていた。

そして今、火車切は自身の竜に発情——発情としか形容しがたい——しているわけで。

大俱利伽羅は内心でもやもやした。丁度そのとき、火車切の口が離れた。

「……ぷは。もう、いいよ。有難う。とりあえず満足した」
「そうか」

大俱利伽羅は、自分でも低いと思う声で答えた。それに火車切はやや怯えた様子だった。そんな彼の両手首を掴み、敷布団の上に組み敷く。

目を瞬く火車切。そんな彼に、大俱利伽羅は口元に笑みを刷いた。それは竜と言うよりも肉食獣のそれだった。

「なら、今度は俺の相手をしてもらおうか。——竜じゃなくてな」

翌朝、足腰の立たなくなった火車切のために、審神者が「まだレベリング中なんだから！」と大俱利伽羅を叱りつけるのは余談である。

了

「くりかしやR—18」潤んだ目が美しかった

それが大俱利伽羅が軽装のときに使うタスキだと知るのは、事が終わってからのことだ。

「なんだこれ」

火車切は、同室の大俱利伽羅の行李からはみ出した白い紐を引張った。先程行李の整理をしていた大俱利伽羅だったが、何某かに呼び出された彼は常になく慌ただしかったので、行李は中身がはみ出してしまっていたのだった。丁度雑誌を読み終え暇を持て余していた火車切は、その紐を引張る。意外に長い。

白い紐はそれなりに幅があり、結べば結び目が硬くなりそうだった。何かの用事に使うものだろうか……火車切は顕現した当初から洋服（中華服にも近い）で軽装も実装されていなかったもので、タスキと言う概念を知らなかった。

思い当たったのは山姥切国広の鉢巻き——この彼はとうに極——だった。しかしそれがこんなところにあるのはおかしいだろう、とその思考を却下する。少なくとも大俱利伽羅は鉢巻きをするような性格ではない。短い付き合いながらそれはわかっていたので、では、と火車切は考える。

考えた末、目に当ててみた。

思ったより丁度視界が隠れる。火車切は暇だったものだから、そのまま後頭部で結んでみた。きつちりと覆った視界、結び目は硬い。そこで火車切は気付いた。目を覆っては鏡で見てもわからないではないか。この日の火車切のコンディションは少々悪かったかもしれない。とりあえず外そう……そう思った火車切は結び目を解こうと後頭部に手を伸ばし——

丁度その時、障子が開いた音がした。

「大俱利伽羅？」

「……」

障子を開いた人物は答えない。大俱利伽羅だろうか、火車切はそう思いながらも答えない彼に不安を覚える。火車切は目隠ししたまま

謝罪する。

「ごめん、行李からはみ出してたから引つ張って取っちゃった。ところでこの紐なに？」

「……」

「……大俱利伽羅？」

障子が閉まる音がする。不意に、近寄られた気配がした。火車切が不思議に思っていると、——唇に柔らかいものが触れた。

恐らくそれは唇だ。

「んっ?!」

急になんだろう。火車切が戸惑う中、噛みつかれるようなキスがされる。舌が捻じ込まれ、それに応えるために火車切も舌を絡ませる。大俱利伽羅はどうしたのだろう。息がうまくできない。火車切が薄くなつていく酸素を取り入れようと鼻で息を試みたところで、徐々に身体が押し倒された。畳の上に組み敷かれる。えっ、と驚く暇もなく火車切は服を脱がされる。上着を脱がされ、インナーのボタンを外され、それもずるりと脱がされる。あつと言う間に上半身裸だ。急に外気に晒されたことで乳首が硬くなるのを感じて、それに舌を転がされはじめて動転する。どうしたというのだ、まだ明るいのに。それでも火車切の開かれた身体は与えられる甘い刺激を拾ってしまう。

「ん……」

火車切は腰の線をなぞられ、薄い腹筋に舌を這わされ、腹に吸い付かれる。あ、キスマークつけられた、と思う間もなくボトムに手をかけられた気配がした。

そこで、不意に不安がよぎる。

(本当に、この手は大俱利伽羅なのだろうか)

「ちよ……待って」

不安のままに声を漏らす、その手は止まらない。腰紐を解かれ、ベルトを外される。ボトムと一緒に下着も下ろされた。

「やっ……!」

身を振るが、腰を掴まれた。そして火車切自身を扱かれる。少し乱暴で、それがいつもの大俱利伽羅とは思えない。彼は、優しい。時々

肉食獣のような顔をするけども。そんなことを考えている間にも、その手によつて段々と火車切自身から先走りが漏れてくる。火車切は焦る。本当にこの手の持ち主は大俱利伽羅なのかと。

不安は精神よりも体に先に出た。目元に涙が滲んでしまう。鼻もぐすぐすと鳴つて来た。その間にも昂りはやって来る。ほとんど泣き声に近い嬌声をあげてしまう。火車切が混乱の中にも、手をふらふらとさせた。

「ね、えっ、本当に大俱利伽羅なの？ つねえっ、——!!」

火車切の涙声に一瞬手が止まったが、しかし相手の手は火車切の亀頭に指を埋めた。

「——っ!!」

火車切は果てた。目隠しは涙が滲んでいた。ティツシユを取る音が聞こえる。

それから、そつと目隠しを外された。涙で潤んだ目が、相手を——大俱利伽羅を見た。

大俱利伽羅は酷く複雑そうな顔で、弟分を見下ろしていた。

「……すまない。泣くほどだと思つてなかつた」

そのひと言で、火車切の目から大粒の涙が零れた。どうやら慌てているらしい大俱利伽羅が、火車切を抱き締めて頭を撫でた。

「っ大俱利伽羅の、ばか……!」

「すまない。すまん。悪かった。……つい悪戯心が出てしまった」

「大俱利伽羅以外の人なんて嫌なんだからね……!」

鼻を鳴らしながら大俱利伽羅に抱き着く火車切の発言に、ぴたりと大俱利伽羅が一瞬動きを止めた。

そして、火車切の目を覗き込んでくる。

「火車切」

「な、なに」

「……入れているか」

「……もう目隠ししない状態なら、いいよ」

「……お前は俺に甘い」

「お互い様」

そして、どちらともなく口づけを交わした。
こうして2振りの間で目隠しプレイは禁じ手となるのだった。

了

「くりかしやR—18」「軽装をデザインした奴に金を払いたい」「もう審神者が小判で払っちゃったんで……」

基本的に、大俱利伽羅は他の大多数の刀剣男士のように、本丸では内番着で過ごすことが多い。要はジャージなので動きやすいし過ごしやすいのだ。そのまま寝間着にしようとする者までいる始末だ。大俱利伽羅はそこまではいかなかったが、戦闘から帰ってきてすぐに内番着を着る速さには定評があった。

なので、折角審神者に買ってもらった軽装。これに袖を通したのは、気紛れだった。内番着をすべて洗濯に出してしまったという事情もある。内番着以外にも私服は持っているが、そう言えば軽装は着たことがほとんどなかったな……と言うことで、大俱利伽羅の軽装はめでたく日の目を見たのだった。

「あれ伽羅ちゃん、珍しいね。主くんが着てくれって訴えてた軽装、やっと着る気になったのかい」

「他に着る服もなかったしな。暇だ、何かやることはあるか」

「おっ、タスキをかけてまでやる気満々だね。折角だからこの里芋の山の皮を剥いてくれるかな」

そう言つて燭台切は、容赦なく大籠になった里芋と包丁を出すのだった。

大俱利伽羅は嘆息し、泥は落とされていた里芋の皮むきにかかった。

丁度その時、厨に人が入って来る。

「ねえ、燭台切。ウチの火車用の餌の生肉——」

火車切だった。厨の出入り口で、暖簾を押し上げて顔を出してきた。

その火車切の目は、丁度大籠を持つようとしていた大俱利伽羅の姿を見る。まじまじと眺めていたかと思うと、顔を手でおさえた。

やや震えている声で火車切は大俱利伽羅に尋ねてくる。

「えっ……その格好どうしたの……？」

「軽装だ。……お前のはまだなかつたな」

「そう……それが大俱利伽羅の軽装……」

蕩けたような声音で火車切は言った。

「似合ってる」

「……有難う」

「あ、火車切くん、それで火車くん用の生肉だっけ？ それならここに
あるよ」

「有難う……」

燭台切が冷蔵庫から取り出した皿を見て、火車切の肩の上の火車が
飛び跳ねる。その皿を受け取った火車切は、ギリギリまで大俱利伽羅
の姿を視界に収めつつ厨を去った。

残された2振り。

「伽羅ちゃん、偶に着たら？ それ」

「そうする」

大俱利伽羅は珍しく素直に答えた。

さて、そんなことがあったのが少し前。

季節は過ぎて夏。祭りの時期だ。各サーバーの万屋街でもそれは
行われる。

現在、大俱利伽羅と火車切はその祭りに来ていた。2人きりであ
る。

なぜこんなことになったか。偏に、どちらも非番だったことを知っ
た大俱利伽羅が火車切を誘ったからだ。

火車切は軽装を持っていなかったので内番着で彼についていった。
どぎまぎしていたのは、大俱利伽羅が軽装だからだ。火車切は内心
で、自分も軽装があればよかったのと思う。釣り合う気がしない。

「お前の軽装はそのうち実装されるだろう」

とは、そう言う心理を見抜いたらしい大俱利伽羅の言だ。

お囃子の音が鳴る。人々と行き交う。火車切は先程買ってもらっ
たチョコバナナを頬張りながらやや俯く。隣の兄貴分が直視できな
いのだ。そもそもチョコバナナを買ってもらったときも「俺が払う」

と火車切は言ったのに、「いい顔をさせる」と大俱利伽羅はさつさと払ってしまった。口惜しさと羞恥と、それらを上回るときめきで心がぐちゃぐちゃだった。

ドン、ドンと太鼓が鳴り響く。スピーカーからは流行の音楽が鳴る。不意に気付く。——静けさを、孤高を好むこの刀が、こんな賑やかな場所に来た理由がわからなかった。けれどチョコバナナに刺さっていた割り箸を持っていた手は片方空いていて、その空いた手に触れるものがあつた。びくりと体を跳ねさせ、隣を見上げる。

火車切の小さな手を、大俱利伽羅が握っていた。顔を見ると、僅かに、ほんの僅かに大俱利伽羅は微笑んでいた。

火車切は戸惑いがちに握り返し——不意に人が押し寄せて来た。

「わっ」

火車切は思わず割り箸を取り落とす。拾おうにも人が押し寄せてきてままならない。仕方ないので顔を上げた。

大俱利伽羅の胸板に、火車切はしがみつく形になっていた。

「……！」

「……大胆だな」

ふ、と大俱利伽羅は今度こそ確実に微笑んだ。やや獣性が滲み出ていたのは、火車切の気のせいではない。割り箸のことをすっかり忘れて離れようとするが、人混みと——腕を掴んでくる大俱利伽羅の手で阻止されている。

大俱利伽羅は、一瞬だけ火車切の耳元に口を寄せた。

「……スるか」

「ん、……っ！」

——万屋街にも人目につかない茂みはある。

そのこの木に火車切は腰を突き出し手を突いていた。大俱利伽羅はその彼の身体に覆い被さっている。

彼らは陰茎を擦り合わせていた。兜合わせである。大俱利伽羅は火車切と自身を重ねながら扱いた。

「お、くりからっ」

「静かに」

喘ぐ火車切に大俱利伽羅は低く囁く。そう言っておきながら、火車切自身の亀頭に指を埋めた。びくんびくんと跳ねる身体。きゆう、と唸る声。それらを大俱利伽羅は抑え込む。

「静かに、静かに……」

「む、り、いわないで、んっ」

火車切の滑らかな太腿に、大俱利伽羅自身が滑る。大俱利伽羅自身からの先走りが太腿を伝い、足元の火車切のスカンツと下着に付着する。遠くからのざわめき、足元からの淫らな水音。……大俱利伽羅の体温と匂い。火車切は堪らなくなる。

けれども。

「あ、も、いくっ……」

「いいぞ、出せ」

火車切が唸り、大俱利伽羅は自身と火車切自身を重ねて強く握った。扱かれた瞬間、ほぼ同時に彼らは果てた。

……息を切らせながら、大俱利伽羅は体を離す。懐から懐紙を取り出して手を拭い、ついでに火車切の足も拭ってやる。この紙はどこに捨てるか……と大俱利伽羅が考えていたところで、火車切が下着とスカンツを履いた。

そして、ぴとりとすり寄って来た。

「どうした」

大俱利伽羅がとりあえず袂にゴミを入れてみると、火車切は熱に浮された目で見つめて来た。

「……やっぱり、この格好が見えている方がいい。かつこいい」

暗に正常位がいい、と言われ。

「……帰ったらな」

大俱利伽羅は火車切の額に唇を落とした。

そして大俱利伽羅は同時に思う。

(セックスしたいときに軽装は合図にするか)

その後、「大俱利伽羅が軽装を着たあとは火車切が寝込むから使い物にならない」と言う言説がこの本丸で定着することになる。

了

「くりかしや」それは砂の器のように

火車切は政府での講習で話には聞いていた。本丸が襲撃を受ける場合がある、と。

しかしそれは結界のアップデートのかみ合わせが悪いときなどに襲撃されて起こることで、本来は飛行機事故ほどの確率なのだとも聞いていた。

でも、確率など起こってしまえば関係がないのだ。火車切は思った。

こうして今、実際に襲撃を受けている身としては。

「くっ……！」

火車切はまだ初だ。他の極の脇差男士のように攻撃をうまく弾くことができない。侵入してきた敵と必死で切り結ぶ。早く、早くゲートを閉じないと。主も守らなければ。主はどこにいる。恐らく長谷部と加州が守っているだろうが。火車切は内番着のまま駆け抜ける。

——頭に残っていたのは、つい先ほど帰投した大俱利伽羅のことだ。

大俱利伽羅は珍しく負傷していた。重傷寄りの中傷だったのに「俺はいい。もつと重傷の奴から手入れさせろ」と言って自分は手入れ部屋の前で座っていた。それに茶を持って行ったのが数分前。手入れ部屋の前に駆け付けたときには既に大俱利伽羅はいなかった。——殲滅に行ったのだろう。

火車切は胸騒ぎを起こしていた。嫌な予感がする。懸命に敵を打ち払いながら、火車切はがむしやらに本丸中を駆け回った。

胸騒ぎは、最悪の形で実現することとなる。

庭の池の前、大俱利伽羅が単騎で戦っているのを見つけた。そこで気付く。——異去の敵も混ざっている。敵はどこで手を組んだのだろう。あれは異去における丙の大太刀だ。大俱利伽羅は苦戦していた。それはそうだろう、ただでさえ負傷しているのだ。

しかし、二刀開眼ならば。

「大俱利伽羅！」

声を投げかけると、彼は振り返らず「行くぞ！」と声を張り上げる。「二刀開眼!!」

敵大太刀は、それでほぼ倒せた。池に落ちる敵大太刀の前で、火車切は大俱利伽羅に駆け寄る。血を流す左腕を手を取った。

「大俱利伽羅、怪我……!」

「問題ない。それより火車切、お前の方がまだ弱い——」

大俱利伽羅が火車切の方を向いた瞬間のことだ。

大俱利伽羅の身体を、背後から斬り貫く刀。

火車切は見た。大俱利伽羅の左腕が切り落とされ、彼の手に残ったのを。

倒れ伏す大俱利伽羅の背後には、瀕死の敵大太刀が刀を持っていった。

「——」

何事かを呟いて、大俱利伽羅の身体は刀ごと塵に消えた。

そして、火車切の手に残された、竜の刻まれた左腕も——

火車切は咄嗟に、瀕死の敵大太刀の止めを刺す。今度こそそちらも塵と消えたのち。

「あ」

——折れた刀身だけを残した大俱利伽羅のために、慟哭した。

「——!!」

……本丸の襲撃は、犠牲者は大俱利伽羅一振りだった。

それ以来、火車切の声を聴いた者はいない。

了

「くりかしや」温かくて、甘い

2月の節分も終わった辺りから、何となく本丸中が浮足立っているようだった。その理由を、火車切はわからなかった。

そもそも1月に本丸に着任したばかりなので、本丸の雰囲気と言うものを測りかねているところが火車切にはあった。そこから甘い香りが漂ってくる理由も、八つ時のおやつにチョコレート系統の菓子が増えている理由も、火車切にはわからなかった。それは政府刀として働いていた弊害だったのだろうと、のちに彼は自身を振り返る。――異去では季節行事など無縁だったからだ。

2月14日の夜。火車切は浮足立った本丸の空気に当てられてか、火車切は寝付けなかった。布団から体を起こして隣を見る。同室となった大俱利伽羅は、いない。どうしたのだろうかと思う。火車切は寝間着の上に着を羽織りながら、部屋を抜け出した。何か温かいものを飲食すれば眠気が来るだろうか……。

「お前か」

果たして、尋ね人は厨にいた。

寝間着姿の大俱利伽羅が持っていたのは黒い瓶、彼の目の前にはグラス。火車切がきよとりと見つめていると、彼は言う。

「飲むか」

「えつと……それ、なに？」

「チョコレートトリキュールだ」

「……チョコ、流行ってるの？」

怪訝に首を傾げる火車切に、大俱利伽羅こそ怪訝そうだったが、すぐに得心した様子で「それもそうだが」と答える。

「この時期、チョコレート酒の酒が安売りされる。俺はそれを買っただけだ。で、アルコールは大丈夫か」

「あんまり強いものでなければ」

「そうか。……待っている。その椅子に座っておけ」

言いながら、戸棚からマグカップを取り出す。それは今丁度席に着いた火車切のものだった――この本丸に来てから買ったもの――。

その中に瓶の中身を注いだかと思うと、瓶をテーブルに置いてから冷蔵庫を開く。牛乳パックだ。マグカップの中にそれを注ぐと、抽斗からマドラーを取り出す。攪拌して、マドラーを取り出したかと思うと電子レンジに突っ込んだ。スイッチを入れる。そこではじめて大俱利伽羅が振り返らずに尋ねて来た。

「そう言えば、甘いものは大丈夫だったか」

「好き」

「そうか。ならよかった」

レンジが電子音を立てる。扉を開いて取り出したマグカップの中身を再びマドラーで攪拌する。それから、火車切の前に置いた。甘い香りとわずかな酒気。

「熱いぞ」

言われて、寝間着の袖を引っ張ってマグカップを持つ。電子レンジで温められたマグカップは確かに熱かった。だが、この身を打たれたときよりは余程にぬるい。火車切はそう思いながら中身を呷る。

チョコレートの甘さと、飛びきりなかつたアルコールが牛乳で良い具合に溶けている。温かいそれをゆっくり、ゆっくりと飲む。……体が温まった。それと同時に眠気がやって来る自らの素直さに苦笑してしまう。実際、一気に眠たげになった火車切を見た大俱利伽羅がほんのわずかに笑った。

「カップは片付けておいてやるから、歯磨きして寝ろ」

「うん……有難う」

「ごちらいそ」

「？」

大俱利伽羅の言葉に、席を立ちかけていた火車切は振り返る。

「今日のうちにチョコレートを渡せてよかったという話だ」

大俱利伽羅は流し台でマグカップを洗いながら言った。そう言えばグラスは空いたままだったが、自分で飲むつもりだったのだろうか。火車切は疑問がわいたが、それを眠気が駆逐してきたので、本格的に眠くなる前に洗面所へと向かうことにした。

バレンタインデーなるものを火車切が知ったのはその数日後のこ

と。

そしてホワイトデーなる習わしも同時に知り、大俱利伽羅に何を返すか頭を抱えることになる。

了

「くりかしゃ」大俱利伽羅の 琴線に 触れたようだ
!

刀剣男士の服の損耗率は高い。何せ真剣必殺すると服が脱げてしまふ。ただ、衣服に関しては手入れをすればいかなる仕組みでか直る。

問題は靴下や手袋などの小物だ。こういうったものはあまり直らない。要は外から見える部分の衣服は直るらしい。

このために万屋ではそう言った小物が売られている。ただ、中には万屋まで行くのすら面倒くさいと言う無精者もいるので、Sanizonでは靴下の纏め売りなどもしている。

火車切は無精者と言う訳ではなかったが、偶々内番などで忙しかったのでSanizonで注文した。

靴下である。

朝に着替えようとして、箆笥の靴下がほとんどないことに気付いた。まだ比較的低練度の火車切は、出陣する度に負傷することが多かった。靴下も同様である。踏ん張って、靴の中で靴下が擦り切れるのだ。刀剣男士の膂力についていける繊維は限られてくる。

火車切はその場で考え、これから朝食であること、そのあと内番もあることを思い出し、買い出しに行く暇はないことと明日の朝まで忘れてしまいそうだな、と考え、その場でSanizonで注文した。このとき適当に「靴下 まとめ買い」で出て来たものをタップして買ったのがまずかった、とのちに火車切は振り返る。

その場に落ちて来た段ボール箱を視認し、着替え終えた大俱利伽羅に「先に行くぞ」と声をかけられたので慌ててついていった。

……さて、夜である。

「あー疲れた」

ぼやきながら火車切は自室に入る。既に夕食と入浴を済ませてあとは寝るだけだ。布団を敷こうとしたところで、足元にぶつかるもの。——今朝注文し配達された段ボール箱。

(忘れてた。開けとこう)

火車切はちやぶ台のペン立てに入っていたカッターナイフを取り出す。新参者の刃物は気に入らないと言う感覚は彼にもあるが、そんなことを言っていたら日常生活が送れないので彼は素直にこういった日常使いの刃物を使っていた。

さて、段ボール箱の中身である。箱相応に中身は小さい。まとめ買いと言っても精々5足程度だったはずだ。火車切はそう思いながら中の袋を取り出し——眉間を顰める。

(……丈が長い気がする)

火車切は訝し気に矯めつ眇めつ靴下を見る。色も黒を指定したつもりだったが、白だ。寝ぼけていただろうか……火車切はそう思いながら、試しに履いてみることにした。

爪先を伸ばして靴下を履いていく。……やはり丈が長い。やけに長い。ハイソックスよりも長い——最終的に、その靴下は膝上に来た。

ニーソックスと言うものだと、靴下の入っていた袋を見て知った。

「……今の時期は寒いから丁度いいけどさ……」

「入るぞ」

そのとき、障子が開いた。

寝間着姿の大俱利伽羅だ。彼に「あ、お帰り」と声をかける、ごくいつも通りの声音の火車切。そんな彼を——正確には脚を——見た大俱利伽羅は。

彼の前にしやがみこみ、言った。

「両方とも履け」

「えっ」

「そのままスるぞ」

「えっなに？ えっ？ どうしたの？ なんで？」

「いいから」

大俱利伽羅にぐいぐいと押し込まれた火車切は、戸惑いながらも両方履く。そしてそのまま押し倒された。火車切は何が彼の琴線に触れたのか翌朝鬱血痕だらけになってもわからなかった。

裸ニーツなるジャンルを知ることになるのはだいぶあとのことだ。

了

「くりかしや♀R―18」
「経血ドリンクバーとか引くわ」
By 審神者

▼火車切 は のろいをうけた！

▼おんなのこになってしまった！

「前にもこのネタ使ったよなア歴史修正主義者!!!」

「主、主、落ち着いて」

本丸の玄関前、事の次第を聴いた審神者はそう叫び、当の被害者である火車切に宥められた。この文章もほぼコピペである。他の刀剣男士たちは困惑して彼ら――彼女たちを見つめていた。

歴史修正主義者の呪い。刀剣男士に様々な弊害を与えることで知られるそれは、偶に妙な仕掛けもある。今回のような女体化と言うパターンもそこそこ見られる。筋力の低下を目論んでいると思われるが、呪いを受ける側とそれを処理する側にとっては堪ったものではない。頭が痛い審神者は、近侍の加州に「怪対部に連絡して……」と力なく告げる。火車切はと言えば、「そんなに不便じゃないよ」と言う。「ちよつと下がなくなって上についただけで」

「でも、本体の刀、いつもより重いでしょ」

「……それは否定しない」

「困ったなあ、多分だけど前にも同じようなことがあったとき緊急性が低いってことで解説が後回しにされたから今回もされそうだし……——はっ」

不意に、審神者は右側を向く。火車切もつられて見ると、そこには火車切の兄弟分で師匠で且つ恋仲の大俱利伽羅がいた。騒ぎを聞きつけて来たらしい。

「騒がしいが何があった。……火車切、何かいつもと違わないか」

「おっさすが大俱利伽羅。気付くか。さてここで問題なんだが」

審神者は腕を組んだ。

「どうする火車切。元に戻るまで部屋分ける？」

「え……嫌……」

「そうは言ってもさく恋仲とは言っても問題があるでしよく風紀的に」

「大俱利伽羅の傍にいたい……」

「うくん惚気られてる！ でも主的にちよつとなく！ ちよつと大俱利伽羅」

「何だ」

審神者は真顔で大俱利伽羅に問うた。

「今火車切は女の子になっちゃってるんだけど、戻るまで色々我慢できてる？ 同じ部屋で」

「耐える」

「よし言質取ったよ。ああ清光、政府と連絡とれた？ それじゃ火車切行こうか」

そのときの大俱利伽羅は、確かに耐えるつもりだったのだ。

——その後、呪いが複雑化しており解呪は自然に任せる他なく、

1カ月はかかると言う旨を怪奇対策部で告げられた。

大俱利伽羅の忍耐1か月生活がゴングを鳴らした。

そして3週間目までは耐えきったのだ。

「大俱利伽羅、そろそろ寝よう」

「そうだな」

4週目に突入し、大俱利伽羅が内心で唱える経文も落ち着いてきた。

大俱利伽羅は火車切を愛している。少年の身体も魅力のひとつだと思っっている。ただ、少女のそれも魅力がないわけではない。大俱利伽羅にすり寄って来る体はいつもより柔らかいし、ささやかな膨らみの胸がTシャツの隙間から見えたりして、落ち着かない。少女の身体も火車切も大変魅力的で、大俱利伽羅はそれでも耐えていたのだ。

しかし3週間も耐えたのだ。あと1週間などということはあるまい。大俱利伽羅は自分を甘く見ていた。顕現して9年、とうに極になっていたのもあり自分のことは見極めていたと思っただのだ。

己の変態性など、このときまでは知らなかったのだ。

「……あれ？」

不意に、火車切の声が上がる。少女となって高くなったそれを耳にして、大俱利伽羅は「どうした」と尋ねる。

「なんか股間から……」

「股間？」

「あつ」

言いながら寝間着の裾を捲り上げた火車切の布団に、赤いものが滴った。

血だった。

それが恐らく生理の経血で、女性になって4週間も経てば月経も来ようものことは大俱利伽羅のプリセットされた知識にもあった。

あつたが、それはそれ、これはこれである。

「なにこれ——えつ、大俱利伽羅!？」

大俱利伽羅は火車切を布団の上に押し倒した。

大俱利伽羅の理性は「よせ、やめろ」と訴えていたが本能が理性を蹴り出した。

彼は押し倒した火車切の下着——女性になっても男物の下着をそのまま履いていた——を剥ぐ。

「待って、やめて、今は」

火車切が悲鳴に近い声を上げたが、興奮しきった大俱利伽羅の耳に入らない。

火車切のうっすらと陰毛の生えた恥丘。そこは血で染まっていた。それにむしやぶりつく。

「ひうつ、ー!」

火車切の声が上がる。臍物の匂いに近い血を、大俱利伽羅は丹念になめとっていく。じゆるじゆると音を立てて。口の中に血の味が広がる。それがどうにも堪らない。血の塊のようなものも飲み込む。火車切がやめたと訴えるが、大俱利伽羅の耳には入っていたものの脳味噌には届いていなかった。

一通りなめとって火車切の恥部は唾液塗れになっていたが、大俱利伽羅はまだ足りないと感じる。そして、無意識に火車切の下腹部を押しした。

「ひっ」

途端、膾口から経血が溢れてくる。大俱利伽羅はそれを再びなめとった。

……それから10分後。まだ血は垂れているが大俱利伽羅が満足して顔を上げた。

そして見たのは、火車切がぶるぶると震えて顔を上げている様だった。

火車切は怒鳴る。

「大俱利伽羅なんて大嫌い!!」

——大嫌い。

日頃自分を慕う火車切からの思わぬ発言——状況から言えば極めて妥当——に、思わず硬直する大俱利伽羅。火車切はわつと下着を掴むと部屋を飛び出した。ここで追いかけてしようとしたが、「大嫌い」と言う発言が背中を掴んだ。

縁側には、点々と血の跡があった。

その後火車切に泣きつかれた審神者は大俱利伽羅を怒髪天を衝いたように叱り飛ばしたし、火車切は残りの期間を彼女の部屋で過ごし、その後も1か月別室になったし火車切はその間大俱利伽羅とひと言も口を聞かず、大俱利伽羅はお百度参りよろしく火車切の部屋の前で土下座を繰り返すと言う光景に「何をしたんだ」「何をされたんだ」と周りは尋ねたが、彼らは頑として理由を明かさなかったと言う。

了

【火車きに♀】恋の空回り

さらりとした黒髪が括られる。

「これでいいですか？」

「うん。邪魔にならなければいい。眼鏡も外して、ぶつかる」

「はい」

そうして伶俐な印象を強くさせるメタルフレームの眼鏡が外される。切れ長の黒い目がややピントの合わない様子で火車切を見ている。その火車切の手にはピアッサーが握られている。

『ピアスを空けてみたい』

雑誌を読んでいた審神者が不意に言い出したことだ。そのときの近侍は偶々火車切で、彼は「やってみる？」とごく気軽に答えたのだ。そして現在、買って来たピアッサーを前にして審神者はわくわくが止まらないと言う様子で笑っている。そうすると黙っている時の冷徹そうな雰囲気が一気に溶け消えるので不思議だ、と火車切は思う。何も知らない者からは「あそこの審神者は血も涙もない」などと言われているらしい。実際はそこまでひどくないのだが。火車切はピアッサーを片手に、審神者の耳に触れる。ぬるい温度をしていた。自分でいいのだろうか、と火車切はふと思う。

彼女には婚約者がいると聞いている。実際テレビ通話しているところを何度か目撃した。印象としては「ナルシストの山姥切国広」で、実際に金髪碧眼でこれは混血ゆえだという。本職はアナウンサーとも聞いていた。そう言えば夕方のニュースで彼の姿を見た気もする。ナルシストと言っても審神者への気遣いは見え、そうしているとただ言動が愉快的な男性だった。実際そうなのだろう。彼女が選んだ相手なのだ——火車切はそこまで考え、ピアッサーを下ろす。

「……やっぱりやめよう」

「えっ、なんでですか」

「俺に、主の身体に穴を空ける資格はないよ」

「資格……？ 何の話です？」

眼鏡を外している審神者は本当に火車切のことが見えていないよ

うだ。目を眇めている。そんな彼女を見つめ返す。

異去から連れて来られたとき。なんて冷徹そうな女審神者だろうと火車切は思った。けれど融和の笑顔に惚れてしまった。火車切は我ながらなんと単純だろうと思った。けれど、彼女には婚約者がいると聞いて失恋を悟ったのだ。

そして今も、未練がましく彼女を想っている。

火車切は言う。

「……こういうのは婚約者さんにしてもらいなよ」

「は？ 婚約者？ そんなのいませんよ？」

「——は？」

今、なんと言った。火車切が思わずピアッサーを握り壊しそうになるいきおいで見ると、眼鏡をかけた彼女が目を瞬いている。

「だから、婚約者も彼氏もいませんって。小さい頃から病院に入退院を繰り返してたし、高校から審神者やってるからそういうのとは無縁で」

「じゃ、あの、金髪の男は」

「彼は親友ですよ！ 高校からの！ あつみんな彼のこと彼氏とか婚約者って誤解するんですよね、もしかしてウチの刀剣の誰かから聞きました？ まだ誤解が解けてないのかも」

どうしよう、とブツブツ呟く審神者。火車切はそれを見て——晷の上で大の字になった。

「火車切さん!？」

「……はは、そうか、婚約者でも彼氏でもなかったかあ……今までの俺の苦悩は一体……——」

彼こそブツブツ呟いていた、その途中で体を起こす。

1部ではまだ誤解が続いている。そして恐らく、それもあつて審神者に迫る者がいなかったのだろう。

チャンスだ。

ピアッサーを机の上に置くと、きよとんとしている審神者の目前にまで一気に詰め寄った。

「だったら、俺のことを見てくれる可能性もあるってことだよね」

「えっ」

審神者の手をそつと取る。頬に朱が走ったのを見て、火車切は「いけるなこれは」と確信した。

その後、「私はあなたの外見年齢より10歳は上ですよ」と言いながら火車切を拒絶し続ける審神者と、「実年齢は俺の方があんたの一生を超える」と迫り続ける火車切の姿が見られたと言う。

了